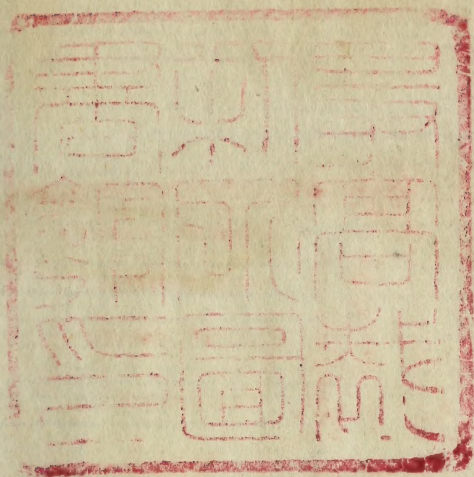


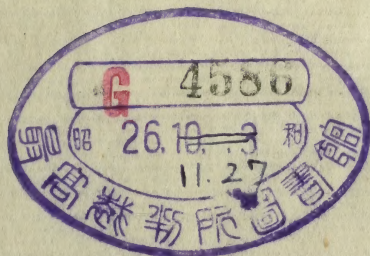
下洋酒第四十二号之一

正
下和旧第百五拾号之一

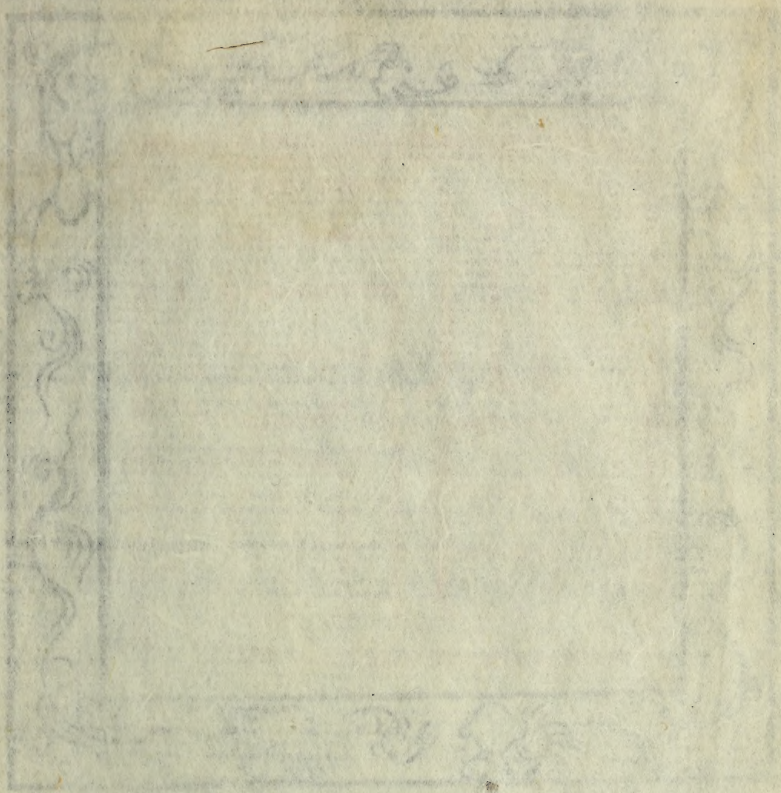
佛國政典



University of Illinois
Library at Urbana-
Champaign
IAS - Oak Street







水戸
管內
區裁

佛國政典序

西洋諸國法律之備莫備於佛蘭西然世之

學其法書者往往苦於文深詞簡而難了解

蓋其未詳創設之故直欲就條款而講明之

宜乎其然也獨刺屈爾西氏所著佛國政典

大別其法制為四部又細別四部之內各為

數章開示創立旨趣提挈施設綱領則學者

之所宜奉以為南車津筏者也吾江藤司法

卿命大井憲太郎譯是書。更囑箕作大外史校定之。將付諸梓。公布于世。夫原佛國法制之所因興。第一世拿破倫。夙知維國保民之本。在整齊法制。會集一時名臣碩學。既有所裁定。及第三世拿破倫。更加潤飾增損。始大成之。顧其所以繼述先業。雄視歐洲者。職此之由。惜乎末路蹉跎。志業不終。世或有以此病其法者。余竊以為未審其法之得失。遽以

成敗論之。豈足與語法制乎。抑國於地球上者。以萬數。槩其治體有三焉。曰君主專制。曰共和政治。曰君民同治。雖則有異同。一日無法。何以維其國。保其民。是故彼有良法。則仿之。我有弊制。則除之。明君賢相之所尤急。今夫拿破倫。兩世所定。如斯其周且密矣。善考法制者。本之治體。酌之事情。揆之時宜。溯源而損益之。參互而變通之。則必有所增加。國

益與民福也大矣。而吾司法卿刻是書之意。
蓋在於此歟。余承乏法官。講明各國法書。固
其職也。故於其命序不辭而言之。

明治六年第二月權大法官鷺津宣光撰

佛國政典目次

第一部 國法

第一章 國法ノ原旨

第二章 大權設立ノ方法

第一款 國帝

第二款 元老議院

第三款 民選議院

第四款 司法官

第三章 諸官局決議書ノ種類

第二部 政法

第一編 行政官設立ノ方法

第一章 總論

第二章 大政

第一款 帝

第二款 宰相

第三款 參議院

第三章 州政

第一款 州長

第二款 州廳大書記

第三款 參事院

第四款 州會

第四章 郡政

第一款 郡長

第二款 郡會

第五章 邑政

第一款 邑長、同助

第二款 邑會

第六章 諸官局屬吏

第二篇 政勢

第一章 陸軍及海軍

第一款 陸軍

第二款 海軍

第二章 法教

第三章 教育

第四章 建築工業

第一款 總論

第二款 公ケノ資益ノ爲ノ沒収

第三款 建築工業ノ爲ニ土地及ヒ其

他物件ヲ用ル事

第四款 兵事ニ關スル土地ノ義務

第五款 沼澤ノ開拓

第六款 鑛山

第五章 道路

第一款 大道

第二款 小道

第三款 道路又ハ河川ニ接スル土地

ヲ有スル者ノ義務

第六章 國財

第一款 總論

第二款 公同ノ財産

第三款 租稅

第一段 直稅

第二段 間稅

第四款 會計檢査局

第三篇 行政上訴訟ノ斷決

第一章 總論

第二章 參事院

第三章 宰相、州長、郡長、邑長

第四章 參議院

第三部

私法

即民法

緒論

第一章 人事

第一款 國民

第二款 身上證書

第三款 住所及ヒ行方不知

第四款 婚姻ノ事

第五款 父子、養子及ヒ親ノ權

第六款 幼年、後見及ヒ後見ヲ免ル、

事

第七款 治産ノ禁、裁判所ヨリ任シタ

ル輔佐人、狂病人

第二章 財産及財産所有ノ種類

第一款 財産ノ區別

第二款 財産所有ノ權利

第三款 入額ヲ所得ト爲スノ權ニザ

ージエノ權及ヒ「アピタシヨ

ンノ權

第四款 土地ニ付テノ義務

第三章 財産所有ノ權ヲ得ル種々ノ方

法

第一款 相續

第二款 存生中ノ贈遺ノ證書及遺囑

贈遺ノ證書

第四章 契約及ヒ總テ契約ヨリ生スル

義勢

第一款 總論

第二款 婚姻ノ契約及ヒ夫婦雙方ノ

權

第三款 賣買及交易

第四款 貸貸ノ契約

第五款 會社ノ契約

第六款 貸借

第七款 附託ノ事及雙方相爭フ人ニ

附託スル事

第八款 偶生ノ事ニ管スル契約

第九款 名代ノ證書

第十款 保證

第十一款 和解

第十二款 書入質、質物、金銀、貸主ノ特權

第十三款 プレスクリプションノ權

第五章 訴訟法

第一款 總論

第二款 郡裁判所ニ訴出シタルヨリ

裁判ニ至ル迄ノ訴訟ノ手續

第三款 裁判

第四款 吟味ヲ爲ス種々ノ方法

第五款 急速吟味ヲ受ク可キ諸件

第六款 上控ノ仕方

第七款 裁判ノ執行

第八款 人ノ財産ヲ債主數人ニ配當

スル事

第四部 刑政

第一章 刑法

第一款 總論

第二款 罪科及刑罰ノ區別

第三款 再犯

第四款 輕重罪科ニ付キ罰ヲ受ク可

キ者免除セラル可キ者又ハ

他人ノ輕重罪科ヲ擔當ス可

キ者

第五款 別段ノ輕重罪科

第二章 治罪法

第一款 總論

第二款 下吟味

第三款 違警罪裁判所、懲治罪裁判所

第四款 重罪裁判所

第五款 上控ノ仕方

目次大尾

佛國政典第一卷

題言

大權及ヒ立法ノ人世ニ缺ク可カ
ラザルヲ論ス

人相群居シテ世ニ存在スルヤ必ス一ノ公ナル
大權ノ設置シ人民中ニ和平ヲ得セシメ且人民
中一般共同ナル要務ヲ辦濟セシメサルヘカラ
ス」バドビー氏ノ說ニ曰ク世間第一ノ至要ナル

モノハ大權ノ設立ニシテ若シコノヲナクシハ
不斷混亂ヲ生シテ遂ニハ之カ為ニ人々相互ニ
營生ノ道ヲ失フニ至ルヘシトコノ言真ニ宜ナ
ルカナ○既ニ大權ノ設置アレハ諸ノ定規ヲ作
爲シ萬緒コノ定規ニ由リテ自國ノ民ヲ鎮制ス
ルミナラス事ニ因リテハ自他ノ論ナク皆我
國內ニ居住スル人民ヲ鎮制スヘシ所謂國ノ律
法ハ此定規ヲ集輯シタルヨリ成レルモノナリ
大權本然ノ職務ヲ論ス

抑大權設立ノ方法ハ種々ノ情實ニ關シテ其原

ヲ取ル一ナラズ譬へハ時世國處又ハ開化ノ遲
速風俗及ヒ國ノ先例舊格等ニ適レサル一能ハ
サルカ如シ故ニ各國ノ政體立法互ニ岐異ノカ
ラサルヲ得サレトモ究竟開化諸國ニ設置セ
レタル大權ノ本務如何ヲ了悟スル亦難カラ
ストス

夫レ大權ノ本務トハ國界ノ防禦ヲ監シ法律ヲ
制立シ或ハ其法律ノ施行ニ必要ナル定規ヲ作
ル事ヨリ全國ノ治安ヲ保護シ犯罪ノ諸業ヲ抑
制シ人民間ノ爭論ヲ裁判シ或ハ國民一般ノ公

人民企及

シテ成ルモノ、稱呼ナリ

國法
私法
政法
刑法

トハ人々、諸權利ヨリ國、各

コ
シ
ス
チ
ヲ
以
テ
定
メ
タ

ル各大權互相ノ關係ヲ論スルモノナリ

亦國法部行

政權ノ立方マタ行政上ニ係リタル官民互相
ノ關係ヲ論ス

私法

ドローグ
リベール

ハ國法ト異ナリテ曾テ官民間ノ

關係ヲ問ハス唯人々相互ニ關係交通スルノ

方法ヲ論ス蓋シ人其人ニ因リテ營生ノ道ヲ

謀ル一ナラス故ニ其法モ亦分レテ民法ト商

法トノ二トナル民法ハ在ラン限りノ人ニ通

用スルノ法ニシテ商法ハ商業ヲ營ム者及ヒ

其商業ニ管スル條件ノ規則ヲ定ムル法ナリ

刑法

ドロアペ
ナール

トハ法律上ニテ禁制スル所ヲ遵

守セス罪科ヲ犯ス者ヲ處スヘキ刑罰ヲ定メ
及ヒ其罪人ヲ罰スルニ付キ行フヘキ手續ヲ
論スル法ナリ

書ノ區別

上ニ舉クル所ノ掲目ニ倣ヒ此冊子ヲ四部ニ分
チ第一ニハ國法第二ニハ政法第三ニハ私法第
四ニハ刑法ト次第ニ論シ及サントス然レトモ
私法ノ条下ニ商法ヲ載セサルハ別書ヲ著シテ
詳ニ之ヲ論セント欲シテナリ

第一部

國法

第一章 國法ノ原旨

第一 全國ノ合同

第二 人々ノ權利

第三 人々ノ義務

第一 全國ノ合同

我國法ノ第一旨ニ位シ最モ至要ナルモノハ全國合同ニシテ卽我國内全部ノ一和同致ナルニ在リ抑一千七百八十九年前ハ我國未タ若干ノ

諸州ニ分裂シ各獨立ノ勢ヲ有シ各々政度風俗
法令ヲ異ニセリ故ニ一州毎ニ區々ノ政度トナ
リ其利害モ亦各々相異ナルニ由リ之カ為ニ政
府ノ法令行レス有益ノ處置ヲ行ハントスレト
モ障碍甚タ多クシテ頗ル施シ難カリシニ一千
七百八十九年ノ國民議會ニテ全國合同一致ノ
基礎ヲ興起シ各州分裂ノ舊習ヲ消却シテヨリ
初テ國中全部ノ政度法令其出ル所ヲ一處ニ仰
ク真ノ一國民トトリタリ

第二 人々ノ權利

一千八百五十二年ノ憲法第一條ニ一千七百八十九年ニ布告シタル人々ノ權利ヲ變更ニ確定セシカ是レ卽我國法ノ原典タル大規矩ニシテ此權利ヲ一千七百九十一年第九月三日ノ制度中ニ算計スルコト左ノ如シ

第一條 庶民同等ノ權利

庶民同等ノ權利ノ本旨タルヤ國民ハ貴賤上下ノ差別ナク皆悉ク官員ニ選舉登用ヲ得キ事租税ノ割附公平ニシテ不同アルマシキ事ト身分等級ヲ立テ種々ノ特許ヲ與フヘカ

ラサハ事トニ在リ

第二條 獨立自在ノ權利

此權利ハ人々皆自己ノ了簡ニ從ヒ往來居住
ヲナスヘクマタ自己ノ意見ニ應シテ所好ノ
營業ヲ爲スヘキノ權利ヲ云フ蓋シ何人ニ因
ラス裁判所ヨリ命令アルニアラサレハ捕縛
ノ辱メヲ受ヘカラスト云フモ亦此權利ニ據
ル所ナリ

第三條 妄ニ家屋ニ亂入セラレ又ハ財産ヲ侵

取セラル、一ナカル可キノ權利

人ノ住居内ニ入ルハ必ズ其人ノ許諾ヲ受
クヘシ若シコノ許諾アルニアラサレハ官吏
ト雖モ妄ニ侵入スヘカラス但シ法度ヲ犯シ
法ノ爲ニ罰ヲ受ヘキ罪科アリテ其搜索ニ逢
ヒ又ハ審判言渡ノ如ク執行ナフノ命アル時
ノ如キハ此限ニアラス又公ケノ資益ノ爲メ
至當ノ償ヲ與ヘテ家屋田地等ヲ官ニ納メシ
ムル時ノ外猥ニ人ノ財産ヲ侵取ス可カラス
第四条 信教本心自由ノ權利
人々各其歸向シタル宗教ヲ信スルコト自由

ニシテ決シテ束縛セラル、コナカルハシ是
畢竟人ノ信教ハ本心中ニ在リテ目以テコレ
ヲ見ル能ハサルニ由ルカ故ナリ然レモ拜神
ノ禮式ヲ公ケニ行ハントスル時ハ警察ノ爲
メ稍々其取締ヲ爲スノ法度アリ是レ安民ノ
爲メ己ムヲ得サルニ出ルナリ

第五條 出版自由ノ權利

當今佛國ノ法律ニ於テ何書ニ因ラス世ニ公
ニセサル内ハ官ノ検査允許ヲ受ルニ及ハス
ト定ムルハ即チ出版自由ノ權利ヲ保護スル

ニアリ然レモ出版者及ヒ新聞篇又ハ定期刊
行ノ書等ヲ編著ヒント欲スル者ニハ夫々ノ
義務アリ故ニ其義務ヲ捨テ、世ノ障礙ト成
ル可キ罪ヲ犯スルハ裁判所ニ呼出サレ相當
ノ罰ニ處セララル、コアリ

第六條 會合及ヒ結社ノ權利

會合トハ人ノ一處ニ大勢相集リ相會スルヲ
云ヒ結社トハ人々共ニ謀リ共ニ爲スコアリ
テ相會スル者ニシテ永ク期日ヲ定メテ會ス
ルモノヲ云フ總シテ此權利ヨリ間々惡弊ヲ

生シ或ハ治安ノ妨碍トモナルコアレハ法度
ヲ以テ其權利ヲ限制シテ紊亂セシメサルコ
緊要ナリ

第七條 乞願ノ權利

乞願ノ權利トハ人々要求スヘキ事アリ其意
旨ヲ達セント欲スル如キハ其次弟ヲ認メ國
帝ハ差出スモ憚ル所ナキノ權利ナリ故ニ國
民若シ此例法ニ倣ヒ願出ルモノアレハ國帝
コノ願書ヲ參議院ニ下シ其掛ニ命シテ之ヲ
聞カシム或ハ又コノ願書ヲ元老議院ニ差出

一八
スモ苦カラス國帝ノミニ限ルニ非ス

第八條 裁判ノ入費ヲ一切民ニ辨濟セシメサ

ルヲ及ヒ吟味ノ席ニ衆人ノ來聽ヲ許

ルスヲ

裁判ノ入費ヲ民ニ辨濟セシメス且其對決ヲ

公ニシテ決シテ人ノ傍聽ヲ咎メサルコトハ

實ニ訴訟人ノ爲ニハ堅全ノ保護ト云フヘシ

往古ハ訴訟人ニ裁判ノ入費ヲ出サシメ時俗

之ヲ名ケテ進物

エピー

ト云ヒ裁判役ニ贈リ

タリシカ當今ハ絶テ此等ノ不理ナルヲナク

訴訟人ハ唯代書師使部書記官等ニ與フヘキ
謝金ヲ出シ其他些少ノ入費ナルノミトナレ
リ又對決ヲ公ニ決シテ人ノ傍聽ヲ咎メサル
ノ主意ハ訴訟人ヲ保護スルノ厚ニアリ然レ
凡若シ其對決世ノ風儀ニ障ル事ナレハ外人
ノ傍聽ヲ避ケ秘シテ裁判ヲ爲スモアリ又往
時ハ「コンミッシヨント云フ別段裁判所アリ
テ輕重罪科ノ種類ニ因リ何人タリトモ呼出
シテ裁判スルノ專權アリシカ元來其立方不
良ニシテ人民ノ不羈ヲ妨ケ公平ノ道ヲ失フ

ノ弊アルヲ以テ今此裁判所ヲ廢シ何人ニ限
 ラス其地方裁判所ノ裁判ヲ受ケ又ハ訴訟ノ
 事柄ニ管係アル至當ノ裁判所ニ出ルコトナ
 レリ

第九條 賦税投言ノ權利

總シテ賦税ノ投言ヲ爲シテ之ヲ定ムルハ民
 選議院ノ任トシ租税一切ノ事ハ必ス決ヲコ
 、ニ取ルナリ民選議院ハ即チ國中ノ代議士
 ヲ以テ組立タルモノナレハ其實ハ全國諸民
 ノ同認共許ニ由リテ定マレルノ理ナリ

雖_レ一己ノ命ニテ新ニ税ヲ賦シ或ハ實ニ収
税ノ年限ヲ増ス等ノ事ハ爲ス可カラサルナ
リ

第十條 諸官員其責ニ任スル事

在職ノ者職務上ノ過失

職務上ノ過失トハ公
事ニ關スル罪ニシテ

私罪ト異ナリ以下
直ニ公罪ト譯ス

アレハ其罪ノ民法刑法ニ

關スルヲ問ハス悉ク皆其責ヲ受クヘシ然レ

モ何人ニ限ラス官員大小ノ公罪ヲ縱ニ訴出

ルモハ終ニ職權ヲ害シ自ラ自在ニ處置又果

斷ヲ妨クルニ至ルナリ故ニ宰相ノ問罪ハ元

老議院ニ限り其他ノ職員ノ問罪ハ帝參議院
ニ謀リテ允許ヲ下シタル上ニ非レハ之ヲ爲
スヲ許サス

第十一条 國民主治ノ權利

我當今ノ制度ハ方ニ國民ノ主治ニ出ツル所
ナリ故ニ其實ハ國民自ラ之ヲ令定シテ之ヲ
己ニ謀リ億兆ノ可トスル所ヲ采リテ互ニ相
認許スルニアリトス

第十二条 三權ノ分立

大權ハ立法行法司法ノ三權ヨリ成ル而シテ

憲典ニ於テ此ノ三權ヲ合同シカタキノ主意
ハ此ノ三權ヲ互ニ相分立對衡セシメテ國民
ノ自主ヲ保護セント欲スルニ由ルナリ

第三 人々ノ義務

人民ノ國ニ對シテ務ム可ク且大切ナル職分四
件アリ第一軍役第二納稅第三道路ノ補理第四
陪審 ジュリー トナル可キ事是ナリ

右義務ハ此ノ書ヲ通觀スルノ間ニ載セテ昭
明ナルニ依リテ茲ニコレヲ細説セス

第二章 大權設立ノ方法

同區別ヲ論ス

大權ハ上ニ既ニ論シタル如ク立法行法司法

三權相集合シテ成レルモノナリ就中立法權ハ

國民ノ得テ遵守セサルヲ能ワサル法律

大綱及ヒ

定規細目ノ制立ヲ掌リ行法權ハ立法權制立ノ律

法ヲ實際ニ施行スルヲ掌リ司法權ハ民法刑法

ヲ以テ聽訟斷獄ノ事ヲ司トルナリ蓋シ是等

諸務ハ國帝兩議院參議院司法官諸等ノ行政百

官ノ執行スル所ナリ今茲ニ國帝元老議院民選

議院ノ職勢及司法權ノ大體ヲ論シ參議院及
諸等ノ行政百官ノ制度ハ第二部ニ譲ラント
ス

第一款 國帝

國帝ノ權利ヲ論ス

一千八百五十二年十一月七日元老議院ノ議
定ニテルイナボレオンボナバルト帝號ヲ得テ
ヨリ世々其長子ニ傳ヘテ不朽ノ號ト定ム且帝
ハ國ノ長ニシテ其職勢ハ君權ノ與管スル所皆
悉ク之ヲ統括シ又立法行法ノ二權ヲ與知シ加

フルニ海陸軍ヲ總裁シ他國ニ向フテ戰書ヲ授
シ或ハ和睦同盟通商等ノ條約ヲ結ヒ諸官員ヲ
登用シ文武勲功ノ賞典ヲ施シ國中ニ惠恤大赦
ヲ行フノ特權アリ

立法權ニ就テノ帝ノ權力ヲ論ス

帝ノ立法權ニ管スルヤ獨行ノ權トシト雖モ大
事ハ必スコレニ與管スルノ權利アリ其他民選
議院元老議院ヲ徵集シ其會議ノ期限ヲ定メ兩
議院正副二長ヲ登用シ民選議院散會ヲ命スル
等凡テ帝ノ權利タリ

帝ハ民選議院ト共ニ法律ヲ按出スルノ權ヲ有
シ又元老議院ト共ニ元老議院ノ議案ヲ出スノ
權ヲ有ス兩院ニテ法律ヲ議定セシ上ニテ愛ニ
帝ノ親許ヲ經テ國中ニ布告シ初メテ確然不拔
國民ノ得テ遵奉セサル可カラサルモノトナル
ナリ

帝行法權ニ就テ首長ノ權利ヲ有
スルヲ論ス

帝ハ卽チ行法權ノ首長ニシテ律法施行ニ必須
ナル定規ヲ制立シ其他道路橋梁鑛道堀割等ノ

如キ國家有用ノ大工業ヲ自裁シ鑛山或ハ沼澤
開拓ノ免許ヲ出ス等一切帝ノ特權ニアリトス
加フルニ帝ハ參議院ニ議シタル上ニテ行法上
ノ爭訟ヲ審判シ又司法行法二官ノ職域ニ關係
シタル爭論ノ裁判ヲ爲スアリ二官職域ノ爭論
トハ詞訟ノ司法官ニ持出シタルモノヲ行法官
ニテ裁判ス可キ理アリト云ヒ終ニ二官互ニ相
爭ヒ相抗スルニ因リテ起ル爭論ヲ云フナリ依
ッテ帝之ヲ參議院ニ議シ其異見助言ヲ聞テ二
官ノ云フ所何レカ是何レカ非ニシテ裁判ス可

キ權利何レニカ屬スルヤヲ裁判シ二官ノ職域
ヲ明示スルナリ

第二款 元老議院

元老議院ノ立方ヲ論ス

元老議院ハ政府諸大局中ノ第一ナルモノニメ

皇族カルヂナル

僧官

マレシヤル

陸軍總督

アミラル

海軍

總督等ト帝ノ特命ニテ受任シタル議員トニテ成

ルモノナリ佛國ノ法ニ皇族ハ年齒十八歳ニシ

テ元老議員ニ補セララル、ノ權アリト定ム然レ

ル帝ノ許可ヲ經サレハ其員ニ加ハルヲ能ハス

元老議員ハ終身他ニ轉職スルヲテク其賜給三萬フランシ人員百五十名ヲ限リトス

元老議院ノ議長副議長書記官司計官ハ何レモ帝ノ直命ニヨリテ任ヲ受ルモノナリ

元老議員ハ其院中ノ規則ヲ制定ス

立法ニ就テノ元老議院ノ職務ヲ

論ス

元老議院ノ法律制定ニ關スルノ例ハ先ツ民選議院ニテ法律ノ議案ヲ作レハ之ヲ元老議院ニ移シ元老議院ニテ之ヲ討論シ若シ更改ス可キ

條目アレハ其由ヲ記シ民選議院ニ返シテ再議
再考セシムルニアリ又元老議院ハ法按ノ可否
善惡ヲ監シ若シ國憲ノ原旨ニ背キ大害危難ヲ
誘起スル如キノ故障アレハ法律ノ布告ヲ制止
スルノ權アリ斯克ノ如ク元老議院ニテ法律ノ
布告ヲ許サ、ル片ハ民選議院ニテ變更ニ再度其
議案ヲ議スルヲ能サルモノトス但シ民選議院
一度閉院シ次會ニ於テ以前ノ法律ヲ議スルハ
此限ニアラサルナリ

元老議院斯克ノ如ク民選議院ニ向フテ再議ヲ

命シ或ハ法律ノ施行ヲ全ク制止スル等ノ權利
ハ一千八百六十九年第九月八日ノ議定ニ於テ
得タル所ナリ然ルニ其制度ハ專ラ兩院一和ノ
方法ヲ盡シタルモノニテ千八百五十二年ノ舊
國憲ニ依レハ元老議院ニテ法律案文ヲ論議ス
ルヲ唯國憲ノ保護ヲ旨トシ國憲ニ危害トナル
可キモノニ非サレハ制止スルノ權ナカリシカ
當今ハコレト異リテ縱令法律ノ案文國憲ニ害
アラスト雖モ人民ノ爲メ危害ヲ起ス可キモノ
ナレハ元老議院ニテ之ヲ布告スルヲ制止スル

權アリ

藩屬地ノ法度及ヒ憲法ノ解釋ニ

就テノ元老議院ノ職掌ヲ論ス

アルゼリー其他諸藩屬地ノ法度ヲ定ムルハ元

老議院ノ任トス又特ニ國憲ニ規定セスシテ國

憲ノ施行ニ必須ナル諸件ヲ定立スヘシ且國憲

中諸節目ノ疑團ヲ釋明スルコト等元老議院ノ

職掌タリ蓋シ是等ノ事柄ニ就テハ元老議院特

立獨行ノ權力アリト雖モ議定ハ常ニ帝ノ許可

ヲ經サル可カラス

國中ノ人民若シ諸令國ノ憲法又ハ律法ニ背キ
世上ニ害アルト思ヒ不服ノ者アレハ願書ニ其
事柄ヲ明細ニ認メ元老議院ニ差出ス可シ元老
議院之ヲ熟議シ果シテ憲法ニ反シタル布令ア
レハ之ヲ廢止スルノ權アリ若シ又其願書法令
可否ノ事ヲ本旨トナサレハ元老議院其儘願
書ヲ差戻シ又ハ直ニ之ヲ掛リノ宰相ニ送達シ
宰相ヲシテ其願ノ當否ヲ議セシム

元老院議員ノ政府ニ向ツテ事務
詰問ノ權利アル事

元老院議員ハ内外事務上ニ付キ其主意ヲ政府ニ詰問スルノ權利アルヲ以テ政府ニ其主意ヲ解釋スルヲ請求シ得ルナリ故ニ元老院ニ於テ詰問セント欲スルアルハ其ニ其事柄ヲ記シテ之ヲ政府ニ進達シ得ヘシ然レモ政府モ亦之ニ直答スルヲ不可ナリト思フ片ハ之ヲ元老院ニ差返シ尚ホ再議ヲ爲サシムルノ權利アルナリ因テ元老院政府ヨリ再議ヲ命ヒラル、片ハ密ニ之ヲ吟味シタル上掛リヲ命シテ政府ニ詰問スルヲ可否ヲ討議ヒシメ

其議評ニ因リテ公クノ惣會議ヲ爲シ以テ議決
ス元老院ノ會議ハ公クニシテ衆庶ノ來聽ヲ許
ルス然レトモ議員五名ノ申立アレハ密カニ評
議スルヲ得可シ

第三款

民選議院

民選議院ノ立方

民選議院ハ國中諸民ノ代議士ヲ以テ成リ其任
ハ毎年租税ノ賦令及國帝ヨリ出議セシムル議
按ヲ論議決定スルニアリ
代議士ノ員數ハ選舉人三万五千人毎二一員ト

ス故ニ三万五千人ヲ一組ト看做シ一州内ノ選
 舉人之ニ幾倍スル數ニ準シテ代議士ノ員ヲ増
 シ定ム可シ但シ三万五千人ニ付キ一人ハ定員
 ナレ其餘半高即一万七千五百人ニ滿レハ一
 組ト同視シテ尚ホ一員ノ増選アル可シ

毎會先ツ其初ニ議長副議長及し書記官ヲ任シ
 夫々ノ規定ヲ立ツ可シ會合ノ長短延會閉院ハ
 凡テ國帝之ヲ定ム可シ

代議士謝給ハ定時ト臨時トノ差アリ定時ハ會
 合ノ長短ニ抱ハラス一万二千五百ヲラント

シ臨時ハ毎月二十五百フヲノクトス

代議士選舉ノ仕方附選舉人ノ事

千八百五十二年第二
五月五日ノ命令

代議士選舉方ハ諸州ヲ數區ニ分テ每區一人ヲ
選舉ス可シ其選舉人ト爲ルノ權利ハ國中ノ庶
民年齒滿二十一歳以上ニシテ民權及政權ヲ具
有シ選舉人名簿ニ登記セラレタル者皆之ヲ有
ス但シ六ヶ月ノ間一邑内ニ居住シタル者ニ非
サレハ其邑ノ選舉人名簿ニ登記セララル、ヲ得
ス

選舉人名簿ハ年々之ヲ改正ス可シ改正事務取扱ハ第一月一日ヲ始トシ第三月三十一日ヲ卒業ト定ム又其名簿ノ公告ハ遅クモ第一月十五日トス故ニ誤テ之ニ洩レタル者ハユノ定日日二十日ノ内ニ申出テ得可シ又既ニ簿冊ニ載リタル者即選舉人ト定モ他人ノ誤入ヲ削リ遺漏ヲ載スル事ヲ申立テ得可シ其遺漏又ハ誤入ノ申立ハ巴里ニ於テハ邑長一人同助二人之ヲ審判スルノ委員ニシテ諸邑ニ於テハ邑長一人邑會議員二人之ヲ審

判スルノ委員タリ若シ或ハ此ノ裁判ニ服ヒサ
 ル者アレハ治安裁判役^{ユト}ニ控訴ス可シ
 尚ホ此ヲ裁判不服ナレハ再ヒ之ヲ覆審院^ル
 ン^カニ控訴スルヲ得可シ
 右ヲ通則トシ名簿ノ仕上ハ第三月三十一日ヲ
 以テ定日ト爲ス故ニ此ノ定日後ハ治産ノ禁又
 ハ死亡等ノ事アルニ非ハ増減ス可ラス

代議士選方ノ定式

選舉ヲ爲シニハ預メ日限ヲ期シ選舉人徵集ノ
 朝命アルヘシ因テ各邑ノ選舉人兼テ申渡サレ

タル期日ニ選舉局ニ參會ス其局ニハ邑長同助
邑會議員ノ中一人上席シ其外立合役四名書記
名アリ

選舉人ハ兼テ銘々ノ見込アル人ノ姓名ヲ紙片
ニ記シ之ヲ局長ニ渡ス然ル片局長之ヲ受取り
テ一個ノ筐中ニ投入シ局吏一名其紙片ニ姓名
ヲ記入シテ入札ヲ證明ス蓋シ此ノ入札ハ密ニ
シテ之ヲ兩日ニ爲ス初日ハ朝八字ヨリ夕六字
一至リ次日ハ朝八字ヨリ夕四字ニ至ルヲ常習
トス

代議士ト爲ルヲ得可キ諸件

代議士タランニハ年齒滿二十五歳ニシテ公私

ノ二權ヲ有シ之ヲ保全スル者ニ非サレハ其撰

ヲ得ルヲ能ハス且代議士タル者ハ公務ヲ兼勤

スルヲ許サス

選舉登用ヲ得ント欲スル者ハ遅クモ選舉定日

ノ八日前ニ誓文ヲ作り之ニ在任中萬機專ラ國

憲ニ依準シ且國帝ニ忠實ヲ盡ス可キ旨ヲ記載

シ州廳ノ書記局ニ差出ス可シ

先ツ第一回ノ入札ノ時ハ現ニ入札ヲ爲シタル

選舉人全數ノ半以上ト各邑ノ名簿ニ登記シタル總テノ選舉人ノ四分一以上ノ入札ヲ得タル者ニ非レハ落札ト爲ス可ラス若シ第一回ノ入札ノ時右ノ如ク落札トナル者ナキハ第二回ノ入札ヲ爲サシム此第二回ノ入札ノ時ハ最も多數ノ入札ヲ得タル者ヲ落札ト定メ選舉ス可シ各邑ノ入札ノ算計ハ每邑ノ選舉局ニ於テ執行シ諸區ノ總調ハ本州ノ首府ニ於テ執行ス可シ其掛ニハ州會議員三名ヲ以テ之ニ充ツ可シ右手續ヲ經終リテ議員選舉ヲ受タル後其議員

民選議院ニ集會シテ自カラ其選舉ノ方法ヲ取
調フ可シ但シ之ヲ爲スノ主意ハ選方ノ規矩ニ
則リタルヤ否ヲ檢査シ若シ方正ナラサレハ廢
棄スルニアリ

代議士在任ノ年限ハ六年ヲ以テ定限ト爲ス

民選議院ノ職勢

國帝并民選議院ハ律法ノ議按ヲ創定スル權利
アリ且民選議院ハ律法ノ議按ヲ討議シテ可ト
スル者多ケレハ卽チ之ヲ決定シ否トマルモノ
多ケレハ卽チ之ヲ拋棄ス可シ

民選議院ノ諸議員ハ議案ヲ檢閲シテ其箇條ヲ
改正セント求ムルヲ得可シ然レトモ其改正ノ
論議ハ先ツ議按檢查掛ニ送達シ然ル後政府ニ
通シタル上ニ非レハ民選議院ニ於テ其可否ヲ
論ス可ラス

右改正ノ取捨ニ付キ政府ト檢查掛トノ間ニ不
同意アル片ハ之ヲ參議院ニ議シ其論議ヲ聞タ
ル上民選議院ニ於テ其議案ト改正ノ論議トヲ
公ケニ評決ス

民選議院ノ諸議員政府ニ向ツテ

内外事務ヲ詰問スル權アル事
民選議院ニ於テ此權利ヲ有スルハ前欸元老議
院諸議員ニ於ルト同一ナリ因テ再ヒ茲ニ記シ
テ蛇足ヲ爲サス

政府ノ名代タル事

一千八百六十九年第九月八日ノ元老議院ノ議
定以前ノ憲法ニ因レハ元老議院及ヒ民選議院
ノ兩院ヘ政府ノ名代トシテ總裁宰相參議院上
席宰相及參議院官員ヲ出席セシムル事ニシテ
總テ諸宰相ハ國帝ノ命ヲ受ケ兩議院ニ在テ政

府ヨリ出ル所ノ法律ノ議按ヲ主張スルノ權アリ然ルニ同年ノ元老議院ノ議定ニテ諸宰相ハ兩院ノ員中ニ入リテ兩院ノ會議ニ加ハル可ク其言モ亦タ必ス聞カサルヲ得サル事ト定マレリ故ニ當今宰相ハ兩院ニ在テハ全ク政府ノ名代タリ

第四款 司法官

司法官ノ職務及其施設ノ大旨
司法官ノ主務ニアリ一ハ人民間ニ釀起シタル訴訟ヲ裁判スルニアリ一ハ犯罪ヲ抑制シ且犯

人ヲ罰シテ以テ世ノ治安ヲ保護スルニアリ蓋
 國中人民ヲシテ遵守ヒシム可キ法則ヲ制立ス
 ルハ立法官ノ職務タレハ司法官ニ於テ一般ノ
 法則ヲ定メ以テ立法官ノ權ヲ冒ス可ラス
 凡テ裁判ノ職務ハ裁判役之ヲ掌ル所ナリ裁判
 役ハ本人ノ兼諾ナケレハ退職ヲ命ス可カラサ
 ル者ナリ

又裁判所ニハ更ニ他ノ官員アリ之ヲ總稱シテ
 ハルケー一名「ミニステールピュブリック」
 局

ト云フ檢察ハ民法上ノ諸事ニ付テハ婦女幼者

行方不知者等ノ如キ權利ノ弱ナル者ヲ保護シ
刑法上ノ諸事ニ付テハ犯罪人ノ罪ヲ申立ルヲ
任トス但シ檢事官ハ政府ノ意ニテ何時ニテモ
退職ヲ命セラル可シ

司法ノ事務ニ付キ國ノ分チ方

附 聽訟斷獄ニ付キ通常裁判所ノ設

立

治安裁判所ノ事

大約我カ裁判所設置ノ方ハ行政設置ノ方ニ倣

ヒ毎カント
レ邑ヨリ大ナル者ニシテ郡ヨリ小
ナリ我縣ト少差ナレ
レ以下縣ト

譯ニ「ジ・ー」ジ・ユ・ド・ペイト云フ裁判役一名アリ
 譯シテ治安裁判役ト云フ即チカントニ裁判所
 是ナリ此ノ裁判役ハ民法上ニ付テハ輕些ノ爭
 論訴訟ヲ裁判シ刑法上ニ付テハ警察違背ノ最
 小罪ヲ裁判ス

郡裁判所ノ事

每郡ニ最初出訴ノ裁判所一名郡裁判所一云ヘ
 ル裁判所一ヶ所アリ是レ即チ民法上ノ通常ノ
 諸訴訟ヲ裁判スル所ニシテ別段ノ法律ニ從ヒ
 他ノ裁判所ニ願ヒ出ツ可キ者ヲ除クノ外ハ總

テノ訴訟大抵悉ク此ノ裁判所ニ出テサレハナ

シトス通例此ノ裁判所ハ局長即裁裁判役同代

役ノ三員ヨリ成ル所ナレトモ大都會等ノ事務

多端ナル地ニテハ之ヲ分ケテ數局トス又斷獄

ニ付テハ此ノ裁判所ニ於テ懲治罪ト云ヘル輕

罪ヲ審判ス警察違背ノ罪ニ比スレハ一層重キ

モノナリ蓋シ斷獄上ニテハ此ノ裁判所ヲ名ケ

テ懲治罪裁判所ト云フ

此ノ裁判所ニハプロキリールアンベリア

ル一人及ヒ其代役一人若クハ數人アリテ檢事

ノ職勢ヲ掌ル

上等裁判所ノ事

訴名
院控

各郡裁判所ノ上ニ上等裁判所ト云ヘル裁判所

アリ其數ハ全國合シテ二十八箇所ニシテバス

チア上等裁判所ヲ除クノ外悉ク一箇所ノ裁判

所ニテ數州ヲ兼管スルナリ而シテ此ノ裁判所

ハ通常之ヲ分テ數局トス故ニ此裁判所ニハ第

一長官分局長官及ヒ裁判役等ノ職員アリ

其他上等裁判所ニハプロキユリユールゼ子ラ

ル

大檢

アボカーゼ子ラル

大代
言師

シユブスチ、ユ、

王
四
小

大檢
事助
三職
アリ

上等裁判所ノ本勢ヲ論スレハ民法上ニテハ郡

裁判所及上商法裁判所ノ裁斷又刑法上ニテハ

其管下ノ懲治罪裁判所ノ裁斷ニ服セス之ヲ上

スル者アレハ其裁斷ノ當否ヲ彈シテ裁判ス

ル
ヲ
上
日
ト
ス

其他此ノ裁判所ノ裁判官ハ毎州ニ設クル所ノ

重罪裁判所ノ長官ニ選任セラル、ヲ得可シ

重罪裁判所ノ事

重罪裁判所ハ毎州一箇所ツ、一年間時々之ヲ
置クモノナリ此裁判所ノ職務ハ法律上ニテ定
ムル所ノ最モ重劇ノ罪ヲ裁判スルニ在リテ其
役員ハ上等裁判所ヨリ出張シタル長官一名及
シ其地方ノ上等裁判所若クハ郡裁判所ヨリ出
張シタル裁判役二名ト陪審^{ジユリ}ヨリ採^間リテ半民中
十二名トナリ

特立裁判所

商法裁判所工務裁判所兵部裁判

所ノ事

上ニ説キ及ホシタル諸件ハ通常裁判所ノ立方
ヲ概論シタルモノナリ其外之ニ異リタル特立
ノ裁判所アリ就中商法裁判所工務裁判所兵部
裁判所ヲ以テ其重立タルモノトス
商法裁判所ハ商人互相ノ爭論訴訟ヲ裁判シ工
務裁判所ハ雇主ト職人トノ間ニ起ル訴訟ヲ裁
判シ兵部裁判所ハ凡テ兵籍ニ入リタル輩ノ罪
惡ヲ裁判スル爲ニ設ケタルモノナリ就中商法
裁判所ノ役員及ヒ工務裁判所ノ役員ハ皆人民
中ヨリ選舉シテ之ニ任ス

覆審院ノ職務及其設置ノ本旨

覆審院ハ諸裁判所中ノ最モ上ニアルモノニシ
 テ權力等級之ニ比肩ス可キモノナシ抑此ノ裁
 判所ハ律ノ釋義齊一ニシテ其施行モ亦々齊一
 ナラシメントテ保護スル爲ニ設ケ置キタル所
 ナリ故ニ其職務ハ專ラ級下諸裁判所ノ裁斷ヲ
 監シ若シ其裁斷律法ニ乖戾シ之ヲ犯スヲアレ
 バ直ニ其裁斷ヲ破棄スルニアリ蓋シ「カツサシ
 ヨシ」ノ字義ヲ直譯スレハ破リ又毀ツノ意ニ當
 リ名實相背カスト云フ可シ

覆審院ハ出訴局民法院刑法局ノ三局ニ分レ各
 自ニ長官ヲ置ケリ故ニ全院官員ハ第一長官三
 局長官裁判官數名プロキユールゼ子ラー
 ル卽チ大檢事一名並ニアボカーゼ子ラール卽
 チ大代言師數名等ナリ
 覆審院ノ職務ハ他ノ裁判所トハ全ク相違シタ
 ルモノニシテ唯他ノ裁判所ニテ爲シタル裁決
 ヲ監定シ其裁判法律ニ違背スルコトアレハ之
 ヲ廢棄スルヲ本務トシ決シテ公事ノ本案如何
 ヲ取糾スヲナシ蓋シ其本案ノ取糾ハ覆審院ヨ

リ元來其公事ヲ裁判セシ裁判所ト同等ノ他ノ
裁判所ニ命シテ受ニ之ヲ爲サシム

第三章 諸官局決議書ノ種類

決議書ノ區別ヲ論ス

上ニ論シ及ボセシ如ク大權ハ諸官局相合シテ
成ルモノナリ因テ次ニ揭示スルカ如ク決議書
ノ出ル所異ナレハ其名ヲ取ル亦々同シカラス
故ニ之ヲ分ツテ元老議院議定、律法、勅命、定規、下
知、裁決、等トナス

元老院議定ノ事

元老院ニテ專任スル所ノ事勢ニ付キ議決ノ書ヲ名ケテ元老院議定書ト云フ蓋シ其草案ハ政府ヨリ出ル者ト元老院一己ニ出ル者トノ差アリ政府ヨリ出ル議案ハ參議院中ニテ之ヲ議シタル上政府ノ目代タル諸宰相及ヒ委員元老院ニ於テ之ヲ辨論主張シ元老院之ヲ可ナリト爲シ然ル上ニテ帝ノ許可ヲ經テ初メテ確的ノモノトナルナリ

律法ノ事

律法ハ政府又民選議院ノ創立ニ出テ而後民選

議院及ヒ元老院ノ討論ヲ經更ニ又帝ノ親許シヲ
ヨクシ及ヒ親告ガブシロミユルヲ經テ以テ國民ノ遵
 奉セザルヲ能ハサル確然不拔ノ律法ト成ルナ
 リ此律法ノ現ニ諸州ニ行ル、ヤ道路ノ遠近ニ
 從ツテ多少ノ遲速アリ故ニ帝都所在ノ州ニ於
 テハ親告ノ後一日ニ在リト雖_レ他ノ諸州ハ巴
 里ヨリ各州首府ニ至ル迄ノ距離十ミリアメー
 トル毎ニ一日ノ猶豫ヲ増ス可シ

勅命ノ事

帝ヨリ出ル所ノ令ヲ勅命ト名ク之ニ數種アリ

行政官專任ノ事務ニ關係スル者之ヲ通常勅命
ト云フ是レ殊ニ官員ノ登用武官ノ登級ヲ令ス
ル等ヲ專指スルナリ但シ此ノ類ノ勅命ハ必ス
掛リノ宰相ノ申立ニ從ヒ之ヲ布令スルヲ常ト
ス

定規一名定例ノ事

律法施行ニ必須ナル規則ヲ定メ又ハ律法中ニ
掲ケサル瑣末ノ條件ヲ定ムル勅命ヲ行政定規
又定例ブレリツグルマンダドミニストラルシヨン
ブルマニテ
ト名ク蓋シ此ノ勅命ハ他ノ勅命ト異ナリテ

其趣向及ヒ清文ニハ必ス參議院ノ與管ナカル
 可カラス故ニ定規書ノ緒言ニ參議院兼ノ四字
 ヲ載セテ以テ之カ與管ヲ証ス其外各種ノ勅命
 定規ニ關セサルモノト雖モ律法一定ノ規則ニ
 因リ必ス參議院ノ助言異見ヲ聞サル可カラサ
 ルモノアリ此類ノ勅命ハ新ニ商法裁判所ヲ置
 クヲ鑛山開發ノ免許ヲ出スヲ等ノ類ナリ此勅
 命ニハ「デクレット、ラシジュ、ダン、ラ、ホルム、デ、レ
 グルマン、ダドミニストラシヨン、ピュブリック
 ノ名ヲ命ジ他ノ勅命ト區別ス是レ卽チ行政定

規制立ノ式ニ倣ヒタル勅命ト云フ義ナリ

下知ノ事

行政諸官局其管務ニ當リ其權限内ニアリテ令
ヲ出スモノヲ下知ト云フ宰相下知州長下知邑
長下知等皆此ノ類ナリ

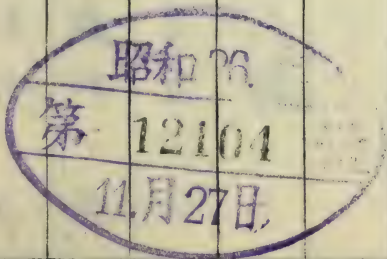
裁決ノ事

聽訟斷獄ニ付キ諸裁判所ノ爲ス所ノ決議
決ト云フ但シ佛語ニテ上等裁判所重罪裁判所
覆審院等ノ如キ重立タル裁判所ノ裁決ヲアレ
ト云ヒ商法裁判所及ヒ郡裁判所ノ裁決ヲシ

エゼマント云ヒ治安裁判所及工務裁判所ノ裁
決ヲサントンスト云フ均シク皆裁決裁判ノ義
ナリ

佛國政典第一卷 終

29
5
1



卷一

子部

四庫全書

江表集

卷一

定價金貳圓

佛國政典

下洋目第四十二

正下和目第五拾二

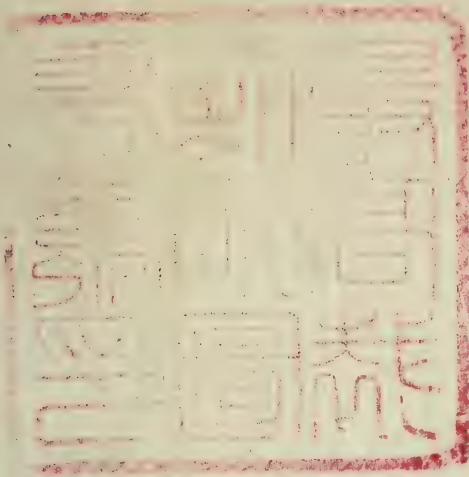
法律

一四七

佛國政典

一二

二



University of Illinois
Library at Urbana-
Champaign
IAS – Oak Street



最英蔵刊所題書館

水戸裁
管内
區裁
下妻

佛國政典第二卷

第一部

政法

政法ノ區別ヲ論ス

凡テ政法ハ種々ノ等級ニ就キ行政官設立ノ方
法ト政勢ニ關カル一切ノ事件ト行政上訴訟ノ
裁斷トノ三事ヲ論スルヲ以テ本旨トス故ニ第
二部ハ亦之ヲ三篇ニ分チ各々此三大別ヲ論セ
ントス

KJV
233
F93163
1873
V-2

卷二

同法篇

第一篇 行政官設立ノ方法

第一章 總論

行政官設立ノ大旨、行政官ノ等級、
政權統一ノ理ヲ論ス

行政アドミニストレーショントシヨンスノ本義ハ政府ノ所見ヲ實地ニ
施行シ又國是諸律ヲ施行スルニ補助トナル可
キ一切ノ勤務ニ在リ而シテ其設立方法ノ目的
ニアリ一ハ等級ヲ設ケ事務ヲ分チ一ハ政權ヲ
一ニ歸シテ法令ヲ一ニスルニアリ故ニ乙ハ甲
ニ屬シ丙ハ乙ニ屬スルカ如キ許多ノ職員ヲ置

ト以テ事務ヲ執ラシム地方官ノ如キハ州郡縣
邑ニ分ツテ其職員ノ等級ヲ立ツ

地方官ノ上ニ大政アリ能ク管下地方官ヲ監督
シ以テ行政ニ阻滯ナカラシム凡テ地方官ノ決
議又地方有益ニ關シタル指揮ヲ大政ニ統括シ
大政之ヲ監督スル所以ハ所裁ヲ一途ニ歸スル
カ故ニ行政ニ怠慢ナク且政ノ齊一ナルヲ期望
スルニアリ是レ實ニ一大緊要トス若シ此法眞
ニ缺如スル片ハ各地方官恣ニ獨立スルノミナ
ラス從テ政事紊亂無極ニ至ル可シ故ニ政權統

一ト云フ事ハ實ニ至要缺ク可カラサルモノタ
リ然リト雖_レ之ヨリ起ル一弊モ亦其害少カラ
ストス是_レ些々タル一小事ト雖_レ必ス大政ノ
所裁ヲ待テ事ヲ執ル如キニ至_レハ無數ノ手數
カ、リ却テ事務阻滯スルノ弊ヲ免カレサレハ
ナリ茲ヲ以テ唯大政ハ大事ヲ監督スルノ權ヲ
完備シ其他小事ハ地方官ニ委任シ地方官ヲシ
テ自在ニ事ヲ執ルノ權利ヲ得セシムルヲ緊要
トス故ニ近今ノ新法多クハ茲ニ注目シ政權統
一ノ方ヲ緩ニシテ專ラ中庸ヲ得セシメントス

行政ニ付テ國々分チ方ヲ論ス

佛國ハ州トデマハル郡スアマンジ縣トカン邑ミヨルノ四

箇ニ分ツ就中州邑ノ二ハ唯行政ニ關シタル區

畫ナルノミニ非ラス凡テ人間ノ受有ス可キ權

利及ヒ義務ヲ具有スルカ故ニ法律上ヨリ之ヲ

諭スレハ恰モ倫理ヲ弁識シタル人間ト看做ス

可シ是レ州邑ニハ貸借等ノ事アレハナリ之ニ

反シテ郡縣ハ行政ニ關スル區畫タルノミニ過

キスシテ殊ニ縣ハ別ニ一箇ノ官員アリテ之ヲ

治ムルモノニ非ラス然レモ此名ヲ存シ此區畫

ヲ立ル所以ハ其便利少カラサルニ因ル譬ヘハ
徵兵閱檢會議ノ會集スルモ縣府ニ於テシ州會
議員ヲ選用スルモ亦每縣一人トシ治安裁判役
ヲ置ク亦每縣一人ト定ムル等ノ事アレハナリ

政治ニ行議斷ノ三別アルヲ論ス

政治ノ執行一致タルヤ真ニ大切ノモノトス然
ルニ多人數相集リテ事ヲ行フニ於テハ此一致
ヲ得ルヲ能ハス抑々行ト云ヘルコトノ本義ハ
固ト一人ノ所爲ニアリト實ニ確言タリ故ニ諸
官司ニ於テモ政治ノ執行ヲ皆悉ク一人ニ托ス

未タ曾テ之ヲ衆人ニ委ル者ナルヲ見ス但シ行
固ト一人ニ歸スト雖凡必ス其側ニ一ノ議會ノ
リテ以テ己カ所見所思ヲ述テ行政掌握ノ人ヲ
輔翼ス可シ是レ即チ議政ノ因起スル所以ナリ
又議會ハ必ス衆ヨリ成ルモノナリ其故ハ行固
ト一人ニ歸スト雖凡議會ハ衆人相集合シテ成
ル可キニ因レハナリ其他若シ行政ノ處置ニ付
キ訴訟ノル者ハ必ス之ヲ審斷スル者ナカル可
カラス是レ即チ斷政アル所以ナリ
右ノ區別ハ行政官諸等ニ於テ悉ク皆之ヲ存セ

サルハナシ故ニ大政ハ其執行ヲ帝、宰相ニ歸シ
議政ハ其側侍タル參議院ニ歸ス、州政ハ其執行
ノ州長ニ歸シ、議政ハ參事院及ヒ州會ニ歸ス、郡
政ハ其執行ヲ郡長ニ歸シ、議政ハ郡會ニ歸ス、邑
政ハ其執行ヲ邑長ニ歸シ、議政ハ邑會ニ歸ス、ル
等ノ如シ、其餘斷政ノ職務ハ大政ニ付テハ宰相、
參議院之ニ任シ、又州政ニ付テハ州長、參事院之
ヲ掌ルナリ

第二章 大政

第一款 帝

帝ノ權力及ヒ職務ヲ論ス

帝ハ行政ノ主宰タリ故ニ小事ハ多分其屬吏ニ

命シ之ヲ治メシム然リト雖ル尚ホ帝ノ行政ニ

親裁スル所甚タ多シ譬ヘハ要路ノ有司

宰相州長郡長

等ニ受任免職ヲ命スル事參議院ト謀リテ行政

ノ定規ヲ作ル事鑛山開發ノ免許ヲ與ル事運上

所ヲ置ク事外國人ニ白國ノ民權ヲ與ヘ歸化ヲ

許ス事全國公同有益ノ起作結構ヲ命スル事等

皆帝ノ掌握スル所ナリ其他枚舉ニ遑アラザレ

ハ此一二例ヲ掲テ以テ帝ノ行政ニ親管スル事

ノ重大ナルヲ証明ス且帝ハ斷政ニ於テモ亦タ
首長ノ審司タリ蓋シ參議院モ亦タ斷政ニ與管
スト雖トモ其審判帝ノ許可ヲ得サレハ確的ノ
モノト爲ス可カラス

第二款 宰相

宰相職務ノ解及其區別ヲ論ス
宰相ハ受任退職共ニ帝ノ命スル所ニシテ國事
ヲ議スルコトアレハ帝ノ坐下ニ列シテ之ニ參與
シ且其局中ノ事務ハ自カラ其責ヲ擔當スベシ
又宰相ハ元老議院及ヒ民選議院ノ議員タル可

ク兩院ノ會議ニ與管シ己カ持論ヲ聞カシムル
ヲ得可シ
宰相ハ元老議院ニ非サレハ其罪ヲ問ハル、コ
トナシ

宰相ハ帝ノ權下ニ在リテ大政ニ關スル諸局ノ
長官タリ當今宰相ノ所管タル局ヲ十箇トス左
ニ揭示スルカ如シ

第一 審理事務局 兼宗門局

第二 外國事務局

第三 陸軍局

第四 海軍局

兼藩屬地事務

第五 内國事務局

第六 會計局

第七 農業局

兼商業

第八 工部局

第九 文部局

第十 宮内局

兼美術事務

右十局ハ何レモ宰相ヲ以テ其長官ト爲ス其

外參議院長モ亦タ宰相ノ列ニ加フ此宰相モ

亦タ他ノ諸宰相ト共ニ政府ノ目代トシテ元

老議院民選議院ノ兩院ニ出席ス可シ故ニ參
議院長宰相ノ名ヲ得タリ

宰相ノ權カヲ論ス

宰相ハ自己ノ所管タル局ニ於テ行フ可キ職務
ヲ全國中ニ施行ス可シ譬ハ所轄ノ局ニ管ス
ル勅命ノ加印、律法及勅命ノ施行、管下屬吏ノ授
任免職、管下諸局處置ノ指揮、自己ノ專任タル公
務一切ノ處決、必須ナル定例及章程ノ作爲等ヲ
掌リ又斷政ノ權ニ付テハ各其管理スル事務ニ
付テノ訴訟ヲ審判ス但シ此審判ニ服セサル者

ハ參議院ニ上告シテ皇帝ノ親裁ヲ乞フヲ得
可シ

宰相ノ級下諸有司ニ律法或ハ勅命ノ主意ヲ告
諭スルヲ教示インストロユト云フ之ニ二類アリ

リ一ハ一箇ノ事ニ付キ有司一員ニ告諭スルモ
ノナリ又一ハ同一ノ職務ニ當レル有司數人ニ

告諭スルモノニシテ之ヲ名ケテ廻達教示シユル
キユル

ルト云フ蓋シ此教示ハ宰相ノ指揮ヲ受クル

官吏之ヲ遵守セサルヲ得スト雖平民之ニ服
セスシテ之ヲ審司ニ訟フル時ハ之ヲ壓制スル

ノ權ナシ其他宰相庶民ノ訴願又ハ管下諸官員
伺出ノ難事ニ決答ヲ爲スモ之ヲ名ケテ決定
ヨシト云フナリ

第三款 參議院

參議院ハ立法司法兼外國事務課斷議課内國事
務教育兼宗門課工部兼美術事務課海陸軍兼藩
屬地事務課會計農業兼商業課ノ六課ニ分レテ
各々一局ヲナシ專務スルナリ

右分課アリト雖トモ事務ノ次第ニ由リ六局合

議スルモノアリ或ハ一局ニテ議スルモノアリ
但シ合議ハ時ハ事務擔當ノ局ニテ議案ヲ草ス
可シ

參議院職員ハ議長宰相ノ職ニ列スルモノ副議長諸分課長

參議員願訴狀取扱役參議員見習トス

參議員ニ三種アリ一ハ常務議員一ハ課外常務

議員一ハ臨時事務議員是ナリ常務議員ハ六局

合議又ハ各課ノ評議ニ關カル議員ナリ課外常

務議員ハ諸省ノ長官大書記及其他ノ諸有司ニ

シテ合議ニ關カルノモノナリ分課ニモ屬ス

ルコナク參政院ニ於テ行政ノ事務ヲ司ル者ナ
リ又臨時事務議員ハ議員ノ老年ニ及ヒテ停職
シタル者ニ與フル名ナリ願許狀取扱役及ヒ參
議員見習ハ之ヲ二級ニ分ツ但シ此職員ハ參議
員ト給料ノ差アリ

右ノ外議員ニ列スル大書記ゼクレテールアリ

合議ノ節筆ヲ執リ書類ヲ預リ又認濟ノ調印ヲ
爲スヲ本務トス

參議院諸官員ノ進退ハ帝親カラ之ヲ掌ル

參議院各種ノ職務ヲ論ス

參議院ノ職務ハ立法、行法、斷議ノ三務ニ在リ今
茲ニ立法、行法ニ關シタル要務ヲ論示スルコト
左ノ如シ

參議院ハ政府ヨリ民選議院ニ渡ス可キ律法ノ
議案及元老議院ノ議定案ヲ書記スル事、右政府
ノ議案ヲ兩院ニ於テ主張スル事、行政ノ定規及
行政定規ノ式ニ從フタル勅命ノ草案ヲ書記ス
ル事、政府諸官員ノ問罪、州邑諸局ニ與フル許可、
鑛山開發ノ免許、公同有用ノ工業ノ免許、外國人
歸化ノ免許ニ助言スル事等ヲ任トシ其外帝及

諸宰相ヨリ相談ヲ受ケタル事務一切ニ助言ス
可シ
凡テ參議院ハ獨行ノ權アルニ非ス相談ヲ受ケ
評議スルヲ以テ本然至當ノ職務トス故ニ其合
議ニ於テ決定ヲ爲スモ亦帝ノ許可ヲ得タル
上ニ非レハ確的ノモノト爲ス可ラス

其他斷政ニ付テハ參議院ヲ以テ全權ノ審司ト
ス故ニ行政諸有司ノ裁決ニ服セヌシテ控訴ス
ル者アレハ要ニ之ヲ裁判シ又庶民若シ行政諸
官員ノ權ヲ擅ニシタルヲ訟フル者アレハ之ヲ

審判シテ其官員ノ處置ヲ廢スルノ權アリ蓋シ
參議院ハ行政ニ於ケルカ如ク斷議ニ於ケル亦
タ決定ノ權アルヲナク唯勅命ノ案文ヲ草シ帝
ニ申告スレハ帝之ニ許可ヲ與ヘテ初メテ決定
トナルナリ

第三章 州政

州政ノ區別

州政ハ左ノ職員ヲ以テ之ヲ分治セシム可シ

州長 州廳大書記 參事院 州會是ナリ

第一款 州長

州長受任及職務ノ總目ヲ論ス

州長授任、免職ハ内國事務宰相ノ執奏ニ由リテ
帝之ヲ命ス可シ

州長ハ州内ニ於テ大權ノ目代タリ故ニ凡百ノ
政務ヲ掌握シ直ニ諸局ノ宰相ト事務ノ往復ヲ
爲ス可シ然レモ州長ハ内國事務局ノ管轄タル
ヲ以テ就中内國事務宰相ニ隸ス可シ

州長ハ一身二名ノ者ト云フ可シ是レ政府ノ爲
一ハ其目代ト稱シ州ニ於テハ本州名代ノ名ヲ
有スルニ因ル左ニ此二名ニ應ス可キ職務ヲ追

テ之ヲ各自ニ論セントス

州長政府ノ目代タル職務ヲ論ス

政府ノ目代タル州長ノ職務ハ律法勅命及公同ノ利益タル諸事ノ施行ヲ擔任シ且其施行ノ爲メ全州公通ノ定規ヲ作り管下屬吏ノ登用、免職ヲ命シ或ハ在任中本州關係ノ詞訟アル時ハ政府ニ代テ辯論主張スルニアリトス夫レ政府ハ私有ノ財産アリテ己カ權利ヲ行フ可ク又之ヲ保護シ、他人ノ害ヲ防ク可シ故ニ是レ眞ニ人ト同視ス可トナリ因テ政府私有ノ財産ニ付キ

州内ニ事アル時ハ州長之カ名代トナリ以テ辨
論ス可シ

州長本州ノ名代タル職務ヲ論ス

既ニ第一章ニ論ヒシ如ク州ハ布政ニ付テ設ケ
タル地方ノ區畫ニ止ラス恰モ人ニ於ケルト同
一ナル權利及義務ヲ備フル者ナリ而シテ州長
ハ之カ名代ニシテ本州ニ關係シタル賣買、契約、
訴訟等ノ諸事ヲ擔任シ又本州ノ事務ニ關係シ
タル州會ノ議定ヲ施行スルヲ掌ル

行政擁護、行政分掌ヲ論ス

千八百五十二年第三月十五日
ト千八百六十一年第四月十三

日ノ勅命
ニ出ツ

夫レ律法ノ眼ヲ以テ見レハ邑、州、病院、教育所、慈
院等ノ如キ公同利益ノ爲ニ設タル官署ハ恰モ
自カラ權利ヲ行フ能ハサル孺子ノ如シ故ニ
邑、州及ヒ此等官署ノ主宰タル者ハ事務過半大
政ノ許可ヲ經タル上ニ非レハ之ヲ行フ可カラ
ス
斯ク大政ノ地方官ヲ監督スルノ主意ハ地方官
ヲシテ過ナカクシメテ將來ノ危難ヲ預防スル

爲ナリ因テ之ヲ行政擁護ト名ク往時ノ律法ニ
於テハ州、邑又病院、貧院等ニ管シタル諸事ヲ行
フ大半國長若クハ宰相ノ許可ヲ受ク可キ事ニ
定レリ故ニ大概事務アル毎ニ餘儀ナク大政ノ
許可ヲ請ヒシカハ却テ政府之カ擁護ヲ爲ス可
キ者ノ爲ニ妨害ヲ爲シ加フルニ事務遲滯ノ弊
アルニ因リ一千八百五十二年第三月廿五日行
政分掌ノ勅命アリテ州長ニ官吏ノ登用及許多
ノ諸務ヲ委任シ之ヲ爲ニ事務ノ採取容易ニシ
テ且速成ナルコト往時ニ蓰蓰シタリ

右行政分掌ノ命アリテヨリ律法一定ノ規則ニ
於テ大政ノ許可ヲ受ク可キ事柄ヲ除クノ外萬
事州長ノ許可ヲ以テ足ル可キノ通則トナリタ
リ

當今州長ハ行政擁護ノ權ヲ行ヒ諸事ノ下知ヲ
爲ス可シ尤モ其掛リノ宰相アリテ之ヲ監督ヲ
爲シ州長ノ下知ヲ廢ヒシムルヲ得可シ

斯ク州長ノ自カラ處決スルヲ得可キ件々ハ一
千八百五十二年第三月二十五日ノ勅命ニ添フ
タル表中ニ之ヲ記載シ又其後一千八百六十一

年第四月十三日ノ勅命ヲ以テ更ニ州長ノ權ヲ
増加シタリ

第二款 州廳大書記

州廳大書記ノ職務ヲ論ス

毎州廳ニ大書記一名アリ其選任ハ帝ノ爲ス所

ニシテ其職務ハ州長ノ命令書テアレニ押印スル

ニアリ又大書記ハ州政ニ關係シタル事務ノ一

分ヲ掌ルヲ得可シ尤モ政務與管ノ事ハ内國

事務宰相ノ許可ヲ經テ州長之ヲ命ス可シ

大書記ハ州長不在又ハ他ノ事故アリテ參廳セ

ル時之ニ代リ理事スルヲ得可シ
大書記ハ參事院ニ於テ政府目代ノ職ヲ勤メ同
院會議ニ於テ斷議ス可キ諸事ニ臨ミテ其說ヲ
述フ可シ

右ノ條ハ一千八百六十五年第六月二十一日
ノ法ニ由テ定ムル所ナリ

第三款

參事院

千八百六十五年第六
月二十一日ノ法律

參事院立方ヲ論ス

每州其首府ニ參事院一局アリ人員ハ三四名ト
ス但シ巴里ニアルモノハ八人ヲ以テ定員トス

其議員ハ帝ノ選任タリ而メ之レカ議員タル可
キ者ハ年齒二十五歳ニシテ法律學リサンシエ
ノ級ニ登ルカ若クハ行法司法ノ職務ヲ十ヶ年
以上勤メタルカ但シハ州會議員又ハ邑長ノ職
ヲ勤タル者ニ非サレハ選任セラル、_一ヲ得ス
凡テ參事院ノ議長ニハ州長若クハ同院議員中
一名ヲ以テ之ニ任スルニアリ但シ議員中ヨリ
選任スルモノハ帝ノ命スル所ニシテ毎年帝之
ヲ改ム可シ

セ、_一又州參事院ニ於テハ議員中ヨリ選任シタ

ル議長アリ州長ニ代リテ上席ス

參事院職務ヲ論ス

參事院ハ行政ニ於テ州長ヲ輔佐スル職ナリ故
ニ州政ニ關係シタル諸件ニ於テ州長之ヲ參事
院ニ議ス可シ其他律法一定ノ規則ニ於テ參事
院ニ議セサルヲ得サル事勢許多アリ蓋シ參事
院ハ相談ヲ受ケテ論議スルヲ以テ本務トシ其
決ヲ取ルハ州長ニアル可シ
邑或ハ諸公署原告又ハ被告トナリテ訴ヲ爲サ
ントスル時ハ其許可ヲ參事院ニ乞ヒ其願ヲ聞

届クルト否トハ參事院ノ意中ニアル可シ

第四款

州會

一千八百六十六年
七月十八日ノ法律

州會ノ立方ヲ論ス

州會ハ公選ノ議員ヲ以テ成リ其職務ハ本州ニ
管シタル諸件ノ指揮ニ於テ州長ヲ輔佐シ之ニ
助言シ之ヲ監察スルニ在リ其人員ハ每縣一議
員ヲ選舉シテ以テ之ニ充ルカ故ニ本州管轄ノ
縣數ニ由リテ多寡アル可シ其議員タル可キ者
ハ年齒二十五歳以上ニシテ直税ヲ納ムル者タ
ル可シ且議員タル者ハ二州ノ議員ヲ兼子又タ

州會郡會ノ議員ヲ兼務ス可カラス
州會ノ議長、副議長及ヒ書記官ハ右議員中ヨリ
帝之ヲ選任ス可シ

州會議員ノ選舉方ヲ論ス

州會議員ノ選舉方ハ民選議院代議士選舉ノ規
則ニ齊シク入札ヲ以テ公選ス可シ然レモ少差
アリ民選議院ノ代議士選舉ノ仕方法律ニ適シ
タルヤ否ヲ檢査スルハ民選議院ニ限り州會ニ
於テハ然ラス州會議員ノ選舉ノ仕方不正ナル
付キ生シタル爭ハ參事院之ヲ審判シ又其爭

選舉ヲ受クル者ハ身上ニ關係シタル事ニ原ヲ
取ル片ハ郡裁判所之ヲ裁判ス可シ
州會議員在任ノ年限ハ九年タル可シ但シ三年
毎ニ全員ノ三分一ヲ交代セシム可シ

常會臨時會ヲ論ス

州會ハ各年一度會集ス可シ其期限及日限ハ帝
之ヲ命ス可シ
右每年會集スルモノヲ常會ト云フ但シ州會ハ
此會集中己カ職務ニ擔當スル所ノ諸事ヲ取扱
フ可シ

右常會外ニ事アル時ハ其度毎ニ會集ヲ命ス可
シ之ヲ臨時會ト云フ尤モ臨時ノ會集ヲ觸出ス
時ハ勅書中ニ會議ノ主意ヲ記載ス可シ因テ其
命ヲ奉シテ會集中凡テ受任ノ事ヲ取扱フ可シ
他事ニ移ル可カラス

議決ノ種類ヲ論ス

州會ノ議決悉皆同一ナルニ非ス之ニ四種ノ區
別アリ第一自己ノ權ヲ以テ施行ス可キ議決、第
二上官ノ許可ヲ經テ施行ス可キ議決、第三助言、
第四願望是ナリ左ニ其目次ヲ追テ各別ニ之ヲ

説示セントス

第一種ノ議決ハ上官ノ許可ヲ受ケス直ニ之ヲ
施行ス可キモノナリ但シ時トシテ其議決ヲ施
ス可カラサルコトアリ是唯權威ニ募リ或ハ律法
ニ違背シタルヲ以テ帝參議院ニ謀リテ其議決
ヲ廢止セシムルコトアルニ由ルノミ但シ終會後
二箇月ノ間ニ其議決ヲ廢止スルノ勅命ナケレ
ハ之ヲ確定ノ者ト爲ス可シ

右ノ如ク州會ノ權ヲ以テ固定ス可キ議決ノ種
類千八百六十六年第七月十八日ノ律法ニテ著

シク増加シタリ

方今州會自己ノ權ヲ以テ固定ス可キ箇條ハ州
ニ屬スル財産ヲ支配スル事、州路及ヒ大道ノ品
位ヲ定メ又ハ之ヲ指揮スル事ニアリ其外本州
内ノ諸邑ニ税ヲ配當スルヲ任トス蓋シ賦税ハ
民選議院ノ掌ル所ニシテ諸州ノ定額ハ民選議
院ニ出テ州會ハ其定額ヲ本州内諸邑ニ割付ル
ヲ掌トルナリ

第二種上官ノ許可ヲ經テ後施行ス可キ議決但
シ其許可ハ通例州長ニ出ツ然リト雖モ律法一

定ノ規則ニ於テ宰相或ハ帝ノ許可ヲ請フコト
亦タ之アルナリ

第三種助言、州長ハ本州所關ノ諸事ニ付キ之ヲ
州會ニ議スルヲ得可シ因テ州會己カ思見ヲ陳
述シテ以テ州長ニ助言ス可シ又律法上ニ於テ
定ムル所ハ規則ニ從ヒ州長必ス州會ノ助言ヲ
聞タル上ニテ決定ス可キ事務アリ

第四種願望、州會ハ本州管條ノ諸事ニ付キ願望
請求ノ書ヲ認ムルヲ得可シ而シテ此書ハ内國
事務宰相ニ進呈ス又其願望ノ大旨ハシールナ

ルオヒシエール官府ノ新聞紙ニシテ我朝
太政官日誌ノ如キヲ云ト

云フ新聞紙ニ載テ毎歲國中ニ公告スルヲ常習
トス

出納見積書ノ事

政府出納ノ高ヲ毎年預メ見積ル書面ヲ出納見
積書ト云フ但シ此見積書ハ年々之ヲ改作スル
カ故ニ何年製作ノ見積書ト之ニ年號ヲ銘記ス
ルナリ右ハ政府ノ出納見積書ナリ諸州ニハ又
其外ニ一州々々ノ見積書アリ州ノ見積書ハ州
長毎年之ヲ認メ州會ニテ之ヲ議シタル上帝ノ

勅許ヲ受ケテ初メノ確定スル者ナリ之二
アリ一ヲ定費見積書ト云ヒ一ヲ不定費見積書
ト云フ定費見積書ニハ州内諸役所及一切官局
ノ補繕入費、警兵屯營及ヒ初學校ノ入費等已
ヲ得サル常費ニ屬スルモノヲ録載シ不定費見
積書ニハ一州公同ノ州内諸官局學校病院貧院
等ノ新置又州内道路ノ新開發等ニ於ケル臨時
ノ費用ヲ記載スルモノナリ

前兩條ノ費用金定額ハ別々ニ備ヘ置クナリ但
シ其定額金ハ左ニ掲目スル所ノ直税ノ增高ヲ

以テ之ニ供ス

第一 地稅

第二 窓牖稅

第三 人別動產稅

第四 職業免許稅

以上直稅四種、增高トハ本稅ノ金高ヲ算シ一

ラシニ付キ若干サンチム即我外ノ割ニ當ル増金

ヲ出サシムルヲ云フナリ故ニ本稅ヲ百フラン

トシ增高ヲ本稅一フランニ付キ十サンチム

トセハ都合百十フランヲ納ム可キナリ

諸州ノ入費時アリテハ右ノ増税ノミニテ足ラ
サルコアルヲ以テ別段政府ノ見積書中ニ各州
共同ノ元金ト云ヘル金高ヲ備ヘ置キ若シ一州
ノ爲メ須要ノ事アレハ政府ニ願出テ之ヲ遣ヒ
拂フ可シ但シ此元金ヲ諸州ニ分配スルハ勅命
ノ定ムル所ナリ
凡テ州ノ出納見積書ヲ定ムルハ勅命ニ由ルト
雖モ曾テ州會ノ許可シタル以外ノ入費ヲ加ヘ
又ハ金額ノ用法ヲ易ユルカ如キハ勅命タリト
雖モ爲ス可カラス因テ州會ハ出納見積ニ付テ

ハ眞ニ全權ヲ有スル者ナリトス
右ハ通例ナレバ若シ州會ノ許可シタル費用見
積高ニテハ警兵ノ屯營及ヒ州廳郡廳ノ借貸修
覆又ハ裁判諸局ノ借貸家具等ニ於ケル諸般ノ
雜費ニ足ラサルハ要ニ勅ヲ以テ其入費見積
高ヲ増加シ以テ州會ノ議定シタル所ヲ改ムル
ヲ得可シ

第四章 郡政

第一款 郡長

郡長ノ職勢ヲ論ス

凡ノ州ノ首府アル郡ヲ除クノ外各郡毎ニ一人
ノ郡長アリ其受任ハ帝ノ命スル所ナリ其職域
ハ之ヲ州長ニ比スレハ甚タ狹ク事ニ臨ミテ決
ヲ行フノ權又大ナリトセヌ

一十八百六十一年第四月十三日ノ勅命ニ於テ
曾テ州長ノ取扱フタル事務若干ヲ郡長ニ委任
セラレタリ之ヲ掲目スレハ往來切手及ヒ山獵
ノ免許狀ヲ與ル事、病院貧院慈院等ノ費用ヲ定
ムル事、同上諸局ノ元金ヲ有益ニ用ユル事等ナ
リ

右ノ外郡長ハ州長ト邑長及ヒ庶民トノ中間ニ
在テ州長ヨリ出ス所ノ諸布告類ヲ邑長及ヒ庶
民ニ傳告スル職務ヲ行ヒ又諸般ノ書類ヲ州長
ニ出シ助言ヲ與ヘテ之ヲ輔佐ス可シ

第二款 郡會

郡會ノ立方ヲ論ス

每郡一ノ郡會アリ郡會ハ郡内ノ每縣ヨリ議員
一名ヲ選舉シテ成レルモノナリ故ニ其人員ハ
郡内ノ縣數ニ由テ定ムト雖モ決シテ九名ニ下
ル可カラス若シ郡内ノ縣數九箇ニ滿タサル片

ハ其諸縣ニ議員ノ數ヲ割振テ以テ九名ヲ選舉
セシムルナリ

郡會議員モ亦州會議員ノ選舉方ニ從フテ選舉
スルナリ但シ郡會議員在任ノ年限ハ六年タル
可ク三年毎ニ全員ノ半ヲ退任セシメ又更ニ選
舉シテ以テ之ヲ補フ可シ

議長、副長、書記ノ三名ハ州長ノ見ニテ議員中ヨ
リ選舉ス可シ
郡會ハ帝ノ勅アルニ非レハ會集ス可カラサル
モノナリ而メ會合ニ二種アリ常會、臨時會是ナ

リ而シテ常會ハ又之ヲ前會後會ノニニ分ツ前
會ハ州會會合ノ前ニ會スル者ヲ云ヒ後會ハ其
後ニ爲ス者ヲ云フナリ

郡會ノ職務ヲ論ス

郡會ハ州會ノ下ニ在リテ租税ヲ諸邑ニ分賦ス
ルヲ本務トス其外本郡所管ノ事務ニ助言ス可
キ任アリ又時アリテ必ス之カ助言ヲ受サル
能ハサル事務アリトス

郡會モ亦州會ニ同シク本郡ニ管シタル事務ニ
付キ願望書ヲ差出スヲ得可シ但シ其例ハ州

會議員ノ願望ト同一ノリトス

第五章 邑政

第一款

邑長、同助

千八百五十五年
五月五日ノ法律

受任ノ事

州、郡、縣ノ首府并ニ人口三千人以上ノ邑ヲ治ム

ル邑長及同助ハ帝之ヲ命ス可シ其他諸邑ノ長

及ヒ同助ハ州長ノ命スル所ナリ但シ之ニ退任

ヲ命スルハ帝ニアリトス州長ハ之ニ停職ヲ命

スルノ權ヲ有スルノミ

州長、邑長同助ニ停職ヲ言渡スト雖モ二ヶ月ノ

間ニ宰相ヨリ停職ノ事ヲ確定スルヲナケレハ
邑長、同助平常ノ通り職ニ就ク可シ

邑長不在又ハ病氣等ノ事故アル節ハ邑長助邑
長ニ代テ其職務ヲ勤ム可シ

邑長助前同斷差支アル節ハ州長ヨリ邑會議員
一名ヲ選ヒ之ニ邑長ノ代勤ヲ命スルカ否サレ
ハ受任ノ順序ニ從ヒ邑會議員ニ其職務ヲ取扱
ハシム可シ

邑長同助タル者ハ年齒二十五歳以上ニシテ直
税若干ヲ納ムル者タル可ク且法律上ニテ定ム

ル所、他ノ官務ヲ兼子行フ可カラス、又是迄邑
會議員ノ職ニ卽カサル者ト雖モ邑長ノ選任ヲ
受クル事ヲ得可シ

邑長、同助ハ在任ノ年限五年タル可ク、且在任中
一切無給タル可シ

邑長職務ノ區別ヲ論ス

邑長ノ職務ハ太々許多ニシテ、且ツ數種アリ、其
目ヲ掲クル事左ノ如シ

一 民生諸事掛リ役人ニシテ數箇ノ簿
冊ヲ有シ、出産、婚姻、死去ヲ録シ、且其

寫ヲ願人ニ渡ス事

一 重罪、輕罪、違警ノ罪犯ヲ證明スル爲

メ司法上ノ職掌ヲ有スル事

一 時ニ由リテ違警罪ノ裁判役タル事

一 行政ニ屬シタル職務ハ政府ノ名代

タル可キ事

政府ノ名代タル邑長ノ職務ヲ論

ス

邑長ハ上官ノ權下ニ在リテ律法、定例ノ布告及

ヒ其施行ヲ任トシ且選舉、徵兵、賦稅等ノ事務ニ

付キ別務アリ又宰相及ヒ州長ノ所定ニ屬スル
人民治安保護ノ爲ノ設タル法度ノ施行ニ注意
ス可キ任務アリトス

市邑取締ノ職務并下知ノ種類ヲ

論ス

邑長ハ上官ノ指揮ヲ受ケテ市邑取締

ホリスミ
ニシポー

ノ長タルナリ

邑長ハ市邑取締ノ長タルヲ以テ市邑ノ安全ヲ
守リ人民ノ身體及其所有物ヲ保護スルニ方ツ
テ切要ナル方法ヲ畫定ス可シ

右市邑取締ト譯スルモノハ原語ニ「ボリスミ
ユニシポ」トアルモノナリ但シ「ボリスミユ
ニシポ」ハ一大都府ヨリ一小村落ニ至ルマ
テノ取締ヲ爲ス者ノ總稱ナリ山林原野ノ所
有物ヲ保護スル者ハ別ニ之ヲ「ボリスルユラ
ルト」云フ田野取締ノ義ナリ

邑長前條ノ事件ニ付キ指揮ヲ爲スモノ之ヲ命
令又下知テ「アレト」云フ蓋シ之ニ二類アリ一ハ各
人一身ニ管スルモノトシ一ハ定規ニ屬スルモ
ノトス各人一身ニ管スルモノハ其施行ノ前ニ

其本人ニ通達ス可ク定規ニ屬スルモノハ又之
ニ二種ノ別アリテ一ハ一時假設ノ下知トシ又
一ハ永續ノ下知トス一時假設ノ下知ノ書ハ邑
長之ヲ郡長ニ差出シ其手ヲ經テ之ヲ州長ニ差
出スナリ但シ其下知ハ其書ヲ郡長ニ差出シタ
ル日ヲ以テ施行ノ當日ト定ム可シ尤モ州長ハ
邑長ノ一時假設ノ下知書ヲ受取り檢視シタル
上ニテ之ヲ差止ムルモ妨ナシトス然レモ一度
邑長ノ下知ヲ出スルハ其施行ノ當日ヨリ取消
ノ日ニ至ル迄ノ作用ハ消滅シ能ハサル所ナリ

永續ノ定規ニ於ケル下知ハ其書ヲ郡長ニ出シ
テ其受取書ヲ得タル後一月ニシテ施行ス可シ
但シ此間ニ州長其施行ヲ差止メ又ハ全ク之ヲ
取消スモ妨ナシ

右ノ如ク州長ハ邑長ノ下知ノ施行ヲ差止メ又
ハ全ク之ヲ取消ス權アリト雖モ其令ヲ更改ス
ルノ權アルヲナシ

邑長ノ下知ニ違背スル者ハ其罰トシテ贖罪金
若干ヲ出サシム可シ尤モ之ヲ言渡スハ違警罪
裁判所ノ權ニアル可シ

本邑名代タル邑長ノ職務ヲ論ス

邑長ハ本邑ニ管係シタル事務ノ指揮ヲ爲スニ
於テ本邑正當ノ名代タリ尤モ本邑ノ代トシテ
事ヲ處置スルノ間一ハ獨行ナルモノニ歸シ一
ハ邑會ノ議決ヲ施行スルニ歸ス就中獨行ナル
モノハ小事ニ限レリ其他ハ悉皆邑會ノ議決ヲ
施行スルニアリ

邑長ハ本邑關係ノ諸事又詞訟ニ於テハ本邑ノ
名代トナリ之ヲ取扱フ可シ

邑長ハ年々本邑ノ歳出歳入見積帳ヲ邑會ニ出

ス可シ然ル片ハ邑會之ヲ評議シ議決ノ上ニテ
上官ニ申告シ其許可ヲ經テ初メテ確定トナル
ナリ

邑長ハ本邑ヨリ金高ヲ得可キ權アル各人ニ爲

替切手

本人此切手ヲ租稅取立役ニ持參スル時
ハ租稅取立役其切手ト引替ヘテ金高ヲ

渡

リスヲ渡ス權アリトス

但シ其金高ハ邑長ノ取

扱フ所ニアラス租稅取立役力或ハ歲入著大ナ

ル府ニテハ市中租稅取立役ト云フ其專務ノ役

人ニテ取扱フナリ

邑長ハ邑内諸役人ヲ登用シ得可シ殊ニ邑廳附

書記官ヲ命スル權アル可シ

邑長助ノ職務ヲ論ス

邑長助ノ人員ハ邑内人口ノ多少ニ由テ定ラス
人口二千五百人以下ノ邑ハ一人トシ二千五百
人ヨリ一萬人ニ至ル迄ノ邑ハ二人トス其他人
口一萬以上ナル者ハ二萬人毎ニ一人宛増加シ
得可シ

邑長助ハ邑長不在又ハ病氣等ノ差支アル節邑
長ニ代リテ一切ノ事務ヲ取扱フ可シ又邑長ノ
特命ヲ受ケテ邑治ノ一端ヲ專務トスルヲアリ

トス

第二款

邑會

千八百五十五年第五月五日ノ法律及ヒ千八百

六十七年第七月二十四日ノ法律

邑會ノ立

テ

方ヲ論ス

邑會ハ邑内公選ノ議員ヨリ成リタルモノニメ
其議員ノ人員ハ邑内人口ノ多寡ニ由テ一定ナ
ラス然レモ少キモ十人ニ下ラス多キモ三十六
人ニ過キスシテ通例此間ニ在リトス人口五百
以下ノ邑ニ於ケル邑會ハ十人ヲ定員トス人口
六萬以上ノ邑ニ於ケル邑會ハ三十六人ヲ以テ

定員トス

邑會議員タル可キ者ハ年齒二十五歳以上ニシ
テ公私ノ二權ヲ受有ス可シ其外一切要ス可キ
事柄ナシトス

邑會議員タル者ハ他ノ公務ノ種類ニ因リ之ヲ
兼勤スルヲ許サルヲアリ

人口五百以上ノ邑ニ於テハ親子兄弟同時ニ議
員トナリテ邑會ニ入レトヲ許サス

何人ト雖モ兩邑ノ邑會議員タルトヲ得ス又一
邑ノ邑長カ或ハ邑長助ニ在テ他邑ノ邑會議員

タルヲ得可カラス

前文ニモ記セシ如ク議員外ノ者ト雖モ邑長ノ
職ニ任スルヲ得可シ蓋シ此場合ニ於テモ邑長
ハ邑會ノ議長トシテ會議ノ員ニ加ハルノミナ
ラス若シ事ヲ議スルニ當リ可トスル者ノ數ト
否トスル者ノ數ト相等シキ時ハ邑長ハ說ニ從
テ決定ス可シ

邑會議員ノ選舉方ヲ論ス

邑會議員ノ選舉人ハ州會及郡會議員ノ選舉人
ト同人タル可シ

選舉人參會ハ州長之ヲ命ス可シ

各選舉人ハ選舉ス可キ議員ノ數ニ應シテ受任

ス可キ者^{タカシ}數人ヲ推舉ス可シ又時アリテ

州長ハ一邑内ヲ分テ數區ト爲シ其數區ニ選舉

ス可キ議員ノ數ヲ割附クルヲ得可シ是レ許

多ス人口アル邑ニ於テハ太々緊要ノ事トス

邑會議員選舉ノ方法ハ州會議員選舉ノ規則ニ

齊シク入札ヲ以テ公選ス可シ又邑會議員ノ選

舉方不正ナルニ因リ生シタル爭ハ參事院之ヲ

審判ス可シ又其爭選舉ヲ受クル者ノ身上ニ關

係シタル事ニ原ヲ取ルキハ郡裁判所ニ於テ裁
判ス可シ

邑會議員交代ノ事

一千八百六十七年第七月二十四日制立シタル
律法ノ文ニ邑會議員ノ在任ハ七年タリトアリ
然ルニ此ヨリ以前ハ邑長并邑長助在任ノ年限
ト同一ニシテ五年ノ在任ト定メタリ蓋シ斯ノ
如ク律法ヲ改メタルハ邑長ノ選任ト邑會議員
ノ選舉ト同時ニ當ル差支ヲ避ケンカ爲ナリ又
七年ノ間ニ議員ノ數減スルコトアリトモ全數ノ

四分三以下ニ至レル時ニ非レハ変ニ改メテ選
舉ヲ爲ス可カラス

邑會議員ノ散會ハ之ヲ命スルニ勅ヲ以テス可

邑會散會スル片ハ帝或ハ州長ヨリ假掛リ

シヨヲ命シ邑會ニ代ラシム可シ但シ此假掛リ

ハ三年ノ間職ニ在ル可シト雖モ其期限ニ至レ

ハ必ス議員ヲ選舉ス可シ

千八百六十七年第七
月二十四日ノ法律

州長ハ邑會ニ二ヶ月間ノ停會ヲ命スル權アリ

又内國事務宰相ハ邑會ニ一年迄ノ停會ヲ命ス

ルノ權アリ但シ邑會若シ停會スル時ハ直ニ假
掛リヲ以テ之ニ代ラシム可シ

常會ノ事

邑會ノ會合ハ期限ヲ定メ會集スルモノト臨時
ニ會集スルモノト別アリ

期限ヲ定メ會集スルモノヲ常會ト云フ常會ハ
毎年四回タル可ク其定期ハ二月五月八月十一
月ノ初メナリ
常會ニ付キ邑會議員ノ徵集ハ差紙ヲ以テ遅ク
モ會合ノ三日前ニ觸示ス可シ

常會ノ日數ハ每會十日タル可シ而シ其會合中
以邑會ノ通常委任セラレタル一切ノ事務ヲ取
扱不可シ

臨時會ノ事

臨時ノ會合ニ付キ邑會議員ハ徵集ハ州長ハ或
ハ郡長ハ命令ヲ出テ又ハ邑長或ハ邑會全員中三
分一ヨリ申立ニ出ル可シ蓋シ何ニモセヨ本
邑關係ハ公同利益タル諸事ニ付キ集會ヲ要ス
ルヲ以テハ其都度都度參會セサル可カラス

邑會全員ノ三分一ヨリ邑會臨時ノ集會ヲ申立

ル時ハ其申立書ヲ直ニ州長ニ向ケ差出ス可シ
然ル片ハ州長其申立ヲ許可シ又ハ許可セサル
趣意ヲ記シタル下知ノ書ヲ下ス可シ但シ州長
ノ下知ニ服セサル片ハ之ヲ内國事務宰相ニ上
控スルヲ得可シ
臨時會徵集ノ沙汰ハ遅クモ會合ノ前五日タル
可シ且徵集ノ主意ヲ觸示ス可シ
臨時會合中ハ凡テ右觸示ノ事件ノミヲ專務ニ
取扱フ可シ

邑會ノ議決ニ種類アル事

邑會ノ議決ニ四種ノ別アリ第一自己ノ權ヲ以テ施行ス可キ議決、第二上官ノ許可ヲ經テ施行ス可キ議決、第三助言、第四願望是ナリ左ニ此目次ニ從テ之ヲ論別セントス

自己ノ權ヲ以テ施行ス可キ議決
一千八百六十七年第七月二十四日ノ律法ニ於テ邑會ノ職勢著シク増加シ且許多ノ事務ヲ獨斷ヲ以テ規定スル權ヲ得タリ左ニ之ヲ略舉ス

一本邑ニテ物件ヲ所得スルニ關係シタ

ル事

一 期限十八年以下ナル土地家屋等貸借ノ事

一 邑ニ屬スル建造物ノ修覆ヲ企ル事

一 墓所貸渡免許税ノ事

一 邑内公同資益ノ爲メノ入費ニ供スル

臨時税ノ事

但シ此事ニ付テハ邑會ニ全ク獨斷決定スルノ權ナ

シトス

右件々ハ邑會ノ確定シ得ル所トス

若シ邑會ト邑長トノ間ニ議論一致セスシテ邑長邑會ノ議決ヲ容レサル事アレハ州長ニ申出

テ其許可ヲ得ルニ非レハ議決ヲ施行ス可カラ
ス

若シ又州長邑會ノ議定ヲ大政ノ律法又ハ定規
ニ違背シタル者トシ或ハ管條ノ者ヨリノ訴願
ニ從ヒ其議定ヲ否トスル時ハ自己ノ權ヲ以テ
其議定ヲ取消スヲ得可シ

邑會ノ議定書ハ都度都度郡長ニ差出シ郡長之
ヲ州長ニ呈ス是レ卽チ州長ニ議定ヲ取消スノ
權アレハナリ

若シ議定書ヲ郡長ニ差出シタル日ヨリ三十日

ヲ經テ州長之ヲ取消スヲナケレハ其議定ヲ施行ス可シ然レモ州長ハ右期限外ニ至リテ更ニ三十日ノ間其施行ヲ差止ルノ權アリ

上官ノ許可ヲ經テ施行ス可キ議決

上官ノ許可ヲ經テ施行ス可キ議決トハ邑會ニテ議定シ得可カラサル事ニ管スル議決ニシテ其許可多クハ州長ニ出テ律法一定ノ規則ニ於テ止ムヲ得サルノ外帝或ハ宰相ノ許可ヲ受ル

一 稀ナリ

助言及ヒ願望

邑會ハ州長ニ陪議ス可シ故ニ州長事務ヲ處置
スルニ常リ之ヲ邑會ニ議シテ可ナリト思料ス
ル時ハ邑會常ニ之ニ陪議シテ助言ヲ爲ス可シ
又事務ニ由リ必ス邑會ノ助言ヲ聞カサルヲ得
サル事アリ譬ハ食料品ノ市場ヲ取設クルカ
如キハ此類ナリ

又邑會ハ地方ノ資益タル諸件ニ付キ願望ヲ爲
スヲ得可シ蓋シ此權限外ノ議決ハ法ニ適セ
サルカ故ニ上官之ヲ取消ス可シ

邑内歳出歳入見積書ノ事

邑モ亦州ニ於ケルカ如ク一邑限リノ歳出歳入
見積書アリテ其中ニ常費用ト臨時費用トヲ併
載ス

時トメ邑會ノ決議シタル定額金邑ノ常費ニ足
ラサル時ハ出納取調ノ權アル上官其職務ヲ以
テ之ヲ償補ス可シ

收納モ亦々常收納ト臨時收納トノ區別アリ臨
時收納ハ其性來トシテ再生ヲ期ス可カラサル
者ニシテ其遣方モ又別段ノモノトス例ハ別

段ノ費用ニ供スルカ爲メニ設ケタル臨時税ノ
如キモノ是ナリ

邑會ノ出納取極ヲ掌ルノ權甚廣大ナリトス例
ハ邑會ノ定メタル算計ハ出納取極ノ節上官
之ヲ變改スルヲ得可カラサルカ如シ但シ邑
會ハ常費ニ十分不足ナキ定額ヲ供ス可ク且臨
時收納ヲ以テ常費ニ供ス可カラサルナリ

六十七年ノ
律法第二條

前件ノ如クナルニ由リ邑會常收納ヲ以テ常費
用ニ供シ猶餘分アレハ之ヲ隨意ニ取扱フヲ

得可シ

右歳出歳入見積書ハ邑長ヨリ之ヲ出シ邑會之
ヲ決議シタル上多分ハ州長ノ許可ヲ受ケテ固
定ス可シ但シ歳入三百万フラン以上ノ府ニ於
ケル歳出歳入見積書ハ國帝ノ許可ヲ經タル上
ニテ固定ス可シ

巴里及ヒ里昂邑長ノ事

巴里ノ邑長ハ他ノ邑長ニ比スレハ行政ニ與管
スルノ任勢甚狹小ナリトス故ニ他ノ諸邑ニ於
テハ邑長ノ所管タル事務ト雖トモ巴里ニ於テ

ハセー又州長ト巡警長トニテ之ヲ分掌ス

セー又州長ハ巴里府ノ名代タル職務ヲ有シ且
巡警長ト協合シテ市中取締ノ權務ヲ兼帶スル
ナリ

里昂ニ於テモロト又州長アリ恰モ巴里ノセー
又州長及ヒ巡警長ノ如キ權務ヲ有ス

又他ノ諸邑ノ邑會議員ハ公選ニ由テ受任スト
雖モ巴里府并ニセー又州内諸邑及里昂府ノ邑
會議員ハ帝ノ勅ニ由テ受任ス可シ

巴里府ノ邑會ハ州會ノ職務ヲ兼勤ス但シ其議

員ニハ八人ノ増員アリ是レスソ一サシドニ一
兩郡ノ名代タリ

第六章 諸官局屬吏

屬吏ノ職務及ヒ區別ノ事

諸官局ノ屬吏ハ直チニ人民ニ對シテ一己ノ處
決ヲ爲スヲ能ハス又其處決ヲ施行スルヲ能ハ
ス是レ前章ニ說示シタル諸有司ト異別アル所
ナリ
屬吏中ニ或事務ヲ證明スル爲メ調書ヲ記スル
ヲ以テ任務トスル者アリ

屬吏ニ二種アリ一ハ官局ノ内務ニ課屬シ一ハ
外務ニ課屬ス

内務課屬吏ノ事

内務課屬吏ハ事務ヲ取調ヘ往復書翰ヲ草シ決
定書ノ下案ヲ認メテ以テ官局ノ補助資益ヲ爲
スヲ課トス可シ

各宰相局ノ本務ヲ掌ル諸有司ハ内務課屬吏中
ニ在リトス其官員左ノ如シ

諸局補助

課長

同副長

同諸下吏

又左ノ官員モ内務課、屬吏ナリトス

州廳諸司官員

郡廳諸司官員

邑廳書記官

外務課屬吏ノ事

外務課屬吏ハ公務ノ種類ニ從テ亦タ其所務ニ
種類アルコト左ノ如シ

第一築造ノ指揮及其監督ヲ司ル官員卽

橋梁、堤防、礦山、海軍等ノ諸築造ニ

管スル官吏

第二官府歳入ノ取立方并請取方ニ管ス

ル官員卽チ會計局諸官員、直税、間

税掛リ諸官員、海關税掛リ諸官員

第三兵制ノ姿アル諸官員、運上所取締役、

山林監守人

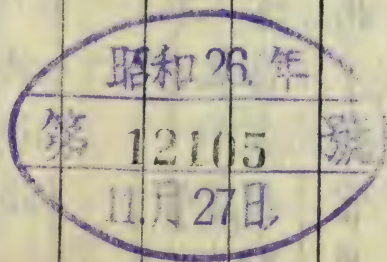
第四巡警長及田野監守人

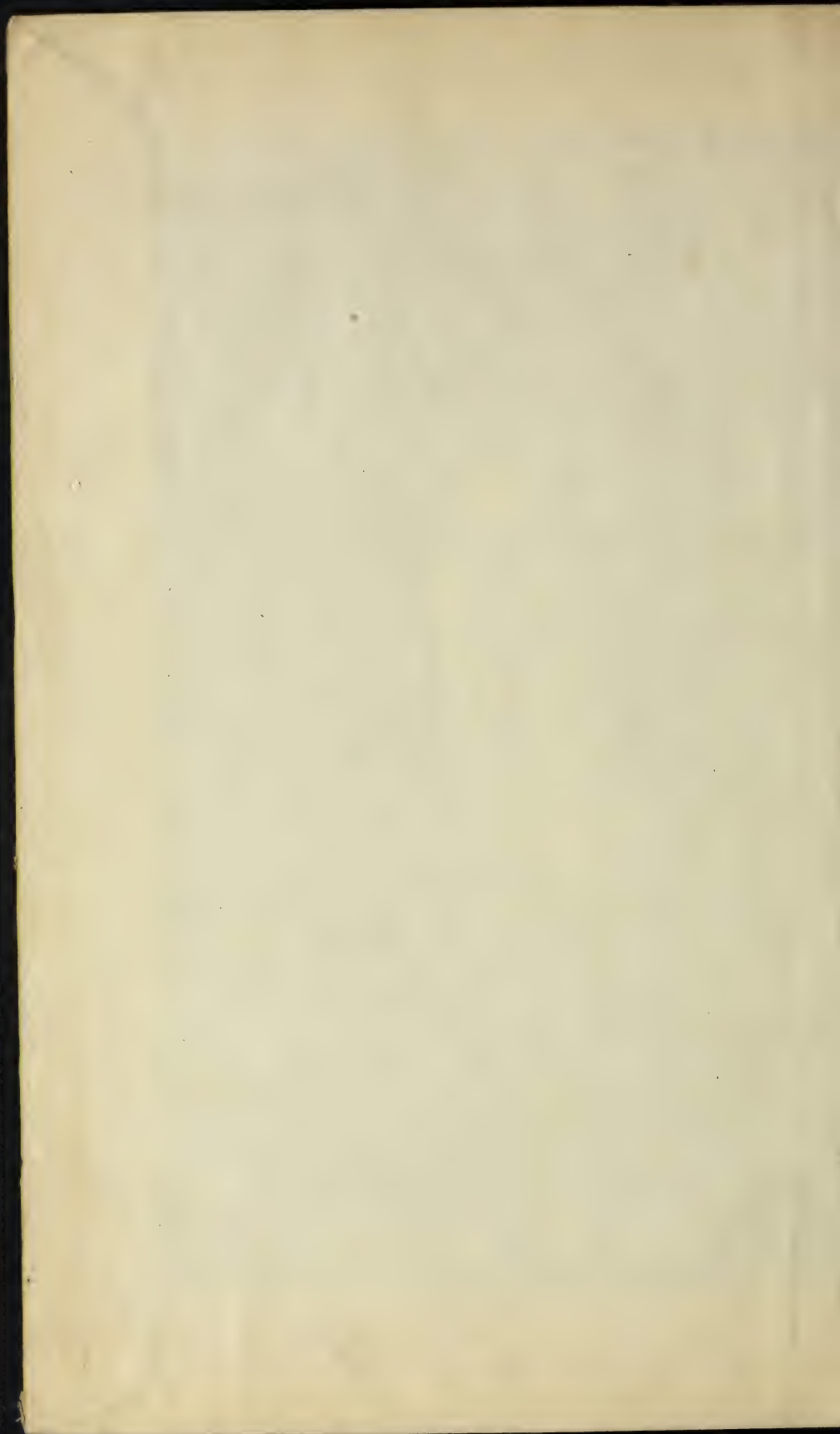
29
5
1

佛國政典第二卷 終

卷二

三
活
花



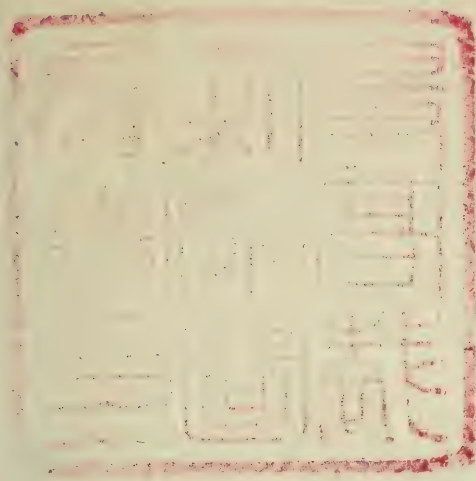


佛國政典

下洋書第四十二卷之三

正
下和四第百五拾卷之三

法律
佛國政典
一四七
一二册
三



University of Illinois
Library at Urbana-
Champaign
IAS - Oak Street



水戸裁
管内
區裁
判所

佛國政典第三卷

下妻

第二編

政務

同區別

夫レ政務トハ公務事件一切ノ總括ニシテ其界
限ノ廣汎ナルコト殆ント窮極ナク得テ過了ス
可カラサルカ如シ是ノ實ニ左ノ件ヲ了知ス
ルニアリ

國力ノ事

宗教ノ事

會計ノ事

教育ノ事

建築ノ事

百工ニ關スル諸規則ノ事

右掲目ノ如ク其域甚タ廣汎ナルニ依リ其要旨ヲ取テ左ノ目次ニ從ヒ逐件之ヲ記載セントス

第一 陸軍及海軍ノ事

第二 宗教ノ事

第三 教育ノ事

第四 建築等一切構造ノ事

第五 往還道路ノ事

第六 國財ノ事

第一章 陸軍及ヒ海軍

第一款 陸軍ノ事

徵兵ノ事及ヒ隨意ニ兵籍ニ入ル
事

徵兵ノ方ハ庶民ノ望ニ任カスルモノアリ又ハ
探闖ヲ以テ之ヲ定ムルモノアリ
如何ナル者ト雖ヒ佛蘭西人ニシテ年齡十八歳

ニ至リ定規ノ脊丈アリ且父母或ハ後見人ノ承
諾ヲ得タル者ハ傭入ヲ許ス可シ又年齡二十歳
ニ及ヘル者ハ父母或ハ後見人ノ承諾ヲ待マ當
人ノ望ニ任セ傭入ヲ許ス可シ但シ兵籍ニ入ル
ノ年限ハ滿二年ヨリ短カ、ル可カラズ

探闖及諸縣定員ノ事

毎年別段ノ律法ヲ以テ徵集ス可キ兵士ノ員數
ヲ定メ且其員數ヲ諸州ニ配分ス可シ

一州ノ全員ヲ雯ニ郡、縣ニ配分スルハ州長、參事
院ニ議シテ之ヲ爲ス可シ

各縣ニ配分シタル定員ハ探闖ノ上左ノ規定ニ
應スル壯年ノ者ヲ以テ之ニ充ツ可シ

- 一 本縣内ニ法律上ノ住所ヲ有スル者
- 一 前年ノ間ニ滿二十歳ノ齡ニ至リシ

者

右規定ニ應スル者ハ徵兵表ト銘記シタル簿冊
中ニ登記ス可シ

徵兵表ハ邑長ハ造ル所ニメ先ツ之ヲ公告シタ
ル後探闖ノ本日ニ至ツテ確定ス可シ

探闖ハ本縣ノ首府ニ於テ郡長並ヒ縣内諸邑長

ノ立會ニテ執行ヲ可シ蓋シ其時ハ徵兵表檢査
濟ノ上初度ノ鬪ヲ探リテ諸邑ノ先後順序ヲ定
メ次ニ邑ノ順番ニ從テ登表者鬪ヲ探リテ自己
ノ番數ヲ取ル可シ然ル後登表者ノ取リタル番
數ヲ直ニ簿冊ニ登記ス可シ
登表ノ者若シ事故アリテ出頭シ能ハサル時ハ
親族ノ者名代トシテ探鬪ス可シ又親族ノ者ア
ラサハキハ本邑ノ長之ニ代ル可シ
右ノ仕方ニテ番數ヲ記シ簿冊終成シタル上ニ
テ除役免役等ノ事故アレハ之ヲ其簿冊ニ登記

ス可シ此ノ如クミテ探闕ノ式終リ簿冊取極レ
ハ之ヲ諸邑ニ公告ス可シ

徵兵檢閱會議ノ事

徵兵檢閱會議ハ探闕ノ後徵募ノ仕方ヨリ生ス
ル一切ノ申立ヲ審判シ且除役又ハ免役等ヲ規
定スルノ任務アリトス而シテ此會議ニハ州長
上席ス可シ若シ州長事故アリ闕席スルハ州
廳大書記カ或ハ參事院議員ノ中一人上席ス可
シ其餘ノ官員ハ州長ノ選ミタル參事院議員一
名、州會議員一名、郡會議員一名ト國帝ノ命ヲ奉

シタル上等士官一名トナリ

右ノ外此評議ニ列シ論議ス可キ爲ノ軍監カ或ハ副監ノ中一名ト郡長カ或ハ探聞ノ時上席シタル有司一人トノ立合アリ且外ニ兵士ノ體格検査ノ爲メ醫師一人ノ立合アル可シ

右檢閱使ハ諸縣ヲ巡回シテ毎縣ノ検査ヲ爲スナリ

除役及ヒ免役ノ原由

除役ト免役トハ自カラ區別アリ譬ヘハ除役ハ其者ヲ貢兵コンバンノ員中ニ算計スルナク

次ノ番數ニ當ル者ヲ以テ之ニ代ラシメ免役ハ
然ラス其者ヲ貢兵ノ招募ニ應シタルモノト假
ニ看做シ次ノ番號ニ當ル者ヲシテ之ニ代ハラ
シムルヲナキカ如シ
左ニ掲目スル所ノ事故アル者ハ皆之ヲ除役ス
可シ

第一 千八百六十八年第二月一日ノ律

法ニテ規定シタル如ク一「メ」ト
ル五十五「サン」チメ「ト」ルノ身ノ
丈ナキ者

第二 身體虛弱ニシテ軍役ニ適應セサル者

第三 父母ナキ兄弟ノ中其兄タル者

第四 寡婦、盲父又ハ七十歳以上ノ父ノ

孤男タル者

第五 兄弟共ニ鬪ニ當リタル時弟軍役ニ適應スルニ於テハ其兄

第六 交代ノ名義ニ非スシテ軍役ニ入ル者ノ兄弟

第七 軍役ノ爲ニ没スル者或ハ疵傷ヲ

受タルカ又ハ身體虛弱トナリテ

退任シタル者ノ兄弟

○免役ノ事

免役ハ左ノ事故アル者ニ之ヲ許ルヌ可シ

第一 諸藝學校ノ生徒トナリタル者

但シ軍役ノ法ニ定メタル年限
ニ均シキ年數ヲ公務ニ消スル
ヲ必要トス

第二 授業ニ身ヲ委タル者

但シ大學區長ノ面前ニ於テ十
年ノ間授業ニ身ヲ委ヌ可キ誓
約ヲ爲シ之ニ背カ
サルヲ必要トス

第三 法教ニ從身シタル者

第四 大學校ノ大賞典ヲ得タル者

○家族養育ノ爲メノ給暇ノ事

右除役ノ外ト雖凡旣ニ兵士ニ選擢セラレタル者ニ給暇ヲ聽ルスヲアリ是レ家族養育ノ爲メ止ムヲ得サルニ因ル所ナリ故ニ若シ事實止ム能ハサルニ因テ給暇ヲ乞フ片ハ檢閱使巡回中ニ願書ヲ差出ス可シ尤モ邑長ノ添書ヲ受ク可シ然ル片ハ邑長ヨリ郡長ヘ執次キ郡長一見シテ檢印ヲ爲シタル上州長ニ達スルナリ而シテ

後檢閱使ハ明細ニ事實ヲ取糺シタル上其願ヲ
爲ス者ノ中最モ事情止ムヲ得サル輩ニ給暇ヲ
許ス可シ

徵兵ノ仕方并護國兵ノ取立方ニ

ガルドナシヨールヒール

付キ千八百六十八年二月一日ノ

法律

此新法ニテ兵制ニ至重ノ改革ヲ加ヘタリ抑々
官ニテ此法ヲ趣向シタルハ心匠ハ全ク愛國ノ
情ニ出ル所ニシテ輒今近隣諸國殊ニ獨乙ニ於
テハ著シク兵力ヲ振起シタルニ因リ之ニ對シ

テ國境ノ防禦ヲ爲シ國威ヲ保護センカ爲ニ亦
我國力ヲ奮起セシト欲シタルニアリ蓋シ千八
百三十二年ニ定メタル兵制ニ從ヒ在役七年ノ
貢兵ヲ年々十萬人ト定メ徵募シタルニ因リテ
終ニ六十五萬人ノ兵士ヲ得ルニ至リシカ新法
ニ於テハ此在役ノ年數ヲ増シテ九年ト爲シ其
内五年ヲ在屯ト爲シ四年ヲ預備ト爲シタルヲ
以テ當今我佛國ニ在ル所ノ兵大約在屯四十一
萬五千人預備三十二萬九千人兩數ノ合計七十
四萬四千人ニ及ヒタリ

又此時ニ於テ新ニ護國兵ヲ募リタリシカ此兵
ハ事アルノ日國境海岸及諸寨砦ノ防禦ニ供セ
シカ爲メニス此全員亦五十萬人ヲ算シ得タリ
右ハ新法上ノ大意ヲ撮記シタルナリ次ニ此新
法上ニ於テノ切要ナル諸規則ヲ記載セントス
在屯兵、預備兵並在役年限ノ事

貢兵 コンタン
ジャン ハ毎年民選議院ニ於テ之ヲ令出

ス可シ而シテ此貢兵ハ分レテ二部トナリ第一
部ハ貢兵全數ノ六分五ヲ以テ之ニ充テ第二部
ハ唯其六分一ヲ以テ之ニ充ツルナリ而シテ第

一部ニ屬スル者ニハ直ニ之ニ在屯ヲ命シ第二
部ニ屬スル者ニハ自己ノ宅ニ在テ事アル日マ
テ招募ノ命ヲ待タシムルナリ

第二部ニ屬スル者ハ在役ノ年限内最初ノ二年
ハ繰練ニ從事ス可ク又朝命ニ因リテ無事ノ時
ト雖トモ在屯ヲ命セラル可シ

右貢兵ノ二部ニ充テラル可キ壯年者ノ在役年
限ハ探闖ノ年第七月一日ヨリ算ヲ起シテ五年
タル可シ此年限滿レハ更ニ又四年ノ間預備ノ
員中ニ加ハル可シ

預備兵ハ事アルノ日ニ遇フニ非サレハ在屯ヲ
命セラル、一ナカル可シ若シ之ヲ命セラル、
一アル時ハ組ヲ追フテ其尤モ新ナルモノヨリ
初メ次第ニ古キ組ニ及ホスノ方法ヲ以テ招募
セラル可シ

總シテ兵ニ從事スル輩ハ兵部官ノ許可ヲ經タ
ル上ニ非サレハ娶妻スルヲ許サス但シ預備
ニ屬スル者ハ別格ニテ在役年限ノ最後ノ三年
ニ至レハ其許可ヲ經スト雖トモ娶妻スルヲ得
可シ

番替並交代ノ事

番替ハ檢閲會議ノ見込ニテ縣ノ名簿上ニテ之ヲ爲スニアリ譬ヘハ壯年ノ者甲乙兩人探闕シ甲ナル者ハ貢兵ニ編入セラレ乙ナル者ハ軍役ヲ免セラレ、ノ番ニ當リタル片乙者軍役ニ適應スルニ於テハ甲者ト番替シテ甲者ニ代リ貢兵中ニ入ルヲ得可シ

一千八百三十二年第三月二十五日制立ノ法律ニ於テハ貢兵ニ編入セラレタル壯年者ノ爲メ交代ノ自權ヲ許シ置キタリシカ其後一千八百

五十五年第三月二十六日ノ法ニ於テ之ニ代フ
ルニ釋免式ヲ以テセリ因テ釋免セント欲スル
者ハ毎年陸軍局ニ於テ定ムル所ノ金額ヲ納メ
テ以テ釋免スルヲ得可ク而シテ此納金ハケ
ース、ド、ドクシヨンド、ラルメモ

軍卒俸給資
ト云
本金ノ義

ヘル貯金中ニ納ム又此缺員ヲ補フニハ既ニ脱
隊シタル兵士又ハ今尚ホ在役ノ兵士ヲシテ釋
免シタル兵士ノ代トシテ在屯スルヲ約サシ
メテ以テ貢兵ニ供スルヲナリシカ兎角其方
ノ良ナラサルニ因リ千八百六十八年ノ法ニ於

全ク之ヲ廢シ愛ニ千八百三十二年三月二十
五日ノ舊法ニ歸シ交代式ヲ採用シタリ

護國兵同在屯ノ年限並在屯ノ招
募

抑此護國兵ハ在屯兵卽チ常備兵ノ援助ヲ爲サ
シムル爲メ編立シタルモノニシテ其本務ハ有
事ノ日ニ於テハ國內ノ諸寨砦、海岸及ヒ國境防
禦ノ事ヨリ平常無事ノ日ニ於テハ國內ノ治安
ヲ擁護スル事等ニ至ル而シテ其在役ノ年數ハ
五年ト定メ又此兵ニ在屯ヲ命スルハ通常徵兵

ノ法トハ全ク別格ノ法ヲ以テ爲ス可キモノト
ス

護國兵ノ編立方

護國兵ハ左件ニ應スル者ヲ以テ之ヲ編立ス可

シ

第一 番數ノ譯ニ由リテ貢兵ニ編入セ

ラレサル者

第二 身ノ丈定法ニ適應セサルカ或ハ

身體健康ナラサルノ差支ヲ除ク

ノ外其他一切ノ事ニ付キ除役セ

ラレタル者

第三 常備兵中交代ノ爲ニ脱隊ヲ得シ
者

右ノ外常備兵或ハ護國兵ノ中既ニ軍役ヲ免
セラレタル者モ亦當人ノ所望ニ任セ護國兵
ニ新入又ハ再入ヲ許ス可シ

護國兵軍役ヲ免スルニ付テモ亦前條常備兵免
役ノ條下ニ論載シタル規則ニ循フ可シ

又檢閱會議取紀ノ上左ニ記スル所ノ者ハ護國
兵ニ使役スルヲ免ス

在職ノ有司

海軍ニ附屬シタル諸局ノ職工

造兵局諸職工

官ヨリ所置ノ兵器製造所諸職工

海關稅役所附屬ノ諸役夫

閒稅役所附屬ノ諸役夫

郵便役所ノ飛脚

鑛道諸器械職人

又右ニ掲クル所ノ外檢閲會議取組ノ上事實止ムヲ得サル壯年者ヲシテ家内養育ノ爲メ

トシテ軍役ヲ免セシムルヲ得可シ但シ無
事ノ時ハ人負百人中ニテ十人迄ハ事實止ム
ヲ得サル者ニ軍役ノ免除ヲ聽ルスヲ得可シ
ト雖モ護國兵在屯ヲ命セラル、ノ日ニ至テ
ハ百人ニ付キ十人ノ割合ヲ減シテ百人ニ付
キ四人ト爲ス可シ又在屯ヲ命セラレタル時
交代ヲ聽ルスヲアリ是レ除役ヲ得可キ事故
アリテ之ヲ申立タル者ノ爲ニ設クル所ナリ
然レモ護國兵ノ勤向ハ固ト已レ一身ニ管ス
ルモノニシテ總テ交代ト云ヘルコトハ元來

之レナキ筈ナレハ前ニ記スル所ハ一ノ例外
ノ法ト云フ可シ

護國兵ノ組立方及教練方

護國兵ハ一州毎ニ之ヲ組立テ分テ大隊小隊又
ハ「バツテリ」ト爲ス而シテ其士官ハ凡テ國帝
ヨリ命セラル、ナリ

護國兵ハ在屯ノ命ヲ受ケサル間ハ總テノ權利
ヲ受有シ官ノ許可ヲ待スシテ娶妻ス可ク自國
内スハ外國ヘ旅行ス可ク又勝手ニ本住及ヒ寄
住ヲ移スヲ得可シ因テ大ニ自己ノ權利ヲ完

一シ之ヲ束縛セラル、ヲナキニ似タリト雖モ
亦聊カ法ニ制セラル、所アリ是レ唯々當然不
在ノ時、外ハ本住又ハ寄住シタル地方ノ繰練
ニ出ツ可ク且小隊或ハ大隊ノ區分アルヲ以テ
其區分ノ大隊或ハ小隊ノ會隊ニ參ス可キニ在
リトス

繰練、會隊ノ事アリト雖モ是亦一日以上ニ及ホ
スヲナシ且此繰練、會隊ハ一年間十五度以上ニ
及ホスヲナシトス而シテ壯者ノ中砲銃ノ取扱
方及ヒ生兵教練ニ熟シタル事ヲ申出ヒハ繰練

ニ出ルヲ免セラル可シ
護國兵ニ在屯ヲ命シタル上ハ士官、下士官、伍長
及ヒ兵士ハ共ニ軍律ニ服從セラレ常備兵ニ屬
シタル夫々ノ任責ヲ擔當シ且兵法上ノ利益ヲ
受有ス可シ

右ハ千八百六十八年ノ法ニ於ケル細目ヲ記載
シタルモノナリ次ニ又士官ノ登級及ヒ身分ニ
關係シタル從來ノ法則ヲ記サントス

士官ノ登級ノ事
士官ノ登級ハ法ヲ以テ定メタル比例ニ循ヒ勤

役ノ長短ト人々ノ才不才トニ因テ之ヲ爲ス但
シ事アルノ日ニ於テハ殊ニ此比例ヲ變シ拔擢
ヲシテ要ニ自由ナラシム

拔擢ニ由テ登進スル者ハ眞ニ本人ノ器量ニ因
ル可ク年功ニ由テ登進スル者ハ之レニ反シテ
一定ノ條件ニ因ルモノトシ恰モ一ノ權利タル
カ如シ但シ歩騎兩兵大隊長以上ノ級ニ任スル
ハ必ス拔擢ニ由テ之ヲ爲ス可シ

等級ト役目トノ區別

士官ノ身分ニ於テ等級ト役目トノ二ヲ區別セ

サルヲ能ハス是レ等級ハ一度國君ヨリ授ケラ
ル、キハ士官ノ爲ニ永ク私有ノモノトナリ或
ハ國君ヨリ退級ヲ命セラル、カ或ハ犯罪ノ爲
メニ刑罰ヲ受クルカ或ハ兵部裁判所ヨリ奪級
ヲ申渡サル、カニ非サレハ之ヲ失フトシ之
ニ反シテ役目ハ一時ノ假權ニ屬シ政府ノ意ニ
テ何時ニテモ與奪シ得可キモノナレハナリ

無役、免役、退役ノ事

役目アル士官ハ皆夫々ノ任アリ之ヲ在役士官
トス役目ヲ有セサル士官ハ何レモ三件ノ一二

居ラサルハナシ其三件トハ無役免役退役是ナ
リ無役ハ一時ノ事ニテ無役中ハ一切役ヲ勤ム
ルヲナク而シテ其原由ハ兵隊ヲ解散スル歟役
目ヲ廢スル歟役目ヲ一時停止スル歟ニ出ル者
ニシテ無役ノ士官ハ退役ノ士官ニ准シテ扶助
金トシテ給祿ノ一部ヲ賜ハルナリ免役トハ其
原由多クハ治療ス可カラサル重病ニ罹ル歟勤
向ニ就テノ重キ過失アル歟軍律ニ背ク歟ニ因
リテ命セラル、モノニシテ免役ニ遇フハ固
トヨリ役ヲ勤ムルヲナシト雖凡退役ノ時ノ如

ク扶助金ヲ賜ハルヲナシ若シ勤向ニ就キ
過失アリ又ハ軍律ニ違背シタル罪ニ因リ免役
ヲ命セラル、時ハ軍律ヲ以テ裁斷ス可キモノ
ニシテ之ヲ命スルハ陸軍宰相ヨリ申立ノ上軍
監ユクシケートノ執奏ニ從ヒ國帝ヨリ之ヲ爲ス可シ而シ
テ免役ノ士官ハ退役ノ士官ニ比スレハ權利甚
タ少ナキモノトス又退役トハ士官タル者ノ最
終ノ有様ニシテ退役ノ者ハ退隱料トシテ扶助
金ヲ下賜ハルナリ

護郷兵ノ事

ガルドナシヨナール

護郷兵ハ護國兵ト混淆ス可カラサルモノナリ
夫レ護郷兵ハ地方ノ平穩ヲ保護スル事ヲ任セ
ラレタル一箇ノ民兵ニシテ其之ヲ置クト置カ
サルトハ政府ニ於テ定ムル所ナリ故ニ方今政
府ノ意ニテ之ヲ置テ可トスル都府數ヶ所ニ之
レアルノミ

國民中年齒二十五歳乃至五十歳ノ者ハ凡テ護
郷兵ニ編入セラル、コトヲ得可シ又其士官ハ
凡テ内國事務宰相ノ申立ニ因リテ國帝ヨリ命
スル所ナリ

第二欸

海軍

水兵徵募ノ方

陸軍兵徵募ノ規則ハ海軍水兵ノ徵募ニ於テモ亦之ヲ用フ可シ故ニ探聞ニ因リテ第一番ノ聞ヲ得タル者ヲ以テ海軍ノ貢兵ト爲スナリ然レハ船中ニ用フル水夫及ヒ造船局職工長及職工ハ海軍區書上ケノ法ヲ以テ之ヲ招募ス

凡テ航海及漁獵ヲ業ト爲ス者其他一切海利ヲ計ルヲ以テ本業ト爲ス者ハ皆悉ク海軍區書上ケノ中ニ編入セラル可シ而シテ沿海ノ地方ニ

於ケル海軍區ノ分界ハ國帝ノ勅命ニ因テ定ム
ル所トス

海軍區書上ケ中ニ在リテ年齒十八歳乃至五十
歳ノ者ハ悉皆本國ノ海軍ニ役從セサル可カラ
ス但シ此等ノ者ハ之ヲ四類ニ分チ第一第二ノ
序次ヲ以テ之ヲ招募ス

海軍區書上ケ中ニ編入セラレタル者若シ之ヲ
脱セシト欲スル片ハ航海及ヒ漁獵ノ業ヲ止ム
可キ旨ヲ申立ツ可シ

海軍區書上ケ中ニ編入セラレタル者ハ自カラ

特利ヲ有スルモノトス譬ヘハ其書上中ニ入リ
タル上ハ徴兵法ヲ以テ制セラル、一ナカル可
ク又定期間航海ノ役ヲ勤メタル後ニ至ツテハ
扶助金ヲ得可ク且本國ノ軍艦ニ乗組トシテ出
役シタル者ノ子ハ政府ヨリ撫育料ヲ受ク可キ
カ如シ

船隊ノ總負

千八百六十七年ノ國紀ニ從ヘハ船隊ヲ二類ニ
分テリ即チ其一ハ新造船隊ニシテ更ニ之ヲ分
ツテ戰隊ト運輸隊ト爲ス又一ハ變移船隊ト云

新造船隊中ニ入レ用フルヲ能ハサル船ヲ總
稱ス新造船隊ノ總負ヲ計算スルニ千八百六十
七年ノ末ニ於テハ蒸氣船三百十六艘帆前船七
十艘合計三百八十六艘ナリ但シ此中ニ甲鉄最
大艦及甲鉄フレガット艦十六艘甲鉄コルウマ
ット船一艘外ニ米國齋來ノ別艦二艘ヲ算入ス又變
移船隊ハ蒸氣船二十七艘帆前船四十六艘ナリ

第二章

法教

天主教設置ノ方並大教長管轄、教
長管轄ノ事

佛國人民ノ多ク信奉スル所ノ法教ハ天主教
リツトス而シテ其法教設置ノ方ニ於テ國內ヲ
分ツテ數箇ノ大法區リゾセト爲シ再ヒ之ヲ小
分シテ數箇ノ小法區ハロト爲ス此大法區ニハ
大教長アルセ一名カ若クハ教長エベッ一名アリ
テ之ヲ管理スルナリ且ツ此教長ハ其地ヲ管轄
スル大教長ノ指揮ヲ受ク可シ

右大法區ノ分チ方ハ必シモ州ノ分チ方ニ倣ヘ
ルニ非ス故ニ佛蘭西本國及ヒアルゼリールヲ合
算スルニ大教長管轄區十八箇、教長管轄區十九

箇アリ

大教長、教長ノ兩官ハ何レモ帝ヨリ任スル所ナ
リ但シ其任務ヲ施行スルニ當リテハ先ツ羅馬
法皇ノ許可ヲ受ケサル可カラス是レ羅馬法皇
ハ法教制立ノ權ヲ有シ之ヲ許可スルト否トハ
其意中ニアルニ因レハナリ故ニ教長ノ受任ハ
法教ノ權ト政事上ノ權トノ二權相合シテ爲ス
所ノモノトス又大教長、教長ハ寺權ヲ掌握シ其
管下ニ補助ビケル數人アリテ以テ此ニ官ヲ
補佐ス可シ蓋シ此補助ハ政府ノ許可ヲ經タル

上ニテ命ス可キモノトス

小法區、同寺院、副寺ノ事

前文ニ論セシ如ク大法區ハ分レテ若干ノ小法

區トナリ其小法區ノ寺院ルキニハ牧師レキト云

ヘル僧官アリテ之ヲ管理スルナリ牧師ハ終身

在任ノ官ニシテ教長ノ選ム所ナリ然レ其選

任ハ國長ノ許可ヲ歷テ初メテ確定ス可シ又牧

師選任ヲ得タル上ハ教長ノ一存ニテ退任ヲ言

渡ス可カラサルモノナリ故ニ寺法ニ於テ定ム

ル所ノ法律ニ照準セスシテ退任ヲ命セラルハ

一十カ
ル可シ

毎縣大抵一小法區アリ又之ヲ管理スル寺院一箇アリ此外別ニ又副寺ルシユキト云ヘル寺院アリ牧師補助ト云ヘル僧アリテ之ヲ守ルナリ此寺院ト小法區ノ寺院トハ少差アルノミ小法區ノ寺院ニ住スル牧師ハ國長聞濟ノ上ニテ教長之ヲ命シ且終身在任ノモノトスト雖正副寺ニ住スル僧卽牧師補助ハ教長ノ一存ニテ之ヲ命シ終身在任ノモノニ非ラス但シ此二官ハ共ニ勅命ニ因テ創立シタル所ナリ

右寺院ノ俗務ハ庶務會ナルモノアリテ之ヲ掌
ル庶務會ハ牧師並其補助ト邑長及ヒ凡俗議員
數人ヨリ成ルモノトス而シテ凡ソ僧徒ハ其品
位等階ニ拘ハラス皆官ヨリ給料ヲ賜フモノナ
リ

天主教外ノ法教

耶蘇新教ノ事

佛國ニ於テ政府ヨリ認メラレ之ヲ保護ヲ受ク
ル所ノ耶蘇新教プロテスタントニ二種アリ卽カルビン
宗ルテラン宗是ナリ其他ノ耶蘇新教派ハ政府

ヨリノ保護資助ヲ受クルヲナシ
 新教派ニ屬スル寺院ヲ區分スルニモ亦小法區
 ヲ以テス小法區ハ卽チ新教ヲ奉スル者ノ一羣
 ニシテ每區一ノ小教會スビンセラユルアレアリ政
 府ヨリ命スル所ノ牧師之ニ上席シ其餘ノ議員
 ニハ公選ニ因リテ任セラレタル凡俗議員若干
 アリ又此小教會ノ上ニ大教會アリテ管下ノ諸
 小法區ヲ總管スルナリ而シテ此大教會ニハ各
 小法區ノ牧師ノ外ニ定員ノ凡俗議員ライツブル
 出席ス

イスラエリート教ノ事

イスラエリート教

即チ猶太教

モ亦耶蘇新教ノ二派

ニ於ケルカ如ク政府ノ保護及ヒ資助ヲ受ク此

宗徒モ亦若干ノ區ニ分レ區毎ニ教會アリ此教

會ハ區内選舉人ノ選擢シタル凡俗議員四名ト

高僧一名トヨリ成ル又此教會ノ上ニ大教會ア

リ巴里ニアル所ノモノニシテ高僧一名ト凡俗

議員八名トヨリ成リテ諸區ヲ總管ス

第三章

教育

教育事務調理ノ立方、教育大會議

ノ事

教育總括ノ事務即大學ノ事務調理ノ立方ニ於
 テハ其首ニ文部宰相アリテ教育ニ管スル一切
 事務ノ統括シ又教育大會議コシヒユアリ
 テ教育ニ管スル諸事ニ付キ助言ヲ爲シテ以テ
 文部宰相ノ輔佐ス其議員ニハ元老院議員三名、
 參議院議員三名、大教長或ハ教長五名、天主教ニ
 非ル法教ノ議員三名、覆審院裁判官三名、大學社
 博士五名、大監學アルビシト八名、私學校教
 師一名ヲ以テ之ニ充ツルナリ

右諸議員ノ在任年限ハ一年トス故ニ此期限満
レハ又更ニ選任シテ之ニ充ツルコナル可シ
教育ニ管スル諸局ノ監督ハ大監學之ニ任ス可
シ又其教育ハ其教ユル所ノ學科ノ種類ト其區
域トニ因リテ自カラ分レテ初等學、中等學、上等
學トナルナリ

大學區長及ヒ大學區監督ノ事

佛國ハ國內ヲ分ツテ十七大學區ト爲シ各大學
區トモニ數州ヲ兼管シ每區大學區長レクト
云ヘル官員アリテ之ヲ總理スルナリ又此大學

區長ハ己カ所管タル州數ニ應シテ置カレタル
大學區監督ノ補助ヲ得テ理事ヲ爲スナリ但シ
已里ニ於テハ大學區長ノ官ナシ然レモ副區長
ビスレクアリ是レ文部宰相大學區長ノ名義ヲ
兼帶スルノ故ヲ以テナリ

右大學區長ハ其管下ノ大學區監督ト共ニ上等
學校及ヒ中等學校ヲ統理監督スト雖モ初等學
校ニ於テハ然ラス大學區長ノ之レニ管スルハ
唯學問上ニ關スル諸事ニ於ケルノミ其他ノ事
務ハ大學區監督ノ補助ヲ受ケテ州長之ヲ掌ル

故ニ州長ハ初等學校教師ノ登用、免職ヲ爲シ又
之カ停職、賞罰ヲ行フノ權アリトス

又大學區監督ハ上等學、中等學ニ管スル諸事又
初等學校ノ學問上ニ管係スル諸事ニ付キ直チ
ニ大學區長ト書信ノ往復ヲ爲シ其指令ヲ受ク
可シ其他初等學校ニ管スル諸事ニ於テハ州長
ニ屬シテ其指令ヲ受ク可シ

大學區會議及ヒ州會議ノ事

大學區ノ首府ニ於テハ大學區會議アリト等學
校及ヒ中等學校ニ管係シタル諸事ニ付キ大學

三

州

議

決

權

區長ニ助言ス又州ノ首府ニ於テハ州會議アリ
初等學校ニ管係シタル諸事ヲ專務トシテ取扱
フ

改正會議、改正大會議ノ事
千八百
六十五

年第六月廿一日ノ法ト同年
八月廿六日ノ勅トニ出ツ

特設中等學校ニハ各々改正會議
コンセルニ
ヘクシユベ
ル

アリテ邑長之ニ上席ス其餘ノ議員ニハ學校長

大學區監督並ニ文武官有司、富豪ノ商工農ノ中

ヨリ特ニ選任シタル議員トヲ以テ之ニ充ツ其

任務ハ特設中等學制改革ノ事ニ付キ助言ヲ爲

スニ在リ故ニ己カ所屬タル學校ノ諸事即チ教
育方法ノ便不便ヲ監シ其見込書ヲ毎年文部宰
相ニ差出シ又所屬ノ學校ニ付キテハ之ヲ管照
スルノ任勢ヲ施行ス可シ又巴里ニ於テハ改正
大會議一局アリ右各所ノ改正會議ヨリ差出シ
タル建白ヲ取纏メル爲ニ設ケタル所ナリ

初等學ノ事

千八百五十年第三月
十五日千八百五十四

年第六月十四日千八百六十
七年第四月十日ノ法ニ出ツ

初等學ハ何人ニ限ラス人トシテ知ラサル可カ
ラサル者即チ讀字、習字、國語、日用算術ヲ教ユル

ヲ以テ本旨トス而シテ其教授ハ官學校、私學校
ノ男女教師ノ掌ル所ナリ蓋シ此教師ノ業ヲ爲
スニハ年齡二十一歳以上ニシテ各州ニ於テ設
クル所ノ試業會議ヨリ渡シタル免許狀ヲ所持
セサル可カラス

官學校ノ事

官學校ハ其費用ヲ一邑ヨリ給スルモノアリ一
州ヨリ給スルモノアリ或ハ之ヲ一國ヨリ給ス
ルモノアリト雖凡均シク皆之ヲ名ケテ官學校
ト爲ス

抑、毎邑ニ於テハ州會議ノ允許ヲ受クル時ノ外
本來一ノ學校ナカル可カラス又住民五百人以
上ノ邑ニ於テハ男兒學校一箇所女兒學校一箇所
所ナカル可カラス

又右ノ外ニ小里學校

エコール、
ド、ハモール

アリ蓋シ邑學校

ニ比スレハ一層小ナルモノナリ此學校ハ男女
ノ助教師之ヲ掌ルナリ

邑ハ男女ノ教師ニ其住居並ニ學校ノ爲メ適應
ナル場所ヲ渡ス可シ

右男女ノ教師ハ何レモ大學區監督ノ申立ニテ

登用免職トモニ州長ヨリ之ヲ申渡ス可シ

官學校ニ於テハ貧困ニシテ學費ヲ拂ヒ得サル者ノ兒女ハ無學費ニテ之ヲ教育ス尤モ身元相應ナル者ノ兒女ハ州會議ヨリ每邑定ムル所ノ學費ヲ拂ハシム可シ

又各邑ニ於テ無學費ノ學校ヲ造立スルヲ得可シ是レ第二部ニ於テ論シタル直税四種ノ增高ヲ以テ其費用ニ供シ尚ホ不足ナルハ一州又ハ一國ノ預備金ヲ以テ之ヲ補フアルニ因ル

私學校ノ事

私學校ハ其造立及ヒ補繕ノ入費ヲ一人ヨリ出
スモノアリ協力同心ノ衆人ヨリ出スモノアリ
而シテ何人ニ限ラス初等學ノ教師タル可キ權
利ヲ得タル人ハ一應本邑ノ邑長ニ届出タル上
ニテ何時ニテモ私學校ヲ開クヲ得可シ但シ邑
長及ヒ大學區監督ハ其開校ヲ差止ムル權アリ
然レモ其差止ニ遇フモ若シ不服ナレハ之ヲ州
會議ニ上控シテ其決ヲ取リ猶其決ニ不服ナレ
ハ又ニ教育大會議ニ上控スルヲ得可シ但シ千
八百六十七年ノ律法第十九條ニ於テ定ムル所

ニ從ヘハ右開校届出ノ後一箇月ノ間ニ右差止
ノ沙汰ナケレハ開校ス可キ事ト定ル可シ
凡テ私學校教師ハ官ノ監督ヲ受クルカ故ニ其
職業ニ關シテ重罪ヲ犯スルハ州會ノ審判ヲ受
ケ州會ヨリ其事柄ニ因リテ或ハ之ヲ譴責シ或
ハ一時其業ヲ差止メ或ハ之ヲ禁スルヲ得ルナ
リ

初等學師範學校ノ事

諸邑ニアル所ノ初等學校ノ師範タル可キ者ノ
選募ニ應ス可キ爲メ毎州特別ノ學校ヲ設ケテ

其任ヲ得可キ生徒ヲ教ユ此學校ヲ名ケテ初等
學師範學校ルエプリメルマト云フ又各州ニ於
テハ之ニ均シク初等女學師範學校アリ初等學
師範學校ト並立シテ女學校女教師トナル可キ
者ヲ教ユ

進級中等學ノ事

進級中等學アデシール、クマシツクトハ古語、歴史
博物窮理ノ學、度量學ヲ教ユルモノニシテ即文、
學ノ初級レバツアカローノ試業ヲ受ク可キ學科一切
ヲ教ルニ在リ而シテ其教授ハ官學校ニハ國立

中學校セリ 邑立中學校コレ 於テ之

ヲ爲シ私學校ニハ凡俗又ハ僧徒ノ設ケタル學

校ニ於テ之ヲ爲スナリ蓋シ國中ノ人民ハ何人

ニ限ラス年齡二十五歳以上ニシテ文學ノ初級

ニ登リシ者又ハ特審パシユリ スヨリノ免許狀

ヲ所持スル者ハ此學校ヲ開クヲ得ク尤モ前

以テ其事ヲ本州ノ大學區監督ニ届出ツ可シ但

シ州長、大學區監督及ヒ檢事フロキル ハ其

開校ヲ差止ルヲ得可キノ權アリ若シ届出ノ後

一箇月ノ間ニ差止ノ令ナケレハ開校スルヲ得

可シ

國立中學校及ヒ邑立中學校ノ事

國立中學校ハ中等學ヲ教ユル所ノ官校ニシテ

直チニ政府ノ管轄ヲ受ケ且朝命ニ因リテ建造

スル所ナリ此學校ニハ校長ゾプロビ監學サシ

教師ゾプロ複讀教師パノト司計官等ア

リ就中校長ハ校内ノ總理及ヒ其指揮ヲ掌リ監

學ハ學問及ヒ教育ニ管スル諸事ヲ監督シ司計

官ハ出納計算ノ事ヲ司ルナリ

國立中學校ノ諸生徒ハ其學費ヲ自辨スルモノ

三

三

三

三

三

アリ或ハ之ヲ一國府即政一州又ハ一邑ヨリ給ス

ルモノアリ然レハ自辨ノ生徒ヲ除クノ外概シ

テ之ヲ「ブールシエ」ト云フ官費生徒ノ義ナリ

邑立中學校ンコレユナルコハ國立中學校ト異ナ

リ是レ國立中學校ハ其建造及ヒ補理等一切ノ

費用ヲ一國府即政ヨリ給シ州邑ハ唯其助ヲ爲ス

者ナリト雖ハ邑立中學校ハ此等ノ費用ヲ一邑

ヨリ給スルヲ以テナリ蓋シ邑立中學校ト雖ハ

亦一國府政ヨリノ補助ヲ仰クヲ得可ク而シテ

其教育ノ仕方ニ於テハ國立中學校ト異ナル所

ナシ

特設中等學ノ事

特設中等學

アンデンセル、ヌマシ、スルコハ千八百六十

五年第六月廿一日ノ法ヲ設ケタル以來特ニ

箇ノ教導法トナリテ其本旨ハ商工農ノ諸業ヲ

行ハントスル生徒ヲ教ユルニ在リ故ニ此教導

法ニテ教ユ可キ件々ヲ論示スレハ修身及ヒ法

教ノ學科、國語、國文、歴史、地理、實用算術、格物學、器

械學、化學、博物學、農工ノ術ニ博物學ヲ實驗スル

方法、圖學、商業算計術、掌簿術等ナリ

右學科修業濟ノ生徒ハ試業審司

其議員ハ文部
宰相ヨリ命ス

ル所ナリ原語ニ之ノ試業検査ヲ受ケ検査濟ノ

上ニテ學術免許狀ヲ得ルナリ

特設中等學ノ教師ヲ得ンカ爲メサヲ一又、上、口

ル州ノ内クルニ一ニ於テ特設中等學師範學

校ヲ造建シタリ

上等學博士局及ヒ上等學師範學

校ノ事

上等學

ンアシンセーヌニ博士局五箇アリ即チ神

教學

ジテ
ローロ

法律學、醫學、諸藝學、諸文學ノ五類ノ



學科ヲ教ル者ニシテ上等學博士局ノ存立ス
ル地ハ纔ニ數箇ノ都府ニ於ケルノミ而シテ此
博士局ハ大學區長ノ指揮ヲ受ケテ博士長一名
ト博士及ヒ博士補助數名トヨリ成ルモノナリ
而シテ博士及ヒ其補助ハ教授講義ヲ任トシ又
兼テバセリ一初級リサンセ一二級ドクトール
學士ノ級等ノ如ク博士局ヨリ許シ與フル所ノ
諸等ノ級ニ進マント欲スル生徒ノ試業ヲ爲ス
ノ任ヲ帶フ

又此上等學ニモ師範學校アリ巴里ニ於テ建造

スル所ニシテ諸藝學、諸文學ノ博士ト爲ル可キ
者ヲ教ユ

別種ノ學校

上ニ論シタル學校ノ外更ニ別種ノ學校アリ之
レ特立ノモノニシテ直チニ大學シユニ、左ルノ管
轄ヲ受ケサルモノトス今之ヲ記列スレハ即チ

大國學校

コレ、フランス

大博物館

ミュジウム、ナチス

大天文局

オプセルワトル、アル

經度局

ビュロ、デ、ロ

大學社

アカデミ

藏書館

ビブリア

數箇所ノ博物館

是ナリ

大國學校ハ人間缺ク可カラサル學科中ノ殊ニ
至要ナル學科卽チ文學、諸藝學、法律學、古今國語
等ノ教ユルニ在リ又大博物館ハ巴里ニ建造ス
ル所ニシテ其本旨ハ博物學ノ進步ヲ期望スル
ニ在リ而シテ此博物館ニテハ人身窮理學、解剖
學、礦物學、植物學、植物窮理學等ノ教授ノ爲メ
リ右大國學校及ヒ大博物館ノ教師ハ其受任直
チニ國帝ヨリ出テ博士局ノ如ク大學ノ等級ノ
授ケサル者トス

又星學ハ大天文局及ヒ經度局ニ於テ別設之ヲ

教エル所ナリ蓋シ緯度局ハ星學校ノ一種ニシ
テ星學及ヒ航海術ノ進歩ヲ助クル爲メ設クル
所ナリ

大學社トハ高名秀才ノ文學家、博識家、藝術家ヨ
リ成レル一社ノ名ナリ而シテ此社ハ分ク五局

ト爲ス第一佛語局

人員四十
名トス

第二諸學藝局、第三

文學局、第四修身及講政局、第五美術局是ナリ

右五局中ニ若シ缺員アルハ各々其局々ニ
於テ其代員ニ充ツ可キ人物ヲ撰登ス可シ但
シ一應之ヲ國帝ニ奏シ其許可ヲ受ク可シ

又數箇ノ大都府ニ於テハ大抵皆藏書局及ヒ博物館アリ是レ有用ノ學科及ヒ美術ノ知識ヲシテ普ク衆人ニ及ホサンカ爲メナリ而シテ博物館ハ宮内兼美術事務宰相ノ管掌スル所トス

諸宰相局所管ノ特立學校

諸宰相局一屬スル特立ノ學校ハ少年輩ヲシテ各一課ヲ修業シ官府ニ有用ナラシメンカ爲メ設クルニ在リ此等ノ學校ニハ陸軍宰相局所屬ノ學校ニサンシールノ學校、諸術學校、此學校ハ唯ニ砲手及ヒ坑手ヲ教ユルノミナラス常用地雷火、道路橋梁、烟草、傳信機ヲモ製造スルヲ教ユルナリ

三

多ツノ學校

砲手及ヒ坑手ヲ實地ニ涉リテ教ユル所也

ノウミルノ騎

兵學校及ヒ士官學校等アリ又海軍宰相局所屬

ノ學校ニブレストノ海軍學校、巴里ノ海軍造築

學校アリ會計事務宰相局ノ一部タル水路山林

局ニナシシーノ山林學校アリ工部宰相局ニ道

路橋梁學校、鑛山學校、職工藝術學校、動物醫學學校

耕作學校アリ又其他内國事務宰相ノ管掌ニ屬

スル所ノ學校ニ教盲學校及ヒ啞聾學校

佛國政典第三卷 終

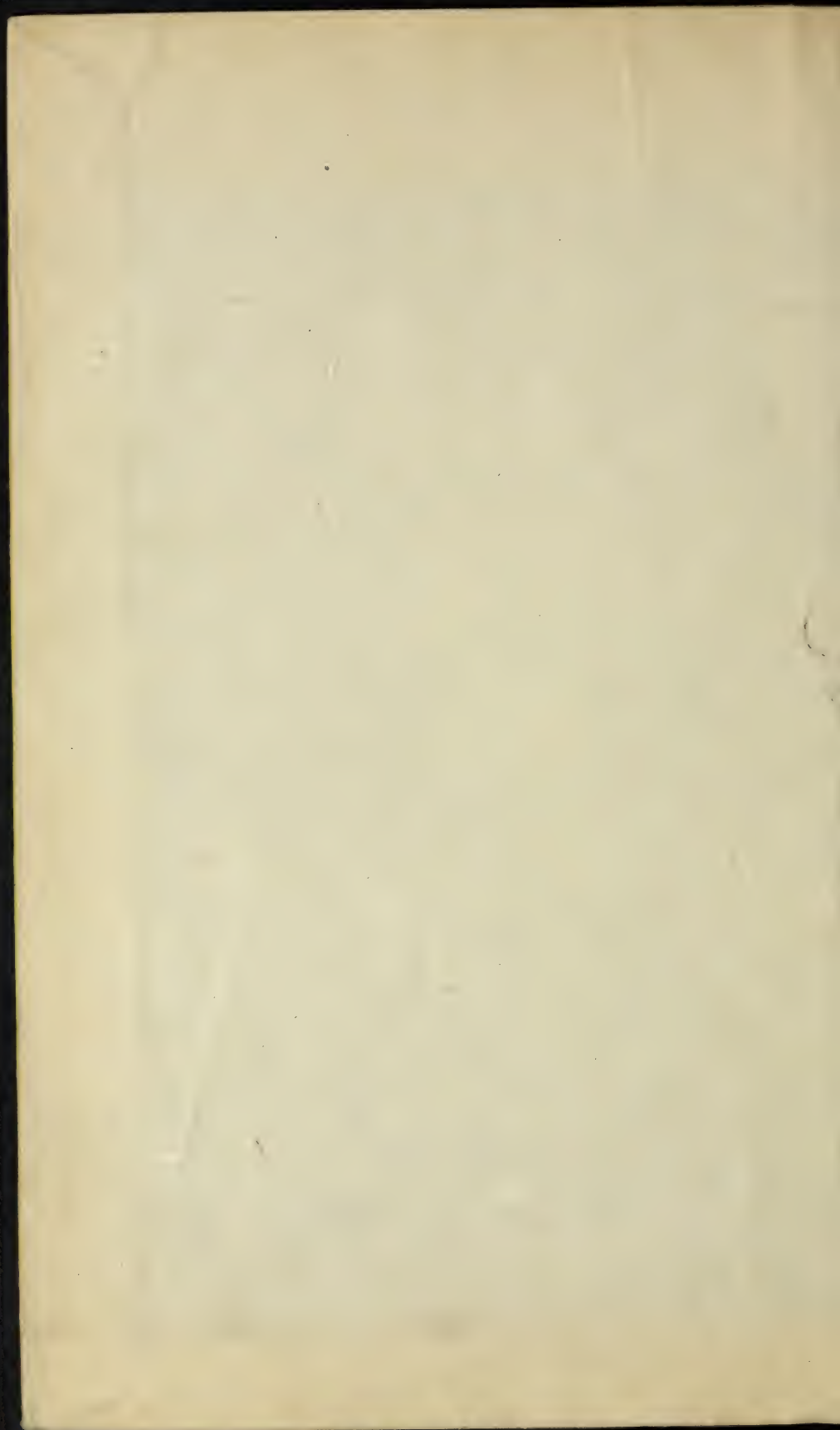
昭和26年

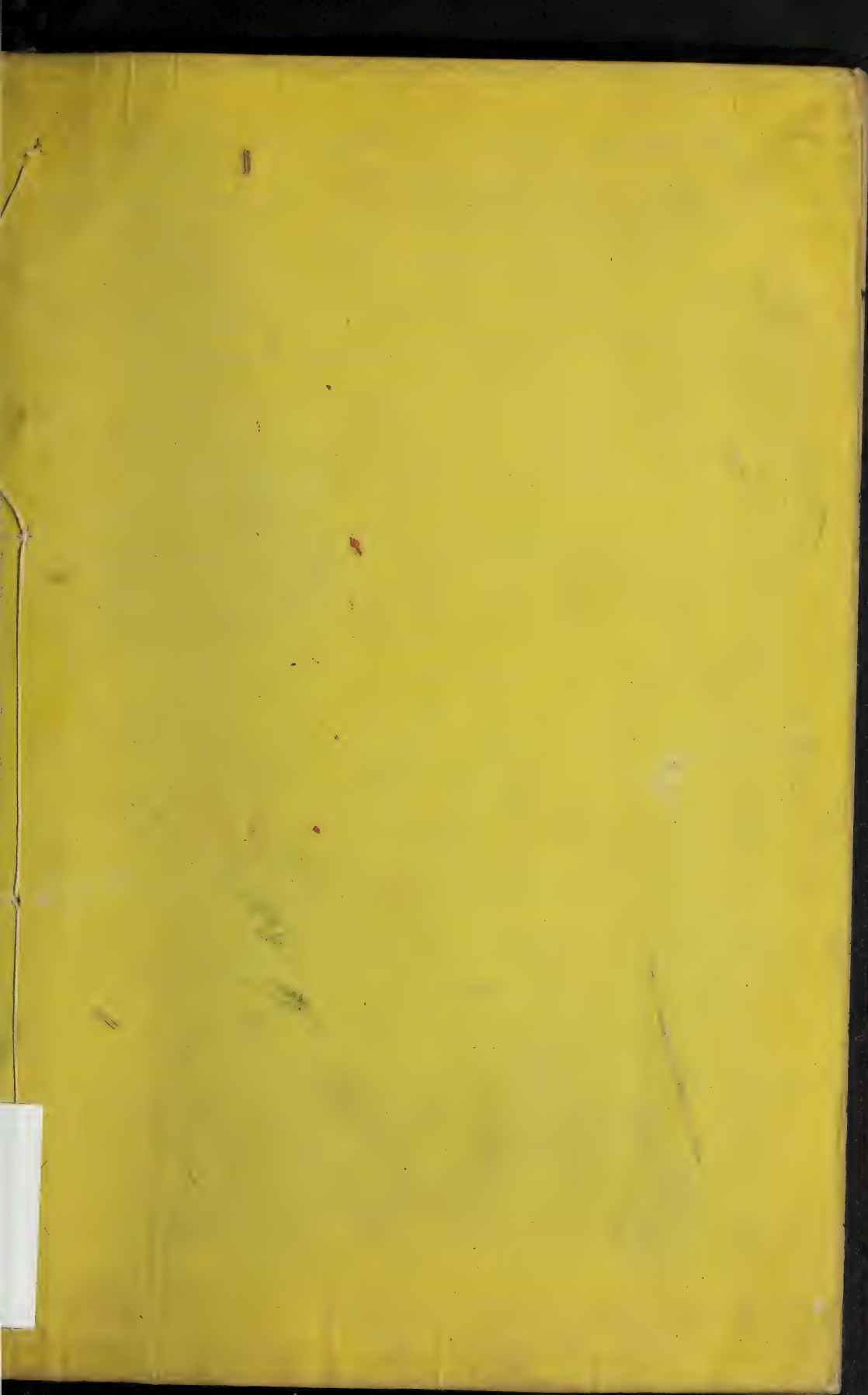
第

12106

11月27日

三十三

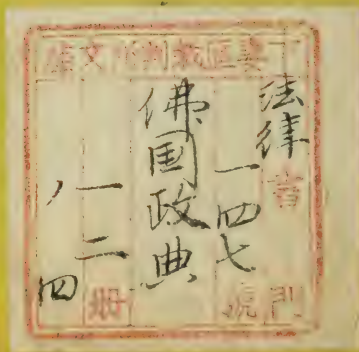




佛國政典

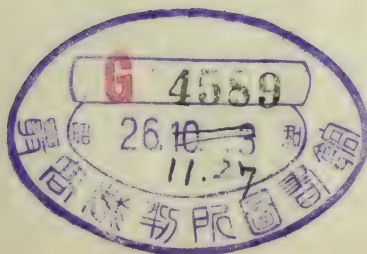
四

正
下和旧第初五拾号四
下洋旧第四十三号四





University of Illinois
Library at Urbana-
Champaign
IAS - Oak Street



最高裁判所圖書印

二戸裁
管内裁
區裁
判所

KJV
222
273163
1878
V-4

佛國政典第四卷

第四章 建築工業

第一款 總論

建築工業ノ釋義及ヒ其區別

抑、建築工業トリテボクトハ公共同資益ノ爲メ

ニ執行スル所ノ構造修覆補繕及ヒ諸物件ヲ官

所領ト爲ス等ノ諸業ヲ云フ所ニシテ斯ク諸

般ノ工業固トヨリ皆同種タルニ非ラス依テ之

ヲ區別スレハ第一平常工業道路橋梁及ヒ諸建
造物ニ屬スルモノ

第二陸軍及海軍工業第三混同工業

第一第二ノ工業ヲ混同

シタルモノニ在リトス而シテ是等ノ諸工業ハ其入

費ヲ一國一州又ハ一邑ヨリ出スモノアリ或ハ

コノ工業ノ執行ニ付キ官ヨリ讓渡ヲ受ケ官ニ

代リテ爲ス者ヨリ之ヲ出スアリトス今次ニ右

諸工業ノ種類ニ從テ之ヲ細說セントス

平常工業及ヒ建築ノ事

建築ノ工業

ポ、ン、エ、セ、

ハ一國又一州ニ屬スル道

路、建築補理ヨリ商賣ノ爲メ設造スル諸港ノ

建築補理、國內通船ノ爲メ、堀割及ヒ堤防ノ建

築補理、燈明臺ノ造立補理、水運ヲ良正一爲ス諸
工業、河堰波戸場ノ建築補理、鉄道ノ建築補理等
ニ至ルナリ而シテ此諸工業ハ建築工業者ゼアニ
シル、テ、ボン、エ、及ヒ其管下屬吏ノ司トル所ニシ
シヨールセーテ其執行ノ命令及ヒ許可ハ帝之ヲ參議院ニ謀
リタル上勅命ヲ以テ之ヲ爲ス可シ又右諸工業
ヲ執行スルニ官金ヲ以テスルハ其執行ノ前
ニ其金ヲ出ス可キノ當否ヲ議シ兩議院之ヲ可
トシ皇帝之ヲ許可シタル上法律ヲ定メテ之ヲ
執行フ可ク又是等諸工業ノ目論見書ハ建築者

之ヲ農商及工部宰相ニ出シ右宰相ノ許可ヲ歷
可シ

建築大會議

コンセルユ、ゼラール、ナル者アリ
デ、ボン、エ、シヨールセール

其人員ハ建築工業ノ大監督數人ヨリ成レルモ
ノニシテ其任ハ諸工業ノ趣向書、目論見書及
其他宰相ヨリ議問セラレタル業事一切ニ付キ
助言ヲ與ヘテ以テ宰相ヲ助クルニ在リ

建築工業ニ屬スル諸工ハ其施行ニ於テ二様ノ
別アリテ一ハ官一己ノ手限ニテ之ヲ爲サシム
ルモノアリ一ハ相當ノ價ヲ得テ工業ヲ引受ク

ル起工者ニ之ヲ任カスルモノアリ但シ引受人
ニ任カサントスル時ハ預シメ官ヨリ布告シテ
糶ヲ爲サシム可シ而シテ官ヨリ望ム所ノ藝術
ヲ知リ其他至當ノ權利ヲ具フル者ハ皆糶ニ參
加スルヲ得可シ又官一己ノ手限ニテ工業ヲ
爲ス時ト引受人ニ任カシタル時ト別ナク官
ニテ其工業ヲ監督指令スルノ權アリ

平常建物ノ事

平常建物ニ付テハ諸工ハ公同ノ用ヲ爲シテ兵
事ニ關涉セサル建物ノ造立修覆補理ニ屬シ其

指揮ハ各其受持ノ建造者ノ掌ル所ナリ又新ニ
建造ヲ爲シ又其修覆ヲ爲スノ目論見書ハ一ノ
議會ニ出シテ其許可ヲ受ク可シ此議會ヲ名ケ
テ平常建物營繕議會コンセーユ、デ、バ
チマン、シビルト云フ其
外寺院ニ管スル諸工ハ別ニ之ヲ指揮スル建造
者アリ其指揮ニ由テ之ヲ執行ス
平常建物ヲ造ルニ付テハ官ヨリ引受人ヲ選ミ
之レト價ヲ契約シテ施行セシムルアリ又ハ糶
ヲ以テ其價ヲ定メシムルヲアリ

陸軍工業ノ事

陸軍ニ屬スル工業ニ二種アリ一ハ築造士官ノ指揮ヲ受ケテ執行スルモノトシ一ハ砲兵士官ノ指揮ヲ受ケテ執行スルモノトス

築造士官ニ部屬スル工業トハ諸寨砦ノ修覆補理ヨリ兵ニ屬スル諸局諸建造物ノ造立修覆又ハ之ヲ所有ト爲ス事等ニ至ルマテノ工業ヲ云ヒ又砲兵ノ指揮ヲ受ク可キ工業トハ砲兵學校造兵局、鑄造局、鍛工局、小銃製造所、火藥局、雷管製造局ノ如キ諸局ノ造立修覆等ヲ云フ

海軍工業ノ事

海軍工業ハ船艦ノ製作修覆及ヒ其保持方ヨリ
諸港、船塢、波戸場及ヒ其他海軍ニ入用ナル建
造物ノ造立修覆補理等ニ至ルノ諸工業ニ在リ
就中船艦ノ製作修覆ハ海軍築造家一局ヲ爲ス
委任セラレテ管掌スル所トシ其他水部ニ屬ス
ル諸工業ハ之ヲ指揮スルヲ通常建築工業者ニ
在トス

混同工業ノ事

下章ニ於テ城營及ヒ國境近接ノ地ニ於ケル土
地ノ義勢ニ付キ說示スル所アラントス然ルニ

其義務タルヤ國家防禦ノ爲メノ資益ニ因レル
モノナリ故ニ斯ノ如キ場所ニ於テ共同資益ノ
爲メ建築工業ヲ執行スルハ其工業兵ニ部屬
セサルモノト雖モ文武二官吏ヨリ成レル別段
ノ掛リニテ其目論見ヲ立ツ可シ因テ此等ノ諸
工業ヲ名ツケテ混同工業ト云フ是レ此工業ハ
國內防禦ノ用ト多少平常ノ資益トヲ兼有スル
ヲ以テナリ
以上諸工業ノ大體ヲ論示シタルヲ以テ次ノ諸
款ニ於テ建築工業ノ施行ニ付キ人々ヲシテ導

守セシム可キ財産ニ付テノ義務即チ公ノ利益

又同上ニ付土地及ヒ其他ヲ穿論シ且此一章ニ

於テ兵事ニ關スル土地ノ義務、沼澤開拓及ヒ鑛

山開發ノ法ヲ併論セントス

第二款 公同利益ノ爲メノ沒收

一千八百四十四年
五月三日ノ法律

同釋義

夫レ官ニ於テ國家利益ノ爲メ建築工業ヲ爲サ
ントスルトモ官若シ民庶ヲシテ其所有物田地
家屋及ヒ其他諸物件ヲ官ニ納メシム可キ權利

ヲ有セザレハ之ヲ執行スルヲ能ハス官若シ此
權利アルヲナク民庶縱ニ故障ヲ爲ス如キニ至
ソテハ假令其工業ハ國家ノ資益トナリ最大要
ノ工事ニ歸スト雖モ亦タ其成功ヲ期スルヲ能
ハサル可シ因テ公同資益ノ爲メノノ没収ト云
ヘルヲアリ是レ官ヨリシテ相當ノ償ヲ出ス時
ハ民庶ノ故障ヲ制シ得テ其所有物ヲ領得シ工
業ヲ執行シ得可キ權利ヲ官ニ得セシムルノ法
ナリ蓋シ此權ヲ行フニ二大則アリ曰ク第一國
家ノ資用タル事柄ヲ明白ニ証示ス可キ事第二

所有物ノ償ヲ前以テ受取ル可キ事是ナリ此法
則ヲ遵用スルハ所有ノ權利ヲ保護スルノ意
ト國家資益ノ主意ト互ニ相合致シテ初メテ法
ノ法タル所ニ背カサル者ト云フ可シ

没収ノ定式

没収ヲ行フノ定式ニ四種ノ別アリ第一國家資
益ノ事ノ公告、第二没収ス可キ物件ノ告示、第三
没収ヲ爲スニ付キ其當否ノ審判、第四没収物ノ
償ヲ熟談ヲ以テ定メ又ハ別段ノ陪審ヲ設ケテ
定メシムル事、及ヒ取極ノ償ヲ渡ス事トニ在リ

次ニ其四種ノ目ヲ掲テ論示スルヲ左ノ如シ

第一 國家資益ノ事ノ公告

建築工業ノ執行ニ付キ民物ヲ官ニ納メシムル
ノ主意元ト國家資益ノ爲ニ出ツル事ヲ布告ス
ルハ勅命ヲ以テ之ヲ爲スナリ尤モ其勅命ハ行

政定規制立ノ式ニ倣ヒ參議院承ノ四字

第一部
第一章

諸官局決議書勅命ノ条下ニ出ツヲ載ス蓋シ工業執行ノ爲メ官

ヨリ出銀スルニ付テハ之ヲ議決シ之ヲ布告ス

ル爲メ別ニ法律ヲ立ツ可シ又此公告ヲ爲ス前

ニ官ヨリ其工業執行ノ資益アル可キト否トヲ

檢査シ何人ニ限ラス管係アル者ヨリ故障ヲ申
立ルヲ得可シ

第二

没収ス可キ物件ノ示告附細見

圖、并州長下知書ノ事

前件布告ノ後工業ノ執行ニ付キ没収ス可キ物
件ヲ定示ス可シ尤モ之ヲ爲スニハ先ツ築造家
或ハ諸工家ヲシテ各地區ノ細見圖ヲ造ラシム
可シ之ヲ名ケテプランパルセロールト云フ而
シテ此圖ハ八日間之ヲ邑廳ニ揭示ス依テ此舉
アル事ノ掲文及ヒ公告ヲ見聞キタル輩ハ此所

ニ來集シ其圖ヲ見ル事ヲ得可シ且此事ニ付キ
異存アリ申立ノ筋アル者ハ邑長ノ面前ニ出テ
其事柄ヲ陳述スルカ或ハ之ヲ書面ニ認メ差出
スヲ得可クシテ其異存申立ノ旨ヲ調書ニ記ス
可シ又此日數盡レハ一個ノ掛役郡廳所在ノ場
処ニ會シ尚八日ノ間工業執行ニ付キ入用品物
ヲ所持スル者ノ了簡ヲ聞クナリ斯ク掛役ノ行
フ可キ手數ヲ經終リタル上ニテ州長ノ下知書
ヲ下シテ沒収ス可キ入用品物ヲ示定ス可シ

第三 沒収ヲ爲スニ付キ其當否ノ審

判

右州長ノ下知書ヲ以テ入用品物ヲ示定シタル
上ハ其事ニ付テノ諸ノ書類ヲ州長ヨリ品物ヲ
所持スル者ノ本郡裁判所ノ檢事官ニ送達ス因
テ檢事官前ニ記シタル諸ノ法式規則通り濟ミ
タリト思フ時ハ品物沒收ノ事ヲ裁判所ニ申立
テ裁判所ヨリ之ヲ申渡スナリ故ニ郡裁判所ノ
裁決ハ沒收ス可キ品物所有ノ權ヲ官ニ歸サシ
ム然レモ其品物ハ官ヨリ其償ヲ得ル迄ハ以前
ノ所有者尚之ヲ占有スルヲ得可シ又此裁判所

ニ於テ爲シタル裁決ハ覆審院ニ上控スル事ノ
外決シテ之ヲ取消サント訴フ可カラサルモノ
トス若シ其裁決ニ服セスシテ之ヲ覆審院ニ上
控スルモ裁決書ノ送達ヲ得タル日ヨリ三日内
ニ限ル可シ

若シ右州長ノ下知ニテ没収ス可シト定リタル
不動産ヲ州長ノ下知アリテヨリ一箇年内ニ官
府ニ於テ没収スルノ手續ヲ爲サル時ハ其所
有者其旨ヲ郡裁判所へ訴出テ没収ノ言渡ヲ得
ント要求スルノ權アリ

第四 償ノ取極メ附没収ニ付テノ陪

審

何人ニ限ラス凡テ其所有物ヲ没収セラル、者
ハ皆各殊ノ償ヲ得可キ權利アリ譬ヘハ所有者
主^{即持}及ヒ借主ハ皆夫々ノ權利ヲ有スルカ故ニ
各々其償ヲ得可キカ如シ蓋シ其不動産ニ付キ
入額ヲ得可キノ權ヲ有スル者アル時ハ各自ニ
其償ヲ得可カラス唯一箇ノ償ヲ得所有者ト入
額ヲ得ル者トニテ各其權利ニ應シテ之ヲ分ツ
可シ蓋シ不動産ノ所有者ハ借主ノ名ヲ官ニ申

立ッ可ク若シ否ヲサレハ所有者其官ヨリ得タル償ノ中ニテ借主ノ得可キ權アル償金ヲ其借主ニ拂フ可シ

又時アリテ沒收物ノ償取定メ方ニ付キ所有者ト官府ト互ニ協議セサル時ハジユリードエキプロフリアシヨント云フ其掛專務ノ陪審ヲ召シテ之ヲ論決セシムルナリ其陪審トハ各年本州ノ州會ニ於テ仕立タル名簿ニ各郡ノ陪審人ト爲ル可キ人ノ名ヲ録シ置キ若シ之ヲ會スルヲ要スルヲアル片ハ上等裁判所ニ於テコノ名

簿中ヨリ陪審人十六名ト同助四名トヲ選擢シ
テ以テ之ニ充ツルナリ若シ或ハ本州内ニ上等
裁判所ナキハ司法區ノ首府ニアル所ノ郡裁
判所ニ於テ之ヲ撰擢ス可シ

右ニ示ス所ノ陪審ハ十二名以上ノ出席ナケレ
ハ之ヲ編成ス可カラス又其人負九名ニ滿サレ
ハ事ヲ議スルヲ得ス且其論議ハ郡裁判所ノ裁
判官之ヲ管理シ官府ト没収ヲ受クル者トヨリ
互ニ雙方ノ言分ヲ申述ヘタル上陪審右償ヲ定
ム可シ然ルハ其決定確的ノモノトナリ覆審

院ニ上控シテ再應ノ審判ヲ乞フニ非サレハ其
決定ヲ取消ス可カラス但シ其決定ニ服サス覆
審院ニ上控セントスルハ右決定ノ日ヨリ十
五日ヲ限トシテ上控ス可シ又己カ所持ノ不動
產ヲ前文ニ示ス如ク郡裁判所ノ裁決ニ因リ没
収セラル可キ者ハ若シ官府此裁決申渡ノ日ヨ
リ六箇月内ニ右陪審ヲ會集スルヲナキ時ハ自
カラ之ヲ會集セシムルヲ要求スルヲ得可シ

第三款 建築工業執行ノ爲メ土地及ヒ

其他ノ物件ヲ領得スル事

工業施行ノ爲メ入用物ヲ取用フ
ル事

官吏又ハ施行人ハ工業執行ノ爲メ必要ナル物
品アレハ何人ノ所持タル土地ニ限ラス之ヲ取
用フル事ヲ得可シ但シ此權利ヲ行フニハ右品
物取出ノ許可ヲ記シタル州長ノ下知書ヲ得ル
ニ非サレハ之ヲ爲スヲ許サス又地方ノ習例ニ
從ヒ園圃、草木園及ヒ其他壘壁又墻林ヲ爲セル
地ニ於テハ一般ニ入用品ヲ取出スヲ禁ス且
又假令ヒ此等ノ禁制外ニ於テ取出ス物品ト雖

モ其持主へ至當ノ償ヲ拂フ可シ蓋シ其償トハ
大抵皆土地ニ於ケル損害ヲ補フニ係ル但シ既
ニ以前ヨリ掘出シ來レル坑穴ヨリ入用品ヲ取
出ス時ハ其品ノ償ヲ以テ其償ヲ定メ又之ニ反
シテ未タ坑穴ヲ穿開セサル時ハ入用品取出ノ
爲メ生シタル土地ノ損害ニ應シテ其償ヲ定メ
更ニ品物ノ償ニ關スルナシトス而シテ右償
ノ定メ方ニ付キ爭ヲ生シタル時ハ參事院ノ審
判ニテ之ヲ決スルナリ

第四款 兵事ニ關スル土地ノ義務

立法ノ大旨

夫レ國ヲ防禦スルハ極メテ切要ノ事ナルカ故
ニ之レカ爲メ人々ノ物品所有ノ權利ヲ稍々限
制セサル可カラス蓋シ之ヲ限制スルノ方法ハ
下ニ説ク所ノ三大節ニ在リ卽チ第一城營或ハ
諸寨砦近接ノ地ニアル所ノ所有物ニ管スル土
地ノ義勢第二國境近傍ノ地ニアル所ノ所有物
ニ管スル土地ノ義勢第三彈藥貯藏所近傍ノ地
ニアル所有物ニ管スル土地ノ義勢是ナリ

第一 城營近接ノ地ニ於テ定メタル

土地ノ義務

千八百五十一年第七月十日ノ法及ヒ

千八百五十三年第八月十日ノ勅命

凡テ城營ヲ新ニ設ケ或ハ之ヲ廢スル事ハ律法

ニ非サレハ之ヲ爲ス可カラス千八百五十一年

第七月十日ノ律法ニ於テ其城營ノ位ヲ分チ以

テ其近接ノ地ニ在ル所ノ所有物ニ管スル土地

ノ義務ノ限界ヲ取極メタリ因テ城營周圍ノ地

ヲ分テ三帶ト爲シ其第一帶ノ部ニ屬スル地ハ

其廣サ二百五十メートルニシテ其部内ニハ總

テ建造ヲ爲ス可カラス又凡テ生牆及ヒ列林ト

成レル草木類ハ一切之ヲ植ル事ヲ禁止ス第二
帶ノ部ニ屬スル地ハ其廣サ四百八十七メー
ルニシテ其部中第一等ノ城營ニ接スル地ニ於
テハ石又ハ石灰ヲ用フル諸建造物ヲ爲スヲ禁
シ唯兵部官ヨリ一應ノ沙汰アレハ其指令ニ應
シテ何時ニテモ取拂フ事ヲ兼知シタル上ニテ
木又ハ泥ヲ用フル築造ヲ爲ス事ヲ聽ルスナリ
又第二等ノ城營及ヒ陣營ニ接スル地ニ於テハ
第二帶ノ部内ニ諸様ノ建造物ヲ爲シ得可ク唯
有事ノ日ハ之ヲ取拂フ可シ第三帶ノ部ニ屬ス

ル地ハ城營ニ付テハ其廣サ九百七十四ノ一ト
ルトシ陣營ニ付テハ五百八十四ノ一トルトス
而シテ此部内ニ於テモ亦タ兵部官ノ許可ヲ受
ケサレハ道路ヲ造リ土地ヲ高フシ坑ヲ穿チ木
石ヲ積重ヌル等ノ事ハ一切之ヲ爲ス可カラサ
ルナリ

右諸般ノ規則ハ國民タル者ノ守ル可キ義務タ
リ故ニ若シ此諸規則ヲ遵守セズ之ヲ犯ス者ハ
參事院之ヲ審判シ罰金ヲ申付ケ諸工業ハ一切
之ヲ取毀タシム可シ又諸城寨ノ地ハ一切之ヲ

賣ル可カラズ又人民ヲシテ之ヲ占有セシム可
カラズ且諸建造物ヲ爲ス可カラサルハ勿論ニ
シテ通行ノ爲ノ胸壁ニ傍フテ設ケタル軍道モ
亦タ之レト同様ナリトス

第二 國境ニ接スル地ニ於テ定メタ

ル土地ノ義務

第十八百五十三
年八月十六日

勅命

夫レ律法ニ於テ畫定シタル海岸及ヒ隣國接境
ノ地ヲ國境帶トシテ之ヲ管轄スルニ云ヒ其部内ニ兵部
官ヨリ別段之ヲ監督視察スルナリ且此部内ニ

於テ前ニ説示シタル文武二官吏ヨリ成レル別
段ノ掛リ官員ヨリノ許可ヲ得サレハ工事ヲ爲
スヲ禁シ殊ニ其許可アルニ非サレハ土地ノ開
墾ヲ爲ス事ヨリ堀割等ノ水利ニ管スル諸工ニ
至ル迄一切其執行ヲ禁止ス

第三 彈藥貯藏所ニ接スル地ニ於テ

定メタル土地ノ義務

千八百五十四年

六月廿六日ノ法律

海陸軍ニ屬スル所ノ彈藥庫ヲ離ル、一二十五
メートル以内ノ地ニ於テハ圍繞ノ牆ノ外一切

ノ建造物ヲ爲スヲ得ス又同距離内ニ於テハ瓦
斯ヲ導ク管及ヒ乾燥木ノ墻類ヲ設立ス可カラ
ス又材木及ヒ諸ノ可燃物ヲ置ク事喬木ト成ル
可キ植物ヲ植ル事等皆之ヲ禁ス其他火焚所ヲ
設ケタル家屋製造所等ハ五十メートル以内ノ
地ニ於テ一切之ヲ作ル事ヲ禁ス

第五款

沼澤開拓ノ事

千八百〇七年第
九月十六日ノ法

沼澤開拓ノ諸法

沼澤開拓ノ工事ハ公同ノ利用タル處置ナリト
ス其故何ントナレハ沼澤ハ耕耘ス可キ土田ヲ

侵奪シ又其穢臭ノ氣蒸騰散布スルニ方リテ近
界人民ノ爲メ健全ヲ傷害スルノ原因トナレハ
ナリ故ニ其開拓ノ利益ノ著大ナルヲ判然タリ
ト雖モ若シ沼地ヲ有スル者自己ノ力ニテ其工
事ヲ企テ起スヲ得サル時ハ政府自カラ其工事
ヲ執行シ又ハ其許可ヲ得テ執行セント請フ者
ニ爲サシメ以テ其開拓ノ世話ヲ爲ス可シ

沼澤開拓ノ免許ノ事

沼澤ノ地其所有者一人ニ屬シタル時或ハ所有
者數人ヨリ政府下令ノ期日及ヒ諸則ヲ奉シテ

之ヲ開拓セント協議シ其許可ヲ請フ事アレハ
其所有者ニ免許ヲ與ヘサル可カラス若シ然ラ
サル時ハ所有者ト否トニ關セス其申立ル所最
モ利益多カル可キ者ニ右開拓ノ免許ヲ與フ可
シ而シテ其免許ハ通常參議院ニ於テ下シタル
勅命ヲ以テス

免許ヲ得タル者ニ屬スル利得ノ
事

免許ヲ得タル者ハ其工業及ヒ入費ノ償トシテ
其工事ヨリ生スル増價ノ中

管ヘハ不毛ノ地ヲ
開墾スルニ從前ノ

地代ヲ原價トシ開墾後ノ地代之ニ
加ハル者ヲ増價トス以下皆同シ
幾分カヲ得

可シ尤モ其増價ヲ所有者ト任許者
免許ヲ得
タル者ト

雙方ノ間ニ分配スル割合ハ豫メ免許ノ勅書中

ニ之ヲ定ム可シ又之ヲ定ムルニハ工業執行ノ

前ニ先ツ免許狀中ニ掲ケタル土地ノ評價ヲ爲

サシメ工業落成ノ上尙ホ第二回ノ評價ヲ爲ス

ナリ故ニ工業前固有ノ地價ト工業後ノ地價ト

ノ差ヲ以テ増價ト定メ之ヲ所有者ト任許者ト

雙方ノ間ニ分配スルナリ蓋シ右工業ノ執行ニ

付キ任許者若干ノ費用ヲ出シタレハ所有者其

償トシテ任許者へ金高又ハ所有ノ土地ノ一部
ヲ渡シ或ハ任許者ノ爲メ四分_{キ百ニ付}ノ年金ヲ
設クル時ハ補償ノ責ヲ免ル、ヲ得可シ又其工
業政府ノ執行ニ係ル片ハ其所得ト爲ス増價ノ
一部ヲ定ルニ付キ唯其費シタル所ヲ償フヲ以
テ足レリトシ決シテ政府之レカ爲メ利潤_{餘ヲ}
得ルヲナカル可シ

同前開拓ニ付テノ争ヲ決スル別
格ノ裁判所

凡テ同上工業ノ執行中ニ生スル諸詞訟ハ其裁

判專務ノ掛リ官員アリテ之ヲ審判スルナリ尤
モ其掛ノ人員ハ帝ノ親任ニシテ其數七名トス
又其官員ハ唯ニ審判ヲ掌トルノミニ非ス官右
ノ工事ニ於テ看過ス可カラサル處置ニ臨ミ其
謀議ヲ爲ス可シ

第六款 鑛山開發ノ事

千八百十年四月二十一日ノ法

及ヒ千八百六十六年五月九日ノ法

事柄ノ總論

凡テ地上又ハ地下ニ存在スル所ノ諸金屬及變
石ハ之レヲ括目シテ鑛山金土及石坑ノ名ヲ付

右至寶ノ金屬ヲ採収スルニ於テ其方法ヲ良善
ナラシメンカ爲メ之ヲ規定シ又此採収ニ付キ
公ノ安寧ヲ害セサラシメンカ爲メ之ヲ監裁ス
ルノ二事ハ卽チ鑛山開發法ノ二大旨タリ

鑛山開發ノ事務ヲ取扱フ局ノ事

鑛山ニ管スル事務ハ工部宰相ノ管裁スル所ニ

シテ其他鑛山掛議會

卽チ鑛山局

諸等ノ鑛山家及ヒ

其附屬下役タル鑛山番吏ノ諸官吏アリテ之ヲ

分掌ス又巴里ニ於テハ鑛山學校アリテ鑛山家

ヲ教ヘ又サンテチアンヌニ於テモ一學校アリ
鑛山番吏、同開發長、熔鑛局長ヲ教ユ又アレーニ
於テモ一種ノ學校アリ其學校ハ鑛山學家ノ缺
ク可カラサル學科ヲ世ニ弘メンカ爲メ置カレ
タルナリ

諸鑛山及ヒ其義解

律法上ニテ鑛山物ト看做スル物ハ金、銀、白金、水
銀、鉛、鋳、銅、錫、亞鉛、カラミン、ビスミット、コバルト、
アルセニツク、砒石マンガン、アンチモニー、プロン
バシーヌ、及ヒ其他ノ金屬物、硫黃、石炭、埋炭、明礬、

ビチム金屬質酸化物ノ類ニシテ其他山鹽モ亦
此中ニ算入シ山鹽坑開發ハ其方鑛山開發ノ方
ニ等シキモノトス

鑛山穿鑿ノ仕方

諸鑛山ノ穿鑿ヲ爲シ且其業ニ缺ク可カラサル
測量穿透ヲ爲スニハ其事ヲ施ス可キ地ヲ有ス
ル者ノ承諾ヲ得サル可カラス若シ或ハ其者納
得セルホハ官ニ申立テ其允許ヲ受ケサル可カ
ラス蓋シ官ニテ允許スル時ト雖モ先ツ所有者
ノ申述ヲ聞キタル上ニテ右穿鑿ノ爲メノ償ヲ

出シタル上ニ非サレハ官許ヲ與ヘサル者トス
又凡テ圍込地内、庭園内ニ於テハ所有者ノ承諾
ナケレハ決シテ穿鑿ヲ許サス又人家或ハ塀壁
ニ近キ地所ニテ百メートル以内ニ於テハ亦之
ニ均トス

鑛山開發ノ免許、其願方及免許ノ
式

鑛山開發ノ事ハ帝之ヲ參議院ニ議シタル上ニ
テ其勅許ヲ與フルニ非サレハ之ヲ爲スヲ許サ
ス因テ其免許ヲ得ント欲スル者ハ其願書ヲ鑛

山所在ノ地ノ州長ニ差出ス可シ然ルハ其願
立ノ趣ヲ公告シ若シ他人ニ競テ其免許ヲ請フ
者アルカ但シハ其地所ノ持主ヨリ異論ノ申立
ナキヤ否ヲ分明ナラシム可シ

右公告ノ期限ハ四箇月トス故ニ其期日滿チタ
ル後一月ニ至リ州長ヨリ其書類ヲ工部宰相ニ
送呈シ終ニ勅命ヲ以テ確定ス可シ蓋シ勅命ヲ
以テ免許ヲ賜フノ日ニ至ル迄ハ右地所ノ持主
ヨリ異論ノ申立又ハ他人ヨリ競テ右開發ノ許
可ヲ得ントスル願立アレハ之ヲ參議院ヘ申立

シルヲ得可シ尤モ其許可ヲ得可キ人ヲ定ムル
ハ政府ノ意ニ適スル所ニ從テ全ク自在タリ因
テ願人ノ中最モ開發ノ功ヲ奏スルヲノ慥カナ
ル見込アル者ヘ右免許ヲ與フ可シ

免許ノ効及ヒ任許者ノ義務

凡テ右免許ハ假令ヒ其地所ノ持主ニ與フル時
ト雖凡地所ノ免許トハ全ク相異ナルモノニテ
地中ニ在ル物ノミノ免許ニ係ルナリ其證ハ鑛
山ト地所トノ二物一人ノ有ニ屬スル時ト雖モ
其所有者鑛山ノミヲ書入質ト爲スヲ承諾シ其

地ニハ之ヲ及ホサス又地所ノミヲ書入質ト爲
シ其鑛山ニハ之ヲ及ホサルヲ得ルヲ以テ知ル
可シ若シ又鑛山ノ免許ヲ得タル者其地所ヲ有
セサルキハ免許狀中ニ掲ケテ定メタル所ノ償
ヲ與ヘサル可カラス且又任許者若シ其工事ノ
爲メ地所ノ持主ヘ損失ヲ掛クル時ハ其持主ヘ
其地所ヨリ生スル所ノ實利ノ二倍ノ償ヲ拂フ
可ク又政府ヘ二様ノ償ヲ納ム可シ其一ハ定式
ノ償ニシテ方「キロメートル」ニ付十「フラン」トシ
又其一ハ鑛物ノ出高二應シテ何程ト定マレル

割合ノ償トス

又鑛山ハ政府ノ許可ヲ得タル上ニ非サレハ任
許者之ヲ分テ各自ニ之ヲ賣却スルヲ許ルサス
又政府ノ許可ヲ經スシテ任許者勝手ニ之ヲ
合スルヲ許サス而シテ鑛山開發ノ工事ハ鑛山
局鑛山家及ヒ其局ノ附屬下吏ノ取締リヲ受ク
可キヲ通法トス

同上免許引上ノ事

右開發ノ免許狀ハ時アリテ時ニ定メタル箇條
アレハ之ヲ引上ケ取消ト爲スヲアリ是レ殊ニ

世ノ安全又ハ消費スル者ノ需用ニ妨害ヲ爲ス
如キノ時ニ於テ其工事ヲ差止ムルノ場合ナリ
トス而シテ其言渡ヲ爲スハ工部宰相ノ任ニシ
テ又其言渡ニ服セス上控セントスル時ハ之ヲ
參議院ヘ訴出ス可シ斯ク工部宰相ノ言渡ニ因
リテ全ク免許取上トナリタル上ハ右鑛山ヲ糶
賣ト爲ス可シ

金土及其義解

夫レ金土ノ名ヲ冒スモノハ砂鉄、燃土

硫化鐵ニ
製ス可キ

及ヒ明礬質アル土類、泥炭等ナリトス

金土開發ノ規則

千八百六十六年
第五月九日ノ法

右開發ノ工事ヲ地上ニ於テ執行スルニハ其事
ヲ州長ヘ其地所ノ持主ヨリ届出ツ可シ然ルハ
州長ヨリ其届書ヲ受取リタル證書ヲ渡シタル
上ニテ其工事ニ取掛ルヲ得可シ若シ其工事地
下ノ開發ニ係ル時ハ其手數一層多キモノトシ
テ州長ノ免許狀ヲ受サル可カラス千八百十年
ノ法律ノ文ニ掲ケタル所ニ依ルハ金土坑ノ持
主ハ近邊ニ在ル所ノ熔鑛局長ノ需用ニ應スル

ニ足ル可キ量ヲ掘出ス可ク若シ其需用ニ足ラ
スシテ差支アル節ハ其坑ノ持主ヘ償ヲ與ヘ熔
鑛局長之レニ代リテ掘出スルヲ得可キ事ト定
リシカ其後千八百六十六年第五月九日ノ法ニ
テ其規則ヲ廢止シタリ然レトモ此ヨリ前ニ官
許ヲ得テ設ケタル熔鑛局ニハ千八百七十六年
第一月一日迄ハ従前ノ通り心得可キ旨ヲ定ム

石坑及ヒ其取締方

石坑トハ家根瓦、御影石、切石、大理石、石灰石、肥シ
土、又軟土、及ヒ其他此類ノ石土ヲ總稱スルニ在

リ而シテ其掘出ノ工事ハ地上ニ於テ爲スモノ
ト地下ニ於ケルモノトノ二類ニアリテ其工事
ハ地所ノ持主カ否サレハ地主承諾ノ他外人之
ニ從事スルニ非サレハ爲ス可カラス又其工事
地上ニ於テ爲スモノハ各地方巡警ノ取締ヲ受
ク可ク地下ニ於ケルモノハ鑛山局ノ取締ヲ受
ク可シ其他ノ規則ハ各地方ニ於テ定マリタル
法度ニ據ルモノトス

第五章 道路

道路ノ字義及其區別

凡ソ道路トハ往來ヲ爲ス爲ノノ諸道ヲ總稱ス
ルノ語ニシテ目今之ヲ大道小道ノ二大種ニ分
ツ就中大道ハ國道州道鎮道通船浮筏ノ河川及
ヒ巴里府内ノ諸街ヲ云ヒ小道ハ郊道又村落ノ
道及ヒ巴里ヲ除ク外諸府ノ街路ヲ云フナリ而
シテ小道ハ再ヒ分レテ郊道市道ノ二類トナリ
市道ハ諸府諸村落ノ諸道路ヲ總稱スルノ名ニ
餘ル

二大種ノ道路ハ其區別ニ從テ官ヨリ設置カ
タル規則モ亦各自ニ異ナリ因テ若シ此諸則

ヲ犯ス事アルハ其犯由ニ因リテ大道或ハ小
道ノ犯則^リ掟破トテ其名ヲ異ニシ大道ノ掟ヲ破
ル罪ハ參事院之ヲ審判シ小道ノ掟ヲ犯ス罪ハ
警察違背ノ罪ニ當テ違警罪裁判役タル治安裁
判役之ヲ裁判スルナリ又右道路ハ其種類如何
ナルヲ問ハス道路ノ用ヲ爲スノ間、賣買侵取
等ノ事ヲ爲ス可カラス故ニ道路ニ屬スル地面
ハ何人ト雖^モ定期間占有ノ權ニ因リ又ハ其他
ノ方法ニ因リ之ヲ已レノ所有^ノ爲ス可カラサ
ルナリ

第一款 大道

國道

國道トハ巴里ヨリ外國又ハ本國ノ大港

大港トハ海軍

所管ノ五ニ至ルノ諸道、巴里ヨリ國內諸大府ニ

至ルノ諸道及ヒ諸大府中ニ連亘スル諸道ニ云

フナリ而シテ其補理ノ費ハ政府ノ入用中ニ入

レ政府ヨリ之ニ給ス可シ又國道ノ新開發及ヒ

之ヲ國道ノ列ニ加フル等ハ勅命ヲ以テ令ス可

シ又從前其列ニ在リシモノヲ之ヨリ省ク等ノ

事モ同様タル可シ但シ此時ハ其地所ヲ賣買ス

ル一官ノ隨意タル可シト雖其地所ニ接スル
土地ヲ有スル者其地所ヲ買受ント欲セハ之ヲ
得ルノ特權アリテ其者望ナキ時ニ非サレハ他
人ニ賣却ス可カラサルモノトス

州道

州道トハ最寄々々ノ諸州ヨリ其補理等ノ事ヲ
爲スモノ、稱呼ナリ

右道路ノ品位ヲ定メ又其方向ヲ定ムル事ハ他
州トノ管係ナキモノハ一州ノ州會ニ於テ取扱
フ可シ且又其道路ノ建築及ヒ修覆手入等ノ目

論見及其趣向モ亦州會ノ與リ知ル所トス若シ
又州道ノ數州ニ關涉スルモノタルキハ其品位
ヲ定ムルハ勅命ニ因ル可シ又時アリテ其州道
ノ品位ヲ替ヘ其列ヨリ省ク事ハ曾テ其品位ヲ
定メタル官ノ權ニ在リトス

巴里府内ノ諸街

巴里府内ノ諸路ハ其關係甚タ重大ナルノ故ヲ
以テ大道ノ列ニ配位シ大道ノ法ニ因テ之ヲ取
扱フナリ而シテ其事勢ニ關係シタル諸事ハ凡
テセーヌ州長及ヒ巡警總督ノ分掌スル所トス

鑛道

鑛道ハ官ヨリ建築シタルモノト許可ヲ受タル
會社ヨリ建築シタルモノトニ在リ何レモ大道
ノ列ニ在リトス尤モ官ヨリノ建築ニ屬スルモ
ノアリト雖モ多分ハ官直ニ之ニ從事スルナ
ク大抵官ヨリ允許ヲ下シ之ヲ執行スル會社ニ
建築セシムルニ在リテ時アリテハ官ヨリ其費
用ノ一部ヲ出スニアリ而シテ我佛國中ニ建築
シタル鑛道ノ總計ハ千八百六十七年第十二月
三十一日ノ計算ニ因レハ一萬五千七百五十キ

ロメートルニシテ其中ニ最モ大ナルモノハ六
大社ニ其工事ヲ許シタルナリ今其社ヲ陳列ス
レハ西社、東社、北社、オルレアン社、リオン社、地中海
社及南社ノ六社トス

地方資益ノ爲メノ鍊道

千八百六十五年
第七月十二日ノ法

凡テ大鍊道ハ人口許多ナル地ヲ連絡スト雖モ
僻地ニシテ往來稀ナル地ニハ然ラズ因テ各地
方ノ便利ヲ濟ス爲メニ地方資用ノ鍊道ヲ設
タルモノナリ而シテ其建築ハ一州及ヒ一邑ヨ

リ其費用ヲ出スモノアリ或ハ州邑ノ資助ヲ受
ケテ任許者ヨリ之ヲ爲スモノアリトス

右道路關係ノ邑州ヨリ弁ス可キ入費ノ三分一
カ若クハ半金迄ノ資助金ハ政府ノ會計局ヨリ
出スヲ得可シ

右ニ示ス所ノ各地方資益ノ爲メノ鑛道ハ其目
論見ヲ州會ニ於テ決定シタル上其公益タルノ
廉ヲ申立テ其執行ヲ許ルスハ帝之ヲ參議院ニ
議シ其與管ニテ成レル勅許ヲ以テス

地方利益ノ爲メノ鑛道モ亦々大道ノ列ニ在リ

テ目今既ニ許可ヲ得テ建築シタルモノ其里程
六百五十一キロメートルニ及ヒタリ蓋シ此類
ノ鑛道アル諸州ハブル
ジュラ オーラン ライン ルーロール サルト
アルダンヌノ八州トス

通船河、浮筏河

船ヲ泛ム可キ河川ヲ目シテ通船河ト云ヒ筏類
ヲ泛ム可キ河川ヲ浮筏河ト云フ其河川ノ品位
ハ行政官之ヲ定ム

此河流ニ於テ魚獵ヲ爲スノ權利ハ官ニ屬ス然

卷五
其河川ニ接スル土地ノ所有者魚獵ノ權利ヲ有
スル者トス

右二種ノ河流ニ臨ミ製造所ヲ設クルノ許可ハ
一般ニ勅裁ヲ乞フ可キ通則ナリ而シテ州長モ
亦之ニ與管スルノ權アリト雖モ州長ハ唯一時
假設ニ屬スルモノカ若シ永續ノモノナレハ著
シク水利ノ法ヲ害セサル者ノ造立ヲ許ルスノ
ミ且右許可ヲ得タル上ニテ取設タル製造所ト
雖モ若シ其建方ニ於テ通船ノ爲メ害アル所ハ

官其償ヲ與ヘスシテ之ヲ毀メシムルノ權アリ
蓋シ官ニ此權アル所以ハ右河川ヲ一國公同ノ
有ト定ムルノ理ニ基クニ據リテ其河川ハ何人
タリトモ侵取ス可カラス且何人ノ所有タルニ
非ラサルニ因ル

右ノ外通船及ヒ浮筏ノ二種ニ屬セサル河流ニ
於テ前件ノ免許ヲ與フルハ州長ノ權ニアリ且
一度其許可ヲ與フル上ハ償ヲ與ヘスシテ建物
ヲ毀タシムルヲ得ス

第二欸 小道

郊道

五月二十一日ノ法律

郊道トハ諸邑ニ通スル公道又一邑内ノ諸處ニ
通スル公道ニシテ農業耕作ノ爲メニ最モ格
別ノ利益アル者ナルヲ以テ多年來政府之ヲ改
正スル事ニ配意アリシカ千八百六十八年民選
議院ノ會合ニ出テタル律法ニテ久來希望ノ目
途ヲ速成スル策ヲ建テタリ其法ハ郊道改正ノ
費用金見積ノ定額ノ上ニ尚ホ十箇年ニ渡ス可
キ扶助金十億フランクヲ増加シ其他新ニ郊道
修費元金ヲ設ケ十年内ニ二十億フランクノ高

ヲ諸邑へ貸シ渡シ得可シ尤ヒ其金子ハ四分ノ
利息ヲ加ヘテ三十年ニ返却ス可シ

右郊道ニ三種ノ別アリ第一、大往來即チ習俗ニ
因リテ大郊道ト唱フル者是ナリ此第一種ニ屬
スル諸道ハ許多ノ邑又ハ許多ノ縣ニ連貫シタ
ル道ナリ第二、衆盜ノ爲メノ諸道即チ中郊道ト
唱フル者是ナリ此類ノ道路ハ許多ノ邑ノミニ
管係シタル道路ナリ第三、尋常郊道即チ小郊道
是ナリ此道路ハ一邑ノミニ屬スルヒノナリ次
ニ右三種ノ道路ヲ列示スル事左ノ如シ

其一 大往來即チ大郊道

大往來ニ屬スル道路ノ品位及ヒ其方向ハ州會
ニ於テ之ヲ定メ其建築及ヒ補理ハ之ニ關スル
最寄々々ノ諸邑ノ任トス又其建築及ヒ補理ニ
付テハ一州ノ元金ヨリ助合アル可シ又右道路
ノ爲メ一州ニ於テ元金ト定メタル金高ヲ本州
内諸邑ノ大郊道ニ分配スルハ州會ノ任ニアリ
トス

其二 衆益ノ道路即チ中郊道

此道路ノ品位及ヒ方向ヲ定ムルモ亦州會ノ任

ニアリ且州會ハ邑會及ヒ郡會ノ助言ヲ聞キテ
其開發及ヒ補理ニ與管ス可キ諸邑ヲ指定ム可
キ任アリトス

右道路ノ爲メ一州ノ元金中ニテ別段金高ヲ備
ヘ置ク可シ尤其助金分配ノ方ハ州會ノ掌トル
所ナリ

其三 尋常郊道即チ小郊道

尋常郊道ノ品位ハ州長之ヲ定メ其補理ハ一邑
限リニテ之ヲ爲ス可シ又品位ノ定マラサル小
路ハ唯田野ノ小路ナリト爲シ全ク邑ノ公領外

タルニ由リ他ノ諸公道ニ於ケル諸規則ニ依準
セヌ賣買等ヲ爲スヲ得或ハ定期間占有シテ終
ニ之ヲ私有ト爲スヲ得可シ

郊道開發附開發ノ爲メノ沒收

前ニ記列スル諸郊道ヲ新ニ開發シ又ハ在來ノ
郊道ノ向ヲ易ントスル時ハ已ムヲ得スシテ公
同資益ノ爲メノ沒收ヲ行フ可シ尤モ然ルキハ
其主意ヲ布告シ又其償ハ別段ノ陪審司四人ヨ
リ成レ
昔ル郡裁判所ノ裁判役又ハ治安裁判役ノ指揮ヲ
受ケテ之ヲ定メ其他一切公同資益ノ爲メノ沒

収ニ付テノ常則ヲ踏ミ行フ可シ

郊道ノ修覆

各邑ハ其平常ノ收納高中ヨリ郊道修覆ノ入費

ヲ出ス可シ若シ又其平常ノ收納高ニテ不足ナ

ル節ハ直税金四種ノ割増

第一卷州會ノ條下ヲ
ニ於テ參考ス可シヲ

賦スルカ又ハ工役ヲ觸出シ得可シ尤モ之ヲ決

スルハ邑會ノ權ニアルカ故ニ邑會ハ右兩條ノ

中一事カ又ハ兩據トモニ觸出スルヲ得可シ

右工役トハ一邑内ニ住スル者及ヒ其邑内ニ家

屋等所持ノ者定數ノ日限間工役ニ就ク可キ賦

役ヲ云フ故ニ邑ノ直税簿上ニ載リタル邑内ノ
住民家族ノ主及ヒ邑内ニ家屋ヲ所持スル者ハ
悉皆左ノ規定通り必ス工役ニ就カサル可カラ
ス

第一 右主人タル者ハ勿論本邑内住

居ノ家族并奉公人ニ至ル迄年

齡十八歳以上六十歳以下ノ男

子ニシテ無病ナル者ハ悉皆工

役ヲ免カレサル可シ

第二 荷車、乗車一輛ニ付キ若干家内

用或ハ本邑内ノ家屋ノ用ニ供
スル乘行ノ爲メノ獸類又ハ運
送ノ爲メノ獸類一疋ニ付キ若
干ノ工役ヲ賦ス可シ

右工役ハ通例三日ト定メ其日數ニ過ク可カラ
ノ若シ自カラ其役ニ當リ之ヲ勤ムルヲ欲セサ
ル者ハ代料ヲ納メテ之ヲ償フヲ得可シ蓋シ其
納方ハ毎年本州ノ州會ニ於テ其仕事ノ種類ニ
因リ何程ノ工料ト定ムルヲ以テ其役ニ當ル者
ハ己ニ賦役セラレタル工事ノ日數ニ准シ相當

ノ金高ヲ納ノテ工役ヲ免ルヲ得可シ

市道即チ都府大小村ノ道路及ヒ
廣場

市道トハ都府内又大小村内ノ諸道及ヒ廣場ヲ
合シタル稱呼ニシテ此等ノ諸公道モ亦邑ノ所
有ニ屬シ邑ヨリ其修覆等ノ事一切之ヲ爲スナ
リ尤モ此等ノ諸道若シ國道、州道、邑道ニ續キタ
ル片ハ其各品位ノ道ニ付テノ法則ヲ適用ス可
シ

第三款 道路又ハ河川ニ接スル土地ヲ

有スル者ノ義務

同上ノ區別

公道ニ接スル土地ハ其所有者ノ爲メ許多ノ利益ヲ得セシムルカ故ニ亦之ヲシテ守ラシム可キ義務アリ其義務ハ即チ共同資益ノ爲メノ義務ニシテ其眼目ハ往來道路ノ保持又日用辦利通船ノ利益ヲ保護スルニアリ左ニ之ニ管スル條件即チ家並、カチシナ引船路、歩路ニ於ケル諸箇條ヲ列示セントス

家並ノ事

家並

アリトハ

公ケ

ノ

道路

ニ接スル

諸建物ノ

面ニ

當ル

位置

取極ニ

付キ

其掛ノ

官ヨリ

定メタ

ル

區界ノ

名ナリ

故ニ

道路

ニ接スル

地ニ

於テ諸

建造物ヲ

作ルニ

ハ右ノ

趣意ニ

基キ

一應

其事ヲ

官ヘ

申立テ

其許可ヲ

經タル

上ニ

テ作事

ス可シ

右手數ヲ

經ス

一己ニ

家並ヲ

定メ

勝手ニ

作事ヲ

爲スハ

禁止

タリ

若シ

其許可ヲ

受ケス

シテ

建造

物ヲ

爲シタル

者ハ

其許可ヲ

得タリト

雖モ

定

則ニ

違背

シタル

者ハ

其掛リ

裁判所

ヘ呼出

テ受

ケテ

罰金ヲ

申付

ケラレタル

上

違背ニ

係レル

建

造物ハ之ヲ取毀ツノ命ヲ受ク可シ

又各家立ノ許可ハ大抵從前定メ通リノ一般ノ
法式ニ倣フト雖凡時トシテ其一般ノ法式ノア
ラサル事アリ然レ凡其都度都度官ヘ申立テ其
裁許ヲ受クルヲ必要トス

家並ノ許可ニ付テノ掛リ官署

家並ノ許可ヲ與フルニ付テノ官署ハ公道ノ品
位ニ因リテ各殊ノ差アリ國道州道ニ付テノ家
並一般ノ大式ハ參議院ニテ議シタル上勅許ノ
下案ヲ作り帝ヘ上告シ其允許ヲ經タル上ニテ

三

三

三

三

三

三

三

更ニ勅命ヲ以テ之ヲ許ルスニ在リ又各地限リ
ノ家並式ハ上ニ示ス所ノ一般ノ大式アレハ之
ニ準シテ郡長ヨリ許可シ若シ其依準ス可キ一
般ノ大式ナキハ州長之ヲ許可ス可シ又郊道
ニ於テハ州長其大式ヲ許可シ各地限リノ家並
ハ大往來ニ屬スル郊道ト他ノ諸郊道トニテ差
アリ大往來ニ屬スル郊道ハ一般ノ大式アレハ
郡長之ヲ許可シ大式ナキハ州長之ヲ許可ス
可シ又他ノ諸郊道ニ於テハ邑長之ヲ許可ス可
シ其外市道ニ於テハ其家並ノ大式ヲ州長ヨリ

下知シ各地限リノ免許ハ邑長之ヲ許可ス可シ

公ケノ道路上ニ侵入シタル諸建

造物ニ付キ家並ノ定ムル法ノ効

公ケノ道路上ニ侵入シタル諸建造物ハ之ヲ縮

少ス可キヲ以テ眞ノ義務ヲ受ク可キモノトス

故ニ其所有者ハ其建造物ヲ永續セシム可キ修

覆ヲ一切爲ス可カラズ若一時假設ノ工事ヲ爲

サント思ハ、其旨ヲ官ハ申立テ其裁許ヲ受ク

可ク若シ官許ヲ得スシテ作爲シタル諸建造物

ハ凡ニ之ヲ取拂ハシム可シ又假令許可ヲ受ケ

タル物タリトモ若シ造立ノ仕方不良ナルニ由
リ取拂ヲ命スルハ官ヨリ縮少シタル土地ノ
償ヲ與フノミニテ家作料ヲ與フルヲナシ然レ
モ官若シ建造物ノ破壊スルヲ待タスシテ家並
ノ法則ヲ行ハシメント欲スル時ハ没収ヲ申付
ク可シ尤モ此場合ニ於テハ官ヨリ家作並土地
ノ價トシテ相當ノ償ヲ與フ可シ

引船路及ヒ歩路

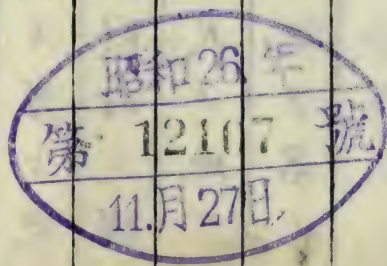
通船浮筏ノ兩種ニ屬スル河川ニ接スル土地ノ
所有者ハ其一方ニ幅二十四尺ノ道ヲ遺シ置キ

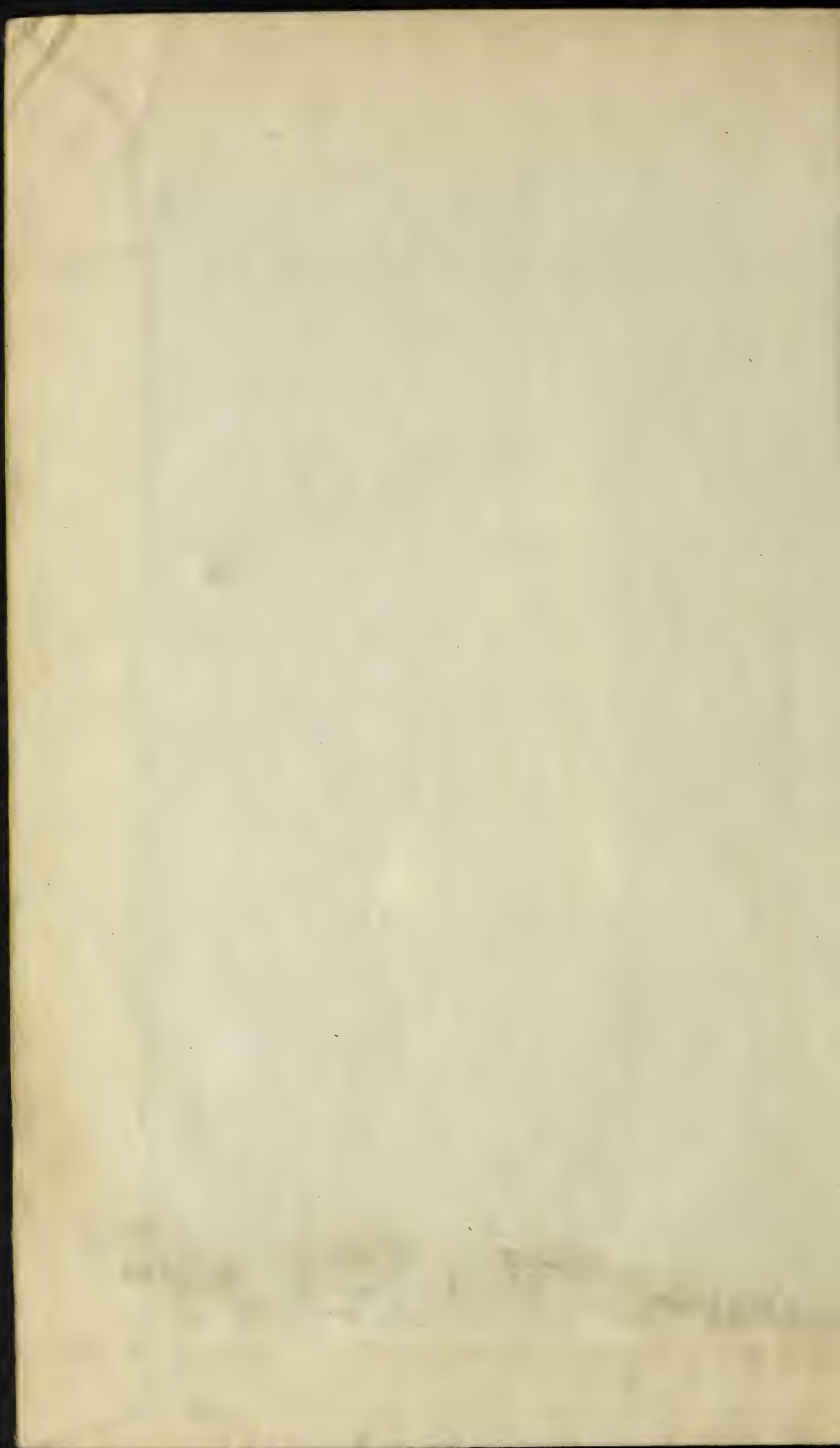
船及ヒ筏類ヲ曳ク人馬ノ通路ニ供ス可シ之ヲ
名ケテ引船路ト云ヒ此道ヨリ六尺以内ニ樹木
ヲ植付ルヲ禁ス又他ノ一方ニ幅十尺ノ地ヲ明
ケ置キ生垣及ヒ樹木ノ植付ヲ禁ス之ヲ名ケテ
歩路ト云フ

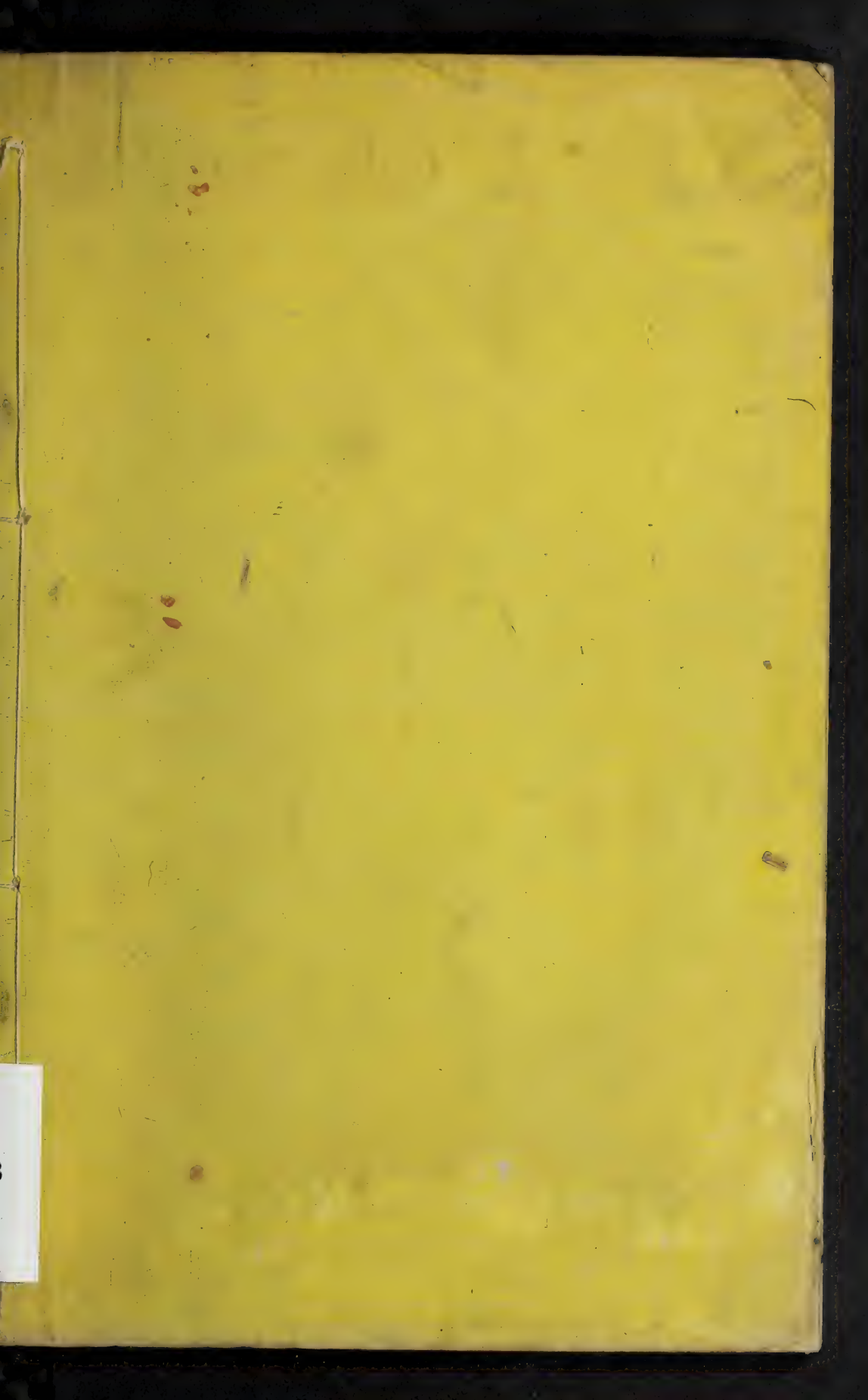
右兩種ノ岸路ニ於ケル諸規則ハ千六百六十九
年ノ法律上ニ據ル所ニシテ方今其法尚ホ實際
ニ行ハル、者トス

29
5
イ

佛國政典卷之四 終



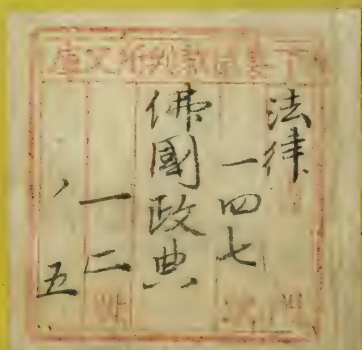


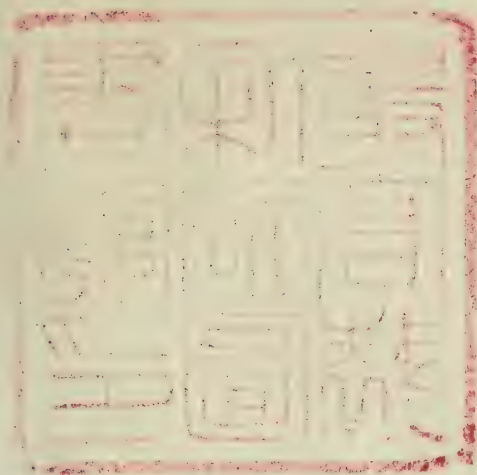


佛國政典

五

下洋目第四十二号五
止下和河第百五拾号五





University of Illinois
Library at Urbana-
Champaign
IAS - Oak Street



佛國政典第五卷

第六章 國財

第一款 總論

出納見積書ノ仕立及其議決

出納見積書トハ一國

即政府

ノ毎歲ノ出納及ビ法

律上ニテ同上ノ規則ヲ適用スル公ケノ諸用度

ヲ預メ見算シ且之ヲ許可スル書ノ義ニシテ其

書ニ載セタル翌年分ノ遣ヒ拂フ可キ費用又取

立ツ可キ收納ノ定額ハ毎年別段ノ法律ヲ以テ

管內
區裁
下妻
下戸裁

K3V
233
F73163
1873
V.5

之ヲ許可シ其法律ヲ名ケテ「ロワドヒナン」ス即
チ會計律法又出納見積書ト云フ故ニ千八百六
十八年ノ民選議院會合ニテ仕立タル見積書ハ
千八百六十九年分ノ調トシテ同院ニテ議決ス
蓋シ其見積書ハ其年ヨリ翌年ニ掛カレルモノ
ニシテ當年分ノ見積諸雜費ノ拂方ハ翌年八月
三十一日ニ至テ落成スルヲ以テ譬ヘハ千八百
六十八年分ノ見積書ハ千八百六十九年八月三
十一日ニ於テ濟切トナルナリ

出納見積書ハ會計事務宰相之ヲ作り參議院ニ

移シ其論議掛タル上之ノ章ト條トニ口分ケヲ爲
シテ民選議院ニ差出シ同院ニテ之ヲ議決ス可シ
各宰相局ノ定費見積書ハ千八百六十九年九月
八日ノ元老議院議定書ニ添フタル表ニ照準シ
數章ニ分テ章毎ニ民選議院ニ於テ議決ス然ル
後其全額ヲ各宰相局ニ配分スルハ參議院ニ於
テ下シタル勅命ヲ以テ之ヲ爲ス佛國ニ於テ各
宰相局ノ定費ニ宛テタル金高ヲクレジ¹ト云
フ蓋シ定額金ノ義ナリ

又右諸宰相局ニ於テ此分ノ定費ヲ彼分ノ定費

ニ振廻スヲ振替又融通ビノルト云ヒ之ヲ聽ル
スモ亦參議院ニ於テ下シタル勅命ヲ以テ之ヲ
爲ス蓋シ振替トハ固ト此分ノ入費トメ許可セ
ラレタル定額ヲ他ノ入費ニ充タスヲ云フ事ニ
シテ若シ彼此ノ入費ニ過不足アルハ此法ヲ
以テ互ニ相平均セシメテ其便宜ヲ爲スヲ得可
シ但シ之ヲ爲スハ唯一ノ宰相局中ニ於テ彼此
相調理スルヲ得可キノミニテ決シテ他局へ融
通ス可カラズ

右定費供給金ノ外ニ臨時入費ノ定額金

一クレジ
エキ

ストラルヲ備スルアリ是亦律法ニ非ザル

ハ許可ス可カラズ

右一條ハ千八百六十一年十二月三十一日ノ

元老議院議定書ニ出ツル所ナリ

通常出納見積書及ヒ臨時出納見

積書

出納見積書ニハ通常出納見積書ト臨時出納見

積書トノ區別アリ臨時出納見積書ニ記シタル

金額及ヒ其金額ヲ供給ス可キ入費ハ毎年別段

ノ律法ヲ以テ之ヲ定ム可シ

右通常出納見積書ト臨時出納見積書トノ區別
ハ千八百六十三年ノ會計律法ロロドビヲ解明
スル文中ニ判然タリ其文ニ曰ク通常費用ノ定
額金ハ永續ニシテ止ム能ハサル用度ニ供給ス
ルニアリ卽チ國債ノ償濟、律法ノ執行、訴訟ノ審
理、貢稅ノ取立、國境ノ防禦ニ用ユ可シ右各種ノ
用度ハ成文ケ節儉ヲ以テ之ヲ定ム可シト雖會
計ヲ良ク調理セントスルニハ諸拂方ニ滿足ス
可キ文ケノ定額金ヲ供給スルハ勿論一大要事
タル可シ又臨時入費ハ大工業、新建築類ノ入費

並ニ外國ニ對シテ我國ノ權利ヲ保護スル爲メ
止ムヲ得サル出兵ノ費用等一時ノ費用ニ在リ
之ヲ概論スレハ畢竟一時偶生ノ諸求需ニ屬シ
國家永久ノ義務外ニ屬スルモノトス但シ前件
ノ要用ナルコト眞ニ理ノ當然ニ出テ速カニ盛
大ノ功ヲ奏スルニ缺ク可カラサルハ敢テ言フ
待タスト雖モ其時ノ形勢ト國人ノ資産トニ從
ヒ國ノ財源ヲ定メタル上右臨時費用ノ高ヲ其
財源ノ高ニ限ルハ亦難キニ非スト
斯クノ如クナルヲ以テ通常出納見積書ニハ缺

ク可カラサル持久ノ入費ヲ記シ其定額金トシ
テ十分不足ナキ高ヲ供ス可ク又臨時出納見積
書ニハ定費ニ比スレバ稍切要ナラサル入費ヲ
記シ其供給金ノ高ハ國ノ財源ノ高ニ鈞合フ可シ

國財ヲ管理スルニ付キ會計事務

宰相ノ職掌

會計事務宰相ハ國財ノ管理、各種ノ租税ノ取立、
一國公同ノ地面ノ開拓ヲ任トシ且諸用度ニ管
スル諸入費ヨリ國債ノ利足及ヒ諸給料ヲ拂出
シ歳入及官金ノ用法ニ管シタル諸事ヲ監督視

察スルノ任ヲ有ス又千八百六十一年十二月十
三日ノ勅命ヲ以テ右會計事務宰相ノ會計諸事
ヲ視察スルヲ更ニ便ナラシメタリ但シ其勅ハ
以來見積費用高ヲ増サシム可キ諸工業及其他
ノ諸事ヲ令スル勅命ノ下案ハ會計事務宰相ノ
承諾書ヲ添ヘタル上ニ非レハ皇帝ノ許可ヲ得
ル爲メ之ヲ差出ス可カラスト

歳入ノ管理及ヒ租税ノ取立方ニ
付テノ本局及ヒ地方局
會計事務宰相局ニハ其本局ノ外諸州ニ於テ附

屬ノ諸官員アリ其官員ニハ州府ニ於テハ大司
計ユトレグリエ、ペイアリ其職勢ハ本州内ノ歳入
ヲ取立テ諸入費ヲ給供スルニ在リ又郡府ニ於
テハ一箇ノ租税受取方ルセブユル、バ在リ凡
テ郡中ヨリ納メタル收税ノ上リ高ヲ取束子受
取ル可キ役ナリ且郡ハ租税取立方ニ付キ之ヲ
數區ニ分チ其區毎ニ一人ノ取立方ブレルセプア
リ直税ノ取立方ヲ任セラレタル役トス

會計事務宰相局附屬ノ別局

會計事務本局ノ外ニ別段ノ諸局數箇アリ是レ

會計局ノ附屬ニシテ諸税ノ取立方又國家公同
ノ所有タル財産ノ管理ヲ專務ニ取扱フモノナ
リ其局ニハ直税司、間税及海關税司、烟草及火藥
税司、記錄税印紙税及公同財産司、驛遞司、山林司
ノ六局ニシテ之ニ本局ノ事務ヲ取扱フモノト
州ノ事務ヲ取扱フモノトノ二類アリ各州ニ於
テハ其長タル有司一名アリ之ヲ水路山林司ニ
於テハ「コンセルワートル」ト云ヒ其他ノ諸司ニ
於テハ「チレクトール」ト云フ均シク皆司長ノ義
ナリ而シテ此有司ノ配下ニ各分課ニ從テ名ヲ

異ニスル諸等ノ附屬下役數名アリ

國ノ財源ノ區別

歳入ノ二大源ハ卽チ公同ノ地ヨリ生スル物ト
諸税トニ在リ就中租税ヲ以テ財本ノ最大要ナ
ルモノトス

公ケノ入費並其給供ノ方法

諸用度ニ於ケル入費ハ毎年之ヲ見積書中ニ書
込ム事旣ニ前文ニ明カナリ然ルニ其諸入用ノ
拂方ハ指令官ヲラドント勘定方ブロンタト一致
ノ上ニ非サレハ爲ス可カラズ指令官ハ拂方ヲ

差圖スル役ニシテ勘定方ハ其指令ヲ受テ之ヲ
拂出ス役トス此ニ役ハ一人ヲシテ之ヲ兼勤ス
ルヲ許サス
凡テ諸宰相局ノ入費ハ宰相或ハ其代理官タル
者ノ指令ヲ以テ之ヲ拂出ス可ク其入費ハ之ヲ
見積ノ定額金中ヨリ拂出ス可シ蓋シ其指令ニ
拂方ノ指令ト委任ノ指令トノ二種アリ拂方ノ
指令トハ直ニ宰相ヨリ出ツル指令ニシテ委任
ノ指令トハ宰相ヨリ其代理者ヘ金高ヲ受取ラ
ント求ムル手形ヲ渡スヲ許可スル指令ナリ

斯ク規則通りニ指令ヲ受ケタル入費ハ右手形
ヲ持參スルハ勘定方定額金中ノ金子ト引替ニ
テ拂出ス可シ但シ此手形ヲ所持スル者若シ其
手形ノ真正ナルヲ証スルヲ怠リ或ハ格別ノ遲
延ニ因リテ五箇年内ニ拂下ヲ得サルハ其手
形ヲ効ナキ者トナシ之ヲ以テ金子ヲ受取ルノ
權消滅スヘシ

諸宰相ノ正算

諸宰相ハ各其所管タル局ニ於テ前年中取扱
タル會計ノ勘定書ヲ民選議院ニ差出ス可ク財

政ノ總勘定書ハ會計事務宰相ヨリ差出ス可シ
蓋シ右總勘定書ニハ國財ノ收集方及ヒ用方ニ
關シタル諸事ヲ記載シ且年始ト年末トニ於ケ
ル入費及ヒ收納ノ有様ヲ分明ナラシム可シ

出納見積書ヲ確定スル方法

立法權ハ初メニ出納見積書ヲ決議スルノ權ヲ
有スル如ク亦終ニ之ヲ確定スルノ權アリ而シ
テ之ヲ確定スル律法卽チ正算律法ロロトノ草
案ハ出納見積書落成見積書ノ落成ハ之ヲ決議
ヒシ年ノ翌年八月三十一
日ナ
リ
翌年初メノ二月間ニ議院ニ出ス可シ又

前文ニ記シタル所ノ諸宰相局ノ勘定書ハ出納
見積書ヲ確定スル律法ノ草案ニ添ヘテ出ス可
シ但シ其律法草案ハ見積書ヲ決議スル律法ト
同一ノ規則ニ照準シ箇條ヲ分テ之ヲ民選議院
ヘ出ス可シ

勘定方取扱向ノ正算

官ノ歳入ヲ取集テ諸入費ヲ拂出ス者ヲ「コンタ
クト」云フ勘定方ノ義ナリ其取扱フタル事
務ノ正算ハ會計検査局ニ於テ之ヲ爲ス因テ定
メ通ノ日限内ニ諸勘定書ヲ同局ヘ差出ス可シ

蓋シ之ヲ爲スノ主意ハ勘定方ノ私曲ナキヲ証
明スルニ在リ故ニ出入ノ高正シク符合スルハ
ハ其役前相濟タルモノトス若シ入費ノ高歲入
ニ過ルルハ上告シテ以テ其償ヲ得ント求ムル
ヲ得可キ理アリトス若シ歲入ノ高入費ニ過ルル
ハ不行届ノ廉トシ會計検査局ヨリ其者一殘高
ヲ官ニ納ム可キノ言渡ヲ爲ス又勘定方ハ其役
前ノ保証トシテ官ニ保証ノ金高ヲ出シ且本人
ノ不動産ハ官ノ爲メ法律上ノ書入質ト爲ス可

シ

第二款 國民公司ノ財産

國民公司財産ノ區別

國民公司ノ財産トハ國民ニ屬スル財産ノ總目

ニシテ之ニ三種ノ別アリ即チ公司ノ財産

ツクブリ國家ノ財産デトノ親領ノ財産スト

シロナリ左ニ其目ヲ逐ヒ各自ニ之ヲ記載セ

トス

第一種 公司ノ財産

即チ公司資益
為メノ財産

公司ノ財産トハ公司資益ノ為メノ諸財産ヲ云

フ譬ヘハ道路橋梁舟楫ヲ通スル河川堀割砦寨

等ノ類ニシテ此等ノ財産ニ屬スル諸物ハ共同
財産タルノ名義ヲ存スル間ハ決シテ賣買等ヲ
爲ス可カラス又數年間占有スルトモ終ニ其所
有ノ權ヲ得可カラス

第二種 國家ノ財産

國家ノ財産トハ或ハ國家私有ノ財産トモ名ツ
クルモノニテ恰モ各人ノ財産ヲ有スル如ク國
家ノ自カラ領有スル所ノ財産ナリ
又此類ノ財産ハ殊ニ國家財政ノ爲メ有益ノ物
ニシテ共同財産

第一種
ノ財産

ノ名義ヲ失シタル諸物

相續人ノアラサル財産、又ヒ一國公同ノ山林等
皆此類ノ財産ナリトス
同上諸財産ハ其掛ノ局ニテ支配シ其產物ハ取
纏メテ官金中ニ納ム

又右諸財産ニ屬スル諸物ハ賣買スルモ妨ナク
且占有者其所有ノ權ヲ得可シト雖モ其不動産
ノ賣買ハ本來律法ノ許可アルニ非サレハ爲ス
可カラサル者トス然レトモ價一百萬以下ノ不
動産ハ勅命ノミヲ以テ其賣拂ヲ許可スルヲ
得可シ

第三種 親領ノ財産

親領ノ財産モ亦國家所有ノ財産ナリ然レモ其
入額ヲ得ルノ權國君ニ屬シ卽チ君主俸祿ノ一
分ナルモノトス今之ヲ舉示サシニ宮殿及ヒ之
ニ屬スル地所山林ノ類ノ如シ此類ノ財産モ亦
本來賣買ス可カラス且占有者其所有ノ權ヲ得
可カラサル者ナリ但シ他物ト交換スルハ元老
議院ノ議定書ヲ以テ之ヲ聽ルス可シ○此種類
ノ諸財産ハ宮内宰相ノ管理スル所トス

第三款 租稅

同上釋義

夫レ租税ハ公同資益ノ爲メノ入費ヲ國民ヨリ
扶助スル所ニシテ本來租税ノ旨趣ハ政府ヨリ
人民ヲシテ其身體及ヒ所有物ヲ安全ニ保存シ
其職業ヲモ安穩ニ經營セシムル爲メノ保護ア
ルニ因リテ國民タル者ハ各々其力ニ應シテ公
同ノ入費ヲ扶助ス可キハ理ノ當然タリト謂フ
意ニ基ケリ是レ租税〔アンポー〕ト云ヘル語ト扶
助ゴシンヨント云ヘル語ヲ並用シテ共ニ租税ト
云ヘル語ニ通用スルハ蓋シ此理ニ據ル所ナリ

因テ租税ヲ納ムル者ハ實ニ國家公同ノ經費ヲ
助クル者ト云ノ可シ

租税一般ノ規則

我國憲上ニ於テ租税ノ事ニ二大旨ヲ定メタリ
其第一旨ハ公同ノ租税ハ何等ノ種類ニ限ラス
悉ク皆律法ヲ以テ之ヲ創立ス可ク人民ノ納ム
可キ税額ハ公選ノ代議士ヲ以テ國民自カラ之
ヲ定ム可キニ在リ第二旨ハ租税配當ノ方法ニ
シテ配當スルハ各人ノ身代ニ割合セ萬人中極
メテ不同ナク公平ニ配分ス可キニ在リ

右第二旨ヲ實行セシニハ許多ノ税ヲ設ケサル
可カラズ是レ蓋シ其税數多カラサレハ賦税ス
可カラサル諸物アリテ之ニ洩ル、ノ原由アレ
ハナリ故ニ普ク諸物ニ税ヲ賦センカ爲メ其税
ヲ數種ニ設タルナリ

左ニ諸税ノ二大別卽直税間税ノ區別ヲ記載セ
ントス

直税及間税ノ區別

直税ト目スルモノハ姓名帳ノ上ニテ課セラ
ル、税ナリ又間税ハ其本人ノ名指ニテ課セサル

税ニシテ諸品物及ヒ日用諸物ニ之ヲ課シ其消費ノ度ニ應シテ拂フモノナリ次ニ一二例ヲ掲ケテ其區別ヲ明白ナラシムルヲ左ノ如シ
譬ヘハ田宅及ヒ其他ノ不動産ヲ所持スル者ハ地稅ト云ヘル直稅ヲ課セラレ會計有司ノ作りタル直稅簿上ニ其姓名ヲ登記セラレ若シ之ヲ納メサル片ハ相當ノ罰ニ處セラル可シ是レ即チ直稅ノ性來ヲ見ルニ足ル可シ又間稅ハ其一例ニ海關稅ヲ取リテ之ヲ証明センニ夫レ海關稅ハ他國ヨリ入港スル諸物ノ稅ニシテ佛國內

ニ入ル時此税ヲ納ムルナリ因テ吾人若シ此物
品ヲ購求セハ卽チ其物品ノ價上ニ加ハリタル
海關税ノ高ヲ拂フト云フ可シ故ニ海關税ハ假
令品物ヲ輸入スル者ヨリ納ムト雖凡其實ハ其
本人ヨリ納ムルニ非スシテ之ヲ費用スル者ヨ
リ納ムルモノトス

右直税間税ノ區別ハ一大要事トス因テ尚此差
異ヲ示サンニ若シ直税ニ關シタル諸事ニ付キ
官民雙方ノ間ニ爭訟ヲ生スルキハ凡テ行政審
判ノ掛リ官員ニテ之ヲ審判スルナリ是レ直税

ノ取立方ハ通常ノ裁判所ノ與知ス可カラサル
行政官ノ令ニ由リテ之ヲ爲スニ因ル又間税ニ
關シタル諸事ニ付キ同上ノ爭訟ヲ生セシキハ
多分通常ノ民法裁判所ニ於テ之ヲ審判ス是レ
間税ハ律法ヲ以テ定メタル一般ノ運上目録ニ
據ルモノニシテ其運上目録ヲ解明スル等ハ通
常裁判所ノ任ニアレハナリ

配當税、目錄税ノ事

配當税ハ毎年民選議院ニ於テ其全額ヲ定メ州、
郡、邑ニ配當シ而シテ後之ヲ納税人ニ配當スル

ノ方法ヲ以テ各人ノ納ム可キ額ヲ定ムル者ニ
シテ直税中地稅、窓牖稅、人別動產稅ハ之ヲ配當
稅トス又目錄稅ハ運上目錄ヲ以テ取立ル者ニ
シテ其上リ高ハ稅ヲ課ス可キ者ノ多少ニ從テ
差異アル可シ故ニ配當稅ハ變更ス可カラサル
一定ノ額ヲ毎歲ノ出納見積書中ニ記載スルヲ
得可キ者ナリト雖モ目錄稅ハ大約ノ秤量ニ由
テ其額ヲ見積ル者ナリトス蓋シ間稅ハ皆之ヲ
目錄稅トシ又直税中職業免許稅ハ目錄稅中ノ
一種トス

第一段 直税

直税ノ事

附 直税同一ノ賦税ノ事

所謂直税ナルモノハ其目四種アリ第一地稅第
二人別動產稅第三窓牖稅第四職業免許稅是ナ
リ但シ其首ノ三種ハ皆配當稅ニシテ後ノ一
種ハ目錄稅ニ屬スルモノトス
其他別段ノ稅數種アリ而シテ此稅亦名簿ニ因
リ之ヲ徵收スルヲ以テ直税同一ニ看做セルモ
ノトス今其例ヲ舉ゲン假設ヘハ舟楫ヲ通セサ
ル溝渠小川ヲ浚淘スル工業ニ供ス可キ税金或

ハ邑路保修ノ用ニ供スル資助金或ハ街路ノ磚
甃ヲ作ス爲メニ賦スル税金其他商人集會所及
ヒ商業會議局ノ費ニ充ツル所ノ税金等は皆直
税同一ノ賦税ナリ

直税ノ本税及ヒ其増税ヲ論ズ

凡ソ直税ニ在テハ其本税ト其増税トノ區別ヲ
示スルヲ要ス増税トハ前ニ論シタル如ク其
本税ニ基ツキ一「フランク」ニ付テ若干「サンチー
ム」ノ割合ヲ以テ其額ヲ定ムルモノトス故ニ本
税一「フランク」ニシテ其増税十「サンチーム」爲

ス時ハ總計一「フランク」十「サンチーム」ノ税ヲ納
メシム餘ハ皆之ニ倣フ
直税ノ本税ハ之ヲ政府ノ常費ニ充ツ可キモノ
ト定メ而シテ其増税ハ臨時ノ費用及ヒ一地方
ノ費用ニ供センカ爲メ之ヲ設ク是即チ州邑限
リノ需用ニ充テシカ爲メ増税ヲ賦スル所以ナ
リ但シ増税ハ四種ノ直税ニ就キ課スルヲ得
可シ

第一 地稅

地稅ノ設方ヲ論ス

凡ソ地稅ハ建築ノ有無ヲ問ハス土地ノ實利ニ就キ課スルモノトシ其實利トハ生産及ヒ保修ノ諸費ヲ除キ所有者ノ全ク所得スルモノヲ云フ但シ地稅ヲ賦ス可キ土地ノ入額ハ別設定メタル年數間ノ實利ヲ通算シ以テ其平均ヲ取リ之ヲ定ム

地稅永久ノ免除ハ諸官局ノ用ニ供スル政府ノ土地及ヒ公同ノ土地ニ限リ又耕作ニ益アラシムカ爲メ或ハ建築ノ工業ヲ盛大ニセンカ爲メ人民私有ノ土地ニ付テモ一時ノ免除ヲ與フルヲ

アリ

地稅配當ノ方法ヲ論ス

地稅ノ總額ハ每年會計律法ヲ以テ之ヲ定メ且
此律法ニ因リ亦各州ノ割合高ヲ定ム而シテ此
各州ノ割合高ハ州會ヨリ其本州内ノ諸郡ニ分
賦シ各郡ノ割合高ハ郡會ニテ州會ノ指令ヲ受
ケ以テ其本郡内ノ諸邑ニ分賦シ各邑ニ於テハ
七名ノ配當掛ナル者其割合高ヲ其本邑内ノ納
稅者ニ分賦ス但シ此配當掛ハ郡長ノ命スル所
ニシテ内五名ハ納稅者中ヨリ之ヲ選舉シ其餘

ノ二名ハ邑長及ビ邑長助若クハ邑會議員二名
之ニ任ス

カダストルノ方法ヲ論ス

カダストルトハ一邑毎ノ諸區地ノ摸樣ト此諸
區地ノ見積入額トヲ記列セル簿冊ヲ云フ抑カ

ダストルノ業ヲ創メシハ千八百七年ノナリ

シガ後チ降テ千八百五十二年ニ至テ漸ク其功

ヲ奏セシモノナリ但シカダストルハ唯邑ノ地

税納額ヲ邑内ノ納稅者ニ配當スル爲メニ用フ

ルノニニフ其他州郡邑ヘノ配當ハ之ヲ用

ヲ可カラス

「カダストル」ヲ作ルニ於テ緊要ナル二種ノ方法

有リ其第一種ハ技術上ノ方法ニシテ測量家ニ

委任スルモノトス但シ此方法ノ本旨ハ諸區地

ト其方積トヲ定メ之ヲ簿冊ニ記列スルニ止マ

リ其第二種ハ行政上ノ方法ニシテ其旨趣ハ地

税ヲ賦ス可キ土地ノ入額ヲ積ルニ在リ但シ此

第二種ノ方法又三様アリ其別左ノ如シ

第一 種類ヲ分ツ事 諸地面ノ各性質ニ

應シ其種類ヲ分ツモノナリ

第二 等級ヲ定ムル事 各地面ノ等級ヲ

定ムルモノナリ

第三 評價表ノ事 各種ノ地面ノ各等級

准シタル入額ヲ定ムルモノナリ

但シ此表ハ各邑毎ニ其邑會ト其邑

内ノ最モ夥多ノ税ヲ納ムル者ノ邑

會議員ニ等シキ員數トニテ之ヲ作

リ而シテ州ノ參事院ニ出シ以テ州

長ノ許可ヲ經可キモノトス

是ニ由テ之ヲ觀レハ右諸般ノ方法ハ各區地ノ

方積ヲ定メ其等級ヲ立テ及ヒ此各等級ニ屬ス
ル入額ヲ定ムルカ故ニ各地面ノ入額ヲ定ムル
ヲ容易ナルヲ得可シ

直税司右ノ諸件ヲ取纏ノマトリス、カダスト
ラールト云ヘル簿冊ニ記載ス蓋シ此簿冊ハ所
有者ノ姓名ト諸區地ノ方積其等級及ヒ其入額
トヲ記シテ諸地面ヲ掲載セル表ノ如キモノナ
リ

カダストルニ據テ邑ノ租税納額ヲ其邑内ノ納
税者ニ配賦スルハ實ニ簡易至便ニシテ僅カニ

禮
五

冊
七

市

法
權

算數ヲ以テ之ヲ爲スニ足レリトス

第二 人別動産税

此税ノ質ヲ論ス

此税ハ動産ニ就キ賦スルヲ以テ其本旨ト爲セ
ル諸税中ノ一ニシテ之ヲ分テ人別税及ヒ動産
税ノ二税トス但シ此税ハ自他ノ國人及ヒ男女
ヲ問ハス總テ國內ニ居住スル人民ノ窮民ト看
做サル者ヲシテ悉ク之ヲ納メシムルモノナ
リ

此税ハ配當税ニシテ配當掛ノ開載セル名簿ニ

因テ之ヲ納メシム但シ各邑毎ニ其邑會ニ於テ
其邑内ノ住民中窮困ナル故ヲ以テ此税ヲ賦ス
可カラサル者ヲ定ム

人別税

人別税ノ額ハ三日分平均ノ工價銀ヲ以テ之ニ
充ツ但シ一日分ノ工價ハ毎年各邑毎ニ州會ニ
テ之ヲ定メ其額ハ大約五十「サンチム」ヨリ少
ナキ「ナク又一「フランク」五十「サンチム」ヨリ
多キ「ナカル可シ

會計律法ニテ定ムル所ノ總額ノ配當ニ於テハ

人別税ト動産税ヲ混合スト雖モ各邑ニ於テ其
納額ヲ配賦スル時ニ當テ先ツ人別税ヲ賦シ其
収ムル所ノ税額ヲ總額中ヨリ除キ而シテ其餘
レルモノハ動産税ヲ以テ之ヲ補フモノトス

動産税

動産税ハ納税者ノ居住スル家屋ノ貸賃ノ高ニ
基ツキ課スルモノトス是レ蓋シ法律家嘗テ國
民ノ入額ヲ量ルニ其家屋ノ貸賃ヲ以テ之ヲ知
ル可シト爲シタルニ由ルナリ但シ家屋ノ貸賃
ノ高ハ各邑毎ニ配當掛ニテ之ヲ計算ス

人別税ハ納税者ノ本住所ノ邑ニ於テ之ヲ徵收シ
動産税ハ家屋ヲ有スル場所毎ニ之ヲ徵收ス
但シ此税ハ全一箇年ヲ以テ定ムルモノニシテ
轉住或ハ死去セシ時ト雖モ全一箇年分ヲ徵收
ス

第三 窓牖税

此税ノ設方ヲ論ス
窓牖税ハ總テ街路及ヒ園庭ヲ見下ス所ノ家屋
及ヒ建造物ノ窓牖ニ附キ賦スルモノトス而シ

テ其積高ハ其地人口ノ多寡ト窓牖ハ數ト其種類トノ三條ニ因テ之ヲ定ム故ニ此稅額ハ人口ノ夥多ナル都會ニ於テハ騰貴シ又樓下ノ窓ハ樓上ノ窓ヨリ多分ノ稅ヲ賦シ又穀類ノ蓄場、牛、羊ノ小屋、地窖及ヒ住居ニ用ヒサル家屋并ニ人ノ住セサル百工製造所ノ窓牖其他諸官局ノ用ニ供セル建造物ノ窓牖ニハ此稅ヲ賦セス

窓牖稅ヲ納ム可キ者

窓牖稅ハ屋主ヨリ納ム可キモノトス然レモ屋主ハ別段ノ契約有ル時ノ外借主ノ借住スル家

屋ニ附キ納ム可キ窓牖ノ税額ヲ其借主ヨリ己
レニ納メシム故ニ窓牖税ハ畢竟借主ニ賦スル
者トナル可シ

第四 職業免許税

此税ノ質及ヒ其設方ヲ論ス

此税ハ目錄税ニ屬スル直税ニシテ公然此税ノ
免除ノ得タル者ニアラサル職業ヲ營ム國民早
シテ悉ク之ヲ納メシムルモノトス而シテ此税
ハ定税ト平均税トノ二税ヲ合シ成レル者ニシ
テ定税ハ職業ノ種類ト其地人口ノ多寡トニ從

テ之ヲ定メ平均税ハ營業ニ用フル家屋ノ貸賃
ノ高二割合フテ之ヲ賦ス但シ平均税ハ家屋貸
賃高ノ二十分ノ一ナリトス

職業免許税ハ別書
商法中ニ詳ナリ

定税ハ之ヲ賦ス可キ産業ヲ營スル所ノ邑ニ於
テ之ヲ納メシメ平均税ハ營業ニ用フル各家屋
在ル所ノ諸邑ニ於テ之ヲ納メシム但シ職業
免許税ハ第一月一日ニ於テ此税ヲ賦ス可キ職
業ヲ營ム諸人ヲシテ全一箇年分ヲ納メシムル
モノナリ

第五 直税徴収方及除税減税ヲ訴フ

ル方法

直税徴収簿ノ作方及其布告

直税司長ハ毎年賦税官ノ補助ヲ得テ各邑納税者ノ名簿ニヲ作り一ハ地税、人別動産税、窓牖税ヲ記スルニ供シ一ハ職業免許税ヲ記スルニ供ス而シテ其名簿ハ州長ニ附シテ之ヲ施行ス可キ者ト爲シ然ル後州長之ヲ各邑ノ長ニ渡セハ各邑ノ長又布告書ヲ以テ納税者ニ其簿冊租税取立役ノ手ニ在リテ將ニ徵税ニ臨ム旨ヲ示告シ且訴願ノ筋アル者ハ幾日内ニ上申ス可キヲ

布告ス故ニ納税者ハ此公告ニ掲クル日限ヲ過
レハ凡テノ訴願ヲ爲スヲ得可カラス

直税ノ納方

各人ノ收納ノ可キ税額又其税額中ニテ政府、州、
邑ニ納ム可キ部分ハ別段之ヲ示告書ニ記シテ
租税取立役ヨリ納税者各人ニ指示ス可レ而シ
テ其税ノ納方ハ全額ヲ十二分ト爲シ一分宛ヲ
納ムルナリ蓋シ納税者全ク税ヲ納メタルノ証
ハ取立役押印ノ税額皆納請取書ヲ示スニ非レ
ハ之ヲ立ツ可カラス

課税不納ノ詮議

若シ納税者税ノ全額ヲ法ノ如ク納メサル時ハ
取立役ヨリ其筋ノ詮議ヲ爲スナリ尤モ之ヲ爲
スノ前ニ一應沙汰アリテ此沙汰アリシ日ヨリ
後八日以内ニ尚其税ヲ納メサル時ハ監守人
人ハ延納者數人ノ爲メ設クルアリ又一人ノ
ノ設クル數人ノ爲メ設クル者ハ監守人ノ給
料費用ヲ數人ヨリ辨一人ノ爲メ設ク附置キ
クル者ハ之ヲ一人ヨリ辨スルユリ
之ヲ監責セシム其監守人ニハ納税者ヲシテ十
日間ノ寢食ノ手當并ニ一日一フランクノ給料
ヲ拂ハシム可シ然ル後尚其詮ナキ時ハ取立役

之ヲ本郡ノ取立役ニ申立テ其許可ヲ得テ延納
者ヲ禁錮シタル上其罪ヲ訴ヘ本人所有ノ動産
ヲ差押ヘテ之ヲ賣拂フノ手續ヲ爲スニ至ル
除税減税ノ訴

納税者或ハ不當ニ税ヲ課セラレ之ヲ論辯セシ
欲スル時ハ除税訴書ヲ差出ス可ク或ハ過度
ノ税ヲ課セラレ之ヲ論辯セント欲スル時ハ減
税訴書ヲ差出ス可シ但シ除税又ハ減税ノ訴書
ハ名簿公告ノ日ヨリ三箇月内ニ認メ之ヲ部長
ニ差出ス可シ若シ本郡州ノ首府所在ノ地ナレ

ハ之ヲ州長ニ差出ス可シ且其訴書三十^ラフラン
之以上ノ金額ニ管スル者ハ印紙ニ之ヲ認ム可
シ但シ此訴書ヲ出スト雖モ先ツ賦課通りノ税
金ヲ納ム可ク且其訴書ニハ取立方ノ皆納請取
書ヲ添ヘ差出ス可シ若シ其受取書ヲ添ヘサレ
ハ一切訴書ヲ受理セス

右除税減税ノ訴ハ參事院之ヲ審判處分ス但シ
其裁決ハ送達ノ日ヨリ三月ヲ出サレハ之ヲ參
議院ニ上控スルヲ得可シ

除税及減税ノ請願

除税及ニ减税ノ願トハ納税者本年間其入額ノ
 全部又ハ其一分ヲ失フタルニ因リ納税ノ全部
 又ハ其一分ヲ免カレン爲メ行政官ニ歎願スル
 モノニシテ其願向ハ州長之ヲ裁判ス可シ而シ
 テ州長ハ入額損失ノ償還元金ト云ヘル別段ノ
 元金ヲ處分シ此元金中ヨリ免除ス可キ税ノ金
 高ヲ償フナリ但シ州長右ノ除税及减税ノ願ヲ
 裁判スルハ歳末ニ有リテ若シ州長其願ヲ容サ
 ル時ハ是レ蓋シ眞ノ行政處置タルニ因リ更ニ
 之ヲヒ控スルヲ得可カラサルモノトス

第二十段 間税

間税ニ屬スル官ノ歳入中ノ著大ナル者ノ掲載

間税中ニハ許多ノ税有リテ其至重ナル者ハ飲料税、鹽税、砂糖税、記録税、印紙税、海關税ニシテ其他郵便、驛遞、傳信、煙草、火藥等ヲ如キ政府占有ノ得分ヲ之ニ加フ可シ但シ其占有ノ得分ハ商法書中ニ掲載スルヲ以テ爰ニ贅スルヲナク次ニ飲料税、鹽税、砂糖税、印紙税、記録税ヲ論シ終ニ品物入府税ヲ記サントス

第一 飲料税

總論

葡萄酒、梨酒、麥酒、燒酒類ハ即チ飲料税中ノ諸税ヲ課セラル可キモノトス今先ツ此諸税中ノ二税即チ轉輸税、輸入税ヲ記ス可シ

轉輸税

此税ハ飲料物ノ製造者ノ窖ヲ去リテ消費者ノ家ニ轉移スルノ時ニ於テ課スル税ニシテ製造者及ヒ商人ノ他人ニ賣ラスシテ自カラ轉移スル時ニ非サレハ其税ヲ免ル、コヲ得ス而シテ

此税ハ州ノ位置ニ隨ヒ等級ヲ立テタル税目録
ニ據テ課スルモノニシテ其等級ハ州ヲ四等ニ
分チ其等ニ由テ各々多少ノ差アリトス然レモ
通例此税ハ酒ヲ製造スル地ヲ離ルハ「愈々遠
ケレハ其税金愈々昇リ一ヘクトリートルニ付
キ六十」サンチームヨリ一「フランク二十」サンチ
ム至ルソ差アリ

轉輸免狀、轉移免狀

轉輸税ハ通常酒類運出ノ時之ヲ納メ其税銀ト
引替ヘテ間税取立役ヨリ受取リタル轉輸免狀

アルニ非レハ運送ス可カラス若シ税ヲ納ムル
ニ及ハスシテ轉移スル時譬ヘハ商賈ノ甲ノ倉
庫ヨリ乙ノ倉庫ニ其商品ヲ轉移スル時ノ如キ
ハ轉移免狀ナカル可ラス但シ此免狀ハ無税ニ
テ間税取立役ヨリ之ヲ渡スモノナリ

輸入税

輸入税ハ四十以上ノ人口有ル都府而已ニ設ル
ニ
エノニシテ都府人口ノ多少及ヒ州ノ等級ニ從
テ差異アリトス而シテ其等級ノ立方ハ運輸税
ニ於ケルト同様ニシテ其税ノ課方ハ内國ニ於

テ製造シタル飲料モ外國ヨリ輸入シタル飲料
モ共ニ同一ナリ但シ此税ハ一國ノ爲メ設クル
者ニシテ邑ノ爲メ設クル品物入府税トハ自カ
ラ差アリテ之ヲ混同ス可カラス

經過免狀運出免狀

飲料物ノ一府ニ入り數時間此ニ留止シ後其府
内ニテ消費セス再ヒ此ヨリ出ル者ハ絶テ輸入
税ヲ課スルコナシ但シ然ル片ハ經過免狀及ヒ
運出免狀ヲ受ク可クシテ若シ其府内ニ留ルコ
ト二十四時間ヲ越ヘサル時ハ經過免狀ヲ受ク可

ク若シ二十四時間以上ニ及フ時ハ其荷主運出
免狀ヲ受ク可シ但シ此二箇ノ場合ニ於テハ預
シメ假リニ輸入税ヲ出シ置カシムルト雖モ再
ヒ運出スル時ハ本人ニ其税ヲ返ス可シ但シ税
官運出ノ時品物ノ高輸入ノ時ニ不足スルヲ看
ル時ハ別段ナリトス

酒ノ小賣税及ヒ其検査

酒ノ小賣ヲ爲ス者ハ一箇ノ税ヲ拂フ可シ其税
ハ「ヘクトリートル」毎ニ賣價ノ百ニ付キ十五
トス但シ何人ニ限テス小賣ヲ爲サントスルニ

ハ之ヲ其掛ノ官署ニ届出テ其免許ヲ受ルニ非
レハ其業ヲ始ムルヲ得ス而シテ此免許ヲ受ル
時ハ免許税ト云ヘル税ヲ課セラル、ナリ又此
税ヲ正當ニ取立ル爲メ間税官吏之レカ検査ヲ
爲ス可シ故ニ間税官吏ハ検査ヲ爲スヲ適宜ト
リト思フ時ハ何時ニ限ラス賣酒人ノ酒藏内ニ
入り若干ノ量ヲ賣捌キタルヤヲ取調フル爲メ
検査ヲ爲スノ權アリトス

酒税ノ前納

小賣ヲ爲ス者若シ官吏ノ検査ヲ受クルヲ煩ハ

新刊

法

法

省

シク思フ時ハ前納ヲ取極テ以テ之ヲ免カル、
ヲ得可シ其前納トハ預シメ定メタル税額ヲ納
テ以テ小賣税ニ代フルヲ云ヒ之ニ數様アリ一
人限リノ者アリ數人合同ノモノアリ一人限リ
ノ前納トハ其掛官吏ト納税者トニテ定ムル者
ニシテ或ハ一定ノ税額ヲ以テ取極ムル者アリ
或ハ一ヘクトリートルニ付キ多クトモ六月間
ニ税額若干ト取極ル者アリ又數人合同ノ前納
トハ一邑ノ小賣人總テ之ヲ循守ス可キモノニ
シテ一邑内ノ納税者ノ三分ニ以上之ヲ承諾シ

會計事務宰相ノ允許ヲ得テ決定スル時ハ假令
ヒ不服ノ者ナリト雖モ皆之ヲ守ル可キモノト
ス但シ其取極メハ一箇年何程ト定ムルニアリ
テ其全額中各人ノ納ム可キ税額ハ配賦シテ以
テ之ヲ定ム而シテ此税ヲ徵収スルハ名簿ヲ以
テシ其名簿ハ納税者中最モ多分ノ税ヲ納ムル
者之ヲ作り邑長ヨリ布告ス尤モ其名簿ハ掛
官吏ニ之ヲ渡ス可シ

第二 鹽税

鹽ノ輸入ニ付キ納ム可キ税

鹽ハ百キログラムニ付キトフランクノ消費
税ヲ納ム可キモノトス但シ佛蘭西製造ノ鹽、ア
ルゼリ」及ヒ其他ノ藩屬地ヨリ來レル鹽ニ此
税ヲ課ス可ク外國製ノ鹽ハ佛蘭西ニ輸入スル
時ニ方ツテ海關税ヲ納ム可ク且其税ハ着港ス
ル所ノ地方ト佛蘭西船又ハ外國船ヨリ齎來ス
ルトニ准シテ差異アリトス

第三 砂糖税

内國製砂糖税

佛國製ノ甜菜糖ハ百キログラムニ付キ四十



五「フ」ランクノ製造税ヲ納ム可クシテ其製造ハ
間税司官吏ノ視察ヲ受ク可キモノトス

藩屬地及ヒ外國製砂糖税、千八百
六十四年五月七日ノ法律

藩屬地又ハ外國ヨリ舶來ノ砂糖ハ百「キ」ログラ
ンムニ付キ四十二「フ」ランクヨリ四十七「フ」ラン
クニ至ル迄ノ海關税ヲ納ム可キ者トス但シ我
藩屬地中砂糖製造ノ必要ナル地ニ於テ其製造
ノ業ヲ勸奨スル爲メ「レ」ウニラン島及ヒ佛國所
屬ノ「ア」ン「チ」ール島ヨリ輸入ノ分ハ千八百七十

年一月一日迄百キログラムニ付キ五フラン
クノ税ヲ減スルニ因リ三十七フランクヨリ四
十二フランクニ至ル迄ノ税ヲ納ムルニ過キス
ト雖モ之ニ反シテ歐羅巴外ノ諸國ヨリ外國船
齎來ノ砂糖及ヒ歐羅巴諸國ヨリ輸入ノ砂糖ハ
百キログラムニ付キ二フランク宛ノ増税ヲ
加ヘタリ

精製ノ爲メ輸入スル砂糖ノ税ヲ
假リニ免除スル事

法律上ニテ砂糖精製ノ營業ニ特權ヲ與フ蓋シ

之ヲ爲メ佛國ニ輸ハシ精製シタル後再ヒ輸出
スル砂糖ハ其税即輸
入税ヲ假リニ免除ス故ニ其輸
入者ハ納税義務ノ証書ニ姓名ヲ自署シ其義務
ヲ固守スル爲メノ保証ヲ出ス可シ而メ四箇月
内ニ精製シ再ヒ輸出スルニ於テハ其義務ハ効
ナキモノトナリテ其保証ハ之ヲ免除スルヲ得
可ク税ヲ納メシムルヲナシ然レモ若シ右期限
内ニ約定通り輸出セサル片ハ其掛官署ヨリ税
ヲ課セラル可シ

第四 記錄税

記録税ノ性來及其効

記録税トハ記録税取立役ノ所持スル簿冊中ニ
諸証書ヲ記載スルニ方リテ課ス可キモノニシ
テ其証書面ニハ此法式ヲ行フタル事ト税ヲ納
メタル事トヲ記入スルナリ而シテ此税法ヲ設
ケタルハ帝國ニ税ヲ課スル爲メノミナラス民法
上ニ於テモ至重ノ効アル者ニシテ私ノ証書ノ
年月日附テ公正分明ナラシム但シ公証人及ヒ
其他ノ諸職負ハ一定ノ日限内ニ必ス自己ノ取
扱フタル書類ノ記録ヲ求ム可ク若シ否ラサル

片ハ罰金ノ言渡ヲ受ク可シ又私ノ証書ト雖
一 定ノ期日間通例三ヶ月内ニ記録ノ爲メ差出ス可ク
若シ定期内ニ記録税ヲ納メサル者ハ本税ノ二
倍ヲ課収ス可シ

定額税ト平均税ノ差異

記録税ニハ定額税ト平均税トノ區別アリ定額
税トハ証書ノ種類ニ從ヒ差異アリト雖モ同種
類ノ証書ニ付テハ絶テ其事柄ノ大小ニ由テ差
異アルヲナシトス之ニ及シテ平均税ハ証書面
ノ金高百ニ付キ若干ト算スル者ニシテ此税ハ

財産所有ノ權及ヒ入額ヲ得ルノ權ヲ轉移スル
カ如ク財産ニ管スル權ヲ移ス事契約ニ由テ義
務ヲ負フ事契約上ノ義務ヲ免カル、事訴訟ノ
裁判ヲ言渡ス事債主數人ニ財産ヲ分配スルニ
付訴訟法ニ從ヒ其順序ヲ定ムル事等アル片ニ
於テ課セラル可ク此等ノ類ニ非サル証書ニ付
テハ定額税ヲ課ス可シ

遺物相續遺囑遺贈及生存中贈遺
ノ税

此税ハ法律ニ循フテ死者ノ遺物ヲ相續スル其

親族中ノ者若クハ遺囑贈遺及ヒ生存中贈遺ヲ
受タル者ヨリ納ム可キ税ニシテ遺物ヲ相續シ
又ハ遺囑贈遺ヲ受クル者ハ死去ノ日ヨリ六箇
月内ニ此税ヲ納ム可ク若シ否ラサレハ二倍ノ
税ヲ課セラル可シ

凡テ遺物相續又ハ贈遺等ノ如ク價ヲ得スシテ
財産ニ管スル權ヲ轉移スルニ付テハ不動産入
額ノ二十倍ヲ資本金トシ其資金ノ高ニ准シテ
其税額ヲ定ムルナリ故ニ不動産ノ入額千トラ
ンクナル者ハ其元價ヲ二万フランクトシ之ニ

税ヲ課ス可ク若シ入額ヲ秤ルニガテ爭ヲ生ス
ル時ハ其掛官吏秤價人ヲシテ之ヲ定メシムル
ナリ又動産ニ付テハ本人ノ申立ニ從ヒ此税ヲ
納メシム可ク若シ其申立正シカラサルハ官
ヨリ之ヲ取糾スヲ得可シ而シテ此税ハ親族
ノ級愈遠ケレハ其額愈升リ宗系親譬へハ尊屬
親ヨリ卑屬親ニ傳フル者ハ生存中ノ贈遺ニシ
テ百ニ付キニ「フランク」五十「サ」チ「ム」遺物相
續又ハ遺囑贈遺ニシテ百ニ付キ一「フランク」ト
ス又傍系親ニ傳フル者ハ「ム」「フランク」五十「サ」

チームヨリハフレンクニ至ルヲ限リトシ其他
親族ニ非ル者生存中或ハ遺囑ノ贈遺ヲ受ルニ
付キテハ百ニ付キ九フレンクトス

右ノ外婚姻ノ契約ニ因テ定ムル贈遺及ヒ夫婦
ノ間ノ贈遺ニ付テハ別ニ規則アリテ其税額前
ニ記スル所ヨリ更ニ少ナシトス

償ヲ得テ財産ヲ讓渡ス税

此税ハ賣買ノ時及ヒ代金又ハ他物ト交易ヲ爲
シテ諸物品ヲ讓渡ス時ニ納ム可キ税ニシテ其
税ハ不動産ニ付テハ讓渡直段ト讓渡ニ付テノ

費用高トヲ合シタル高ニ付キ若干ト定ム可ク
若シ其譲渡直段眞ノ價ニ足ラサル片ハ税官ヨ
リ秤價人ヲシテ其價ヲ秤定セシムルヲ得可シ
凡テ此税ハ不動産ナル片ハ百ニ付キ四「フラン
ク」トシ其外百ニ付キ一「フラン」ク五十「サ
ンチー」ムノ登記税ヲ加フ故ニ總テ五「フラン」ク五十「サ
ンチー」ムトシ動産ナル片ハ只百ニ付キ二「フラ
ンク」トス

義勢契約ノ税義勢免除ノ税

義勢契約ノ税ハ通例百ニ付キ一「フラン」クトシ

其税、義勢契約書ノ金高ニ准シテ之ヲ定ム但
シ借家証書、賣買証書ニ付テハ別段ノ規則アル
ニ因リ左ニ之ヲ記サレニ借家証書ノ税ハ百フ
ラシクニ付キ二十サレチムトシ其証書面ニ
掲タル年數間ノ家賃總高ニ准シテ其税ヲ課ス
ルナリ又商業約定ノ性質アル賣買証書ノ税ニ
付テハ千八百五十九年六月十一日ノ會計律法
ニテ記録税ノ通常ノ法ヲ改正セシト左ノ如シ
凡テ私ニ取結ヒタル約條書ハ之ヲ記シタル日
ヨリ三箇月以内ニ其記録ヲ受ク可シ若シ否ラ

サル片ハ其過料トシテ二倍ノ税ヲ拂ハシム可
シ然ルニ賣買証書ハ其例外ニシテ之ヲ作ルノ
時ハ只二フランクノ定額税ヲ納ム可ク若シ此
証書ノ事ニ付キ詞訟ヲ生シ官ノ裁決アリシ時
ニ非サレハ平均税ヲ納ムルニ及ハス
又義勢ノ免除ノ証書ニ付キ納ムル税ハ百フラン
クニ付キ五十「サンチム」ス

第五 印紙税

印紙税トハ官ヨリ賣却スル印紙ノ税ニシテ公
私ノ諸証書ヲ以テ人ノ權利ヲ証シ又ハ之ヲ裁

判所ニ差出ス可キ爲メ悉ク印紙ヲ用ク可ク法
律上ニ掲定シタル者ニ非サレハ此規則ヲ免ル
、コヲ得ス但シ此印紙ニ二類アリテ其別ハ左
ニ記スルカ如シ

大小形ヲ異ニスル印紙

此印紙ハ其大小ニ從ヒ其價ヲ異ニスル者ニシ
テ五十「サンチム」、一「フランク」、一「フランク」五十
「サンチム」、二「フランク」、三「フランク」ノ五種トス
新聞紙ハ出板ノ事ニ管シ設ケタル新法ニ據リ
ハ「セーヌ」州及ヒ「セーヌエオワズ」州ニ於テ刊行

スル者ハ一葉ニ付キ五「サンチー△」其他ノ諸州
ニ於テ刊行スル者ハ二「サンチー△」トス又貼附
スル引札ノ類ハ其大小ニ從ヒ五「サンチー△」ヨ
リ二十「サンチー△」ニ至ル迄ノ差アリ

又官財ノ勘定役ヨリ渡ス所ノ受取書ハ二十「サ
ンチー△」ノ印紙税ヲ課ス可シ蓋シ官ニ金額ヲ
納ムル者ハ必ス此受取書ヲ得可クシテ此受取
書ヲ得ルヲ諾セス以テ印紙税ヲ免レントス可
カラス

金額ニ應シ増ス可キ印紙

此印紙ハ証書面ノ金高ニ准シ増ス可キ者ニシ
テ商賣ニ管スル諸証書、諸切手、爲替手形ハ皆此
税ヲ納ム可シ而シテ此税ハ百フランク又ハ百
フランクノ缺數ヨリ五百フランク迄ハ五サン
チームトシ五百フランク以上千フランク迄ハ
五十サンチームトス其余ハ千フランク又ハ千
フランクノ缺數毎ニ五十サンチームヲ増ス可
シ

又此印紙ハ會社入金証書ニモ用フ可ク其税ノ
割合ハ結社年限十年以下ノ者ハ資本金百フラ

シクニ付五十サンチムニシテ十年以上ノ者
ハ凡テ百フランクニ付キ一フランクトス而シ
テ總体此税ヲ証書發出ノ時ニ拂ノ時ハ一時ニ
許多ノ金額ヲ要スルヲ以テ年賦ニシテ之ヲ納
ムルヲ得可シ

印紙ヲ用ヒサル者ノ罰則

印紙ヲ用フ可キ規則ヲ犯シタル片ハ其場合ニ
從ヒ各々差異アル罰金ヲ言渡ス可キフ法トス
故ニ印紙ヲ用ヒサル商賣諸証書ハ印紙税ノ外
其金高百ニ付キ六ノ罰金ヲ出サシム凡ソ通常

ノ証書ニ付テハ印紙ヲ用ヒスト雖モ敢テ其約
條ノ効ヲ失ハシムル事ナカル可キ者トス然レ
トモ商賣ノ証書類ハ別段ニシテ印紙ヲ用ヒス
又ハ税額ノ不足ナル印紙ヲ用ヒシ切手或ハ爲
替手形ハ罰金ヲ言渡サル、ノ外其切手又ハ手
形ヲ所有スルニ付テノ權利ノ一分ヲ失フ可シ

第六 品物入府税

若シ邑ノ歲入不足スルキハ品物入府税ヲ設ク
ルヲ得可シ抑此入府税ハ邑ノ資用ニ供スル爲
メ一邑内ニハル所ノ消費物ニ課スル税ニシテ

之ヲ設ルハ邑會ノ申立ニ因リ皇帝參議院ニ謀
リタル上勅命ヲ以テ之ヲ允許ス可シ又千八百
六十七年七月二十四日ノ邑會ニ管スル法律ニ
テ品物入府税ヲ停止シ又ハ之ヲ減スル事ヲ獨
決處斷スルノ權ヲ邑會ニ任シ加フルニ其税額
ヲ増シ其年期ヲ延スノ權ヲ邑會ニ許シタリ但
シ入府税ニ管係スル諸般ノ法則ヲ制立スル事
新ニ税ヲ設クル事從前在來ノ税ヲ増ス事等ハ
參議院ニテ發スル所ノ勅命ヲ以テ之ヲ允許ス
可シ

第四款 會計検査局

會計検査局ノ立方及ヒ此裁判所

ノ性來

會計検査局ハ會計官吏ノ曲直ヲ判シ理財ノ諸
條目ヲ検査シテ以テ官府理財上ノ監督ヲ爲サ
シムル爲メ特ニ設ケタル裁判所ニシテ其職負
ハ第一長官、三局長官、三局判事、判事補、判事見
習アリ就中判事ハ審判ニ臨ミ論議ヲ爲シ投言
ヲ爲スノ權アリト雖モ判事補及ヒ見習ハ見込
書ヲ作りテ自己ノ見ヲ述フルノミニテ議決投

言ヲ爲スノ權ナシ

第一長官、三局長官、判事、判事補ハ終身奉職ノ者
タリ又此裁判所ニハ大檢事アリテ會計官吏ヲ
シテ其掌ル所ノ計算ノ正整ナルヲ得セシムル
ニ注意シ若シ其計算不正ナルハ其官吏ニ對シ
法律ニ定ムル所ノ刑ヲ申立ルヲ任トス

會計檢査局ノ權限及其裁決

會計檢査局ハ諸ノ會計官吏ヲ審判スルノ權アルニ因リ會計諸官吏ハ何人ヲ問ハス其勘定書ヲ一定ノ期日內ニ會計檢査局ノ書記局ニ差出

二
七
五

三
四
五
六
七
八
九
十

ス可シ然ルハ検査局之ヲ検査シ正當ナレハ
兼可ノ言渡ヲ爲シ若シ官吏國ニ對シ負債アレ
ハ其高ヲ出ス可キノ言渡ヲ爲ス可シ

通例諸ノ勘定書ハ凡テ本人ヨリ直ニ之ヲ會計
検査局ニ差出ス可キヲ法トス但シ邑病院貧院
等ノ勘定書ニシテ其收額三万フランクニ過サ
ル者ハ此限ニアラスシテ此等ノ勘定書ハ參事
院之ヲ検査ス可シ但シ其裁決ニ服セサレハ之
ヲ検査局ニ止控スルヲ得可シ

違算ナキノ公告

會計検査局ハ各宰相作ル所ノ勘定書モ亦之ヲ
監視スル、權アリ故ニ諸宰相ハ自カラ掌ル所
ノ會計上ヲ取扱方及ヒ其宰相局ノ定額金ノ用
方等ヲ勘定書ニ作り會計事勢宰相ハ會計ノ總
勘定書ヲ作り之ヲ検査局ニ差出ス可シ然ル片
ハ検査局ニテ各宰相ヨリ出ス所ノ勘定書ト既
ニ検査シタル所ノ會計諸官吏ノ勘定書トヲ照
査シテ彼此ノ符合スルト否ヲ檢視シ合算ナレ
ハ之ヲ公告シテ以テ其違算ナキヲ証明ス

會計検査局ノ申告

會計検査局ハ毎年申告書ヲ作り検査局ニ於テ
取扱フタル事務ノ大綱領ト官ノ會計上ニ於テ
改正變易ス可キ條件ノ見込トヲ記シテ之ヲ皇
帝ニ差出スナリ

第三篇 行政上訴訟ノ裁斷

第一章 總論

行政上訴訟裁斷ノ性來

若シ行法官法律又ハ行政定規ニ掲クル所ニ依
リ守ル可キ義務ヲ犯シ又ハ官民互相ノ間ニ於
ケル契約ヲ破ルニ因リ平民行政官ニ對シテ訴

訟ヲ爲スモノヲ行政上ノ訴訟ト云フ故ニ此類
ノ訴訟ハ大抵民權ヲ害傷スルニ因ルナリ
又行政官其權限内ニ於テ法律上ニ定ムル所ノ
法則ニ從ヒ爲シタル處置若シ人民ノ爲メ害ア
ルキハ其損害ヲ受タル人民之ヲ訴ヘテ其裁決
ヲ受ント願フヲ得可シト雖モ官ニテ之ヲ聞
届ケサル時ハ敢テ之ヲ上控ス可カラス是レ蓋
シ其處置ノ民權ヲ害傷スルモノト謂フ可カラ
サルニ由レハナリ試ミニ今其一例トシテ直税
ニ管スル條目ヲ掲ケンニ除税ノ訴ハ誤テ不當

新刊

行政訴訟
卷之二
第一章
行政官之職務
第二章
行政官之責任
第三章
行政官之監督
第四章
行政官之懲戒
第五章
行政官之免職
第六章
行政官之復職
第七章
行政官之退休
第八章
行政官之終身職
第九章
行政官之其他事項

ノ税ヲ課セシタルヲ目的トシテ之ヲ論辯ス
ル者タレハ行政上ノ訴訟ト謂ノ可シト雖ヒ除
税ノ願ハ損失ヲ受タルニ因リ正當ニ課セラレ
タル税ノ減除ヲ得ント請求スルニ在テ行政上
ノ訴訟ト稱ス可カラス故ニ其除税ノ願ニ付キ
州長ノ爲ス所ノ裁決ハ眞ノ行政上ノ處爲ナレ
ハ人民ヨリ之ヲ上控スルヲ許サル者トス
行政上訴訟ノ裁判所 即チ行政
裁判所
特別ノ裁判所ヲ設立シ以テ行政上訴訟ノ審判
ヲ爲スニ至リシハ分權ノ主意ニ基ク所ナリ若

シ然ラスシテ通常ノ裁判所ニ於テ是等ノ訴訟
 ラ審判スルノ權ヲ有セシメハ行政ノ權利及其
 時立ヲ妨クルニ至ラン又通常ノ裁判所ト行政
 裁判所ノ互ニ分立存在スルハ我國ノ舊例ニ基
 キテ既ニ千七百八十九年前ノ舊制度ニ於テモ
 行政上ノ訴訟ハ通常ノ裁判所ノ與知スル所ニ
 アラスシテ特立裁判所ノ權任ニ屬スル者トナ
 セリ
 行政裁判ノ權ヲ有スル官局ハ互ニ其類ヲ異ニ
 シ參事院、會計検査局、參議院等ハ眞ノ裁判所ニ

類シ又宰相、州長、郡長、邑長ハ訴訟ノ種類ニ因リ
之ヲ審斷スルノ權ヲ有シ一人ニテ其裁決ヲ爲
ス者ナリ

行政訴訟上ノ普通ノ裁判役

行政訴訟上普通ノ裁判役トハ行政上諸般ノ訴
訟ノ裁判ヲ掌ル者ニシテ凡ソ法律上ニテ特別
ナル裁判所ノ管轄タル事ヲ別段ニ定メサル事
務ハ普通裁判役ノ管轄内ノ者トス但シ州ノ參
事院ハ普通裁判役ノ任ニアラサルヲ方今人ノ
通知スル所ニシテ嘗テ此訴訟ノ裁判ハ萬事參

新編

卷之四

法律

新編

事院ノ司ル所ト思ヒ做セシカ共和政治立國第
八年第五月廿八日制立ノ法律ニ於テ其管轄
ル事件ヲ別段限定セシヨリ以來其行政上普通
ノ裁判役ニ非ルヲ判然タルニ至レリ依テ方今
ハ別段ノ裁判所ニ於テ裁判ス可キヲ特ニ定
メサル事務ノ訴訟ハ總テ掛リ宰相ノ裁決ヲ取
レ可キ者ト定メ宰相ヲ以テ行政訴訟上ノ普通
裁判役ト爲シタリ但シ宰相ノ裁決ニ服セサレ
ハ之ヲ參議院ニ上控スルヲ得可シ

左 參事院、宰相、州長、郡長、邑長及ヒ參議院ノ權

任ヲ論セントス然レモ先ツ其前ニ司法行政二
官ノ權限抵觸ノ事ヲ記スル一切要ナルヲ以テ
第一ニ之ヲ記セントス

司法行政二權ノ抵觸ノ事

權限ノ抵觸一名簡畧ニ抵觸ト云ヘルモハ民

法裁判所

即チ司法
裁判所

ニ於テ裁判ス可キ理アラサ

ル訴認ヲ其裁判所ニ持出シタルヲ行政官ヨリ

論辯スルヲ云フ者ニシテ此等ノ事件アル時ハ

之ニ管係シタル裁判所々在ノ州長ヨリ其裁判

所ニ對シ其訴訟ハ已レカ權限内ニアラサル旨

ヲ申渡サシメント求ムルナリ然リト雖モ若シ
 其裁判所ニ於テ之ヲ肯セサルハ州長權限抵
 觸ニ付テノ申告書ヲ作り之ヲ參議院ニ出ス可
 シ然ルハハ暫ク其裁判所ノ訴訟ヲ止メテ同院
 裁斷ヲ待ツ可シ而シテ其申告書ヲ參議院ノ裁
 判ニテ認許シタルハ民法裁判所ニテ其訴訟
 ヲ審判スルノ權ヲ失シ行政裁判所ニ於テ其訴
 訟ノ審判ヲ爲スノ權ヲ得可ク又參議院ニテ其
 訴訟ハ民法裁判所ノ權限内ニアル者タルノ密
 判ヲ爲スハ州長ヨリ出スル所ノ申告書ヲ取

消シ其訴訟ハ曾テ持出シタル民法裁判所ニ於
テ之ヲ審判ス可キ者トス

第二章 參事院

參事院ノ管轄

參事院ハ左ニ記ス所ノ五件ニ管シテ生スル所
ノ行政訴訟ヲ審判スルノ權アリ

第一 直税

第二 建築工業

第三 大道

第四 國民公同ノ財産

第五 邑州ノ議負選舉

以上五箇ノ條目ヲ掲ケ次序ヲ追テ左ニ之
ヲ記セントス

第一 直税

參事院ハ直税ニ付キ平民其税ヲ誤テ課セラレ
タルヲ論辨シ或ハ税ノ過當ナルヲ論辨シテ除
税又ハ減税ノ訴ヲ爲ス者アレハ之ヲ審判ス可
ク又州長ハ平民或ハ不幸ニ罹リ其入額ノ一部
又ハ其全部ヲ損シタルニ因リ除税又ハ減税ノ
數額ヲ爲ス者アレハ之ヲ審判ス可シ

參事院ノ權任ハ直税ニ於ケル訴訟ヲ審判スル
ノミナラス直税ニ類スル諸税殊ニ道普請ノ税
ノ如キ者ニ管スル訴訟モ亦之ヲ審判ス可キモ
ノトス

參事院ノ直税訴訟ニ管スル任アル所以ハ直税
ハ名簿ニ由テ課スル者ニシテ之ヲ課スルハ行
政官ノ令ニ由リ且其令ヲ施行シ其令ノ解釋ヲ
爲ス等行政裁判所ノ任ニアルニ由レハナリ又
間税ハ名簿ニ由ルニ非ス運上目録ニ由テ課ス
ル者ニシテ其訴訟ノ通則ニ至テハ通常ノ裁判

所ノ任ニアル者トス

但シ時アリテハ間税モ亦直税ノ如ク名簿ヲ以テ課スル者アリ是レ則チ飲料税ノ數人合同ノ前納ニ於ケルカ如ク預メ定リタル者ニ限ル所ニシテ此等ノ事ニ付テハ間税ヨリ起ル爭訟ト雖モ行政裁判所ノ權限内ニアリトス

第二 建築工業

建築工業ニ付テノ訴訟ヲ審判スル參事院ノ任權ニ二箇アリ蓋シ其一ハ建築工業ノ受負契約ニ付キ官ト其施行人トノ間ニ生スル所ノ爭ヲ

審判ス可キニ在テ其工業ノ受負契約ヲ解釋シ
又ハ之ヲ施行スルニ付キ生スル所ノ爭ハ總テ
參事院ニ訴出ツ可シ又其一ハ官府或ハ官府ニ
代テ建築工業ノ施行ヲ引受ル者ニ對シ平民其
施行ノ爲メニ損害ヲ受タルヲ訴出スルニ在テ
工業施行引受人ノ官許ヲ得テ掘窪メタル土地
ノ償ヲ得ルニ付キ平民ヨリ訴訟ヲ爲スカ如キ
ハ則チ參事院ニテ之ヲ審判ス可シ

第三 道路

參事院ハ道路ノ事ニ付キ生スル所ノ故障ヲ審

判スルノ權アリ蓋シ此事ニ付キ其尤モ重大ナル職務ハ大道ノ規則ヲ犯シタル違式ノ罪ヲ罰スルニアリトス而シテ此犯人ハ罰金ノ言渡ヲ受ケ法ニ違背シタル工業ハ破毀セララル可シ

第四 國民公同ノ財産

國民公同ノ財産ニ付キ生スル所ノ爭訟ヲ審判スルハ大抵司法裁判所ノ權任ニアリトス是レ國モ亦私有ノ財産アルニ因リ其財産ニ付キ爭ヲ生スル時ハ恰モ平民ニ於ケルカ如ク司法裁判所ノ審判ヲ受ク可キニ因ル

故ニ一國ト平民トノ間ニ共同ノ財産ニ付キ生
スル所ノ争ハ司法裁判所ノ審判ヲ受ク可シト
雖モ又時アリテ參事院ノ審判ヲ受ル訴訟アリ
譬ヘハ國民共同ノ所有ニ屬スル森林ノ樹木ヲ
賣拂フ事及ヒ藥泉場貸與ノ事ニ付キ生スル争
訟ノ如キハ參事院ノ與知スル所ナリ

第五 議員ノ選舉

州邑ノ議員ノ選舉ヲ取消サントスル訴ハ參事
院ニ申立ツ可ク選舉ヲ得タル者ノ身上ニ管轄
スル争ニ非サレハ通常ノ裁判所ニ於テ審判ス

可カラス故ニ選舉ノ仕方不正ナルヲ目的トシ
選舉ヲ取消サントスル訴ハ參事院ニ於テ之ヲ
審判ス可ク而シテ民選議院ノ代議士選舉ノ仕
方ニ付キ生スル所ノ爭訟ハ民選議院ニ非レハ
之ヲ審判ス可カラス

行政上訴訟ニ付キ參事院ニ訴訟
スルノ法則及ヒ裁決ノ公ケナル

事、千八百六十五年六月廿一日ノ

法律及ヒ同年七月十二日ノ勅命
千八百六十五年六月廿一日ノ法律ヲ以テ參事

院ニ出訴スルニ付テノ法則ヲ大ニ改正セリ蓋
シ此法律ヲ設クル以前ハ參事院ノ裁判公ケナ
ル事ナク又告訴人ニ言語ヲ以テ論辨スルコトヲ
許サス書面及ヒ覺書ヲ以テ論辨ヲ爲サシメタ
リシカ千八百六十五年ノ法律ヲ設クシ以來參
事院ノ訴訟法則中ニ裁判ヲ公ケニ爲シテ衆ノ
來聽ヲ許シ言詞ヲ以テ論辨スルヲ許ス等ノ規
則ヲ加ヘテ大ニ裁判ノ面目ヲ改メタリ又此時
ニ於テ參事院ニ檢事局ヲ設ケ檢事ハ各訴訟ノ
裁判ニ臨ミテ其申立ヲ爲ス蓋シ方今ハ州廳大

書記ヲシテ檢事ノ職ヲ行ハシム

參事院ニ出訴スル時ハ先ツ訴狀ト憑據ノ書類
トヲ參事院ノ書記局ニ出ス可ク其訴狀ハ本人
又ハ代書師或ハ參議院覆審院等ノ代言人若ク
ハ別段ノ名代人之二姓名ヲ自署ス可シ而シテ
其裁判ヲ爲スニハ四日前ニ書面ヲ以テ本人又
ハ其代人ヲ呼出ス可シ又其本日ニ至テハ參事
院議員一人其申立ヲ爲シ本人又ハ其代言人言
詞ヲ以テ論辨シ檢事局其說ヲ述ヘ參事院之ヲ
裁判ス可シ但シ其裁判ハ公クニ之ヲ爲シ其裁

判書ニハ其裁判ノ所以ヲ記ス可シ又其裁判書
ノ正本ヲ保テテ其寫ヲ管係アル者ニ渡ス等ハ
參事院ノ書記官之ヲ掌ル可シ

參事院ノ裁決ヲ上控スル方法
告訴人ノ抗辯シタル時參事院ニテ裁決ヲ爲シ
タルニ於テハ其裁決ニ付キ故障ヲ述ルヲ得
可ク又其裁決ヲ上控スルハ裁決公告ノ日ヨリ
三箇月内ニ參議院ニ之ヲ爲ス可シ

第三章 宰相、州長、郡長、邑長

行政上訴訟ニ付キ宰相ノ任權

宰相ハ己レノ擔任スル公務ノ事ニ付キ生スル
争ニシテ法律上ニ於テ他ノ官吏ノ任權ニ屬ス
ルヲ定メサル訴訟ノ審判ヲ爲ス可ク又州長
ノ裁決ニ服セスシテ上控シ直ニ參議院ニ上控
セサル訴ヲ審判ス可シ而シテ其審問ハ宰相ノ
書記局ニ於テ之ヲ爲シ宰相ノ裁決ハ管條本人
ニ公告シ其公告ノ日ヨリ三箇月内ニ之ヲ參議
院ニ控訴スルヲ得可シ今試ミニ其一例ヲ舉ク
ルニ養老銀ノ事ニ付キ宰相ノ爲シタル裁決ハ
此類中ノ者トス

行政上訴訟ニ付キ州長ノ權任

州長ハ別段ノ法律ニ由リテ行政上ノ訴訟ヲ審判ス可シ試ミニ其一例ヲ舉クルニ第一等第二等ノ人ノ爲メ危害ヲ生スル建造物又ハ人ノ健全ヲ害スル建造物等ノ允許ヲ受クルニ付テノ訴訟ニ付州長ノ爲ス所ノ裁決ハ此類ナリトス律法ノ他ノ規則ニ於テ州長ハ參事院ニ於テ數箇ノ爭訟ヲ審判ス可キ事ヲ決定シ又千八百六十五年六月廿一日ノ參事院ニ管係シタル法律第十一條ニ於テ參事院ニ於テ州長ノ審判ス可

キ事柄ハ以來參事院ニ於テ之ヲ審判ス可キ事
ト定ム而シテ州長ノ裁決ニ服セス上控セント
欲スル時ハ何事ニ限ラス法律ヲ以テ州長ノ審
判ヲ受ケ更ニ參議院ニ上控シ得可シト定メタ
ル事ハ直ニ之ヲ參議院ニ上控スルヲ得可シ又
州長ノ命令或ハ其任外ニ屬スルカ或ハ權ヲ擅
ニシタルニ係リ之ヲ取消サントスル片ハ直チ
ニ參議院ニ訴フ可ク其他ノ場合ニ於テハ州長
ノ裁判ヲ先ツ州長ノ上官タル宰相ニ上控ス可
ク猶宰相ノ裁決ニ服セサル時ハ更ニ之ヲ參議

院ニ上控スルヲ得可シ

行政上訴訟ニ付キ郡長及ヒ邑長

ノ權任

行政上訴訟ニ付キ郡長ノ權任ノ例トシテ第三

等ノ人ノ爲ノ危害ヲ生ス可キ建造物又ハ人ノ

健全ヲ害スル建造物ヲ造ルノ許可ヲ與ヘ或ハ

之ヲ抗ムノ裁決ヲ記ス可シ但シ此裁決ハ參事

院ニ上控スルヲ得可シ又邑長ノ行政上訴訟ニ

付キ審判ノ權ヲ行フノ例ヲ舉クルニ間税取立

役ト飲料税ヲ納ムル者トノ間ニ賣高陳述ノ事

ニ付キ生シタル争訟ヲ假リニ審判スルハ此類
ナリトス

第四章 參議院

行政上訴訟ニ付キ參議院權任、
性來及其區別

參議院ハ行政上訴訟ニ付キ最上ノ審司タリ然
リト雖モ前文ニ論シタル如ク其訴訟ニ付キ自
カラ之ヲ裁判スルノ權ナク帝ノ允許ヲ經テ確
定ス可キ勅案ヲ議定シ之ヲ決定スルハ帝ニ在
ルヲ猶行政事務ニ於クルト異ナルヲナシ

參議院ノ行政上訴訟ニ付テノ職務ニ二種アリ
其一ハ下級諸裁判所即チ宰相、州長、參事院等ノ
裁決ニ服セスシテ上控スル者ヲ審判ス可キニ
在リテ此場合ニ於テハ公事ノ本案ヲ吟味ス又
一ハ覆審院ノ如キ職掌ヲ有シ行政諸官員ノ其
權ヲ擅ニシ又ハ法ニ背キタル裁決ヲ爲スニ付
キ人民ノ爲ス所ノ上控ヲ審判スルニ在リトス
行政上訴訟ニ付キ參議院議決ノ
別段ノ法則
行政上ノ訴訟ニ付キ參議院ニ上控スル者アル

ハ先ツ之ヲ斷議課ニ附シ而シテ其課長ハ參議
員又ハ願訴狀取扱役或ハ參議員見習ニ委任シ
テ其啓告ヲ爲サシム但シ斷議課ハ事ノ太々重
大ナラサル者ハ裁決ス可シト雖モ多クハ下吟
味ヲ爲スノ任アル者ニシテ確定ノ論議ニ至リ
テハ參議院ノ總會議ヲ以テ定ムルニアリトス
其總會議ハ斷議課ノ議員ト國帝ノ命ヲ奉シタ
ル參議員十名トヲ以テ之ニ充テ斷議課長又ハ
參議院長之ニ上席ス而シテ其議決ハ公ニ爲シ
斷議課議員一人其事由ヲ啓告シ次テ原告被告

ノ代言人ニ對決ヲ爲サシム而シテ後政府ノ目
代其說ヲ述ヲ可シ但シ政府目代ノ職ニハ勅命
ヲ以テ定メタル願訴狀取扱役三名之ニ任スル
ナリ

參議院ノ訴訟法

參議院ニ上控スル者ハ裁決公告ノ日ヨリ三箇
月内ニ出訴ス可ク原告人ハ參議院及ヒ覆審院
ノ代言人ヲシテ其上控ヲ爲サシメ其代言人控
訴狀ニ姓名ヲ自署スルヲ常トス但シ原告人代
言人ヲ任スルニ及ハサル場合ハ左ノ如シ

第一 直税ニ管係スル上控

第二 運輸ノ取締ニ管係スル上控

第三 行政官ノ其任權外ニ屬スル命令

及ヒ其權ヲ擅ニシタル命令ヲ取

消サントスル上控

第四 州會、邑會議員ノ選舉ニ管係スル

上控

第五 養老金ニ管係スル上控

右五種ノ上控ヲ爲スニハ其原告人上控ノ趣
意ヲ載ヒタル訴願狀ト其上控ニ付キ憑據ト

爲ル可キ書類トノ參議院ノ書記局ニ差出ス
可シ然ルハ斷議課長ヨリ書面ヲ以テ被告
人ノ呼出シ其書付ハ之ヲ記シタル日ヨリ二
箇月内ニ之ヲ送達ス可シ但シ一方抗傳シテ
受ケタル裁判言渡ハ故障ノ述ルヲ得可ク
又雙方ノ面前ニ於テ言渡シタル裁判ト雖モ
其再吟味ヲ願フヲ得可ク殊ニ參議院ニ於
テ訴訟ノ緊要ナル法式ニ背キタル時ハ其再
吟味ノ願フヲ得可シ

29
5
イ

佛國政典卷之五終

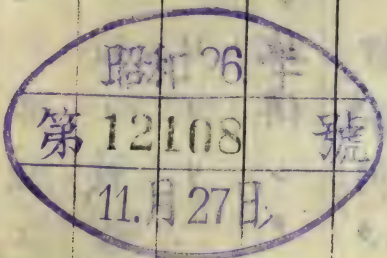
三
五

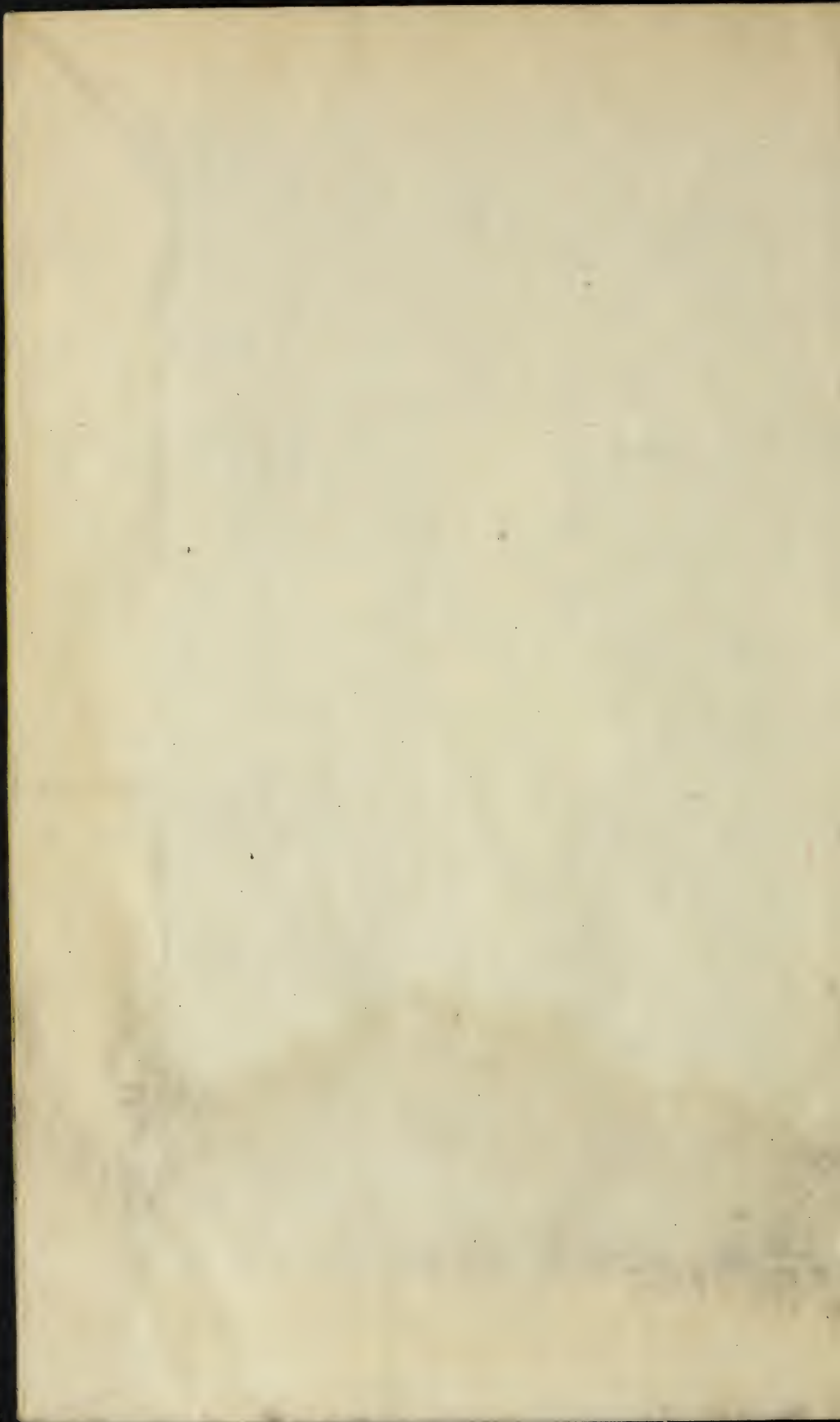
五

五

五

五



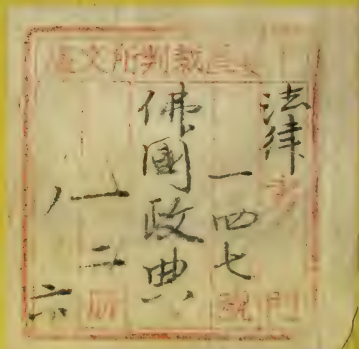


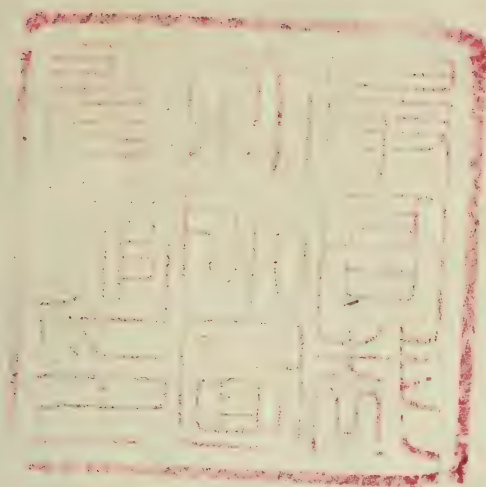


佛國政典

六

正下和同第百五拾号六
下洋旧第百四十二号六





University of Illinois
Library at Urbana-
Champaign
IAS - Oak Street



最高裁判所圖書印

水戸裁
管内
區裁
下妻
所

KJV
233
J73163
1873
V. 6

佛國政典第六卷

第三部

私法 即民法

總論

論ス

私法ノ釋義及ヒ私法ノ不可缺ヲ

夫レ私法ハ法律ノ一部ニ屬シ人々互ニ相關係
交通スルノ法ヲ規定スルモノニテ凡ソ人々ノ
身ノ上、人々ノ權利ヨリ財産及ヒ財産ノ種類、財

六

民法

産ノ遺取ヲ初メ總テ人民間ニ於テ取結フ契約
一切ノ事ヲ定ムル法ナリ

私法ノ根元ヲ論ス

抑々私法ハ我法律中ノ最要ナル一部ヲ爲シ且
方今我國ニテ法律一致ノ實行ヲ呈セシメタル

諸法

即民法商法訴訟法ノ如キ

記スル

所ナリ然ルニ千七

百八十九年ノ前ハ法律一致ノ事ナキノミナラ

ス之ヲ行ハント欲スル所得テ爲ス可カラサル

ノ障碍アリ之ヲ例フレハ佛國內某地ニ於テハ

當時尚ホ羅馬ノ法律行ハレ又某地ニ於テハ互

ニ相異リタル無數ノ例法即ノ慣習法專ラ行ハレ接

境ノ地ニテモ纔ニ地ヲ變レハ各々相異リタル

例法ヲ取用シタリ斯ク各地ニ其法律相異ナリ

タルニ因テ諸事ニ付キ人々ニ於テモ妨碍難澁

アルノミナラス國政一致ノ事ニ於テモ一大妨

害ヲ爲セリ

「ナポレオン」民法書ノ編著ヲ論ス

千七百八十九年後政府ヨリ法律一致ノ不可缺

事ヲ布告シ千七百九十一年ノ憲法ニ全國通用

ノ私法ヲ編著ス可キ旨ヲ決定シタル一箇條ヲ

掲ケタリシカ國事紛冗遂ニ斯ク至要ナル企ヲ
施行スルニ違アラス眞ニ之ヲ實地ニ行ヒシハ
全ク「コンシユラ」第一世「ナポレオン」第一等ノ時
ニ在リテ第一世「ナポレオン」第一等「コンシユル」
タリシ時トロンセー、ビゴートプレアメー、ホル
タリー、マルビールノ四名ヲ其掛ニ選ミ之ニ民
法ノ草案ヲ作爲スルヲ任シ民法一部ヲ著ハシ
覆審院及ヒ上等裁判所ノ監定ヲ受ク續テ參議
院於テ三十六法ヲ修整シ民選議院ニ於テ之
ヲ議決シタリ此法ヲ千八百零四年三月三十一

日ノ律法ニテコードシビル、デ、ノランヒ、西人

民ノ義ヲ法トト表名シテ一部ト爲シタリシカ千

八百零七年ニ至リテ更ニコードノボレオシノ

名ヲ下シ其後又ナポレオシノ名ヲ除キタレバ

千八百五十二年ニ至リテ再度ナポレオシコー

ドノ名ニ復シタリ

ナポレオン民法書ノ區別ヲ論ス

ナポレオン民法書ハ三篇ニ分チ第一篇ハ人事

第二篇ハ財産第三篇ハ財産所得ノ諸法及ヒ契

約取結ノ諸法ヲ論シ又毎篇ヲ分ツテ卷ト爲シ

卷ヲ分ツテ章ト爲シ章ヲ分ツテ款ト爲セリ蓋
ニ書中ノ各條目ハ總テ之ヲ一連ト爲シテ都合
ニ二百八十一條ヲ成シ一條毎ニ分ツヲ以テ
大ニ搜索及ヒ指示ノ便ヲ極メ一條目ヲ引出ス
ニ方ツテ第何條タルヲ示スノミヲ以テ足レリ
トシ敢テ何篇何卷何款タルヲ示スノ煩ヲ要セ
サルナリ

ナポレオン民法書外ノ諸法ヲ論
ス

ナポレオン民法書ハ私法ノ全絡ヲ成リ故ニ

第一世ナポレオン帝ノ時ニ於テ他ノ諸法ヲ以
テ之ノ補足シ先ツ第一ニ千八百零六年ニ訴訟
法ヲ創定シタリ訴訟法ハ各人民其權利ヲ行ヒ
又其權利ノ保全ヲ達スル諸法則ヲ定ムル法ニ
シテ且民法裁判所ニ出訴スルニ付テラノ手續
及ヒ裁判執行ノ方法ヲ定ムルモ亦訴訟法ニ在
リトス其後千八百廿一年ニ商法ヲ創定シ之ヲ
布告シタリ蓋シ商法ハ商業ニ管スル諸法則及
ヒ商人間ノ關係交通ニ拘ハリタル別段ノ法則
ヲ記載スルモノナリ其外ナポレオン第一世帝

ノ頃ニ創定シタル律法ヲ掲レハ千八百十一年
ニ於テ施行セラレシ治罪法刑法ノ二法ヲ遺ス
ヲ得ス但シ此二法ハ私法ニ屬セサルカ故ニ茲
ニ之ヲ論セス別ニ其條ヲ舉ケテ後ニ之ヲ論セ
ントス

諸法纂定ノ利益ヲ論ス

諸法民法商法訴訟法治罪
法刑法ノ如キヲ云フ纂定シタルニ由テ
著大ナル進歩ノ功ヲ呈ハセリ是レ其趣向諸法
ヲ一序次ノ中ニ置キ綿密ニシテ且明瞭ナルヲ
得セシメタルニ因リテ衆人ヲシテ解シ易カラ

シメ從テ法律ノ施行大ニ容易ナルニ至リシ所ナ
リ蓋シ是等ノ諸法中或條目ハ其後ノ法律ニテ改
變シタレ是等ノ諸法ハ即チ目今尚我國法律ノ
基本タルモノトス

民法目次ノ區別

民法ノ目次ハ左ノ順序ニ由テ之ヲ分ツ

第一 人事

第二 財産及財産ノ種類

第三 財産ヲ得ル種々ノ法

第四 契約及契約ノ種類

第五 訴訟ノ手續

右順序ニ從ヒ五目ヲ五章ト爲シ各箇ニ之ヲ追記
セントス尤モ首メノ四章ハ殆ト「ナポレオン」民法
書ノ區別ニ倣ヘリ然レモ「ナポレオン」民法書ハ第
二卷財産ヲ得ルノ方法ノ篇ニ契約ノ事ヲ合記シ
タレモ余ハ之ヲ別章ニ記スルヲ必要ナリト思フ
ニ因リ別ニ一章ヲ掲ケテ之ヲ説述ス

右各目ノ穿鑿ヲ爲ス前ニ於テ先ツ此總論ヲ終成
セシカ爲メニ官民雙方ノ中間ニ在リテ公私ノ用
務ヲ辨濟スル者ヲ論ヒントス是レ此任アル者ハ

或ハ契約書ヲ認メ或ハ裁判役ノ助ケ或ハ原告被告ニ代リテ裁判所ニ於テ之レカ名代人トナリテ論辨シ又ハ之レニ助言ヲ爲シ或ハ裁判言渡ヲ執行スル等ノ諸事ヲ爲シテ律法ノ執行ヲ助クル所ノ者ノレハナリ

各人民ノ權利ヲ証シテ其權利ヲ行ハシムルノ用ヲ達スル役員

公証人、書記官、代書師、覆審院代言師、使吏、秤價人ハ何レモ裁判所附役員ノ名目ヲ有スル者ノ列ニ在リトス又其外裁判所附役員ノ名目ヲ有セサル代

言師及ヒ商法裁判所ノ代言師アリ次テ之ヲ論セ
ントス

諸裁判所附役員ニ共通ノ規則

凡テ裁判所附役員ト稱スル者ハ一箇ノ役員ニシ
テ其職務ハ法律上ニテ定メタル資助ヲ各裁判所
ト各人民即チ原告被告トニ爲スニ在リテ公然許可ヲ得
タル所ノ本務ニ於テハ恰モ一ノ株數ヲ有スルカ
如シ又此役員ハ原告或ハ被告ヨリ當然依頼ヲ受
ル時ハ之ヲ辭スルヲ得ス

又裁判所附役員ハ何レモ勅命ニ由テ任ヲ受ル者

ナレモ其任ニ當ルニ必要ナル條件ヲ具有セサル
可カラズ又其役員ハ誓詞ヲ爲ス可ク其職務ヲ行
フノ間ハ司法官ノ監督ヲ受ク可ク又預メ保証金
ヲ差出シ置ク可シ是レ在職中ノ犯罪一切ヲ訴フ
ル者ノ爲メニ差出シ置ク保証ニシテ其金高ハ公
ケノ貯金中ニ納ムル所ナリ又此等役員ノ最モ判
然タル性ヲ有シ大ニ他ノ諸有司ト異ナル所以ノ
モノハ己レカ役ヲ他人ニ讓傳フルヲ得可キニ在
リトス尤モ然ル片ハ跡役ト爲ス可キ者ノ姓名ヲ
申立テ國長ノ免許ヲ受ク可ク其者果シテ其職務

ヲ繼行フニ必須ノ條件ヲ具有セハ其許可ヲ得ル
「必然ナリ斯ク手續ヲ經テ其職ヲ讓リ渡ス片ハ
跡役ヲ者ヨリ先役ノ者ニ讓受ノ金高ヲ出ス可シ
右總論ノ終成シタルニ因リ更ニ各種ノ裁判所附
役員ヲ左ニ記列セントス

公証人

公証人_レハ一ノ役員ニシテ其任ハ本人ノ爲メ
官府書類ノ認方ニ準シテ公正ノ証書ヲ作爲シ且
其日附ヲ正カニシテ之ヲ預カリ並ニ其証書ノ本
書又ハ寫ヲ渡ス事等ニ在リトス但シ証書ノ種類

ニ由リテハ公証人作爲ノモノニ非レハ正當ノ者
トノラサルコアリ例ヘハ生存中贈遺ノ証書婚姻
ノ契約書書入質ノ証書等皆此類ニシテ其他ノ証
書ハ必スシモ公証人ニ依頼スルヲ要セスト雖凡
公証人ノ認メタルモノニ非レハ其証書公正ナル
コヲ得ス

又大切ノ証書類例ヘハ不動産賣買ノ証書ノ如キ
ハ大抵公証人ニ頼ミテ認メシムルヲ善トシ且然
ル時ハ故障差^{モラシ}違等ノ掛念アルコナシ

又公証人ハ諸事ニ臨ミ著大ノ役目アル者ニシテ

試ニ其例ヲ舉レハ公証人ハ各人ノ信任ヲ受ケ各人ノ權利ヲ逐一了知シタルヲ以テ屢々自己ノ助言ヲ與ヘテ各人ヲ差圖シ又ハ之ヲ輔佐スルノ依頼ヲ受ケ又契約ヲ取結フニ於テモ公証人ノ立會アルヲ有益ニシテ公証人ハ契約書ノ本旨又ハ契約書ニ認メ込ム可キ條件ヲ各人ニ明示シ又其認方ヲ明了綿密ナラシムルヲ以テ將來ノ故障手違ヲ防ク可シ

公証人ニ三等ノ別アリテ其職務ハ悉ク皆同一様ナルル其等級ニ從フテ管轄スル所ノ地ニ廣狹

リ上等裁判所ノ設アル都府ニ在ル者之ヲ第一等
ノ公証人トシ上等裁判所ノ管轄内ニ於テ其職務
ヲ行ヒ得可キモノトス故ニ巴里ニ在ル公証人ハ
巴里上等裁判所ノ管轄内ニ於テ其職務ヲ行ヒ得
可シ其他郡裁判所々在ノ地ニ在ル者之ヲ第二等
ノ公証人トシ本郡内ニ於テ其職務ヲ行ヒ得可キ
モノトス又縣裁判所々在ノ地ニ在ル者之ヲ第三
等ノ公証人トシ本縣内ニ於テ其職務ヲ行ヒ得可
キモノトス

書記官

グレヒエー

治安裁判所、郡裁判所、商法裁判所、上等裁判所、覆
審院等ノ諸裁判所ニハ書記官一名アリ書記官
ハ裁判席ニ於テ裁判役ヲ助ケ且ツ裁判言渡書
ヲ認メ其言渡書ノ正本ヲ保チテ其寫ヲ願人ニ
渡ス事等ヲ掌ル又書記官ハ自己ノ所屬タル裁
判所ニ助役一人カ若クハ數人ヲ申立テ裁判所
ノ兼諾ヲ得テ己レノ輔佐ト爲スヲ得可シ
又書記官ノ中治安裁判所附ノ書記官ハ他ノ諸
裁判所附ノ書記官ト全ク別格ノ權利ヲ有シ秤
價人不在ノ都府ニ於テハ公証人ト共ニ動産ノ

賣拂ヲ爲スヲ得可シ

代書師

郡裁判所及ヒ上等裁判所ニハ代書師

エー、ド、プレミ數人

アリ郡裁判所附ノ代書師ヲ「アブエー、ド、プレミ

エー、アンスタンスト云ヒ上等裁判所附ノ代書

師ヲ「アブエー、プレミ、ド、クルル、アンペリアルト

云フ其人負ノ多寡ハ裁判所ノ大小ニ由リテ定

限ナシ其任ハ兩裁判所ニ於テ訴訟ヲ爲ス原告

又ハ被告ノ名代ヲ爲シテ本人ニ訴訟ノ手續ヲ

差圖シ本人ノ名ニテ辯論書ヲ認メテ之ニ調印

シ其外總テ訴訟ニ付キ必要ナル書類ヲ作爲ス
ル等ニ在リ

代書師ノ勤向ハ斯ク訴訟ニ就キテ有用確實ノ
指圖ヲ爲スノ益アルモノトス故ニ代書師ハ審
理ノ爲メ及ヒ各人ノ爲メニ訴訟人若シ此等ノ
役名ヲ有セサル者ニ依頼セハ決シテ得可カラ
サル所ノ保護ヲ得セシムル者トス

參議院附代言師及ヒ覆審院附代
言師

參議院附代言師及ヒ覆審院附代言師ハ原告被

告ノ名代トシテ兩院ニ出席スル者ニシテ殊ニ
覆審院ニ於テハ之ヲ頼ムーヲ必要トシ訴訟ヲ
爲ス者ハ必ス兩院代言師ヲ以テ名代ト爲サ、
ル可カラス

覆審院代言師ハ願訴狀、覺書、論辨書等ニ調印シ
裁判席ニ於テ本人ノ憑據ヲ中立ハニ關知ス又
參議院ニ於テモ兩院代言師ノ職掌之レト同様
ナリト雖モ參議院ニ於テハ必スシモ代言師ヲ
頼ムニ及ハサル事柄アリ其事ハ前文參議院訴
訟法ノ條下ニ載記シタレハ今復々茲ニ之ヲ贅

言セス

使吏

各郡ニハ使吏數人アリテ郡廳所在ノ地又大切
ノ地方ニ居ルナリ其役目ハ原告被告ノ者ニ裁
判所呼出書ヲ渡シ又裁判言渡書ヲ送り其書ノ
通ニ執行ハシムル等ニ在リテ裁判言渡書又ハ
其言渡書ニ同シク執行ヲ可キ公証人ノ証書ニ
據テ負債者ノ動産又ハ不動産ヲ差押スル等モ
亦使吏ノ任トス又使吏ハ原告被告雙方ノ權利
ヲ保全スルニ必要ナリト思料スル諸証書ノ送

リ其外使吏ノ中ニハ上等裁判所、郡裁判所、商法
裁判所、治安裁判所等諸裁判所ノ裁判席ノ用ヲ
勤ムルヲ命セラル、者アリ之ヲ稱シテ裁判
席使吏ト云フ此使吏ニハ訴訟中入用ノ証書ヲ
送ルノ特勢アリ

秤價人

巴里府及其他郡裁判所アル都會又ハ人口五千
以上ノ都會ニ於テハ秤價人數人アリテ其住居
スル府内ニ於テ動産ノ糶賣及ヒ其秤價ヲ爲ス
ノ特權ヲ有ス又其他ノ場所ニ在ル秤價人ハ此

權利ヲ公証人、治安裁判所ノ書記官、使吏等ト分
チ有スルナリ

代言師

代言師ノ任ハ民法裁判所又ハ刑法裁判所ニ出
テ原告被告ノ爲メ辯論ヲ爲スニ在リテ代言師
ノ人負許多ナル都府ニ於テハ其辯論ノ特權ヲ
占有スルモノトス但シ代言師ハ役員タラサル
カ故ニ其任ヲ政府ヨリ受ルニ非ス其人員モ代
書師、使吏、公証人等ノ如ク制限アルニ非ス唯法
律學「リ」サ「ン」シ「エ」ル以上ノ級ニ登リテ誓ヲ爲シ

タル者ハ何人タリト雖トモ其職ヲ爲スヲ得
可シ

商法裁判所代言師

上等裁判所及ヒ郡裁判所ニテハ原告被告ノ者
必ス「アブエ」ト云ヘル代書師ヲ以テ名代ト爲
ス可シト雖モ商法裁判所ニテハ本人自カヲ出
訴スルトモ名代人ヲ以テ出訴スルトモ勝手タ
ル可シ又或ハ商法裁判所ニテハ原告被告ノ名
代人タル可キ者ヲ其裁判所ヨリ指示ス習例アリ
因テ其者ヲ名ケテ「アグレエ」ト裁判所ノ承諾
ヲ得タル者ト

意フト云フ

右「アグレエ」ト「アブエ」トノ區別ニ三大別アリ第一「アグレエ」ハ裁判所役員外ノ者ニテ裁判所ヨリ擇ムト雖トモ「アフエ」ハ勅命ニ由テ選任セラレ第二「アブエ」ハ必ス之ニ頼ラサル可カラサル者タリト雖「アグレエ」ハ本人ノ勝手ニテ自カラ出席スルトモ「アグレエ」ニ非ル者ヲ頼ムトモ妨ナク第三本人ヨリ「アブエ」ニ証書類ヲ渡ス時ハ即チ之ヲ其名代人ト爲シタル証アリト雖「アグレエ」ハ印紙ニ認メ

タル委任狀アルニ非レハ名代人タルノ得ス

第一章 人事

人ノ釋義

夫レ法律上ニ於テハ行ヒ得可キ權利ト擔任ス
可キ義務トヲ有スル者ヲ想定シテ人ト義解シ
此權利ト此義務トヲ有スルヲ以テ人タルノ性
質ヲ有スル的徴ト爲ス故ニ法律ノ眼ヲ以テ視
ルハ無形ノ諸物ニシテ現ニ存在セサル者ト
雖トモ此權義ヲ兼有シ得可キ者ハ皆之ヲ人ノ
列ニ加フ因テ國、州、邑、諸公署、商社等ノ如キモノ

モ亦此中ニ算入ス然レモ之ヲ法律上擬爲ノ人
ト爲シテ以テ眞ノ人類ト區別ス
又人ニ數種アルヲ左ノ如シ

第一 佛蘭西人、外國人

第二 既ニ婚シタル者、未タ婚セサル者

第三 嫡出ノ子、私生ノ子

第四 尊屬ノ親、卑屬ノ親

第五 丁年者、幼年者

第六 自カラ權利ヲ行ヒ得可キ者、自カ
ヲ權利ヲ行ヒ得可カラサル者

故ニ國民タル事、婚姻、父タル事、子タル事、幼年ノ
事、丁年ノ事、權利ヲ行ヒ得可キ事、權利ヲ行ヒ得
可カラサル事ヲ目的トシテ各自ニ之ヲ論セン
トス

第一欸 國民タル事

「ハボレナシ」民
書第一一篇第一卷

民權ヲ有スル事及ヒ之ヲ奪
フ事ヲ論シタル卷第七條ヨ
リ第二十一
條ニ至ル

佛蘭西人タル事

或人ハ生レナカラニシテ佛蘭西人タルノ分限
ヲ有スル者アリ又或人ハ其生レ外國人タルモ

後佛蘭西人タルノ分限ヲ得ル者アリ

父母共ニ佛蘭西人タル兒女ハ生レナカラニシ

テ佛蘭西人タルハ固ヨリ當然ナリト雖モ其母

ハ外國人タルモ其父佛蘭西人タレハ其子佛蘭

西人タルヲ得可シ是レ婦女ハ外國人タルモ佛

蘭西人ニ嫁スレハ佛蘭西人トナルノ故ヲ以テ

ナリ

兩親共ニ外國人ナレハ其子モ亦外國人タルヲ

免カレスト雖モ其父曾テ佛蘭西ニ於テ生レ其

兒女モ亦佛蘭西ニ於テ生レタル時其兒女出生

ノ日ヨリ佛蘭西人タルヲ得可シ但シ佛國ノ法律ニ於テ二十一歳ヲ丁年ト定ムルカ故ニ其者若シ佛蘭西人タルヲ欲セサレハ丁年ニ至リシヨリ一年內ニ外國人トナラント欲スル旨ヲ願出ルヲ得可シ

凡テ法律ニ於テ定ムル所ハ外國人ニ佛蘭西人タルノ利益ヲ與フルニ在リテ強テ其利益ヲ命スルニ非スト千八百五十一年二月七日ノ律法ニ掲定シタリ

佛蘭西人タルノ分限ヲ得ル事、其

方法及ヒ佛蘭西國法律ノ外國人
ヲ厚ク待遇スル本性

佛蘭西人タルノ分限ヲ得セシムルニ就テノ要
旨ハ佛蘭西人タルノ分限ヲ希望シ且佛國ノ地
ヲ愛慕スルノ情アル者ヲ本國人ト爲スニ在リ
トス故ニ佛蘭西國內ニ於テ生レタル廉ノミヲ
以テ佛蘭西人タルノ分限ヲ許與セスト雖モ佛
蘭西國ニ於テ生レタル者ハ容易ニ佛蘭西人タ
ルノ分限ヲ得可シ

故ニ佛蘭西ニ於テ生レタル外國人ノ子ハ丁年

ニ至リシヨリ一年內ニ佛蘭西人ノ分限ヲ要求
シ得可シ尤モ其申立ヲ爲スノ手續ハ其昔若シ
當時外國ニ在ル時ハ其國在留ノ佛國辦務使又
ハ岡士ニ届出ツ可ク若シ當時佛國內ニ在ル時
ハ本人寄住ノ地方邑官ニ届出ツ可シ但シ外國
ニ在ル者ハ一年ノ內ニ佛國ニ來住ス可シ
又佛蘭西人ニシテ佛蘭西人ノ分限ヲ失シタル
父ノ子ハ其出生佛國ニ於ケルト外國ニ於ケル
トニ拘ハラス丁年ニ至リシヨリ一年ノ後ト雖
モ佛蘭西人タルノ分限ヲ願立ルヲ得可シ又佛

國ニ於テ生レタル外國人ノ子ニシテ外國人タルノ分限ヲ申立ルヲナク佛國ノ徵兵令ニ應シ又ハ佛國ノ兵籍ニ入リタル者モ亦同様右ノ願立ヲ爲シ得可シ

右ノ外佛蘭西人タル分限ヲ得ルノ方ニ二様アリ第一佛蘭西人ニ嫁スル外國ノ婦人ハ婚姻ノ一事ヲ以テ佛蘭西人タルヲ得可ク第二佛國ニ併セラレタル國ノ住民ハ併合ノ一事ヲ以テ佛蘭西人タルノ分限ヲ得可シ

外國人歸化ノ事

歸化ハ佛蘭西人ノ分限ヲ得ル最通例ノ規則ニ
シテ何レノ外國人タルニ限ラス缺ク可カラサ
ルノ規定ヲ履行フニ於テハ歸化ノ免許ヲ得可
シ尤モ歸化スルニハ年齡二十一歳以上ニ至リ
政府ヨリ佛國住居ノ許可ヲ受ケ其日ヨリ二箇
年ノ間現ニ佛國內ニ居住スルヲ要ス但シ佛國
ニ至要ノ百工諸發明ヲ導クカ諸學科ヲ開クカ
盛大ノ建物ヲ作ルカ耕作ニ關ハリタル大開拓
ヲ爲スカノ如キ重大ノ功勞アル者ニ付テハ居
住三箇年ノ期限ヲ一箇年ニ減少スルヲ得可

シ

右規定ニ循ヒ歸化ノ願書ヲ差出ス時ハ篤ト其
者ノ行狀等ヲ聞紀シ且司法事務宰相ノ建白及
ヒ參議院ノ申立ヲ聞キタル上勅命ヲ以テ其允
許ヲ下ス可シ（千八百六十七年六月二十九日ノ
律法ニテ之ヲ定ム）

歸化ハ之ヲ得ル者ニ佛蘭西人タルノ分限ト之
ヨリ生スル一切ノ利益トヲ與フルニ在リ又歸
化シタル外國人ノ子ノ中ニテ歸化後ニ生レタ
ル者ハ其父同様佛蘭西人タレトモ歸化前ニ生

レタル子ハ丁年ナレハ歸化ヲ爲シタルヨリ一箇年内ニ佛蘭西人ノ分限ヲ要求シ得可ク歸化ヲ爲スノ時幼少ナレハ丁年ニ至リシヨリ一箇年内ニ之ヲ要求シ得可シ

佛蘭西人タルノ分限ヲ失フ事

佛蘭西人タルノ分限ヲ失スルニ數様アリ佛蘭西人タリト雖モ外國ニ歸化スルカ再度佛國ニ歸來フサル所存ニテ外國ニ於テ商店外ノ居宅ヲ結構スルカ佛國政府ノ許可ヲ經スシテ外國ノ公務ニ就クカノ如キ事アル時ハ佛蘭西人タ

ルノ分限ヲ失ス可シ但シ右ノ者タリト雖モ政
府ノ許可ヲ受テ佛國ニ立歸リ本國內ニ住居ヲ
定ムルニ於テハ再度佛蘭西人タルノ分限ヲ復
ス可シ

又佛蘭西人タルノ分限ヲ有スル婦人ト雖モ外
國人ニ嫁スル者ハ佛蘭西人タルノ分限ヲ失ス
可シ但シ其夫ヲ失ヒ寡婦トナリテ佛國ニ歸住
スルニ於テハ佛蘭西人ニ復籍ス可シ
佛蘭西人タリト雖モ本國政府ノ許可ヲ受ス外
國ノ軍役ニ從事シタル者ハ佛蘭西人タルノ分

限ヲ失フ可シ但シ佛蘭西人タルノ分限ヲ復サ
シニハ佛國政府ノ許可ヲ受ケテ本國ニ歸來シ
總テ外國人ノ佛國ニ歸化スルニ付テノ規定ヲ
履行フ可シ

寄住外國人ノ特權

寄住外國人ノ律法上ノ權利ハ之ヲ佛蘭西人ノ
權利ニ比スレハ大ニ異ナリトス寄住外國人ハ
政權又公權ト云フ政ニ與管スヲ受有スルヲ能
ハス民選議院州會邑會等ノ議員選舉ノ事ニ加
ハルヲ得ス或ル公務ヲ勤ムルヲ能ハス又外國

隊ト稱スル隊ヲ除クノ外佛國ノ兵負ニ加ハル
ヲ得ス又民權又私權云フモト上ニ於テモ公証人ノ手
ニテ認ムル諸証書ノ証人トナルヲ得ス佛國裁
判所ニ諸訴訟ヲ爲スニ於テハ公事ニ負ケタル
時ノ裁判入費引當ト爲ス可キ保証文ヲ立テサ
ル可カラス但シ其訴訟商法ニ管スル事力又ハ
裁判入費ノ引當ニ足ル程ノ不動産ヲ所持スル
時ハ右保証ヲ出スニ及ハス

外國人ノ中ニテモ佛國內居住ノ免許ヲ佛國政
府ヨリ得タル者ハ通例ノ外國人ニ比スレハ政

府ノ待遇一層手厚キモノトス但シ居住ノ免許
ト歸化ノ免許トヲ混同ス可カラスシテ居留ノ
免許ハ佛蘭西人タルノ分限及ヒ政權ヲ受有ス
ル事ヲ許スニ非スト雖凡テ民權ヲ行フ事ヲ
許スニ在リ又居留外國人ノ權利ハ佛國ト外國
トノ間ニ取結フ所ノ條約ニ因リテ各異ナルヲ
得可シ

第二欸 身上証書

「ナポレオン」民法書第一篇第二
卷從第三十四條至第一百一條

身上証書ノ要旨

法律上人ノ身ノ上ニ管スル大事ハ即チ出生婚姻死去ノ三事ニシテ其事ハ一箇ノ簿冊ニ記録シタル証書ニ由テ之ヲ証明ス此証書ヲ名ケテ身上証書ト云ヒ太タ重大ノモノタルニ因リ人タル者ノ缺ク可カラサル事トス
出生ノ証書ハ人ノ年齢ヲ証シ兩親ノ名前ヲ録ス故ニ何人ノ子タルヲ証明ス可シ又婚姻ノ証書ハ夫婦ノ縁ヲ結ビタルヲ書載ス故ニ其子ノ嫡出タルヤ否ヲ証明ス可シ又死去ノ証書ハ死去ノ日、相續ノ起因、配偶ノ解離ヲ証明ス

右諸証書ノ認方ハ眞ニ方正ニシテ綿密ナルヲ
要スルカ故ニ法律上ニテ其証書ノ保チ方ヲ良
ニシ其証書ノ認メ方ヲ眞正ニ爲サシム可キ數
多ノ預備法ヲ設ケタリ

身上証書ノ認メ方ニ管スル者及
ヒ身上証書掛リノ役負

身上証書ヲ認ムルニ管スル人々ニハ身上証書
掛リノ役負、本人、届人、証人ニシテ身上証書掛リ
ノ役負ハ右証書ヲ簿冊ニ記録シ其証書ニ調印
ヲ爲シ且届出一切ノ事ヲ証明ス而シテ其掛リ

任ス

本人及ヒ届人

本人トハ身上証書上ノ事柄ヲ己レカ身ニ引負
フタル者ニシテ届人トハ身上証書掛り役負ノ
証ス可キ事柄ヲ其掛り役負ニ告知スル者ヲ云
フナリ

婚姻ニ付テハ夫婦トナラントスル者自カラ身
上証書掛り役負ノ面前ニ出席ス可シ又出産ニ
付テハ特ニ定メタル者ヨリ必ス其由ヲ届出ツ

可ク若シ此等ノ者隠シ置キ後日發顯スルニ於
テハ法律上ノ定メニ由テ嚴科ニ處セラル可シ
又此去ニ付テハ何人ニ限ラス身上証書掛リ役
負ニ届出ツ可シ
又右届ニ付キ本人自カラ出席スルニ及ハサル
時ハ名代人ヲ以テ届出ツ可シ但シ名代人頼ノ
証書ハ公証人之ヲ認メ特ニ定メタル事柄ニ付
キ之ヲ附與ス可シ

証人

証人ト届人トヲ混同ス可カラス証人ハ身上証

書掛リ役負ノ面前ニ出テ届ケ出テノ趣全ク實
正ニシテ紛レナキ旨ト届人ニ人違ヒナキ旨ト
テ証明スル者トス但シ其証人婚姻ノ事ニ付テ
ハ四人トシ出產ノ届ハ兩人立會ニテ爲ス可ク
又死去ノ証書ハ届人ヲ兼タル証人二人ノ届ヲ
聞キタル上作爲ス可シ因テ死去ニ付テハ一名
ニテ証人ト届人トヲ兼タル者トス

總シテ身上証書ニ付キ出席スル証人ハ男子ニ
シテ若クトモ二十一歳以上ノ年齢ニ至ル者ニ
限ル可シ其外一切差構ヒノ事ナシ故ニ必スシ

モ佛蘭西人タルニ限ラス又無筆ノ者タリト雖
凡苦シカラス

身上証書簿冊ノ設ケ方

身上証書ハ別段設ケタル簿冊ニ連續シテ之ヲ
記入ス可シ但シ邑ノ大小ニ從テ或ハ諸証書ヲ
一冊ニ部門ヲ分ツテ記スアリ或ハ出生婚姻死
去ヲ區別シテ三冊ニ記ルスアリ而シ其簿冊ハ
二冊宛備ヘ年尾ニ至ツテ一冊ハ之ヲ邑廳ノ書
房ニ殘シ一冊ハ之ヲ本郡裁判所ノ書記局ニ収
ム是レ蓋シ出火等不時ノ災害ニ罹リテ邑廳所

藏ノ簿冊ヲ失フ事アルハ本郡裁判所ニ置キ
タルモノヲ以テ之ヲ補ハンカ爲メ設クル所ノ
方法ナリ

簿冊ハ何レモ裁判所長官カ或ハ其代理タル裁
判役ノ中エテ簿冊ノ首尾ニ其記號ヲ附ス可シ
蓋シ其方ハ冊首ニ首葉ト記シ冊尾ニ尾葉ノ証
ト番號トヲ記スルナリ又毎葉姓名ノ手署ニ代
用スル線ヲ畫ス可シ蓋シ此法則ヲ設ケタル本
意ハ紙片ヲ剪取リ或ハ之ヲ増加ヘ又ハ之ニ張
込ヲ爲ス等ノ詐偽ノ所業ヲ防クニ在リ

身上証書ノ認メ方

身上証書ノ認メ方ニ付キ身上証書掛リ役負ノ
遵守ス可キ法律上ノ大則アリ凡ソ身上証書ニ
ハ年、月、日、時ト其証書ニ載スル者ノ姓名、年齢、職
業、住所ヲ記入ス可ク又其証書ニハ出席シタル
者トモヨリ届ケ出テタル事柄ヨリ他ノ事ヲ加
ヘ記ルス可カラス且其証書ヲ簿冊ニ書込ムニ
ハ順ニ認メテ少シモ餘白ヲ殘サ、ル様注意シ
テ認ム可シ又塗沫及ビ^{ケシ}端書^{ハシガキ}モ本人ノ承諾ヲ取
リ之ニ調印ヲ爲サシム可シ又証書ニハ決シテ

畧語ヲ用フ可カラス年、月、日附等ノ文字ニ記號
、數字ヲ用フ可カラス

右規則ヲ循守シ証書認メ上リタル時ハ身上証
書掛リ役員ヨリ本人并ニ証人ニ其証書ヲ讀聞
カス可シ其式相濟タレハ亦其由ヲ記入シ次ニ
役員自カラ其証書ニ調印ヲ爲シテ本人并ニ証
人ニモ調印ヲ爲サシム可シ但シ本人并証人ノ
中調印ヲ爲シ得サル者アル節ハ何等ノ事故タ
ルヲ記シ置ク可シ

身上証書ノ拔書及ヒ其眞偽

身上証書簿冊ノ中ニ記載シタル証書ノ寫ヲ拔
書ト云フ其拔書ヲ各人ニ渡スハ身上証書掛リ
役員又ハ本郡裁判所書記官ノ任ニ在リ因テ何
人ニ限ラス其拔書ヲ得タキ望ミノ者ハ何等ノ
趣意タルヲ申立ルニ及ハス之ヲ請取ルヲ得可
シ但シ其拔書ハ郡裁判所ノ長之ヲ認ム可ク又
郡裁判所々在ノ首府ヲ除クノ外ハ治安裁判役
之ニ代リテ認ム可シ千八百六十一年五月二日
ノ法律

其拔書ヲ認ムルノ眼目ハ其書ノ末ニ記シタル

姓名ノ手署ハ身上証書掛リ役員又ハ裁判所書記官ノ手署ニ相違ナキヲ証スルニ在リテ其後書ヲ以テ眞正ノモノト爲ス可ク若シ其偽タルヲ証セントスルニハ偽造訴訟ト云ヘル煩雜ニシテ費多キ別段ノ訴訟ヲ爲サ、ル可カラス

出産ノ証書ニ付テノ格別ノ規則

出産ノ届ハ三日内ニ爲ス可ク出生ノ子ハ身上証書掛リ役員ノ面前ニ連レ行キ一見セシム可シ

又出産ノ届ヲ爲スノ義務ハ勿論父ニアレモ若

父ノ不在等ナル時ハ何人ニ限ラス出産シタル家ノ者並ニ内外醫師産婆其外總テ出産ノ時ニ立會フタル者皆其義務アリトス

右届ヲ爲ス可キ義務アル者若シ其義務ヲ盡サズル時ハ其罰トシテ禁錮ヲ受ケ且罰金ヲ課セラル可シ

出産ノ証書ハ証人二人立會ハ上ニテ認ム可シ又其証書ニハ出産ノ日、時、場所、男女ノ別、産兒ノ名、其兩親及ヒ証人ノ姓名、職業、住所ヲモ記載ス可シ

死去ノ証書

死去ノ証書ハ証人二人ノ届ケヲ聞キタル上身
上証書掛リ役員之ヲ認ム可シ尤モ其証人ハ兩
人トモ成ル可キ丈ケ近親ノ者カ近隣ノ者タル
ヲ要ス

又其証書ニハ死者ノ姓名、年齢、職業、住所ヲ記載
シ且届人左ノ事ヲ承知セハ亦之ヲモ記ルス可
シ

一 死者若シ既ニ配偶アル者ナレハ其
夫或ハ妻ノ名

死者若シ兩親アレハ其姓名

死者出產ノ地ヲ詳ニセハ其地名

埋葬ハ入費ナク渡ス所ノ免狀アルニ非レハ之

ヲ爲ス可カラス又身上証書掛リ役員又ハ其掛

リ役員ヨリ命シタル醫師ノ檢視ヲ受ケタルコ

リ二十四時ノ後ニアラサレハ之ヲ爲ス可カラ

ス

婚姻ノ証書

婚姻ノ証書ハ茲ニ之ヲ論セス是レ婚姻ノ証書

ハ別款婚姻ノ部ニ之ヲ説示セント欲シテナリ

身上証書改正

身上証書ノ認方不十分ニシテ方正ナラサルカ
又ハ書加フ可カラサル條件ヲ記セシカノ如キ
時ハ之ヲ改正スルヲアリ但シ其改正ハ譬ヘハ
人ノ姓名ニ字綴ノ間違アリテ之ヲ改ムルカ如
キ瑣細ノ事ト雖トモ身上証書掛リ役員一己ノ
權ニテ爲スヲ得ス之ヲ爲スニハ裁判所ノ指揮
ヲ受ク可シ又其改正ノ願ヲ審判スルノ任ハ其
証書ヲ記シタル地所在ノ郡裁判所ニアリトス
但シ改正ノ指揮アリト雖トモ本紙ヲ改ム可カ

ラス先ツ身上証書帳ニ其言渡ヲ書載セ次ニ其
本紙ノ端ニ其旨ヲ記載ス可シ且其後拔書ヲ渡
ス時ハ之ニモ本紙同様裁判所ヨリノ言渡ヲ附
記ス可シ

第三款 住所及ヒ行方不知

「ナ」ボレオシ民法書第一篇第三
卷及ヒ第四卷從第一百十條至第
三百四十條

住所ノ本性

人ノ住所トハ其者ノ住居及ヒ産業ノ本地即チ
其者ノ本住アル地ヲ云フモノニシテ寄住ト混

同ス可カラス寄住ハ當時在留ノ地ニシテ住ス
レハ之ヲ得去レハ之ヲ失フナリ茲ヲ以テマル
セーユニ産業及ヒ權利ノ本地ヲ有スル商賈數
箇月間巴里ニ來リ此所ニ寄住スト雖トモマル
セーユニアル所ノ本住ハ尚ホ依然タリ
本住即チ住所ノ轉移ハ二原由ヨリ來ル一ハ他
所ニ於テ現ニ住居ヲ爲スニ在リ又一ハ其地ニ
本住ヲ定ムルノ思慮ニ在リ又裁判役ノ如キ生
涯不變ノ職他ニ轉免セラルトナキヲ云フニ就ク
時ハ亦住所ヲ轉移シタルトス

又別ニ住所ヲ持タス他人ノ住所ヲ已レカ住所
ト爲スモノアリ例ヘハ婚姻シタル婦女ハ夫ノ
住所ニ非サルヨリハ他ニ住所ヲ持タス又未タ
後見ヲ受クル幼者ハ父母又ハ後見人ノ住所ヲ
己カ住所ト爲シ又平常他人ノ家ニ奉公ヲ爲シ
或ハ他人ノ家ニ工作ヲ爲ス者其雇主ト同居ス
ル時ハ其雇主ノ住所ヲ以テ己レカ住所ト爲ス
カ如シ

住所ノ功用

住所ニ添フタル功用ハ其數許多ニシテ且至要

ナリトス譬へハ諸証書ヲ送達スルハ其住所ニ
向テ之ヲ爲シ或種ノ訴訟ハ住所ノ裁判所ニ爲
シ家督相續及ヒ死去ノ諸算計ハ皆住所ニ於テ
之レヲ爲スカ如シ又更ニ其他ノ一二例ヲ舉ル
ニ住所ヲ定ムルハ婚姻後見等ノ爲メ至要ノ事
ト爲スモノナリ

特ニ選ミタル住所

証書上ノ事ヲ執行スル爲メ特ニ選ミタル住所
ヲ稱シテ特選住所ト云フ茲ニ其一例ヲ掲シニ
巴里ニ住所ヲ持タル^一ヒエール氏マルセ

住所アルボル氏ト條約ヲ結ブニヒエール氏
若シ後日爭論アル節ニ至リマルヒーユノ裁判
所ニ訴出スルヲ迷惑ナリト思ハ、ボル氏ヲ
シテ巴里府内ニ住所ヲ選ミ設ケシメ之ヲ証書
中ニ書入レシム可シ

特ニ選ミタル住所ニハ二様ノ功用アリ第一証
書上ノ事ヲ執行フニ管係シタル爭訟ハ特ニ選
ミタル住所ニ在ル裁判所ノ受特トナリ第二証
書ニ管係シタル爭訟ニ付テノ一切ノ書類ハ特
ニ選ミタル住所ニ之ヲ送達ス可シ

三六
斯ノ如ク住所ヲ選ムハ特別ノ事ニシテ其旨ヲ
記シタル証書ヨリ更ニ他ノ事ニ之ヲ適用ス可
カラス

政權上ノ住所

政權卽チ選舉人トナルノ權利及ヒ諸官員ニ選
舉登用セラルハノ權利ヲ行フ爲メノ住所ハ一
箇ノ別則ニ循フ可シ故ニ選舉人名簿中ニ登記
セラルハヲ得選舉人タランニハ一邑内ニ少ク
トモ六箇月以上住スルヲ必要ナリトス

行方不知ト云ヘル事ノ釋義

法律上ニテ行方知レスト稱スルハ住所ヲ立去
リタルノミヲ云フニアラス人一度影ヲ失シテ
ヨリ以來經久其者ノ行方知レズ絶テ安否音信
ナク其生死知ル可カラサルヲ云フ
行方知レサル者ノ爲メ處ス可キ

方法

郡裁判所ハ行方知レサル者ノ爲メ切要ナル方
法ヲ處ス可シ今茲ニ之ヲ云フニ其者ノ財産ヲ
支配ス可キ者ヲ選ミ之ヲ支配人ニ任ス可ク又
行方不知者ノ遺物相續ニ管スル時ハ公証人之

ニ代リテ處置ス可シ其外別ニ檢事局ハ行方知
レサル者ノ權利ニ管シタル事一切ニ注意ス可
キ任ヲ受ク

行方不知事ヲ公告スル事及ヒ行
方不知者ノ財産ヲ所有ト爲ス事
行方不知者定期ノ時間ヲ經テ尚現出セサル時
ハ其行方不知者ニ管シタル者ヨリ其行方不知
事ヲ公告スル事ヲ訴出ルヲ得可シ但シ行方不
知者其名代人ヲ任シ置キタル時ハ十年ヲ經テ
之ヲ訴出ツルヲ得可ク其名代人ヲ任シ置カサ

ル時ハ四年ヲ經テ之ヲ訴出ツルヲ得可シ
行方不知者ノ公告ヲ爲ス可キ事ヲ訴出シタル
時其裁判所ニ於テハ行方不知事ヲ檢査センカ
爲メ其吟味ヲ爲ス可キ事ヲ最初言渡シ而ル後
一年ヲ歷テ其訴出ニ付キ確定ノ裁判ヲ言渡ス
可シ

行方不知事ノ公告ヲ爲シタル時ハ行方不知者
ノ最親ノ相續人ニ行方不知者ノ財産ヲ假リニ
已レニ保有スル事ヲ許ス可シ故ニ其相續人ハ
行方不知者ノ死去セシ如ク其財産ヲ保有ス然

レ凡行方不知者ノ復歸セシ時ハ其財産ヲ返還
ス可シ

行方不知者ノ財産ヲ假リニ己レニ保有シタル
者ハ行方不知者ノ再ヒ現出セン時其財産ヲ返
還スル事ヲ証ス可キ爲メ或ル保証ヲ立ツ可シ
但シ行方不知者ノ財産ヲ其相續人ノ假リニ己
レニ保有シタル後三十年ヲ經タル時又ハ行方
不知者ノ生レシ時ヨリ百年ヲ經タル時ハ其相
續人其財産ヲ眞ノ所有ト爲スヲ得可クシテ
其財産ヲ返還スルノ保証ヲ取消ス可シ然レ凡

行方不知者ノ復歸セシ時ハ其財産ヲ所有ト爲シタル者尚其財産中ニテ殘レル諸物ヲ返還スル事ヲ擔當ス可シ

第四款

婚姻ノ事

「ナボ」オシ民法書第一編第五卷從第百四

十四條至第二百一十八條

婚姻ノ要旨

婚姻ノ設ハ國中一般ノ資益ニ管スル事最ニ切ナリ實ニ婚姻ハ親族ノ源ニシテ其親族ナル者ハ國ノ基ナリ然レハ則チ婚姻ニ付テノ法律ノ重要ナルハ又敢テ此ニ贅言スルヲ待タザル可

シ
婚姻ハ民法ノミヲ以テ規定ス可キ民間ノ契約
ノ類ヒニシテ婚姻ヲ結ハント爲ル雙方ノ者ノ
教法ニ依リ少シモ區別ヲ爲ス可キ事ナシ
教法ハ婚姻ヲ確定スル爲メ必ス之ニ關ス可シ
ト雖モ婚姻ノ教禮ヲ以テ民法ニ記載スル法式
ノ缺ヲ補フ可カラス民法ノ法式ヲ行ヘルノミ
ヲ以テ其婚姻ヲ適法ノモノト爲スヲ得可シ但
シ婚姻ヲ結フニハ必ス先ツ民法ノ法式ヲ行ヒ
然ル後教法ノ禮式ヲ行フ可シ

婚姻ノ契約ヲ爲スニ必要ナル條件

婚姻ノ契約ヲ爲サント欲スル者ニハ或ル數件ヲ要ス可ク又或ル數條ヲ遵守セシム可シ若シ其條件中ノ一ヲ闕ク事アレハ則チ婚姻ノ故障トナル可シ

或ル場合ニ於テハ婚姻ノ契約ヲ爲スニ必要ナル條件中ノ一ヲ闕キタル事アレハ其婚姻ヲ行フヲ停ムルノミナラス既ニ其契約ヲ結ビタル時ハ其取消ヲ爲ス可ク又他ノ場合ニ於テハ

其條件中ノ一ヲ闕キタル事アレハ只其婚姻ヲ
行フノ差支トナリ其婚姻ヲ行ハシメタル身上
証書掛リ役員ニ罰ヲ受ケシム可シ然レ既ニ
其契約ヲ結ヒタル時ハ其取消ヲ言渡ス事ナ
ル可シ

婚姻ノ契約ヲ爲サント欲スル者ノ具備ス可キ
諸件ト其第一遵守セシム可キ箇條トヲ逐次左
ニ掲述セントス

年齢

婚姻ヲ爲スニ必要ナル年齢ハ男ハ滿十八歳ト

シ女ハ滿十五歳トス其年齡ニ至ラサル以前ニ
契約シタル婚姻ハ之ヲ取消ス可シ尤モ皇帝ヨ
リ免除ヲ爲シ未タ法ニ適シタル齡ニ至ラサル
者ヲシテ格別ニ婚姻ノ契約ヲ爲サシムルヲ
許スヲ得可シ但シ其免除ハ皇帝ノ量料ニ任カ
ス可キ至重ノ道理アルニ非レハ之ヲ爲ス可カ
ラス

夫婦ノ承諾

婚姻ハ一ノ契約ニシテ第一夫婦トナル可キ者
雙方ノ承諾アルヲ至要トス若シ雙方ノ承諾

ラサル時ハ婚姻ヲ爲ス可カラス但シ其承諾ハ
適意ニシテ錯誤アラサルヲ要ス若シ脅迫シテ
婚姻ノ契約ヲ爲サシメ又ハ己レノ配偶セント
思ヒシ人ヲ錯誤シタル時ハ其婚姻ヲ取消ス
ヲ得可シ

尊屬ノ親ノ許諾

婚姻ヲ爲スニハ男ハ二十五歳マテ女ハ二十一
歳マテ其尊屬ノ親ノ許諾ナカル可カラス其許
諾ハ父母共ニ存生ナル時ハ父母之ヲ爲ス可シ
然レモ父母ノ間ニ互ニ異議アル時ハ父ノ許諾

ヲ以テ足レリトス若シ父母共ニ没スルカ或ハ
存生ナリト雖モ其意ヲ表スルコト能ハサル時ハ
婚姻ノ許諾ヲ爲スノ權ハ其他ノ尊屬ノ親ニ移
ル可シ

本宗外族ノ兩族ニ於テ共ニ尊屬ノ親アル時ハ
其兩族中一族ノ尊屬親ノ許諾ヲ以テ婚姻ヲ爲
スヲ得可ク又兩族共ニ尊屬ノ親ナキ時婚姻ヲ
結ハントスル者未タ二十一歳ニ至ラサル男女
ナレハ其親族會議ノ許諾ヲ得ルコトヲ要ス但シ
尊屬ノ親又ハ親族會議ノ許諾必要ナル場合ニ

於テ其許諾ヲ閱キタル時ハ其婚姻ノ取消ヲ爲
ス可シ

婚姻ノ許諾ハ婚姻ヲ行フ時尊屬ノ親其席ニ會
スレハ尊屬ノ親之ヲ爲ス可ク若シ會セザレハ
公証人ノ面前ニ於テ記シタル証書ヲ以テ其許
諾ヲ証ス可シ

父母ノ誨諭ヲ乞フノ証書

子タル者ハ其年次ニ拘ハラズ其尊屬ノ親ヲ恭
敬ス可シ故ニ子タル者ハ其尊屬ノ親ニ誨諭ヲ
乞ハサレハ決シテ婚姻ヲ爲ス可カラズ若シ尊

屬ノ親婚姻ヲ許諾スルヲ肯セサル時婚姻ヲ行
フニ最早其許諾ノ必要ナラサルニ於テハ婚姻
セント欲スル子ヨリ其尊屬ノ親ニ誨諭ヲ乞フ
ノ証書ヲ出ス可シ但シ其証書ハ公証人之ヲ認
メ其公証人ハ許諾ヲ爲ス可キ尊屬ノ親ノ住所
ニ赴キ其者ニ許諾セサルノ趣意ヲ問フ可シ
男子ハ二十五歳ヨリ三十歳ニ至ルマテ女子ハ
二十一歳ヨリ二十五歳ニ至ルマテノ間ハ月ヲ
逐フテ三次父母ノ誨諭ヲ乞フノ証書ヲ出ス可
シ而シテ婚姻ヲ行フヲ得ルハ第三次ノ証書

ヲ出シタル時ヨリ一月ノ後ナリトス又右ノ年
 齡ヲ越ヘタル後ハ只一次父母ノ誨諭ヲ乞フノ
 証書ヲ出シタルヲ以テ足レリトス而シテ其一
 月後ニ至リテ婚姻ヲ行フヲ得可シ

身上証書掛リ役負タル者ハ父母ノ誨諭ヲ乞フ
 ノ証書ノ必要ナル時其証書ヲ出セシヤ否ヤヲ
 檢査スルニ注意ス可シ若シ之ヲ注意セスシテ
 婚姻ヲ行ハシメシ時ハ其役員罰ノ言渡ヲ受ク
 可シ然レモ預メ父母ノ誨諭ヲ乞フノ証書ヲ出
 サスシテ行フタル婚姻ハ之ヲ取消ス可カラス

前婚ヲ存ス可カラサル事

婚姻ハ前キノ配偶ヲ解カサル以前ニ再ヒ之ヲ
契約ス可カラス若シ前婚ヲ解カサル前ニ結ヒ
タル婚姻ハ全ク其効ナカル可シ

前婚ヲ解カサル以前ニ再婚ノ契約ヲ結フハ重
婚犯罪ト成リ此犯罪ハ刑法上ニ於テ有期ノ徒
刑ニ處セララル、モノナリ

或ル血屬及ヒ姻屬ノ親ノ間ニ婚
姻ヲ爲スノ禁

婚姻ノ大禁ハ血屬及ヒ姻屬ノ縁ヨリ起レルモ

ノトス血屬ノ縁トハ互ニ尊屬卑屬タル者又ハ
所出ノ同シキニ因リ互ニ血筋タル者二人ヲ相
連接セシムル縁ヲ云ヒ血屬ノ親ヲ分ツテ二ト
ス其一ハ宗系ノ親又一ハ傍系ノ親是レナリ其
宗系ノ親ハ尊屬ノ親及ヒ卑屬ノ親ヲ含ミ其傍
系ノ親ハ兄弟、姉妹、伯叔父母、姪男、姪女、從兄弟、從
姉妹、如キ血屬ノ親ヲ含ムモノナリ
姻屬トハ婚姻ヨリ生スル縁ヲ云ヒ其縁ハ夫婦
雙方ヲ其配偶者ノ血屬親ニ連接セシムルモノ
ニシテ即チ夫ハ其婦ノ父母、兄弟、姉妹等ノ姻屬

ナリトス

宗系ノ親ニ於テハ親疎ヲ問ハス血屬ノ親並ニ
姻屬ノ親ノ間ニ全ク互ニ婚姻ヲ爲スヲ禁ス又
傍系ノ親ニ於テハ兄弟ト姉妹伯叔父ト姪女伯
叔母ト姪男トノ間ニ互ニ婚姻ヲ爲スヲ禁シ又
姻屬ノ兄弟姉妹ノ間ニ互ニ婚姻ヲ爲スヲ禁ス
尤モ至重ノ道理アル時ハ伯叔父ト姪女伯叔母
ト姪男トノ間ニ互ニ婚姻ヲ爲シ及ヒ姻屬ノ兄
弟姉妹ノ間ニ互ニ婚姻ヲ爲スノ禁ハ皇帝ノ特
恩ニヨリ之ヲ免除スルヲ得可シ但シ血屬及ヒ

姻屬ノ親ヲ論セス凡テ婚姻ヲ爲スヲ禁シタル級ニ當レル親族ノ間ニ結ヒタル婚姻ハ全ク其効ナカル可シ
如此既ニ婚姻ノ契約ヲ爲スニ必要ナル條件ヲ述タルヲ以テ是ヨリ婚姻ヲ行フニ付テノ法式ヲ左ニ記載ス可シ

公告ノ事

婚姻ヲ行フ以前ニ夫婦雙方ノ者ノ居住スル邑ト其婚姻ヲ許諾ス可キ尊屬ノ親ノ居住スル邑トニ在ル邑廳ノ門前ニ於テ二次ノ公告書ヲ出

ス可シ其公告ハ初ノ公告ヨリ後ノ公告ニ至ル
マ其間八日ヲ隔テ其一ハ必ス日曜日ニ於テ
之ヲ爲ス可シ但シ其公告ハ邑廳ノ門前ニ貼附
スル揭示ニテ爲スモノナリ又身上証書掛リ役
員ハ公告ヲ爲シタルニ付テノ証書ヲ作ル可シ
婚姻ハ第二次ノ公告ヲ爲シタル日ヨリ三日後
ニ至リテ之ヲ行フヲ得可ク即チ日曜日ニ第二
次ノ公告ヲ爲シテ水曜日ニ之ヲ行フ可シ若シ
公告ヲ爲シタル後一年内ニ婚姻ヲ行ハサル時
ハ又更ニ其公告ヲ爲ス可シ但シ第二次ノ公告

ハ至重ノ道理アルニ於テハ其郡裁判所ノ檢事ヨリ其免除ヲ爲スコトヲ得可シ

身上証書掛リ役員ハ公告ノアル可キ諸邑ニ於テ既ニ其公告アリタル明証ヲ得ルニ非レハ婚姻ヲ行ハシムルコトヲ得ス

婚姻ノ契約ヲ爲スニ付キ婚姻ヲ結ハントスル者ノ出ス可キ諸証書

婚姻ヲ結ハントスル雙方ノ者ハ婚姻ヲ行フ以前ニ左ニ掲クル所ノ諸証書ヲ身上証書掛リ役

員ニ差出ス可シ

第一 其者ノ出産ノ証書

第二 公証人ノ記シタル証書

但シ此証書ハ尊屬ノ親又ハ親族
會議ノ許諾必要ナル時ニ方リ尊
屬ノ親婚姻ノ席ニ會セサル場合
ニ於テ其許諾アリシヲ保證ス
ルモノナリ又右ノ場合ニ於テ婚
姻ヲ結ハントスル雙方ノ者其尊
屬親ノ許諾ナクシテ婚姻スルヲ

得可キ年齢ニ至リシ時ハ父母ノ
誨諭ヲ乞フノ証書ヲ出ス可ク又
尊屬ノ親旣ニ死去シタル時ハ其
旨ヲ明証ス可シ

第三

婚姻ヲ結ハントスル雙方ノ者ノ
中以前ニ婚姻セシ者アル時ハ以
前ノ配偶者ノ死去ノ証書

第四

公告ノ必要ナル諸邑ニ於テ旣ニ
其公告ヲ爲セシヲ保証シ且ツ
故障ヲ述タル者ナキヲ保証ス

ル証書

但シ故障ヲ述フル者アリシ時ハ
其故障ヲ述タル者ノ自ラ其故障
ヲ述フル事ヲ止メタル証書又ハ
裁判所ヨリ其故障ヲ述フル事ヲ
止メシメタル言渡書ヲ出ス可シ
第五 夫婦ノ財貨ニ管スル權利ヲ規定
スル爲メ婚姻ノ契約書ヲ記シタ
ル時ハ其契約書ノ日附ト其契約
書ヲ記セシ公証人ノ姓名住所ト

ヲ記シタル証書

○婚姻ヲ行フニ付テノ法式

既ニ婚姻ノ公告ヲ爲シ且ツ既ニ上文ノ諸証書
ヲ出シタル時ハ夫婦トナル可キ雙方ノ者其婚
姻ヲ行ハシムル身上証書掛リ役員ノ面前ニ出
ツ可シ但シ其婚姻ニ管スル身上証書掛リ役員
ハ夫婦雙方ノ中其一方ノ住所ノ身上証書掛リ
役員ナリトス又婚姻ノ事ニ付テノ住所ハ一邑
内ニ六月間以上絶エス住居スルヲ以テ之ヲ定

ム

婚姻ハ其邑ノ官廳ニ於テ婚姻ヲ爲ス可キ者ノ
血屬ナルト否トニ拘ハラス年齡二十一歳以上
ニ至リタル男ノ証人四名ノ面前ニテ公ケニ之
ヲ行フ可シ

身上証書掛リ役負ハ婚姻ヲ結ハントスル雙方
ノ者ヨリ出シタル諸証書ト夫婦ノ權利及シ其
義務ニ管スル法律ノ規則トヲ其者ニ讀聞カシ
タル後其者ノ互ニ夫婦トナルヲ欲スルヤ否
ヲ相次ニ雙方ニ問ヒ雙方共ニ互ニ夫婦トナル
ヲ欲スルト答ヘタル上ニテ其者ノ法律ニ循

ヒ配偶ヲ爲シタルヲ言渡シ而シテ直チニ婚姻ノ証書ヲ作ル可シ但シ其証書ハ身上証書ノ簿冊ニ登記シ以テ婚姻ヲ証スルノ用ニ供スルナリ

婚姻ノ故障ヲ述フル事

法律上ニ定メタル或人ノ身上証書掛リ役員ニ對シ婚姻ヲ行フヲ拒ムヲ名ケテ婚姻ノ故障ヲ述フル事ト云フ但シ其故障ヲ述フルノ權利ハ先ツ父母及ヒ尊屬ノ親ニ屬シ尊屬ノ親ナクシハ次ニ兄弟姉妹伯叔父母從兄弟從姉妹ニ屬

シ終ニ婚姻ヲ結ハントスル者ノ管財人又ハ後
見人ニ屬ス

婚姻ノ故障ヲ述フルニハ門監ノ記シタル証書
ヲ以テス可シ但シ其証書ハ婚姻ヲ結ハントス
ル者ト其婚姻ヲ行ハシム可キ身上証書掛リ役
員トニ送致ス而シテ身上証書掛リ役員ハ故障
ヲ述ルノ証書ヲ受取リタル時其婚姻ヲ行フ
ヲ止ム可ク又婚姻ヲ結ハントスル者ハ其婚姻
ヲ結フニ付キ法律上ノ差支アル時ノ外其故障
ヲ除去スル事ヲ裁判所ニ訴出テ得可シ

身上証書掛り役員ハ裁判所ヨリ故障ヲ除去セ
シムル言渡書又ハ故障ヲ述タル者ノ自ラ其故
障ヲ述フル事ヲ止メタル証書ヲ得タル上ニ非
サレハ其婚姻ヲ行ハシムルヲ得ス

婚姻ヨリ生スル諸件夫婦ノ權利
及ヒ其義務

婚姻ヲ爲スニ因リ夫婦ノ間ニ於テ法律上ニ貞
實扶持ナル語ヲ以テ其要ヲ摘説スル雙方ノ義
務ヲ生ス

婦ハ其夫ト同居ス可ク又夫ハ其婦ヲシテ相當

サル住居ヲ得セシメ且ツ其暮シ方ニ関ク可カラサル諸件ヲ得セシム可シ
嫁シタル女ハ其權利ノ一部ヲ行フ可カラス故ニ婦ハ其夫ノ許可ヲ得タル上又其夫ノ許可ナキ時ハ裁判所ノ許可ヲ得タル上ニ非サレハ証書ヲ記ス可カラス又裁判所ニ出テ訴訟スルヲ得可カラス

婚姻ヨリ生スル義務

夫婦ハ其子ヲ養育スル義務アリトス又子ハ其窮乏ナル父母及ヒ其他ノ尊屬親ニ暮シ方ノ爲

必要ナル諸件ヲ供ス可ク尊屬親モ亦其窮乏ナル子ニ養料ヲ給ス可シ

右ノ義務ハ尊屬親及ヒ卑屬親ノ級ニ當レル姻屬ノ親ノ間ニアリテ婿及ヒ婦ハ其舅姑ヲ養フ

可ク舅姑ノ婿婦ニ於ケルモ亦然カリ

養料ヲ給スルノ義務ハ之ヲ得ントスル者ノ必需ト之ヲ給スル者ノ家産トノ割合ニ准シ而シテ其義務ヲ行フハ多クハ養育金ヲ與フルニ在リテ其養育金ノ高ハ雙方ノ者ノ和談ニ由テ之ヲ定ムト雖凡若シ爭ヲ生シタル時ハ裁判所ヨ

リ之ヲ定ム可シ又若シ養料ヲ給ス可キ者養育
金ヲ給スルヲ能ハサル時ハ養料ヲ受ク可キ者
ヲ己レカ住所ニ引取ルノ允許ヲ受クルヲ得
可シ

婚姻ヲ解ク事

方今婚姻ハ夫婦生涯解ク可カラサルモノニシ
テ死去ノミニ因テ初メテ之ヲ解ク可シ但シ寡
トナリタル婦ハ其夫ノ死去セシ時ヨリ十月後
ニ至ラサレハ再嫁ス可カラス

夫婦居ヲ分ツ事

ナポレオン¹民法書ノ規則ニ於テ離婚ヲ許セリ
其離婚ナルモノハ夫婦ノ縁ヲ絶チ且ツ離婚シ
タル夫婦ヲシテ新ニ婚姻ヲ契約スルヲ得セ
シムル者ナリ

然ルニ離婚ハ千八百十六年ニ於テ之ヲ廢止シ
方今存スル所ノモノハ夫婦ノ間ニ其居ヲ分ツ
事ニシテ其離婚ト異ナル所ハ尙婚姻ヲ存續セ
シムルニ在リ

居ヲ分チタル夫婦ハ別レテ居住ス可ク又共通
ノ募シ方ヲ爲スノ義務ナカル可シ尤モ婚姻ヨ

リ生スル其他ノ義勢ハ居ヲ分チタル後ト雖モ
尚絶エス存在ス可シ

夫婦居ヲ分チタル時ハ亦必ス其財産ヲ分ツ可
シ但シ夫婦ノ居ヲ分ツ事ハ裁判所ヨリ之ヲ言
渡ス可キモノニシテ夫婦ノ中一方ノ者他ノ一
方ニ對シ苛虐ノ所爲スハ至重ノ凌辱ヲ爲シタ
ル如キ種々ノ原由ニ因テ分居ヲ爲サシム可シ

29
5
1

佛國政典第六卷終



昭和
二十六年
十一月
二十七日

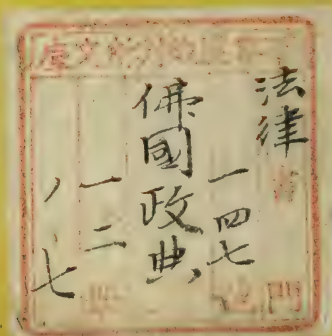


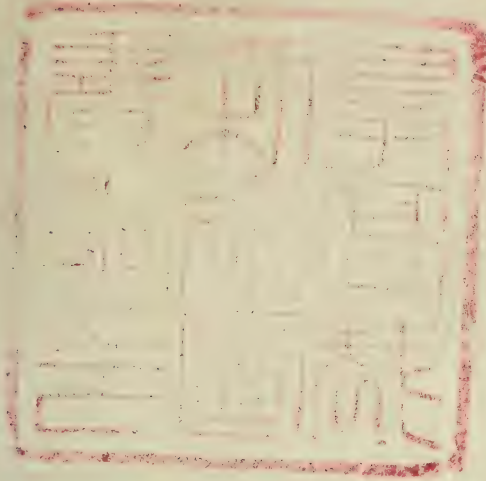
3163
3

佛國政典

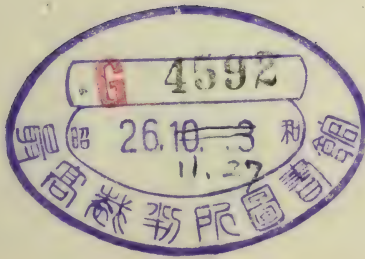
七

正
下和同第百五十八号之七
下洋旧第四十三号之七





University of Illinois
Library at Urbana-
Champaign
IAS - Oak Street



最高裁判所圖書印

水戸裁判所
管内下妻
區裁判所

佛國政典第七卷

第五款 父タル事、子タル事、養子ノ事、親

ノ權 ナボレオシ民法書第一篇第七卷從第三百一十二條至

第三百四十二條同第三百八十七條

同第九卷從第三百七十一條至第三百八十七條

嫡出ノ子、子タルノ証

婚姻ヲ結ヒタル間ニ生レタル子ハ嫡出ノ子ト

思料ス可シ故ニ夫ハ定マリタル場合ニシテ且

卷七

一 同 法 第 七

KJV
233
F79163
1873
V.7

甚々短キ期限内ニ非レハ其子ヲ以テ我子ニ非
ラスト爲ス可カラス

嫡出ノ子ノ子タル事ハ身上証書ノ簿冊ニ記シ
タル出産ノ証書ヲ以テ之ヲ証シ若シ其証書ナ
キ時ハ其子ノ嫡出ノ子タルノ景狀ヲ有スルコ
ト嫡出ノ子トシテ常ニ其子ノ取扱ハレタ
ルヲ証ス可キ諸件ノ具ハレラ云フヲ以テ
之ヲ証ス又法律上ニ於テ或ル規則ニ循ヒ子ノ
証人ヲ以テ其母ニ對シ其子タルノ証ヲ立ツル
コトヲ許セリ

私生ノ子、私生ノ子ヲ我子ナリト

認ムル事

私生ノ子

婚姻ニ舉ケタル子ヲ云フ

ハ其父母之ヲ

我子ナリト認ムルヲ得可シ

私生ノ子ヲ我子ナリト認ムルニハ其父又ハ母

ヨリ公正ノ證書

官吏ノ作リニテ爲セル隨意ノ

届ヲ以テス可シ但シ其届書ハ特ニ公証人又ハ

身上証書掛リ役員之ヲ記ス可シ

私生ノ子ノ未タ子ナリト認メラレサル者ハ或

ル規則ニ循ヒ人ヲ指シテ我母ナリト訴テル

ヲ得可シ是レ蓋シ裁判上ニテ私生ノ子タルノ

證ヲ立シルハ母ニ付テハ之ヲ許スカ故ナリ

私生ノ子ヲ嫡出ノ子ト爲ス事

私生ノ子ハ之ヲ嫡出ノ子ト爲スノ手續ヲ行ヘルヲ以テ嫡出ノ子ノ名目及其權利ヲ得可シ

私生ノ子ヲ嫡出ノ子ト爲サンニハ二件ヲ必要トス其一ハ其父母之ヲ我子ナリト認ム可キ事又一ハ其父母我子ナリト認メシ後婚姻ヲ結ビタル事

父母後ニ婚姻ヲ結フ時ハ之ニ因テ其子ノ私生タル汚ヲ雪キ以テ之ヲ嫡出ノ子ノ位ニ登サシ

ム

養子ヲ爲ス事、養子ヲ爲スニ付テ

ノ諸件

養子ヲ爲スノ法ハ子ナキ者ヲシテ其親族ヲ得
セシムル爲メニ之ヲ設ケタルモナリ

養子ヲ爲スニ必要ナル條件數多アリ今之ヲ掲
クルニ養親ハ其齡五十歳以上ニシテ且ツ養子
トナル可キ者ヨリ少クモ十五歳以上ノ年長ナ
ルヲ要ス又養親ハ養子ヲ爲スノ日ニ方テ其子
并ニ卑屬ノ親ナキヲ要ス又養親ハ養子ト成ル

可キ者ノ幼年ノ間ニ少クモ六年ノ時間其者ヲ
管顧センコトヲ要ス而シテ養子ト成ル可キ者ハ
丁年以上ノ者ナルヲ要ス又其者未タ二十五歳
ニ至ラサル時ハ其父母ノ許諾ヲ得若シ二十五
歳以上ナル時ハ其父母ニ其誨諭ヲ乞フヲ要ス
又何人ニ限ラス養子トナル可キ者ハ夫婦雙方
ノ養子トナルノ外ハ二人ノ養子トナル可カラ
ス

養子ヲ爲スニ付テノ法式

養子ヲ爲スハ一ノ契約ニシテ養親ト養子トノ

承諾ヲ至要トス但シ其承諾ハ養親ノ住所ノ治
安裁判所ノ裁判役之ヲ聞届ケ且之ヲ保證ス
治安裁判所ノ裁判役ノ面前ニ於テ記シタル養
子ヲ爲スノ契約書ハ郡裁判所ニ出ス可シ但シ
郡裁判所ニ於テハ養子ヲ爲スニ必要ナル條件
ヲ行ヒシト又養親ニ惡シキ名聲ナキヤヲ取調
ヘタル後趣意ヲ記入セサル言渡書ヲ以テ其許
可ヲ爲シ又ハ其許可ヲ爲サ、ル可シ
郡裁判所ニ於テ許可ヲ爲シタル言渡書ハ上等
裁判所ニ出シ此裁判所ニ於テ更ニ取調ヲ爲シ

テ其言渡書ヲ許可シ又ハ之ヲ改ム可シ

右ノ法式ヲ悉ク行ヒシ後養子ヲ爲シタルヲ
養親ノ住所ノ身上ノ證書ノ簿冊ニ登記ス可シ

養子ヲ爲スニ因リ生スル諸件

養子ヲ爲スニ依リ養親ト養子トノ間ニ親子ノ
關係ヲ生ス故ニ養子ハ己ノ姓ニ養親ノ姓ヲ帶
用シ又養料ヲ給スル義務ノ養親ト養子トノ間
ニ存スル事猶實父ト嫡出ノ子トノ間ニ於ケル
カ如ク又養子ハ養親ノ遺物相續ヲ爲スニ於テ
嫡出ノ子ニ屬ス可キ權利ト同一ノ權利ヲ有ス

親ノ權

父母ノ其子ノ身體及ヒ財産ニ付キ有スル所ノ
諸權利ヲ總稱シテ親ノ權ト云フ
法律上ニ親ノ權ヲ恭敬ス可キ道ヲ確定スル爲
子ハ其年次ニ拘ハラス其父母ヲ恭敬ス可シト
言ヘリ又其恭敬ノ義務ハ父母ニ對シテ存在ス
ルノミナラス又總テ尊屬ノ親ニ對シテ存在ス
可シ

親ノ權ヨリ生スル諸權利ハ父之ヲ行ヒ父ナキ
時ハ母之ヲ行フ但シ其諸權利ハ子ノ丁年ニ至

リ又ハ後見ヲ免ル、ヲ以テ終ル可シ

子ノ身體ニ付テノ父ノ權利

子ノ身體ヲ監護シ子ノ教育ヲ指令スルノ任ハ
其父ニ屬シ父ナキ時ハ其母ニ屬ス

子ハ其親ノ意ニ悖リテ其親ノ家ヲ去リ又ハ其
父ノ居ラシメタル場所ヲ去ル可カラス但シ子

ハ年齡二十歳ニ至ル時ハ其父母ハ許諾ナクシ
テ海陸軍ニ入リ兵士トナルヲ得可シ

父ハ其子ノ行狀惡シキ時ハ六月ニ過ク可カラ
サル時間其子ヲ懲治場ニ禁錮スルノ願ヲ爲ス

ノ權アリ但シ此處置ハ裁判所長ヨリ渡シタル
捕捉ノ命令書ニ據テ之ヲ行スルヲ得可シ

子ノ財産ニ付テノ父ノ權利

父ハ親ノ權ヨリ生スル義務ノ償トシテ其子ニ
屬スル財産ノ利ヲ得ルノ權ヲ有ス但シ子ノ其
父ニ管セス自己ノ勞動及シ職業ニ因リ得タル
財産及ヒ父其利ヲ得可トラサル約束ニテ他人
ヨリ其子ニ附與シ又ハ遺留シタル財産ハ此限
ニアラス

父ハ其子ノ財産ノ入額ニ付キ先ツ其子ヲ養フ

爲メ及ヒ其分限ニ適スル教育ヲ加フル爲メニ
必要ナル金高ヲ預メ取除ク可シ

父母其子ノ財産ノ入額ヲ所得トスルノ權ハ其
子ノ十八歳ニ至リタル時又ハ十八歳前ニ後見
ヲ免レタルハ其後見ヲ免レタル時終ル可シ又
母其夫ノ死シタル後其子ノ入額ヲ所得トスル
ノ權利ヲ行フ時ハ再嫁スルニ因テ其權利ヲ失
フ可シ

父ハ婚姻ヲ結ヘル間即チ其妻ノ存スル間ハ其子ニ屬ス
ル財産ヲ法律上ニテ支配スルノ權ヲ有シ而シ

テ其子丁年ト成リ又ハ後見ヲ免レタル時ハ其
子ニ其執リ行フタル諸件ノ計算ヲ爲ス可シ
若シ子ノ幼年ナル間ニ其母死去シタル時ハ其
父其子ノ後見人ト成ル可シ但シ其父後見人ト
成テ支配スルニハ婚姻ヲ結ヘル間法律上ニテ
支配スル時遵守ス可キ規則トハ更ニ異ナリタ
ル規則ニ循フ可シ

第六款 幼年ノ事、後見ノ事及ヒ後見ヲ

免ルノ事

フポレオシ民法書第
一篇第十卷從第三百

八十八條至第
四百八十七條

幼年ノ事

凡テ男女ヲ問ハス年齢未タ二十一歳ニ至ラサル者ヲ幼者トナス幼者ハ自ラ事ヲ執リ事ヲ處置スル能ハス之ニ反シテ年齢二十一歳ニ至リタル丁年ノ者ハ婚姻及ヒ養子ノ事ニ付テノ外ハ全ク自ラ事ヲ處置シ能フ可シ但シ婚姻養子ノ二件ニ付テハ男ハ二十五歳ニ至ル迄ハ其尊屬ノ親ノ許諾ノクシテ婚姻スルヲ得ス又男女共ニ二十五歳ニ至ルマデハ其父母ノ許諾ヲ得ルヲラサレハ養子トナル可ラサル一前文

ニ記スルカ如シ

後見ヲ受ク可キ幼者ノ事

後見ナルモノハ後見人ト名ル者ヲシテ幼者ニ
代ラシメ以テ幼者ノ權利ヲ保護スル爲メニ之
ヲ設フケタルモノナリ蓋シ幼者ハ悉ク後見ヲ
受ルニ非ス故ニ其父母猶存スル者ハ後見人ナ
シ

後見ハ父又ハ母ノ死去セシ日ニ於テ始マル可
シ而シテ後見ヲ免レタル幼者ハ又後見ヲ受ケ
ス故ニ後見ヲ免ルハニ因テ幼者自ラ或事ヲ處

置スルノ權ヲ得且ツ後見人ノ職勢ヲ罷マシム
可シ

概シテ右ノ規則ヲ言ヘハ未タ後見ヲ免レサル
モノニシテ其父又ハ母ヲ喪ヒシ幼者ハ後見ヲ
受ク可キナリ

後見ノ諸種、父母ノ後見

後見ニ數種アリ其首メニ掲クヘキ所ノモノハ
父母ノ後見トス其後見ハ直ニ法律ニ依テ之ヲ
任スルヲ以テ之ヲ法律上ノ後見ト云フ若シ兩
親ノ中一人死去セシ時ハ後見ヲ爲スノ權利ハ

當然生存スル一人ニ屬ス

父ニ後レテ生存スル母ノ爲セル後見ニ付テハ
別段ノ規則アリ父ハ其死ニ臨テ母ノ爲メニ輔
佐人ヲ任シ母其輔佐人ニ謀ラサレハ諸件ノ處
置ヲ爲ス可カラス但シ其輔佐人ハ遺囑ノ證書
ニ依テ之ヲ任シ又ハ公証人ノ面前ニ於テ記シ
タル證書ニ依テ之ヲ任シ又ハ治安裁判所ノ裁
判役ノ受領シタル證書ニ依テ之ヲ任ス
母ハ後見ノ職務ヲ勤ムル能ハスト思ヘル時ハ
其職ヲ辭スルノ權利アリ又後見ヲ爲セル母再

嫁セント欲スル時ハ其以前ニ必ス幼者ノ親族
ノ會議ヲ爲サシム可ク若シ其會議ヲ爲サシメ
サル時ハ後見ヲ爲ス可キ權利ヲ失フ可シ而シ
テ其親族ノ會議ニ於テハ他ノ後見人ヲシテ其
母ニ代ラシム可キヤ又ハ猶其母ヲ後見ノ職ニ
任シ置ク可キヤヲ決定シ若シ猶其母ヲ後見ノ
職ニ任シ置ク時ハ其再婚ノ夫ヲ其副後見人ト
爲シ其夫ハ婦ト共ニ後見ノ事務ヲ執リ且ツ共
ニ其事務ヨリ生スル責ニ任ス可シ

父母ノ中後ニ死去スル者ヨリ任

スル後見尊屬ノ親ノ爲ヒル後見
親族ノ會議ニテ任スル後見

幼者ノ父母ノ中後ニ死去スル者ハ己ノ死後ニ
至テ後見ノ事務ヲ行ハシムル爲メニ幼者ノ後
見人ヲ撰任スルヲ得可シ但シ其選任ハ遺囑ノ
證書ニ依テ之ヲ爲シ又ハ公証人ノ面前ニ於テ
記シタル證書ニ依テ之ヲ爲シ又ハ治安裁判所
ノ裁判役ノ受領シタル證書ニ依テ之ヲ爲ス
父母共ニ死去シ且ツ父母ノ中後ニ死去セシ者
ヨリ任シタル後見人ナキ時ハ後見ヲ爲スノ權

利ハ尊屬ノ親ニ在テ先ツ本宗ノ祖父ニ屬シ本
宗ノ祖父ナキ時ハ外族ノ祖父ニ屬シ又其祖父
ナキ時ハ曾祖父ニ屬ス但シ必ス最親ノ尊屬親
ヲ撰任シ且兩族ノ同級ナル尊屬親ノ間ニ於テ
ハ本宗ノ尊屬親ヲ外族ノ尊屬親ヨリ先キニ撰
任ス可シ而シテ若シ此等ノ方法ニ因リ後見ノ
職ヲ勤ム可キ者ナキ時ハ幼者ノ親族ノ會議ニ
テ後見人ヲ撰任ス可シ

親族會議ノ組立方及ヒ其職務

親族ノ會議ハ本宗ノ血屬又ハ姻屬ノ親三名ト

外族ノ血屬又ハ姻屬ノ親三名トヨリ成リ而シ
テ治安裁判所ノ裁判役之レカ上席ヲ爲ス但シ
親族ノ會議ハ後見ノ始マル場所如者ノ父ノ最
終ノ住所ヲ云
ニ於テ集會ス

親族ノ會議ヲ組立ツルニハ本宗外族共ニ如者
ノ住スル邑内又ハ其住所ヨリ二ミリヤメート
ルノ距離内ニ居住スル最親ノ血屬又ハ姻屬ノ
親ヲ採用ス可シ但シ同級ノ親ニ於テハ血屬ノ
親ヲ姻屬ノ親ヨリ先キニ撰任シ又級ノ等シキ
モノハ高年ノ親ヲ若年ノ親ヨリ先キニ撰任ス

可シ

右規則ハ必スシモ嚴密ニ之ニ循ハサル可カラ
サルモノニ非ス故ニ治安裁判所ノ裁判役ハ幼
者ノ住スル邑外ニ居住スル血屬又ハ姻屬ノ親
ト雖モ其邑内ニ居住スル血屬又ハ姻屬ノ親ヨ
リ更ニ近親ナルカ又ハ之レト同級ナル時ハ此
等ノ者ヲシテ親族ノ會議ニ參セシムルヲ得可
シ若シ又幼者ノ住所ノ邑内ニ在ル血屬又ハ姻
屬ノ親ノ數定員ニ充タサル時ハ更ニ遠隔ノ地
ニ居住スル血屬又ハ姻屬ノ親ヲ招キ或ハ幼者

ノ父母ト親交シタル者ヲ招キ以テ親族會議ノ
缺ヲ補フ可シ

親族會議ハ治安裁判所ノ裁判役ノ定メタル日
ニ方リ其裁判役ノ家ニ於テ集會ス可シ但シ其
會議ノ員中ノ者若シ故障アツテ自ラ出席スル
ヲ能ハサル時ハ特ニ任シタル名代人ヲ以テ其
名代ヲ爲サシムルヲ得可シ

親族會議ノ職トシテ掌トル可キ事件數多アリ
今之ヲ掲クルニ親族會議ハ後見人ヲ撰任シ又
後見人ノ監察者ヲ任シ又後見人ノ免職ヲ言渡

シ又幼者ノ家産ニ管スル或ル所爲ヲ許諾ス可
キ等はレナリ

後見人ノ監察者其任方其職勢

後見人ノ監察者トハ後見人ノ支配スルヲ監察
スル爲メ後見人ニ附シタル人ヲ云フ總テ後見
ニハ必ス其監察者アル可ク其監察者ハ親族會
議ヨリ之ヲ任シ而シテ後見人ノ屬セサル族中
ノ者ニ非レハ其撰任ヲ受ク可カラス故ニ後見
人本宗ニ屬スル者ナル時ハ其監察者ハ必ス外
族ノ親又ハ他人タル可ク又後見人外族ノ者ナ

レハ其監察者ハ必ス本宗ノ親又ハ他人タル可
シ
後見人ノ監察者ハ特ニ後見人ノ支配上ノ監照
ヲ行フコトヲ任シ又後見人ノ免職ヲ必要ト思ヘ
ル時ハ親族會議ノ面前ニテ其職ヲ免ス可キコ
トヲ申立テ又後見ノ職ノ欠クル時ハ更ニ後見人
ヲ任スルコトヲ求メ及ヒ幼者ノ權利ト後見人ノ
權利ト相觸ルコトアル時ハ幼者ニ代リ且後見
人ノ職勢ヲ勤ム可シ

後見ノ職ヲ辭ス可キ事後見ノ職

＝任スル能ハサル事、後見ノ職ニ
參セシメサル事、後見ノ職ヲ免ス
ル事

後見ハ人民公ケノ義務ニシテ其任ヲ辭スルハ
之ヲ許ルサル所ナリ然レ法律上ニ定メタル
原由ニ因テ後見ノ職ヲ辭スルヲ許ルスニアリ
是ノ故ニ或ル官吏及ヒ服役中ノ軍人ハ後見ノ
職ヲ辭スルヲ得可ク又幼者ノ血屬又ハ姻屬
親ニ非ラサル者ハ後見ノ職ヲ務メ得可キ其
血屬又ハ姻屬ノ親アラサル場合ヲ外ハ強テ之

ヲ後見ノ職ニ任セシムルヲ得ス

母又ハ尊屬ノ親ニアラサル女及ヒ幼者ハ後見人ト成リ又ハ親族會議ノ員中ニ加ハル一能ハス又或ル罰ノ言渡ヲ受ケタル者及ヒ聞ハアル不行狀ノ人ハ後見ノ職ニ參セシメス

幼者ノ爲メニ不利ナル處置ヲ爲シタル後見人ハ親族ノ會議ニテ其職ヲ退カシムルヲ得可シ但シ其後見人ハ其親族ニ對シ裁判所ニ訴フルヲ得可シ

幼者ノ身體及ヒ其財産ニ付テノ

後見人ノ權

幼者既ニ其父母ヲ喪ヒシ時ハ其身體ヲ監察シ
其教育ヲ指令スル者ハ後見人ニシテ其後見人
ハ幼者ニ對シテ至重ナル戾意ノ事アル時ハ親
族會議ノ許可ヲ得タル上幼者ヲ禁錮ヒシムル
ヲ得可シ

後見人ハ極メテ懇切ニ幼者ノ財産ヲ支配ス可
ク且ツ其支配方ノ不良ナルニ因リ幼者ノ爲メ
ニ生シタル損害ニ付テハ其責ニ任ス可シ又後
見人ハ幼者ノ家産ヲ支配スル爲メニ必要ナル

諸件ニ付テハ幼者ニ代ル可シ

後見人ノ其職務ヲ行ヒ始ムル前
ニ行フ可キ諸件

後見人ハ其職務ヲ行ヒ始ムル前ニ其監察者ノ
面前ニテ幼者ノ財産ノ目錄書ヲ作ラシム可シ
又後見人ハ親族會議ニテ物品ノ儘保ヲ置ク
ヲ許ルシタル動産ヲ除ク、外其他ノ動産ハ悉
ク公ケ、糶賣ヲ以テ之ヲ賣拂ハシム可シ是レ
蓋シ其動産ハ實ニ幼者ノ爲メ不用ナルヲ多ク
シテ且ツ廢損ス可キモノナルカ故ナリ

父母後見ノ職務ヲ行ヒ且ツ法律ニ循ヒ子ノ財産ノ入額ヲ所得ト爲ス時ハ其子ノ動産ヲ賣却スルニ及ハス

父母ヲ除クノ外其他ノ後見人ハ親族ノ會議ヲシテ幼者ノ毎歲ノ費用ノ總額ヲ定メシメ且ツ其入額ノ餘額幾許ニ至ル時ハ幼者ノ利益ノ爲メニ之ヲ用フ可キヤヲ定メシム可シ

後見人ノ支配及ヒ其事柄ノ種類ノ事

後見人ハ其支配ニ管スル事柄ヲ總テ獨斷ヲ以

テ行フヲ得可シ故ニ家屋及ヒ土地ヲ九年以下
ノ時間貸借スル証書ヲ記シ或ハ幼者ノ入額及
ヒ其財本ヲ受取リ或ハ其金額ヲ資益トナル可
キ方法ニ使用スル等ハ後見人一己ノ意ニテ爲
スヲ得可キ事トス

其他ノ事柄ニ於テハ親族會議ノ許諾ヲ得ルニ
非レハ後見人一己ノ意ニテ之ヲ行フヲ得ス就
中其許諾ノ必要ナル事柄ハ幼者ノ爲メ遺物相
續ヲ爲ス事ヲ兼諾シ又ハ之ヲ拒ム事等ニアリ
トス但シ親族會議ノ許諾ヲ得タルト雖モ其遺

物ノ目錄ヲ記シ其受取タル遺物ノ價額ニ至ル迄ノ外遺物ノ負債ヲ償ハサルノ約定ヲ爲シタル上ニ非レハ後見人右相續ノ承諾ヲ爲ス可カラス

又後見人ハ幼者ノ爲メ生存中ノ贈遺ヲ受ル事遺物ノ分派ヲ要ムル事幼者ノ不動産ニ管シタル訴訟ヲ爲ス事等ニ付テモ亦親族會議ノ許諾ヲ受ルヲ要シ又更ニ至重ノ事件ニ付テハ親族會議ニテ論決シタル上ヤ郡裁判所ニ申立テ其允許ヲ受ルヲ必要トス故ニ法律上ニ定ムル

所ニ依レハ幼者ノ爲メ金高ヲ借入ル、事或ハ
幼者ノ不動産ヲ書入質ト爲ス事又ハ之ヲ賣拂
フ事ニ付テハ同上ノ法式ヲ遵守セラル可カラ
ス尤モ其不動産ヲ賣拂フ事ハ格段ノ法式ニ循
ヒ且裁判手續ヲ歷タルニ非レハ之ヲ爲ス可カ
ラス

其他事柄ニ由リ後見人ノ決シテ爲シ得可カラ
サル事アリ例ヘハ幼者ニ屬スル財産ヲ買取ル
事及ヒ幼者ニ對シタル債主ノ權ヲ讓受ル事ノ
如キハ後見人ノ決シテ爲ス可カラサル事トス

後見人ノ算計ノ事

後見人其職ノ終リシ時ハ己レカ執行フタル諸
事ニ付テノ算計ヲ爲ス可シ故ニ幼者丁年ニ至
リ又ハ管財人ヲ得テ後見ヲ免レタル時ハ幼者
ニ算計ヲ爲シ若幼者死去シタルニ因リ後見ノ
職終リタル時ハ其相續人ニ算計ヲ爲ス可シ而
シテ其算計書中ニハ幼者ノ爲メ受取リタル入
額ト有益ノ事ニ用ヒタル出額トヲ記載ス可シ
蓋シ此算計書ヲ以テ差引勘定ヲ立ル時ハ何レ
カ過不及アル可キヲ以テ幼者ニ取分ル時ハ

後見人ノ未タ償ハサル殘額ニ算計書終成ノ日
ヨリノ利息ヲ加ヘ之ヲ幼者ニ拂フ可ク幼者ヨ
リ償フ可キ殘額アル時ハ只後見人ヨリ其催促
ヲ爲セシ日ヨリノ利足ノミヲ加ヘテ之ヲ後見
人ニ拂フ可シ又右ノ算計書上ニ管シ雙方ノ間
ニ爭ヲ生シタル時ハ裁判所ニ訴ヘ其處分ヲ受
ク可ク其外右算計書ニ付キ別段ノ法式アルヲ
ナシ

右算計ノ事ニ付キ訴訟ヲ爲ス期限ハ幼者ノ丁
年ニ至リシヨリ十年内ニ限ル可シ又法律上ニ

テ幼年ノ丁年ニ至リシ者ヲ保護スル爲メ設ル
所ノ規則ニ從ヘハ後見人ヨリ幼者ニ對シ其權
利ヲ害スル事件ヲ強テ承諾セシムル事ヲ防ク
カ爲メニ算計書及ヒ証書類ヲ幼者ニ渡シ幼者
ヨリ其受取証書ヲ渡シタルヨリ少クトモ十日
後ニ至ラサレハ後見人ト幼者トノ間ニ後見上
ノ事ニ付キ何等ノ約定ヲモ取結フ可カラサル
事ヲ定メタリ

幼者ノ後見ヲ免カル、事及ヒ其
法式

幼者ヲシテ後見ヲ免カレシムル時ハ幼者ノ丁
年ニ至ル前ニ特ニ限定シタル權利ヲ許與シ且
己レカ財産ヲ自カラ支配スル事ヲ許容ス但シ
其後見ヲ免カル、事ハ婚姻ヲ爲スニ因リテ當
然之ヲ得可シ故ニ婚姻ヲ爲シタル幼者ハ婚姻
ノ一事ヲ以テ其後見ヲ免カル可シ又十五歳ニ
至リタル幼者ハ其父母ヨリ後見ヲ免カレシム
ルヲ得可シ但シ父母ヨリ後見ヲ免カレシムル
時ハ其由ヲ治安裁判役ニ届ク可シ
又父母既ニ死去シタル幼者ハ十八歳ニ至ラサ

レハ後見ヲ免カル、事ヲ得ス又然ルキハ親族
會議ニテ評議シ且親族會議ノ議長タル治安裁
判役ヨリ其幼者ノ後見ヲ免カレタル事ヲ公告
シタルニ因リ後見ヲ免カル、事ヲ得可シ

後見ヲ免カル、ニ付キ生スル條
件

幼者後見ヲ免カレタル時ハ後見人ノ職ヲ罷メ
且親ノ權ヲ受クルヲ免カル可シ故ニ幼者ハ父
母ノ住所ヲ離レ他ニ住所ヲ撰ムヲ得且獨斷ヲ
以テ事ヲ處置スルヲ得可シ然ト雖モ其事柄ニ

由リテハ後見ヲ免カレタル幼者親族會議ヨリ
選任シタル管財人ノ立會ナケレハ行フ可カラ
サルモノアリ但シ後見ヲ免カレタル幼者ハ眞
ノ理財上ニ於ケル事柄ハ萬事獨決ヲ以テ之ヲ
行フヲ得可ク譬ヘハ家屋及ヒ土地ヲ九年以下
ノ間貸渡スノ證書ヲ記ス事又ハ入額ヲ受取ル
事等ハ獨決ヲ以テ爲シ得可シト雖モ其財本ヲ
扱フ等ノ事ニ至リテハ其用方ヲ監督ス可キ管
財人ノ立會ナカル可カラス又後見ヲ免カレタ
ル幼者其後見人ノ正算書ヲ受取ル事ニ付テモ

亦管財人ノ立會アルヲ必要トシ其他金額ヲ借
入ル、事不動産ヲ書入質ト爲ス事及ヒ之ヲ賣
拂フ事ニ付テハ後見ヲ免カレタル幼者ト雖モ
親族會議ノ許諾ヲ受ケ其說ヲ裁判所ニ申立テ
其裁許ヲ受タル上ニ非サレハ勝手ニ爲スヲ得
可カラス

右ノ外後見ヲ免カレタル幼者ト雖モ年齡未タ
十八歳ニ至ラスシテ且父母ノ許可ヲ受ケサル
時或ハ治安裁判後ノ裁許ヲ得タル親族會議ノ
評議ニ由テ許サレサル時ハ商業ヲ營ムヲ得ス

第七款 治産ノ禁、裁判所ヨリ任スル輔

佐人及ヒ狂病人ノ事「ナポレオン」氏法書

第一篇第十一卷從第四百八十八條至第五百十五條 十八

百三十八年六月三十日ノ法律

治産ノ禁ノ本性及ヒ保護ノ事

法律上ニテ幼者ノ爲メ設ル所ノ保護ハ既ニ丁

年ニ至リテ尚自己ノ權利ヲ行ヒ得可カラサル

者ノ爲メニモ缺ク可カラサル事トス若シ斯ク

自己ノ權利ヲ自カラ行ヒ得可カラサル者ヲシ

テ他ヨリ顧ミルヲナク保護ヲ受ル所ナカラシ

メハ其産業ヲ破リ遂ニ營生ノ道ヲ失フノ恐アリ故ニ治産ノ禁ノ制度アリテ自カラ其權利ヲ行ヒ得可カラサル者ヲシテ斯ノ如キ成行ニ至ラシムルヲ防キ而シテ治産ノ禁ヲ受ケタル者ハ獨斷ニテ事ヲ執ルヲ得サラシムルヲ要ス可シ因テ此禁ヲ受タル者ニハ之レカ保護ヲ爲ス可キ後見人アリテ其者ノ財産ヲ支配シ且其者ノ管係アル諸証書ヲ代記スル等ノ諸事ヲ擔當ス

治産ノ禁ヲ受ク可キ者及ヒ治産

ノ禁ヲ申立テ得可キ者

何人ニ因ラス常ニ精神錯亂ノ様子アル者ハ治
産ノ禁ヲ受ケシム可シ尤モ此疾ノ片時モ常ニ
平愈スルコナキ者ニ限ルニ非ラス間々常ニ復
スルコアル者ト雖モ此禁ヲ受ルコアリ然ト雖
モ其疾只一時ニシテ復スルモノ又ハ偶然ニ發
スルモノ、如キハ治産ノ禁ヲ受ケシム可カラ
ズ但シ治産ノ禁ヲ受ケシムルハ其疾ノ片時モ
平愈スルコナキ程ニアラスト雖モ平常此疾ノ
様子アル者ニ限ル可シ

治産ノ禁ハ親族中ヨリ之ヲ申立ルヲ得可ク亦
夫婦ノ中其一方ニ對シ他ノ一方ヨリ之ヲ申立
ルヲ得可シ

治産ノ禁ヲ言渡ス常式

治産ノ禁ハ裁判言渡書ヲ以テ之ヲ言渡ス可シ
蓋シ裁判所ニ於テハ親族會議ニテ治産ノ禁ヲ
適宜ト爲スヤ否ヲ評論シタル說ヲ聞キタル後
裁判役會議ノ室ニ被告人ヲ呼出シテ之ヲ問糾
シ又其被告人會議ノ室ニ出席スルヲ能ハサル
時ハ特ニ委任シタル裁判役ヲシテ其被告人ヲ

問糾サシメタル上ニ非サレハ治産ノ禁ノ申立
ニ付キ裁判ヲ爲ス可カラス

右治産ノ禁ヲ言渡ス裁判言渡書ハ之ヲ揭示板
ニ記載ス可シ但シ其揭示板ハ裁判所ノ聽訟室
ト其郡内ノ公証人ノ役所トニ掲ケテ以テ公ケ
ニ示ス可シ

又精神錯亂ノ様子平愈シタル時ハ初メ治産ノ
禁ノ申立ヲ處分シタル時ト等シキ法式ニ依リ
裁判言渡書ヲ以テ治産ノ禁ノ免除ヲ言渡ス可

治産ノ禁ヨリ生スル條件及ヒ治
産ノ禁ヲ受タル者ノ作リタル証
書ノ取消

治産ノ禁ノ言渡アリタル後ニ治産ノ禁ヲ受タ
ル者ノ作リタル諸証書ハ其者ノ間々平愈シタ
ル時ニ作リタルト否ヤトニ關セス總テ之ヲ取
消ス可シ是レ蓋シ治産ノ禁ヲ受ケシ者ハ其間
何時ニテモ自カラ權利ヲ行フ可カラサルニ因
レハナリ

又治産ノ禁ヲ受クル以前ニ作リタル諸証書ト

雖^レ此^レ之ヲ作リタル時既ニ治産ノ禁ヲ受ク可キ
原由アルコト明白ナルニ於テハ亦之ヲ取消ス可
シ

治産ノ禁ヲ受ケタル者ノ後見人
ノ事

治産ノ禁ヲ受ケタル者ニハ恰モ幼者ノ如ク其
後見人アリテ其後見人ノ權利及ヒ其職ヲ行フ
ニ付テノ定則モ亦幼者ノ後見人ニ於ケルト異
ナルコトナシ而シテ其後見人ハ通常親族會議ニ
於テ之ヲ選任ス可シト雖^レ此^レ獨リ夫ハ當然其婦

ノ後見人ト爲ル可キ權利アリ

又治産ノ禁ヲ受タル者ハ已レカ生存中後見ヲ
受クル事アリテ其間後見ノ任ヲ行フ者ハ其任
甚タ長クシテ煩勞多キカ故ニ配偶者及ヒ尊屬
卑屬ノ親ヲ除クノ外ハ何人ニ限ラス十年以上
後見ノ職ヲ行フニ及ハストス

治産ノ禁ヲ受タル者ノ入額ハ全ク其療養ニ充
テ、其者ノ命運ヲ慰スルノ道ニ用フ可ク且後
見人タル者ハ專一ニ此事ニ注意ス可シ又時ノ
模様ニ因リ親族會議ニテ其者ヲ其家ニ於テ療

養ス可キヤ又ハ養病院ニ送ル可キヤヲ評決ス
可シ

狂病人ノ事及ヒ千八百三十八年

六月三十日ノ法律

狂病人ノ親族治産ノ禁ヲ申立ルニ付テノ入費
ヲ厭フカ若ノハ此惡疾アルコヲ陰サシカ爲メ
治産ノ禁ヲ申立テサル事アリテ狂病人ノ中治
産ノ禁ヲ受ケサル者間々之アリ然ル時ハ此等
狂病人ノ爲メ一ノ方法ヲ設ク可ク是レ即チ特
設ノ屋舎即チ狂
病院ヲ設ケテ狂病人ヲ入ラシムル

所以ナリ何トナレハ狂病人ハ其家族ノ爲メ至
重ノ患難ヲ醸ス可キ恐レアルノミナラス亦公
ケノ安寧ヲ害スルノ掛念之アレハナリ茲ヲ以
テ人々自主ノ權利ヲ保護スルノ本旨ニ戾ラサ
ル方法ヲ設ケ狂病人ノ權利ト衆庶ノ權利トヲ
保護ス可キニ因リ千八百三十八年ノ狂病人ニ
管スル法律ヲ設ケタル所ナリ

狂病院ノ事

各州毎ニ公立ノ狂病院一箇所ナカル可カラス
若シ然ラサレハ本州ノ狂病人ヲ入院ヒシムル

爲メ私立ノ狂病院ト預メ打合セ又ハ他州ノ狂
病院ト預メ打合セ置ク可シ而シテ其公立狂病
院ハ官府ヨリ之ヲ支配シ私立狂病院ハ官府ノ
監督視察ヲ受ク可クシテ州長又ハ其代理、郡裁
判所長、檢事、治安裁判役及ヒ邑長ハ一定ノ期日
ニ於テ公私ノ狂病院ヲ巡視ス可シ
狂病人貧困ニシテ入院費ヲ出スノ力ナキ時ハ
州資ヲ以テ其費ニ充ツ可シ

狂病院ニ入ラシムル事

狂病人ノ病症公ケノ靖寧ヲ害シ又ハ諸人ノ安

全ヲ害スルヲアル時ハ官府ヨリ命シテ之ヲ狂
病院ニ入ラシムル事ヲ得ク又其他ノ場合ニ
於テハ血屬姻屬ノ親又ハ狂病人ニ管係アル者
ノ出願ニ依テ入院セシム可シ而シテ其入院ヲ
願立ル書面ハ狂病タル事ヲ証スル醫師ノ証書
ヲ添ヘテ差出ス可シ

人々自主ノ權利ヲ保護スル事

或役員狂病院ノ視察ヲ爲ス可キノ任ヲ受テ狂
病院ニ入りタル者ノ枉ニ入院セシメラレシニ
非サルヤ否ヲ探索証明シ且必要ナル時ニ於テ

ハ入院シタル者ノ願書ヲ受取ル可シ又何人ニ
限ラム醫師ヨリ狂病平愈ノ旨ヲ申告シタル者
ハ狂病院ニ留メ置ク可カラズ又特ニ法律上ニ
定メタル者ハ狂人ノ病未タ平愈セスト雖モ出
院ヲ申立ルヲ得可シ

又州長ハ枉ニ狂病院ニ留メ置フレタル者アル
片ハ速ニ出院ヲ命スルヲ得可ク又本人親族朋
友及ヒ檢事ハ其狂病院所在ノ地ニ在ル裁判所
ニ速ニ出院ノ言渡アラシム事ヲ訴フルヲ得可シ
蓋シ此訴ノ裁判ハ裁判役會議ノ室ニ於テ之ヲ

爲ス可ク且其裁判ハ速ニ之ヲ決シ其裁判ニ付
テノ費用ハ凡テ之ヲ訴訟人ヨリ拂ハシムルヲ
ナシ

裁判所ヨリ任スル輔佐人ノ事及
ヒ此輔佐人ヲ任ス可キ場合

裁判所ヨリ輔佐人ヲ任ス可キ人々ハ左ノ如シ

第一 狂病ノ様子ナシト雖凡性來白癡ナ
ルニ因リ自己ノ事業ヲ行ヒ得サル
者

第二 浪費ヲ爲ス者即チ己レカ財産ヲ無

益ニ遣ヒ果シ其權利ヲ害スル者

裁判所ヨリ任スル輔佐人ハ郡裁判所ヨリノ言
渡書ニ因テ受任ス可シ又其輔佐人ヲ命スルノ
手續ハ治産ノ禁ヲ命スルノ手續ト同一ナリト
ス

裁判所ヨリ輔佐人ヲ任スルニ付
キ生スル條件

裁判所ヨリ任スル輔佐人ヲ附ケラレタル者ハ
治産ノ禁ヲ受タル者ノ如ク決シテ自分一己ノ
了見ヲ以テ事ヲ行フ可カラス又其者ハ偏ニ輔

佐人ノ立會ヲ要スルノミナラス事柄ノ種類ニ
因リテハ必ス其輔佐人ノ補助ヲ受ク可シ若シ
其補助ナキハ訴訟ヲ爲シ又ハ和解ヲ爲シ又
ハ金額ヲ受取リテ其証書ヲ出シ又ハ不動産ヲ
賣渡シ又ハ之ヲ書入質ト爲ス等ノ事ヲ爲ス可
カラス然レモ其他ノ事柄ニ於テハ自カラ之ヲ
爲シ得可クシテ通常ノ權利ヲ有スルモノトス

第二章 財産、財産所有ノ權及ヒ財産所有

ニ類似シタル種々ノ方法

第一款

財産、區別

「ナポレオン」民法書
第二篇第一卷從第

五百四十六條至第五百四十三條

財産ノ字義

財産トハ凡テ一人一己ノ私有ト爲シ得可キ諸物即チ人ノ産業中ニ加フ可キ諸物ヲ云フ故ニ空氣、光線等ノ如キ諸物ハ之ヲ財産トス可カラズ是レ此等ノ諸物ハ誰アツテ一人一己ノ爲メニ利益ヲ得セシムルモノニ非ス衆人一同ノ利益トナル可キモノナレハナリ

動産不動産ノ區別及ヒ其區別ノ

有益ナル事

財産ハ之ニ動産ト不動産トノ二類アリ此區別
ハ即チ佛國法律ノ基本タル者ニシテ諸般ノ法
律ニ大體此區別アラサルハナシ故ニ今其區別
ノ適例ヲ示ス左ノ如シ

第一 書入質ニ付テノ區別

書入質トハ義務ヲ行フ可キ者即チ負債者ヨリ已

レカ負債ヲ償還スルノ保証トシテ義務ヲ得

可キ者即チ主ニ一箇ノ權利ヲ附與スルニ在リ

而シテ書入質ハ不動産ノミニ限ル可ク決シ

テ動産ヲ書入質ニ爲ス可ラス

第二 裁判所管轄上ニ付テノ區別

不動産ニ管スル訴訟ハ其不動産所在ノ地ヲ
管轄スル裁判所ニ之ヲ爲ス可ク動産ニ管ス
ル訴訟ハ被告人ノ住所ヲ管轄スル裁判所ニ
之ヲ爲ス可シ

第三 賣買上ノ區別

動産ノ賣買ハ其場合ニ因リテ不動産ニ於ケ
ルヨリモ一層容易ク之ヲ爲シ得可クシテ甚
々重大ノ事ト爲サス故ニ後見人幼者ニ屬シ
タル動産ヲ賣ルニ付テハ別段ノ法式ヲシ

雖凡不動産ヲ賣ルニ付テハ親族會議ニテ論
決シ更ニ裁判所ノ允許ヲ得ル等ノ法式ヲ要
ス可シ

第四

「プレスクリフシヨ」ン

即チ滿期
所得ノ年

限ニ付テノ區別

「プレスクリフシヨ」ントハ定期ノ間物ヲ所持
スルニ因リ遂ニ其物ヲ眞ニ己レカ所有ト爲
スヲ得ル方法ニシテ不動産ヲ所有ト爲スノ
權ヲ得ルニハ所持ノ年限少クトモ十年大體
ハ三十年ヲ要スト雖凡不動産ニ於テハ然ラス



事正實ノ意ニ出テタル時ハ只其物ヲ所持ス
ル事ノミヲ以テ所有ト爲スノ權ヲ得可ク所
持ノ年限ヲ問フヲナシ是レ即チ民法書第二
千二百七十九條ニ動産ニ付テハ所持ヲ以テ
猶証書ニ等シキ効アリト記スル所以ニシテ
此語ハ世ノ人口ニ流布スル所ナリ

其他動産ト不動産ノ區別ハ婚姻ノ契約上ノ事
柄及ヒ財産ヲ差押ヘテ之ヲ賣拂フ事ニ付テモ
亦必要ナルモノトス蓋シ不動産ヲ差押ヘテ之
ヲ賣拂フニ付キ行フ可キ法式ハ動産ニ比スレ

ハ一層手數多ク且嚴重ナルモノトス

不動産及ヒ不動産ノ種類

不動産ニ三種ノ類別アリ即チ左ノ如シ

第一 其本性不動産タル物

第二 其用法ニ因テ不動産タル可キ物

第三 權利中ニ之ヲ適用スル目的ニ因

テ不動産ト爲ス可キ物

第一 其本性不動産タル物

本性不動産タル物トハ眞ニ其位置ヲ移スヲ能

ハサル性質ノ物ニシテ土地又ハ建造物之レナ

リ又収納物及ヒ林木ノ如キハ其未タ地ヨリ離
レサル間ハ是レ亦同様不動産ト爲ス可ク其収
納物既ニ地ヨリ離レタル時又ハ林木ヲ伐リ倒
シタル時ハ動産ト爲ス可シ

第二 用法ニ因テ不動産タル可キ物

用法ニ由テ不動産タル可キ物トハ元來其位置
ヲ移シ得可キ性質ノ物即チ動産ニシテ本性不動産

タル物ノ所有者其不動産ノ用ニ立ルニ因リ又
ハ其本性不動産タル物ノ所有者永久ノ方ヲ以
テ其不動産ニ附着シタルニ因リテ不動産即チ位置

法

法

法

法

法

法

ラ移ス可ナトナル可キ物ヲ云フ故ニ土地ノ所

有者ノ土地ヲ耕スニ用フル牛馬ノ如キハ其用

法ニ因テ不動産タル可キ物ナリト爲シ此等ノ

如キ物ハ土地ニ附屬シタル物ナルカ故ニ若シ

債主其土地ヲ差押ユル時ハ耕作ニ用ヒタル物

即チ用法ニ因リテ不動産トナリタル物モ同様

之ヲ差押ユルヲ得可シ又農業ノ器具、稼ノ木、釜

蒸餾ノ器具、桶樽ノ類、畫額及ヒ房室ノ家具ト相

連屬シタル飾付ケノ具モ亦用法ニ因テ不動産

タル可キ物トス但シ此等ノ物品ヲ本性不動産

タル物ノ用ニ供スルヲ止メ又ハ之ニ附着ス
ルヲ止メタル後ハ其以前ノ本性ニ復シテ動
産トナル可シ

第三 權利中ニ之ヲ適用スル目的ニ
因テ不動産トナス可キ物

權利ハ元ト無形ニシテ眼以テ之ヲ見ルヲ能ハ
サルモノナリト雖モ法律上ニテ假リニ其權利
ニ不動産及ヒ不動産ノ區別ヲ附ケタリ譬ヘハ不
動産ヲ目的ト爲ス權利ハ之ヲ不動産ト見做ス
可ク是レ即チ權利ヲ適用スル目的ニ因テ不動

言 法 器
産ト爲スモノナリ故ニ不動産ニ付キ入額ヲ得
ルノ權利及ヒ一箇ノ土地ノ他ノ土地ニ對シテ
得ル所ノ權利ハ適用ノ目的ニ因テ不動産タル
可キモノ、類トス

動産及ヒ動産ノ區別

動産ニ二種ノ區別アリ卽チ左ノ如シ

第一 其本性動産タル物

第二 法律上ノ所定ニ因テ動産トナス

可キ物

第一種ノ動産ナル物ハ眞ノ動産ニシテ卽チ有

形ノ物ヲ云ヒ第二種ノ動産ナル者ハ動産ヲ目的ト爲スノ權利ヲ云フナリ而シテ此第二種ノ動産ハ別段重要ナルヲ以テ更ニ其細説ヲ爲サントス

動産ノ繁殖

開化漸ク進ムニ隨テ百工貿易ノ道亦盛ニ起リ絶エス動産ノ増殖ヲ爲スニ因リ開化ノ進歩ト共ニ國ノ動産ノ富亦次第ニ増殖シテ其限アルコナカル可シ蓋シ昔時ニ於テハ人々ノ財産ハ過半不動産ニ在リシカ現今ニ於テハ人々ノ財

産中動産ノ割合著シク増加スルニ至リ語ニ今
時ノ富ハ動産ニ在リト云ヘルコアリ此語眞ニ
然リトス因テ左ニ一二例ヲ掲ケテ其然ル所以
ヲ説述セントス

動産ト爲ス可キ諸物ノ例

動産ト爲ス可キ諸物ノ中最重大ナルモノハ即
チ左ノ如シ

第一 金額又ハ動産ヲ得可キ權

例ヘハ「¹ボール」者「¹エール」ヨリ「¹フラン」
ヲ借入ル、時ハ「¹エール」ハ「¹ボール」ニ對シ債主

ノ權卽チ動產ト爲ス可キ權利ヲ有スル者トス
其他工作會社鐵道會社或ハ其他ノ會社ニ於テ
發行シタル証券モ亦此類ノ動產中ニ列ス可シ
是レ蓋シ此證券ヲ有スル時ハ其所有者ノ爲メ
ニハ之ヲ發行シタル會社ニ對シ債主ノ權ヲ有
スルニ異ナラレハナリ

第二 商社或ハ工作會社ニ加入シタル
株數及ヒ其利益

會社ノ株數及ヒ其利益ハ卽チ會社中ノ各人負
ニ屬スル權利ニシテ若シ此權利ヲ特別ノ法式

ヲ以テ譲リ渡ス時ハ之ヲ株數ト云ヒ而シテ其
株數証書ニ別段其持主ノ名ヲ指定ムル時ハ會
社ノ簿冊中ニ記入シテ其株數ヲ讓渡ス可ク又
其株數証書何人ニ限ラス之ヲ所持スル者ニ其
權ヲ與フル時ハ只証書ヲ與フルノミニテ其株
數ヲ讓渡ス可ク又會社ノ利益ナル者ハ會社ノ
本性ニ因リ或ハ社員ノ結約ニ因リ同上ノ法式
ヲ用ヒテ之ヲ他人ニ讓渡スヲ得ス

第三 政府或ハ平民ヨリ得可キ年金

年金ハ貸金ト異ナリ何トナレハ年金ハ「ア」レ

ラ―シユト稱シテ期限ヲ定メテ利金ヲ拂フ事
ヲ求メ得可キ權利ニシテ年金ノ債主ハ負債者
ヨリ其利金ヲ拂フニ於テハ其元金ノ返還ヲ求
ムルヲ得サルモノナリト雖氏貸金ハ早晚元金
ヲ返却ス可キ義務其負債者ニアレハナリ
又年金ハ其種類無期ノ年金ノ年限ノ定メ又ハ畢
生間ノ年金年金ヲ得可キ本人ノ死去タルニ管
ヒス又債主ノ元金ヲ出シテ設ケ爲シタルモノ
ト不動産ノ代價トシテ設ケ爲シタルモノトヲ
問ハス一切之ヲ動産ト爲ス可キ權利トス

第二款

所有ノ權

「ナポレオン」民法書第二篇第二卷從第五百

四十四條至第五百七十七條

所有ノ權ノ根元

所有ノ權ハ諸權利ノ中殊ニ古クシテ且人ノ一
般ノ認許シタル者ニシテ或ル論理學者ノ説ノ
如ク人ノ撰定セシ法律ニ由テ生スル者ニアラ
ス又人ノ約束ニ由テ成ル者ニアラス其根元ハ
人ノ本性ト人ノ在世ニ不可缺トニアリトス故
ニ若シ此權利ノ保護アルニアラサレハ人將タ
言ハン世ニ人間ノ交際存在スルヲ能ハス再ヒ

野蠻ニ赴ク可シト蓋シ此説ハ眞ニ爭フ可カラ
サル確論ト云フ可シ

所有ノ權ノ義意及ヒ其權利ヲ行
フニ付テノ制限

所有ノ權トハ法律ヲ以テ定メタル規制ニ循ヒ
十分自由ニ物件ノ益ヲ得及ヒ之ヲ取扱フ權利
ヲ云フ而シテ其物件ノ益ヲ得ル權利トハ總テ
其物件ヨリ産スル實業即チ其物件ヨリ生スル
利益ヲ得ル權利ヲ云ヒ又其物件ヲ取扱フ權利
トハ其物件ヲ賣渡シ或ハ之ヲ他人ニ讓與シ或

ハ其所有者ノ都合ニ因リ之ヲ破毀スルトモ妨
ナキ權利ヲ云フ故ニ所有ノ權ハ其本性十分自
由ノモノタリト雖凡時アリテ所有者一身ノ資
益ノ爲メ又ハ衆人公同ノ資益ノ爲メ稍其權ヲ
行フニ制限アリ卽チ左ニ其例ヲ舉ク

第一 幼者及ヒ治産ノ禁ヲ受タル者ニ屬
スル不動産ヲ賣渡スニ付キ定メタ
ル法式

第二 公同資益ノ爲メノ没收

第三 全國ノ資益ノ爲メ各人ニ屬スル財

産ニ付キ定メタル土地ノ義勢、兵事
ニ管スル土地ノ義勢、家屋道路ノ位
置ヲ定ムル事、引船ノ爲メ河岸ニ道
ヲ設クル事

所有ノ權ト保有トノ區別

所有ノ權ト保有トハ互ニ混ス可カラスシテ所
有ノ權ハ一箇ノ權利ヲ云ヒ保有トハ所有者タ
ルカ如ク現ニ己レカ隨意ニ物ヲ取扱フ事業ヲ
云フ例ヘハ「^{ホー}ル」ナル者アリ己レカ所有ノ土
地ノ一部ヲ捨置キ之ヲ耕サ、ルニ「^シヤツク」ナ

ル者アリ來テ此地ヲ保有スト雖^レ「ジャツク」ハ
其地ヲ保有スルノミニテ之ヲ所有スル權ヲ得
タルニ非ラスホ[」]ルハ當時之ヲ保有セストモ
其地ヲ所有スル權ヲ失フタルニ非ラス蓋シ事
業ハ權利ニ勝ツ[」]能ハサルカ故ニ所有ノ權ノ
確証アルニ於テハ保有ノ事業ヲ停止セサルヲ
得ス然^レモ保有ノ事業ハ甚タ重要ノ事ニシテ
通常保有者ハ即チ所有者ト看做ス可キニ因リ
他人ノ保有スル物件ヲ所有スル權已^レニ在リ
ト論スル者ハ其保有者ニ對シ所有ノ權ノ確證

ヲ立ツ可ク若シ其確証立タサルハ保有者以前ノ如ク其物件ヲ保ツ可シ又保有者ヲ保護スル爲メ特ニ「アクシヲン、ポツセソアル」保有ノ權許ト云ヘル別段ノ訴訟ヲ爲スヲ許ルスナリ然レバ一年以上保有スル者ニアラサレハ此訴訟ヲ爲スヲ許サス

正實ノ意ニ出ツル保有ト不正實

ノ意ニ出ツル保有トノ區別

法律上ニ於テハ正實ノ意ニ出ツル保有者ト不正實ノ意ニ出ツル保有者トヲ區別シ正實ノ意

出ツル保有者トハ眞ニ己レカ所有ト爲ス可
 キ原由アリト思ヒ物件ヲ保有スル者ヲ云フ例
 ヘハホ^レルナル者アリジヤツクヲ一箇ノ家屋
 ノ所有者トリト思ヒ「ジヤツクヨリ之ヲ買入レ
 タルニ其實ハ「ジヤツク其所有者ニアラス然ル
 時ハ「ジヤツク己レノ有セサル所有ノ權ヲ他人
 ニ移ス能ハサルニ因リ「ボ^レルモ亦其家屋ノ所
 有者トナル能ハス只正直ノ意ニ出ツル保有者
 タルヲ得可キノミ
 不正實ノ意ニ出ツル保有者トハ自カ^レ其所有

者ニアサルヲ知リテ物件ヲ保有スル者ヲ云
フ而シテ正實ノ意ニ出テ、保有スル事ニハ二
箇ノ益アリ其一ハ正實ノ意ニ出ツハ保有者ハ
十年ヨリ二十年ニ至ル迄ノ時間絶エス保有ス
ルニ於テハ滿期所得ノ權プシレヨンクリニ由テ終
ニ其眞ノ所有者トナルヲ得ルト雖正不正實ノ
意ニ出ツル保有者ハ三十年ニ至ラサレハ決シ
テ其所有者トナルヲ得ス又一ハ正實ノ意ニ出
ツル保有者ハ其正實ニ保有スル間ハ其物件ヨ
リ生スル利益ヲ得可ク此者ニ對シ其物件ヲ取

戻サント求ムル所有者ハ其物件ハ之ヲ取返シ
得可シト雖モ其物件ヨリ得タル利益ノ算還ヲ
求ムルヲ得ス是レ蓋シ正實ノ保有者ヲシテ其
當然得タル利分ヲ算還セシムルハ頗ル暴酷ナ
ルニ因レハナリ然レモ不正實ノ意ニ出ツル保
有者ハ其物件ヨリ得タル利益モ其物件ヲモ返
還セサル可ラス只耕耘ノ爲メ出シタル費用
ノ返還ヲ其所有者ニ求メ得可キノミトス

天然ノ利益及ヒ法律上ノ利益

抑モ利益ナルモノハ財産ヨリ生スル所ノ通常

ニシテ且ツ定時ノ入額トリ即チ穀類ノ收納物
及ヒ定則ニ循フテ伐出ス可キ林木等是レナリ
而シテ此利益ヲ區別シテ二類トノシ即チ一ヲ
天然ノ利益トシ一ヲ法律上ノ利益トス其天然
ノ利益トハ現實ニ財産ヨリ生スル物ヲ云ヒ法
律上ノ利益トハ家屋ノ貸賃、土ノ貸賃、貸高ノ利
息及ヒ年金ノ額ノ如ク財産ニ據テ所得ト爲ス
可ト入額ヲ云フ蓋シ其利益ハ如何ノ品類ニ管
セズ財産所有者ニ屬スルヲ當然トシ又時アリ
テハ正實ノ保有者及ヒ入額所得者ニ其利益ヲ

屬セシムルアリ

第三款

入額ノ得ルノ權及ヒユザシ

ユノ權「ユ」ノ權 篇第三卷「ユ」ノ權 篇第三卷 從第五百七十

八條至第六百三十六條

入額ヲ得ル權ノ義意

入額ヲ得ル權トハ他人ノ所有スル物件ヲ保存

シテ恰モ其所有者ト同シク其物件ノ入額ヲ得

ル權利ニシテ此權利ヲ有スル者ヲ入額所得ノ

權ヲ有スル者ト云ヒ所有ノ權アリテ入額ヲ得

ル權ヲ有セザル事ヲニユ、プロパリエターリ「リ」ナキ 利得

所有ト云ヒ其入額ヲ得ル權利ノ屬セサル財産
ヲ有スル者ヲ「ニ、プロプリエター」ト云フ
入額ヲ得ル權ト入額所得ノ權ヲ帶ヒサル所有
ノ權トヲ分有スルハ只一時ノ間ノミニ限リテ
入額ヲ得ルノ權利ハ其權利ヲ有スル者ノ死去
スルニ於テハ必ス消散シテ再ヒ其所有ノ權ア
ル者ニ復ス可シ
入額ヲ得ル權ハ契約又ハ生存中ノ贈遺及ヒ遺
囑ノ贈遺ニ由テ之ヲ設ケ或ハ特ニ定メタル人
ノ爲メニ法律上ニテ之ヲ設クルヲアリ例ヘハ

法律ニ循ヒ我子ノ財産ニ付キ入額ヲ得ル權ヲ
父母ニ與フルカ如キハ即チ法律上ノ所定ニ因
ル所ナリ

入額ヲ得ル者ノ權利

入額ヲ得ルノ權利ヲ有スル者ハ其物件ヨリ生
スル一切ノ利益即チ天然ノ利益及ヒ法律上ノ
利益ヲ得ルノ權利ヲ有シ其權内ニ在ル諸物ヲ
特定メタル用法ニ供スルヲ得ルナリ故ニ入
額ヲ得ル權アル者ハ土地ヨリ産スル収納物、期
ヲ定メテ伐出ス可キ林木、入額ヲ得ルノ權利ヲ

得タル時既ニ掘出ス礦物財本ノ利息、年金ノ利
銀ヲ得可キ等ノ權利アリトス而シテ天然ノ利
益ハ收納ノ時之ヲ得法律上ノ利益ハ日毎ニ
チ入額ヲ得ル權ヲ保ツ日數ニ准スルヲ云フ之
ヲ得可シ
又入額ヲ得ル權アル者ハ其權利ヲ得タル物件
ヲ自カラ保有シ又ハ之ヲ貸渡スヲ得可シ然レ
凡其權利ノ消散シタル後九ケ年以上ノ時間其
貸渡契約ヲ兼諾シ所有者ヲシテ其契約ヲ遵守
セシムルヲ得ス

入額ヲ得ル者ノ義務

入額ヲ得ル權アル者ハ其權利ヲ行フ前ニ動產
ノ目錄及ヒ不動產ノ模様書ヲ作り且ツ注意シ
テ其動產又ハ不動產ヲ保有ス可キ保証ヲ立ツ
可シ然レモ其權利ヲ設ケ定ムル証書ニ由リ別
段ノ免除ヲ受タル者又ハ法律ニ循ヒ子ノ財産
ノ入額ヲ得ル權アル父母ハ此義務ヲ行フニ及
ハス

又入額ヲ得ル權アル者ハ其保有スル所ノ不動
產ノ小補理ヲ爲ス可シ然ルト雖モ梁椽及ヒ屋

根ノ全部ヲ改造スル事并ニ圍繞ノ塀壁及ヒ家
屋ヲ支フル壁ノ全部ヲ改造スル等ノ大修復ハ
所有者ノ責トス又其物件ニ付キ納ム可キ租税
ハ入額ヲ得ル權アル者ヨリ償ハシム可シ蓋シ
小補理ヲ爲シ及ヒ租税ヲ納ムルカ如キハ通例
入額ヲ以テ之ヲ償フ可キモノニシテ入額ヲ得
ル權アル者ハ總テ其利益ヲ得ルカ故ニ之ヲ得
ルニ付テノ費用ヲ償フ可キハ至當ナリトス
又遺物財産ノ全部又ハ其半ハ或ハ三分四分等
ノ如キ其一部ノ入額ヲ得ル者ハ其入額ノ割合

ニ准シテ其遺物ニ屬スル負債ノ利銀ヲ拂フ可
シ例ヘハ財産ノ全部ノ入額ヲ得ル者ハ其利銀
ノ全額ヲ拂フ可ク又財産ノ半ハノ入額ヲ得ル
者ハ其利銀ノ半ハヲ拂フ可シ

入額ヲ得ル權ノ消散スル事

入額ヲ得ル權ハ此權ヲ有スル者ノ死去スル歟
入額所得ノ權ヲ受有スル期限ノ終ル歟入額ヲ
得ル者ト所有者ノ分限ヲ一人ニ兼帶スル歟此
權ヲ三十箇年ノ間行ハサル歟入額ヲ得ル財産
ノ減盡スル歟入額ヲ得ル者自カラ其權ヲ抛棄

スル歟ニ因リテ消散ス可シ
又入額ヲ得ル者其財産ヲ破壊スル歟又ハ補理
ヲ加ヘスシテ之ヲ損敗セシムル歟ニ因リ其權
ヲ行フニ付キテノ過失アル時ハ其權利ヲ失フ
可シ但シ然ルホハ其權利ノ解散ヲ裁判所ヨリ
言渡ス可シ

ユザーシユノ權及ヒアビタシヲ
シノ權

ユザーシユノ權ハ之ヲ授與スル証書ヲ以テ其
權ヲ定ム可ク若シ然ラサレハ其權ヲ受ル本人

及ヒ其家族ノ入用ノ多少ニ准シテ其財産ヨリ
生スル利益ヲ所得ト爲ス可シ故ニ「エザージユ」
ノ權ハ本人入用ノ多少ニ准シテ制限シタル入
額所得ノ權ト稱ス可ク且ツ此權利ヲ設ケ並ニ
之ヲ失フモ亦入額所得ノ權ト同様ナリトス但
シ此權利ハ之ヲ他人ニ讓渡シ又ハ貸渡ス一ヲ
得ス

此權利ヲ家屋ニ用フル時ハ之ヲ「アビタン」
ノ權即チ住居ノト云フ意ト云ヒ此權利ヲ有スル者ハ家
族ト共ニ家屋ニ居住スルヲ得可シ然レモ其權

ハ之ヲ有スル本人ト家族トノ居住ニ付キ必要
ナル一部ノミニ限ルモノトス

森林ニ付テノユザーシユノ權

「ナポレオン」民法書ニ定メタル「ユザーシユノ權」
ト森林ニ付テノユザーシユノ權トヲ混ス可カ
ラス而シテ森林ニ付テノユザーシユノ權ハ樹
木ノ定量ヲ伐り取り又ハ牧業ノ爲メ林中ニ獸
類ノ放ツヲ得可キ權ニ在リトス

又森林ニ付テノ「ユザーシユ」ノ權ハ國又ハ邑ニ
屬スル森林ニ於テハ決シテ新ニ之ヲ許スヲ得

サル法ニシテ而シテ此法ヲ設クル以前ニ許シタル同上ノ權ハ猶存續スル所ナレバ政府ニ於テハ其權ヲ廢スルノ權アリ

總テ森林ニ付テノ「ユザー」ジ「ユ」ノ權ハ「カ」ントン

「マ」ン有「カ」ントン者ニ「マ」ン「ト」ハ「ユ」ザー「シ」ノ權ヲ與

「フ」ノ法ニ由リ消散セシム可シト雖「バ」他ノ

「サ」ー「ジ」「ユ」ノ權ハ此法ニ由リ消散セシム可カ

ラス但シ政府ニ於テハ償銀ヲ拂フテ其權ヲ取

戻スヲ得可シ

又森林ニ付テノ「ユザー」ジ「ユ」ノ權ヲ他人ニ授與

セシ平民ハ「カントンヌマン」ノ法ニ由リ或ハ償
銀ヲ拂フニ因リ其權ヲ消散セシムルヲ得可
シ

又此「ユザ」ジユノ權ヲ行フニハ何レノ場合ニ
於テモ格段ナル規則ヲ守ル可ク且山林司ノ監
督視察ヲ受ケサル可カラス而シテ其山林司ニ
於テハ牧畜ヲ爲スニ付キ獸類ヲ畜フニ差支ナ
キ森林ノ一部ヲ指定ムルモノナリ

右ノ外森林ニ付テ「ユザ」ジユノ權ニ管スル
諸規則ハ山林法ニ詳ナリ（山林法從第六十一條

至第八十五條從第一百十條至第一百十二條從第一百十八條至第二百二十一條

第四款

土地ノ義務

ナポレオン民法書
第二篇第四卷從第

六百三十七條
至第七百十條

土地ノ義務ノ區別

土地ノ義務トハ一ノ所有者ニ屬スル不動産ノ
便利ノ爲メ他ノ不動産ニ屬スル義務ヲ云フ
此義務ノ爲メ資益ヲ受クル土地ヲ「フランドミ
ナント」云ヒ此義務ヲ行フ可キ土地ヲ「フランセ
ルバン」ト云フ

土地ノ義務ハ其地ノ天然ノ位置ヨリ生スルモ
ノト法律上ノ所定ニ由ルモノト人ノ所爲ニ由
ルモノトノ差異アリ故ニ此三種ノ義務ヲ分ツ
テ追次左ニ之ヲ記セントス

土地ノ天然ノ位置ヨリ生スル義
務及ヒ低下ノ地ヲ有スル者ノ高
上ノ地ヨリ流ル、水ヲ受ク可キ

義務

低下ノ地ハ高上ノ地ヨリ自然ニ流ル、水ヲ受
ク可キ義務アリ故ニ低下ノ地ノ所有者ハ此流

水ヲ防ク爲メニ堤ヲ築キ又ハ其他ノ障碍ヲ爲
ス可カラス

又高上ノ地ノ所有者ハ低下ノ地ノ義務ヲシテ
更ニ重劇ナラシム可キ事ヲ爲ス可カラス
低下ノ地ノ義務ハ右ニ記スル如ク人工ヲ用ヒ
ス天然ニ流ル、水ヲ受クルノミニ在リトス

水源ノ事

己レノ土地内ニ水源ヲ有スル者ハ自己ノ意ニ
適シテ其水源ノ水ヲ用フルヲ得可シ故ニ己
レノ土地内ニ於テ之ヲ使用シ或ハ全ク之ヲ汲

盡シ或ハ之ヲ低下ノ地ニ自然ト流下ヒシムル
凡皆自由ナリトス

然レ凡水源ノ所有者場合ニヨリテハ其近隣ノ
者ニ之ヲ使用セシメサルヲ得ルヲアリ故ニ
近隣ノ者贈遺、賣渡、遺囑等ノ名義ニ因リテ水源
ヲ用フルノ權ヲ得タル時ハ水源ノ所有者之ヲ
使用セシメサル可カラス

又水源ヲ用フルノ權ハ期滿所得ノ權ニ由リテ
亦之ヲ得ルヲアリ蓋シ然ル片ハ近隣ノ地ノ所
有者自己ノ土地内ニ水ノ流ル、ヲ容易ナラシ

ムルノ明白ナル造營土功ヲ爲シ終リタル時
ヨリ三十年間絶エス其水源ヲ用ヒタルヲ必
要トス

其他水源ノ所有者ハ一邑又ハ村里ノ住民ノ爲
メ缺ク可カラサル水ノ通路ヲ變更ス可カラス
但シ然ルルハ水源ノ所有者評價人ノ定メタル
償高ヲ得ルノ權アリトス

河川ニ接スル土地ヲ有スル者又
ハ河川ノ通過スル土地ヲ有スル
者ノ權利及ヒ河川ノ種類

流水ハ之ヲ分ツテ船ヲ通シ筏ヲ浮ム可キ河川
ト船ヲ通シ筏ヲ浮ム可カラサル河川トノ二種
トス

船ヲ通シ筏ヲ浮ム可カラサル河川ノ流水ハ公
同ノ財産ニシテ此河川ニ接スル地ヲ有スル者
ハ官ノ允許ヲ得サレハ之ヲ用フルヲ得ス

又船ヲ通シ筏ヲ浮ム可カラサル河川ノ水ハ其
近傍ノ地ヲ有スル者之ヲ用フルヲ得可シ而シ
テ河川ニ接スル地ヲ有スル者即チ河川ノ片岸
ニアル地ヲ有スル者ハ只自己ノ土地ヲ潤ス爲

ノノミニ其水ヲ用フルヲ得可ク河川ノ通過ス
ル地ヲ有スル者（即チ河川ノ兩岸ニアル地ヲ有
スル者ハ已レノ隨意ニ其水ヲ用フルヲ得可ク
只其地内ヨリ流レ出ル口ニ於テハ必ス之ヲ當
然ノ水路ニ復ス可ク且其下流ノ地ヲ有スル者
ノ障碍ニナル可キ程之ヲ用ヒ盡ス可カラス
千八百四十五年四月二十九日ノ法律ニ因リ自
己ノ土地ヲ潤ス可キ爲メ水ヲ用ヒント欲スル
者ニ償金ヲ拂フテ中間ノ土地内ニ其水ヲ通過
セシムルヲ許シ又千八百四十七年七月十一

日ノ法律ニ因リ河川ノ片岸ノミニ在ル土地ノ所有者ニ水堰ヲ造ル爲メ必要ナル工作ヲ對岸ノ地ニ於テ支柱セシムルヲ許容セリ

水抜キノ事(千八百五十四年六月

十日ノ法律)

水抜キノ旨趣ハ溢溜シテ害ヲ爲ス水ヲ流下セシメテ以テ其地ヲ人身健康ニ適セシムルニアリ

水抜キノ作ルニハ溝渠ヲ堀リ之レニ圓形ノ土ニテ造リタル水樋ヲ鑿入ス可シ

己レカ土地ノ水拔ヲ爲サント欲スル者ハ其水
ヲ地中又ハ地上ニ於テ他人ニ屬スル土地内ヲ
過シテ河川等ニ流レ出テシムルヲ得可ク但
シ之カ爲メニハ其償ヲ出ス可シ

又此事ニ付キ低下ノ土地ノ義務ニ管シタル爭
ノ生セシ時ハ治安裁判役其地ヲ所有スル權ヲ
保護ス可キ道理ト此溜水ヲ流下セシムルノ益
トヲ斟酌シテ裁判ヲ言渡ス可シ

千八百五十六年七月十七日ノ法律及ヒ千八百
五十八年五月二十八日ノ法律ヲ以テ土地ノ水

拔キヲ造ルヲ便利ナラシムル爲メ「クレジ」ブ
ヲンシエールル土地ヲ引當ニシテ金ヲ貸ス社中ノ會社ヨリ耕作
者ニ水拔キノ工業ヲ爲スタメ金高ヲ貸渡ス
ヲ許ルシタリ

繞圍ノ事

繞圍ハ二箇ノ地ノ境界ヲ定ムル爲メニ設タル
モノニシテ總テ一箇ノ土地ノ所有者ハ其近隣
ノ地ノ所有者ヲシテ之ヲ造ルヲ肯セシムル
ヲ得可ク其費用ハ雙方ヨリ之ヲ償フ可シ
又繞圍ニ管シタル爭ハ治安裁判役ノ審判ヲ受

ク可シト雖モ所有ノ權ニ管シタルヲニ付此爭
ノ生セシ時ハ此例ニアラス是レ治安裁判役ハ
其爭ヒ所有ノ權ニ管シタルモノハ之ヲ審判ス
ルノ權ナキヲ以テ然ルルハ郡裁判所ニ其爭訟
ヲ持出ス可キニ依レハナリ

法律ヲ以テ定メタル土地ノ義務
及ヒ雙方ノ所有ニ屬スル分界牆
壁ノ事

低キ家屋ノ屋蓋ニ至ル迄二箇ノ家屋ノ分界タ
ル牆壁又ハ二箇ノ内庭及ヒ園圃ノ分界ノ牆壁

又ハ田野中ニ繞圍ヲ爲シタル二箇ノ地ノ分界
タル牆壁ハ之ヲ雙方ノ所有ニ屬スル分界ノ牆
壁ト看做ス可シ此雙方ノ所有ニ屬スル分界ノ
牆壁ハ雙方共通シテ之ヲ用フルモノトス然レ
モ其所有ノ權一方ノ所有者ノミニ屬スル證書
アル時又ハ一方ノ所有者ノミ此權ヲ有スルノ
徵憑アル時ハ雙方共通シテ之ヲ所有スルノ
トセス但シ一方ノ所有者ニ屬シタル牆壁ニ相
接シタル地ノ所有者ハ其牆壁ノ價ノ半ハト之
ヲ建築シタル地價ノ半ハトヲ償フヲ以テ其牆

壁ヲ共通シテ所有スルヲ得可シ

雙方ノ所有ニ屬スル分界ノ牆壁
ニ付キ生スル權利及ヒ義務

牆壁ヲ雙方共通シテ所有スル者ハ其牆壁ニ傍
フテ建物ヲ造立スルヲ得可シ然レトモ一方ノ
所有者ノ承諾ヲ得スシテ其牆壁ニ穴ヲ穿チ且
梁椽等ヲ鑿入ス可カラズ但シ其牆壁ハ一方ノ
所有者ノ都合ニ因リ自己ノ費用ヲ以テ之ヲ高
クシ且自己ノ地内ヨリ其必要ナル厚サヲ増ス
ヲ得可シ

牆壁ヲ修復シ及ヒ改造スル時ハ其牆壁ヲ有ス
ル者各其權利ノ割合ヲ以テ其費用ヲ擔當ス可
シ
又都會及ヒ其郭外ニ於テハ土地ノ各所有者其
近隣ノ者ヲシテ牆壁建築ノ費用ノ割前ヲ出サ
シムルヲ得可シ但シ雙方ノ所有ニ屬シタル牆
壁ヲ修理シ或ハ之ヲ改造スル義務ヲ負フタル
者ハ其牆壁自己ニ屬スル家屋ヲ支持スル時
外共共通所有ノ權ヲ拋棄シテ其義務ヲ行フヲ
免ル可シ

樹木ヲ植ユルニ付キ遵守ス可キ

距離

近隣ノ土地ノ境界ヨリ幾許ノ距離ニアラサレ
ハ樹木ヲ植エ又ハ生牆ヲ設ク可カラサルノ定
メアリ

樹木ヲ植エ及ヒ生牆ヲ設クルノ距離ハ規則ニ
因リ之ヲ定メ或ハ土地ノ習例ニヨリテ之ヲ定
メ又其規則及ヒ習例ノアラサル時ハ喬木ハ隣
地ヲ去ルヲ二メートルノ距離トシ其他ノ樹木
及ヒ生牆ニ付テハ隣地ヲ去ルヲ半メートルノ

距離トシ若シ是ヨリ更ニ少キ距離ニ植タル樹
木ハ隣人ヨリ之ヲ拔去ル可キ要ノヲ爲スヲ
得可シ

又隣地ノ樹枝已レノ土地内ニ侵出シタル時ハ
隣人ヲシテ之ヲ伐ラシムルヲ得若シ隣地ノ
樹根已レノ土地内ニ侵出シタル時ハ自カラ之
ヲ伐ルヲ得可シ

隣地ヲ望下スル權

一方ノミニ屬スル分界ノ牆壁ヲ所有スル者ハ
其牆壁ニシウル、ド、スーフランスト云フ明リ

窓ヲ穿ツヲ得可シ但シ此明リ窓ハ層階下ニ
於テハ其室^ダ地臺ノ上二十六^ダデシノ^ダト^ダルヨリ
更ニ高所ニ造ル可カラス又層階ノ室ニ於テハ
樓床ノ上十九^ダデシノ^ダト^ダルヨリ更ニ高所ニ造
ル可カラス且其明リ窓ハ開閉セサル玻璃板ヲ
以テ閉チ之レニ鐵格ヲ附ス可シ但シ其鐵格ノ
大サハ精密ニ之ヲ定ム
雙方ニ屬スル分界ノ牆壁ニ於テハ土地ノ所有
者何レノ方法ヲ問ハス隣人ノ承諾ヲ得スシテ
之ニ明リ窓ヲ穿ツヲ得ス

又開閉ス可キ窓ハ隣地ヨリ幾許ノ距離ヲ經サ
レハ之ヲ穿シ可カラサルノ定アリ即チ隣地ヲ
直視ス可キ窓ニ於テハ六^レピエ^一十九^レフシメ^一
トルヲ隔テ又隣地ヲ斜ノニ望下スル窓ニ於テ
ハ二^レドエ^一六^レデシメ^一トルヲ隔テサル可カラ
ス

屋根ノ樋

家屋ノ所有者ハ己^レノ土地内又ハ往還ノ道路
ニ雨水ヲ流下セシム可キ方法ヲ以テ屋根ノ樋
ヲ造ル可シ但シ雨水ヲ隣地ニ流下セシムルニ

ハ隣人ノ承諾ヲ受ケサル可カラス

通行ノ權

自己ノ土地ヨリ往還ノ道ニ出ツ可キ徑路ナキ
土地ノ所有者ハ隣地ヲ通行スルノ權ヲ得ント
要ムルヲ得可シ

若シ此事ニ付キ訴訟ノ生セシ時ハ裁判所ノ審
判ヲ受テ之ヲ定ムヘシ但シ其通行ノ權ヲ得タ
ル者之レカ爲メ隣地ニ損害ヲ生シタル時ハ其
損害ニ准シテ相當ノ償ヲ出サ、ル可カラス

人ノ所爲ニ因テ定メタル土地ノ

義勢、間斷ナク又間斷アル土地ノ
義勢、人目ニ觸ル可ク又人目ニ觸
レサル土地ノ義勢

地ノ位置ヨリ生スル土地ノ義勢及ヒ法律ニテ
定メタル土地ノ義勢ノ外ニ各人ノ隨意ニ由テ
定ム可キ土地ノ義勢數多アリ

人ノ隨意ニ由テ定メタル義勢ハ之ニ間斷ナキ
義勢ト間斷アル義勢アリ又人目ニ觸ル可キ義
勢ト人目ニ觸サル義勢アリトス

其間斷ナキ義勢トハ人ノ現ニ爲ス所ニ因ラム

勢是レナリ又人目ニ觸サル義勢トハ其存在ス
ル証跡ノ目ニ觸レサルモノヲ云フ譬ヘハ土地
ニ造營ヲ爲スノ禁ノ如シ

右ニ論スル所ノ各種ヲ左ノ如ク附合スルヲ得
可シ

即チ窓牖ノ如キハ間斷ナクシテ且人目ニ觸
ル可キ義勢トシ造營ヲ爲スノ禁ノ如キハ間
斷ナクシテ且ツ人目ニ觸レサル義勢トシ門
又ハ徑路ニ因テ其証跡アル土地通行ノ義
ノ如キハ間斷アリテ且ツ人目ニ觸ル可シ

利ハ期滿所得ノ權卽チ三十年間絶エス保有シ
タルニ因テ之ヲ得可ク又間斷アリテ人目ニ觸
レサル權利ハ幾年間保有スルト雖氏之ヲ得ル
ヲ得ル

又間斷ナクシテ人目ニ觸ル可キ權利ヲ設ケ定
ムルニ付テハ亦別段ノ方法アリ是レ卽チ土地
ノ以前ノ所有者ノ意ヲ以テ之ヲ設ケ定ムルニ
アリテ此土地ノ以前ノ所有者ノ意ヲ以テ權利
ヲ設ケ定ムルニハ以前一人ニテ土地ヲ所有セ
シ者現今ニツニ分レタル其土地ヲ現今ノ權利

二卷十

五十九

言
法
省

ヲ生ス可キ景狀ト爲シタルヲ必要トス譬ヘハ
予相接シタル二箇ノ家屋ヲ所有シ其間ニ窓牖
ヲ穿チ後之ヲ二人ニ賣渡シタル時ハ其買入人
各雙方ニ便利ナルヲ思フテ其窓牖ノ義務ヲ遵
守ス可キカ如シ

土地ノ義務ノ終ルコト

義務ヲ行フ可キ地ト權利ヲ有スル地ト同人ノ
所有トナル時ハ其義務終ル可シ是レ蓋シ全ク
自己ノ所有スル物ニ付テハ自カラ義務ヲ行フ
ニ及ハサレハナリ又其義務ハ三十年間ニ行

ハサルニ因テ終ル可シ但シ此事ニ付テハ其義
務ノ間斷ナキト間斷アルトヲ區別ス可ク間斷
アル義務ニ付テハ其義務ヲ行フヲ止メタル日
ヨリ右三十年ノ期日ヲ算ヘ間斷ナキ義務ニ付
テハ其義務ニ反シタル事ヲ爲シタル日ヨリ其
期日ヲ算フ可シ譬ヘハ窓牖ノ義務ニ付テハ隣
人ノ家屋ニ穿チタル窓牖ヲ塗閉セシ日ヨリ其
期日ヲ算ス可キカ如シ

佛國政典第七卷 終

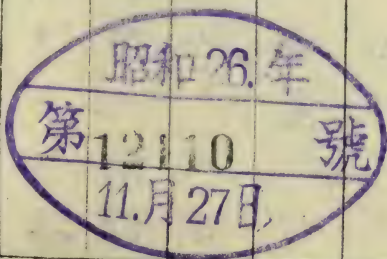
七ノ六

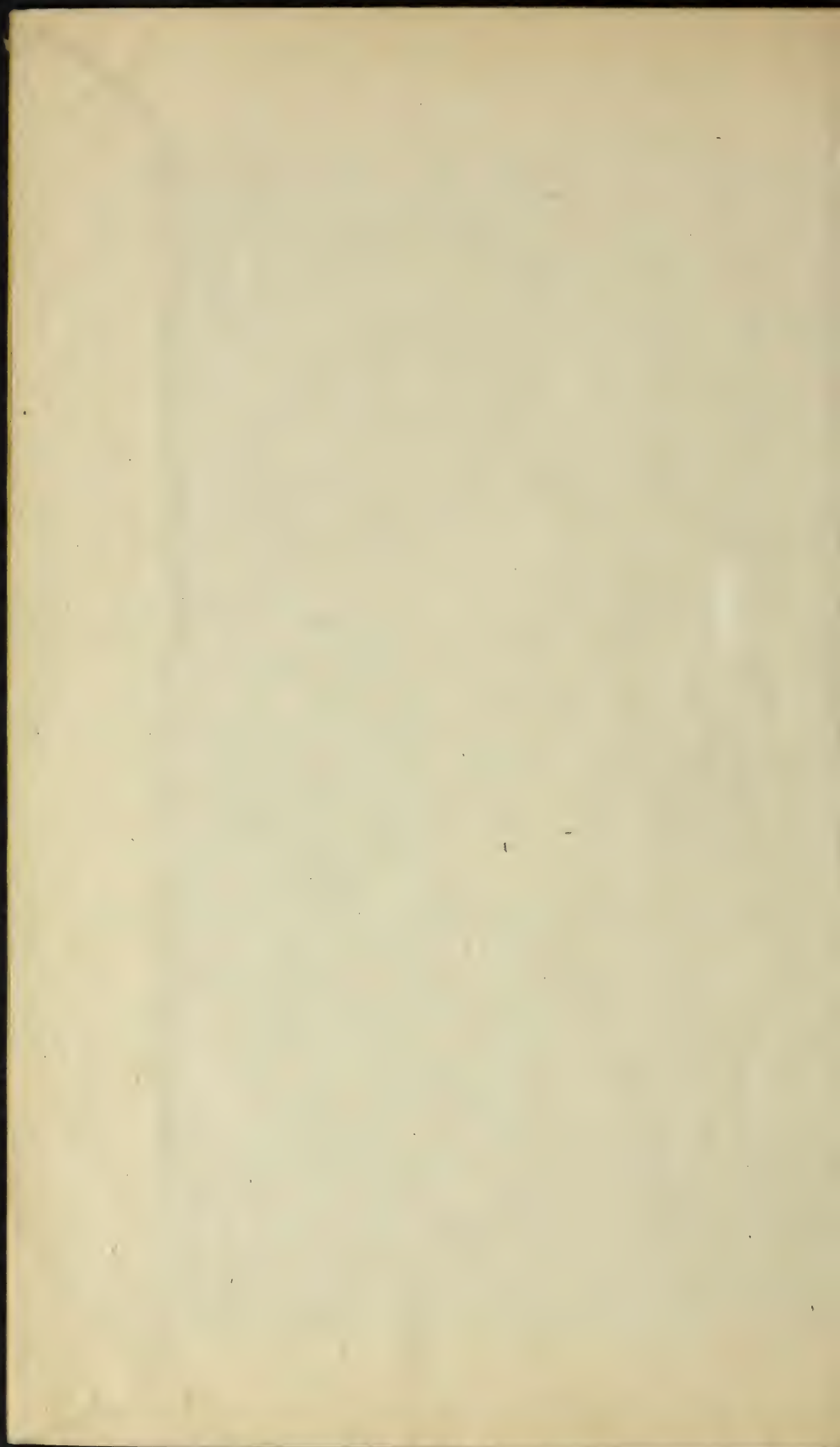
七ノ六

七ノ六

七ノ六

七ノ六





佛國政典

八

正下和同第百五拾号八

下洋回第百五拾号八

法律書
佛國政典
一四七
一八



University of Illinois
Library at Urbana-
Champaign
IAS - Oak Street



水戸裁
管内裁
區裁

判所

佛國政典第八卷

第三章

財産所有ノ權ヲ得ル種々ノ方法
及ヒ財産所有ノ權ヲ得ル諸法ノ

記列

凡テ物ヲ得ルトハ即チ其物ノ所有者トナルニ
在リ物ヲ移轉スルトハ即チ其物ニ付テノ所有
ノ權ノ他人ニ移スニ在リテ此二語ハ互ニ相對
シテ離レサルヲ常トス故ニ甲ノ人物ヲ得ル時
ハ則チ乙ノ人其物ヲ移轉スルニ在リテ物ヲ買

KJV
233
773163
1873
V.8

フ者ハ其所有ノ權ヲ得物ヲ賣ル者ハ所有ノ權
ヲ移轉スルナリ

財産所有ノ權ヲ得ル種々ノ方法ヲ區別スレハ
其一法ヲ占有ナリトス占有トハ未タ人ノ所有
トナラサル物例ヘハ野畜ノ如キ諸物ヲ所有ス
ルヲ云フ又一法ハ既ニ人ノ所有トナリタル物
ヲ所有スルニ在リテ即チ遺言ナキ遺物相續、生
存中ノ贈遺、遺囑ノ贈遺、賣買交換等ノ如キ契約
及ヒ期滿所得ノ權ニ由テ財産所有ノ權ヲ得ル
モノ之レナリ但シ此一章中ニハ遺物相續、生存

中ノ贈遺遺囑ノ贈遺ノミヲ論シ契約及ヒ期滿
所得ノ權ハ次章ニ於テ別ニ其條ヲ掲ケテ之ヲ
論セントス

第一款

遺物相續

ナポレオン民法書第
三篇第一卷從第七百

十八條至第
百九十二條

遺物相續ノ義意及ヒ遺物相續ヲ

始ムル事

原語ニ「シユクセツシヲント云ヘル語ハ法律

循ヒ死者ノ財産ヲ其相續人ニ傳フル事ニ用ヒ

或ハ死者ヨリ相續人ニ傳フル財産ノ總稱ニ用

フ是レ蓋シ遺物相續ノ事又ハ遺物ノ財産ヲ指
シテ「シユクセツシヲ」ント云フニ因ル所ナリ
遺物相續ハ死去ノ本日ヨリ始ル可ク相續人ノ
權利モ此時ヨリ始ル可シ但シ其相續人若シ法
律上ニテ定ムル所ノ相續人タル分限ヲ拋棄セ
ント欲スルハ遺物相續ヲ爲スヲ肯セサル
ヲ要トス

遺物相續ノ權利ヲ定ムル主旨

遺物相續ニ付キ定メタル必要ノ旨趣ニ箇アリ
因テ今左ニ之ヲ説述ス

其第一旨ハ遺物相續ヲ爲スノ權利及ヒ遺物相
續人ノ順序ハ死者ノ愛念ニ基キ之ヲ思料シテ
以テ定ムルニ在リ故ニ人其財産ニ付キ特ニ遺
囑ノ贈遺ヲ爲サ、ル時ハ法律ヲ以テ特ニ其遺
囑ノ贈遺ヲ作り爲スカ如シ

又第二旨ハ遺物相續人等ノ間ニ互ニ平等ノ權
利ヲ得セシムルニ在リ故ニ死者ノ子ハ何レモ
同一ノ名義ト同一ノ權利ヲ以テ遺物相續ヲ爲
シ得可シ

抑々舊法ニ依レハ二子三子ニ比スレハ長男ニ

多分ノ遺物ヲ與ヘ女子ニ比スレハ男子ニ強大
ノ權利ヲ與フル區別ヲ爲シタリシカ現今ニ於
テハ更ニ此區別アルナシ
斯ク平等ノ權利ヲ得セシメタル主旨ハ頗ル人
情ニ恰當セシ者トス何トナレハ親ノ子ヲ愛ス
ルノ情彼此ノ別ナカル可キヲ以テ其子ノ權利
ニ於テモ差異アル可カラサレハナリ

ナポレオン¹民法書註解者ノ中ニ就キ迄今ニ在
リテ殊ニ芳名ナル者ノ評論アリ左ニ之ヲ掲ク
トモロンブ氏曰クナポレオン¹民法書中正當

ノ遺物相續ノ卷ハ予ヲ以テ之ヲ見レハ至妙
ノ一法律トス何トナレハ其法律ハ眞ニ各人
ノ情ト國家ノ根據タル所ノ政理トニ恰當ノ
者タレハナリト

遺物相續ヲ爲ス可キ者ノ種類

遺物相續ヲ爲シ得可キ者ニ二種アリ卽チ左ノ
如シ

其第一種ハ正當ノ遺物相續人ニシテ此者ハ死
者ニ代テ死去ノ當日ヨリ死者ノ財産ヲ所得ト
爲シ其遺物ニ付テノ費用及ヒ負債ノ償ヒヲ引

受ク可シ

又第二種ノ遺物相續人トハ規則外ノ相續人ニ
シテ此者ノ權利ヲ行フニハ一定ノ法式ヲ履行
フ可ク殊ニ郡裁判所ノ裁判言渡書ニ由リテ死
者ノ遺物ヲ所得ト爲スヲ要トス

遺物相續ヲ爲ス者ノ順序

遺物相續ヲ爲ス可キ血屬親ノ諸級ヲ稱シテ遺
物相續ヲ爲ス者ノ順序ト云フ

死者ノ遺物ハ先ツ卑屬ノ親

即チ第一ノ相續人トナル者之ヲ

相續ス可ク若シ卑屬ノ親アラサルハ父母并

兄弟姊妹

即チ第一ノ相續人トナル者

之ヲ相續ス可ク次ハ

尊屬ノ親及ヒ傍系ノ親

即チ第三第四ノ相續人トナルモノ

之ヲ

相續ス可シ

卑屬ノ親遺物相續ヲ爲ス事

卑屬ノ親

子ハ他ノ親族ヲ除去シテ先ツ遺物相

續ヲ爲ス可シ

若シ死者一人ノ子ヲ遺セシハ其子遺物ノ全

部ヲ有ス可ク若シ死者二人ノ子ヲ遺セシ時ハ

其二子死者ノ遺物ヲ分ツテ各其一半ヲ有ス可

シ

又死者ヨリ前ニ死去セシ其子ノ生ミタル子即チ

ノ死者ハ外ニ一人ノ子即チ死ノ者第ノ存命ナルカ

爲メ遺物相續ヲ取除カル、ヲナカル可シ

孫ハ其父母ノ有スル位置ヲ受ケ繼キ父母ニ代

テ祖父母ノ遺物相續ヲ爲ス可シ今試ニ其例ヲ

掲レハビエールナル者アリポールト名クル長

男ト既ニ死シタル次男「ジャック」ヨリ生レタル

孫二人トヲ遺シテ死去シタル并ハ「ビエール」ノ

遺物ハ長男「ポールト」其孫次男「ジャック」二人トニ之

ヲ分チポールトハ其一半ヲ取ル可ク二人ノ孫ハ

各々其一半ノ半（即チ四分一）ヲ分チ取ル可シ

兄弟姉妹遺物相續ヲ爲ス事及ヒ

父母ト共ニ其遺物ヲ分ツ事

卑屬ノ親ニ次キ兄弟姉妹及ヒ兄弟姉妹ノ卑屬

親（即チ死者ノ甥姪）ハ死者ノ父母ヨリ他ノ親族ヲ除去

シテ先ツ遺物相續ヲ爲ス可シ

故ニ若シ死者一人ノ兄又ハ弟ト父母ヨリ他ノ

親族トヲ遺シタル片ハ其兄又ハ弟ニ遺物ノ全

部ヲ相續スルノ權アリトス

又死者若シ其父母ヲ遺シタル片ハ父母先ツ其

遺物ノ半ヲ取リ兄弟姉妹ハ各々他ノ半ヲ分ツ可シ

又其父又ハ其母一人ノ存生ナル片ハ其父又ハ其母ハ四分ノ一ヲ取リ其餘ノ四分三八兄弟姉妹各自ニ之ヲ分ツ可シ

尊屬ノ親遺物相續ヲ爲ス事

尊屬ノ親ハ遺物相續人ノ順序ニ於テハ第三ニ在リトス

尊屬ノ親又ハ傍系ノ親遺物相續ヲ爲ス時ハ本宗外族ノ二族ニ其遺物ヲ半ニ分チ本宗ノ尊屬

親中最モ近親ノ者又若シ其數人アルハ同級

ニ在ル最モ近親ノ者數人其遺物ノ半即チ本宗

遺物ヲ相續シ他ノ半即チ外族親ニハ外族ノ尊

屬親中最モ近親ノ者ニ屬ス可シ

尊屬親ハ同族ニ在ル傍系親ヲ除去シテ遺物ヲ

相續ス可シト雖モ他族ニ在ル傍系親ト其遺物

ヲ分ツ可シ譬ヘハ本宗ノ中最モ近キ尊屬親タ

ル祖父アレハ此祖父遺物ノ半ヲ相續ス可ク他

ノ半ハ外族ニ於テ尊屬親ナキハ叔伯父母從

兄弟從姉妹ノ如キ外族ノ傍系親之ヲ相續ス可

キカ如シ

又一族即チ本宗外族ノ得可キ遺物ヲ全ク他族ニ移ス

ハ其一族中ニ於テ相續ヲ爲シ得可キ級内ノ親族ナキ時ニ限ル可シ

傍系ノ親遺物相續ヲ爲ス事

傍系ノ親トハ尊屬及ヒ卑屬ノ親ヲ除キタル親族ノ總稱ニシテ兄弟、姉妹、甥姪ノ如キ亦之ヲ傍系ノ親トス然リト雖此等ノ者ノ遺物相續ヲ爲スニ付テハ別ニ其順序ヲ定ムルヲ以テ茲ニ贅セス只此條ニ論スル所ノ傍系ノ親トハ叔伯

父母從兄弟從姊妹ニシテ傍系ノ親ハ第十二級
ノ首ニ至ル迄遺物ヲ相續スルヲ得可シ

傍系ノ親ハ死者ヨリ初メテ其所出ノ者ニ次リ
更ニ遺物相續ヲ爲ス可キ者ニ降り代ノ數ニ准
シテ其級ヲ算ス故ニ叔父ハ第三級トシ從兄弟
ハ第四級トス

又傍系ノ親ニ屬ス可キ遺物ハ本宗親ト外族親
トノ間ニ之ヲ半ニ分ツ可ク若シ一族中ニ尊屬
ノ親ナキ時ハ最モ近親ナル傍系親一人又ハ數
人ニ其遺物ヲ相續ス可シ

代テ遺物ノ相續スル事及ヒ之ヲ
爲ス場合

代テ遺物ヲ相續スルトハ法律上ノ一規則ニシ
テ或ル親族此規則ニ循ヒ既ニ死去シタル遺物
相續人ノ權ニ代テ遺物相續ヲ爲シ最近親ノ他
ノ親族ト與ニ其遺物ヲ分ツヲ云フ

卑屬ノ親及ヒ兄弟姉妹ノ順序ニ在リテハ級ノ
如何ヲ問ハス代テ相續ヲ爲シ得可ク尊屬ノ親
又ハ通常ノ傍系親ハ代テ相續ヲ爲シ得可カラ
ス

今試ミニ代テ相續ヲ爲シ得可キ一例ヲ此ニ掲
クルニ一人ノ子ト既ニ死シタル子ノ生ミタル
孫トヲ遺シテ死シタル者アリ又ハ一人ノ兄又
ハ弟ト既ニ死シタル兄又ハ弟ノ生ミタル甥ト
ヲ遺シテ死シタル者アル時ハ其孫及ヒ其甥ハ
何レモ己レノ父ノ若シ尚生存シタラハ遺物相
續ヲ爲ス可キト同シク彼死者ノ子又ハ其兄弟
ト共ニ遺物ヲ相續ス可シト又ハ其兄弟ノ子
又斯ク代テ相續ヲ爲ス者數人アル片ハ其遺物
ヲ旁支ニ由テ互ニ之ヲ其數人ニ分ツ可ク若シ

代テ相續ヲ爲サ、ル時ハ相續人ノ負數ニ應シ
各自ニ之ヲ分ツ可シ今其例ヲ掲クルニ此ニ三
人ノ子アリテ其父ノ遺物ヲ相續スル時ハ其三
人共ニ第一級ノ遺物相續人ニシテ代テ遺物相
續ヲ爲サ、ルカ故ニ其三人ハ遺物ヲ三分シテ
各自其一分ヲ相續ス可シ若シ然ラスシテ旣ニ
死去シタル二人ノ子アリ其一人ハ一人ノ子ヲ
遺シ又一人ハ二人ノ子ヲ遺シ都合三人ノ孫ノ
ル中ハ此三人ノ孫ハ何レモ其父ニ代テ遺物ヲ
相續スルカ故ニ各自ニ遺物ヲ分タス旁支ニ因

テ之ヲ分ツ可シ而シテ此ニ掲クル所ノ例ニ於
テハニ旁支アリトス何トナレハ二人ノ子ハ各
々一旁支ヲナスヲ以テ一族ニシテニ旁支アレ
ハナリ故ヲ以テ遺物ノ半ハ一旁支ニ屬シテ一
人ノ孫之ヲ得可ク他ノ半ハ他ノ旁支ニ屬シテ
二人ノ孫之ヲ得可シ

規則外ノ遺物相續人

規則外ノ遺物相續人トハ私生ノ子及ヒ私生ノ
子ノ父母、兄弟、姉妹又ハ死者ノ配偶者及ヒ官府
ヲ云フ

親ヨリ我子ナリト認メラレタル私生ノ子ハ遺物ノ一部ヲ相續スルノ權ヲ有スト雖モ當然ノ相續人ノ親疎ノ級ニ由リテ其取前不同ナリトス故ニ若シ嫡出ノ子アル時ハ其嫡出ノ子ノ三分一ヲ以テ私生ノ子ノ取前トス又死者ニ尊屬ノ親及ヒ兄弟姉妹アル時ハ其半ヲ以テ私生ノ子ノ取前トシ死者ニ尊屬親、卑屬親、兄弟、姉妹ニ至ル迄一モアラサル時ハ其四分三トス又若シ父母ニ其遺物ヲ相續ス可キ級内ノ親族一人モアラサル片ハ私生ノ子其遺物ノ全部ヲ

相續スルノ權アリ

又我子ナキ私生ノ子ノ遺物ヲ相續ス可キ權ハ
私生ノ子ヲ我子ナリト認メタル父母又ハ私生
ノ子ノ兄弟姉妹ニ在リトス

當然ノ遺物相續人及ヒ上ニ記列シタル規則外

ノ遺物相續人アラサル時ハ存生ノ配偶者即チ死者

ハノ夫或婦之ヲ相續シ又存生ノ配偶者アラサル時

ハ其遺物ヲ官府ニ徵収ス可シ

故ニ政府ハ他ニ遺物相續人ナキ遺物ヲ徵収ス

可ク政府ニ屬スル遺物ハ之ヲ名ケテ沒收ノ遺

物ト云フ

規則外ノ遺物相續人ノ循守ス可

キ法式

當然ノ遺物相續人ハ裁判言渡ヲ受ル等ノ手數
ナク無論死者ノ遺物ヲ相續シ直チニ之ヲ所得
ト爲シ得可シト雖モ規則外ノ遺物相續人ハ或
ル規定ヲ守ラサル可カラス

規則外ノ相續人ハ財産ニ封印ヲ爲シ且其目錄
ヲ記シテ遺物相續ノアル地ヲ管轄スル郡裁判
所ニ願出テ其裁判言渡ヲ受タル上其遺物ヲ所

得ト爲ス可シ又裁判所ニ於テハ若シ當然ノ遺
物相續人アラハ之ニ告知セシム爲メ裁判言渡
ノ爲ス前ニ公告及ヒ貼附ヲ爲ス可シ
又規則外ノ相續人ハ當然ノ相續人ト差ヒ其得
ル所ノ財産ノ價額ニ至ル迄ノ外決シテ其遺物
ニ管セシ負債ヲ償フノ責ヲカル可シ

遺物相續人遺物ヲ相續スルニ付

キ爲スヲ得可キ決定

遺物ヲ相續ス可キ者ハ左ニ掲クル三箇ノ決定

中其一ヲ選フ可シ

第一 別段ノ約定ナク遺物相續ヲ肯スル
事

第二 遺物ノ相續ヲ肯セサル事

第三 相續ス可キ遺物ノ價額ニ至ル迄ノ
外負債及ヒ費用ヲ償ハサル約定ヲ
以テ遺物相續ヲ肯スル事

相續人別段ノ約定ナク遺物ノ相續ヲ肯スルニ
於テハ相續人ニ遺物ノ價額ニ過ル負債ノ償却
ヲモ負擔セシム可シ故ニ其相續人ハ負債ノ額
遺物ノ價額ニ越ル時ト雖モ自己ノ財産ヲ以テ

其負債ヲ償フ可キ訴ヲ受ク可シ

又遺物ノ相續ヲ肯セサルニ於テハ其相續人全
ク遺物ニ管係セサルノ要ス故ニ此相續人ハ遺
物財産ニ管スルノ權ナク又如何ナル方法ヲ問
ハス其遺物ニ管スル負債ヲ償フノ責アル事ノ
シ

又相續ス可キ遺物ノ價額ニ至ル迄ノ外負債ヲ
償ハサル約定ヲ以テ遺物相續ヲ肯スル相續人
ハ其遺物ノ價ニ至ル迄ノ外負債ノ擔當スルニ
及ハス且其相續人ハ其決定ヲ爲ス爲メ遺物相

續ノ始タル日ヨリ三箇月四十日ノ猶豫ヲ得可シ

相續人別段ノ約定ナク遺物相續

ヲ肯スル事附明許又ハ黙許ヲ以

テ遺物相續ヲ肯スル事

別段ノ約定ノクシテ全ク遺物相續ヲ肯スルハ

明許又ハ黙許ヲ以テ之ヲ爲スルヲ得可ク例ヘ

ハ証書中ニ相續人タル名目ヲ記入シタル者ハ

明許ナリトス而シテ黙許ハ種々ノ事情ニ由テ

生ス故ニ之ヲ解明スルヲ必要ナリ何トナレハ

此條件ニ由リテ約定ノク遺物相續ヲ肯シタル
トヲルハナソ

遺物相續人タルヲ肯シタルニ非レハ爲シ得
可カラサル諸事ヲ行ヒシ者ハ別段ノ約定ナク
遺物相續ヲ肯シタル者トナス可シ

又遺物財産中ノ不動産又ハ動産ヲ賣拂ヒ或ハ
遺物ノ不動産ヲ書入質ト爲ス時ハ其相續人ヲ
遺物相續人タルヲ肯シタルノ証アル者トナス
可シ

又遺物相續ヲ爲ス可キ權利ヲ賣ル時モ亦之レ

ト同シク此事ヲ爲スハ卽チ現ニ遺物相續人タル名目ヲ肯シタルモノト看做ス可シ

遺物財産中ノ物件ヲ竊取スル時ハ只此一事ヲ以テ其者ヲ別段約定ナキ遺物相續人ナリト爲ス可シ

相續人ハ其名目ヲ肯スルヲナシト雖モ事急ニシテ止ムヲ得サル理財上ノ事柄ハ之ヲ處置スルモ妨ナシ

相續人遺物相續ヲ肯ヒサル事

遺物相續ヲ肯ヒサル旨ハ遺物相續ノ始マル地

ヲ管轄スル郡裁判所ノ書記局ニ申立ツ可シ但
シ其手數ヲ行フニハ遺物相續ヲ肯セサル事ヲ
申立ント欲スル者代書師ト共ニ書記局ニ出席
シ其代書師ハ届人ニ人違ヒナキ事ト届人ノ手
署ニ相違ナキ事トヲ証ス可シ
遺物相續ヲ肯セサル者ハ其者ヲ遺物相續ニ縁
故ナキモノトシ其遺物ハ其者ニ次テ之ヲ相續
ス可キ者ニ之ヲ移ス可シ

相續人其相續ス可キ遺物ノ價額
ニ至ル迄ノ外負債ヲ償ハサル約

定ヲ以テ遺物相續ヲ肯スル事

遺物ノ價額ニ至ル迄ノ外負債ヲ償ハサル約定
ヲ以テ遺物ノ相續ヲ肯スルコトハ遺物相續ヲ肯
セサル時ノ如ク郡裁判所ノ書記局ニ届出ツル
ヲ以テ爲シ得可シ

此特權ヲ有スル約定ヲ以テ遺物相續ヲ肯セン
ト欲スル者ハ正實説明ナル遺物一切ノ目錄ヲ
記サシメテ其遺物ノ價額ニ至ル迄ノ外負債ヲ
償フ可カラス然レモ財産ヲ支配スルニ於テハ
或ル規則ヲ守ル可クシテ相續人ハ裁判所ノ允

許アラサレハ不動産ヲ賣拂フヲ得ス且公ケニ
シテ一定ノ法式アル糶賣ヲ爲スニアラサレハ
動産ヲ賣拂フヲ得ス
又右ノ相續人若シ己カ權限外ノ事柄ヲ行フニ
於テハ其特權ヲ失ヒ別段約定ナク肯シタル遺
物相續人トナル可シ
右ノ特權アル相續人ハ遺物ノ財産ヲ以テ其遺
物ニ屬スル負債ヲ償ヒ猶殘餘アレハ之ヲ己レ
カ利益ト爲スヲ得可シ

相續人ノアラサル遺物

當然ノ遺物相續人及ヒ規則外ノ遺物相續人ノ
相續セス又政府ニ於テモ徵收セサル遺物ヲ相
續人ノアテサル遺物ト云フ
相續人ノアテサル時ニ於テハ債主又ハ其遺物
ニ關係アル者ヨリ遺物相續ヲ爲ス可キ地ヲ管
轄スル郡裁判所ニ遺物ヲ支配スル管財人ヲ選
任アラシムコトヲ願ヒ得可シ

相續人ナキ遺物ノ管財人ハ相續人ニ代テ之ヲ
支配シ其得可キ高アレハ之ヲ集メ不動産動産
ノ賣拂金ヲ金額附託ノ官署ニ預ク可シ

又債主數人ノ間ニテ右財産ヲ分賦スルニ付テハ裁判上ノ規則ニ循フ可シ

分派ノ事

一物ニシテ共通ノ所有者數人アル事ヲ財産ヲ分派セサル事ト云ヒ又財産ノ共通ト云フ財産ヲ分派セサル事ハ財産ヲ支配スル上ニ於テ大ニ妨ケアリテ又共通ノ所有者ノ間ニ往々分爭ヲ生スルノ原因タル一アリ故ニ法律ヲ以テ各人ノ取前ヲ定ムル財産分派ノ法方ヲ定メ以テ各人ヲシテ其分派ヲ得セシムル規則ヲ設

ケタリ但シ此規則アリト雖凡五年ニ過キサル
時間財産ノ共通ヲ繼續スルノ契約ヲ結フモ敢
テ妨アルヲナシ

財産ノ分派ヲ爲ス定式

共通ノ相續人遺物分派ノ地ニ居リ且自カラ己
ノ權利ヲ行ヒ得可キ者タル時ハ別段ノ法式ヲ
要セス公証人ノ記シタル証書又ハ私ニ記シタ
ル証書ヲ以テ遺物ヲ分派スルヲ得可シ

但シ自カラ己レノ權利ヲ行ヒ得可カラサル者
幼者、治産ノ禁ヲ受タル者等或ハ遺物分派ノ地

ニ居ラサル者アル時ハ裁判上ノ手續ヲ經テ其
分派ハ處分ヲ受クルコトヲ要ス
然ル時裁判所(遺物相續ノ始マル地ヲ管轄スル
裁判所)ニ於テ分派ヲ爲スニハ各人ヲ公証人ノ
面前ニ至ラシム可シ而シテ若シ遺物中其性質
ニ由リテ分派ヲ爲ス可カラサル不動産アルハ
ハ裁判所ヨリ糶賣ヲ以テ之ヲ賣拂フ可キ旨ヲ
命ス可シ
又公証人分派ノ手續ヲ爲シ終リタル時ハ其分
派ノ所業ノ允許ヲ受クル爲メ又ハ分派ニ付キ

生シタル争ノ裁判ヲ受クル爲メ各人再ヒ同上
ノ裁判所ニ出ツ可シ

又分派ヲ爲スニ付キ遵守ス可キ本旨ハ各人ノ
取前ヲ平等ナラシムルニ在リトス故ニ各相續
人ノ爲メニ價ノ等シキ財産ノ分ケ前ヲ爲ス可
キノミナラス成ル可クハ互ニ同種ノ物ヲ分ケ
前ノ中ニ加入ス可ク而シテ成ル丈ケ不動産ヲ
割カサル様注意ス可シ

前文記スル所ニ依リ財産ヲ分派シタル時ハ其
分ケ前ヲ各々闡引ニシテ取ル可シ

各相續人ノ中ニ財産ノ分派ニ於テ已レヲ取リ
前四分一以上ノ不足アル者アル時ハ其者此分
派ヲ取消ント求ムルヲ得可シ然ルハ之ヲ稱
シテ四分一以上ノ損失ニ因リ分派ヲ取消スト
云フ

相續人ノ債主ハ分派ヲ爲スニ付キ異存ヲ申述
ヘ得可ク且已レノ權利ヲ損傷スルヲナカラシ
ムル爲メ自カラ其分派ニ與カラント求ムルヲ
得可シ

返還ノ事

別段ノ約定ナク遺物相續ヲ肯シ又ハ約定ヲ爲シテ遺物相續ヲ肯シタル相續人ハ嘗テ死者ヨリ存生中ノ贈遺又ハ遺囑ノ贈遺トシテ得タル諸物ハ遺物相續ノ時之ヲ返還ス可シ但シ返還スルニ及ハサル旨ノ明文アルニ於テハ此限ニアラス

返還スルニ及ハサル旨ヲ記シタル明文ヲ贈遺受授ノ明文ト云フ

故ニ右明文ヲ以テ存生中ノ贈遺又ハ遺囑ノ贈遺ヲ受タル者ニアラサル相續人ハ存生中ノ贈

遺物又ハ遺囑ノ贈遺物ト遺物相續ニ於ケル已
レカ取前トヲ相合シテ得可ラス茲ヲ以テ贈
遺物ヲ保タント欲スルハ遺物相續ヲ肯セサ
ルヲ要ス

但シ撫養教育ノ費用、期限ヲ定メテ修業ヲ爲サ
シムル費用、婚姻ノ贈物及ビ其他常習ノ贈物ハ
之ヲ返還スルニ及ハス

遺物相續ニ付キ擔當ス可キ負債
ヲ拂フ事

遺物相續人ハ各其相續シタル財産ノ割合ニ應

シテ互ニ遺物ニ屬スル負債及ヒ費用ノ拂方ヲ
 擔當ス可シ例ヘハ遺物ノ半ヲ得ル相續人ハ負
 債ノ半ハヲ拂フ可ク遺物ノ四分一ヲ得ル相續
 人ハ負債ノ四分一ヲ拂フ可キカ如シ

第二款 存生中贈遺ノ証書及ヒ遺囑贈

遺ノ証書 ナホレオシ民法書第
三篇第二卷從第八百

九十三條至
第一千百條

存生中贈遺ノ証書及ヒ遺囑贈遺

ノ証書ノ解

ナホレオシ民法書ニ於テハ償ヲ得スシテ人ニ

財産ヲ與フル事ヲ許スハ存生中贈遺ノ証書ト
遺囑贈遺ノ証書トニ於ケル二種ノ贈與ニ限ル
所ナリ

存生中贈遺ノ証書ハ贈遺ヲ爲ス者其贈遺ヲ受
クル事ヲ兼諾スル者ノ爲メ已レル財産ヲ即時
ニ讓與フルニ在リテ再ヒ之ヲ廢棄ス可カラサ
ルモノナリ

存生中ノ贈遺者トハ贈遺ヲ爲ス者ニシテ贈遺
ヲ受ル者トハ贈遺ヲ兼諾スル者ヲ云フ
存生中贈遺ノ証書ハ之ヲ以テ贈遺ヲ受クル者

直ニ權利ヲ與フル事ト決シテ之ヲ廢棄ス可
カラサル事トノ二様ノ本性ヲ有スルモノトス
又遺囑贈遺ノ證書ハ其贈遺ヲ爲ス者其死去ス
ルニ方リ己レカ財産ノ全部又ハ一部ヲ人ニ與
フル證書ニシテ贈遺者後ニ之ヲ廢棄スルコトヲ
得可キモノナリ

遺囑贈遺ノ證書ハ其贈遺ヲ爲ス者ノ死去セシ
日ヨリ其效ヲ生ス可ク贈遺者ハ己レノ約束ヲ
變シ又ハ全ク之ヲ廢棄シ又ハ此約束ヲ以テ彼
約束ニ代フルヲ得可キ者トス

以上二種ノ贈遺ノ解ニ因リ存生中ノ贈遺ト
遺囑ノ贈遺トノ間ニ在ル本然ノ差異ヲ見ル
可シ

存生中ノ贈遺及ヒ遺囑ノ贈遺ヲ
爲シ又ハ之ヲ兼諾フルニ於テ必
要ナル諸件

遺囑ノ贈遺又ハ存生中ノ贈遺ヲ爲スニハ精神
ノ昏迷セサル事ヲ必要トス故ニ若シ存生中ノ
贈遺又ハ遺囑ノ贈遺ヲ爲ス人此証書ヲ記スル
時ニ方リ精神完全ナラサレハ存生中贈遺ノ證

書及ヒ遺囑贈遺ノ証書ノ取消ヲ言渡スヲ得可

シ

又十六歳以下ノ幼者ハ遺囑贈遺ノ証書及ヒ存
生中贈遺ノ証書ヲ以テ人ニ財産ヲ贈與スルコ
ト得ス十六歳以上ノ幼者ハ遺囑ノ贈遺ヲ爲シ
得可シト雖凡丁年者ニ於テ許サル、所ノ半額
迄ノ財産ニ非サレハ人ニ贈與スルコトヲ得可カ
ラス

幼者ハ自己ノ後見人ニ遺囑贈遺ノ証書ヲ以テ
財産ヲ贈與スルヲ得ス又既ニ丁年ニ至リタル

幼者ト雖_レ死後見人ノ算計書ヲ受取ラサル前ニ
嘗テ後見人タリシ者ノ爲メ存生中贈遺ノ証書
又ハ遺囑贈遺ノ証書ヲ記ス可カラズ是レ蓋シ
現時後見人タル者又ハ以前後見人タリシ者贈
與ヲ受ケンカ爲メ或ハ後見人タルノ權威ヲ弄
用スルヲアラシヲ恐ルニ出ル所ナリ

又幼者ノ尊屬親其後見人タル時又ハ以前後見
人タリシ時ハ此限ニアラス婚姻シタル婦ハ其
夫又ハ裁判所ノ允許ナケレハ存生中ノ贈遺ヲ
爲ス可カラスト雖_レ死遺囑ノ贈遺ヲ爲スニ於テ

ハ此允許ヲ受クルニ及ハス

存生中贈遺ノ證書ニ依リ贈遺ヲ受クルヲ得可
キニハ此贈遺ノ日ニ生存シタルヲ必要トシ又
遺囑贈遺ノ證書ニ依リ贈遺ヲ受ルヲ得可キニ
ハ此贈遺者ノ死去ノ時ニ方リ生存シタルヲ必
要トス何トナレハ遺囑贈遺ノ證書ハ死去ノ日
ヨリ初メテ其効アルモノナレハナリ

人ニ因リテハ生存中贈遺ノ證書及ヒ遺囑贈遺
ノ證書ニ因リ贈遺ヲ受ルヲ得サル者アリ今
之ヲ掲レハ私生ノ子ハ遺物相續ニ付キ法律上

ニ定メタル部分ノ外其父母ヨリ存生中贈遺ノ
證書又ハ遺囑贈遺ノ証書ヲ以テ贈遺ヲ受ルコ
ヲ得サルカ如シ

又最後ノ疾病ノ際ニ方リ醫師或ハ説教ノ僧侶
ノ爲メ病者ノ記シタル存生中贈遺ノ証書及ヒ
遺囑贈遺ノ証書ハ別段規則外ノ者ヲ除クノ外
其効ナカル可シ

貧院及ヒ一邑内ノ貧者又ハ衆益トナル可キ諸
局ハ官府ノ允許ヲ受ルニ非サレハ生存中贈遺
ノ證書及ヒ遺囑贈遺ノ証書ニ因リ財産ノ贈遺

ヲ受ルコトヲ得ス

隨意ニ贈遺ト爲スヲ得可キ財産

ノ定量及ヒ保有シ置ク可キ財産

ノ定量

存生中ノ贈遺及ヒ遺囑ノ贈遺トシテ財産ヲ人

ニ贈與シ得可キ權ハ子及ヒ尊屬ノ親アル人ニ

付テハ其制限アリテ遺物ノ一部ハ卑屬又ハ尊

屬ノ親ニ屬ス可ク此一部ヲ以テ即チ保有シ置

ク可キ財産ノ定量トス

生存中贈遺ト遺囑ノ贈遺トヲ問ハズ隨意ニ人

贈與スルヲ得可キ定量外ノ財産ハ贈遺トシ
テ人ニ之ヲ贈與スルヲ得可カラス

子ノ爲メニ保有シ置ク可キ財産ノ定量ハ左ノ
如シ

贈遺ヲ爲ス者ニ一人ノ子アル片ハ其子ノ爲メ
一保有ス可キ定量ヲ財産ノ半トシ人ニ贈與ス
ルヲ得可キ定量ヲ他ノ半トス

又二人ノ子アル時ハ保有シ置ク可キ財産ヲ三
分ノ二トシ隨意ニ贈遺ト爲シ得可キ財産ヲ三
分ノ一トス

又三人以上ノ子アル時ハ保有シ置ク可キ財産
ヲ四分ノ三トシ隨意ニ贈遺トシテ人ニ贈與シ
得可キ財産ヲ四分ノ一トス又本宗又ハ外族中
ノ一方ニ尊屬親アル片ハ保有シ置ク可キ定量
ヲ財産ノ四分一トシ又本宗外族ノ雙方ニ尊屬
親アル時ハ保有シ置ク可キ定量ヲ財産ノ半
トス

遺物ト爲シタル財産ヲ減少スル
事

隨意ニ贈遺ト爲シ得可キ定量ニ越ハタル存生

中ノ贈物又ハ遺囑ノ贈物ハ之ヲ減少ス可キモ
ノニシテ其減シ方ノ願立ハ己カ爲メニ財産ヲ
保有シ置ク可キ相續人ヨリ之ヲ爲スヲ得可

シ

贈遺ノ財産ヲ減少スルニハ先ツ遺囑ノ贈物ニ
付キ之ヲ爲ス可ク遺囑ノ贈物ハ贈遺者其贈遺
ヲ受ル者ノ間ニ順序ヲ定メタルニ非サレハ其
高ノ割合ヲ以テ悉ク之ヲ減シ次ニ存生中ノ贈
遺ニ及ホス可キ時ハ亦之ヲ減ス可シ但シ其減
シ方ハ最モ近キ存生中ノ贈遺卽チ其贈遺ヲ爲

セシ者ノ死去ニ最モ近キ存生中ノ贈遺ヨリ始
メテ次第ニ時月ノ遠キ贈遺ニ及ホシ相續人其
當然保有ス可キ遺物ノ定量ヲ全ク相續シ得可
キニ至テ其減シ方ヲ止ム可シ

右通則ヲ掲ケタル後更ニ存生中ノ贈遺ニ管ス
ル別段ノ規則ヲ左ニ説カントス

存生中ノ贈遺ヲ爲ス法式

存生中贈遺ノ証書ハ嚴整ノ法式ヲ守ル可キモ
ノニシテ此証書ハ証人二名ノ立會ニテ公証人
一名之ヲ記シ又ハ公証人二名之ヲ記ス可シ

存生中ノ贈遺ヲ受ル者ハ其贈遺ノ証書中ニ其
兼諾ノ旨ヲ記シ又ハ其証書ヨリ後ニ公証人ノ
記シタル証書ヲ以テ其贈遺ヲ受ルヲ兼諾シ
得可シ

存生中贈遺ノ証書ヨリ後ニ記シタル公正ノ証
書ヲ以テ贈遺ヲ受ルヲ兼諾シタル時ハ贈遺
ヲ爲ス者ニ其旨ヲ告知スルヲ要ス

右諸規則ハ嚴重ニ守ル可キモノニシテ授受雙
方ノ者若シ之ニ背ク時ハ其証書ノ效ナカル可

シ

又不動産ヲ存生中ノ贈遺ト爲スニ付テハ別段
ノ法式アリ卽チ其証書ヲ他人ニ對シテ効アラ
シメンニハ此不動産ノ在ル所ノ郡ノ不動産書
入質ノ支配所ニ於テ其爲メニ設ケタル一箇ノ
簿冊中ニ其存生中贈遺ノ証書ヲ寫入ル、事ニ
在リトス
動産コ存生中ノ贈遺ト爲ス證書ハ其動産ノ評
價書ヲ記シ贈遺ヲ爲ス者及ヒ之ヲ受クル者共
ニ其姓名ヲ手署シテ贈遺ノ証書ニ之ヲ綴加
置クニ非サレハ其効ナカル可シ

存生中ノ贈遺ノ証書ノ廢棄ス可

ラサル事

存生中贈遺ノ証書ハ廢棄ス可カラサル者

即ノ贈遺

ヲ爲ス者其與ヘノ贈遺物ヲ隨
意ニ取戻ス可カラサルヲ云フタリトス故ニ存

生中ノ贈遺ヲ爲ス者ノ隨意ニテ與奪スルヲ得

可キ約束ヲ以テ爲セシ贈遺ノ証書ハ其效ナカ

ル可シ

存生中ノ贈遺ノ証書ハ廢棄ス可カラサルヲ以

テ其本旨ト爲ス然レハ贈遺ヲ受クル者又ハ此

者ノ卑屬ノ親贈遺ノ爲ス者ヨリ前ニ死セシ時

ハ贈遺ノ財産ヲ再ヒ贈遺者ニ取戻ス可キ約定
ヲ以テ贈遺ヲ爲スニ妨ナカル可シ

右ノ場合ニ於テ一旦與ヘタル贈與ヲ取戻スノ
權ハ贈遺者一人ノ意ニ管シ得可カラサルヲ判
然タルヲ以テ生存中贈遺ノ証書ヲ廢棄ス可カ
ラスト定ムル其本旨ニ乖戾セサルモノトス

生存中贈遺ノ証書ヲ廢棄ス可カ
ラサル規則外ノ諸件

生存中贈遺ノ証書ヲ廢棄ス可カラスト定ムル
本旨ニ三箇ノ例外法アリ因テ左ニ之ヲ掲ク

第一

贈遺ヲ受ル者其贈遺ヲ受ルニ付キ約
シタル諸ノ條件ヲ執行ハサル時ハ贈
遺ヲ爲ス者ノ申立ニ從ヒ贈遺ノ証書
ヲ廢棄ス可シ

第二

贈遺ヲ受ル者贈遺ヲ爲ス者ノ恩義ヲ
忘ル、事アルニ於テハ存生中贈遺ノ
証書ヲ廢棄スルヲ得可シ

恩義ヲ忘ル、事トハ贈遺ヲ受ル者
贈遺ヲ爲ス者ノ生命ヲ害セント爲
シタル時又ハ贈遺ヲ受ル者贈遺ヲ

爲ス者ニ對シテ暴行罪犯又ハ至重
ノ禍害ヲ爲シタル時又ハ贈遺ヲ受
ル者贈遺ヲ爲ス者ノ窮乏ナルニ方
リ之ニ養料ヲ給スルヲ肯セサル
時ニ在リトス
但シ此等ノ條件ニ付キ贈遺ノ証書
ヲ廢棄セント爲ルノ申立ハ贈遺ヲ
爲ス者其贈遺ヲ受ル者ニ恩義ヲ忘
レシ所爲アルヲ認知セシ日ヨリ
一年內ニ之ヲ爲スヲ要ス

右第一第二ノ條件ニ付キ存生中贈遺ノ証書ヲ廢棄スルコハ裁判所ヨリ之ヲ言渡ス可シ

第三 存生中ノ贈遺ヲ爲スノ日ニ於テ子ア

ラサル人ヨリ爲シタル存生中贈遺ノ証書ハ贈遺ヲ爲ス者ノ子生レシ時ハ之ヲ廢棄スルヲ得可シ

此條件ニ付キ存生中贈遺ノ証書ヲ廢棄スル時ハ子ノ出産ニ因リ贈遺ノ証書ヲ廢棄スト云フ而シテ此廢

棄ハ當然之ヲ爲スヲ得可ク別段裁
判所ニ訴フルヲ要セス蓋シ其故ハ
贈遺ヲ爲ス者若シ我子ニ對スル父
ノ愛情ヲ知リタル時ハ敢テ他人ニ
贈遺ヲ爲ササル可キヲ本旨ト爲
スニ因ル所ナリ

遺囑贈遺ノ証書及ヒ遺囑贈遺ノ
証書ヲ記スル法式

遺囑贈遺ノ証書ヲ記サント欲スル者ハ左ニ掲
クル所ノ三箇ノ法式ヲ撰用ス可シ

公正ノ遺囑贈遺ノ証書

遺囑者自筆ノ贈遺ノ証書

秘密ノ遺囑贈遺ノ証書

以上三種ノ法式ニ付キ必要ナル細説アレハ
左ニ之ヲ記セントス

公正ノ遺囑贈遺ノ証書

公正ノ遺囑贈遺ノ証書ハ証人四名ノ立會ニテ

公証人一名之ヲ記シ又ハ証人二名ノ立會ニテ

公証人二名之ヲ記ス可シ

此証書ハ公証人遺囑者ノ口授スル文ヲ筆記シ

証人コレノ面前ニ於テ遺囑者ニ之ヲ讀聞カス
可シ

証人ハ佛蘭西人ニシテ民權ヲ有スル丁年ノ男
子タル可ク遺囑ノ贈遺ヲ受ル者又ハ其者ノ第
四級ニ至ル迄ノ血屬及ヒ姻屬ノ親又ハ其書ヲ
記スル公証人ノ書記役ハ証人ト爲ス可カラス
若シ法律ニ於テ規定シタル諸件ヲ履行ハサ
ル証書ハ其効ナカル可シ

遺囑者自筆ノ贈遺ノ証書

遺囑者自筆ノ贈遺ノ証書ハ遺囑書ヲ記スル法

式中最モ簡便ノモノニシテ全ク秘密タルヲ得
可キノ益アリ

自筆ノ遺囑書ハ其遺囑者自カラ其証書ノ全文
年月及ヒ自己ノ姓名ヲ記ス可ク此條件ヲ行フ
タル証書ハ適法ノモノト爲ス可シ然レモ一語
タリトモ他人ノ之ヲ記シタルモ此一事ヲ以
テ其証書ヲ取消ス可ク又年月ヲ記サル証書
及ヒ年月ノ正カラサル証書モ亦之ヲ取消ス可
シ

年月トハ通常其証書ヲ記スル日月及ヒ年ヲ云

フニ在リト雖モ遺囑者更ニ他ノ日附ヲ記スル
モ妨ナシ故ニ千八百六十八年「バーク」祭日ノ日
ト記スルモ其証書ノ効アルモノトス是レ蓋シ
法律上ニ於テ必要ト爲ス所ハ到底成ル可キ丈
ケ証書ヲ記シタル年月ノ不分明ナラサルヲ要
スルノ趣意ニ在レハナリ

遺囑者ハ總テノ爭ヲ防ク爲メ遺囑書ノ附録及
ヒ追加ニモ自己ノ姓名ヲ手署シ且ツ日附ヲ記
スルヲ要トス而シテ其証書ハ印紙ヲ貼用セサ
ル紙ニ記ストモ其効アリトス然レモ此証書ヲ

開封スル時ニ方リ罰金ヲ言度シレ兼テ印紙税
ヲ課セフル可シ

遺囑者自筆ノ贈遺ノ証書ハ間々之ヲ見失ヒ或
ハ之ヲ破毀スル等ノ不都合ナルヲ以テ之ヲ保
全スル爲メニハ公証人又ハ遺囑者ノ信任スル
者ニ此証書ヲ預ケ置クヲ良法トス

秘密ノ遺囑証書

秘密ノ遺囑証書ハ其手數一層煩雜ナルカ故ニ
自己ノ姓名ヲ手署シ能フ者公ケノ遺囑書ヲ作
リ衆人ニ其事柄ヲ知ラシムルヲ恐レ忌ム時

ノミ之ヲ記ス可シ

秘密ノ遺囑証書ハ遺囑者自カラ之ヲ記シ又ハ
他人ヲシテ之ヲ記サシム可シト雖凡姓名ハ必
ラス遺囑者自カラ之ヲ手署ス可シ而シテ其証
書又ハ其封紙ニ封印ヲ爲シ遺囑者証人六名ノ
立會一テ公証人一名ニ渡ス可シ然ル時ハ公証
人此証書ニ封紙上ノ証記ト云ヘル表書ヲ記ス
ルナリ

若シ遺囑者自己ノ姓名ヲ手署シ能ハサル時ハ
表書ヲ記スルニ方リ更ニ証人一名ヲ呼寄ス可

シ
姓名ヲ手署スルヲ能ハス文字ヲ
讀ムヲ能ハス又言語ヲ發スル
能ハサル者ノ遺囑書

文字ヲ書クヲ知ラサル者ハ自筆ノ証書ヲ以
テ遺囑ノ贈遺ヲ爲ス可カラス然レモ公然ノ証
書ヲ以テ遺囑ヲ爲シ得可ク而シテ公証人ハ遺
囑者ノ姓名ヲ手署シ能ハサル原由ヲ証書ニ記
載ス可シ

又文字ヲ書クヲ知ラサル遺囑者ハ秘密ノ証

書ヲ以テ遺囑贈遺ヲ爲シ得可シト雖戸表書ヲ
記スルニハ定員外ノ証人一名ヲ増シ都合七名
ト爲ス可シ

文字ヲ讀ムコトヲ知ラサル者ハ公然ノ証書ヲ以
テセサレハ遺囑ヲ爲ス可カラス

又秘密ノ遺囑ハ文字ヲ讀ムコトヲ知リ又ハ讀ミ
能フ可キ者ニ非レハ之ヲ爲ス可カラス

又言語ヲ發スルコト能ハスシテ文字ヲ書クコトヲ
知リタル者ハ自筆ノ遺囑書又ハ秘密ノ遺囑書
ヲ以テ贈遺ヲ爲スコトヲ得可シ但シ然ル時ハ秘

密ノ遺囑書ニ於テハ遺囑者其全文及ヒ年月ヲ
記シ且ツ自己ノ姓名ヲ手署ス可シ
言語ヲ發スルヲ能ハサル者ハ自己ノ意ヲ口授
スルヲ能ハサルカ故ニ公正ノ遺囑書ヲ以テ遺
囑贈遺ヲ爲ス可カラス

自筆ノ遺囑書及ヒ秘密ノ遺囑書
ノ保存

公正ノ証書ニ記シタル遺囑書ハ遺囑者ノ死去
ノ時ニ當リテ別段法式ヲ行フヲナク之ヲ執行
スルヲ得可シ

自筆ノ遺囑書又ハ秘密ノ遺囑書ニ於テハ之ヲ
保存ス可キ爲メ又ハ其眞僞ヲ証明スル爲メ特
定ノ預備法アリ

遺囑者ノ死去ニ方リテハ自筆ノ遺囑書又ハ秘
密ノ遺囑書ヲ郡裁判所ノ長ニ差出ス可シ然ル
時若シ其証書ヲ封シタル時ハ裁判所ノ長之ヲ
開封シ其模様ノ調書ヲ記シテ公証人ノ役所ニ
之ヲ附托ス可キ旨ヲ言渡ス可シ

遺囑贈遺ノ証書ニ記入シ得可キ

條件

遺囑贈遺ノ証書ニ記入シ得可キ條件三箇アリ
因テ左ニ之ヲ掲ク

第一 遺囑者ノ財産全部ノ贈遺

第二 遺囑者ノ財産中別段指定メサル一

部ノ贈遺

第三 遺囑者ノ財産中別段指定メタル品

物ノ贈遺

凡テ遺囑贈遺ノ証書ニ於ケル條件ハ以上三箇
ノ法則ニ歸ス故ニ遺囑者ノ用ヒシ言詞ノ如何
ヲ問ハス其贈遺ノ種類ニ因リテ遺囑者ノ財産

全部ノ贈遺タルヤ又ハ財産中別段指定メサル
一部ノ贈遺タルヤ又ハ財産中別段指定メタル
品物ノ贈遺タルヤヲ推究スルヲ必要トス

財産全部ノ遺囑贈遺ノ証書

財産全部ノ遺囑贈遺ノ証書トハ遺囑者死去ノ
時其財産ノ全部ヲ得可キ不定ノ權利ヲ與フル
遺囑ノ証書ヲ云フ故ニ此贈遺ヲ受ク可キ者ハ
時アリテ財産ノ全部ヲ得可カラサルヲアリ何
トナレハ他ニ其遺物中特ニ定メタル品物ヲ得
可キ者アリ又ハ當然財産ノ一部ヲ保有ス可キ

相續人アル時ハ其贈遺トシテ受ク可キ財産ヲ
減少スルヲアレハナリ而シテ其贈遺ヲ受ル者
ノ權斯ク不定ナリト雖モ之ヲ財産全部ノ遺囑
贈遺ト爲スハ當然財産ノ一部ヲ保有ス可キ相
續人又ハ他ノ遺囑贈遺ヲ受ク可キ者アラサル
時ハ財産全部ノ遺囑贈遺ヲ受ク可キ者其全部
ヲ受ク可キ權アルニ由レハナリ

財産全部ノ遺囑贈遺ヲ受ク可キ
者ノ權利及ヒ義務

財産全部ノ遺囑贈遺ヲ受クル者ノ權利ハ遺囑

者ニ當然財産ノ一部ヲ保有ス可キ相續人アル
ト否トニ因リテ互ニ相異ナレル方法ヲ以テ之
ヲ定ム故ニ若シ財産ノ一部ヲ當然保有ス可キ
相續人即チ卑屬親及ヒ尊屬親ノアル時ハ財産
全部ノ遺囑贈遺ヲ受クル者ヨリ其相續人ニ對
シ遺囑贈遺ノ財産ノ引渡ヲ要ム可シ

又然ル時財産全部ノ遺囑贈遺ヲ受ク可キ者遺
囑者ノ死去セシ日ヨリ一年内ニ相續人ニ對シ
其財産ノ引渡ヲ得ント求ムル時ハ遺囑者死去
ノ日ヨリ以來ノ其財産ノ利益ヲ所得ト爲ス

ヲ得可シト雖モ若シ一年內ニ右引渡ヲ得ント
求メサル時ハ其財産ノ引渡ヲ訴ヘタル日ヨリ
以來ノ利益ノミヲ得可シトス
又當然財産ノ一部ヲ保有ス可キ相續人ノアラ
サル時ハ財産全部ノ遺囑贈遺ヲ受ク可キ者ハ
常ニ遺囑者ノ死去セシ日ヨリ以來ノ利益ヲ得
ルノ權アリテ其遺囑書公然ノ証書タル時ハ別
段ノ法式ヲ行フニ及ハス直チニ其贈遺ノ財産
ヲ所有シ得可ク又其遺囑書公然ノ証書ニアラ
ズシテ自筆ノ遺囑書又ハ秘密ノ遺囑書ナル時

ハ相續ヲ爲ス地ヲ管轄スル裁判所長ノ言渡ニ
依リテ財産ヲ所有ト爲スヲ要ス
財産全部ノ遺囑贈遺ヲ受クル者ハ其他ノ遺囑
贈遺物ヲ渡シ且ツ遺物ニ屬スル負債ノ償還ヲ
擔當ス可ク若シ其者遺物ノ價額ニ越ヘタル負
債及ヒ諸費ヲ擔當スルヲ免レント欲スル時ハ
財産ノ目錄ヲ記シ遺物ノ價額ニ至ル迄ノ外負
債及ヒ諸費ヲ償ハサル約定ヲ以テ贈遺ヲ受ク
ルヲ必要トス

財産中別段指定メサル一部ノ遺

囑贈遺ノ証書

財産中ノ別段指定メサル一部ノ遺囑贈遺ノ証書トハ動産及ヒ不動産中ノ一部又ハ半バ又ハ四分一或ハ動産ノ全部或ハ不動産ノ全部又ハ動産ノミノ一部或ハ不動産ノミノ一部ヲ遺囑贈遺ト爲ス証書ヲ云フ

財産中ノ別段指定メサル一部ノ遺囑贈遺ヲ受クル者ハ當然ノ相續人又ハ財産全部ノ遺囑贈遺ヲ受クル者ニ已レカ得可キ財産ノ引渡ヲ求ム可ク又已レカ得タル遺物ノ高ニ準シテ負債

又ハ諸費ヲ償フヲ擔當ス可シ

財産中ノ別段指定メタル品物ノ
贈遺ノ証書

財産中ノ別段指定メタル品物ノ贈遺ノ証書ト
ハ財産全部ノ遺囑贈遺ノ証書又ハ財産中ノ別
段指定メサル一部ノ遺囑贈遺ノ証書ニアラサ
ル贈遺ノ証書ニシテ即チ一箇ノ家屋、田園、金額
等ノ遺囑贈遺ノ証書ハ皆此類ノ贈遺ナリ
財産中別段指定メタル品物ノ贈遺ヲ受ク可キ
者ハ當然財産ヲ得可キ遺物相續人、財産全部ノ

遺囑贈遺ヲ受ク可キ者又ハ財産中ノ別段指定
メサル一部ノ遺囑贈遺ヲ受ク可キ者ニ已レカ
得可キ財産ノ引渡ヲ求ム可シ

此遺囑贈遺ヲ受クル者ハ已レカ得可キ財産ノ
引渡ヲ得ント求メタル日又ハ其財産ヲ引渡ス
可キ者ノ意ヲ以テ之ヲ引渡スヲ兼諾シタル
日ヨリ以來ノ遺物財産ノ利益ヲ得ルノミト雖
凡左ニ記ルス所ノ二箇ノ場合ニ於テハ遺囑者
死去ノ日ヨリ以來ノ遺物財産ノ利益ヲ得ルノ
權アリトス

第一 遺囑者其遺囑書中ニ判然ト其意ヲ

表シタル時

第二 畢生間ノ年金又ハ養料ヲ贈遺ト爲

シタル時

又財産中ノ別段指定メタル品物ノ贈遺ヲ受ル
者ハ遺物ニ屬スル負債ヲ償フニ及ハス

贈遺物ノ引渡又ハ官署ノ簿冊ニ

遺囑書ヲ登記スル諸費用

遺囑者ノ意ヲ別段指示シタル時ノ外ハ遺物財
産中ヨリ遺囑財産ノ引渡ヲ訴フル費用ヲ拂

可シ

又遺囑贈遺ノ証書ヲ官署ノ簿冊ニ登記スル費用及ヒ其遺囑贈遺ニ因リ財産所有ノ權ヲ移スニ付テノ税ハ贈遺ヲ受クル者之ヲ擔當ス可シ然レモ贈遺ヲ受クル者ハ何レモ各自ニ自己ノ贈遺証書ヲ官署ノ簿冊ニ登記セシメ其他ノ贈遺ヲ受クル者ノ利益ニ注意スルヲナク各々己レニ管係セシ事ニ付キ遺囑贈遺ノ執行ヲ要ムルヲ得可シ

遺囑者ノ委託ヲ受ケテ遺囑ノ諸

事ヲ管理スル者

遺囑者ノ委托ヲ受ケ遺囑ノ諸事ヲ管理スル者
トハ遺囑贈遺ノ執行ヲ管照スル爲メ遺囑者ノ
特ニ指定メタル者ヲ云フ
遺囑者ハ其遺囑ノ諸事ヲ管理スル者一人又ハ
數人ヲ撰任スルヲ得可シ

遺囑ノ諸事ヲ管理スル者ハ遺囑書ニ因リテ贈
遺ノ動産ヲ假ニ已レニ保有スルヲ得可シ然レ
モ其保有ハ遺囑者死去ノ日ヨリ一年ニ過ク可
カラス此定期ニ至レハ管理者其財産管理ニ付

ノノ計算ヲ爲サ、ル可カラス

遺囑贈遺ノ管理者ハ何レノ場合ニ於テモ遺物
中ニアル動産ニ封印ヲ爲シテ其目錄ヲ記シ又
時アリテ贈遺ニ管スル義務ヲ行フ爲メ相當ノ
金高アラサレハ其動産ヲ賣拂ハシメ且專ラ遺
囑書執行ノ事ニ注意ス可シ

又遺囑贈遺ノ管理者ハ遺囑書ノ効ノ有無ニ付
キ爭ノ生セシ時ハ之ニ干涉スルヲ得可シ

遺囑贈遺ノ証書ヲ廢棄スル事

遺囑贈遺ノ証書ハ遺囑者已レカ爲シタル贈遺

ヲ取消ス旨ヲ記シタル公正ノ証書ヲ以テ之ヲ
廢棄スルヲ得可シ

遺囑贈遺ノ証書ハ其條件ト相矛盾スル後ノ遺
囑証書ニ因リ又ハ特ニ其遺囑書ヲ取消ス可キ
事ヲ記シタル後ノ遺囑証書ニ因リ之ヲ廢棄ス
ルヲ得可シ

又遺囑者其遺囑贈遺ト爲セシ財産ヲ賣拂フ時
ハ其意ヲ變シタルノ証ニシテ亦遺囑書ヲ廢棄
ス可シ

又左ニ記ス所ノ場合ニ於テハ遺囑証書ノ効ナ

カル可シ

一 遺囑贈遺ヲ受クル者ノ遺囑者ヨリ

前ニ死去シタル時

一 遺囑贈遺ヲ受ク可キ者贈遺ヲ拋棄

シ又ハ贈遺ヲ受クル能ハサル身分

トナリシ時

一 贈遺ノ物件遺囑者ノ存生中ニ滅盡

シタル時

以上遺囑贈遺ノ條件ヲ概論シタルニ由リ以下

「シバスチンシヲ」

贈遺ヲ受ル者其存生中其贈遺物ヲ保有シ死后ニ至リ嘗

テ其贈遺ヲ爲シタル者ノ定メ置キタルノ事、尊
者ニ其財産ヲ譲リ與フ可キ契約ヲ云フ、ノ事、尊
屬ノ親其卑屬ノ親ニ己レノ財産ヲ分派スル事、
婚姻ノ契約書ヲ以テ爲ス所ノ存生中ノ贈遺、夫
婦雙方ノ存生中ノ贈遺等ニ管スル別段ノ條件
ヲ左ニ記セントス

「シ」フスチ、ンヲ「シ」ノ事

「シ」ブスチ、ンヲ「シ」ントハ甲者ヨリ乙者ニ存生中
ノ贈遺又ハ遺囑ノ贈遺ヲ爲シ乙者ノ死去ニ至
ル迄ハ其存生中ノ贈遺物又ハ遺囑ノ贈遺物ヲ
己レニ保有セシメ其死去ノ后ニ至リテ丙者ニ

其贈遺物ヲ引渡サシム可キ約定ヲ以テ爲ス所
ノ贈遺ヲ云フ
シブスチニシヲニハ舊制度ノ時ニ在テハ多ク
行ハレシモノニシテ一箇ノ親族中ニ財産ヲ保
有スル爲メノ一法タリシカナポレオン^ナ民法書
ニ於テハ財産自由ノ融通ニ障礙アリトシ且人
々職業ヲ營スルニ重大ノ妨害アリト爲シテ之
ヲ廢シタリ故ニ此類ノ贈遺ハ全ク其効ナク唯
左ニ記ス所ノ二箇ノ場合ニ於テノミ此類ノ贈
遺ヲ許ルシタリ

第一 父母ハ其子女ノ爲メ隨意ニ贈遺ト

爲シ得可キ定分ヲ存生中ノ贈遺又

ハ遺囑ノ贈遺ト爲シ而シテ其贈遺

ヲ受クル子女ヲシテ其現ニ産ミタ

ル子又ハ未タ生レサル子ノ爲メ其

贈遺ノ財産ヲ保有セシム可キヲ定

ムルヲ得可シ

第二 子アラサル兄弟姉妹ハ已レノ兄弟

姉妹ニ遺囑ノ贈遺及ヒ存生中ノ贈

遺ヲ爲シ而シテ其兄弟姉妹ヲシテ

其子ノ爲メ其贈遺ノ財産ヲ保有セ
シム可キヲ定ムルヲ得可シ

斯ノ如ク特別ノ譯ヲ以テ父母兄弟姉妹ニ右様
ノ贈遺ヲ許ルシタルノ旨趣ハ孫又ハ甥姪ノ爲
メニ財産ヲ保有シ置キ其父母ヲシテ之ヲ耗費
セシメサルカ爲メナリ

尊屬ノ親己レノ財産ヲ卑屬ノ親
ニ分派スル事

尊屬ノ親ハ己レカ存生中ニ存生中ノ贈遺書又
ハ遺囑ノ贈遺書ノ法式ニ從フタル証書ヲ記シ

テ其數子ニ財産ヲ分派スルヲ得可シ
贈遺者死去ノ時ニ方リ存生スル數子ニ分派ヲ
爲サ、ル歟又ハ法律上ニ定ムル所ヨリ更ニ過
分ナル利益ヲ數子中ノ一人ニ與フル等ノ事ア
ル時ハ右分派ノ効ナカル可ク又數子中一人ノ
取前ニ四分一以上ノ不足アル時モ亦其分派ヲ
廢棄スルヲ得可シ

婚姻ノ契約書ヲ以テ爲ス所ノ存
生中ノ贈遺

婚姻ノ契約書ヲ以テ或人ヨリ夫婦ニ對シ爲ス

所ノ存生中ノ贈遺又ハ夫婦中ノ一方ヨリ他ノ
一方ニ對シテ爲ス所ノ存生中ノ贈遺ハ別段ノ
規則ニ循フ可シ故ニ此類ノ贈遺ハ現ニ婚姻ヲ
結フ可キ事ニ管係スルモノニシテ又別段其贈
遺ヲ受クルヲ兼諾シ或ハ公正ノ証書ヲ以テ其
贈遺ヲ受ルヲ兼諾スルニ及ハス又此類ノ存
生中ノ贈遺ハ恩義ヲ忘レタル故ヲ以テ之ヲ廢
棄ス可カラス

婚姻ノ契約書ヲ以テ爲ス所ノ贈遺ニ付テハ其
他ノ贈遺ニ付キ爲シ得可カラサル贈與ヲ爲シ

得可シ故ニ將來財産ノ贈遺又ハ贈遺者一人ノ
存意ニ管スル約束ヲ以テ爲ス贈遺等モ亦之ヲ
爲スヲ許ルスモノナリ

夫婦結縁ノ時間其互ニ爲ス所ノ
贈遺

夫婦結縁ノ時間其互ニ爲ス所ノ贈遺ハ之ヲ廢
棄スルヲ得可キ者トシ贈遺者ハ常ニ意ヲ變シ
テ其贈遺物ヲ取戻スヲ得可シ而シテ此贈遺
ヲ廢棄スルニ付テハ如何ナル法式ヲモ行フニ
及ハス

夫婦雙方ノ間ニ隨意ニ贈遺ト爲
スヲ得可キ財産ノ定方

夫婦中ノ一方ヨリ他ノ一方ニ爲スヲ得可キ贈
遺ノ多少ニ付テハ別段ノ規則アリ

夫婦雙方ノ者ニ尊屬ノ親アル時ハ夫婦互ニ贈
遺ト爲スヲ得可キ財産ノ定量ハ其財産ノ半ハ
又ハ其四分三トシ且ツ尊屬ノ親ノ爲メ保有ス
可キ財産ノ半ハ又ハ四分一ノ入額所得ノ權ハ
亦夫婦互ニ之ヲ贈遺スルヲ得可シ

又夫婦雙方ノ者ニ子アル時ハ夫婦ニ屬スル財

產四分一ノ所有ノ權ト更ニ四分一ノ入額所得
ノ權トヲ夫婦互ニ贈遺スルヲ得可ク又ハ財產
ノ半バノ入額所得ノ權ノミヲ夫婦互ニ贈遺ス
ルヲ得可シ

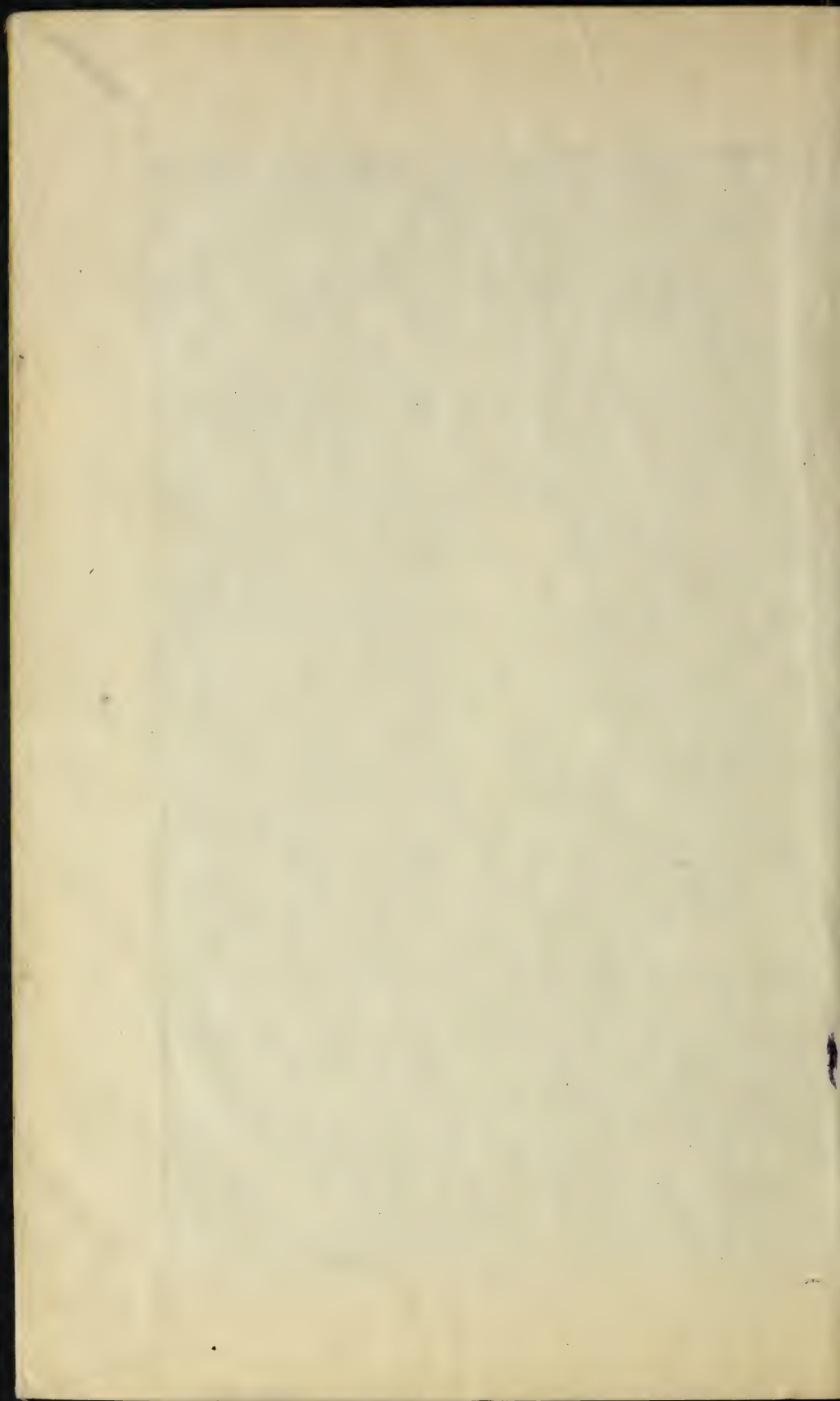
若シ又前婚ノ子アル時ハ后婚ノ夫又ハ婦ニ贈
與スルヲ得可キ財產ノ定量ハ其子一人ノ保有
ス可キ量ニ過ク可カラス又其子三人以下ナル
時ハ常ニ財產四分一ヲ以テ贈與スルヲ得可キ
定量トス

佛國政典第八卷 終

昭和26年
12月11日
12月27日

第

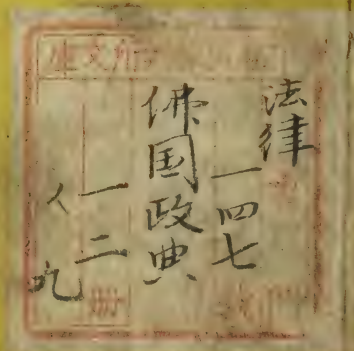
四
七

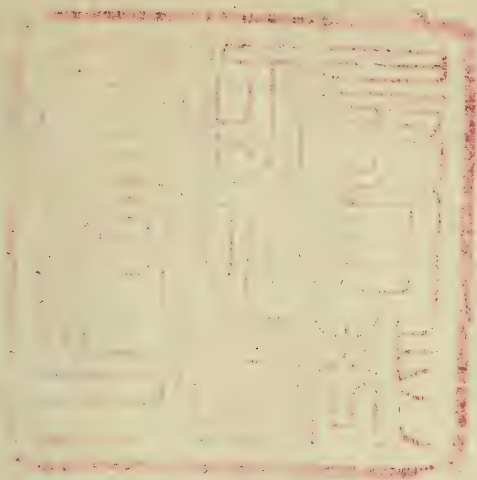


佛國政典

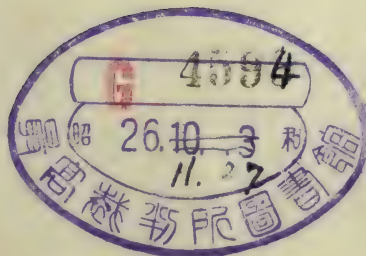
九

正
下和而第百五拾五元
下清日第四十二元





University of Illinois
Library at Urbana-
Champaign
IAS - Oak Street



佛國政典第九卷

第四章 義務及ヒ契約ノ種類

第一款 義務及ヒ契約ノ總論

ナボレオ
民法書

第三篇第三卷及ヒ第四卷從第
千一百一條至第一千三百八十六條

義務ノ義意及ヒ其本源

義務トハ吾人ヲシテ人ニ對シ或物ヲ與ヘシメ
又ハ或事ヲ爲サシメ又ハ或事ヲ爲サ、ラシム
ル所ノ法律上ノ義務ヲ云フ而シテ其義務ノ爲メ
己レニ益ヲ得可キ者ヲ名ケテ義務ヲ得可キ者

ト云ヒ其義務ヲ守ル可キ者ヲ名ケテ義務ヲ行
フ可キ者ト云フ蓋シ義務ハ其由テ來ル所種々
ナリト雖凡畢竟左ニ記ル所ノ五種ノ本源ヨ
リ生ス

第一 契約

第二

「カジ、コントラ」別ニ契約ヲ結フ
事ナク人ノ隨意

ニ爲シタル事ヨリ義
務ヲ生スル事ヲ云フ

第三

犯罪
一デリ

第四

過失
リカジ、デ

第五

法律

右義務ノ本源中其最大要ナル者ヲ契約トス
故ニ先シ左ニ之ヲ掲述ス可シ

契約及ニ契約ノ義意

約束シコ
ヲンバントハ二人或ハ數人相合シテ互ニ
公正ノ事ヲ爲サンカ爲メ相同意スルヲ云フ而
シテ若シ其約束ヲ結フノ意旨或ハ義務ヲ生シ
或ハ所有ノ權ヲ轉移スル等ニ在ル時ハ更ニ之
ヲ名ケテ契約コ
ントト云フナリ蓋シ契約ノ由
テ起ル所ハ雙方心意ノ合同卽チ雙方ノ承諾ニ
在リ

契約ノ種類

契約ニ許多ノ種類アリ若シ其契約ニ由テ雙方ノ義務ヲ生スル時ハ之ヲ名ケテ「雙務ノ契約」ト云ヒ其一方ノミノ義務ヲ生スル時ハ之ヲ名ケテ「片務ノ契約」ト云フ蓋シ其雙務ノ契約トハ賣買是レナリ何トナレハ賣主買主共ニ義務ヲ有スレハナリ又片務ノ契約トハ無賃ノ貸借是ナリ何トナレハ借主ノミ義務ヲ有スルヲ以テノリ又恩惠ノ契約及ヒ要償ノ契約アリ恩惠ノ契約

トハ一方ノ者ヨリ他ノ一方ノ者ニ償ヲ得スシ
テ利益ヲ得セシムル契約ヲ云フ譬ハ無利足
ノ金銀貸借是ナリ又要償ノ契約トハ雙方相互
ノ資益ノ爲メニ其契約ヲ結ヒシ者ニシテ雙方
互ニ或物ヲ出シ又之ニ代ヘテ互ニ或物ヲ受ク
ル契約ヲ云フ譬ハ賣買ノ如キ即チ其一種ナ
リ

右ノ外互易ノ契約及ヒ偶生ノ事ニ管スル契約
アリ互易ノ契約トハ契約ヲ結ヒタル日ニ於テ
雙方ノ者ノ地位既ニ定マリタル者ヲ云ヒ偶生

ノ事ニ管スル契約トハ其契約ヨリ生スル所ノ
 雙方ノ者ノ損得將來ノ事柄ニ管係スル者ヲ云
 フ故ニ人アリ若シ畢生間ノ年金ヲ得ル爲ノ母
 銀ヲ貸出スニ於テ其義務ヲ得可キ者即チ債主長壽
 ナル時ハ其義務ヲ行フ可キ者即チ債主損失ト
 ナル可ク若シ債主其契約ヲ結ヒタルヨリ僅カ
 ニ數日ニシテ死去スル時ハ其負債者其母銀ヲ
 已レニ有シ得ルノミナラス其年金ヲ出スノ高
 僅々ナルヲ以テ大ニ之レカ利ヲ得ルヲアルカ
 如シ

總テ契約ノ效

凡テ契約ハ次ニ論スル如ク其效ヲ生セシム可
キ條件ヲ具備シテ且ツ法律又ハ國ノ風儀ニ妨
害アルニアラサレハ之ヲ約シタル雙方ノ間ニ
於テ法律ト同シキ力アリ故ニ契約ヲ承諾シタ
ル者ハ誠實ニ之ヲ執行フ可ク又契約ヲ執行ヒ
及ヒ其契約書ノ義意ヲ解スルニハ當ニ其契約
書面ニ用ヒタル文辭ノミニ據ル可カラズ雙方
ノ真心如何ヲ料量ス可シ凡テ契約ヲ正實完全
ニ執行ヒ及ヒ人ノ一旦述ヘタル言詞ヲ詳密ニ

遵行スルハ人間交際ノ事務ヲ處スルニ最肝要
ノ一事ニシテ苟モ此信義ナクンハ果シテ人ノ
信任ヲ得ル事難カル可シ是ヲ以テ商賈ハ決シ
テ己レカ言ヲ食マス決シテ其約ヲ違ヘサル事
肝要ニシテ若シ之ヲ人ニ知ラシメスンハ約ヲ
結ヒ金ヲ借ント欲スルトモ容易ニ人ノ信任ヲ
得ルヲ能ハサル可シ

契約ノ效ヲ生セシムルニ必要ナ
ル條件

契約ノ效ヲ生セシムルニハ左ニ記ス所ノ四件

ヲ必要トス

第一 雙方ノ承諾

第二 契約ヲ爲ス者ニ其契約ヲ結ヒ得

可キ權アル事

第三 契約ノ目的タル定マリシ事物

第四 法ニ適ヒタル原由

右四件ハ左ニ之ヲ畧記セントス

承諾及ヒ承諾ノ缺如

凡ソ錯誤、詭欺、暴行ヲ以テ爲シタル承諾ハ其效
アル者ト爲ス可カラス故ニ若シ契約ノ目的タ

ル品物ノ本質ヲ錯誤シタル時ハ其錯誤ヲ以テ
契約ヲ取消スノ原由ト爲ス可シ譬ヘハ爰ニ一
商人アリ正シキ黃金物トシテ賣ルニ誤テ鍍金
物ヲ以テスルキハ卽チ品物ノ本質ヲ錯誤シタ
ルヲ以テ其契約ヲ取消ス可シ
又契約ヲ結ハントスル人ヲ錯誤シタルト雖モ
其人ヲ以テ契約ノ目的トシタル時（譬ヘハ吾儕
有名ナル畫工ト信シ或畫工ニ畫額ヲ託ヘタル
ニ其畫工ハ誂ヘント思ヒシ所ノ畫工ニアラサ
ル時）ノ外ハ其契約ヲ取消ス可カラス

又暴行トハ契約ヲ結ヒタル者ヲシテ自己ノ身體及ヒ財産或ハ配偶者ノ身體及ヒ財産或ハ尊屬親及ヒ卑屬親ノ身體及ヒ財産ニ許多ノ禍害ヲ蒙テシム可キ恐レヲ生セシムルノ所行ヲ總稱スルナリ

詭欺トハ契約ヲ取結ハントスル一方ノ者ヨリ他ノ一方ノ者ヲシテ其契約ヲ結ハシメンカ爲メニ用フル所ノ詭計ヲ云フ

暴行ノ故ヲ以テ契約ヲ取消スト詭欺ノ故ヲ以テ契約ヲ取消ストハ著シキ差異アリテ暴行ニ

因テ爲シタル契約ハ其暴行ヲ爲シタル者ノ如
何ニ管セス其契約ヲ取消サント訴ヘ得可シト
雖モ詭欺ニ因テ爲シタル契約ハ其契約ヲ結ヒ
タル一方ノ者其詭計ヲ行ヒタル時ノ外之ヲ取
消サント訴フルヲ得ス

契約ヲ爲ス者ニ其契約ヲ結ヒ得
可キ權アル事

契約ヲシテ其效ヲ生セシムルニハ其契約ヲ結
フ者ニ之ヲ結ヒ得可キ權アルヲ必要トス
或種ノ契約ニ因リテハ特ニ之ヲ結ヒ得可カラ

サル者アリト雖氏茲ニ姑ク之ヲ舍キノ先ノ
般ニ契約ノ結ヒ得可カラサル者ヲ揭示スルニ
我夫又ハ裁判所ヨリノ許可ヲ得サル婦、幼者及
ヒ治産ノ禁ヲ受ケシ者等ノ如キハ皆一般ニ契
約ヲ結ヒ得可キ權ナキ者トス蓋シ法律上ニ此
ノ如ク契約ヲ結ヒ得可カラサル者ヲ特定シタ
ルハ自カラ權利ヲ行ヒ得可カラサル者ヲ保護
スルノ意ニ基ク所ニ在リテ此等ノ者ノ結ヒタ
ル契約ハ此等ノ者ニ限リテ之ヲ取消サント求
ムルヲ得可ク而メ此等ノ者ト契約ヲ結ヒタル

者ハ之ヲ取消サント求ムルヲ得可カラス是レ
契約ハ彼ノ自カラ權利ヲ行ヒ得可カラサル者
ノ資益ニ准シテ或ハ之ヲ取消シ或ハ之ヲ保存
ス可シト雖此等ノ者ト契約セシ一方ノ者ハ
必ス其契約ヲ行フ可キノ義務アレハナリ

契約ノ目的及ヒ其原由

契約ハ之ヲ取結ヒタル者ノ一方ヨリ他ノ一方
ニ對シ或物ヲ與ヘ又ハ或事ヲ爲シ又ハ或事ヲ
爲リ、ルヲ以テ目的ト爲ス而シテ契約ノ目的ヲ
シ、其效ヲ生ヒシムル爲メニハ國ノ法律ニ背

キ又ハ國ノ風儀ヲ害スルノキヲ必要トス而
シテ契約ノ目的ハ將來ノ事物ニ管スルヲ得可
シト雖モ契約ヲ結ビタル一方ヲシテ不注意ノ
契約ヲ爲スヲナカラシムル爲メ又ハ契約ノ目
的ノ爲ス事物ノ實價如何ヲ量料シ能ハスシテ
契約ヲ爲スヲナカラシムル爲メ法律上ニ於テ
未タ相續ノ初マラサル遺物ニ付キ契約ヲ結ノ
コヲ禁シタリ
契約ノ原由トハ契約ヲ結ビタル一方ノ者其義
務ヲ負フニ付キ定ムル所ノ事柄ニシテ即チ其

一方ノ者契約ヲ結フニ付キ其達セント欲スル
所ノ目的ヲ云フ而シテ全ク其原由ナキ義務又
ハ法律ニ適セサル原由ヨリ生スル義務ハ全ク
其効ナカル可シ

損失ノ償還

義務ヲ行ハント約シタル者

即チ義務ヲ行フ可キ者

義務ヲ

行ハサル歟若クハ之ヲ行フ事ヲ遅延シタル時

ハ則チ其償ヲ爲ス可シ故ニ義務ヲ行フ可キ者

義務ヲ行ハサル歟又ハ之ヲ行フ事ヲ遅延シタ

ルニ由リ義務ヲ得可キ者ニ負ハセタル損失ノ

償ヲ名ケテ損失ノ償還ト云フ
又損失ノ償ハ義務ヲ行ハサル事全ク義務ヲ行
フ可キ者ノ所爲ニ係ル時ノミ之ヲ爲ス可ク抗
拒ス可カラサルカノ爲メ已ムヲ得ス義務ヲ行
ハサル時ハ損失ノ償ヲ爲スニ及ハス
其他損失ノ償還ヲ爲スニハ義務ヲ行フ可キ者
已レカ義務ヲ行フ事ヲ怠リ義務ヲ得可キ者
リ催促書又ハ之ニ等シキ書狀ヲ受ケテ猶己レ
カ義務ヲ行フ事ヲ怠リタル時ニ在リトス
損失償還ノ金高ハ預メ約束ヲ以テ之ヲ極ニ置

クヲ得可シ然ル時ハ所謂過代ノ約束ナル者ナ
 リ又此約束ヲ爲シタル時ニ於テハ裁判役此約
 束ニ由テ取極メタル金高ヲ増ス可カラス又義
 務中ノ一部ヲ既ニ執行フタル時ノ外ハ其金高
 ヲ減ス可カラス

右過代ノ約束ヲ爲サル時ハ裁判所ヨリ其償
 金ノ高ヲ定ム蓋シ之ヲ定ムルハ義務ヲ得可キ
 者ノ受タル損失ト其者ノ失フタル利益トノ二
 者ニ基ク者トス

又金銀貸借ノ義務ニ就キ負債者即チ返済ス可

キ義務ヲ有スル者ノ返済ヲ遅延シタル時ハ法律上ニテ定ムル所ノ利息ヲ拂フノ外決シテ其他ノ罰ヲ受クルヲナシ蓋シ其利息ハ民法上ノ事ニ付テハ百ニ六ト定ム

他人ノ物ヲ保有シ置ク事ニ就キ

擔當ス可キ義務

他人ノ物ヲ保有スル者ハ其物ヲ保全スルニ勉メ恰モ自カラ之ヲ所有スルカ如キ懇切ナル注意ヲ爲スヲ肝要ナリ若シ否ラス己カ過失ニ由

リテ其物ヲ破損スルニ於テハ其償ヲ爲サ、ル
ヲ得ス蓋シ其他ノ擔當ス可キ義務ハ契約ノ種
類ニ由リテ輕重アル可シ

義務ノ種類及ヒ未必ノ條件ニ管
スル契約ノ義務

契約ノ義務ノ執行來時ノ未定ノ條件ニ管スル
者ヲ未必ノ條件ニ管スル義務トシ又其未必ノ
條件義務ノ執行ヲ停止スル者アリ例ヘハ余或
人ニ對シ某船亞米利加ヨリ到着ヒハ一千ブラ
ンクヲ拂ハン事ヲ約セシ片ハ乃チ余ハ其執行

ヲ停止ス可キ未必ノ條件ニ管セル義務ヲ負フ
タル者トス是レ即チ船若シ到着スル時ハ一千
フランクヲ拂フ可シト雖此船若シ到着セサル
時ハ余カ負フタル義務初ノヨリ全ク存在セサ
ルカ如クナレハナリ

又前以テ約シタル事ノ現ニ生スル時解除ス可
キ義務ヲ名ケテ未必ノ條件ニ因リ解除ス可キ
義務ト云フ例ヘハ余或日限内ニ代金ヲ返却ス
ルニ於テハ予カ賣却セシ物ヲ買戻シ得可キ權
ヲ保有シテ或物ヲ賣ル片ハ即チ之ヲ解除ス可

キ未必ノ條件ニ管スル賣買ノ契約トス何トナ
 レハ再ヒ買戻ノ權ヲ行フニ由リテ現ニ其條件
 ノ如ク成リタル時ハ初ヨリ全ク賣主ノ義務ナ
 キ者ト爲シ若シ然ラサレハ賣買ノ契約ヲ確定
 ノ者ト爲ス可キニ因レハナリ又總テ雙務ノ義
 務ニ於テ若シ其一方ノ者約束ヲ行ハサル時ハ
 他ノ一方ノ者ヨリ契約ノ義務ヲ解除セント求
 ムルヲ得可ク例ハ買主若シ代金ヲ拂ハサル
 時ハ賣主ヨリ破談セント求ハルヲ得可キカ如
 シ

右ノ如ク義務ヲ解除スルハ當然之ヲ爲ス可
カラス之ヲ裁判所ニ訴ヘ其裁判言渡ヲ得ルヲ
要トス但シ裁判所ニ於テハ其義務ヲ行フ可キ
者ニ猶豫ヲ許ルシ其期限間ニ義務ヲ行ハシム
ルヲ得可シ

執行ノ期限アル義務

期限トハ其間義務ノ執行ヲ延引スルヲ得可キ
時限ヲ云フ故ニ余五年内ニ返済ス可キ約束ニ
テ一萬フラン[「]クノ金ヲ借受ル時ハ是レ所謂執
行ノ期限アル義務ニシテ其期限ノ終リニ至ル

三九

三九

迄ハ債主義務ヲ可キ者得ヨリ催促ヲ爲スヲ得ス但シ

負債者義務ヲ可キ者若シ分散スル歟又ハ曾テ約シ

タル保証ノ高ヲ減スルヲアルニ於テハ其期限

ヲ約シタルノ益ヲ得ルヲ能ハスト雖モ若シ不

幸ノ有様ニ由リテ負債者其債ヲ返辦スルヲ

得サル時ハ裁判所ヨリ負債者ニ猶豫ノ時間ヲ

許ルシテ其負債ヲ返辦セシムルヲ得可シ

連帶シタル義務

連帶シタル義務トハ其義務ヲ行フ可キ者數人

アリテ義務ヲ得可キ者ヨリ此各人中誰彼ノ別

ナク其義務ヲ得シト求ムルヲ得可キ義務ヲ云
フ故ニ其數人中ノ一人ヨリ義務ノ全部ヲ行フ
時ハ他ノ各人ヲシテ皆其義務ヲ免レシムルヲ
得可シ譬ヘハ「ピエール」及ヒ「ボール」ノ二人互ニ
連帶スル事ナクシテ「ジャック」ヨリ一千フラン
クノ金ヲ借受ル時ハ「ジャック」ヨリ「ピエール」ニ
五百フランク「ボール」ニ五百フランクノ高ヲ得
シト催促シ得可キニ過キス然レモ若シ「ピエ
ール」ト「ボール」トノ二人相連帶シタル負債者タル
時ハ「ジャック」ヨリ「ピエール」ニ千フランクヲ求

ムルトモボールニ千フランクヲ求ムルトモ勝
手タル可シ而メ右二名中ノ一人ニテ千フラン
クヲ返済スル片ハジャックハズレカ爲メ義發
ノ全部ヲ得タルモノトス

右連帶ノ事ハ判然之ヲ契約スルヲ必要トスト
雖氏時ニ因リテハ法律上ニテ之ヲ定ムルヲア
リ卽チ爲替手形又ハ金銀拂方證券等ヲ拂フ可
キ者ハ此等ノ証書ヲ所持スル者ニ對シテハ連
帶シタル義發ヲ有スルモノトス蓋シ連帶シタ
ル負債者中ノ一人ヨリ負債ノ全部ヲ返済シタ

ル時ハ其者ヨリ他ノ連帶シタル負債者ナシテ
其銘々擔當ス可キ部分ヲ已レニ償ハシム可キ
訴ヲ爲スコトヲ得可シ

義務ノ消散スル事及ヒ義務ヲ消
散スル種々ノ法方

義務ヲ消散スルニ種々ノ法方アリ即チ左ニ記
列スルカ如シ

第一 義務ヲ盡ス事

返済一名義務ノ實行是ナリ義務ノ實行ハ義
務ヲ消除スルノ法方中最モ重大ノ者タレハ

後文ニ之ヲ再説セントス

第二 義務ヲ更改スル事

義務ヲ更改スル事トハ負債者或ハ債主或ハ
義務ノ目的ノ更改シテ新ナル義務舊キ義務
ニ代ハルヲ云フ

第三

義務ヲ得可キ者

債主ノ意ヲ以テ其

義務ヲ放免スル事

義務ヲ得可キ權利アル者ノ意ヲ以テ己カ得
可キ義務ヲ抛棄スル事ニシテ其義務ヲ行フ
可キ者負債者ノ放免ヲ得タル証據ハ義務ヲ得

可キ者ヨリ義務ヲ行フ可キ者ニ負債ノ証書
ヲ返シ與フルニ在リトス

第四 二箇ノ義務ヲ相殺スル事

二人相互ニ義務ヲ行フ可ク且ツ義務ヲ得可
キ事ヨリ生スル所ニシテ譬ハ茲ニ^レエ^ル
^ル及ヒ^レボ^ルノ二人アリ^レエ^ルハ^レボ^ル
ニ一十^レフランクノ金ヲ返ス可キ義務アルニ
若シ又^レボ^ルヨリ^レエ^ルニ對シ行フ可キ
義務ノ生シ來ル時ハ兩人互ニ其義務ヲ相殺
スルヲ得可キカ如シ

第五 權利ト義務ト相混同スル事

一人ニシテ義務ヲ得可キ者ト義務ヲ行フ可
キ者トノ二箇ノ分限ヲ兼ルトキハ之ヲ權利
ト義務トノ混同ト云フ譬ヘハ義務ヲ行フ可
キ者義務ヲ得可キ者ノ遺物相續人トナリ又
ハ義務ヲ得可キ者義務ヲ行フ可キ者ノ遺物
相續人トナル時ノ如シ

第六 義務ヲ解除ス可キ未必ノ條件ノ
生スル事

義務ヲ解除ス可キ未必ノ條件現ニ生シ來リ

之ニ由テ義務ヲ廢スルヲ云フ

第七 期滿免除ノ權

一定ノ期限間即チ大抵三十年間ニ義務ヲ得
可キ者ヨリ義務ノ執行ヲ求メス催促ヲ爲サ
、ル時ハ義務ヲ行フ可キ者期滿免除ノ權ニ
由リテ義務ヲ免ル、コヲ得可シ

第八 義務ヲ取消ス事

裁判言渡ニ由リテ時ニ義務ヲ取消スニ在リ

第九 期限ニ達スル事

特定ノ期限間義務ヲ契約シタル時其期ノ終

リニ至リタルニ在リ

第十 引渡ス可キ物ノ滅盡スル事

義務ヲ行フ可キ者義務ヲ得可キ者ヨリ未タ
其物ヲ引渡ス可キ催促ヲ受ケサル以前ニ意
外ノ事ニ因リ其物ノ滅盡シタルニ在リ故ニ
若シ義務ヲ行フ可キ者ノ過失ニ因リテ物ヲ
滅盡スルカ又ハ義務ヲ得可キ者ヨリ其物ヲ
引渡ス可キ催促ヲ受ケタル後ニ其物ノ滅盡
シタル時ハ義務ヲ行フ可キ者ヨリ義務ヲ得
可キ者ニ損失ノ償還ヲ爲ス可キトス

義務ヲ盡ス事

義務ハ之ヲ得可キ者又ハ其者ニ代リ義務ノ執
行ヲ受ク可キ道理アル者ニ對シテ之ヲ盡クス
可シ又何人ニ限ラス義務ヲ行フ可キ者ニ代リ
テ義務ヲ盡ス事ヲ得可ク而メ其本人ニ代リテ
義務ヲ盡クシタル者ハ亦債主ニ代リテ其權利
ヲ受繼クヲ得可シ但シ然ルルハ之ヲ義務ヲ行
フ可キ本人ニ代リテ其義務ヲ盡クシタルト云
フ

負債者ハ強テ其債主ヲシテ己レヲ借受ケタル

物品ヨリ外ノ物ヲ受取ラシムルヲ得ス且強テ
一部分ノ償還ヲ兼諾セシムルヲ得ス而メ其債
主ハ貨幣ヲ以テ返辦アラント求メ得可ク己
レカ都合ニ寄リ銀行ノ証券ヲ以テ返辦ヲ受ク
ルヲ拒ミ得可シ何トナレハ銀行ノ証券ハ何
程確信ナリト雖_ニ強テ之ヲ通用セシムルヲ
得サレハナリ又銅貨幣ハ五フランク貨幣ノ欠
數卽チ四フランク九十五サント迄ニ非レ
ハ拂ヒニ用フ可カラス又外國ノ貨幣ヲ以テ拂
フ可キ約定ヲ爲シタル負債ハ其約束通りノ貨

幣ヲ以テ返辦ヲ爲ス可ク若シ否サルモ佛國ノ
貨幣ヲ外國ノ貨幣ニ兩替シ得可キ丈ケノ兩替
部割ヲ添ヘ佛國ノ貨幣ヲ以テ債主ニ返辦スル
ヲ要ス

義務ヲ得可キ者其得可キ物品ノ受取ルヲ肯
セサル時ハ義務ヲ行フ可キ者一種ノ手續ヲ行
フ可シ蓋シ其手續ハ負債者ノ返辦ス可キ金高
ヲ先ツ債主ニ現ニ示ス事ニシテ之ヲ名ケテオ
ツクル、レ、ルト云フ先ツ之ヲ行フニハ負債者
古金高ヲ使吏ニ渡シ使吏ノ取次ニテ其金額ヲ

債主ニ示スナリ然レ此債主若シ之ヲ受取ルヲ
肯ヒサル時ハ此金高ヲ別段ノ役所ニ預ケ雙
方立會ノ調印ヲ爲シ置ク可シ此役所ヲ名ケテ
預リ役所ト云フ而シテ其役所ノ掛ニハ州ニ於
テハ大司計及ヒ一箇ノ租税受取役之ニ任ス

約束ナクシテ生スル義務

以上契約及ヒ契約ヨリ生スル義務ヲ説述シタ
ルニ由リ是ヨリ別種ノ義務即チ之ヲ行フ可キ
者ト之ヲ得可キ者トノ間ニ約ヒスシテ生スル
義務ヲ説了ヒントス

別種ノ義務ハカジ、コントラ^リ犯罪^リ過失^{シカ}
法律ヨリ生シカジ、コントラ^リトハ人ノ隨^テ
意ニ爲シ且ツ法ニ適シタル所爲ニシテ片務ノ
義務^ノ即チ一方ノ者^ノヲ生スル者ト雙務ノ義務^チ即
雙方相互^ノヲ生スル者トノ二様アリ而メ此契約
ノ至要ナル適例ハ他人ノ事務ヲ差配スル事及
ヒ己レノ盡クスニ及ハサル義務ヲ盡ス事ノ二
者ニ在リトス又犯罪ト過失トハ何レモ法ニ適
セサル事ニシテ他人ニ損害ヲ加フル事ヲ云フ
又直ニ法律ヨリ生スル義務トハ譬ヘハ後見人

ノ己レニ委子ラレタル職務ヲ否ム事能ハサル
義務又ハ相隣接シタル二箇ノ土地ノ間ニアル
雙方持ノ塹壁境界ニ拘ハリタル義務等ノ如キ
ヲ云フ

「カジ、コントラー、他人ノ事務ヲ差
配スル事及ヒ己レノ盡クスニ及
ハサル義務ヲ盡ス事

上ニ掲述シタル「カジ、コントラー」中他人ノ事務
ヲ差配スル事ト己レノ盡クスニ及ハサル義務
ヲ盡ス事トノ二箇條ヲ左ニ細解セントス

例へハ爰ニ一人アリ己レカ隨意ニテ他人ニ代
リテ事務ヲ差配スル時ハ卽チ之ヲ他人ノ事務
ヲ差配スルト云フ但シ名代ノ契約ト他人ノ事
務ヲ差配スル事トヲ混合ス可カラズ名代ノ契
約トハ雙方相互ノ承諾ヲ以テ結ヒタル契約ニ
シテ譬へハ我ヨリ他人ニ我事務ヲ行ハシム事
ヲ委任スル時ハ其契約アリ雖ヒ他人ノ事務
ヲ差配スルトハ或人我ヨリノ委任ヲ受ケス又
我ノ承諾ナシト雖ヒ我事務ヲ有益ニ差配スル
時ニ於テハ卽チ他人ノ事務ヲ差配スルニ付テ

ノ「カジ、コンドラー」ナリトス

他人ノ事務ヲ差配スル事ニ付テハ雙務ノ義務ヲ生ス可ク故ニ他人ニ代テ事務ヲ差配スル者ハ極メテ懇切ニ注意スルヲ要シ又其差配スル事ノ終成シタル時ハ其事ニ付テノ算計ヲ爲ス可シ

又人ノ爲メ我事務ヲ差配セラレ之ガ爲メ資益ヲ蒙リタル者ハ己レカ名目ヲ以テ其差配人ノ契約シタル義務ヲ盡ス可ク且同人ノ爲シタル有益ナル費用ヲ償フ可シ

失錯ニ由テ已レニ擔當セサル義務ヲ行フタル
者ハ其渡シタル物件ヲ取戻シ得可ク不當ノ物
ヲ受取リタル者ハ之ヲ返ス可シ是亦カジ、コン
トラクトノ一例タリ

犯罪及ヒ過失

民法上ニテ人ニ損害ヲ加フ可キ故意ヲ以テ爲
シタル法ニ適セサル所行ヲ名ケテ犯罪ト云ヒ
又人ニ損害ヲ加フ可キ故意アラスシテ爲シタ
ル法ニ適セサル疎慮ノ所行ヲ名ケテ過失ト云

フ

故ニ民法上ニテハ故意ヲ以テ人ヲ毀傷スル所
業ヲ犯罪トシ故意ニ非ス疎慮ニ由リテ人ヲ毀
傷スルヲ過失トス此ニ箇ノ事ニ由テ人ニ損害
ヲ加ヘタル者ハ必ス其損害ヲ償フノ義務ヲ擔
當ス可シ若シ又數人相與シテ人ニ損害ヲ加フ
ル所行ヲ爲ヒシ時ハ此數人互ニ連合シテ其損
害ヲ償フノ義務ヲ負フ可シ

他人ノ罪科ヲ擔當スル事

人々己レカ人ニ加ヘタル損害ヲ償フ可キ責
任ヲミナラズ其人ニ由リテハ他人ノ加ヘタル

損害ヲ償フ可キ義務ヲ擔當ス可シ故ニ父及ヒ
母ハ已レト同居スル幼年ノ子ノ人ニ加ヘタル
損害ヲ償フ可ク家長及ヒ主宰ハ其僕婢及ヒ雇
夫ノ其職務上ノ事ニ付キ人ニ加ヘタル損害ヲ
償フ可シ

又授業師及ヒ工作者ハ其弟子及ヒ受業者ヲ監
督スル間ニ此等ノ者ノ人ニ加ヘタル損害ヲ償
フ可キ義務アリトス

但シ父母及ヒ授業師、工作者ハ幼年ノ子又ハ弟
子或ハ受業者ニ行届ク丈ケノ監督ヲ爲シタル

ト雖凡其損害ヲ加フ可キ所行ヲ制シ能ハサル
事ヲ証スル時ハ其義務ヲ免レ損害ノ償ヲ爲ス
ノ責ナカル可シ

其他獸類ノ所有者又ハ之ヲ使用スル者ハ其獸
類ノ人ニ加ヘタル損害ヲ償フ可ク家屋ノ所有
者ハ其修理ヲ怠リタル歟又ハ其建方ノ不良ナ
ルニ由リ其崩壞シテ人ニ加ヘタル損害ヲ償フ
可シ

諸證及ヒ證據ヲ立ツ可キ者

「ナポレオン」民法書ハ義務ノ卷ノ中ニ一章ヲ掲

ケテ義務ノ證ヲ載ス蓋シ此章ニ論スル所ハ獨
義務ニ管シタル者ニ非ス諸權利即チ財産所有
ノ權利、財産所有ノ權利ノ分割及ヒ義務ノ存在
又ハ解散等ノ證據ニ用フル者タリ又ハ
然ラハ先ツ證據ヲ立ツ可キ者ハ何人タリヤ是
レ即チ己レカ爲メニ權利ノ執行ヲ求ムル者即
チ原告人ニシテ此者ハ其權利ノ存在シタル證
ヲ立ツ可シ而シテ若シ被告人其權利ノ既ニ解散
シタル事ヲ辯スル片ハ其辯論ノ憑據ヲ立ルヲ
要ス譬ヘハ今我レ人ノ債主タルヲ言立ル片

ハ我カ貸金アル証據ヲ立テサル可カラズ若シ
其証據ヲ立サル時ハ其公事ニ負ク可シ而メ我
カ貸金アル証據ヲ立タル後ニ於テ若シ被告人
既ニ返金シ又ハ他ノ事ニ由テ既ニ義務ヲ盡ク
シタリト云フ時ハ被告人特ニ其證ヲ立テサル
ヲ得ス

証據ヲ立ル種々ノ法式、證書及ヒ
公正ノ證書

何事ニ限ラス許認シタル確實堅牢ナル証據ヲ
立ル法式ハ證書ヲ以テ證ヲ立ルニ在リトス而

シテ諸證書ハ公正ノ證書歟否レハ私ノ證書ノ
二様中タル可シ蓋シ公正ノ證書トハ相當ナル
規式ヲ以テ其掛役員ノ記シタル證書ヲ云ヒ譬
ヘハ身上證書及ヒ公証人ノ記シタル諸證書ノ
如キ卽チ公正ノ証書ニシテ公正ノ證書ハ之ヲ
記シタル日附ノ正カナル者トス

公正ノ證書ニ付キ故障ヲ述フルニハ質造訴訟
ト云ヘル一種ノ訴訟ノ手續ヲ行フヲ必要トス
又或種ノ公正ノ證書及ヒ公證人ノ認メタル證
書ハ恰モ裁判言渡書ノ如ク之ニ實際施行ノ文

詞ヲ附記シ且此證書ノミニ據テ書面ノ通り執
行ヲ事(譬ヘハ負債者ノ動産不動産ヲ差押ユル
事ノ如キ)ヲ爲シ得可キモノトス

私ノ證書

私ノ證書卽チ私ニ調印シタル證書ハ公正ノ證
書ト同様ノ物タルヲ得ス故ニ私ノ證書ハ其證
書ヲ以テ掛合正ヲ爲ス者ノ相手方ニテ已レカ
調印ニ紛レナキ旨ヲ兼知シタル時又若シ其相
手方ニテ也ヲ兼知セサレハ其證書ノ實否ヲ糾
シタル時ノ外也ヲ以テ証據ニ立ルヲ得ス

私ノ證書ハ決シテ其儘ニテ書面ノ通り行ヒ物
品ヲ差押ユル等ノ事ヲ爲スヲ得ス此等ノ事ヲ
爲スニハ裁判所ニ申立テ其裁判ヲ受クルヲ必
要トス又私ノ證書ハ之ヲ官ノ簿冊ニ記入スル
事、調印者雙方ノ中其一人ノ死去シタル事、私ノ
證書ノ文詞ヲ公正ノ證書ニ記入シタル事ノ外
他人ニ對シテ正シカナル日附アル者トセス
又私ノ證書ニ付テハ或ル法式ヲ行ハサル可カ
ラス譬ヘハ之ヲ以テ雙務ノ約束卽チ雙方相互
ノ義務ヲ生スル證書ト爲スニハ各自ノ權利ヲ

有スル者ノ人数ニ應シテ其證書ノ正本數通ヲ
作り其證書各通ニハ何レモ正本ノ數ヲ記載ス
可シ故ニ賣買ノ證書ニ付テハ一ハ賣主一ハ買
主ノ爲メニ都合ニ通ノ正本ヲ作り此二箇ノ正
本ニハ何レモ「フェーゾーブル」ニ通ニ作
ノ文字
ヲ記載ス可シ

金額ヲ拂フ可キ義務ヲ證明スル證券及ヒ約束
書ハ負債者全ク之ヲ手カラ認ムル歟或ハ「ボシ
渡シ」方ヲ約又ハ「アッポルウベ」兼諾ノ字ト畧
スルノ意
字ノ數語ヲ用ヒス悉皆本字ヲ以テ記シタル金

額 證書面ニ記載シ兼テ己レハ調印ヲ爲ス
ヲ要ス但シ商人、工作者、農夫、雇夫、家僕等、諸人
ハ此法式ヲ踏行ハスト雖モ只自己ノ調印ヲ爲
シタルヲ以テ其證書ヲ真正ノモノト爲スニ足
レリトス

證人ノ事

人ヲ以テ證ヲ立ソル事 証人ハ民法上ノ事ニ於
即チ人
テ大ニ限制アリテ法律上ニテ微ニ之ヲ許サ、
ル所ナリ是レ蓋シ此證據ハ確實明白ナラス且
ツ証人ノ賄賂ヲ受クルトアラント恐ル、立法

者ノ意ニ出ル所ナリ

訴訟ノ金高百五十「フ」ラシクニ越ヘサル時歟ス
ハ此金高ニ越ユルモノハ書面ニ據レル證據ノ
端緒アル時ニ非レハ証人ヲ以テ證ヲ立ツルヲ
許サス但シ書面ニ據レル證據ノ端緒トハ相手
方ノ記セシ證書ニシテ原告人ノ求ムル所ヲ真
實タル可シト思ハシムル者ヲ云フ亦原告人其
證據ト爲ス可キ書類ヲ已レニ得ル「」能ハサル
事情アルニ於テハ證人ヲ以テ證ヲ立ル「」ヲ許
ス可シ譬ヘハ犯罪又ハ過失等ノ事ニ於テハ皆

斯クノ如シ
商法上ノ事ニ於テハ民法上ノ事ニ比スレハ容
易ク証人ヲ以テ証ヲ立ツルヲ許シルソ商法裁
判所ノ意ニテ証人ヲ用フルヲ便宜ナリト思
フルハ何レノ場合ニ於テモ之ヲ用フルヲ得
可シ

民法上又ハ商法上ノ事ニ付キ詐偽ノ證ヲ述ヘ
タル者ハ二年以上五年以下ノ禁錮ヲ刑ニ處セ
ラル五十「フラン」ク以上二千「フラン」ク以下ノ罰
金ヲ課セラレ可ク且其犯罪人ハ公權私權族權

三ノ一
三ノ二
三ノ三
三ノ四
三ノ五
三ノ六
三ノ七
三ノ八
三ノ九
三ノ一〇
三ノ一一
三ノ一二
三ノ一三
三ノ一四
三ノ一五
三ノ一六
三ノ一七
三ノ一八
三ノ一九
三ノ二〇
三ノ二一
三ノ二二
三ノ二三
三ノ二四
三ノ二五
三ノ二六
三ノ二七
三ノ二八
三ノ二九
三ノ三〇
三ノ三一
三ノ三二
三ノ三三
三ノ三四
三ノ三五
三ノ三六
三ノ三七
三ノ三八
三ノ三九
三ノ四〇
三ノ四一
三ノ四二
三ノ四三
三ノ四四
三ノ四五
三ノ四六
三ノ四七
三ノ四八
三ノ四九
三ノ五〇
三ノ五一
三ノ五二
三ノ五三
三ノ五四
三ノ五五
三ノ五六
三ノ五七
三ノ五八
三ノ五九
三ノ六〇
三ノ六一
三ノ六二
三ノ六三
三ノ六四
三ノ六五
三ノ六六
三ノ六七
三ノ六八
三ノ六九
三ノ七〇
三ノ七一
三ノ七二
三ノ七三
三ノ七四
三ノ七五
三ノ七六
三ノ七七
三ノ七八
三ノ七九
三ノ八〇
三ノ八一
三ノ八二
三ノ八三
三ノ八四
三ノ八五
三ノ八六
三ノ八七
三ノ八八
三ノ八九
三ノ九〇
三ノ九一
三ノ九二
三ノ九三
三ノ九四
三ノ九五
三ノ九六
三ノ九七
三ノ九八
三ノ九九
三ノ一〇〇

ヲ剝奪シテ五年ニ過キサル時間政府ノ監察ヲ
受ケシム可シ
刑法第三百六十三條

量料ノ事及ヒ既ニ終審ノ裁判ヲ
經タル事ノ力

法律上ニテ定ムル所ニ依リ又ハ裁判役ノ判斷
ニ依リ既ニ知リ得タル事ヨリ未タ知リ得サル
事ニ推及ホンテ思料スル事ヲ量料ト云フ
裁判役ハ量料ノ必適明白符合スル時ニ於テハ
其量料ノミニ據テ判決スルヲ得可シ但シ其量
料ヲ以テ判決シ得可キハ證人ヲ以テ之ヲ證ス

ルヲ許シタル場合ノミニ限レリトス

又量料ニ因リテハ法律上ニテ定マリタルモノ
アリ之ヲ法律上ノ量料ト云フ此量料ヲ爲ス可
キ時ハ其資益ヲ受クル者敢テ其他ノ證據ヲ立
ルニ及ハサルモノトス故ニ特定ノ模様ニテ結
構シタル塀壁ハ雙方ニ屬スル分界ノ塀壁ナリ
ト看做スナリ是レ即チ法律上ノ量料ノ一例ト
ス

又法律上ノ量料ノ殊ニ大切ナル場合ハ既ニ終
審ノ裁判ヲ經タル事ノ力ニ在リトス蓋シ訴訟

ハ其終期アル可キカ故ニ確的ノ裁判ヲ經タル
事ハ眞正ト爲ス可クシテ其裁決ハ再ヒ之ヲ爭
論ス可カラサルナリ然レモ終審ノ裁判ヲ經タ
ル事ノ効ヲ生セシムルニハ第二回ノ訴訟ノ事
柄其第一回ニ處分ヲ受タル事柄ト同一タルヲ
要シ且ツ第二回ノ原告ハ第一回ノ原告第二回
ノ被告ハ第一回ノ被告タルヲ要ス蓋シ旣ニ終
審ノ裁判ヲ經タル事ノカハ完全ノ者ニ非ス何
トナレハ裁判言渡書ハ其訴管セシ原告被告
ノ間ニ非レハ其効アルヲナク若シ第一回ノ爭

訟ニ加ハラサル者ヨリ更ニ爭論ヲ起ス時ハ終
審ノ裁判ヲ以テ其者ノ權ニ抗ス可カラサルニ
因レハナリ

自認及ヒ誓ノ事

何事ニ限ラス裁判所ニ於テ爲シタル自認ハ之
ヲ爲シタル本人ノ義務ヲ負フタル確證ナリト
爲ス可シ然レモ此自認ヲ以テ己レニ益ヲ得ン
ト爲ス相手方ノ者ハ其自認ノ全部ヲ取用フ可
ク縱令其自認中ノ一部ニ己レノ爲メ不利ナル
コトアリモ其一部ヲ棄ツ可カラス

又證據ノ法式ニ誓ト云ヘルヲアリ誓トハ神明
ニ誓盟シテ裁判所ニ於テ事ノ違ハサルヲ証
明スルモノナレハ乃チ人ノ本心ヲ表スル嚴正
ノ所爲ト云フ可ク之ヲ爲スニハ決シテ輕忽ノ
所爲アル可カラス

誓ハ諸般ノ訴訟ニ於テ之ヲ用フルヲ得可シ蓋
シ相手方ニ誓ヲ爲スヲ求ムル者ハ其相手方ノ
眞實ノ意ニ之ヲ任カス可ク而シテ其誓ヲ求メ
ラル、者之ヲ爲ス時ハ其訴訟ニ勝ツヲ得可
ク其誓ヲ爲スヲ肯セサル時ハ其訴訟ニ負ク

可シ

原告被告ノ中其一方ヨリ他ノ一方ニ求ムル所
ノ誓ハ之ヲ召ケテ決極ノ誓ト云フ何トナレハ
訴訟ノ決極ハ此誓ヲ爲スト爲サ、ルトニ管ス
レハナリ

裁判役ハ原告又ハ被告ノ申分十分確正ナラス
ト雖凡頗ル正實ナル可シト思料スル時ハ其公
務ヲ以テ此等ノ者ニ對シ誓ヲ爲スヲ求ムルコ
ト得可シ

又民法上ノ事ニ付キ虚偽ノ誓ヲ爲ヒシ者ハ一

年以上五年以下ノ禁錮ト百フラン以上三千
フラン以下ノ罰金ヲ申渡サレ且ツ裁判所ヨ
リ公權、民權、族權ノ剝奪ノ刑ニ處セラレ又少ク
五年ヨリ少カラス十年ヨリ多カラサル時間
政府ノ監察ヲ受クルコトアル可シ
刑法三百六
十六條

第二款

婚姻ノ契約書

ナポレオン民法
書第三編第五卷

從第一千三百八十七條
至第一千五百八十一條

婚姻ノ契約書ニ於ケル總規則

婚姻ノ契約書ハ夫婦財産ノ共通ヲ規定スルモ

ノニシテ此契約書ハ身上證書掛リ役負ノ婚姻
ヲ行ハシムル前ニ公證人ノ面前ニ於テ認ム可
ク又此契約書ハ夫婦結縁ノ間決シテ之ヲ變改
ス可カラサルモノトス

婚姻契約書ヲ記サ、ル夫婦ハ法律上ニテ定メ
タル財産共通ノ規則ニ循フ可シ

財産ニ管シタル夫婦ノ權利ヲ規定スルハ夫
婦トナル者ノ意ニ依リテ定ム可ク甚々自由ナ
リトス然リト雖モ法律上ニ於テ人ノ屢々取用
フル規則ヲ集メ夫婦ノ財産ニ管スル四箇ノ法

則ヲ許認ス其法則ハ即チ左ノ如シ

第一 夫婦其財産ヲ共通スル法則

第二 嫁資分括ノ法則

第三 夫婦其財産ヲ分ツ法則

第四 夫婦財産ノ共通ヲ除去スル法則

夫婦其財産ヲ共通スル法則

夫婦其財産ヲ共通スル法則ノ本質ヲ考フルニ

此法則ニ於テハ夫一人ニ屬スル財産ト婦一人

ニ屬スル財産トノ外更ニ夫婦雙方ノ共通ス可

キ財産アルヲ要トス

夫婦共通ノ可キ財産トハ夫婦ノ諸入額及ヒ其
利得ト又時アリテハ婚姻儀式ノ日ニ於テ夫婦
ノ者ノ所有セシ動産トヲ云フ而シテ其共通ノ
財産ヲ支配スルノ權ハ夫ニ歸シ又夫ハ婦ノ身
ニ屬シタル財産ヲ處置スルノ權ヲ有ス但シ婦
ノ身ニ屬シタル財産ヲ支配スルノ權ハ更ニ制
限セララル、者ニシテ其權十分ナラス

斯ク夫ハ共通ノ財産ヲ支配スル權アリト雖モ
若シ夫ノ處置宜シカラス損耗スル等ノ事アレ
ハ婦ヨリ財産ヲ分タント求メ自成一己ノ財産

ハ自カラ支配スルヲ得可シ蓋シ夫婦其居ヲ分
ツ時ハ必ス亦其財産ヲ分ツ可シ

若シ夫婦ノ者ノ財産ヲ分ツニ因リ或ハ夫婦ノ
中其一人ノ死去シタルニ因リテ財産ノ共通ヲ
廢棄シタル時其共通財産ニ付テノ負債アレハ
婦又ハ其相續人共通ノ財産ヲ拋棄スルニ因リ
其負債ヲ償フ可キ義務ヲ免ル、ヲ得可シ

若シ又前文記スル所ニ反シテ夫婦共通ノ財産
ヨリ生シタル利益アル片ハ夫婦又ハ其相續人
ノ間ニ之ヲ分ツ可シ

嫁資分括ノ法則

嫁資トハ婦結縁間ノ費用ヲ助クル爲メ夫家ニ
持來ル物品ニシテ此嫁資ハ嫁資分括ノ法則ニ
循ヒ別段ナル條件ニ屬ス可キヲ以テ嫁資分括
ノ法則ト名クル一ノ法則ヲ設ケタリ

婚姻ノ契約書ニ別段ノ取極アルニアラサレハ
嫁資分括ノ法則ニ於テハ之ヲ賣拂フヲ得ス故
ニ嫁資ト爲シタル財産ハ夫又ハ婦互ニ連合シ
或ハ各自ニ之ヲ人ニ賣拂ヒ又ハ贈與スルヲ得
ス又婦ノ盡ス可キ義務ヲ執行フニ此嫁資ヲ以

テスルヲ得ス

夫ハ嫁資ノ財産ヲ支配シ其利益ヲ得ルノ權アルニ因リ嫁資ヨリ生スル都テノ入額并ニ利益ハ夫ニ屬ス可シ

又婦ノ持參セル財産中ニテ嫁資ト爲サル者ハ嫁資外ノ婦ノ財産ト名ケ此財産ノ支配及ヒ入額所得ハ婦躬カテ之ヲ爲スヲ得可シ然レモ夫ノ許可ナケレハ之ヲ賣拂ヒ又ハ贈與スル事ヲ爲ス可カラス

夫婦其財産ヲ分ツ法則

婦ハ夫ノ財産ヲ支配スル事不良ニシテ已レカ
財産ヲ耗盡ス可キ恐アル時ハ財産共通ノ法則
ヲ用ヒタルト嫁資分括ノ法則ヲ用ヒタルトヲ
問ハス其財産ヲ分ツヲ裁判所ニ訴フルヲ得
可シ

又夫婦ハ婚姻ノ契約書ヲ以テ初メヨリ財産ヲ
分ツ法則ヲ取用フルヲ得可シ

夫婦其財産ヲ分チタル時ハ各其一身ニ屬スル
財産ノ支配シ及ヒ之カ利益ヲ得ルヲ得可シ
但シ夫婦其財産ヲ分ツ中ハ法律又ハ婚姻ノ契

約書ヲ以テ定メタル割合ニ准シテ各々結縁間
ノ費用ヲ負擔ス可シ

財産ノ共通ヲ除去スル法則

夫其婦ノ一身ニ屬シタル財産ヲ支配シ及ヒ其
利益ヲ所得ト爲スヲ得可キ法則ヲ名ケテ財産
ノ共通ヲ除去スル法則ト云フ

此法則ニ據テハ夫其婦ノ財産ヨリ生スル入額
ヲ節約スル時ハ其入額ヲ己レノ所得ト爲スヲ
得可シ何トナレハ夫婦財産共通ノ法則ヲ用ヒ
サレハナリ

但シ右法則ニ於テハ婦ノ財産ヲ賣拂ヒ得可キ
カ故ニ嫁資分括ノ法則トハ自カラ差異アリ

第三款

賣買及ヒ交換ノ事

民法書第三

篇第六卷及ヒ第七卷從第一千五百八十二條至第七百七條

賣買ノ本性及ヒ其法式

賣買トハ或ル一人(即チ賣主)ヨリ他ノ一人(即チ

買主)ニ物件所有ノ權ヲ移シ又ハ移ス可キ責ヲ

受ケシメ買主ニ其價ヲ拂フ可キ責ヲ受ケシム

ル契約ヲ云フ

賣買ハ其證據ト爲スニ種々ノ法ヲ用フ可クシ

テ公正ノ證書又ハ私ノ證書ヲ以テ之ヲ證スル
コヲ得可シ

又賣買ハ義務ノ執行ヲ停止スル未必ノ條件又
ハ義務ヲ解除スル未必ノ條件ニ管スル約束ヲ
以テ之ヲ爲スコヲ得可ク又ハ試験シタル上之
ヲ爲スコヲ得可シ

酒、油及ヒ其他ノ果ヲ試ル可キ諸物ニ付テハ當
然此約束即チ買主ヨリ試ミヲ爲シ意ニ適ヲ以
シタル上賣買ス可キ約束ヲ云フ以テ賣買ヲ爲ス可シ

賣買ノ約束ハ賣買雙方ノ者其物品ト其價トヲ

協議シ互ニ承諾シタル片ハ既ニ賣買ヲ爲シタルト等シキ義務アリトス

所有ノ權ヲ移ス事

雙方ノ者其賣買ス可キ物品ト其價トヲ協議承諾シタル時ハ假令ヒ未タ其物品ヲ引渡サス又其價ヲ拂ハスト雖モ賣買契約ノ完全セシ者ニシテ賣買ニ付テノ總テノ效ヲ生ス可シ

家馬等ノ如キ定リタル物ノ賣買ニ於テハ直チニ買主ニ所有ノ權ヲ移ス可ク又不動産ノ賣買ニ於テハ特別ノ條件ニ因テ其充分ナル效ヲ生

セシム可シ依テ今其條件ヲ云フニ不動産賣買
ハ此不動産ノ在ル郡ノ不動産書入質支配所ノ
簿冊中ニ其契約書ノ全文ヲ登記セシム可ク若
シ此登記ヲ爲ササル時ハ不動産所有ノ權ヲ得
タル者ニ對シ決シテ其權ニ抗スルヲ得サルノ
ミナラス賣買契約ノ後ニ其所有ノ權ヲ得タル
者ニ對スルモ亦同シ千八百五十五年第三月三
十三日ノ法律

賣買ヲ爲シ得可キ人ノ事

本來法律上ニテ賣買ノ禁ヲ受ケサル者ハ何人

ニ限ラス賣買ヲ爲スヲ得可シ
又一般ニ賣買ヲ爲シ得可カラサル制禁ノ外ニ
亦人ニ因リテ賣買ヲ爲シ得可カラサル特別ノ
制禁アリ譬ヘハ夫婦ノ間ニ於テハ互ニ賣買ヲ
爲スヲ禁スルヲ以テ常ト爲スカ如シ是レ蓋シ
夫婦ハ表向賣買ヲ爲スノ姿ヲ示シテ其實ハ互
ニ贈遺ヲ爲スカ如キ弊ヲ防カンカ爲メナリ
其他後見人ハ幼者ニ屬スル財産ヲ買取ル可カ
ラス邑長ハ其邑ニ屬スル財産ヲ買取ル可カラ
ス又名代人ハ其賣拂ヲ任セラレタル財産ヲ買

取ル可カラス

賣買ヲ爲シ得可キ物品

凡ソ人ノ所有財産中ニ加フ可キ物品ハ法律ヲ以テ其賣拂ヲ特ニ禁シタル時ノ外之ヲ賣買スルヲ得可シ

又賣買スルヲ得サル物品ノ一例ヲ掲レハ國ノ共同財産中ニ在ルモノ、如キ是ナリ又政府、種々ノ物品ニ付キ專賣ノ特權ヲ有シ就中烟草、火藥ノ如キ即チ其一二ニシテ之ヲ賣拂ヒ又ハ賣ラシムルヲ得ルハ獨リ政府ニ在リテ平

民ハ決シテ之ヲ賣買スルヲ得ス

又當時尚存命ナル人ノ遺物相續ノ權ハ假令ヒ
本人ノ兼諾アリト雖モ賣リ拂フヲ得ス又他
人ニ屬スル物件ノ賣拂ヒハ其效ナシトス何ト
ナレハ已レニ屬セサル物件ヲ賣ル者ハ假令ヒ
之ヲ賣ルトモ其物品所有ノ權ヲ他人ニ移スト
能ハサレハナリ

賣主ノ義務及ヒ賣リタル物件ヲ
引渡ス事

賣主ハ買主ニ對シテ左ノ二箇ノ義務ヲ負擔ス

可シ

第一 物件ヲ引渡ス可キ義務

第二 買主ニ其物件ノ保有ヲ得セシム可
キ保證ノ義務

物件ノ引渡ハ買主ヲシテ其物ヲ保有セシムル
ニ在リテ若シ其物件ノ土地タル時ハ所有ノ權
ノ證書ヲ渡シ又建物タル時ハ其鍵ヲ渡ス可シ
又賣主ハ賣買ノ契約書ヲ以テ約シタル積量ヲ
渡サ、ル可カラス故ニ若シ物品ノ量ヲ定メテ
賣買ヲ爲シタルニ於テハ其賣主ハ假令ヒ些少

タリトモ其量ニ不足アル時ハ買主ヨリ受取リ
タル代價ヲ減シテ其量ノ不足ヲ算ス可シ
物品ノ量ヲ定メテ賣買ヲ爲サル時ハ縱令約
シタル積量ニ不足アリト雖モ其不足高賣リタ
ル物品惣高ノ價ノ二十分一以上ノ時ニアラサ
レハ其不足ヲ問フコナシ
積量ニ錯誤アルヲ以テ爲ス所ノ訴訟ハ賣買ノ
日ヨリ一年内ニ限ル可ク然ラサレハ其訴訟ヲ
爲スノ權ヲ失フ可シ

賣主其賣拂フタル物件ヲ買主ニ

對シテ保證スル事

賣主ハ買主ヲシテ其買ヒタル物件ヲ故障ナク
保有スルヲ保證ス可シ故ニ若シ買主其買フタ
ル物件ノ全部或ハ一部タリトモ之ヲ保有スル
ヲ得サル時ハ之ヲ稱シテ買主他人ヨリ訴訟
ヲ受ケ其買フタル物件ヲ奪ハル、ト云フ而
シテ買主ハ之カ爲ノ已ニ受ケタル損失ヲ賣主
ヨリ償ハシム可シ

又賣主ハ賣リタル物件ニ付キ目ニ觸レサル不
良ノ所ナキ旨ヲ買主ニ對シテ保證ス可シ

買主他人ヨリ訴訟ヲ受ケ其買入
レタル物件ヲ奪ハル、ヨリナキ旨
ヲ賣主ヨリ保證スル事

買主他人ヨリ訴訟ヲ受ケ其買入レタル物件ヲ
奪ハル、事トハ其買入レタル物件ノ全部又ハ
一部ヲ保有シ得サル事又ハ賣買契約ノ時ニ方
リ賣主ノ告知セサル土地ノ義務ヲ賣買ノ後ニ
發見スル事等ヲ云フニアリトス

若シ買主其買入レタル物件ノ全部ヲ保有スル
ヲ得サル時ハ賣主其代金ノ全額賣買契約書ノ

費用及ヒ其他一切買主ノ出シタル諸費用ヲ買主ニ算還シ且ツ其上買主ニ其損失ノ償ヲ爲ス可シ

若シ賣買ノ後買主他人ヨリ訴訟ヲ受ケ買入レタル物件ヲ奪ハレタル時其物件ノ價増シタルニ於テハ賣主ヨリ買主ニ其增高ヲ償フ可ク又買主ノ出シタル費用ヲ計算ス可シ此ニ因テ之ヲ見レハ買主他人ヨリ訴訟ヲ受ケ買入レタル物件ヲ奪ハル、ニ付キ賣主ノ擔當ス可キ義務ハ頗ル重大ノモノトス

賣主ハ買主其買入タル物品ノ一部ヲ奪ハレタ
レハ其一部ノ代金ヲ返ス可ク若シ其一部タリ
ト雖モ甚重要ニシテ賣買契約ノ時買主之ヲ奪
ハレシトテ預知セハ最初ヨリ其買レヲ爲スト
ナカル可キト思料ス可キニ於テハ買主其賣買
ノ契約ヲ取消セント求ルヲ得可シ
又賣拂フタル不動産ニ付キ人目ニ觸レサル土
地ノ義務アリ契約ノ時賣主ヨリ之ヲ買主ニ知
ラシメサル時ハ買主其時宜ニ由リ賣買契約ノ
取消ヲ求メ又ハ償金ヲ求ムルヲ得可シ

買主其買入タル物件ノ所有者ナリト述フル者
ヨリ訴ヘラレ又ハ此物件ニ付キ義務ヲ得可キ
權利アリト述フル者ヨリ訴ヘラル、時ハ其物
件ノ賣主ヲ裁判所ニ呼出サシム可シ若シ然ラ
サレハ賣主其買主ノ答辨不適當ニシテ之レカ
爲メ買主ノ其物件ヲ奪ハレタルヲ證スルニ
因リ賣主其保証ノ義務ヲ免ル、トヲ得可シ

賣主其賣リタル物ニ目ニ觸レサ
ル不良ノ所ナキ旨ヲ保證スル事
賣主ハ其賣リタル物ニ目ニ觸サル不良ノ所ア

リテ當然ノ用法ニ之ヲ供スルヲ能ハサルヲナ
キ旨又ハ買主ノ爲メ損失ヲ生セシム可キ不良
ノ所ナキ旨ヲ買主ニ對シテ保證ス可シ
然レモ買主ノ知り得可キ目ニ觸ル、不良ノ所
アルニ於テハ賣主其責ニ任スルヲナシ
賣主ノ其責ニ任ス可キ目ニ觸レサル不良ノ所
ヲ名ケテ賣買取消ノ訴ヲ受ク可キ不良ノ所ト
云フ

右不良ノ所ナキ旨ノ保證ハ諸種ノ賣買ニ爲ス
可ク不動産ノ賣買ニ於ケルモ同様之ヲ爲ス可

シ

買主ハ目ニ觸レサル不良ノ所アルヲ知リタル
時ハ賣買ノ取消又ハ代金ノ減シ方ヲ訴ヘ得可
ク又賣主ノ不良ナルヲ知リテ之ヲ賣拂ヒ其惡
意ノ露顯セシ時ニ於テハ買主其償金ヲ要スル
ノ權アリ然レモ此事ニ付テノ訴訟ハ成ル可キ
丈ケ遅延ナク之ヲ爲ス可シ

賣買取消ノ訴ヲ爲ス可キ不良ノ
所ニ管スル千八百三十八年五月
二十日ノ法律

馬、驢馬、「ミユレ」驢馬ト馬ト和合牛及ヒ羊ノ類

ニ管スル獸類ノ賣買中賣買取消ノ訴訟ヲ爲ス
可キ不良ノ所ニ管スル千八百三十八年五月二
十日ノ法律アリ今之ヲ掲クルニ此法律ハ此等
ノ賣買ヲ取消ス可キ不良ノ所ヲ特ニ限定シ其
代金ヲ減スル訴訟ヲ禁シテ唯買主ニ賣買契約
ノ取消ヲ訴フルヲ許ルシタリ

又此法律ハ訴訟ヲ爲シ得可キ期日ヲ定メ其期
日ハ通例九日間ト定ム而メ買主若シ此期日内
ニ訴訟ヲ爲シ得サル時ハ右ノ期限内ニ獸類ノ

アル地ノ治安裁判役ニ獸類ノ模様ヲ証明ス可
キ鑑定人ノ撰任アラントヲ申立ツ可シ

買主ノ義務及ビ代金ヲ拂フ事

買主ニ管スル至重ノ義務ハ代金ヲ拂フ事ニ在
リトス而シテ其代金ハ契約ノ時賣買雙方ニテ
取極ム可キ所ノ金高ニシテ此金高ハ賣買ノ爲
メ缺ク可カラサル本性ノ一トス

買主ハ取極メタル日ニ代金ヲ拂フ可ク若シ期
日ヲ定メサル時ハ物件引渡ノ日ニ代金ヲ拂フ
可シ

又買主ハ左ノ場合ニ於テハ賣買ノ日ヨリ其代
金ノ利銀ヲ拂フ可シ

第一 賣買ノ契約書ニ賣買ノ日ヨリ利銀
ヲ拂フ可キヲ載セタル時

第二 買入レタル物件ヨリ利益又ハ入額
ヲ生シタル時

其他ノ場合ニ於テ買主其代金ノ催促ヲ受ケタ
ル日ヨリ利銀ヲ出ス可シ
若シ買主其買入レタル物件ヲ保有スルニ付キ
故障ヲ受ケ或ハ故障ヲ受ク可キノ証アル時ハ

其代金ヲ拂フヲ遅延スルヲ得可シ

買主若シ期限ニ至テ代金ヲ拂ハサル時ハ賣主
其賣買契約ヲ取消サント裁判所ニ訴ヘ其裁斷
ヲ受ク可シ

買戻ヲ爲シ得可キ賣買契約

賣主定メタル期限内ニ代金ヲ返シテ賣拂フタ
ル物件ヲ取戻シ得可キ事ヲ買戻ノ權或ハ買戻
ヲ爲シ得可キ賣買契約ト云フ
買戻ヲ爲シ得可キ賣買契約ハ時トシテ賣主一
時已レニ金額ヲ得ル爲メ用フル方法ニシテ此

買戻シノ權ハ五年以上ノ期限之ヲ行フヲ約ス
ルヲ得ス又此期限内ニ賣主其賣拂フタル物件
ノ買戻ヲ爲サント欲スル時ハ元金、賣買ノ費用
買主ノ出辨シタル諸口ノ有益ナル費用ヲ買主
ニ返ス可シ

買戻シノ權ヲ行フ時ハ賣買ノ契約ヲ解除セシ
メ且ツ初メヨリ賣買ノ契約ヲ爲サルモノト
看做シ買主ノ承諾シテ已レニ得タル權ヲ消散
セシム可シ

若シ買戻シノ權利ヲ行フ爲メ預定シタル期日

内ニ賣主其權利ヲ行ハサル時ハ買主其買入タル物ノ確定ノ所有者トナル可シ

賣主ノ爲メ損失アル原由ヲ以テ

賣買ノ契約ヲ廢棄スル事ノ不動產ノ賣買

ニ限ル可シ

不動產ノ眞價ヨリ下直ナル一十二分ノ七以上ノ代價ニテ不動產ヲ賣タル者ハ損失ヲ受タル原由ヲ以テ賣買ノ契約ヲ取消サント訴ヘ得可シ

故ニ十二万フランクノ眞價アル不動產ヲ五万

「フ」シク以下ニ賣ル時ハ損失ノ故ヲ以テ賣買
ノ契約ヲ取消スヲ得可シ

蓋シ法律上ニテ此規則ヲ設ケタルハ萬一止ム
ヲ得サル事ノ爲メ不動産ヲ異常ノ廉價ニ賣拂
フ者ハ己レノ意ヲ枉ケテ其欲セサル所ニ曲從
シタルト看做シタルニ因ル所ナリ

但シ損失ノ故ヲ以テ賣買契約ノ取消シヲ爲ス
ヲ得可キハ不動産ノ賣買ニ限り且賣主ノミニ
限ル可ク買主ハ過高ノ價ニ不動産ヲ買入ル
ト雖モ賣主ノ詐計爲謀ニ依テ事ノ此ニ至ルニ

アラサレハ己レニ損失アルヲ以テ賣買契約ノ
取消ヲ訴フルノ權ナカル可シ
賣主ノ爲メ損失ノ證ハ評價人ノ申立ヲ以テ之
ヲ爲ス可シ蓋シ原告人十二分ノ七以上ノ損失
アルノ裁判ヲ得タル時ハ買主全價ノ十分一ヲ
減シタル上ニテ相當ノ增高ヲ賣主ニ拂フニ因
リ賣買ノ取消ニ遇フヲ免ル、ヲ得可シ
賣主ノ爲メ損失アルノ故ヲ以テ賣買ノ契約ヲ
取消スノ訴ハ賣買ノ日ヨリ二年内ニ之ヲ爲ス
可シ

又裁判所ノ命令ヲ以テ爲シタル賣拂ニ付テハ
損失アルノ故ヲ以テ其契約ヲ取消不可カラス

義務ヲ得可キノ權利及ヒ其他ノ

權利ヲ人ニ移ス事

義務ヲ得可キ權利ノ即チ債主ハ亦賣買ス可キモ

ノトス蓋シ此類ノ權利ヲ賣買スルハ多クハ之

ヲ名ケテ權利ノ轉移ト云フ

債主ノ權利ヲ移シタルノ効アラシメンニハ其

權利ヲ移シタルヲ負債者ニ報知ス可ク又ハ

其負債者公正ノ證書ヲ以テ明カニ其事ヲ承諾

シタルヲ要ス

負債者斯ク權利ノ移リタル由ノ報知ヲ受クル
前ニ初ノ債主ニ負債ヲ拂フタル時ハ法ニ適シ
テ其義務ノ放免ヲ得タルモノトス

債主ノ權利ヲ讓渡ス時ハ其讓受人ニ總テ是迄

ノ債主ノ有セシ權利ヲ移ス可シ

債主ノ權利ヲ讓ル者ハ其權利ノ現ニ存在スル

ヲノミテ保証ス可ク別段約束ヲ爲シタル時ノ

外ハ負債者ノ義務ヲ盡シ得可キ資産ノ有無ヲ

保証スルニ及ハス

又既ニ相續ノ始マリタル遺物財産ヲ得可キ權
利ハ亦之ヲ讓リ渡スヲ得可シ尤モ此場合ニ
於テハ其權利ヲ讓ル者ヨリ其讓受人ニ自カラ
遺物相續人タルヲノミヲ保証ス可シ

交換ノ事

交換ハ授受雙方ノ者互ニ此一物ト彼一物トヲ
交換スル契約ニシテ其賣買ト異ナル所以ハ賣
買ニ於テハ賣主或ル一物ヲ渡シ買主其代金ヲ
拂フニ在リトス然レモ交換スル所ノ物ニ箇一
リテ其價互ニ相同シカラサレハ其價ノ足ラザ

ル物ヲ渡ス方ヨリ金高ヲ以テ其不足ヲ補フ可
シ譬ヘハ茲ニ「ビエール」ナル者アリ己カ所有ノ
家屋ヲ「ボール」ナル者ノ所有タル家屋ト交換ス
ルニ「ビエール」ノ家屋ハ二万「フラン」クノ價アリ
「ボール」ノ家屋ハ一万五千「フラン」クノ價アル時
ハ「ボール」ヨリ五千「フラン」クノ金ヲ「ビエール」ニ
補ヒ拂フ可キカ如シ

交換ノ規則ハ總體賣買ノ規則ニ等シト雖凡間
々之ト異ナル所アレハ左ニ之ヲ記載ス
若シ交換ヲ爲ス一方ノ者既ニ他ノ一方ノ者ヨ

リ物件ヲ受取リタル後他ノ一方ノ者其物件ノ
所有者ニ非サルヲ知リテ之ヲ證スル時ハ自
己ノ物件ヲ渡スヲ拒ムヲ得可ク只其受取リ
タル物件ヲ返ス可シ
又交換セシ一方ノ者其受取リシ物件ヲ他人ヨ
リ訴訟ヲ受ケ奪ハレタル時ハ他ノ一方ノ者ニ
其損失ノ償ヲ求メ又ハ自己ノ物件ヲ取戻シ得
可シ

又交換ニ於テハ損失アルノ故ヲ以テ其契約ヲ
取消スヲ得可カラス

第四款

借貸

「ナポレオン」民法書第三篇第八卷從第七百八條至

第一千八百三十一條

借貸ノ解及ヒ其區別

借貸ニ二箇ノ種類アリ即チ左ノ如シ

第一 物件ノ借貸

第二 勞動又ハ工作ノ借貸

物件ノ借貸トハ甲ノ一人乙ノ一人ヨリ定期ノ

時間約束通リノ賃銀ヲ得テ物件ヲ貸與スル契

約ヲ云フ

故ニ家屋及ヒ家具ノ借貸ノ契約書ヲ借家證書

ト云ヒ上地ノ賃貸ノ契約書ヲ借地證書ト云フ
勞動又ハ工作ノ賃貸トハ甲ノ一人乙ノ一人ヨ
リ契約通りノ賃銀ヲ得テ定期間乙ノ一人ニ雇
入ラレ又ハ乙ノ一人ノ爲メ或事業ノ爲スヲ
己レニ任スル契約ヲ云フ

僕婢工丁ヲ雇フ契約水陸ノ運輸ヲ爲ス者トノ
契約工業ヲ成スヲ保任スル請負者トノ契約
ハ即チ勞動ノ賃貸契約ノ適例ナリトス
其他獸類ノ賃貸アリテ此賃貸ノ契約ハ獸類ノ
所有者ト其借主トノ間ニ互ニ利益ヲ分ツヲ以

テ其目的トス

物件ノ賃貸、家屋及ヒ土地ノ賃貸
ニ通シ用フ可キ規則及ヒ契約ノ
証據

何人ニ限ラス書面ニ據リ又ハ書面ナク口上ニ
テ賃貸ヲ爲スヲ得可シ

賃貸契約ノ書面アラサル時ハ之ヲ証スルニ付
キ故障ヲ生スルヲアル可シ故ニ私ノ証書又ハ
公正ノ証書ヲ記シテ其証ト爲スヲ良トス
若シ口上ヲ以テ爲シタル賃貸ノ契約ヲ未タ執

行ハサル前ニ一方ノ者ヨリ其契約ヲ爲シタル
ヲナシト述ル時ハ証人ヲ以テ其契約ヲ証スル
ヲ得ス只此事ニ施用ス可キ証據ノ一法ハ貸貸
契約ヲ爲シタルヲナシト述フル者ニ對シ誓ヲ
爲スヲ求ムルヲニ在ルノミトス
貸貸契約ヲ爲シタルト否トニ付キ故障アル
ナク唯賃銀上ニ付キ故障アル時ハ以前ノ賃銀
受取書ヲ以テ証據ト爲ス可シ若シ其賃銀受取
書ナキ時ハ貸主ノ誓ヲ以テ信據ト爲ス可シ但
シ借主賃借ノ眞價ヲ定ムル爲メ評價ヲ爲サシ

メント欲スル時ハ此限ニアラス

又評價ニ付テノ費用ハ其評價シタル價借主ノ
述ヘタル價ニ過クル時ハ借主ヨリ之ヲ拂フ可
シ

貸主ノ義務

貸主即チ所有者ハ貸シタル物件ヲ借主ニ引渡
シ此物件ヲ相當ノ用法ニ供シ得可キ様修繕シ
借主ヲシテ之ヲ用フルニ差支ナカラシムヲ
要ス

貸主ハ良好ノ有様ニテ物件ヲ引渡ス可ク且ツ

賃貸シタル時間借主ノ爲ス可キ借用間ノ修理
ト稱スル些少ノ修理ヲ除クノ外ハ總テ必要ナ
ル修理ヲ爲ス可シ

借主ハ貸主ノ爲ス可キ己ムヲ得サル修理ハ之
ヲ耐忍セサル可カラス然レモ其工事四十日以
上ニ及フ時ハ日數ニ准シテ其借貸ヲ減シ得可
キノ權アリトス

若シ又家屋ノ修理ニ因リ借主及ヒ其家族ノ住
居ニ必要ナル場所ヲ住居ス可カラサルニ至ラ
シムル時ハ借主ヨリ賃借ノ契約ヲ取消サント

求ムルヲ得可シ

借主ノ義務

借主ハ其借受ケノ物件ヲ定リタル用方ニ從ヒ
懇切ニ注意シテ使用シ且ツ約定ノ期限ニ於テ
借賃ヲ拂フ可シ若シ借賃ヲ拂ハサルニ於テハ
貸主ヨリ契約ヲ廢棄ヲ求メ得可シ
借主ハ貸主ニ對シテ火災ノ責ニ任ス可シ但シ
意外ノ事又ハ雷火ノ如キ拒防ス可カラサル事
ニ因リ或ハ造營ノ不良ナルニ因リ又ハ近隣ノ
家屋ヨリ傳ハリタル事ニ因リ火災ヲ生セシ

ヲ証スル時ハ格別ナリトス

借主右等ノ証ヲ立テサル時ハ其失誤ニ依テ火災ヲ生セシト見做ス可ク若シ又借主數人アル時ハ相連帶シテ貸主ニ對スル火災ノ責ニ任ス可シ

借主ハ其借受ノ權ヲ他人ニ讓リ又ハ其借受シ物件ヲ更ニ他ノ者ニ貸與フルヲ得可シ但シ此等ノ事ヲ爲ス可カラサル旨ヲ貸借ノ契約書ニ時ニ定メタル時ハ此限ニアラス

貸貸ノ契約ノ終ル事

期限ヲ定メテ貸貸ノ契約ヲ爲シタル時ハ無論
此定期ニ至リテ當然其契約ヲ終ル可シ然レモ
貸貸契約ノ期限ヲ終リシ後借主猶之ヲ保有ス
ル時ハ更ニ口上ニテ借受ケタルト看做ス可ク
之ヲ名ケテ再度ノ貸借ト云ヒ而シテ其貸借ハ
土地ノ習例ニ從ヒ一定ノ期限アルモノトス
又貸貸契約期限ノ終リシ後借主猶退去セスシ
テ更ニ自カラ再度貸借ノ契約ヲ爲シタリト看
做ス可キ借主ノ權ヲ防制スルニハ貸主ヨリ借
主ニ退去ノ求メヲ爲スヲ要トス

又賃貸ノ契約ヲ結フニ若シ其期限ヲ定メサル
時ハ一方ヨリ他ノ一方ニ預メ告知シテ其貸借
ヲ止ムルヲ得可シ但シ其預メ告知ス可キ期
限ハ土地ノ習例ニ循ヒ差異アリテ已里ニ於テ
ハ其期限ヲ商店ニ付テハ六ヶ月トシ四百フ
ラ¹ンク以上ノ房室ニ付テハ三ヶ月トシ四百フ
ラ¹ンク以下ノ房室ニ付テハ六週間ト定ム而ンテ
賃貸期限ノ定メハ何レモ三ヶ月毎ニシテ即チ
一月一日四月一日七月一日十月一日トス
又場所ヲ立退カント欲スル借主又ハ期限ニ至

テ借主ヲ立退シメント欲スル貸主ハ右ニ准シ
六ヶ月三ヶ月或ハ六週間以前ニ立退ノ告知ヲ
爲ス可シ

家屋ノ賃貸ニ付キ別段ノ規則

家屋及ヒ房室ノ借主ハ其借貸ヲ拂フヲ保証ス
ルニ足ル可キ家具ヲ其家屋及ヒ房室内ニ備フ
可シ

又借主ハ家屋ノ朽廢シタルニ因リ又拒止ス可
カラサル事ニ因リ補理ヲ加フ可キニ至リシ時
ノ外ハ些少ノ補理即チ借主ヨリ爲ス可キ修理ヲ擔當ス可シ

土地ノ賃貸及ヒ土地ノ耕シ方

土地ノ賃貸ニ付テノ規則ヲ説ク前ニ先ツ土地ノ耕シ方ヲ掲述スルヲ必要ナリトス故ニ其諸法ヲ記列スルヲ左ノ如シ

第一法 土地ノ所有者即チ地主自カラ其土地ヲ耕

スニ在テ之ヲ名ケテキユルナルパトリアルカルト云フ此耕方ノ最モ利益アル所以ハ其所有者ハ即チ其地ノ耕作者タルニ因リ借地人ニ比スレハ其地ヲ良好ト爲シ且ツ將來ニ償ヲ得ル爲メ惜マス資本金ヲ出シテ其土

地ヲ開墾スルヲアレハナリ

第二法 此法ハ土地ノ所有者其取極メタル貸
賃ヲ得テ定期ノ時間已レカ土地ヲ耕スノ權
利ヲ他人ニ讓與フルニ在リ蓋シ此土地貸借
ノ法ヲシテ耕耘ノ利益ヲ保護スル道理ト相
抵觸セシメサルニハ其貸貸ノ期限ヲ頗ル長
カラシムルヲ要トス是蓋シ借地人ヲシテ懇
切ニ其地ヲ耕耘シ且ツ之ヲ良好ニ爲スタメ
カヲ用ヒシムルニハ其借入ノ期限ヲ長カラ
シメサルヲ得サレハナリ

第三法 此法ハ地主ト借地人ノ間ニ協議ノ上

互ニ收納物ヲ分ツ契約ノ一種ニシテ其借地
人ヲ名ケテ「メタエール」又「コロンパルチエー
ル」ト云ヒ借地人別ニ借賃ヲ出スヲナシ此契
約モ亦一種ノ益アリ例ヘハ其借地人其土地
ヲ良好ナラシムル爲メ地主ヲシテ其費用ノ
一分ヲ出シ合ハサシムルヲ得テ且ツ借地人
大ニ安心ナレハナリ但シ其益アレハ亦其弊
ナキヲ免レス何トナレハ此類ノ借地人ハ地
主ト共ニ收納物ノ總數ヲ分ツカ故ニ耕作ノ

農
業

法

省

法

省

費用著大ナルヲ要スル耕作ハ自カラセテ解
ルヲ免レサレハナリ茲ヲ以テ地主ト借地人
ト收納物ヲ分ツ可キ耕作ハ或ハ農業ノ進歩
ニ妨碍ヲ爲ス可クシテ某地ニ於テハ利益
ルモ更ニ他ノ地ニ於テハ却テ其害アル可シ

土地ノ賃貸借ニ付キ別段ノ規則

土地ノ借主_人借地_人ハ其土地ヲ耕作スルニ必要ナ

ル獸類ト器具トヲ備ヘ且ツ穀物ヲ藏メ置ク可

キ小屋ニ之ヲ貯ヘ置ク可ク又他人ノ爲メ其借

地ヲ侵奪セラル、ニ於テハ貸主_地ニ其旨ヲ告

知ス可シ

借地人右ノ義務ヲ行ハス又ハ耕作ヲ爲スノ法
方良シカラス又ハ其土地ヲ荒ラス時ハ貸主其
賃貸ノ契約ヲ取消ント訴フルヲ得可シ

又意外ノ事ニ因リ收納物ノ全部又ハ少ク氏半
バ以上ヲ失フタル時ハ借地人其借貸ノ減シ方
ヲ求ムルヲ得可シ

期限ヲ定メサル土地賃貸ノ契約ハ借地人其借
受ケタル土地ノ收納物ノ全部ヲ所得ト爲ス爲
メ必要ナル期限間其契約ヲ爲シタルト看做ス

可シ

書面ナク且ツ期限ヲ定メスシテ契約シタル土地ノ賃借ヲ止メントスルニハ其地ノ習例ニ依テ定リタル期限ノ間ニ豫メ退去ノ求メヲ爲ス可シ

借地人其借地ヲ退去スル時ハ已レニ代リテ之ヲ借受クル者翌年ノ作業ヲ爲スニ便利タル可キ諸物ヲ遺シ置ク可ク又後ニ借受ル者ハ其前ノ借地人ニ猶未タ終ラサル收納ヲ爲ス爲メ必要ナル諸件ヲ供ス可シ

借地人嘗テ其土地ヲ借受タル時藁及ヒ肥料
ヲ受ケ取リタルニ於テハ其退去ノ時此等ノ物
ヲ遺シ置ク可シ但シ如何ナル場合ニ於テモ後
ニ借入ル、者ハ藁及ヒ肥料ノ評價ヲ爲サシメ
タル上其代金ヲ拂フテ之ヲ遺サシムルヲ得
可シ

土地ノ利益ヲ貸主ト互ニ分ツ可キ契約ヲ以テ
土地ヲ借入レタル者ニ付テハ別段ノ規則ヲ掲
ルニ通例借地人ハ別段契約上ノ制禁アルニ非
レハ其借受シ土地ヲ更ニ他人ニ貸與ハ又ハ其

借受ノ契約ヲ他人ニ譲リ渡スコトヲ得可シト雖
凡土地ノ利益ヲ分ツ可キ契約ヲ以テ借入レタ
ル者ハ別段ニ其許ヲ受ケサレハ決シテ其借受
ノ契約ヲ他人ニ譲リ渡ス可カラズ又其土地ヲ
更ニ他人ニ貸與フルヲ得ス

右規則ノ因テ起ル所以ハ土地ノ所有者其借主
ト相結ンテ其利益ヲ分ツ可キニ因リ畢竟借主
一身ノ能力ニ依頼シテ貸借ノ契約ヲ結ビタル
ニ出テ是ニ依テ借主他人ニ其土地ヲ貸與ヘ又
ハ其借受ノ契約ヲ他人ニ譲渡スコトヲ爲ス可カ

ラサルナリ

労働ノ賃貸及ヒ僕婢又ハエ丁ヲ

雇ノ事

何人ト雖モ定リタル期限間又ハ定リタル工業
ヲ爲スタノノ外人ニ雇ハル、トヲ得ス是レ蓋
シ無期ノ傭役ハ人ノ自由ヲ害スルモノタルニ
因リ其效ナケレハナリ

又僕婢及ヒエ丁傭入ノ約束ハ雇主ト雇夫ト互
ニ論辨決定スルヲ自由ナリトス蓋シ此約束ヲ
結ハシムルニ付テノ大理ハ勞力自由ノ道ニ因

二 體 九

五十六

二 法 律

ル所ノ者トス

然レ氏衆庶一般ノ利益上ニ注目シテ特ニ別段
ノ規則ヲ設ケ雇主ト工丁ヲシテ之ヲ守ラシム
故ニ諸般ノ製作場内ニ於テ勞動ヲ爲ス期限ハ
法律ヲ以テ之ヲ定メ又製作場内ニ於テ少年ヲ
使役スルニ付テモ別段ノ定メアリ
以下ニ詳ナリ就
テ參考ス可シ

商法書第七
章六十八條

水陸ノ運輸ヲ爲ス者ヲ雇フ事

水陸ノ運輸ヲ爲ス者ト此者ニ運輸ヲ任スル者
トノ間ニ取結フ契約モ亦勞動賃貸ノ一種トス

水陸ノ運輸ヲ爲ス者ハ其附託ヲ受ケシ物品ニ
付テハ至重ノ義務ヲ負フ可シ故ニ水陸ノ運輸
ヲ爲ス者ハ其運輸物ヲ亡失シ又ハ破毀シタル
時ハ其責ニ任ス可シ但シ意外ノ事又ハ防止ス
可カラサル天災等ニ因リ運輸物ヲ亡失シ或ハ
毀損セシメシノ証アル時ハ此限ニアラス

請負ノ契約

請負ノ契約トハ請負人定マリタル金高ヲ得テ
或ル工事ヲ爲スヲ請負フ所ノ約束ヲ云フ
雇主ハ工事ノ既ニ始リタル後ト雖モ請負人契

約ヲ取消スヲ得可シ但シ然ル時ハ請負人其失費ト勞力トヲ償ヒ且ツ其失フタル利益ヲ償フ可シ

勞動賃貸ノ契約ハ工作者、建造者又ハ請負人ノ死去ニ依テ之ヲ廢ス可シ

建造者及ヒ請負人ハ其請負ニテ造リタル建造物ニ付キ十年ノ時間其責ニ任ス可シ

建造者及ヒ請負人其請負契約ニ定メタル金高ヲ受取リテ造營ヲ引受ケタル時ニ更ニ其請負ノ金高ヲ増サント求ム可カラス但シ雇主書面

ヲ以テ其造營ノ變改ヲ許セシ時ハ格別ナリト
ス

又請負人ニ使用セララル、工丁、巧丁、匠丁等ハ請
負人ト契約セシ其雇主ニ對シテ訴訟ヲ爲ス
ヲ得可シ但シ其訴訟ヲ爲シ得可キ金高ハ雇主
ヨリ請負人ニ拂フ可キ高ニ過ク可カラス

獸類ノ貸借及ヒ獸類貸借ノ種類

獸類貸借ノ契約トハ貸主ト借主ト互ニ協議シ
タル所ニ從ヒ一方ヨリ他ノ一方ニ獸類ヲ貸與
ヘ他ノ一方ニテ之ヲ管守シ且ツ畜養スルノ契

約ヲ云フ而シテ此契約ニ三種ノ別アリ即チ左
ノ如シ

第一 獸類ノ通常ノ貸借

此貸借ハ借主ト貸主ト互ニ利益及
ヒ損失ノ半バヲ分ツ契約ナリ

第二 雙方互ニ獸類ノ半數ヲ出合スル貸
借

此貸借ハ契約ヲ結ヒシ者雙方共ニ
獸類ノ半數ヲ出シ合セ其全數ヲ一
方ニ借受ケ其利益ト損失トヲ雙方

ニ分ツ契約ニシテ結社ノ一種タル
モノナリ

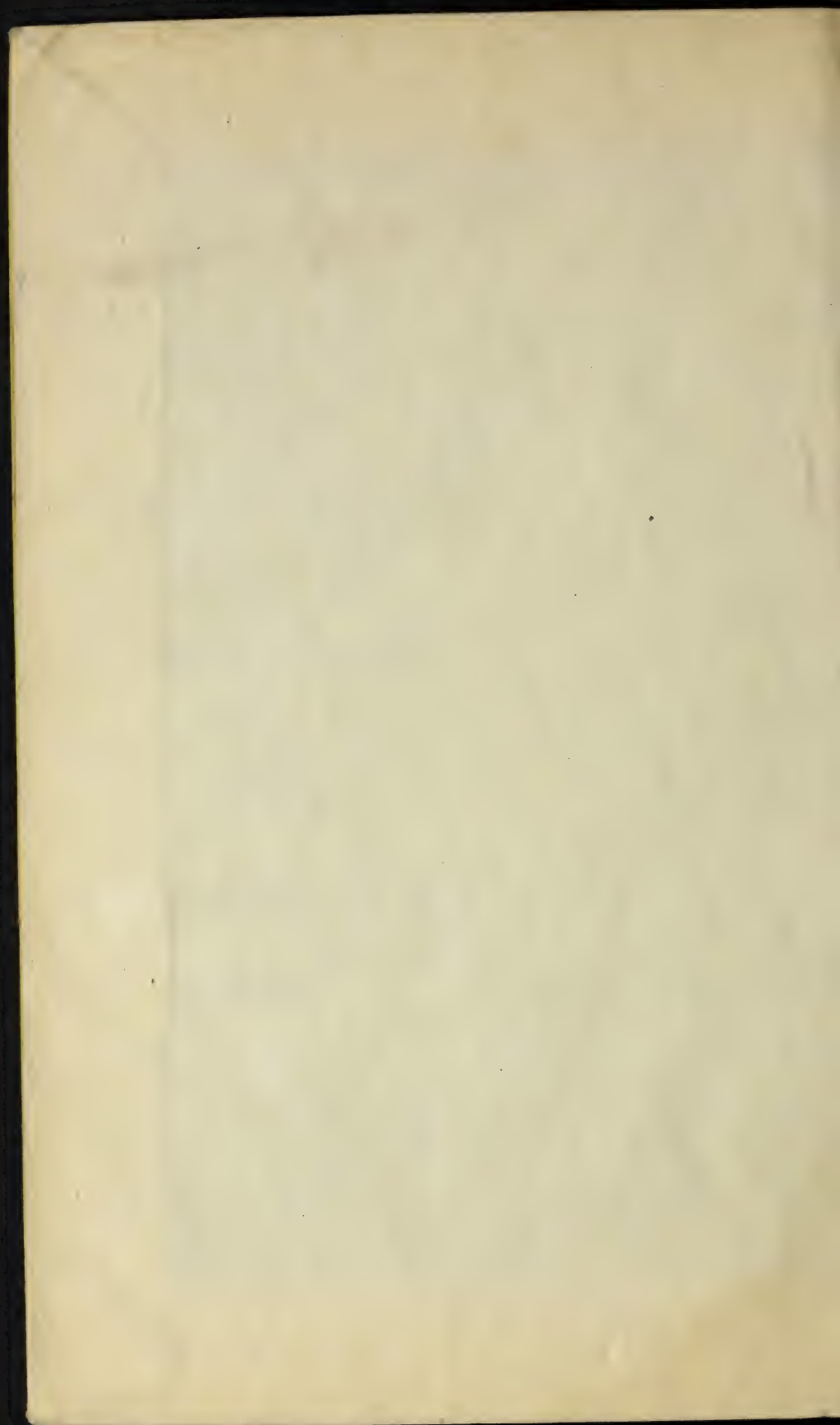
第三

土地ノ所有者其土地ヲ借受クル者
ニ獸類ヲ貸與フル契約又之ヲセプ
テル、ド、フエールトモ名ク

土地ノ所有者其土地ト獸類トヲ貸
與ヘ其契約ノ期限ノ終リニ至リ借
主其嘗テ借受ケタル時評價セシ價
ト同シキ獸類ヲ遺シ置ク可キ契約
ヲ云フ

佛國政典第九卷 終

昭和 26 年
第 12112 號
11. 月 27 日



佛國政典

十

正
下和旧第百五拾号十
下洋旧第百五拾号十

法律
一四七
佛國政典
一二〇



University of Illinois
Library at Urbana-
Champaign
IAS - Oak Street



戸部管內
裁決所
第五款

佛國政典第十卷

第五款

會社

第九卷
民法書第三篇
從第一千八百三十二

條至第一千八百三十三條

會社ノ總論

結社ハ其適例種々ニシテ枚舉スルニ遑アラス
而メ吾人今現ニ此世ニ存在スル間ニ在ル者即
チ一家一邑一國モ亦此結社ナリトス然レモ商
法及ヒ民法上ニテハ特別ノ定式名稱アリ即チ
之ヲ會社ト云フ

結社ハ工商二業ノ繁昌ヲ致ス最大基礎ノ一ニ
シテ建築工業商賣ノ大結構ヲ起スハ皆此力ニ
賴ラサルハナク又一人ノ資金及ヒ勞力ノ以テ
企及フ可カラサル時數人ノ財本及ヒ智巧ヲ合
シテ以テ其目的ヲ達スルモノ甚タ多シ

協力會社

結社ノ總論ヲ完フセンニハ結社ノ一新法即チ協力
稱會社アルノ通ニ論及セサルヲ得ス故ニ左ニ之ヲ概
論ス

協力會社ハ其社員タル工丁等ヲシテ着實ノ利

益ヲ得ヒシメ又其工丁等ヲシテ常ニ幸福ナラ
シメ且ツ其品行ヲ善良ナラシムルノ益アルモ
ノトス故ニ此會社ハ衆人ノ宜シク此ニ注意シ
テ同覺ノ情ヲ發ヒシムヘキ者タリ

協力會社ハ之ニ供品會社、融通會社、製作會社ノ
三種アリ卽チ左ノ如シ

供品會社ハ飲食品又ハ

原品ヲ買入レ之ヲ社負

並ニ他人ニ分チ賣與フルヲ本旨トスル會社
ニシテ此會社ニ仕入レタル物件ハ廉價ニ賣與
フルヲ得可キニ因リ社負ヲシテ廉價ニ物ヲ買

フヲ得セシムルノ便利アリ加フルニ會社ノ
事業繁昌スル時ハ亦社員ヲシテ其利益ヲ得セ
シムルモノトス

融通會社ハ社員又ハ諸工丁及ヒ小商人ノ預ケ
金ヲ預リ或ハ此等ノ者ノ手形ヲ正金ニ引換ン
トスル片ハ歩合ヲ取テ正金ヲ渡シ而メ此等ノ
者ニ通常ノ有様ニ於テハ借入ル、ヲ能ハサル
金額ヲ貸與フルヲ以テ本旨ト爲スモノトス
又製作會社トハ會社ノ力ヲ以テ工業ヲ企ツル
爲メ諸工丁等相互ニ設立シタル會社ニシテ此

會社ハ請負人ヲ置カサルニ因リ卽チ其社員ハ
自カラ請負人タルモノトス

協力會社ニ管スル別段ノ規則ハ千八百六十七
年七月二十四日ノ會社ニ付テノ新法律ニ詳ナ

リ商法書
見一七

會社ノ契約ノ解及ヒ民法上會社
ノ本性

會社ノ契約トハ二人以上ノ者互ニ物ヲ共通シ
其利益ヲ分タントスル旨趣ニテ取結ヒタル契
約ヲ云フ蓋シ此契約ヲ結フニ付テノ二箇ノ大

基本ハ左ニ記スルカ如シ

第一 會社中ノ各人ヨリ金銀或ハ其他ノ
物品又ハ勞動ヲ供給スル事

第二 利益ヲ得ントスルノ旨趣

會社ハ其事業ノ目的ニ由リ或ハ民法上ノモノ
アリ或ハ商法上ノモノアリ故ニ銀行及ヒ商賣
ノ資本ヲ出シテ利ヲ得ントスル會社ハ商法上
ノ會社トシ鑛山開發ノ爲メ設立シタル會社ノ
如キハ民法上ノ會社トス但シ爰ニ説述ス可キ
ハ只民法上會社ノ契約ニ管スル總規則ノミニ

止マリ商社ニ管スル規則ハ商法書中ニ之ヲ計
カニス可シ

會社ノ種類

會社ニハ諸般ノ財産ニ付テノ會社ト別段定メ
タル財産ニ付テノ會社トノ二類アリトス
諸般ノ財産ニ付テノ會社ハ多少廣汎ニ涉ルモ
ノニシテ而メ又更ニ之ノ分テ二種トス卽チ其
一ハ會社中ノ者現ニ所有スル動産及ヒ不動産
ヲ共通シ又ハ遺物相續又ハ存生中ノ贈遺及ヒ
遺囑ノ贈遺ヲ除クノ外總テ其他ノ名義ニテ已

レノ所有ト爲ス可キ動産及ヒ不動産ヲ共通ス
ル會社ヲ云ヒ又一ハ會社中ノ者其會社ヲ結フ
時間勞力ニ依テ得ル所ノ諸件及ヒ會社ノ契約
ヲ結ヒシ時其所有スル動産ヲ共通スル會社ヲ
云フ

別段定メタル財産ニ付テノ會社トハ定マリシ
物件ノ製出又ハ工業ノ起作ヲ目的ト爲ス會社
ヲ云フ

社中各人ノ間ニ互ニ行フ可キ義
務

社中各員ハ會社ノ共通ト爲サント約シタル諸
件ヲ其會社ニ引渡ス可キノ義務アリ故ニ若シ
金高ヲ以テ會社ノ共通ト爲ス可キヲ約シタ
ル時ハ其金高ヲ引渡ス可キ日ヨリ其利息ヲ出
ス可シ

社中各員自己ノ過失ニ因リ會社ニ損失ヲ掛ゲ
タルハ其償ヲ擔當ス可シ然リト雖モ同社中
ノ利益トナル可キ爲メ費シタル金高及ヒ社中
ノ資益ノ爲メ他人ト取結ヒタル契約ノ義務ハ
社中ノ者ヨリ之ヲ已レニ償ハシムルヲ得可シ

會社ノ契約書中ニ社中各員ノ得可キ利益及ヒ
其擔當ス可キ損失ノ割合ヲ定メサル時ハ各社
員ヨリ供シタル金高又ハ物件ノ高ニ准シテ其
利益及ヒ損失ノ割合ヲ定ム可シ

會社ニ勞動ヲ供給シタル者ハ最モ小量ノ金高
ヲ供セシ者ト同シク其割合ヲ定ム可シ但シ別
段ノ契約アル時ハ此例ニアラス

社員中ノ一人ニ利益ノ全部ヲ與フ可キ約束又
ハ其一人ヲシテ會社ノ負債配賦ヲ全ク免カレ
シム可キ約束ヲ爲シタル會社ノ契約ハ其効ナ

カル可シ是レ所謂偏利會社ナルモノナレハナ
リ

會社ノ支配

會社ノ支配人ニ任用ヒラレタル社員ハ廉正ノ
意ヲ以テ必要ノ諸事ヲ執行フコトヲ得可ク又會
社ヲ結フ證書ニ因リ支配人ニ任用セラレ其權
ヲ得タル者ハ至重ノ道理アルニアラサレハ其
權ヲ奪ハル、コトナカル可シ

又會社ノ契約ヲ結ヒタル後ニ記セシ證書ヲ以
テ事務支配ノ權ヲ授與セラレタル者ハ只之ヲ

通常ノ代理人ト爲ス可キニ因リ社中各員ノ存
意ニ因リ其權ヲ奪ハル、コアル可シ

會社ノ事務ヲ取扱フ方法ニ付キ別段契約ヲ爲
サ、ル時ハ左ノ規則ニ從テ之ヲ取扱フ可シ

第一條 何人ヲ問ハス社中各員ハ社中ノ事

務ヲ取扱フコトヲ得可シ但シ其事務

ヲ爲シ終ル前ニ他ノ社員ヨリ故障

申立ヲ受クル時ハ此限ニアラス

第二條 社中各員ハ其用法ニ從ヒ會社ニ屬

スル物件ヲ使用スルコトヲ得可シ但

シ會社ノ利益ヲ阻害シ又ハ之ノ使
用スルニ付キ同社中ノ阻害トナル
可キ時ハ此例ニアラス

第三條 社中各員會社ニ屬スル物件ヲ保全
スルニ欠ク可カラサル費用ヲ同社
中ノ者ヨリ出シ合ハサシムルヲ
得可シ

第四條 支配人ニ非サル社員ハ會社ニ屬ス
ル動産及ヒ不動産ヲ質物ト爲シ又
ハ賣拂フヲ得ス

會社中ノ者會社外ノ人ニ對シテ
行フ可キ義務

商社ニ非サル會社ニ於テハ各社員其社ノ爲メ
結ビタル契約ノ義務ヲ相連帶シテ擔當スルニ
及ハス各自己レノ割前ノミヲ擔當ス可シ

社中ノ一人ニテ契約シタル義務ハ假令ハ會社
ノ算計ノ名義アリト雖モ他ノ社員ニ累及ス可
カラス但シ他ノ社員ヨリ此一人ニ其權ヲ與ヘ
タル時又ハ契約シタル義務ノ爲メ却テ社ニ利
益アルハ格別ナリト雖モ否サレハ義務ノ契

シ
約ヲナシタル社員一名ニテ其義務ヲ負擔ス可

會社ノ終ル事

會社ハ左ノ場合ニ因テ終ル可シ

第一 結社ノ條約期限ノ盡ル事、會社ノ主

要ト爲ス物件ノ滅盡スル事及ヒ會

社ノ目的タル事業ノ終成スル事

第二 社中ノ者ノ死去スル事及ヒ社中ノ

者治産ノ禁ヲ受クル事

但シ社中ノ一人死去スルニ生存ス

ル社員其會社ヲ繼續シ又ハ死者ノ
相續人ヲ社員中ニ加ヘテ其會社ヲ
繼續ス可キヲ別段契約スルヲ得
可シ

第三

社ヲ結フニ其期限ヲ定メサル時社
中ノ各員正實ノ意ヲ以テ其會社ヲ
終ラシムル事

但シ社ヲ結フニ其期限ヲ定メタル
時ハ別段重大ノ事由アルハノ外其
定限ニ至ラサル前ニ閉社ヲ爲スヲ

得ス但シ其重大ノ事由トハ社負ノ
中其義勢ニ背キ或ハ長病ニシテ社
勢ヲ取扱フコト能ハサルニ至リシ事

ノ如キヲ云フ

第六款

貸借ノ事

三篇第ト卷ニ民法書第
千八百

百七十四條至第
千九百十四條

貸借ノ種類

前ノ貸借
トハ異リ

貸借ニ二種アリ其一ヲ使用シテ耗盡セサル物

ノ貸借トシ又一ヲ使用ニ因リ耗盡ス可キ物ノ

貸借トス

耗盡ナル物ノ貸借トハ貸主ヨリ借主ノ使用
 ノ爲メ物件ヲ渡シ借主之ヲ使用シタル後貸主
 ニ返還ス可キ契約ヲ云フ故ニ此類ノ貸借ニ於
 テハ貸與ヘタル物件所有ノ權ハ貸主尚之ヲ保
 持スル所ニシテ此貸借ハ全ク酬報ナキ所ノ契
 約トス
 耗盡ス可キ物ノ貸借トハ貸主ヨリ借主ヘ使用
 スルニ因リ耗盡ス可キ物ノ定量ヲ渡シ借主其
 同量同質ノ物ヲ以テ其返還ヲ爲ス可キ契約ノ
 云フ

耗盡ス可キ物ノ貸借ニ於テハ借主其借受クタル物ノ所有者トナリテ隨意ニ之ヲ取扱フ事ヲ得可ク受取リタル物ヲ還サス之ト價ヲ等フスル物ヲ返還スルヲ得可シ

例ハハ牛馬ノ貸借ハ即チ之ヲ耗盡セサル物ノ貸借トス故ニ其牛馬ヲ使用シタル後其牛馬ヲ其所有者ニ返還スルヲ得可キ者トス又金高ノ貸借ハ即チ之ヲ耗盡ス可キ物ノ貸借トス故ニ其金高ハ借主之ヲ扱ノ隨意ニ使用シタル後其借受タル金貨ニアラス之ニ等シキ他ノ金貨ヲ

返還スルヲ得可キモノトス

耗盡セサル物ノ貸借及ヒ借主ノ
義勢

耗盡セサル物ノ借主ハ專ラ其借受ケタル物件
ヲ保全スルニ注意ス可ク又其物件ノ種類ト契
約トニ因リ定メタル所ヨリ更ニ他ノ用法ニ之
ヲ使用ス可カラス

借主其借受タル物ヲ當然ノ用法ニ使用シ別段
已レノ過失ニアラスシテ意外ノ事ニ因リ身惡
ニ至ラシメシ時ハ其責ニ任スルニ及ハス

又契約上ニテ定メタル期限ニ至レハ借主其借
受ケタル物件ヲ返還ス可シ

耗盡セリル物件ノ貸主ノ義務
耗盡セリル物件ノ貸主ハ左ノ二箇ノ場合ニ於
テハ借主ニ對シテ義務ヲ負フ可シ

第一 借主物件ヲ保全スルニ付キ必要ニ
シテ且貸主ニ告知スル暇ナキ急場
ノ費用ヲ出シタル時ハ貸主其費用
ヲ償フ可キ事

第二 貸主其貸與ヘタル物件ニ不良ノ所

アルヲ知リ預シメ借主ニ其旨ヲ告
知セスシテ借主ノ爲メ損害ヲ生セ
シメタル時ハ貸主其損害ヲ償フ可
キ事

耗盡ス可キ物ノ貸借及ヒ此貸借
ニ付キ生スル義致

耗盡ス可キ物ノ貸借ハ屢々之アル所ニシテ例
ヘハ金高及ヒ諸飲食料ノ貸借ノ如キ即チ是レ
ナリ

耗盡ス可キ物ノ借主ハ契約ヲ以テ定メタル期

限ニ至レハ其借受ケタル物ト同質同量ノ物ヲ
返還スル歟又ハ其代金ヲ以テ借受タル物ノ償
還ヲ爲ス可シ
右貸借ニ付キ若シ返還期限ヲ約定セサル時ハ
裁判役猶預ノ期日ヲ許ルシテ返還セシムルヲ
得可ク又借主其返還ヲ爲シ得可キ資産アル時
ニ之ヲ返還ス可シト契約シタルニ於テハ裁判
役其時ノ様子ニ從ヒ多少ノ猶豫ヲ許シテ返済
期限ヲ定ムルヲ得可シ

利息アル貸借及ヒ利息ノ本性及

ヒ其正義

耗盡セサル物ノ貸借ハ貸銀ナキ貸借

利銀ナ
キ貸借ト

爲スト雖凡金銀又ハ飲食料ノ如キ耗盡ス可キ

物ノ貸借ハ貸銀即チ利息ヲ出ス可キ契約ヲ爲

スヲ得可シ蓋シ利息ハ貸渡シタル金銀ノ貸

賃ナルカ故ニ器械或ハ獸類ノ如キ物件ノ貸主

其賃銀ヲ受ク可キ道理アルト等シク元金ノ貸

主モ亦其利息ヲ受取リ得可キノ理アリトス

蓋シ利息ハ一ハ貸主其金高ヲ人ニ貸渡ン已レ

ノ隨意ニ之ヲ用フル能ハサルノ償トナリハ

借主ノ身元不如意トナリタル時元金ノ失ヲ可
キノ掛念ニ備フルニ在リ故ニ此第二旨ニ由テ
之ヲ論スレハ利息ハ恰モ危嶮請合金ノ一種タ
ルカ如シ

利息ノ割合タカ

貨幣モ亦他ノ諸物ニ於ケルカ如ク賣買交換ヲ
爲ス可キ本性ノモノタルニ因リ賣買ニ管スル
天然ノ法律ニ循ハサル可カラス故ニ利銀ノ多
寡ハ元金ノ多少ニ準シ又借主家産ノ確牢ナル
ト否トニ準ス可シ故其勢自ラ經濟學士ノ説ク

所ト相適合ス依テ今其說ヲ掲クルニ曰ク利息
ノ割合ヲ定ムルハ貸借雙方ノ契約ニ任セテ自
由ナラシム可ク其多少ハ契約ヲ結フ者自由ニ
相對議ス可シト

右利息ノ割合ヲシテ自由ナラシムル事ハ千八
百六十四年參議院ニ於テ之ヲ議シタル所ニシ
テ殆ト決定ニ至ラントスル勢ナリシカ當時終
ニ行ハレス然レモ其論說ハ自由ノ理ニ適ヒ之
ニ左祖スル輩頗ル多シ

但シ英吉利、亞墨利加聯邦、和蘭、伊太利ノ如キハ

既ニ我ニ先ンシ利息ノ割合ヲシテ自由ナラシ
ムル事ヲ許シタリ

利息ノ割合ノ制限(千八百〇七年
ノ法律

利息ノ割合ハ千八百〇七年九月三日ノ法律ヲ
以テ限定シタルモノニシテ現今ニ至リテモ其
法律尚實地ニ行ハル、所ナリ

千八百〇七年頃ニ在テハ債主高利ヲ奪ヒ又ハ
負債者ヲシテ迷惑ナル條件ヲ強テ承諾セシム
ルノ弊習アリテ負債者之カ爲メニ難澁スル者

少カラサリシニ因リ千八百〇七年九月三日ノ
法律ヲ以テ利息ノ割合ヲ定メ法律上ニテ定ム
ル所ノ利息高(民法上ノ事ニ於テハ百分ノ五商
法上ノ事ニ於テハ百分ノ六)ヨリ更ニ高キ利息
ヲ以テ金銀貸借ノ契約ヲ爲スヲ禁シタリ
故ニ法律上ニ定ムル所ヨリ更ニ多キ利息高ヲ
以テ爲シタル借貸ハ負債者定則ノ割合ニ至ル
迄其利息ヲ減セント訴フルヲ得可ク且ツ既
ニ其定則ノ割合ヨリ餘分ニ拂フトタル利息ハ之
ヲ取戻スヲ得可シ

又法律上ニ定ムル所ヨリ更ニ高キ利息ヲ以テ
貸借ヲ爲ス者ハデリー、ダビ、左ード、ヂヅールト
云ヘル一箇ノ輕罪ヲ犯シ懲治罪裁判所ノ裁判
言渡ニ因テ罰金及ヒ禁錮ノ刑ニ處セラル可シ
年金及ヒ年金ノ解

年金ヲ得ルノ權トハアレラ¹ジト稱シテ期限
ヲ定メテ利銀ヲ受取ル可キ事ヲ求メ得可キ權
利ヲ云フ但シ年金ハ債主元金ヲ出シ之ニ代ヘ
負債者ヲシテ其利銀ヲ納メシムルヲ主旨トス
茲ヲ以テ年金ハ貸借ニ類似スルカ如シト雖¹凡

眞ノ貸借ト年金トハ亦其本性相異ナリテ互ニ
混淆ス可カラサルモノトス例ヘハ年金ノ債主
即チ元金ヲ出シタル者ハ其負債者ヨリ正當ニ
其利銀ヲ拂フニ於テハ決シテ元金ノ返還ヲ求
ムルヲ得サルモノタリト雖モ通常貸借ノ債主
ハ其定メタル返濟期限ニ至レハ其元金ヲ負債
者ヨリ返還セシムルヲ得可キカ如シ

又年金ノ負債者ハ二年間其義務ヲ行ハサル事
即チ利銀ヲ拂ハサル事アル歟或ハ家資分散ヲ
爲ス歟或ハ其産ヲ破ル事アル時ニアラサレハ

強テ元金ヲ返還ス可キ催促ヲ受クルヲナカル
可ク又年金ノ負債者ハ已レカ都合ニ因リ何時
ニテモ元金ヲ返還シテ年金ヲ拂フヲ止ムル
ヲ得可シ但シ十年ノ後ニ非サレハ元金ヲ返還
ス可カラサルヲ契約スルトモ妨ナカル可シ
年金ハ法律ヲ以テ定メタル割合ニ過キシ利息
高ヲ以テ之ヲ契約ス可カラス

區別

無期ノ年金ト畢生間ノ年金トノ
前文掲ル所ノ規則ハ無期ノ年金即チ年限ノ定

メナキ年金ニ適用ス可キ規則ニシテ畢生間ノ
年金ハ之ニ異ナリ蓋シ畢生間ノ年金ハ債主又
ハ或人ノ生存中ノミ其利銀ヲ求メ得可キモノ
ヲ云フ

又畢生間ノ年金ニ於テハ債主ノ出シタル元金
ヲ全ク負債者ノ所有ニ歸スルカ故ニ債主其元
金ノ返還ヲ求ムルヲ得ス又負債者其元金ヲ返
還スルヲ得サルモノトス

但シ此年金ハ未必ノ條件ニ管スル契約ナルカ
故ニ法律上ニ定ムル所ノ割合ヨリ更ニ高キ利

銀ヲ以テ之ヲ設クルヲ得可シ

政府ヨリ拂フ可キ年金及ヒ公債
証書ノ事

前文論スル所ノ年金ノ外ニ政府ニ管スル年金
アリ今其概畧ヲ述テ年金ノ論ヲ完全ナラシメ
ントス

政府ノ金高ノ借入ル、法方ニ二種アリ即チ其
一ハ長短ノ期限ヲ定メ其元金ヲ返還ス可キ契
約ヲ以テ若干ノ資本金ヲ借入ル、モノニシテ
之ヲ浮漂ノ國債
デツトフ
ロツタント云ヒ政府會計局ノ

証券ト唱フル証券ヲ渡スモノ之レナリ又一ハ

之ニ異ナリタル法ニシテ確定ノ國債デツ
リ
コ
テ

ト云フモノ之レナリ

今其確定ノ國債ノ概畧ヲ言フニ此國債ハ政府

其人民ヨリ金ヲ借入ル、ニ其元金ヲ返スニ及

ハス只其利銀ノミヲ年々拂フ可キ明約ヲ以テ

設クルモノナリ

前文ノ手續ヲ以テ借入ル、政府ノ負債ハ其種

類ニ箇アリ一ハ銀行ヨリ政府ニ其入用ナル金

高ヲ納メ之ニ代ヘテ年金ノ証券ヲ受取リ之ヲ

世上ニ發行スルモノナリ又一ハ政府直チニ人民ヨリ借入レタルモノナリ

但シ方今行ハル、所ノ方法ハ右借入方ノ中其第二法ニ在リトス

政府ヨリ拂フ可キ年金ハ百ニ五又ハ四或ハ三ノ割合ナリトス故ニ百フランクノ名目元金ヲ出シタル者ハ五フランク又ハ四フランク或ハ三フランクノ入額ヲ得可シ

前文名目元金ト云ヘルハ國債証書ノ賣買相場ハ其証書面ノ高ニ及ハサルヲ常トスルカ

故ナリ蓋シ然ル時ハ國債証書ノ相場ニ引ケ
高アリト云フ

又政府ハ通常年金ノ負債者ニ在ル所ノ買戻ノ
權ヲ行ヒ千八百五十二年ニ於テ年金ノ債主ヲ
シテ百ニ五ノ利銀ヲ四半ニ減スル歟然ラス
ハ元金ヲ返還ス可キノ布令シタリ之ニ於テ以
前百ニ五ノ利息アル國債証書ノ利息更ニ減シ
テ百ニ四半トナレリ
政府ニハ國債支消金ノ設ケアリ蓋シ其金ハ一
種特別ノ資本金ヲ以テ之ニ充テ次第ニ此金ヲ

以テ國債ヲ消却ス

右支消金ハ國債証書ヲ買戻シテ之ヲ保存シ置
キ其利息高ヲ蓄ヘテ更ニ國債証書ヲ買戻ス可
シ

又年金ノ証書ヲ所持スル債主ノ姓名ヲ國債簿
上ニ登記シタルモノヲ記名ノ年金証書ト云ヒ

此証書ハ讓渡ノ証書ナケレハ他人ニ之ヲ賣拂
ヒ又ハ讓渡スヲ得サルモノトシ又政府會計局
ヨリ渡シタル証書ニ債主ノ姓名ヲ記サ、ルモ
ノハ之ヲ無名ノ年金証書ト云ヒ此証書ハ爲替

世話人ノ世話ニ因リ商估聚會場ブルスニ於テ賣

買スルヲ得可シ

第七款 附託ノ事 「ナポレオン」民法書第三篇第十一卷從第一千

九百十五條至第一千九百六十三條

附託ノ解及ヒ其區別

附託トハ一方ノ者他ノ一方ノ者ニ屬スル物件

ヲ受取リ之ヲ管守シ後ニ之ヲ其儘ニテ還ス可

キ契約ヲ云フ

附託ニ二種アリ其一ヲ通常ノ附託トシ又一ヲ

雙方相爭フ物ノ附託トス而シテ其通常ノ附託

ハ再ヒ之ヲ分ツテ隨意ノ附託ト己ムヲ得サル
附託トノ二種ト爲ス

隨意ノ附託

隨意ノ附託ハ附託ヲ爲ス者ト附託ヲ受クル者
ト雙方隨意ノ承諾ヲ以テ爲スヒノトス但シ此
附託ニ付テハ之カ報酬ヲ爲ス可カラス

附託ヲ受クル者ハ其附託サレタル物ヲ己レカ
所有トスル物件ト等シク丁寧ニ管守シ且附託
ヲ爲シタル者ノ許可ヲ得サレハ其物件ヲ使用

ス可ラス

又附託ヲ受タル者ハ附託セラレタル物件ヲ其儘ニテ返還ス可シ

又附託ヲ受タル者其物件ヲ保存スルニ付キ己ムヲ得スシテ費用ヲ出シ又其附託ノ事ニ付キ己レニ損害ヲ蒙リタル時ハ附託ヲ爲シタル者ヨリ其損費ヲ償フ可シ

己ムヲ得サル附託

己ムヲ得サル附託トハ火災、崩潰、洪水及ヒ其他意外ノ事ニ因リ他人ニ物件ヲ附託スル事ヲ云

隨意ノ附託ニ於テハ其物件百五十フランク以下ノ價タル時ニアラサレハ證人ヲ以テ證スルヲ得可カラスト雖モ己ムヲ得サル附託ニ於テハ價額ノ多少ヲ論セス常ニ證人ヲ以テ証スルヲ得可シ

旅客ノ携ヘ來リシ物件ヲ旅舎ヘ預タルカ如キキ亦己ムヲ得サル附託トス故ニ若シ其物件ヲ失ヒ又ハ其物件ニ損害ヲ加ヘタル時ハ旅舎ノ主人其責ニ任ス可シ

又旅舎ヘ附託シタル物件ヲ失ヒ又ハ損害ノ加

ヘタルニ因リ旅客ヨリ之ヲ訴フ可キ時其求ム
ル處ノ價額千五百ヲラレクヲ越ヘサレハ治安
裁判役ニ之ヲ訴フ可シ

雙方相爭フ物ヲ人ニ附託スル
及ヒ雙方相爭フ物ヲ互ノ契約ニ
因リ又ハ裁判所ノ言渡ヲ以テ人
ニ附託スル

雙方相爭フ物ヲ他人ニ附託スル事トハ雙方ノ
間ノ爭ノ生ヒシ物件ヲ人ニ附託スルヲ云フ
雙方相爭フ物ヲ互ニ契約シテ人ニ附託スルト

ハ相爭フ者相互ニ承諾ノ上其物件ヲ他人ニ附
託シ其附託ヲ受クル者其爭ノ終リシ時勝訴訟
ノ者ニ之ヲ還ス可キ契約ヲ云フ但シ此類ノ附
託ヲ爲スニハ其謝銀ヲ出スヲ得可シ

雙方相爭フ物件ヲ裁判所ノ言渡ヲ以テ人ニ附
託スル事トハ裁判所ノ言渡ニ因リ之ヲ他人ニ
附託スルコトニシテ裁判役ハ屢々此處分ヲ爲ス
可キコトアリテ殊ニ動産不動産ノ所有ノ權及ヒ
其保有ノ權ニ付キ二人或ハ數人ノ間ニ詞訟ノ
生セシ時此處置ヲ爲ス可シ

雙方相爭ノ物ヲ裁判所ノ命ニテ預ガル者ハ雙方本人之ヲ定メ又ハ裁判役之ヲ定ム可シ

第八款

偶生ノ事ニ管スル契約

ナホレ
オヒ民

法書第三篇第十二卷從第一千九百六十四條至第一千九百八十三條

偶生ノ事ニ管スル契約ノ解及ヒ

其契約ノ中最重大ナルモノ、記

列

互ノ利益損失共ニ將來ノ成行ニ管セシムル契約ヲ偶生ノ事ニ管スル契約ト云フ此契約ノ中

最重大ナルモノハ畢生間ノ年金ノ契約、海上請
合火災請合等ノ契約、船舶又ハ積荷ヲ引當トシ
テ金ヲ貸借スル契約ノ三箇トス

船舶又ハ積荷ヲ引當トシテ金ヲ貸借スル危險
請合ノ契約ハ若シ船舶沈没スルニ於テハ貸主
其貸與ヘタル金高ノ返還ヲ求ムルヲ得ス

右ノ外此類ノ契約ニハ遊戲及ヒ賭博ノ類アリ
ト雖モ一般ニ遊戲及ヒ賭博ノ本性アル諸事ハ
之ヲ裁判所ニ訴フルヲ得ス故ニ遊戲及ヒ賭
博ニ勝タル者受取ル可キ金高アリトイヘトモ

之ヲ許フルヲ得ス又負ケタルモノノ隨意ニ拂フ
タル金高ハ之ヲ取戻スヲ得ス但シ闘走競馬
競車ノ如キ身體ヲ輕捷壯健ナラシム可キ遊戯
ハ此ノ限ニアラス

畢生間ノ年金ト請合ノ契約ニ管スル法式トハ
左ニ之ヲ記サントス

畢生間ノ年金及ヒ其契約ノ効ヲ
生セシムルニ必要ナル條件

前條ニ論セシ如ク畢生間ノ年金ハ或一人ノ存
生中ノミ之ヲ得可ク其死去シタルニ於テハ之

ヲ求ムル權ノ消散スル年金ヲ云フ故ニ畢生間
ノ年金ハ其性質偶生ノ事ニ管スル契約タルヲ
昭々乎トシテ見ル可シ例ヘハ之ヲ得可キ者即
チ年金ノ債主ノ命數ノ長短ニヨリ之ヲ拂フ可
キ者即チ負債者ノ義務モ又輕重アル可シ
又畢生間ノ年金ハ債主ノ存生中或ハ其他ノ者
ノ存生中又ハ數人ノ存生中之ヲ設クルヲ得可
ク且此類ノ年金ハ負債者元金ヲ得テ之ヲ設ケ
又ハ無償ニテ之ヲ設クルヲ得可シ但シ此類ノ
年金ハ已ニ死去シタル者又ハ病ニ罹リ其契約

ノ日ヨリ二十日以内ニ死シタル者ノ爲メ設ケ
タル時ハ其効ナカル可シ

右契約ヨリ生スル條件

畢生間ノ年金ノ債主ハ其出シタル元金ノ返還
ヲ求ムルヲ得ス又年金ノ負債者ハ己レノ爲メ
如何ニ困難ナリト雖モ其元金ヲ返還シテ年金
ヲ拂フヲ免カルハヲ得ス是然ラサレハ一方
ノ者他ノ一方ヲシテ其契約ノ爲メ得可キ利益
ヲ得セシメサルニ至レハナリ
又年金ノ負債者之ヲ拂ハサル時ハ債主其負債

者ヲシテ年金ヲ拂フ可キ義務ヲ保証スルニ足
ル可キ金高ヲ銀行ニ預ケシムルノ權アリ但シ
畢生間ノ年金ノ債主ハ其負債者ニ對シ自己ノ
生存スル證又ハ他人（即チ其生存中）年金ヲ拂フ
生存スル證ヲ立ルニ非レハ年金ヲ得ント求ム
ルヲ得ス而シテ此證ヲ立ツルハ公証人ノ記
シタル生存ノ證書ヲ以テス可シ

請合ノ契約及ヒ其適用

請合ノ契約トハ人若シ偶然ノ損害ヲ受ケタル
時之ヲ償フ可キノ契約ヲ云フ

通例ノ請合契約ノ目的タル者ハ火災家畜ノ斃
死、霰雹ノ荒壞等ニ在リテ此等ノ請合ヲ陸上請
合ト云ヒ生命請合トハ人ノ死去シタルニ因リ其家族又
ハ債主ノ如キ者損害ヲ蒙リタル時之ヲ償ノ可
キノ契約ヲ云フ

其外海上請合ノ契約ノ如キハ商法ノ條下ニ詳
ナリ因テ茲ニ之ヲ贅セス

雙方相互ノ請合ト請合金ヲ出ス
可キ請合トノ差別

請合ハ雙方相互ノ請合ト請合金ヲ出ス可キ請
合トニ於ケルニ箇ノ法式ヲ以テ契約スルヲ得
可シ

雙方相互ノ請合トハ數人相互ニ一致シテ其危
險ヲ共ニシ若シ一致セシ者ノ中一人ニ損失ア
ル時ハ一致セシ數人ノ管條高ニ應シテ各々其
損失ノ償ヲ擔當ス可キ契約ヲ云フ此請合ニ於
テハ其請合ヲ受クル各人社中ノ事務ヲ處置ス
ルノ費用トシテ定リタル金高ヲ拂フ可シト雖
モ非常ノ事ヲケレハ其他ノ金高ヲ出スニ及ハ

ス若シ又非常ノ事アルハ其事ノ大小ニ准シ
テ拂フ可キ金高ニモ亦大小アリトス而シテ此
非常ノ災ノ爲メ拂フ金高ハ請合中ニ加リタル
諸人ニ各其請合ヲ爲シタル金高ニ准シテ之ヲ
割附ク可シ

火災請合ニハ此類ノ請合ヲ用フルヲ多ク霰雹
荒壞請合ハ此類ノミニ限ル可シ

請合金ヲ出ス可キ請合トハ請合人契約通りノ
金高ヲ得テ他ノ一人ノ損失ヲ償フヲ擔當ス
ル請合ナリトス

此請合ニ於テハ請合ヲ受クル者ヨリ拂フ可キ
金高ハ災難ノ有無ニ拘ハラズ契約ノ時之ヲ定
ム可キモノニシテ多クハ此人ト彼人取結フモ
ノニ非ス請合會社ト他ノ一人ト取結フモノト
ス

請合ヲ爲ス者ト請合ヲ受クル者
ノ義務

請合ヲ受クル者ハ請合ヲ爲ス者ノ兼知ス可キ
條件ハ十分綿密ニ之ヲ告知ス可シ若シ之ヲ告
知セサルニ於テハ契約ノ効ナカル可シ

又請合ヲ受ル者ハ請合ヲ爲ス者ニ契約通りノ
請合金ヲ渡ス可ク若シ雙方相互ノ請合ナルハ
ハ災害アリシ時ニ自己ノ出ス可キ割前金高ヲ
拂フ可シ

又請合ヲ受ル者ニ若シ災難アリシ時ハ速カニ
之ヲ請合ヲ爲ス者ニ告知スルヲ要ス尤ビ災難
ノ時ニ當リ總テ救フヲ得可キ物ハ之ヲ救ハ
サル可カラス

請合ヲ爲ス者ノ義務ハ請合ヲ受ル者ニ其請合
契約ノ目的タル損害ヲ償フニアリトス

生命請合及ヒ種々ノ方法

生命請合ノ契約ノ方法ハ數種アリテ皆死人計
表簿ヲ參考シ之ニ依テ巧ミニ將來ノ見積リヲ
爲スニアリトス例ヘハ人特定ノ齡ニ至リ死ス
ル時ハ其請合ヲ爲ス者ヨリ死者ノ相續人ニ若
干ノ金高ヲ渡ス可キヲ契約シ又ハ甲者乙者
ノ特定ノ年齡ニ至ラハ請合ヲ爲ス者ヨリ乙者
ニ金高ヲ渡ス可キヲ契約スルヲアルカ如シ
但シ最終ニ記スル方法ハ父ノ其數子ニ對シ贈
遺ヲ爲スニ最モ適當ノ者トス

生命請合ハ請合金ヲ出ス請合ト雙方相互ノ請
合トヲ以テ爲ス可ク而シテ雙方相互ノ生命請
合ハ以太利人トシチト云フ者初メテ佛國ニ
於テ之ヲ行ヒタルニ因リ此請合ヲ名付テトシ
チト云フ

生命請合ハ請合會社ニアラサレハ之ヲ爲ス可
カラス又千八百六十七年六月二十四日ノ法律
ニ從ヘハトシチヌノ性質アル請合ノ會社、雙
方相互ノ請合會社及ヒ請合金ヲ受取ルノ請合
會社ハ政府ノ允許ヲ得サレハ之ヲ設クルヲ許

サス

第九款

名代ノ証書

「ナボレオ」民法書
第三篇第十三卷從

第一千九百八十四
條至第二千十條

名代ノ証書ノ本性及ヒ其法式

名代ノ証書トハ一人ヨリ他ノ一人ニ已レカ名

目ヲ以テ事ヲ爲ス可キノ權ヲ授クル証書ヲ云

フ

又名代ノ証書ヲ與フル者ヲ本人ダマシト云ヒ名

代ノ証書ニ因リ名代ヲ任セラレタル者ヲ名代

人マンダト云フ

名代ノ任ヲ授クル証書ヲ「プロキ」ラシ又「コ

」ホアルト云フ乃チ委任狀ノ義ナリ

名代ヲ任スル「ハ」公証人ノ記シタル証書又ハ
私ニ調印シタル証書ヲ以テ之ヲ爲スヲ得又ハ
書狀及ヒ口上ヲ以テ之ヲ爲ス「ハ」得可シ

名代ヲ任スルニハ之ヲ任セラレタル者ノ兼諾
アル「ハ」ヲ要トス

名代ヲ任スルハ本來酬報ナキモノトス然レモ
名代人別段ニ酬報ヲ得ル「ハ」ヲ契約スルモ妨ナ
カル可シ

名代人本人ニ代テ事ヲ處置スルノ權ハ之ニ總
體ノ事柄ニ管スル者ト特別ノ事柄ニ管スル者
トノ二箇アリトス

名代人ノ其權限内ニ於テ行フタル諸件及ヒ名
代人ノ人ト契約シタル義務ハ本人之ヲ擔當ス
可シ

名代人ノ義務

名代人ハ本人ヨリ委任セラレタル諸事ヲ成就
ス可キ責ヲ擔當ス可ク若シ又擔當ノ事件ヲ處
置スルニ就キ過失アレハ亦其責ニ任ス可シ

名代人ハ其擔當シタル事件ニ付テノ計算ヲ爲
ス可ク且本人ノ爲メ受取リタル金高アレハ本
人ニ之ヲ引渡ス可シ

名代人本人ノ金高ヲ自己ノ用ニ供シタル時ハ
其時ヨリ以來ノ利息ヲ拂フ可シ又本人ニ渡ス
可キ金高アリテ本人ヨリ引キ渡ス可キ催促ヲ
受ケ尚之ヲ渡サ、ル時ハ催促ヲ受ケタル時ヨ
リ以來ノ利息ヲ拂フ可シ

名代人其任務ニ管スル諸事ヲ行フニ付キ更ニ
己、代人ヲ用ヒタル時ハ自カラ其者ニ管ス



ル義務ノ責ニ任ス可シ

本人ノ義務

本人ハ己レカ名義ヲ以テ其名代人ノ人ト契約
シタル義務ノ責ニ任ス可シ

本人ハ名代人ノ其任セラレタル諸事ヲ行フニ
付キ用ヒタル雜費ハ之ヲ用ヒタル日ヨリ以來
ノ利息ヲ加ヘテ名代人ニ拂フ可シ

又本人ハ名代人共名代ノ事務ヲ行フ際ニ方リ
損害ヲ受ケタル時ハ名代人ニ對シ其償ヲ爲ス
ノ責ニ任ス可シ

名代ノ任ノ終ル法方

名代ノ任ハ之ヲ廢スルニ因リ終ル可シ蓋シ本人ハ何時ニ限ラス其委任シタル名代ノ權ヲ廢スルヲ得可シ尤モ然ル時ハ名代人ヲシテ再ヒ其權ヲ用ヒサラシムル爲メ其委任狀ヲ返サシム可シ

本人名代人ヲ廢シタル時ハ其由ヲ人ニ知ラシム可シ若シ其事ナク他人其名代人ヲ廢シタルヲ知ラスシテ名代人ト契約ヲ爲シタル時ハ本人其契約ノ義務ヲ擔當ス可シ

又名代人ハ其任ヲ退カント欲スルノ本人ニ
告知シタル上其任ヲ退クコトヲ得可シ
名代ノ任ハ本人或ハ名代人ノ死去又ハ治産ノ
禁ヲ受ケタル事又ハ家資分散ニ由リテ亦之ヲ
終ル可シ

第十款

保証

「アホレオ」民法書第三篇
第十四卷從第二十一篇

至第二十
四十三條

保証ノ本性及ヒ其定限

保証トハ本人

即チ負
債者

其義務ヲ盡サル時其義

務ヲ得可キ者

即チ
債主

ニ對シテ義務ヲ行フ可キコト

ヲ擔當スル契約ヲ云フ

凡テ保証ノ義務ハ主タル義務ノ執行ヲ証スル

所ノ附帶ノ義務ナリトス故ニ保証ノ義務ハ本

人即チ負
債者ノ行フ可キ義務ノ高ニ過リ可カラス

又本人ヨリ更ニ重劇ノ義務ヲ契約ス可カラス

若シ又主タル義務ノ高ニ過リタル義務ヲ契約

シタル保証人ハ主タル義務ノ高ニ至ル迄其義

務ノ高ヲ減スルヲ得可シ

保証ハ主タル義務ノ一部ノミニ付キ之ヲ爲ス

ヲ得可シ

法律又ハ裁判言渡又ハ互ノ契約ニ因リ保証人
ヲ立ツ可キ時ハ契約ヲ結ヒ得可キノ權利ヲ有
シ又保証人ヲ立ツ可キ地ノ上等裁判所管轄内
ニ住所ヲ有シ且義務ノ保証ニ足レル不動産ヲ
所有スル者ヲ以テ其保証人ト爲ス可シ

保証人其義務ヲ行ヒ得可キカアルヤ否ヤヲ量
料スルニハ商法上ノ事ニ管スル時歟又ハ義務
ノ高極テ僅少ナル時ニ非サレハ不動産ニアラ
サル財産ヲ以テス可カラス

保証人ヲ立ツ可キ者若シ其人ヲ見出し得ル

時ハ保証人ニアラサル保証即チ義務ヲ行フニ
十分ナル典物ヲ以テ義務ノ保証ト爲スヲ得可
シ

義務ヲ得可キ者ト保証人トノ間
ニ保証ヨリ生スル條件

保証人ハ義務ヲ得可キ者即チ債主ニ對シテ左ノ二
箇ノ特權ヲ有ス可シ

第一 本人ヨリ先キニ義務ヲ行フニ及
ハサル特權

第二 保証人ニ管スル義務分派ノ特權

保証人ハ本人即チ負債者ノ義務ヲ盡サ、ル時ノ外

己レニ義務ノ執行ヲ擔當スルニ及ハサルヲ以

テ若シ本人義務ヲ盡サ、ルニ因リ債主ヨリ保

証人ニ義務ヲ盡ス可キノ催促ヲ爲シタル時ハ

先ツ本人ノ財産ヲ以テ其義務ヲ得ルニ充テ其

財産ヲ賣拂ハシムルヲ求メ得可キ一箇ノ權

利即チ本人ヨリ先キニ義務ヲ盡スニ及ハサル

時權アリトス

蓋シ此場合ニ於テハ保証人債主ニ負債者即チ本人

ノ財産ヲ指示シ且其財産ヲ以テ義務ヲ得ルニ

充テシムル訴訟手續ヲ爲スニ足ル可キ費用ノ
高ヲ債主ニ渡ス可シ

保証人ハ前文記スル所ノ一箇ノ特權ヲ有スト

雖此自カラ之ヲ拋棄シタル時又ハ負債者ト相

連帶シテ義務ノ執行ヲ擔當ス可キ旨ヲ契約シ

タル時ハ此限ニ非ラス

若シ又一箇ノ義務ニ付キ數人ノ保証人アル時

ハ其各人義務ノ總高ノ執行ヲ擔當ス可シト雖

此之カ爲メ義務ノ總高ヲ盡ス可キ催促ヲ受ケ

タル保証人ハ債主ニ對シテ其義務ヲ盡シ得可

キカアル保証人中ニ各々其擔當シタル義務ノ
割前ヲ分派ス可キ事ヲ求ムルヲ得可クシテ即
チ之ヲ名ケテ保証人ニ管スル義務分派ノ特權
ト云フ

負債者ト保証人トノ間ニ保証ヨ
リ生スル條件及ヒ保証人數人ヲ
間ニ保証ヨリ生スル條件

負債者即チ義務ヲ行フ可キ本人ノ爲メ義務ヲ
行フタル保証人ハ其本人ニ對シテ訴ヲ爲スヲ
ヲ得可シ

其訴訟ハ母銀及ヒ利息並ニ債主ヨリ保証人ニ
對シテ義務ヲ行フ可キ催促ヲ爲シタル旨ヲ保
証人ヨリ本人ニ告知セシ以來ノ費用ノ償還ヲ
得ル爲メニ之ヲ爲スヲ得可シ

負債者ノ爲メ義務ヲ行フタル保証人ハ債主ヨ
リ負債者ニ對シ行フ可キ權利ヲ其債主ニ代テ
行フ可シ

又保証人ハ負債者ノ爲メ義務ヲ行ヒ或ハ債主
ヨリ已レニ對シテ義務ヲ行フ可キ催促アリタ
ル時ハ負債者ニ其旨ヲ告知ス可シ

若シ保証人右ノ次第ヲ負債者ニ告知セスシテ
負債者ノ爲メ義務ヲ行ヒ負債者之ヲ知ラスシ
テ更ニ義務ヲ行フタル時ハ保証人負債者ニ對
シテ已レカ行フタル義務ノ償還アラントヲ求
ムル訴訟ヲ爲スヲ得ス

又保証人債主ヨリ義務ヲ行フ可キ催促ヲ受ケ
テ之ヲ負債者ニ告知セサル時其負債者若シ既
ニ已レ、義務ノ消散シタル旨ヲ証シ得可キ事
由アルニ於テハ其保証人負債者ニ對シ義務ノ
償還アラントヲ求ムル訴訟ヲ爲スヲ得ス

保証人ハ負債者ノ爲メ義務ヲ行ハサル前ト雖
左ノ場合ニ於テハ負債者ニ對シ訴訟ヲ爲ス
ヲ得可シ

第一 負債者家資分散ヲ爲シタル時

第二 保証人債主ヨリ義務ヲ行フ可キ

催促ヲ受ケタル時

第三 義務ノ執行期限ニ至リシ時

一箇ノ義務ニ付キ之ヲ行フ可キ負債者一人ニ
シテ其保証人數人アル時一人ニテ負債者ノ爲
メ義務ノ總高ヲ行フタル保証人ハ其他ノ保証

人ニ對シ其各自ノ擔當ス可キ部分ヲ已レニ償
還アラントヲ求ムルヲ得可シ

保証人ノ義務ノ消散スル事

保証ヨリ生スル所ノ義務ノ消散スル原由ハ亦
其他ノ義務ノ消散スル原由ト同一ナリトス
保証人ハ義務ノ本性ニ因リ之ヲ行フヲ拒ミ
得可キ法方アルニ於テハ之ヲ述ヘテ債主ノ求
メヲ拒ムヲ得可シ

債主ノ處置ニ因リ保証人債主ノ權利ニ代ル
ヲ得サルニ至リシ時ハ保証人其義務ノ故免ヲ

受ク可シ

又債主負債者ヨリ其義務ヲ行フニ充テタル不
動産又ハ或財産ヲ受取リタル時ハ保証人亦其
義務ノ放免ヲ得可シ

第十一款

和解

和。ホ。レ。オ。シ。民法書第三篇
第十五卷從第二十四條

條至第二十五
五十八條

和解ノ義意及ヒ其利益

和解トハ雙方ノ間ニ既ニ生シタル爭ヲ了シ又
ハ生セントスル爭ヲ預メ防ク所ノ契約ヲ云フ
雙方ノ間ニ爭ノ生シタル時ハ雙方ノ者左ニ記

ス所ノ決定中ノ一ヲ撰フ可シ

第一 雙方ノ者ハ其爭訟ヲ繼續シテ裁判

所ノ裁決ヲ受クルヲ得可シ

第二 又雙方ノ者互ニ判斷人ヲ選ンテ其

判斷ニ任カセント望マハ之ヲ撰用

スルヲ得可シ

第三 若又雙方互ニ己レカ言前ヲ固執ス

ルヲ止メテ和談セント欲スル時ハ

和解ニ因テ其爭ヲ終ルヲ得可シ

和解ハ若シ之ヲ用ヒ得可キ時ハ雙方ノ爲メ利

益アリ即チ雙方相互ニ訴訟ノ爲メニ諸入用ヲ
出シ又ハ時間ヲ費スノ惠ヲ除キ又ハ訴訟ノ勝
負如何ニ管ヒサルノ益アリトス

和解ノ規則

和解ノ契約ハ必ス之ヲ書面ニ記ス可シ

和解ノ契約ハ之ニ用ヒタル文辭如何ニ廣汎ナ

ルト雖氏其目的ト爲ス爭ノミニ限リ他事ニ及

ホス可カラス

和解ノ契約ハ之ヲ結ヒタル雙方ノ間ニ於テ更

ニ再ヒ控訴ス可カラサル終審ノ裁判言渡ト同

一ノ力アリトス然レ此契約ヲ以テ他人ノ權
利ニ抗ス可カラス又他人ヨリ此契約ヲ申立テ
雙方ノ權利ニ抗ス可カラス

若シ詐偽又ハ暴行ニ因リ或ハ爭ヒノ目的タル
事物ノ錯誤シタル時ハ和解ノ契約ヲ取消サ
ト求ムルヲ得可ク又ハ或ル証書ニ據テ和解ヲ
爲シタル後其証書ノ贋造タルヲ知リタル時
又ハ既ニ確定ノ裁判言渡アリテ控訴ス可カラ
サルニ至リシ爭ニ付キ雙方ノ者又ハ一方ノ者
其由ヲ知ラスシテ和解ノ契約ヲ爲シタルニ於

テハ亦之ヲ取消サント求ムルヲ得可シ
又和解ノ契約ニ付キ算計ノ錯誤アル時ハ之ヲ
改ム可シ

第十二款 書入質々物金銀貸主ノ特權即

チ質入「プリウ」レ「ジ」ノ權及ヒ

イポテークノ權「ナポ」レ「オ」ニ「民」
法書第三篇第

十七卷從第二千七十一條至第
二千九十一條同第十八卷及ヒ

第ト九卷從第二千九十二
條至第二千二百十八條

總論

本款中ニ於テハ法律又ハ約束ヲ以テ債主ノ爲

ノ設クル所ノ特別ノ保証ヲ論ス

凡テ各債主ハ皆何レモ平等ノ權利タルヲ以テ
通則ト爲ス故ニ總テ負債者ノ財産ハ各債主共
通ノ保証物タル可ク其代金ハ債主ノ貸高ニ準
シテ之ヲ分配ス可シ

然リト雖凡別段法律ヲ以テ債主特權ノ原由ヲ
許シ且此特權アル者ニハ他ノ債主ヨリ先キニ
義務ノ執行ヲ得セシムルヲ許シタリ而シテ
其特權ノ原由ハ質入アリウイレ^リシノ權及ビイ
ホ^ホテ^テークノ權ニアリトス因テ左ニ之ヲ說示ス

可シ

質入ノ解

質入トハ負債者其義務ノ保証トシテ債主ニ品物ヲ渡ス契約ヲ云フ

質入ハ動産ト不動産トニ因リ其名稱差アリ即チ動産ノ質ヲ「ガージ」ト云ヒ不動産ノ質ヲ「アンチクレーブ」ト云フ

動産ノ質「ガージ」

凡テ動産ハ借リタル金高ト質物ノ種類又ハ性質ヲ記シタル公正ノ証書又ハ私ノ証書アリテ

之ヲ官署ノ簿冊ニ登記シタルニ非レハ質入ニ
爲ス可カラス

質物ハ債主ニ引渡し又ハ貸借雙方協議ノ上撰
ミタル者ニ引渡し可シ

甲者若シ乙者ヨリ受取ル可キ金高ノ証書ヲ更
ニ丙者ニ質物ト爲シタル時ハ其質入証書ヲ乙
者ニ送ル可シ

動産ノ質ニ於テハ之ヲ質物トシテ受取りタル
債主一箇ノ時權ニヨリ其質物ヲ賣拂ヒ其代金
ヲ以テ他ノ債主ヨリ先キニ貸高ノ償ヲ得可キ

權利アリ故ニ此時權アル債主ハ定期ニ至リ貸
高ノ返金ナキ時ハ其質物ヲ賣拂フ可キ言渡ア
ラシトテ裁判所ニ申立テ得可シ

負債者ハ負債ノ高ヲ全ク拂フタル後ニアラサ
レハ質物ヲ己レニ返サシムルヲ得ス

債主ハ專ラ質物ヲ保全スルヲ注意ス可ク又
負債者ハ其質物ヲ保全スルニ付キ出シタル費
用ヲ債主ニ償フ可シ

商法上ノ事ニ管スル動産ノ質入ハ商法書第九
十一條第九十二條第九十三條ニ掲ケタル別段

ノ規則ニ循フ可シ

不動産ノ質

不動産質入ノ契約ハ必ス証書ニ之ヲ記ル可シ

不動産質入ノ契約ニ於テハ債主其不動産ヨリ生スル利益及ヒ入額ヲ収テ之ヲ其貸高ノ利息ニ充テ尚餘分アレハ之ヲ以テ元金ノ償ニ充ツルヲ得可キ權利ヲ得タルモノトス

不動産ヲ質ニ取リタル債主ハ其不動産ニ付テ年々ノ租税及ヒ費用又ハ其補理ヲ擔當ス可

三卷十

四十一
言
法
律

シ但シ此諸口ノ入費ハ不動産ノ入額中ヨリ之ヲ引去ル可シ

アリウレ^レジノ權及ヒアリウレ^レジノ權ト「イポテ^レク」ノ權ノ差異

アリウレ^レジノ權トハ債主其權利ノ種類ニ因リ特權ヲ以テ他ノ通常ノ債主ノミニ非ラス「イポテ^レク」ノ權ヲ有スル債主ヨリモ先キニ其義務ヲ得可キノ權ヲ云フ

「イポテ^レク」ノ權トハ義務ノ執行ニ充テタル不

不動産ニ付キ行ノ可キ債主ノ時權ヲ云フ
プリウレ¹ー²ジノ權トイホテ³ー⁴クノ權トハ左ニ
記ス所ノ差異アリ

第一 プリウレ¹ー²ジノ權ノ順序ハ義務ノ種
類ニ因リ之ヲ定ム但シ此權ヲ有スル
者數人アリ其權相觸ル、時ハ法律ヲ
以テ其權利ノ種類ニ因リ其順序ヲ定ム
ト雖¹ルイホテ²ー³クノ權ノ順序ハ然ラ
ス其日附ノ先後ヲ以テ之ヲ定ム但シ
不動産ニ付テ¹ノプリウレ²ー³ジノ權ハ

其不動産ニ付テノイポテークノ權ヨ

リ先キニ之ヲ行フヲ得可シ

第一

イポテークノ權ハ不動産ノミニ付キ
之ヲ設ク可シト雖モ、
權利ハ動產不動産ノ兩種ニ付キ之ヲ設
クルヲ得又ハ動產ノミニ或ハ不動産ノ
ミニニ付キ之ヲ設クルヲ得可シ

第三

プリウイレージノ權ハ義務ノ種類ニ因
リ法律ヲ以テ定メタル所ナリト雖モ、
イポテークノ權ハ義務ヲ保証スル爲

× 雙方ノ約束ヲ以テ設クルヲ得可キ

モノトス

動産不動産ノ兩種ニ付テノアリ

ウレージノ權

動産不動産ノ兩種ニ付テノアリウレージノ權

トハ動産ト不動産トニ付キ行フヲ得可キ債主

ノ特權ヲ云フ然レモ此權ハ先ツ動産ニ付キ之

ヲ行ヒ動産ノ價額ノミニテハ義務ノ高ニ不足

ナル時ニ非レハ不動産ニ及ホス可カラス

動産不動産ノ兩種ニ付テノアリウレージノ權

ヲ以テ保ス可キ義務ハ即チ左ノ如シ

第一 裁判ノ費用〔即チ負債者ノ財産ヲ賣拂

ヒ且ツ其他人ヘノ貸高ヲ取集ムル爲

メノ入費

第二 喪禮ノ費用

第三 最後ノ疾病ノ費用

第四 奴婢ノ現在一年間ノ給金及ヒ既ニ經

過シタル一年間ノ給金

第五 本人及ヒ其家族ニ給供シタル飲食ノ

諸物品

但シ小賣商人ニ付テハ前六箇月間
給シタル品物ノ爲メ、卸賣商人ニ付
テハ前一年間給シタル品物ノ爲メ
此ニ記スル^レフリタレ^レジ^ノ權ヲ行
フ可シ

右諸件ノ爲メフリタレ^レジ^ノ權ヲ行フノ順序
ハ卽チ右ニ記スル所ノ順序ナリトス

動産ノミニ付テノフリタレ^レジ^ノ
權

特定ノ動産ニ付テノフリタレ^レジ^ノ權ヲ有ス

ル貸高ハ左ノ如シ

第一 家屋及ヒ土地ノ所有者ハ其家屋及ヒ

土地ノ貸賃ノ爲メ其貸家ニ備ヘタル

家具及ヒ其貸地ノ耕作用ニ供シタル

農具ニ付キ^付リ^レジ^ノ權ヲ有ス

第二 貸高保証ノ爲メ質物ヲ受取リタル債

主ハ其貸高ノ爲メ其質物ニ付キ^付リ^レ

タ^レジ^ノ權ヲ有ス

第三 他人ノ品物ヲ保全スル爲メ費用ヲ出

シタル者ハ其品物ニ付キ^付リ^レジ^ノ

ジノ權ヲ有ス

第四

動産ヲ賣リ其代金ヲ受取ラサル者ハ
其賣リタル動産ニ付キ「フリウレージ」
ノ權ヲ有ス

第五

旅店ノ主人ハ宿料ノ爲メ旅店ニ在ル
旅客ノ荷物ニ付キ「フリウレージ」ノ權
ヲ有ス

第六

荷物ノ運送者ハ其運送賃及ヒ之ニ副
加シタル費用ノ爲メ其荷物ニ付キ「フ
リウレージ」ノ權ヲ有ス

第七 官府ハ官吏、公証人、代書師、使吏等ノ職

務施行上ニ管シテ不正ノ所爲アルニ

因リ引負フタル金高アル時ハ此等ノ

者ヨリ出シタル保証ノ金高ニ付キ

ソウレージノ權ヲ有ス

不動産ノミニ付テノプリウレ

ジノ權

特定ノ不動産ニ付キプリウレージノ權ヲ有ス

ル債主ハ左ノ如シ

第一 不動産ノ賣主ハ其代金ヲ得ル爲メ其

賣リタル不動産ニ付キ「フリウレージ」
ノ權ヲ有ス

乙者若シ甲者ヨリ不動産ヲ買入レ未
タ其代金ヲ拂ハサル前ニ自己ノ意ニ
出テタルト債主ノ爲メ差押ヘラレ止
ムヲ得サルニ出テタルト「問ハス再
ヒ之ヲ他人ニ賣渡シタル場合ニ於テ
ハ未タ代金ヲ受取ラサル甲者ハ他ノ
債主ノミニ非ラス」イポテークノ權ヲ
有スル債主ヨリモ先キニ其代金ヲ受

取ル可キ特權卽チフリウレージノ權
アリ又甲ヨリ乙乙ヨリ丙ト次第ニ賣
渡シタル時ハ最モ故キ賣主ニ此特權
アリトス

第二 各相續人ハ遺物分派ニ付キ得可キ高
ヲ受取ル爲メ遺物財産中ニアル不動
産卽チ各自ノ取前ニ定リタル不動産
ニ付キフリウレージノ權ヲ有ス

第三 建造者請負人及ヒ職人又ハ家屋ノ改
造修繕ノ爲メ用ヒラレタル者ハ其工

料ヲ受取ル爲メ家屋ノ増價ニ付キ
リウレージノ權ヲ有ス

此増價ヲ定ムルニハ郡裁判所ヨリ命
シタル秤價人右工事ヲ爲ス前ノ其地
ノ模様ヲ証シ其後工事落成ノ後六箇
月内ニ秤價人再ヒ其工事ヲ証シ而シ
テ其工事ニ取掛ル前ノ價ト工事ヲ終
リシ後ノ價トノ差異
譬ハ其前ノ秤價一百圓ニシテ
其後ノ秤價二百二十圓ナルヲ以テ
ハ百二十圓ヲ以テ増價トス
其増價トス故ニ建造者及ヒ請負人等

ノアリウレ^リジノ權ハ其増價ニ付キ
行フヲ得可シ

不動産ニ付テノアリウレ^リジノ
權ヲ保全スル方法

不動産ニ付テノアリウレ^リジノ權ヲ保全スル
ニハ一箇ノ成規卽チ世ニ公ケニ示ス可キノ成
規アリ蓋シ此成規ハイポテ^リクノ權ノ條下ニ
於テ之ヲ説示ス可シ

凡テ不動産ニ付キアリウレ^リジノ權ヲ生スル
時ハ之ヲ世ニ公ケニ示ス事ヲ要トス是レ其不

動産ニ付テハ既ニ他人ノ權ニ抗スルヲ得可キ
一箇ノ權利即チアリウレ^リジノ權ヲ負フタリ
ト雖^レ他人之ヲ知ラスシテ尚ホ其不動産ヲ義
務ヲ負ハサル者ト誤認スル^{コト}ナカラシムル爲
メナリ

不動産賣主ノ其賣リタル不動産ニ付テノアリ
ウレ^リジノ權ヲ世ニ公ケニ示スノ方法ハ不動
産書入質支配所ニ届ケ出其簿冊中ニ賣買契約
書ノ登記アラン^{コト}ヲ求ムル事ト其支配所ニ於
テ官吏ノ職務ヲ以テ賣買証書ノ記入

職務ヲ以
テ爲ス所

ノ記入トハ賣主ノ申立ニ從ヒ登記ヲ爲シタル
後ニ官吏自カラ其役前ニテ記入スルヲ云フ
スル事トノ二箇ノ手數ヲ爲スニ在リトス
各相續人即チ遺物分派ヲ得可キ者ノ其遺物財
産ニ付テノアリウレージノ權ハ分派ノ日ヨリ
六十日内ニ右記入ヲ爲スヲ以テ之ヲ保全ス可
シ

又建造者及ヒ請負人等ノ其建造物ニ付テノアリ
ウレージノ權ハ工事ノ取掛リト其落成トラ
証スル前後二回ノ調書ヲ不動産書入質支配所
ノ簿冊ニ記入スルヲ以テ之ヲ保全ス可シ

右條件ヲ遵守セサル¹アリウレ¹ジノ權ハ完全
ナラサル可シ

イポテ¹ークノ權并ニイ¹ポテ¹ーク
ノ權ノ本性及ヒ其種類

イ¹ポテ¹ークノ權トハ義務ヲ行フ爲メノ保證ト
ナシタル不動産ニ付テノ物權ヲ云フ

イ¹ポテ¹ークノ權ハ不動産ノミニ限ル所ナリ故
ニ動産ハ之ヲイ¹ポテ¹ーク¹即チ書入質¹ト爲ス可
カラス

イ¹ポテ¹ークノ權ハ之ニ法律上ヨリ得ル所ノ者

ト裁判言渡ニ因リ得ル所ノ者ト契約ニ因リ得
ル所ノ者トノ三種ノ別アリ因テ今左ニ之ヲ掲
ク

法律上ヨリ得ル「イポテーク」ノ權
及ヒ裁判言渡ニ因リ得ル「イポテ

ーク」ノ權

法律上ヨリ得ル所ノ「イポテーク」ノ權トハ直チ
ニ法律ニ因リ生スル所ノ「イポテーク」ノ權ヲ云
フ

法律上ヨリ得ル所ノ「イポテーク」ノ權ヲ生ス可

キ場合ハ左ニ記スル如シ

第一 婚姻シタル婦ハ其夫ニ對シテ己レカ

權利ヲ行フ爲ノ其夫ノ現時所有シタ

ル不動産又ハ其夫ノ將來所有ス可キ

不動産ニ付キ^イホテ^クノ權ヲ有ス

第二 幼者及ヒ治産ノ禁ヲ受タル者ハ後見

人ノ處置良善ナルヲ保証スル爲メ其

後見人ノ財産ニ付キ^イホテ^クノ權

ヲ有ス

第三 國及ヒ邑又ハ諸公署

假ハ病院
貧院學校等
ハ其

會計官吏ノ財産ニ付キイホテークノ

權ヲ有ス

又裁判言渡ニ因リ得ル所ノイホテークノ權ハ
裁判ノ言渡ニ因リ當然之ヲ得可シ

裁判言渡ニ因リ得ル所ノイホテークノ權ハ法
律ヒヨリ得ル所ノイホテークノ權ト等シク負
債者ノ現時所有スル不動産ト將來所有ス可キ
不動産トニ付キ之ヲ行フ可シ

契約ニ因リ得ル所ノイホテークノ
權及ヒイホテークノ權ヲ設ク

ル法式

契約ニ因リ得ル所ノイポテークノ權ハイポテ
ークト爲ス不動産ノ所有者ニシテ且己レノ意
ニ從ヒ之ヲ賣拂フヲ得可キ權アル者ニ非サ
レハ之ヲ其債主ニ與フルヲ兼諾ス可カラス
是レ蓋シ負債者其義務ヲ行ハサル時ハ債主其
イポテークト爲シタル不動産ヲ差押ヘテ之ヲ
賣拂ハシムルヲアルニ因レハナリ
契約ニ因リ得ル所ノイポテークノ權ハ嚴正ナ
ル証書ヲ以テ之ヲ設ク可ク且特定ノ法式ヲ遵

守スルニ非レハ其効ヲ生セシム可カラス
契約上ノ「イポテーク」ノ權ハ公証人ノ記シタル
証書アルニ非サレハ之ヲ設ク可カラス又契約
上ノ「イポテーク」ノ証書ニハ「イポテーク」トナス
各不動産ノ種類性質等ヲ詳カニ記載スルヲ要
トシ「泛博」ノ詞ヲ用ヒタル時ハ其効ナカル可シ
負債者ハ現今所有スル所ノ不動産ニ非レハ之
ヲ契約上ノ「イポテーク」ト爲ス可カラズ
但シ別段ノ譯ヲ以テ若シ現今所有スル所ノ不
動産ノミニテ債主ノ權ヲ保証スルニ足ラサル

時ハ將來所有ト爲ス可キ不動産ヲイホテーク
ト爲スヲ契約スルノ許シアリ

イホテークノ權ノ順序ヲ規定ス

ル方法

イホテークノ權ハ一般ニ特定ノ法式ニ循ヒ不
動産書入質支配所ノ簿冊中ニ之ヲ記入セシム
ルヲ以テ其効ヲ生ス可シ

又イホテークノ權ノ順序ハ之ヲ記入シタル日
附ノ順序ニ由テ之ヲ定ム故ニ例ヘハ同一ノ不
動産ニ付キビエールナル者トボールナル者ト

ノ二人「イポテーク」ノ權ヲ有スルニ方リ「ビエール」ハ千八百六十七年一月一日ニ其權ノ記入ヲ爲サシ「ポール」ハ同年二月一日ニ記入ヲ爲サシタル時若シ其不動産ヲ賣拂フタルニ於テ「ビエール」先ツ其義務ヲ得可キニ因リ其不動産ノ賣高ヲ以テ「ビエール」ノ貸高ヲ償フニ充テ其餘額アラサル時ハ「ポール」ハ一錢ヲモ得ル能ハサルカ如シ

婦幼者及ヒ治産ノ禁ヲ受タル者
、法律上「イポテーク」ノ權ニ管

スル別段ノ規則

婦、幼者、治産ノ禁ヲ受ケタル者ニ屬スル法律上
ノイポテークノ權ハ其權ノ記入ヲ爲サシムル
ヲ要セス此等ノ者ノ權ハ記入ヲ受ケサル時ト
雖其効アリ且此等ノ者ノ權ノ順序ヲ定ムル
日附ハ法律ヲ以テ特ニ之ヲ定ム

今之ヲ掲クルニ婦ニ屬スル法律上ノイポテーク
ノ權ハ多クハ其婚姻儀式ノ日ヲ以テ之ヲ得
クハ日附トシ幼者及ヒ治産ノ禁ヲ受ケタル者
ノイポテークノ權ハ後見人ノ其職務ヲ行ヒ始

ノタル日ヲ以テ其日附ト定ム

但シ夫婦婚姻ヲ解キ又ハ後見ノ職ノ止ミタル

時ハ婚姻シタル婦及ヒ後見ヲ受クル幼者ノ固

自ラ己レノ權利ヲ行ヒ得可カラサルニ基キ

設ケタル記入ノ免除ノ許アラサルモノトス

故ニ寡婦又ハ旣ニ丁年トナリタル幼者又ハ治

産ノ禁ノ免除ヲ得タル者及ヒ此等ノ者ノ相續

人ハ婚姻ヲ解キ又ハ後見ノ職ノ止ミタル日ヨ

リ一年内ニ右記入ヲ爲サシム可シ

若シ右一年ノ期限内ニ記入ヲ爲サシメサル時

ハ曾テ婚姻儀式ヲ爲シタル日又ハ後見人ヲ撰
任シタル日ヲ以テ定メタル日附ノ順序ヲ失ヒ
其後現ニ記入ヲ爲サシメタル日ヲ以テ其順序
ヲ定ム可シ(千八百五十五年三月二十三日ノ法
律第八條)

イポテークノ權ノ記入ヲ爲ス法
式

記入トハイポテークノ權ヲ不動産書入質支配
所ノ簿冊中ニ記載スルヲニシテ之ヲ爲スハ不
動産所在ノ地ノ郡内ニ在ル右支配所ニ於テス

記入ヲ得ント欲スル債主ハイポテークノ權ヲ
生セシムル証書又ハ裁判所言渡書又ハ公証人
ノ記シタル証書ト印紙ニ認メ本人又ハ名代人
又ハ公証人又ハ代書師ノ記名調印セシ二箇ノ
目錄トヲ支配所ノ官吏ニ差出ス可シ但シ其目
録ニハ記入ヲシテ其効ヲ生セシムルニ欠ク可
ラサル諸件ヲ記載スルヲ要トス
然ル時支配所ニ於テハ其目錄ニ記シタル文詞
ヲ其支配所ノ簿冊中ニ記入シ且ツ二箇ノ目錄
中其一通ニ右記入ヲ爲セシ証ヲ記シテ之ヲ本

人ニ返ス可シ

右記入ハ一旦之ヲ爲スト雖凡十年内ニアラサ
レハ其効ヲ保ツナシ故ニ此定期ヲ過キサル
前更ニ再度其記入ヲ爲サシムルヲ要トス
若シ否ラサレハ債主曾テ其記入ヲ爲サシメシ
日附ニ因リ己レニ得タル所ノ特權ノ順序ヲ失
フ可シ

一度爲シタル記入ハ公証人ノ記シタル証書ヲ
以テ管條雙方ノ承諾ヲ表スルカ又ハ確定ノ裁
判言渡ニ因ルニ非サレハ之ヲ塗抹ス可カラス

プリタレージノ權トイポテークノ權ノ効

プリタレージノ權トイポテークノ權ハ共ニ債主ニ一箇ノ特權ヲ與フ故ニプリタレージノ權アル債主ハ總テ其他ノ債主ハ勿論イポテークノ權アル債主ト雖之ニ先タチ義務ヲ得可キ特權アリ又イポテークノ權アル債主ハ此權ヲ有セサル通常ノ債主ニ先チ義務ヲ得可キ特權アリトス

不動産ニ付テノプリタレージノ權又ハイポテ

一ノ權ヲ有スル債主ハ斯ク他ノ債主ニ先
テ義務ヲ得可キ特權アルノミナラス其他尚一
箇ノ特權卽チ追蹤ノ權ト稱スル者ヲ有ス
追蹤ノ權トハ負債者フリウレージノ權又ハイ
ポテークノ義務ヲ負フタル不動産ヲ他人ニ賣
渡シタル後ト雖モフリウレージノ權又ハイポ
テークノ權ヲ有スル債主之ヲ追蹤シテ尚其不
動産ヲ差押ユルヲ得可キ一箇ノ特權ヲ云フ
故ニハイポテークノ義務ヲ負フタル不動産ノ買
主ハイポテークニ付テノ義務ヲ行ハサル歟又ハ

其イポテークノ義務ヲ負フタル不動産ヲ拋棄
セサル歟又ハイポテークノ權ヲ滌除スル爲メ
ニ定メタル法式ヲ行ハサル歟ノ時ニ於テハ其
買入レタル不動産ハ曾テ其不動産ニ付キイポ
テークノ權ヲ有スル債主之ヲ差押ヘテ賣拂フ
ヲ得可シ

但シイポテークノ權ヲ有スル債主追蹤ノ權ヲ
行ヒ得可キニハ負債者ノ不動産賣渡証書ヲ不
動産書入質支配所ノ簿冊ニ登記スル前ニ其イ
ポテークノ權ノ記入ヲ爲サシムルヲ要トス

若シ然ラスシテ負債者先キニ其賣渡証書ノ登記ヲ爲サシメタル時ハ買主ニ不動産所有ノ權ヲ得セシメ債主等其不動産ニ付キイホテークノ權ノ記入ヲ爲サシムルヲ得ス

前文記スル所ノ規則ニ尚一ノ例外法アリ即チ賣主及ヒ遺物分派ヲ得可キ者ハ賣買及ヒ遺物分派ノ本日ヨリ四十五日内ニフリウレージノ權ノ記入ヲ爲サシムルヲ得可ク右期限内ニ不動産所有ノ權ヲ轉移セシ証書ヲ登記スル者アリト雖凡其記入ヲ爲サシムルノ差支トナルコ

ナシ 千八百五十五年三月二十三日ノ法律第六條

イポテークノ權ヲ負フタル不動
産ノ義效ヲ放解スル法方及ヒ記
入ヲ爲セシイポテークノ權ヲ滌
除スル事

イホテークノ權ヲ負フタル不動産ヲ買入タル者ハ賣主ニ其代金ヲ拂フ可カラス若シ然ラサルハ其不動産ニ付キイホテークノ權ヲ有スル債主ニ更ニ再度其代金ヲ拂フ可キ時宜ニ至レ

ハナリ

故ニ其買主ハ「イポテーク」ノ權アル債主ニ其代
金ヲ拂フテ以テ其不動産ニ管スル義務ヲ免レ
シムルヲ要トス

然レモ此法方ハ記入ヲ爲サシメタル貸高イポ
テーク

主ノ權ヲ有スル債
主ノ貸高ヲ云フ其不動産ノ價額ニ過キタル

時ハ行フ可カラサルニ因リ如此ノ場合ノ爲メ

法律上ニ「イポテーク」ノ權ノ滌除ト云ヘル一箇

特別ノ手續ヲ設ケタリ

「イポテーク」ノ權ヲ滌除セント欲スル買主ハ債

主等追次其イポテークノ權ヲ記入スルヲ止メ
シムル爲メ先ツ賣買ノ契約書ヲ不動産書入質
文部所ノ簿冊中ニ登記セシメ次ニ代書師ノ手
ヲ經テ其買入レタル不動産ノ代金ヲ渡ス可キ
旨ヲ記シタル書面ヲ曾テイポテークノ權ノ記
入ヲ爲サシメタル債主ニ送ル可シ
前文記スル所ニ從ヒ右書面ノ送達ヲ得タル債
主ハ之ヲ得タル日ヨリ四十日内ニ糶賣ヲ以テ
其不動産賣直段高ヨリ十分一ノ増直段ニ賣拂
ハンコヲ求ムルヲ得可シ

糶賣ノ場合ニ於テ若シ其附ケ直段ニ及ヘル價
ヲ以テ買入ル、者アラサル時ハ其直段ヲ附ケ
シ債主自カラ其不動産ヲ買入ル可シ

又右四十日ノ間ニ債主一人モ糶賣ヲ求メサル
時ハ其不動産ハ買主ノ有トナル可シ但シ買主
ハ不動産ノ價額記入ヲ經タル債主ノ貸高ニ足
ラサル時ト雖モ其價額ヲ拂フ歟又ハ之ヲ一箇
ノ金額附託所ニ納メテ以テ^イポテ^クノ義務
ノ放免ヲ得可シ

何レノ場合ニ於テモ賣買ノ契約ヲ爲シタル者

即チ買主ハ縱令糶賣ノ爲メニ其不動産ヲ已レニ得ルヲ能ハサルニ至リシ時ト雖モ賣買契約書ノ費用、契約書ノ登記ノ費用又ハ「イポテーク」ノ權ノ滌除ヲ得ル費用ヲ更ニ再ヒ其不動産ヲ買入レタル者ヨリ受取ルヲ得可シ

法律上ノ「イポテーク」ノ權ヲ滌除スル法方

法律上ノ「イポテーク」ノ權即チ別段記入ヲ受クルニ及ハサル「イポテーク」ノ權ヲ滌除スル法方ヲ概論スルニ此滌除ハ婦、幼者、治産ノ禁ヲ受タ

ル者ノ「イポテーク」ノ權ヲ負フタル不動産ヲ買
入レタル者ニ其不動産所有ノ權ヲ得セシムル
一法タリトス

婦、幼者及ヒ治産ノ禁ヲ受クタル者ノ「イポテーク」ノ權ハ記入ヲ受クルコトヲ免除セラレタルヲ
以テ買主其權ノ存否ヲ知ラスシテ間々「イポテーク」ノ權ヲ有スル者ト爲メ己レノ權利ニ損害
ヲ受クルコトアリ因テ此等ノ者ニ對シテ手落チ
ナカラシムニハ法律上ニ定メタル條除ノ方式ヲ
行フ可シ但シ其法方ハ賣買契約書ノ寫ヲ貼附

シ且買入^レノ旨ヲ婦又ハ後見人ノ監察者ニ通達シ且其契約書ノ寫ヲ新聞紙ニ記入スルニ在リトス

右法式ヲ行フタル日ヨリ二箇月内ニ法律上ノイポテ^イク^クノ權ノ記入アラサル時ハ之ヲ以テ全ク其不動産ノ義務ヲ放免セシメ又二箇月ノ定期内ニ右ノ記入アリシキハ買主其不動産ニ付キ法律上ノイポテ^イク^クノ權アルヲ知リ得タルニ因リ其當然ノ手續ヲ行フ可シ

第十三款 プレスクリプシ^イヲシノ權

「ナボレオ」民法書第三篇第二

十卷從第二十二條至第

「ナボレ」スキップシラシノ義意及ヒ

其區別

「ナボレ」スキップシラシノ權トハ法律上ニ定メタ

ル條件ニ循ヒ一定ノ期限間物件ヲ保有スルニ

因リ遂ニ其物件所有ノ權ヲ得ヌハ此一定ノ期

限間義務ヲ行ハサルニ因リ遂ニ其義務ヲ免カ

ル、權ヲ云フ

故ニ「ナボレ」スキップシラシノ權ニハ二種アリ其

一ハ期滿所得ノ權ニシテ即チ之ニ由テ物件又
ハ諸權利ヲ得ルニ在リ又一ハ期滿免除ノ權ニ
シテ即チ其効ハ義務ヲ行フ可キ者例ハハ
負債者ヲシ
テ其義務ヲ免カレシムルニ在リトス

期滿所得ノ權ヲ得ルニハ之レカ目的タル物件
及ヒ權利ヲ保有シタルヲ要トシ期滿免除ノ權

ヲ得ルニハ只定期ノ時間義務ヲ得可キ者例ハ
債

主ヨリ義務ノ催促ヲ受ケサル事ノミヲ要トス

アレスクリプシヲンノ權ノ總規

則

プル¹スクリプシヲ¹ンノ權ハ之ニ因リ利益ヲ受
ク可キ者ヨリ也ヲ得ント申立シ可ク裁判役ノ
職務ノミヲ以テ其權ヲ得セシム可カラス
若シ保有者又ハ負債者正實ノ意ヲ以テプル¹ス
クリプシヲ¹ンノ權ヲ得タリト申立ツ可カラサ
ルヲ知ラハ之ヲ申立ルヲ止メテ其權ヲ抛
棄ス可シ

何人ト雖凡人民ノ私有トナル可キ物ニ非サレ
ハフル¹スクリプシヲ¹ンノ權ヲ以テ之ヲ已レカ
所有ト爲スヲ得可カラス譬ヘハ國ノ公同財産

ニ屬スル諸物ノ如キハフ^コプレスクリプシラ^ンノ
權ニ由テ之ヲ得可カラス

期滿所得ノ權及ヒ保有ノ事

期滿所得ノ權ハ保有ニ因テ之ヲ得可キ事ハ既
ニ前文ニ掲ケタリ今亦保有ノ事ヲ記スルニ保
有トハ物件ヲ受有シテ之レカ利益ヲ得ル事或
ハフ^コプレスクリプシラ^ンノ目的タル權利ヲ執行
ノ事ニ在リトス

保有ニ因リテ遂ニ期滿所得ノ權ヲ得物件及ヒ
權利ヲ已レカ所有ト爲サンニハ左ニ記スル諸

要件ヲ具備スルヲ要ス

第一 繼續シテ間斷アルヲナク又他ヨリ

故障ヲ受ケスシテ公然ニ保有スル

事

第二 所有者ノ名義ニテ保有スル事

故ニ他人ノ爲メ其物件ヲ保有スル名義ノ者即チ借地人、預リ人、入額所得ノ權ヲ有スル者ノ如キハ所有者ノ名義ニテ保有セサルヲ以テ期滿所得ノ權アリト訴フルヲ得ス

アレスクツプシラレノ權ヲ得可

新

三

キ期限ノ經過シタル時間ヲ除去

スル事

プレスクリプションノ權ヲ得可キ時間ノ經過

ハ種々ノ事由ヲ以テ之ヲ支フルヲ得可ク此

事由ヲ名ケテプレスクリプションノ權ヲ得可

キ期限ノ經過シタル時間ヲ除去スル原因ト云

フ

プレスクリプションノ權ヲ得可キ期限ノ經過

シタル時間ヲ除去スル時ハ既ニ過キ去リタル

時間ヲ全クアラサリシ者ト看做ス可シ譬ハハ

保有者若シ其保有スル物件ヲ一箇年以上ノ時間己レニ用フルヲ妨ケラレタル時ハ其經過シタル時間ヲ除去ス可キカ如シ

又經過シタル時間ヲ除去ス可キ原由ハ期滿所得ノ權並ニ期滿免除ノ權ニ之ヲ適用スルヲ得可キ者ニシテ即チ義務ヲ得ントスル催促ノ書、義務ヲ得ントスル要決ノ書、財産ノ差押ヘ、裁判所ヘノ告訴、保有者又ハ負債者ヨリ所有者又ハ債主ノ權利ヲ認ムル事等皆之レカ原由トナル可シ

フレスクリプションノ權ヲ得可
キ期限ノ經過ヲ一時停止スル事
ハ特ニ法律ヲ以テ定メタル人ノ爲メ一時之ヲ
停止ス可シ

幼者及ヒ治産ノ禁ヲ受タル者ニ付テハ此期限
ノ經過ヲ止メ又未必ノ條件ニ管スル義務或ハ
期限ノ約定アル義務ニ付テハ其條件ノ現ニ生
シ又ハ其約定ノ期限ニ達スルニ至ル迄ハ其期
限ノ經過ヲ止ム可シ

「^レプレスクリップシヲ^レンヲ得可キ期限ニ取掛リタル後其期限ノ經過ヲ一時停止スル事由アリト雖モ既ニ經過セシ時間ヲ除去ス可カラズ其事由ノ消散シタル後更ニ「^レプレスクリップシヲ^レンニ取掛ル可ク而メ遂ニ全ク「^レプレスクリップシヲ^レンノ權ヲ得ントスルニハ其期限ノ經過ヲ一時停止セシメタル事由ヨリ更ニ前ニ得タル時間ヲ算入スルヲ得可シ

「^レプレスクリップシヲ^レンノ權ヲ得ル

ニ必要ナル期限

プレスクリプションノ權即チ期滿所得ノ權ト
 期滿免除ノ權ヲ得ルノ期限ハ日ヲ以テ算ス可
 ク時ヲ以テ算ス可カラス
 プレスクリプションノ權ヲ得ルニ付テノ普通
 ノ期限ハ三十年ト定ム故ニ三十年ノ間不動産
 ヲ絶エス保有シタル者ハ期滿所得ノ權ノ効ニ
 因リテ遂ニ其不動産ノ所有者トナル可シ
 又債主三十年ノ間負債者ニ對シテ義務ヲ得可
 キ催促ヲ爲サル時ハ負債者期滿免除ノ權ノ
 効ニ因リテ遂ニ其義務ヲ免カル可シ

期滿所得ノ權ヲ得可キ期限ハ保有者初メヨリ

正實ノ意ト正シキ名義

者若シ所有者ノ記ノ權ヲタル

ス可キ証書例ハハ賣買ノトヲ以テ物件ヲ保有
証書アルカ如キヲ云フ

スル時ハ其保有者ノ爲メ更ニ其期限ヲ短カ、

ラシムルヲ得可シ

故ニ斯ク正實ノ意ト正シキ名義トヲ以テ不動

産ヲ保有スル者ハ不動産所在ノ地ノ上等裁判

所管轄地内ニ其不動産ノ所有者ノ住スルト住

セサルトニ從ヒ其保有ノ期限十年又ハ二十年

ニ及ヘル時ハ其不動産ニ付テノ所有ノ權ヲ得

可シ

特別ノ「プレスクリプション」ノ權

特定ノ權利ノ爲メ設ケタル「プレスクリプション」ノ權
「シ」ノ權ヲ得可キ期限ハ尋常ノ期限ニ比スレハ
更ニ短カシトス因テ今之ヲ揭レハ授業師ノ受
ク可キ例月ノ教授料ニ付テノ訴訟又ハ旅店及
ヒ飲食店ノ主人、工丁及ヒ雇夫ノ受取ル可キ金
高ニ付テノ訴訟ニ於テハ六箇月ヲ以テ「プレス
クリプション」ノ權ヲ得可キ期限トス

又内科外科ノ醫師及ヒ義塾教師ノ謝金、使吏ノ

謝金商人ヨリ商人外ノ者ニ賣リタル品物ノ代
金、一年雇ノ僕婢ノ給金ニ付テノ訴訟ニ於テハ
一箇年ヲ以テブレスクリプシラシノ權ヲ得可
キ期限トス

又代書師其管條シタル訴訟ニ付テノ費用及ヒ
謝金ヲ得ント求ムルヲ得可キ期限ハ其訴訟落
着シタル時ハ其日ヨリ二箇年タル可ク其訴訟
未タ落着セサル時ハ五箇年タル可シ
前文記スル所ノブレスクリプシラシノ權ヲ得
可キ期限ハ確定ノ算計書、義勢ヲ認ムル証書又

ハ訴訟ノ手續アル時ニアラサレハ其既ニ經過
ヒシ時間ヲ除去ス可カラス

右ノ外ブレスクロプシヲシノ權ヲ得可キ期限

短カキモノハ負債者ノ既ニ其義務ヲ盡シタ

ル可キノ量料ニ基キテ之ヲ定ムル所ナリ因テ

負債者ハ眞ニ己レカ義務ヲ盡シタリト云フ誓

ヲ爲シテ其事ノ違ハサル旨ヲ証スルニ非サレ

ハブレスクロプシヲシノ權ヲ得ント求ムルヲ

得ス

又貸金ノ利息土地及ヒ家屋ノ貸借及ヒ一箇年

或ハ一箇年以下ノ期限ヲ定メテ拂フ可キ金高
ニ付テハ五箇年ヲ以テブレスクリフンヲ
權ヲ得可キ期限ト定ム

特別ノ規則

有動產ニ付テハ之ヲ保

ノ權ヲ得タル証書ニ等シ
効アリト定ムル規則

何人ト雖モ正實ノ意ヲ以テ動產ヲ保有スル時
ハ之ヲ保有スル事ノミヲ以テ其動產ノ真ノ所
有者タル名義ヲ得タルモノト爲ス可シ
諺ニ動產ハ之ヲ保有スル事ヲ以テ所有ノ權ヲ
得ル証書ニ等シキ効アリト云ヘルハ即チ此特

別ノ規則ニ於ケル本旨タリトス

然レモ動産ヲ失ヒ又ハ之ヲ盗取ラレタル者

チ即

所有

ハ之ヲ失ヒ又ハ盗取ラレタル日ヨリ三箇

年内ニ於テハ縱令正實ノ意ヲ以テ保有スル者

ノ手ニ入リタルト雖モ之ヲ取戻シ得可キノ權

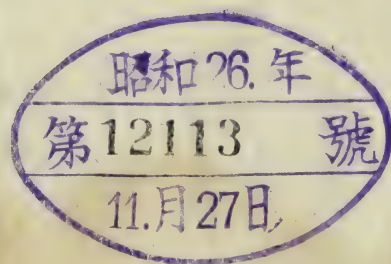
アリ

但シ其品物ノ保有者市場ニ於テ之ヲ買入レ又

ハ此類ノ品物ヲ賣販スル商人ヨリ其物件ヲ買
入レタル時ハ所有者ヨリ保有者ニ其買入レ代

金ヲ返ス可シ

佛國政典第十卷 終



昭和26.年

第12113 號

11.月27日



佛國政典

上

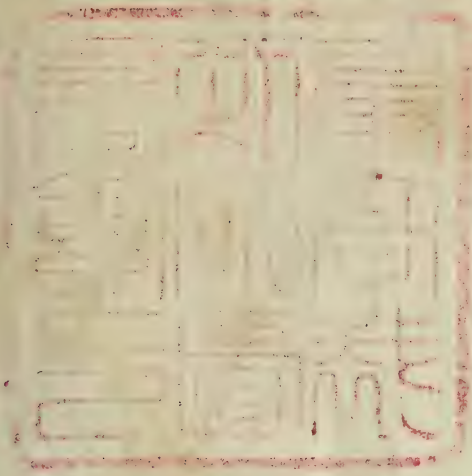
正
下
佛國政典
卷之三
上

法律

一四七

佛國政典

一二
一六



University of Illinois
Library at Urbana-
Champaign
IAS – Oak Street



水戸裁判所
管內下妻
區裁判所

佛國政典第十一卷

第五章 訴訟法

第一款 總論

訴訟法ノ解及上佛蘭西訴訟法ノ

事

訴訟法トハ告訴狀及ヒ答辯ノ書ヲ作ル規則、訴

訟下吟味ヲ爲シ及ヒ其裁判ヲ爲ス方法、裁判言

渡書ニ對シ控訴スル方法又ハ裁判言渡ヲ執行

スル事ニ管スル諸規則ヲ合シタル者ノ稱呼一

シテ此等ノ事柄ハ千八百六年ノ布告ニ係ル訴訟法ト云ヘル特別ノ法ニ由テ之ヲ規定ス

訴訟法ハ通計千零四十二條ニシテ之ヲ二部ニ分チ第一部ハ諸裁判所ニ於テ訴訟ノ吟味ヲ爲ス手續ト裁判言渡書ヲ執行スル方法トヲ論シ
第二部ハ種々ノ訴訟手續ヲ論ス

訴訟法ハ數度重要ノ改正取捨ヲ爲シテ大ニ其宜シキヲ得タリ今其最重要ナル改正ヲ舉テ茲ニ之ヲ記スレハ裁判言渡ニ因リ財産ヲ賣拂フ件ト財産分派ノ事トヲ改正セシ千八百四十一

年ノ法律及ヒ不動産ヲ差押ユル事ト債主ノ順序ヲ定ムル方法トニ管スル千八百五十八年ノ法律ニ在リトス但シ此二箇ノ法律ハ訴訟法中數多ノ條目ヲ改正シタルモノナリ

司法裁判所ノ制ノ再示及ヒ判斷ノ事

訴訟法ノ規則ヲ論究スルニハ先ツ司法裁判所ノ制ヲ知ルヲ要トシ而シテ其制ヲ知ラント欲セハ第一卷ニ記セシ司法權解釋ノ部ニ就テ之ヲ看ル可ク此所ニ於テハ只判斷ノ事ニ管スル

概論ノミヲ爲ス可シ

判斷人トハ爭ノ判斷ヲ爲サシムル爲メ爭ニ管
係アル雙方ノ者ヨリ特ニ選ミタル者ヲ云フ
判斷人ニ爭ヲ判斷セシムル約束ヲコンプロミ
スト云フ卽チ判斷依頼ノ契約ト云フ意ナリ
判斷依頼狀ハ契約ヲ結ビ得可キ權ト賣買ヲ爲
シ得可キ權トヲ有スル者ニアラサレハ之ヲ作
ルコトヲ得ス

特ニ世ノ安寧ニ管係スル所ノ爭例ヘハ夫婦其
財産又ハ其居ヲ分ツ事ノ爭人ノ身ノ上ニ管ス

ル爭、養育料ヲ存生中ノ贈遺或ハ遺囑ノ贈遺ト
爲シタル事ニ管スル爭ノ如キハ判斷人ニ托シ
テ之ヲ判斷セシムルヲ得ス

判斷依頼ノ契約ハ公証人ノ記シタル証書又ハ
私ニ調印シタル証書ヲ以テ爲スヲ得或ハ選
任シタル判斷人ノ面前ニ於テ調書ヲ記スルニ
因リ之ヲ爲スヲ得可シ但シ何レノ場合ニ於
テモ其契約書中判斷人ノ姓名ト爭ヒノ主意ト
ヲ記載ス可シ左ナクハ其依頼狀ノ効ナカル可
シ

判斷人ハ依頼狀中特ニ長キ期限ヲ定メタル時
ノ外依頼ノ契約ヲ爲シタル日ヨリ三箇月内ニ
其依頼ヲ受ケタル爭ヒヲ判斷ス可シ

判斷人ハ法律ノ通常ノ規定ト訴訟法ノ法式トヲ循守ス可シ但シ爭ニ管係セシ雙方ノ者ヨリ別段ノ免許ヲ受タル時ハ此限ニアラス

判斷人ノ記シタル判斷書

原 名
アルビ
ト
ラ
ル
ス
ハ
裁

判所ノ書記局ニ納メ裁判所ノ長ヨリ出ス所ノ
「
オールドシナンス、デキゼカチルト唱フル命令ヲ
受ケテ之ヲ執行フ可シ

訴訟裁判ノ談管

裁判ヲ受ル爲メ告訴ヲ爲サント欲スル者ハ最初先ツ何レノ裁判所ニ其告訴狀ヲ差出ス可キヤヲ究知スルニアリ而シテ之ヲ究知スルハ頗ル煩冗ノ事ニシテ先ツ其訴訟ノ種類ニ由リ治安裁判所商法裁判所郡裁判所ノ中何レノ裁判所ニ告訴ス可キヤヲ知ラサル可カラス蓋シ此一事ハ司法裁判所ノ制ノ大理ヲ以テ之ヲ了解スルヲ得可シ故ニ此所ニ於テハ只郡裁判所ハ普通ノ裁判所タル事ト郡裁判所ノ權任ハ他ノ

裁判所ニテ裁判ス可キ旨ヲ法律上ニ特定シタル事柄ヲ除クノ外總テ訴訟ヲ審判ス可キ事トニ在ルヲ記念ス可シ
既ニ裁判ヲ受ク可キ裁判所何レニ在ルヲ了知シタル時ハ又其同種ノ裁判所中何レノ裁判所ヲ談管タルヤヲ知ラサル可カテス之ヲ第二ノ疑問トス

因テ今茲ニ郡裁判所管轄上ノ規定ヲ概論スルニ本來原告人ハ被告人ノ住所ヲ管轄スル郡裁判所ニ告訴ス可ク若シ又被告人數人アル時ハ

誰彼ノ別ヲク其中一人ノ住所ヲ管轄スル郡裁判所ニ告訴ス可キヲ定規トス

又然レ此限ニアラサル者許多アリ今之ヲ説示スルニ例ヘハ不動産ニ管係シタル訴ハ不動産所在ノ地ヲ管轄スル裁判所ニ爲ス可ク遺物相續ノ事ニ管係シタル訴ハ遺物相續ノ始マル地ヲ管轄スル裁判所ニ爲ス可ク家資分散ノ事ニ管係シタル訴ハ家資分散ノアリシ地ノ裁判所ニ爲ス可キカ如シ

代書師ノ訴訟ニ管係スル事及ヒ

其職務ノ制限

郡裁判所及ヒ上等裁判所ニ訴出ルニ付テノ手續ハ代書師ヲ賴ミ原告被告ニ代ラシム可ク此兩裁判所ニ出訴スルニ付テハ本人自カラ出席ス可カラス必ス代書師ヲ以テ名代ト爲ス可シ告訴狀ニ調印ヲ爲シ訴訟ノ手續ヲ付ケ訴訟ノ仕方ヲ定ムルヨリ其他一切訴訟中ニ於テ必要ナル諸書類ヲ作ル等皆代書師ニ賴テ之ヲ爲サシム可シ

其他ノ場合ニ於テモ原告被告ハ必ス代書師ニ

依頼シテ其補助ヲ受ケサル可カラサル事アリ
例ヘハ相續人遺物財産ノ共通ヲ拋棄スル事又
ハ目錄ヲ記シテ遺物ノ價額ニ至ル迄ノ外遺物
財産ニ屬スル負債ヲ擔當セサル旨ノ約定ヲ以
テ遺物相續ヲ肯スル事等ヲ裁判所ノ書記局ニ
届出ント欲スル者ハ必ス代書師ニ依テ當人ニ
紛レナキ旨ヲ証ス可ク又裁判所ニ於テ糶賣ヲ
爲ス時ニ當リ其買人ノ負中ニ加ハリ裁判所ニ
出ント欲スル者ハ代書師ノ媒介ヲ頼ム可キカ
如シ

代書師ニ頼ミシ諸事ニ付テノ謝金高ハ訴訟費用目録ニ之ヲ定ム故ニ代書師其謝金高ヲ受取ラントスル時ハ其所屬ノ裁判所ニ乞フテ其高ヲ定ム可シ

裁判救助ノ事

裁判救助トハ貧人ニ訴訟費用高ノ前拂ヲ免除シ以テ其權利ヲ維持シ裁判所ニ告訴スルヲ得セシムル爲メ特ニ設ケタル所ナリ因テ今左ニ裁判救助ノ法方ヲ掲ク

郡裁判所及ヒ上等裁判所ニハ特設ノ一局アリ

テ以テ裁判救助ヲ受ケント申立ル訴ヲ審理ス
ルナリ故ニ裁判救助ヲ受ケント欲スル者ハ其
願書ヲ己レノ住所ヲ管轄スル裁判所ノ檢事ニ
宛テ差出ス可シ然ル時ハ檢事之ヲ受取テ裁判
救助局ニ出スナリ

但シ其願書ニハ左ニ記ス所ノニ通ノ書面ヲ添
フ可シ

第一 納税簿ノ抜書又ハ願人ノ租税ヲ納
メサル旨ヲ証スル租税取立役ノ証
書

第二 貧窮ヲ証スル申告書

右申告書ノ正實ナル旨ハ本人其住所ノ邑長ノ
面前ニ出テ、自カラ也ヲ証ス可シ若シ其申告
虚偽ナル時ハ裁判救助ヲ許サス且願人ハ其虚
偽ノ爲メ懲治罪裁判所ニ送ラレ禁錮ノ刑ト罰
金トヲ言渡サル可シ

裁判救助ノ効ハ願人ヲシテ假ニ官府ニ納ム可
キ税金、印紙税、登記税、書記官、代書師、使吏ノ謝金
等ノ免除ヲ得セシムルニアリトス
裁判所ニ於テハ裁判救助ヲ得タル者ヲ保護ス

可キ爲メ時ニ使吏、代書師、代言人ヲ任シ此等ノ
者其謝金ヲ受ク可カラス

右願人訴訟ニ勝タル時ハ裁判費用ヲ相手方ニ
求ムルヲ得可ク願人訴訟ニ負ケタル時ハ官府
ヨリ其願人ニ對シテ官府ニ納ム可キ入費ヲ出
サシムルヲ得可シ

第二效

郡裁判所ニ訴出シタルヨリ裁
判言渡ニ至ル迄ノ手續

勸解ノ前手續

郡裁判所ニ訴出ル手續中最初ノ所爲ハ被告人

勸解ノ爲メ其住所ノ治安裁判役ノ面前ニ呼
出スニ在リトス

蓋シ法律ニ於テハ互ニ訴訟ニ臨ム前ニ原被雙
方ノ者ヲ先ツ一ノ裁判役ノ面前ニ呼出シ裁判
役ノ説諭ヲ以テ互ニ和解セシメンヲ欲ス故
ニ若シ雙方ノ者互ニ和解スル時ハ治安裁判役
孰和ノ証書ヲ記シテ之ヲ証ス可ク若シ又和解
セサル時ハ治安裁判役雙方ノ者ヲ郡裁判所ニ
出テシム可シ

但シ訴訟ノ事柄ニ因ラハ初メニ勸解ノ法式ヲ

爲スニ及ハス原告被告ノ者直チニ裁判所ニ出
ツ可キ者アリ例ヘハ原告被告ノ者ノ身分ト其
訴訟ノ趣意ニ因リテ和解ヲ爲ス可カラサル訴
訟又ハ二人以上ノ被告人ヲ相手トシテ爲シタ
ル訴訟又ハ急速吟味ヲ受ク可キ訴訟ノ如キ皆
此類トス

原告被告ノ者治安裁判役ノ面前ニ出ルニハ本
人自カラ出席スルトモ又ハ名代人ヲ出ス所妨
ナカル可シ

被告人勸解ノ爲メ裁判所ニ出ツ可キ呼出狀ヲ

得テ治安裁判所ニ出席セラル時ハ十フラン
ノ罰金ヲ言渡サル可シ

被告人ヲ郡裁判所ニ呼出ス事及
ヒ被告人其名代ニ代書師ヲ任ス
ル事

原告人使吏ニ頼リテ被告人ヲ郡裁判所ニ呼出
ス書面ヲ呼出狀ト云フ而シテ此呼出狀ニハ原
告人ノ方ニテ諸事ヲ扱ハシムル爲メ代書師ヲ
任シタル事ト原告人代書師ノ宅ニ別段住所ヲ
選ミタル事トヲ記載ス可シ

又呼出狀ニハ訴訟ヲ審判ス可キ裁判所ト裁判
所ニ出席ス可キ猶豫ノ日限ト訴訟ノ目的ト其
訴訟ノ憑據トヲ記ス可シ

裁判所ニ出席ス可キ猶豫ノ日限ハ八日トス但
シ若シ被告人呼出ヲ受クタル裁判所々在ノ都
府内ニ住セリル時ハ其遠近ニ從ヒ八日以上ノ
猶豫ヲ爲ス可シ然レモ其訴訟ノ差延シ難キ月
ハ裁判所ノ長ヨリ八日以下ノ日限内ニ被告人
ヲ呼出ス可キ事ヲ許可スルヲ得可シ

被告人ハ右猶豫ノ日限内必ス代書師ヲ任シテ

之ヲ裁判所ニ出席セシム可シ

被告人ノ代書師ハ被告人ノ名代ト爲ツテ事ヲ
扱フ可キ權ヲ任セラレタル者ヲ原告人ノ代書
師ニ告知ス可ク此書面ヲ代書師ノ委任狀ト云
フ

被告人若シ代書師ヲ名代ニ任シ裁判所ニ出席
セシメサルハ原告人其呼出定期ノ終リニ至
リ被告人抗傳ノ儘ニテ裁判言渡アラシムヲ願
出ルヲ得可シ

裁判ニ至ル迄ノ訴訟ノ手續

被告人代書師ヲ名代人ニ任シタル時ハ出訴ノ
手續全備シタルニ因リ訴訟ノ事柄ヲ裁判所ニ
持出タシ被告人ノ論辨書ヲ差出シ原被雙方ノ
代書師ハ其本人ノ辯論ノ憑據ヲ互ニ相通告シ
次ニ其事柄ノ申立ヲ爲ス可シ
原告人及ヒ被告人ハ論辨ノ憑據ヲ委シテ申立
ツル爲メ各自ノ代書師ニ伴フテ自カラ裁判所
ニ出ルヲ得可シ但シ原告被告ノ者之ニ由テ
弊害ヲ醸ス可キ恐アル時ハ裁判役命シテ出席
ヲ禁スルヲ得可シ

蓋シ毎常多クハ原告被告ノ者自リテ論辨スルヲ爲サス其訴訟受持ノ裁判所附代言人アル時ハ代言人ヲシテ各自ノ論辨ヲ爲サシメ代言人アラサル時ハ代書師ヲシテ論辨セシムルヲ常習トス

雙方論辨ノ終リタル後ハ檢事又ハ檢事補其説ヲ陳述スルヲ得可シ又訴訟ノ事柄ニ因リテハ必ス檢事局ノ意見ヲ聞カサル可カラサル者アリ例ヘハ幼者・治産ノ禁ヲ受ケタル者及ヒ行方知レサル者ニ管スル訴訟又ハ人ノ身ノ上及ヒ

世ノ風儀ニ管係アル訴訟ノ如キハ皆此類トス
以上即チ訴訟ノ結末ニ至リテ裁判言渡ヲ受ク
ル手續ナリ

第三款 裁判言渡書

裁判言渡ノ解反ヒ裁判言渡書ヲ

記スル方法

裁判トハ當然訴訟ヲ審判ス可キ所ノ裁判所ニ
於テ爲シタル裁決ヲ云フ
裁判ハ裁判席又ハ裁判役會議ノ室ニ於テ議シ
タル上、衆説ヲ以テ之ヲ定ム可シ

郡裁判所ニ於テハ少クトモ裁判役三名以上ノ
説ニテ可トスルニ非ラサレハ裁判スルヲ得
可カラス然リト雖モ時アリテハ裁判役ノ人眞
偶數ニシテ可否兩説互ニ相等分シテ決シ難キ
事アリ故ニ兩説分斷ト云ヘル一箇ノ法方アリ
トス

兩説分斷ノ法ハ更ニ裁判役又ハ裁判役補一名
ヲ呼ビ裁判役又ハ裁判役補アラサル時ハ代言
人又ハ代書師一名ヲ呼ビテ裁判役中ニ編入シ
新ニ設ケタル裁判役會議ニ於テ更ニ再度訴訟

ノ諭辯ヲ爲サシムルナリ

凡テ裁判書ハ其根據タル主意ヲ掲ク可シ若シ然ラサレハ其裁判ノ効ナカル可シ

又裁判ヲ言渡シタル時ハ裁判所書記官ヲシテ之ヲ裁判席簿冊ニ記サシメ裁判所ノ長及ヒ書記官之ニ鈐印ス可シ

裁判言渡書ヲ寫シ及ヒ之ヲ送ル事及ヒ其執行ノ法式

裁判言渡ノ如ク執行ハント欲スル者ハ書記官ヨリ裁判言渡書ノ寫ヲ受取ラント求ムルヲ得

可ク之ヲ名ケテ裁判言渡書ノ寫取ト云フ

裁判言渡書ノ寫ヲ得ントスルニハ代書師ヲシ
テ裁判身分書ト稱スル書ヲ書記局ニ納メシム
可シ

右身分書ニハ原告被告ノ姓名身分ト裁判所ニ
於テ相互ニ爲シタル論辯ノ旨即チ訴訟ニ付テ
ノ申口トヲ記載シ書記官裁判言渡書ノ寫中ニ
之ヲ記入ス可シ

裁判言渡書ノ最初ノ寫ニハ裁判執行ノ文詞ヲ
記ス可シ故ニ其初メニ君主ノ名ヲ記シ終リニ

裁判言渡書ノ如ク執行ヲ可キ旨ヲ司法官吏ニ
命スル旨ヲ記ス可シ

裁判言渡書ハ之ヲ執行スル前ニ代書師其訴訟
ニ管シタル時ハ先シ代書師ニ送達シ其次ニハ
負訴訟ノ者ノ住所ニ送達ス可シ但シ之ヲ送達
スルハ使吏ヲ以テス可シ

裁判ノ費用

訴訟ニ負ケタル者ハ裁判費用ヲ辨ス可キ旨ノ
言渡ヲ受クルヲ本旨トス故ニ訴訟ニ負ケタル
者ハ自己ノ費用ヲ拂ヒ次ニ他ノ一方

勝訴訟ノ

者

費用ヲ償フ可シ

勝訴訟ノ方ノ代書師ハ直チニ其相手方ニ對シ
テ費用ヲ徵收スル事ヲ得可シ

裁判役ハ原告被告互ニ訴訟中ノ或ル箇條ニ付
キ負ケタル時ハ其費用ヲ雙方ニ割付ケテ之ヲ
擔當ヒシム可シ若シ又夫及婦、尊親屬及卑親屬、
兄弟及ヒ姉妹ノ間ニ訴訟ノ起ル時ハ原告被告
ヲシテ各自其費用ヲ擔當ヒシムルヲ得可シ

假ニ裁判言渡書ヲ執行スル事

法律ニ於テ定メタル場合殊ニ公正ノ証書又ハ

既ニ申渡シタル裁判又ハ明白ニシテ異論ナキ
約束ニ管スル時ハ裁判所ヨリ假ニ其裁判ヲ執
行ヒシムルヲ言渡スヲ得可シ蓋シ裁判ノ假
ノ執行ト云ヘル詞ノ義意如何ハ左ニ記ス可シ
總テ控訴シタル時ハ裁判ノ執行ヲ一時停止ス
可ク裁判所ヨリ假ニ其裁判ヲ執行ス可キ旨ヲ
命シタル時ハ裁判言渡書ヲ得タル一方ハ假令
他ノ一方ヨリ控訴ヲ爲シタル時ト雖モ他ノ一
方ニ對シ其裁判言渡書ノ如ク執行フ可キヲ
求メ得可シ

又商法裁判所ニ於テ爲シタル裁判言渡書ハ無
論一時假ニ之ヲ執行ス可シ然レモ相手方ノ控
訴シタル後裁判言渡ヲ執行ハント欲スル者ハ
後ニ其裁判言渡ノ取消トナリタル時相手方ニ
償還スルノ保証人ヲ立テ又ハ之レカ爲メ十分
ナル資産アルノ証ヲ立ツルヲ必要トス

被告人批傳ノ儘ニテ裁判言渡ヲ
爲ス事

雙方ノ者互ニ代書師ヲ任シ且代書師ヲシテ論
辨ヲ爲サシメテ受ケタル裁判言渡書ヲ雙方ノ

面前ニ於テ爲シタル裁判言渡書ト云ヒ被告人
若シ呼出シノ期限内ニ代書師ヲ任セス又ハ之
ヲシテ論辨ヲ爲サシメスシテ受ケタル裁判言
渡書ヲ被告人抗傳ノ儘ニテ受ケタル裁判言渡
書ト云フ故ニ被告人ノ抗傳ニハ代書師ヲ任セ
サルト之ヲシテ論辨ヲ爲サシメサルトノ二様
アリトス

被告人抗傳ノ儘ニテ受ケタル裁
判言渡ニ對シテ故障ヲ述ル事

一方抗傳シテ受ケタル裁判言渡ハ特定ノ法方

ニ從ヒ故障ヲ述フル事ヲ得可ク之ヲ名ケテ
ボジシラント云フ異論又故障ノ義ナリ

一方抗傳シテ受ケタル裁判言渡ニ對シテ故障
ヲ述ル時ハ曾テ訴訟ノ審判ヲ爲シタル所ノ裁
判所ニ於テ再ヒ其訴訟ヲ吟味ス可シ

被告人代書師ヲ任セサル抗傳ニ因ル裁判言渡
ニ付テハ裁判言渡書ノ如ク執行ノ時ニ至ル迄
故障ヲ述フルヲ得可シ

又右ノ抗傳ニ因ル裁判言渡書ハ之ヲ得タル日
ヨリ六箇月内ニ之ヲ執行ス可ク若シ然ラサレ

ハ其効ナキ者ト看做ス可シ

右裁判言渡ニ付テノ故障ハ特ニ使吏ヲ以テ相
手方ニ書面ヲ送達シテ之ヲ爲シ又ハ裁判執行
書或ハ要決書或ハ財産差押書ニ故障申立ノ旨
ヲ記入シテ之ヲ爲スヲ得可シ又何レノ場合
ニ於テモ右故障ヲ申立テタルヨリ八日内ニ代
書師ヲ任シテ再ヒ其故障ノ申立ヲ爲ス可シ
又被告人其代書師ヲシテ論辨ヲ爲サシノサル
抗傳ニ因ル裁判言渡書ニ付テハ代書師其裁判言
渡書ノ送達ヲ得タル日ヨリ八日内ニ其故障ノ

申立ヲ爲ス可シ而シテ故障ノ申立ハ代書師ヲ
以テ之ヲ爲ス可シ
故障ノ申立ニ付キ爲シタル裁判言渡ハ再度其
一方ノ者牒傳シタリト雖モ更ニ其言渡書ニ對
シテ故障ヲ述ノルヲ得ス若シ然ラサレハ數
度ノ牒傳ニ因リテ遂ニ訴訟ノ決極際限ナク遷
延スルニ至ル可シ

第四款 下吟味ヲ爲ス種々ノ方法

証人吟味ノ事

証人ヲ糾スコトヲ「アンクエー」ト云フ「アンクエー」ト

トハ証人ノ申口ヲ証ニ立ル爲メ爲ス所ナリ
証人吟味ヲ爲ス可キ旨ノ言渡書ニハ吟味ス可
キ事柄ヲ詳ニ記ス可ク其吟味ヲ爲スニ付テハ
別段裁判役ヲ其掛ニ任ス可シ故ニ証人吟味ハ
裁判役列坐ニテ爲スヲナク其掛裁判役之ニ任
シテ書記官ヲシテ其調書ヲ作ラシム可シ
原告被告ノ者ハ証人ヲ以テ証ヲ立テシム可ク
依テ必ス一方証人ノ吟味ト相手方証人ノ吟味
トヲ爲ス可シ

証人呼出ハ其日限ヲ定メテ一日前ニ掛リ裁判

役ヨリ達ス可シ但シ其証人ノ姓名ハ預メ相手
方ニ告知ス可シ

証人其呼出ヲ受ケテ出席セス且其差支ノ次第
柄ヲ証セサル時ハ罰金ヲ言渡サル可シ

原告被告ノ宗系ノ血屬及ヒ姻屬親及ヒ其配偶
者ハ証人タルヲ得可カラス

又左ニ記ス所ノ者ハ一定ノ制限ニ由リテ稍其
証ノ申立ヲ疑フ可キカ故ニ之ヲ証人ト爲シタ
ル時ハ相手方ヨリ故障ヲ述フル事ヲ得可シ其
例ヲ掲クルニ一方ノ者ノ再從兄弟ニ至ル迄ノ

血屬及ヒ姻屬ノ親、証人吟味ノ申渡アリタル後
本人ノ入費ニテ本人ト共ニ飲食ヲ爲シタル者、
訴訟ニ管係シタル諸事ニ付キ本人ニ請合書ヲ
與ヘタル者、本人ノ從者及ヒ僕婢ノ如キ是ナリ
証人ニ付キ故障ヲ述フルハ其証人ノ証ヲ申立
テントスル時ニ於テス可シ蓋シ然ル時ハ証人
ノ申立ヲ聞ク可シト雖モ裁判所ニ於テ其故障
申述ノ如ク聞届クル時ハ証人ノ陳述書ヲ裁判
席ニ於テ讀上クル事ナク且裁判所ニ於テ其陳
述シタル所ヲ取用フルヲナカル可シ

評價ノ事

評價人ヲシテ物品ノ検査又ハ別段ノ學識ヲ要
スル秤量ヲ爲サシム可キ事アル時ハ裁判所ヨ
リ其評價ヲ言渡スヲ得可シ

其言渡書ニハ評價ヲ爲ス可キ諸件ヲ記ス可シ
但シ其評價ハ雙方ノ者評價人一名ニテ異存
キ時ノ外三名ニテ之ヲ爲サシム可シ

評價人ノ撰任ノ事ニ付キ雙方協議セサル時ハ
裁判所ヨリ之ヲ指定ム可シ
評價人ニ撰マレタル者ハ其任ヲ辭スルヲ得

可シ但シ評價人ノ任ヲ兼諾シタル時ハ其任務
ニ管スレ諸事ヲ行フ前ニ誓ヲ爲ス可シ

雙方本人ハ評價ヲ爲リシム可キ旨ノ言渡書ノ
寫ト其他總テ訴訟ニ必要ナル書類トテ評價人
ニ渡ス可シ

評價人ノ申立書ハ評價人中ノ一名之ヲ記シ一
同連印ス可シ

但シ評價人一同無筆ナル時ハ評價ヲ爲ス地ヲ
管轄スル治安裁判所ノ書記官其申立書ヲ記シ
テ也ニ調印ス可シ

評價人ノ申立書ニハ其議ノ上、可ト爲ス所ノ一
説ヲ記ス可ク若シ數説アル時其各説ノ趣意ヲ
記ス可シ然レモ各自一人ノ私説ヲ記ス可カラ
ス

評價人申立書ノ正本ハ評價ヲ言渡シタル裁判
所ノ書記局ニ納ム可シ

評價人ハ謝金ヲ受ク可ク其高ハ裁判所長ヲ定
ムル所トス故ニ評價人ハ評價ヲ賴ミタル本人
又ハ其手續ヲ爲リシメタル本人ニ對シテ謝金
ヲ得ント要ムルヲ得可シ

評價人ノ申立書ニ記スル説ハ唯助言ノ爲ノノ
ミニシテ裁判所ノ意ニテ之ヲ取用ヒサルモ妨
ナシトス故ニ裁判所ニ於テ其説ニ反シタル裁
判ヲ爲シ又ハ再應ノ評價ヲ爲ス可キ旨ヲ言渡
スヲ得可シ

訴訟本案ニ付キ本人問糺ノ事及
ヒ本人出席ノ事並ニ誓ノ事

原告人ハ被告ノ者ハ訴訟ヲ爲ス時間中ニ其相
手ヲ呼出シ訴訟實事ノ問糺アラントヲ願ヒ得
可シ而シテ此事ヲ名ケテ訴訟本案ニ付テノ本

人問紀ト云フ

訴訟本案ニ付キ本人ノ問紀ス可キ旨ノ言渡書
ニハ問紀ス可キ本案ノ箇條ヲ記ス可ク且其言
渡書ニハ掛裁判役ヲ指定ム可シ

右掛リ裁判役ハ本案問紀ノ言渡書ニ記シタル
所ヨリ更ニ他ノ箇條ヲモ問紀スヲ得可シ

本案問紀ヲ受ク可キ本人掛リ裁判役ノ面前ニ
出席スル時ハ其申立ノ調書ヲ記ス可シ

若シ又本人問紀ノ席ニ出テサルカ又ハ出ルト
雖モ答ヲ爲スヲ肯ヒサル時ハ本人其問紀シ

ヲ受ク可キ箇條ヲ自認シクルト爲ス可シ
又裁判所ニ於テハ雙方本人自カラ裁判役又ハ
會議ノ室ニ出席ス可キ旨ヲ言渡シ得可シ是レ
蓋シ雙方本人ノ正實ナルヤ否ヲ辨知スル裁判
ノ法トス

又相手方ノ求ノニ因リ又ハ裁判所ノ職務ヲ以
テ一方本人ニ誓ヲ求ムルトテ得可シ而シテ之
ヲ爲スハ裁判席ノ相手方ノ面前ニ於テス可シ
第五款 急速吟味ヲ受ク可キ訴訟

通常ノ訴訟ト急速吟味ヲ受ク可

キ訴訟トノ差別

訴訟法ニ於テハ通常ノ事柄ト急速吟味ヲ受ク
可キ事柄トノ差別アリ

急速吟味ヲ受ク可キ事柄ハ法律上ニテ簡易ノ
モノト定メタルニ因リ通常ノ事柄ニ比スレハ
一層簡便ニシテ且費少ナキ訴訟ノ手續ヲ要ス
ルモノトス

急速吟味ヲ爲ス可キ事柄トハ治安裁判所ノ裁
決ノ控訴、爭アテサル証書ニ據レル訴訟、五百
フラン以下ノ金高ニ管スル訴訟、家賃、地代、年

賦金等ノ渡方ニ管スル訴訟ノ如キヲ云フ

急速吟味ヲ受ク可キ事柄ノ特質

急速吟味ヲ受ク可キ事柄ノ訴訟手續ハ通常ノ
事柄ニ比スレハ更ニ簡易ナルニ因リ書類論辨
書等ヲ送達スル手數ナク代書師ヲ任シタル後
直ニ裁判席ニ其訴ヲ爲ス可シ

又入費ニ付テモ急速吟味ヲ受ク可キ事柄ハ通
常ノ事柄ト差異アリ故ニ通常ノ事柄ニ於テハ
代書師訴訟ニ管スル諸書類ノ爲メ謝金ヲ受取
得可シト雖モ急速吟味ヲ受ク可キ事柄ニ

於テハ只費用ノ算還ト裁判ノ税トヲ要求ス可
 キノミトス而シテ其裁判ノ税ハ裁判ノ種類ト
 事柄ノ輕重ニ從ヒ三十「フラン」ヨリ七十「フラン」
 五十「サン」迄ノ間ニ在リトス
 又急速吟味ノ受ク可キ事柄ニ於テハ証人吟味
 ヲ爲ス可キ時ハ掛リ裁判役ヲ任シテ之ヲ吟味
 セシムルヲナク直ニ裁判所ニ於テ之ヲ聞紀
 ス可シ

第六款

裁判言渡ニ對シ控訴スル方法

裁判言渡ニ付テ故障ヲ述フル事

及ヒ控訴ノ總論

故障ノ申立ハ前文旣ニ之ヲ概論シタル如ク一方本人抗傳シテ受ケクル裁判言渡ニ對シ故障ヲ述フルニ在リテ其効ハ曾テ抗傳ノ儘、訴訟ノ裁判ヲ爲セシ裁判所ニ再ヒ其訴ヲ送戻スニ在リトス

控訴ハ之ニ反シテ下等ノ裁判所ニ於テ爲シタル裁決ヲ更ニ上等ノ裁判所ニ移ス所ノ訴訟ノ方法ニ在リトス故ニ治安裁判所ノ裁決ハ郡裁判所ニ控訴ス可ク郡裁判所又ハ商法裁判所ノ

裁決ハ上等裁判所ニ控訴ス可シ

控訴ヲ裁判スル裁判所ノ裁決言渡ハ確定ノモ

ノニシテ再ヒ上控ス可カラサルモノトス

治安裁判所ノ裁決ヲ控訴スル事

及ヒ控訴ス可キ期限

治安裁判所ニ於テ爲シタル裁決ハ訴訟ノ目的

百^ノランク以下ノ金高ナル時ハ之ヲ控訴ス可

カラサル確定ノ者トシ其他ノ場合ニ於テハ之

ヲ控訴マルヲ得可キ者ニシテ治安裁判役ノ裁

決ハ郡裁判所ニ之ヲ控訴ス可シ

治安裁判所ノ裁決ハ裁決ノ日ヨリ三日ヲ經サル前ニ之ヲ控訴ス可カラス又其裁判書ヲ送リタル日ヨリ三十日ノ後之ヲ控訴ス可カラス

郡裁判所ノ裁決ヲ控訴スル事及
ヒ控訴スルヲ得可キ裁決ノ事

郡裁判所ノ裁決ハ郡裁判所々在ノ地ヲ管轄スル上等裁判所ニ控訴ス可シ

郡裁判所ニ於テ爲シタル裁決中ニ上控ス可カラサル者アリテ即チ千五百フラン以下ノ事ニ管スル訴訟ノ裁決ハ之ヲ控訴ス可カラサル

モノト爲ス可シ

不動産ニ管係シタル訴訟ニ付テハ郡裁判所ノ
終審裁判ヲ爲ス可キ高ヲ其入額ニ由テ定ム故
ニ訴訟ノ目的タル不動産ノ入額六十「フランク」
以下ナル時ハ郡裁判所ニ於テ終審ノ裁決ヲ爲
シ之ヲ控訴スルヲ許サス

若シ訴訟ノ目的ト爲ス者ニ貨幣ヲ以テ秤量ス
可キ特定ノ價アラサル時ハ何レノ場合ニ於テ
モ郡裁判所ノ裁決ヲ控訴スルヲ得可シ

控訴ヲ爲ス可キ期限

控訴ヲ爲ス可キ猶豫ノ期限ハ雙方ノ面前ニ於
テ爲シタル裁決ニ付テハ其裁決書ヲ本人又ハ
其住所ニ送リタル日ヨリ二箇月トシ一方抗傳
シテ受クシ裁決書ニ付テハ故障ヲ述フ可カラ
サルニ至リシ日
即チ故障ヲ述フルヲ得
可キ期日ノ盡キタル時ヨリ
二箇月トス

然レモ右猶豫ノ日限ハ主タル控訴ノミニ適用
ス可シ故ニ控訴ヲ受ケタル者即チ對訴者ハ若
シ郡裁判所ノ裁決ニテ満足ナラズト爲マ時ハ
附帶ノ控訴ヲ爲スヲ得可ク此控訴ハ主タル控

訴中何時タルヲ問ハス之ヲ爲スヲ得可ク又右
猶豫ノ期限ノ終リタル後ト雖凡之ヲ爲スヲ
得可シ

控訴ノ効及ヒ控訴ノ手續

控訴ヲ爲スニ於テハ暫ク裁判言渡書ノ執行ヲ
停止ス可シ

控訴ニ付キ暫ク裁判言渡ノ執行ヲ停止スルノ
規則ハ普通ノモノトス然レモ法律ニ從ヒ裁判
所ヨリ控訴ノ有無ニ管セス假リニ裁判言渡ノ
如ク執行ヲ可キ旨ヲ言渡シタル時ハ此限ニア

ラス

上等裁判所ニ控訴スルノ手續ハ大概郡裁判所
ニ於ケル訴訟ノ手續ト同様ナリトス

上等裁判所ニ於ケル控訴狀ニハ通常ノ期限内
ニ相手方ヲ呼出ス旨ヲ記ス可ク且訴訟手續ハ
凡テ上等裁判所附代書師ニ依頼シテ之ヲ爲サ
シム可シ

裁判ヲ控訴シタル時ハ以前ト異ナリタル憑據
ヲ申立テ論辯スルヲ得可シ然レモ控訴ノ時ハ
更ニ以前ト異ナリタル訴訟ヲ爲ス可カラス

故ニ以前訴出シタル事柄ニ非サレハ上控裁判
所ニ出訴スルヲ得可カラス

覆審院ニ出訴スル事

郡裁判所ニ於テ爲シタル終審ノ裁決

即チ控訴
ス可カラ

サ
ル
裁
判

及ヒ上等裁判所ノ裁決若シ法律ニ乖戾セ

シ箇條アル時ハ原告被告ヲ問ハス其取消ヲ覆
審院ニ出訴スルヲ得可シ

覆審院ニ出訴スルニハ參議院及ヒ覆審院附代

言師ヲ以テス可シ

覆審院ニ出訴スル時ハ其取消サント爲ス裁決

ノ執行ヲ停止ス可カラズ

覆審院ニ於テ郡裁判所ノ裁決又ハ上等裁判所
ノ裁決ヲ法律ニ乖戾シ又ハ法律ヲ誤用シタリ
ト量定スル時ハ其裁決ヲ取消ス可シ但シ其裁
決ヲ取消ス時ハ曾テ其訴訟ノ裁決ヲ爲シタル
裁判所ト同等ノ裁判所（即チ上等裁判所又ハ郡
裁判所）ニ命シテ更ニ其訴訟ノ本案ヲ裁判セシ
ム

第七款 裁判申渡ノ執行

總規則

佛蘭西裁判所ニ於テ爲シタル裁判申渡書ハ佛
蘭西帝國內何レノ地ヲ問ハス之ヲ執行フコトヲ
得可シ

諸般ノ故障申立ヲ免スル裁判言渡書及ヒ書入
質ノ記入ヲ塗抹ス可キ裁判言渡書又ハ訴訟ニ
管ヤサル者ヨリ訴訟ヲ爲ス一方本人ニ金高ヲ
拂フ可キ裁判言渡書及ヒ其他總テ訴訟ニ管ヤ
サル者ヲシテ或ル事ヲ爲サシム可キ裁判言渡
書ハ之ニ付キ故障ノ申立ヲ爲シ又ハ控訴ヲ爲
ス可カラサルニ至リシ旨ノ証アル時ニアラサ

レハ其者ヨリ也ヲ執行フ可カラス又其者ヲシ
テ之ヲ執行ハシム可カラス
又裁判執行ノ旨ヲ記スル証書、裁判言渡書又ハ
裁判執行ノコトヲ命スル定式ノ文詞ヲ載セシ公
正ノ証書アルニ非サレハ財産ヲ差押ユルコトヲ
得可カラス

証書類ヲ使吏ニ渡シタル時ハ使吏ニ其執行ニ
付キ諸般ノ事ヲ爲ス可キ權ヲ與ヘタルモノト
ス但シ不動産差押ニ付テハ別段使吏ニ其委任狀
ヲ與フルヲ必要トス

裁判言渡書ヲ執行スル方法中ノ重要ナル者ハ
左ノ如シ

第一 債主、人ヨリ其負債者ニ金高又ハ物
件ヲ渡スヲ差止ムル事

第二 低償トシテ動産ヲ差押ユル事

第三 抵償トシテ不動産ヲ差押ユル事

第四 抵償トシテ現在土地ニ生スル所ノ

収納物ヲ差押ユル事

第五 質物ノ差押ユル事

第六 禁錮

右目次ニ從ヒ逐件左ニ之ヲ記セントス

債主ノ人ヨリ其負債者ニ物件ヲ

渡スヲ差止ムル事

債主ノ人ヨリ負債者ニ物件ヲ渡スヲ差止ムル

事ヲ名ケテセージアーレ一名オツボジシヲ

ント云フ今左ニ其概畧ヲ掲ク

例ヘハ予ハボールナル者ヲ負債者ニ持テルビ

エールノ債主ニシテ然ル時ハ予其ビエールヘ

ノ貸高ノ償還ヲ得ル爲メ予カ負債者ノ負債者

タル者即チボールニ對シビエールニ物件ヲ渡

ス事ヲ差止ムルヲ得可シ

斯ノ如キ場合ニ於テハ予ハ即チ渡方差止人ニ

シテ「ビエール」ハ予カ負債者タル可ク又「ボール

ハ即チ差止ヲ受クル者タリ

負債者ニ人ヨリ物件ヲ渡ス「ヲ差止メタルノ

効ハ其渡方差止ヲ受ケシ者ヲシテ其債主（即チ予カ

爲メノ負債者ニ負債ヲ拂フ「ヲ差止ムルニ在リトス

故ニ其渡方ヲ差止メラレシ者若シ其差止ニ循

ハヌシテ己レカ債主ニ拂方ヲ爲シテ差止ヲ爲

セシ債主ノ特權ヲ害セシ時ハ其債主（即チ差止ヲ爲セシ

者ニ對シテハ其拂方ノ効ナキ者トナシ其特權
アル債主ハ再ヒ其者ヲシテ拂方ヲ爲サシムル
ヲ得可シ

同上拂方ノ差止メヲ受ケシ者其義務ノ釋放ヲ
得ントスルニハ其差止ヲ爲セシ者ヲシテ差止
ノ免除ヲ爲サシムル爲メオツフルレールト云
ヘル手數ヲ爲シテ現ニ其差止メヲ爲セシ者ニ
金高ヲ渡サントスルヲ要トス然レモ若シ其差
止メヲ爲セシ者之ヲ免除セサル時ハ其金高ニ
別段ノ金額預リ所ニ納ム可シ

又若シ一人ニ對シ債主數名ヨリ金高渡方ノ差止メヲ爲セシ時ハ其差止メタル金高ヲ貸金ノ多寡ニ準シテ債主數名ニ分派ス可シ

債主ノ人ヨリ負債者ニ物件ヲ渡スコトヲ差止ムル手續

債主ハ公正ノ証書又ハ私ノ証書ニ據リ其負債者ニ他人（即チ負債者ノ負債者）ヨリ物件ヲ渡スコトヲ差止ムルヲ得可シ

但シ債主ノ証書ヲ有セサル時ハ負債者ノ住所ヲ管轄スル裁判所又ハ負債者ノ負債者タル者

ノ住所ヲ管轄スル裁判所ニ申立て其裁判所長
ノ許可ヲ受ケテ渡方ヲ差止ムルヲ得可シ
債主同上ノ渡方ヲ差止ムル書面ハ使吏ヲシテ
渡方差止ヲ受ク可キ者ニ送ラシム可ク且其日
ヨリ八日内ニ負債者ニ其旨ヲ報告ス可ク若シ
然ラサレハ其効ナカル可シ而シテ其報告書ニハ
負債者ノ住所ヲ管轄スル裁判所ニ於テ同上渡
方差止ノ法ニ適シタルノ裁判ヲ受クル裁判席
ニ右負債者ノ出席ス可キ旨ヲ要ム可シ
同上渡方差止ノ法ニ適シタルヤ否ノ裁判ヲ願

フ書狀ハ亦之ヲ八日内ニ物件渡方ノ差止ヲ受
クル者ニ通達ス可シ

若シ右渡方差止ノ法ニ適シタルヤ否ノ裁判ヲ
願フ訴狀ヲ通達セサル時ハ差止ヲ受クル者ヨ
リ己レノ債主ニ其債ヲ拂フタリト雖モ其拂方
ノ効アリトス

債主公正ノ証書ニ據テ同上渡方ノ差止ヲ爲シ
タル時又ハ裁判所ノ言渡ニ因リ同上渡方ノ差
止ヲ適法ノ者ナリト爲シタルガハ債主同上渡
方ヲ差留メラレシ者ニ其裁判席ニ出テ、幾許

ノ債ヲ償ノ可キヤヲ陳述セシム可シ
又同上渡方ヲ差止メラレシ者ハ郡裁判所ノ書
記局又ハ己レカ住所ノ治安裁判所ニ於テ右ノ
陳述ヲ爲ス可ク其陳述書ニハ負債ノ總高ト若
シ旣ニ其總高ノ中ヲ拂フタル時ハ其拂高トヲ
記シ又物件渡方ノ差止ヲ受ケタル諸件ヲ記ス
可ク論辨ノ憑據トナル可キ諸証書ハ其陳述書
ニ綴加ノ可シ

物件渡方ノ差止ヲ受ケタル者右ノ陳述ヲ爲サ
サルカ又ハ辨論ノ憑據トナル可キ諸証書ヲ出

サ、ルニ於テハ物件渡方ノ差止ヲ爲セシ原由
タル金高ヲ以テ其者ノ負債ナリト看做ス可シ
金高ノ種類ニ因リテハ其渡方ヲ差止ム可カラ
サル者アリ例ヘハ渡方ヲ差止ム可カラサル約
束ニテ與タル金高、養料又ハ官ヨリ與フル所ノ
養老銀ノ如キハ皆此類ノ者トス

又在職官員ノ俸給渡方ヲ差止ムルハ其高ノ五
分一以下ニ限ル可ク其餘ハ養料ト見做シテ其
渡方ヲ差止ムルヲ得ス

債主抵償トシテ負債者ノ動産ヲ

差押ユル事

債主抵償トシテ負債者ノ動産ヲ差押ユルトハ
負債者ノ動産ヲ差押ヘテ裁判所ニ附託スル事
ヲ云フニ在リ

抵償トシテ負債者ノ動産ヲ差押ユルニハ裁判
言渡書ノ如ク執行ヲ事ヲ得可キ証書又ハ公証
人ノ記シタル証書又ハ裁判言渡書アルヲ必
要トス

抵償トシテ負債者ノ動産ヲ差押ユルニハ少ク
トモ其日ヨリ一日前ニ要決ノ書ヲ負債者ニ送

ル可シ

同上差押ヘノ調書ハ証人二名ノ立會ニテ使吏
之ノ記ス可シ

右差押ヘノ調書ニハ差押ヘタル動産ノ品質種
類等ヲ巨細ニ記ス可シ

使吏ハ差押ヘタル動産ヲ保全スル爲メ其看守
人ヲ設ク可シ但シ動産ヲ差押ヘラレタル本人
ハ其看守人タルヲ得可シ

抵償トシテ動産ヲ差押ヘタル後ハ其動産ヲ賣
拂ノ可シ

差押ヘタル動産ノ賣拂ハ其調書ヲ本人ニ送達
シタル日ヨリ少クトモ八日ノ後ニアラサレハ
之ヲ爲ス可カラス但シ其差押ヘタル動産ハ先
ツ之ヲ貼附シテ衆人ニ知ラシメタル後糶賣ヲ
以テ之ヲ賣拂フ可シ

法律上ノ定メニ因リ債主ノ差押ユ可カラサル
物件アリ依テ左ニ之ヲ掲ク

第一 本人並ニ其同居スル子ノ臥床及ヒ

本人並ニ其子ノ爲メニ缺ク可カラ

サル衣服

第二 職人ノ本業ニ用ユル器具類

第三 本人及ヒ其家族ノ一月間ノ消費ニ

缺ク可カラサル麵粉及ヒ其他ノ飲

食物

第四 本人ノ望ミニ任セ牛一頭或ハ羊三

頭或ハ山羊二頭ト其獸類ノ一月間

ノ食料及ヒ寢藁ノ爲メ缺ク可カラ

サル藁並ニ穀草ノ類

又船舶ヲ差押ヘ及ヒ之ヲ賣拂フニ付テハ一箇

特別ノ法式アリ

抵償トシテ動産ヲ差押ヘラレタル者若シ其動
産ヲ竊偷シ又ハ之ヲ破毀スルキハ懲治罪裁判
所ノ審判ニ依テ禁錮及ヒ罰金ヲ言渡サル可シ

抵償トシテ負債者ノ不動産ヲ差
押ユル事

不動産ハ重大ノモノタルニ因リ負債者ノ動産
ヲ差押ユル時ノ法式ニ比スレハ更ニ長クシテ
嚴正ナル法式ヲ遵守スルニ非サレハ之ヲ差押
ユ可カラス

抵償トシテ負債者ノ不動産ヲ差押ユルニハ裁

判言渡書ノ如ク執行フコト得可キ証書アルヲ
要トス

相手方ノ抗傳シテ受ケタル裁判言渡アル時ハ
其故障ヲ申立ツルヲ得可キ猶豫ノ日限内ニ於
テハ其言渡書ニ據リ不動産差押ノ手續ニ取掛
ル可カラス

抵償トシテ負債者ノ不動産ヲ差押ユルニハ先
ツ其負債者ニ要決ノ書ヲ送り之ヲ送りタル日
ヨリ三十日ノ後ニ至ラサレハ其差押ヘニ取掛
ル可カラス

不動産差押ハ任ヲ受クル使吏ハ債主ヨリ特別
ノ權ヲ受クルヲ要トス

不動産差押ノ調書ニハ差押ヘタル不動産ノ委
細ノ模様ト其差押ニ付キ債主ノ代書師ヲ任シ
タル事トヲ記ス可シ但シ其調書ハ之ヲ記シタ
ル日ヨリ十五日内ニ之ヲ負債者ニ送達シ其送
達書面ノ寫ト共ニ之ヲ不動産書入質役所ノ簿
冊ニ登記ス可シ

右登記ヲ爲シタル上ハ負債者其差押ヘラレタ
ル不動産ヲ賣拂フヲ得可カラス

糶賣ノ箇條書ヲ裁判所書記局ニ
納ムル事、糶賣ノ箇條書ヲ公ケニ
爲ス時立會ノ爲メノ呼出狀ヲ送
ル事、糶賣ノ箇條書ヲ公ケニ爲ス
事、糶賣ニ付テノ貼附書、及ヒ新聞
紙記入ノ事

不動産差押ノ調書ヲ不動産書入質役所ノ簿冊
ニ登記シタルヨリ遅クトモ二十日内ニ債主ノ
代書師ヨリ裁判所ノ書記局ニ糶賣ノ箇條書ヲ
納ム可シ但シ其箇條書ニハ不動産ノ委細ノ摸

様、賣拂ヒニ付テノ箇條、及ヒ其附直段ヲ記ス可
シ

右手數終リタル後負債者、其不動産ニ付キイホ
テ、^レクノ權ヲ行ヒ得キ債主及ヒ法律上ノ^レイ
ホ[。]テ^レクノ權ヲ有スル債主ニ右糶賣ノ箇條書
ヲ受取リテ之ヲ公ケニ爲ス片立會フ可キノ呼
出狀ヲ送ル可シ

又裁判所ニ於テハ右糶賣ノ箇條書ヲ公ケニ爲
ス時糶賣ノ期日ヲ定ム可シ

右糶賣ヲ爲ス前ニハ法律上ニ定マリシ場所々

々ニ其旨ノ貼附書ヲ出ス可シ

又右糶賣ヲ公ケニ示ス爲メ州長ノ指定メシ新
聞紙ニ其旨ヲ掲ク可シ

糶賣ノ事及ヒ其効

裁判所ニ於テ公ケニ爲ス所ノ糶賣ニ付テハ凡
テ高札ノ者ヲ以テ落札人ト爲ス可シ而シテ其
糶賣ハ代書師ノ紹介ナケレハ之ニ加ハルヲ得
ス又代書師ハ不動産ヲ差押ヘラレタル者又ハ
代金ヲ拂ヒ得可キノカナキヲ分明ナル者ノ爲
メ糶賣ヲ爲ス可カラス

糶賣ヲ爲シタル時ハ差押ハタル不動産ニ付テ
ノイボテ^レク^レノ權ヲ有スル債主ノ權利ヲ其買
入代金ニ移シ買入人其代金ヲ預クル時ハ右債
主等ヨリ訴ヲ受クルヲ免ル可シ

再度増直段ニテ糶賣ヲ爲ス事買
入人ノ引受ニテ爲ス再度ノ糶
事及ヒ糶賣ヲ變シテ隨意ノ賣拂
ト爲ス事

抵償トシテ差押ハタル不動産ハ其糶賣ヲ爲シ
タル日ヨリ八日内ニ於テハ其附直段ヨリ六分

一ノ増直段ヲ以テ更ニ再度之ヲ糶賣ニ爲ス
ヲ得可シ

再度増直段ニテ糶賣ヲ爲スニハ裁判所書記局
之ヲ申立ツ可シ

然ル時ハ一旦糶リニテ付タル直段ニ六分一ヲ
加ヘシ直段ニテ再ヒ其不動産ヲ賣拂フヲ得

可シ

但シ此再度ノ糶賣ニ付右六分一ノ増直段ニテ
買入ル者ヲキ時ハ其再度ノ糶賣人ヲ以テ落
私人ト定ム可シ

若シ落札人糶賣ノ箇條ヲ行ハス又ハ代金ヲ拂
ハサル時ハ更ニ之ヲ糶賣ニ爲ス可シ之ヲ名ク
テ買入人ノ引受ニテ爲ス糶賣ト云フ然ル時ハ
第一回ノ買入人ハ其第一回ノ時ノ附直段ト第
二回ノ時ノ附直段トノ差異ヲ己レニ擔當ス可
シ
又不動産ヲ差押ヘテ之ヲ告知シ且其旨ヲ登記
シタル時ハ管條ノ各人互ニ協議シテ不動産差
押ノ上ノ糶賣ニ付キ定メタル法式ニ循ハス其
不動産ヲ公証人ノ立會ニテ賣拂フトモ又ハ裁

判所ニ於テ賣拂フトモ妨ナカル可シ

斯ノ如キ場合ニ於テハ裁判所ノ言渡ニ因リ不

動産差押ヘノ上ノ公ケノ糶賣ヲ變シテ隨意ノ

賣拂ト爲サシムルヲ得可シ但シ之ヲ名ケテ

變更ノ賣拂ト云フ

右賣方ハ諸雜費ヲ節限スルノ利益アル一法ト

ス

抵償ノ爲メ現在土地ニ生スル収

納物ヲ差押ユル事及ヒ抵當物ヲ

差押ユル事

抵償トシテ收納物ヲ差押ユルトハ未タ土地ニ
在ル收納物ヲ差押ユルヲ云フ而シテ其差押
ハ收納物ノ熟スル通常ノ期限ヨリ前六週日内
ニアラサレハ之ヲ爲スヲ得可カラス
又收納物ヲ差押ユルニハ先ツ其二日前ニ要決
書ヲ送り然ル後其差押ヘニ取掛ル可シ
抵當物ヲ差押ユルトハ家賃及ヒ地代ノ抵償ノ
爲メ其所有者ノ家屋ニ備付タル物件及ヒ耕シ
タル土地ニ在ル收納物ヲ差押ユル事ニ在リト
ス但シ其差押ヘニ取掛ル前ニ要決書ヲ送ル可

シ

抵當物ノ差押ハ所有者公正ノ借家証書又ハ借
地証書ヲ有セサル時ト雖モ之ヲ爲スヲ得可
シ但シ差押ヘノ法ニ適シタル旨ノ申渡書アル
ニ非サルハ其差押ヘタル動産ヲ賣拂フ可カラ
ス

負債者ヲ禁錮スル事及ヒ千八百

六十七年七月二十二日ノ法律

禁錮トハ負債者其負債ヲ拂ハサル時之ヲ囚獄
スル所ノ裁判言渡執行ノ一法ヲ云フ

禁錮ハ以前ノ法律ニ據レハ民法上ノ事ニ付テハ特ニ定メタル場合ニ於テ之ヲ爲ス可ク商法上ノ事ニ於テハ負債ノ高二百フランニ及ヘル時ハ之ヲ爲ス可ク又外國人ニ付テハ少クトモ百五十フランノ負債ノ爲メ之ヲ禁錮スルヲ得可ク刑法上ノ事ニ付テハ刑法裁判所ノ罰金ノ申渡、償還ノ申渡、損害ノ償及ヒ裁判入費並方ノ申渡ノ爲メ禁錮スルヲ得可シ

然ルニ千八百六十七年七月二十二日ノ法律ニテハ民法商法ニ法上ノ事ニ管シ及ヒ外國人ニ

管シテハ禁錮ヲ廢棄シ、以來刑法上ノ事ニ付キ
重罪裁判所懲治罪裁判所違式罪裁判所ノ三審
司ヨリ申渡シタル罰金ノ言渡ヲ執行ノ爲メ又
ハ刑法裁判所ノ審判ヲ經タル重罪輕罪又ハ註
記ニ付キ刑法裁判所及ヒ民法裁判所ヨリ其罪
犯ニ因リ損害ヲ受ケタル者ノ爲メニ申渡シタ
ル損害償還ノ言渡ヲ行フ爲メニ非サレハ禁錮
ス可カラサルコト定メタリ
又此法律以來裁判入費ノ爲メ禁錮ス可カラサ
ル事ニ定メタリ

禁錮ノ刑期ハ申渡ノ金高ニ由テ長短アリテ少
キモ二日多キモ二年トス

負債者真ニ其資産ナキ旨ヲ証スルヲ得タル時
ハ申渡ノ金高ニ准シテ一定ノ期限ノ半ハノ間
禁錮ヲ受タル上放免セラル可シ

第八款 債主數人ノ間ニ負債者ノ財産
ヲ分ツ事

分派ノ事

數人ノ債主其負債者ニ屬スル金高ヲ配分スル
ニ付キ協議セサル時ハ其分派ヲ爲ス爲メ裁判

ヲ受ク可シ

右訴訟ノ手續ハ差押ヘタル物件ノ價高ヲ債主
數人ニ分派スル手續ト負債者ノ不動産ヲ差押
ヘ之ヲ糶賣ト爲シテ得タル代金ヲ債主數人ニ
分派スル順序ノ手續ト二箇ノ訴訟手續ニ區別
ス依テ今之ヲ概論スレハ其第一ノ者ハ債主其
負債者ニ人ヨリ渡ス可キ物件ヲ差止ノタル時
其金高ヲ分派スル事ニ用ヒ又債主抵償トシテ
負債者ノ動産ヲ差押ヘタル時其動産賣拂代金
ヲ分派スル事ニ之ヲ用フ可キ者トシ其第二ノ

者ハ不動産賣拂代金分派ノ方法ヲ規定スルモ
ノトス

差押ヘタル物品ノ價高ヲ債主數

人ニ分派スル事

度方ヲ差止メタル金高又ハ物件賣拂ノ價高ヲ

分派スルニ付キ債主ト已レカ物件ヲ差押ヘラ

レタル者即チ負
債者ノ間ニ協議セサル時ハ其金高

又ハ差押ヘタル物件ノ價高ヲ債主數人ニ分派

ス可シ

債主中最モ先キニ手續ヲ爲ス者ノ代書師ハ裁

判所ノ長ニ申立テ、裁判所長ヨリ裁判役一名
ヲ右價高ノ分派掛ニ命セシムルヲ得可シ
右掛リ裁判役ノ通達ニテ各債主ハ其權利ヲ申
立ル爲メ呼出ヲ受ク可シ而シテ其呼出ヨリ一
月内ニ債主各自ニ貸高ノ証書ヲ差出シ代書師
ヲ以テ價高ノ分派ニ加入セラレンコトヲ願出ス
可シ

右定期ノ日限内ニ債主其証書ヲ差出サハルニ
於テハ其分派ノ高ニ付キ一言ノ申立ヲ爲ス可
カラサルモトス

定期ノ日限盡キタル後掛リ裁判役分派ノ草案ヲ記ス可ク之ヲ名ケテ假規定ト云フ

債主及ヒ負債者ハ右假規定書ヲ檢視シ若シ之ニ故障ノ筋アレハ假規定書終成ノ旨ノ告知アリシ日ヨリ十五日内ニ其旨ヲ申立ツ可シ

若シ何等ノ故障ヲモ申出ル者ヲキニ於テハ假規定書ヲ確定ノ者ト爲ス可ク若シ又故障ヲ申立ル者アル時ハ裁判所ニテ之カ審判ヲ爲シタル上其假規定ヲ存シ又ハ之ヲ改ム可シ

假規定書ノ確定ノ者トナリタル時ハ書記官各

債主ニ右金高ノ分派中ニ加ハリシ旨ヲ証スル
証書ヲ渡ス可シ但シ各債主ハ其貸高証書ノ真
正ナル旨ヲ書記官ニ向ヒ誓フ可シ

負債者ノ不動産ヲ差押ヘ之ヲ糶
賣トナシテ得タル代金ヲ債主數
人ニ分派スル順序

不動産ヲ差押ヘ之ヲ糶賣ト爲シテ得タル代金
ヲ債主ニ分派スル順序ヲ定ムル手續ハ動産又
ハ其他ノ金高ヲ差押ヘテ之ヲ分派スル手續ニ
於ケルカ如ク掛リ裁判役ノ指揮ヲ受ケテ之ヲ

爲ス可シ
蓋シ裁判所ニ於テ右分派ノ順序ヲ定ムルニハ
先ツ關係各人ノ協議ヲ爲サシムル爲メ掛リ裁
判所ヨリ書面ヲ贈リ債主負債者及ヒ不動産ノ
買主ヲ呼出ス可シ因テ此等ノ者ハ必ス其期日
ニ出席ス可ク若シ然ラサレハ二十五「フ」ランク
ノ罰金ヲ課セラル可シ
數人ノ債主互ニ協議シタル時ハ掛リ裁判役直
チニ其分派ヲ爲ス可シ
若シ又關係各人ノ協議セサルハ裁判上ノ手

續ヲ經テ分派ヲ定ムル順序ニ取掛リ四十日内
ニ各債主ヲシテ其証書ヲ差出サシム可シ
債主若シ右猶豫ノ期限内ニ其証書ヲ差出サ
ル時ハ分派ニ加ハルノ權ヲ失フ可シ

右猶豫ノ日限終リタル時ハ掛リ裁判役假ノ規
定書ヲ作ル可シ因テ債主此規定ニ付キ異存
ハ三十日内ニ之ヲ申出ス可シ

債主異存ヲ申立ルナキ時又ハ異存ノ申立ニ
付キ裁判ヲ言渡シタル後ハ掛リ裁判役右規定
書ヲ確的ノ者トナシ分派ニ加ハル可キ順序中

ニ入リシ債主ニ分派目錄書ヲ與ヘ其順序外ノ
債主ノ「イボテーク」ノ權ノ記入ハ之ヲ塗抹ス可
キ旨ヲ言渡ス可シ

佛國政典第十一卷 終

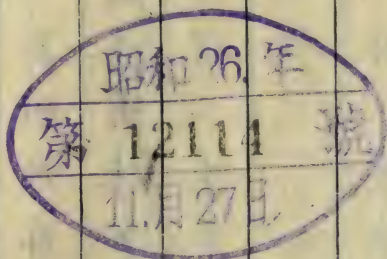
卷十一

四十七

五

法

崔

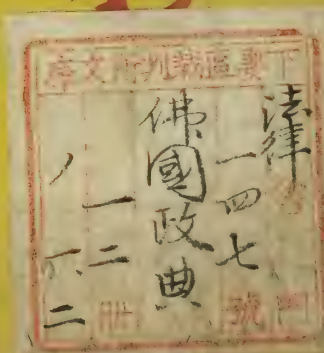




佛國政典

上

正
下洋田第
四十五卷
五拾
二尾





University of Illinois
Library at Urbana-
Champaign
IAS - Oak Street



水戸裁
管内裁
區裁

佛國政典第十二卷

第四部 刑法

刑法ノ區別

刑法ハ之ヲ分ツテ甚タ異ナレル二部トス即チ
眞ノ刑法及ヒ治罪法是ナリ而シテ眞ノ刑法ハ
罪科ト刑罰トヲ釋解シ之ヲ定ムル者ニシテ治
罪法ハ刑ヲ適用スルノ任アル裁判所即チ刑法
裁判所
ト此裁判所ニ於ケル治罪手續トヲ論スル者ニ
係ル因テ其目ヲ分ツテ下文ニ之ヲ説カントス

第一章 眞ノ刑法

第一款 總論

刑法ノ大典

刑法ノ大典ハ正義及ヒ勸善ノ道ニ背戾スルト
人民ノ資益ヲ害スルトノ二様ノ性質ヲ兼ヌル
所業ヲ爲セシ者ヲ國ヨリ懲罰スルヲ得可シト
爲ス確説ニ在リトス

蓋シ國ハ犯人ヲ罰スト雖モ決シテ讐ヲ報ユル
ニ非サルハ讀者ノ宜シク注目了解セサル可カ
ラサル者ニシテ國ノ犯人ヲ罰スルノ趣旨ハ犯

人ヲシテ其一旦行ヒシ惡行ヲ制止セシメカメ
テ之ヲ善道ニ復セシムル爲メト其懲罰ノ前鑑
ニ依テ其犯人ニ効フ者ナカラシムル爲メトニ
在リトス

刑ハ正義ト人民ノ資益トヲ以テ監定セシ罪科
ノ輕重ニ准スルヲ要トス

以上論スル所ハ我カ刑法ノ原典ナリトス然リ
而メ一ノ所業ヲ爲セシ者アル時法律上ニ其犯
罪タルヲ定メ且其罰則ヲ設ケタルニ非サレハ
之ヲ犯罪ト爲シ罰ス可カラサルハ讀者ノ更ニ

注意ス可キ所タリ

刑法ノ缺ク可カラサルヲ論ス

刑法ハ我法律中ノ最重要且最至難ノ者ノ一ト
ス蓋シ人民ヲ擾攪シ又ハ世ノ爲メ禍害ヲ生セ
シムル所業ハ嚴密且正直ニ之ヲ罰スルヲ極メ
テ必要タリ

故ニ刑法裁判所ニ於ケル治罪手續ハ懲罰ノ缺
ク可カラサル所以ト被告人辯論ノ權利トヲ互
ニ相抵觸セサル様之ヲ定メ且此類ノ事ニ付テ
ハ特ニ恐ル可キ裁判ノ錯誤ヲ防ク可キ様之ヲ

定メタリ

右ノ弊害ヲ防クハ頗ル至難ノ事ニシテ法學家
及ヒ政事家ノ須ク其研究ヲ遂ク可キ所ナリ而
メ今此ニ記スル所ハ僅カニ刑法中ノ諸件ヲ畧
説スルニ過キス

刑法ノ編纂及ヒ特別ノ法律ヲ論

ス

我カ犯罪懲罰ノ法律ハ殆ント刑法及ヒ治罪法
ノ二法中ニ之ヲ網羅ス而シテ刑法ハ諸罪科ノ
品目義意ノ掲クルト其罪科ニ當ツ可キ刑ヲ定

ムルトニ在リテ此法ハ千八百十年ニ布告シ其
條數ハ通計四百八十四條トス
又刑法ノ諸條目ハ二次ノ改正ヲ經タル者ニシ
テ初メテ其改正ヲ爲セシハ千八百三十二年ニ
在リ其次ノ改正ハ千八百六十三年ニ在リ而シ
テ此二次ノ改正ニ因リ無用ノ刑ヲ廢シ過嚴ノ
法律ヲ寬ニシ以テ刑罰ノ宜シキヲ得セシメタ
リ
刑法中ニハ凡百ノ罪科ヲ遺漏ナク掲ケサルニ
因リ特別ノ法律ヲ以テ之ヲ補ハサル可カラス

依テ漁獵ニ管スル罪犯、山獵ニ管スル罪犯、山林
ニ管スル罪犯、專賣ノ免許ヲ得シ發明物質造ノ
罪犯及ヒ其他ノ罪犯ハ特別ノ法律ニ其刑ヲ定
メタリ

治罪法ハ千八百〇八年ノ布告ニ係リ諸等ノ刑
法裁判所ニ出訴スルニ付テノ治罪ノ手續又論
スル者ニシテ其條數ハ通計六百四十三條ト
治罪法モ刑法ニ於ケルカ如ク重大ノ改正ヲ爲
セシ者ニテ近今ノ法律ヲ以テ治罪手續ノ定期
ヲ威縮シ且訴訟中其場合ニ因リテハ止ムヲ得

サル所置即チ鞫問ヲ爲ス前被告人ヲ拘留スル
ノ過嚴ナルヲ更ニ寛ノラシメタリ是レ蓋シ懲
治罪裁判所ニ於テ現行犯罪ヲ吟味スル手續ニ
管セシ千八百六十三年六月一日ノ法律及ヒ假
リノ釋放ノ事ニ管セシ千八百六十五年七月十
四日ノ法律ヲ以テ爲セシ改正ニ在リトス

第二款 犯罪及ヒ刑ノ區別

犯罪ノ區別 即チ重罪、
輕罪、註誤

通常刑法ニ其懲罰ヲ定メシ諸所業ヲ總稱シテ
犯罪ト云フ然レ又其所業ヲ分ツテ三種ト爲

ス即チ重罪、輕罪、註誤是レナリ

重罪トハ最重劇ノ罪ニシテ其罰ハ施體加辱ノ

刑ヲ用ヒ其裁判ハ重罪裁判所ニ於テ之ヲ爲ス

輕罪トハ重罪ニ比スレハ一層輕キ罪ニシテ其

罰ハ懲治ノ刑ヲ用ヒ其裁判ハ輕罪裁判所又懲治罪

裁判所ト云フニ於テ之ヲ爲ス

又註誤トハ前ノ二罪ニ比スレハ更ニ輕キ罪ニ

シテ其罰ハ違警ノ刑ヲ用ヒ其裁判ハ違警罪裁

判所又註誤裁判所ト云フニ於テ之ヲ爲ス

斯ク犯罪ニ區別アルヲ以テ亦其刑ニ區別アリ

因テ左ニ之ヲ掲ク

刑ノ區別

刑ニ施體兼加辱ノ刑、加辱ノミノ刑、懲治ノ刑、違
警ノ刑ノ別アリ而シテ施體兼加辱ノ刑ト加辱
ノミノ刑ハ重罪ノ外絶エテ用フルヲナキモノ
トス

重罪ノ刑

法律上ニテ施體及ヒ加辱ノ刑ニ算列シタル刑
ハ左ノ如シ

第一 死刑

當今此刑ヲ用フルハ稀少ニシテ只特
定ノ大罪ノ爲メ存スルノミトシ殊ニ
千八百四十八年以來ハ國政上ノ犯罪
ニ就テハ此刑ヲ廢シタリ

第二 無期ノ徒刑及ヒ有期ノ徒刑

此刑ノ申渡ヲ受ケシ者ハ痛苦ヲ極ム
ル勞動ニ使用セラレ藩屬地殊ニギユ
イヤン^シニ設クル所ノ徒刑場及ヒ本
國內ニ在ル徒刑場ニ於テ役セラル可

但シ婦女ノ徒刑ヲ申付ケラレシ時ハ
ハ、ゾ、ド、ヲ、ス、ト云ヘル特別ノ舍
屋内ニ役セラル可ク六十以上ノ老人
ハ徒刑ニ代フルニ場内驅役ノ刑ヲ以
テス可シ千八百五十四年五月三十日
ノ法律

有期徒刑ノ年限ハ五年ヨリ少カラス
二十年ヨリ多カラサル可シ
第三 場内驅役ノ刑

此刑ヲ受ケシ者ハ工業驅役場内ニ囚

セラレテ此場内ニ於テ驅役セラレ其
驅役ニ因リ生シタル利益ノ一部ハ犯
人ニ與フルナリ而シテ此刑ノ年限ハ
五年ヨリ少カラス十年ヨリ多カラサ
ル可シ

第四

城堡内流刑及ヒ通常流刑

此二刑ハ國政上ノ罪ニ限ル者ニシテ
此刑ニ處セラレシ者ハ藩屬地ニ謫セ
ラレ藩屬地ニ在テ其犯人ノ身體ヲ監
護スル要ト相抵觸セサル限内ニ於テ

其自由ヲ得ルモノトス而シテ此二刑

ハ何レモ無期ノ刑ナリトス

法律上ニテハマルキーズ島ヲ以テ謫

流ノ所ト定ム

第五 囚獄ノ刑

當今此刑ハ亦國政上ノ重罪ノミニ限

ル者ニシテ此刑ニ處セラレシ者ハ佛

國內ニ在ル一箇ノ城砦中ニ幽囚セラ

レ其刑場ニハ「ミリール、アン、メール」地名

ノ城砦ヲ以テス但シ其刑期ハ五年ヲ

リ少ナカラス二十年ヨリ多カラスト

又加辱ノミノ刑ニ二箇アリ即チ

第一 追放ノ刑

第二 公權剥奪ノ刑

追放ノ刑トハ佛蘭西國內ヨリ犯人ヲ追放スル

刑ヲ云ヒ公權剥奪ノ刑トハ特定ノ權ヲ奪ハル

、刑ヲ云フ而シテ其權中ノ重大ナルモノハ諸

官員ニ登用セラル、ノ權、諸般ノ政權、總テノ賞

牌ヲ帶持スルノ權、佛蘭西兵員ニ加ハルノ權、親

族會議ニ加ハルノ權、後見人及ヒ後見人ノ監督者ト爲ルノ權ノ如シ

但シ親族ノ同意ニテ己レカ實子ノ後見人タルノ權ハ之ヲ奪ハル、コナカル可シ

重罪ノ刑ニ附加スル刑

公權剥奪ノ刑ハ間々本刑ト爲シテ申渡スコアリト雖モ多クハ附加ノ刑トス

徒刑、流刑、囚獄ノ刑、場内驅逐ノ刑、追放ノ刑ヲ言渡ス時ハ之ニ附加スルニ常ニ公權剥奪ノ刑ヲ以テシ此諸刑中、追放ノ刑ヲ除クノ外ノ刑ニ處

スル時ハ法律上ノ治産ノ禁ヲ之ニ附加シ其犯
人ヲシテ己レカ財産ヲ支配スルヲ得サヲシ
メ更ニ後見人ヲ任シテ其者ニ代ラシメ並ニ後
見人ヲ監督者及ヒ親族會議ヲ設ク可キヲ恰モ
狂癲ノ故ヲ以テ治産ノ禁ノ受クル者ノ如シ
無期ノ徒刑流刑ノ如キ無期ノ刑ニ處スル時ハ
法律上ノ治産ノ禁制及ヒ公權剝奪ノ刑ノ外更
ニ之ニ附加スルニ特別ノ禁ヲ以テス例ヘハ生
存中贈遺ノ証書又ハ遺囑贈遺ノ証書ヲ以テ贈
與ヲ爲シ又ハ其贈與ヲ諾スルノ禁及ヒ刑ニ處

セラレシ者ノ其處刑ノ前ニ爲セシ遺囑ノ証書
ノ取消ノ如シ而シテ此等ノ諸禁ハ千八百五十
四年五月三十一日ノ法律ニテ曾テナポレオン
民法書ニ定メシ准死ノ刑ニ代ヘタル者トス
又有期ノ徒刑、囚獄ノ刑、場内驅役ノ刑ニ處セラ
レシ者ハ附加ノ刑トシテ其刑期ノ終リシ時ヨ
リ終身政府ノ監察ヲ受ク可シ而シテ此監察ノ
効ハ官府ヲシテ右ノ處刑人ニ特別ノ住所ヲ指
示シ巴里及ヒ其近傍、里昂及ヒ其近傍ニ住所ノ
設ケヲ禁スルヲ得セシムルニ在リトス

輕罪ノ刑

輕罪裁判所ニ於テハ左ノ刑ヲ申渡スヲ得可シ

第一 禁錮

但シ其期日ハ六日ヨリ少ナカラス五
年ヨリ多カラサル可シ

第二 罰金

但シ其金高ハ十六フランクヨリ少ナ
カル可カラス又罰金ハ重罪ノ刑ニモ
之ヲ用フ可キ者タリ

第三 特定ノ期限内公權民權族權ヲ行フノ

禁例へハ入札ヲ爲シテ議負ヲ選舉ス

ル權、兵器ヲ帶持スル權、親族會議ニ加

ハルノ權、後見ノ職ヲ行フ權等ヲ禁ス

ルヲ云フ

第四 特定ノ年限内政府ノ監察ヲ受ケシム

ル事

但シ法律上特別ノ定メアル時ニ限ル

可シ

輕罪ノ刑ニ於テモ亦重罪ノ刑ニ於ケルカ如ク
犯罪ニ因リ得タル物件又ハ犯罪ヲ行フニ用ヒ

タル物件ヲ没収スルヲ得可シ

註誤ノ刑

註誤ノ刑ハ一日ヨリ少ナカラス五日ヨリ多
カラサル禁錮、一「ヲ」ランクヨリ少ナカラス十五「フ」
ランクヨリ多カラサル罰金及ヒ特別ノ品物没
収ニ在リトス

第三款 再犯

再犯ノ義意

既ニ罰ノ申渡ヲ受ケシ者更ニ復タ罪ヲ犯ス時
ハ之ヲ再犯ト云フ蓋シ再犯ハ其犯人ノ惡意更

ニ大ナルヲ表スル者ニシテ其犯人ヲ處スルハ
一層重劇ノ刑ヲ以テス可シ何トナレハ第一次
ノ刑罰ニテ尚其后来ヲ慎マシムルニ至ラサレ
ハナリ

再犯ハ數罪共ニ發スルトハ異ナリテ數罪共發
ノ場合ニ於テハ其中最重劇ノ罪ノミノ刑ニ處
スルヲ以テ通規トス

再犯ノ爲メ刑ヲ増加スル事

再犯ハ左ノ三箇ノ場合ニ在リトス

第一 重罪ノ爲メ施體加辱ノ刑ニ處ヒラレ

再ヒ重罪ノ爲ノ其審判處決トナル事
今茲ニ再犯ノ爲ノ刑ヲ増如スル例證ヲ掲クル
ニ若シ第二回ノ重罪、場内驅役ノ刑ニ當ル時ハ
其再犯人ヲ罰スルニ場内驅役ノ刑ヲ以テセス
有期ノ徒刑ヲ以テス可ク第二回ノ重罪有期ノ
徒刑ニ當ル時ハ其至重ノ刑ニ處シ又其刑期ヲ
増シテ四十年ノ徒刑ト爲スヲ得可シ又第一
回ノ重罪及ヒ第二回ノ重罪共ニ無期ノ徒刑ニ
當ル者ハ之ヲ死刑ニ處ス可シ

第二 重罪ノ爲メ重罪ノ刑又ハ禁錮一年以

上ノ刑ニ處セラレシ後更ニ輕罪ヲ犯
セシ者ハ其至重ノ刑ニ處セラレ又其
刑期ヲ二倍スルヲ得可シ例ヘハ五
年ノ禁錮ヲ以テ至重ノ刑ト爲ス時ハ
再犯ノ爲メ禁錮十年ノ刑ニ處スルヲ
得可キカ如シ

第三

第一回ノ時一年以上ノ刑ヲ懲治罪裁
判所ヨリ言渡サレシ者再ヒ輕罪ヲ犯
セシ時ハ其至重ノ刑ニ處シ又其刑期
ヲ二倍スルヲ得可シ

輕罪ニ付キ再犯ノ爲メ刑ノ増加ヲ爲スハ第一
回ノ罰ノ申渡禁錮一年以上ナル時ニ限ル可シ
又輕罪ニ付キ刑ヲ申渡サレシ者後ニ施體加辱
ノ刑ニ處セラル可キ重罪ヲ犯セシ時ハ其刑ヲ
増加スルヲナカル可シ

第四款

輕重罪ニ付キ罰ヲ受ク可キ者
免除セラル可キ者他人ノ輕重
罪ヲ擔當ス可キ者

輕重罪ヲ犯サント試ミ爲ス事
凡ソ重罪ヲ犯サント試ミ爲セシ者ハ假令ヒ其

者ノ意ニ管セサル事故ニ由リ其犯罪ヲ中止シ
 或ハ之ヲ誤機シタル時ト雖凡既ニ其犯罪ニ取
 掛リタル上ハ重罪ヲ爲シ遂ケシ時ノ如ク罰セ
 ラル可シ故ニ重罪ヲ犯サントセシ時犯人自己
 ノ意ニ因テ之ヲ止メシ時ハ其罰ヲ受クルナ
 ク又之ニ反シテ重罪犯行ヲ遂ケント欲シ遂ニ
 意外ノ事故ニ妨ケラレタル時ハ全ク其犯行ヲ
 遂ケタルト同シク罰セラル可シ故ニ此二事ハ
 之カ區別ヲ爲サルヲ得ス
 又輕罪ヲ犯サント試ミ爲セシ者ハ上ニ掲ル所

ト差ヒ法律上ニ其特定アル時ニ非サレハ現ニ
其罪ヲ遂ケシ者ト同シク罰ス可カラス但シ盜
罪及ヒ詐偽畧奪ノ罪ヲ犯サント試ミ爲セシ時
ノ如キハ其特定アルモノトス

輕重罪ノ附從

輕重罪ノ首謀卽チ輕重罪ヲ自カラ行ヒシ者ニ
ハ之カ附從アルヲアリ而シテ其附從ハ首謀ト
同一ノ刑ニ處セラル、ヲ以テ通規トス

附從ノ罪ハ左ノ場合ニ於ケル者ニ在リトス

一 輕重罪ノ首謀ヲシテ其輕重罪ヲ犯サシ

メント怱通シタル事

一 輕重罪ノ首謀ニ指揮ヲ爲セシ事

一 輕重罪ノ首謀ニ其情ヲ知ツテ武器及ヒ

器械ヲ得セシメシ者

一 其情ヲ知ツテ輕重罪ノ首謀ヲ助ケ其犯

罪ヲ用意セシメ又ハ之ヲ遂ケシメシ者

右何レモ首謀ト同一ノ刑ニ處セラル可シ

又故意ヲ以テ竊取物又ハ輕重罪ノ爲メ得タル
物件ヲ隱匿セシ者ハ亦之ヲ附從ノ罪ニ處ス可

シ

輕重罪ノ責ニ任セラル者

特定ノ場合ニ於テハ輕重罪ノ犯人亦刑法上ヨ
リ諭スレハ其責ヲ免ル、一アリ卽チ狂癲ニ罹
リテ罪ヲ犯セシ者又ハ威力ニ迫ラレ止ムヲ得
ス罪ヲ犯セシ者ノ如キ其責ヲ免ル可シ
又殺傷二犯ノ如キモ正當ナル防禦ノ爲メハ出
テシ者例ヘハ夜間ノ襲撃ヲ防キ又ハ強盜ヲ防
グ爲メ犯セシ罪ノ如キハ之ヲ重罪又ハ輕罪ト
爲ス可カラス

斯ク種々ノ情由アリテ犯セシ罪ハ決シテ其罰

ヲ申渡ス可カラス

輕重罪ヲ免除セラル可キ者

赦宥ヲ得可キ所業ハ法律上ニ特ニ之ヲ定ム茲
ヲ以テ犯罪ト雖モ或ハ全ク刑ヲ免レ或ハ稍輕
キ刑ニ處セラル者ナリ今茲ニ法律上ノ免除
アリテ刑ノ免除ヲ得可キ者ノ一例ヲ掲クルニ
父ノ其子ノ物ヲ盜ミ或ハ子ノ其父ノ物ヲ盜ミ
シカ如キハ其犯人ヲ罰スルヲナシ是レ蓋シ親
子ノ接際ニ因ル所ナリ然レモ若シ其犯罪ノ附
從アルニ於テハ其附從ハ之レト同一ノ赦宥ヲ

以テ論ス可カラズ也。其相當ノ刑ニ處ス可シ。
又刑ヲ輕減ス得可キ宥恕ノ一例ハ所謂誘發罪
ニアリテ茲ニ今之ヲ揭クルニ人ヨリ甚シキ暴
行又ハ毆撃ヲ受ケ因テ以テ殺傷毆撃ノ罪ヲ犯
セシ者ハ其刑ヲ減セラル可キカ如シ

十六歳以下ノ幼者

刑法上ノ完全ナル責ヲ受ルハ十六歳以上ノ者
ニ在リトス故ニ十六歳以下ノ者ハ其處刑ニ付
テハ特別ノ位置ニアリテ若シ十六歳以下ノ幼
者ノ重罪裁判所又ハ懲治裁判所ニ呼出サル、

時ハ毎ニ陪審又ハ裁判官其幼者ノ故意ヲ以テ
罪ヲ犯セシヤ否ヲ取調ヘ若シ其幼者ノ罪故意
ニ出テサルノ明カナル時ハ其幼者ヲ赦シテ兩
親ニ引渡ス可ク若シ其兩親ニ十分ナル保証ア
ラサレハ懲治場ニ入レ特定ノ期限間即チ其懲
二十歳ニ至ル迄ノ時間此ニ止メテ教育ス可シ
右幼者ヲ教育スル爲メ懲戒場ヲ設ケ其所ニ於
テ耕作并ニ耕作ニ屬スル百工ニ之ヲ使用ス千
八百五十年七月三日ノ法律
若シ十六歳以下ノ幼者故意ヲ以テ罪ヲ犯セシ

ノ証ナル時ハ之ノ刑ニ處ス可シ然レモ決メ禁錮以上ノ刑ニ處スルヲシ但シ死刑又ハ無期ノ徒刑ニ當レル重罪ヲ犯セシ時ハ禁錮ノ年數二十年ニ及ヘルヲアリ

若シ又輕罪ヲ犯セシ時ハ其刑十六歳以上ノ者ノ受ク可キ刑ノ半ハニ過キサル可シ

又十六歳以下ノ幼者ハ重罪ヲ犯シタリト雖モ其附從ニ十六歳以上ノ者アラサレハ重罪裁判所ニ於テ裁判スルヲナク輕罪裁判所ニ於テ裁判ス可シ

刑ヲ減殺ス可キ情由

法律上ニ特定セシ赦宥ノ性質アル所行ノ外各
犯罪ノ特別ナル模様ニ因リ其刑ヲ減殺スルヲ
得可キヲアリ蓋シ有期ノ刑ヲ用ヒ罰人可キ所
行ニ於テハ法律上ニ多クハ其刑ノ至重ナル者
ト至輕ナル者トヲ定メタリ
例ハ法律上ニ十年ヨリ少カフナル禁錮トアル如キハ十年ヲ以テ至重ノ者トシ一年ヲ以テ至輕ノ者ト爲スカ
如キヲ云フ然リ而シテ其制限ニ循ヒ度ヲ量リ
罰ノ輕重ヲ定ムルハ常ニ情由ノ輕重ニ依ルナ
リ他ハ皆之
ニ依ル可シ

又陪審又ハ懲治罪裁判所ニテ刑ヲ減殺ス可キ

情由アルヲ犯人ノ爲メ定メタル時ニ於テハ
重罪及ヒ輕罪ニ當ツ可キ刑ヲ輕減スルヲ得可
ク重罪ニ付キ此情由アレハ其刑一等又ハ二等
ヲ減スルヲ得可シ故ニ法律上ニテ死刑ニ處セ
ラル可キ者ハ徒刑又ハ有期ノ徒刑ニ處セラレ
無期ノ徒刑ニ處セラル可キ者ハ有期ノ徒刑又
ハ場内驅役ノ刑ニ處セラレ有期ノ徒刑ニ處セ
ラル可キ者ハ場内驅役ノ刑又ハ五年以下一年
以上ノ禁錮ノ刑ニ處セラレ場内驅役ノ刑ニ處
セラル可キ者ハ禁錮ノ刑ニ處セラル可シ

又懲治罪裁判所ニ於テ此情由アルヲ認メシ
時ハ禁錮ヲ六日以下ニ減シ罰金ヲ十六フラン
以下ニ減シ或ハ禁錮ニ代ヘテ罰金ノ言渡ス
ヲ得可シ但シ罪犯ノ種類ニ因リ又ハ罪ノ再
犯ナルニ由リテ法律上ニ定ムル至輕ノ刑一年
以上ノ禁錮又ハ五百フラン以上ノ罰金ナル
時ハ禁錮ノ六日ニ減シ罰金ヲ十六フランニ
減シ得可シト雖モ禁錮ノ廢ス可カラス

第五款 別段ノ輕重罪

法 背キ社ヲ結ノ罪

宗教、政體、文事、又ハ其他ノ事柄ヲ議スル爲メ期
限ヲ定メテ會合スルヲ本旨トシ二十人以上
相結社スルハ必ス皆政府ノ允許ヲ受ケ可ク若
シ其結社ヲ二十人以下ノ人負ヨリ成レル支社
ニ分チ且ツ毎日會合セス又ハ定日ノミニ會合
スル時ト雖モ亦同一ナリトス蓋シ政府ヨリ與
ヘタル結社ノ允許ハ何時ニ限ラス政府之ヲ取
消ス事ヲ得可シ而シテ若シ政府ノ允許ヲ受ケ
スシテ結社ニ加ハリシ者ハ一年以下二月以上
ノ禁錮ノ刑ニ處セラレ且千フランク以下五十

「¹」ランク以上ノ罰金ヲ申渡サル可シ

法律ニ背キ會合スル罪

政體又ハ宗教上ノ事ニ付キ公ケニ會合ヲ爲ス
ハ結社ト同一ノ規則ニ循フ可キヲ以テ必ス其
允許ヲ受ク可シ又其他ノ事柄例ヘハ文學又ハ
藝術上ノ事ニ付キ公ケニ會合ヲ爲スハ前以テ
其許可ヲ受ルニ及ハス只其事柄ヲ記シ且其會
合ヲ催ス可キ邑内ニ住所ヲ定メシ者七名ノ調
印ヲ爲セシ届書ヲ預メ差出ス可シ而シテ此會
合ヲ爲スハ必ス圍繞アリテ且屋蓋ヲ設ケシ場

所ニ於テス可ク會長一名ト輔佐二名トヨリ成
ルル同事局ヲ設ク可シ故ニ同事局ハ其會合中
ニ不取締ナキ様注意シ且會合ノ主目ヨリ更ニ
外ノ事柄ニ論シ及ホサル様注意ス可キヲ任
トス

但シ民選議院代議士選舉ノ爲メノ會合ハ政體
上ニ管スト雖ル預メ其允許ヲ受ルニ及ハス選
舉局招集ノ勅書布告ノ目ヨリ初メ入札ニ取掛
ル日ノ五日前迄會合スルヲ得可シ但シ此會合
ニハ選舉區内ノ選舉人ト憲法ニ定メシ誓詞ヲ

爲シタル選舉登用ヲ得可キ者ノミ參會ス可シ

千八百六十八年六月六日ノ法律

百工、商業、諸藝術ニ管スル規則ヲ

犯ス罪

刑法上ニハ百工、商業、諸藝術ニ管スル規則ヲ犯
ス罪ノ總目中ニ百工ノ公益ヲ害スル所行ト商
業ノ正道ニ背キシ所行トノ數目ヲ掲ケタリ而
シテ其第一種ハ外國ニ輸出スル製造品、佛蘭西
工作所ノ指揮者、家僮、工丁ノ外國ニ雇ハル、事、
製造ノ奧秘ヲ漏ヒシ事ノ爲メ設ケタル特別ノ

規則　在リ其第二種ハ製造品、手形、國債証書、製造會社ノ証券及ヒ其他商業會議所ニテ取引ヲ爲ス可キ証券ノ價位ヲ高低セシムル爲メノ詐計、國債証書ノ高低ニ付キ賭ヲ爲ス事、商人及ヒ運送者ノ爲セル詭偽及ヒ變造ニ在リトス又總テノ書籍謠曲等ノ著述者ノ權利又ハ畫圖彫刻物類ヲ作ル者ノ權利ヲ害セシ罪ハ凡テ之ヲ假冒ノ罪ト稱シ法律上ニ其罰則ヲ定ム

雇主數人又ハ工丁數人同致シテ
工料ヲ高低スル罪 千八百六十四

年五月二十五日ノ法律

工料ヲ高低シ又ハ工事ノ規則ヲ變スル爲メ雇
主數人又ハエ丁數人相同致スル者ヲ「コアリシ
ヲ」ント云ヒ千八百六十四年ノ法律ニ因リ刑法
第四百十四條第四百十五條第四百十六條ヲ改
正セシ前ハ凡テ之ヲ輕罪ト爲シタリシカ今日
ニ至テハ「コアリシヲ」ハ本來自由ナリトス然
レモ工作ヲ同時ニ停メシメ以テ雇主又ハエ丁
ノ自由ヲ妨クル目的ニテ暴行詐詭ヲ爲セシ時
ノ如キハ犯罪タル可シ

又「丁」ノ操作ヲ妨クル或ハ操作場ヲ去ント欲ス
ル「丁」ノ強テ抑留スル目的ヲ以テ罰金ヲ課シ
又ハ操作ヲ禁止スル等ノ事ヲ爲シ他ノ「丁」ノ
自由ヲ妨クル者モ亦法律上ニテ其至當ノ罰ニ
處スル所ナリ

家資分散ノ事

分散トハ商人其義務ヲ踏行フヲ能ハサル時ノ
有様ナリトス而メ商人若シ偽詭懈怠疎虞ニ因
リ分散ヲ爲ス時ハ變シテ倒産ノ罪アリトス蓋
シ倒産ノ罪ニハ詐詭ノ倒産ノ罪ト尋常ノ倒産

ノ罪トノ二様アリ

詐詭ノ倒産ノ罪ハ重罪ニシテ重罪裁判所ノ審

判ヲ受ケ徒刑ニ處セラル可シ

分散人其帳簿ヲ陰藏シ又ハ詭計ヲ以テ其有金

ノ一部分ヲ隱匿セシ時ハ詐詭ノ倒産ノ罪アリ

トス

尋常ノ倒産ノ罪ハ輕罪ニシテ禁錮ノ刑ニ處セ

ラル可シ而シテ尋常ノ倒産ノ罪ハ殊ニ許多ナ

リト雖_レ今其一二例ヲ左ニ掲ク

一身ノ雜費或ハ家事ニ管スル雜費ノ爲メ家資

分散ヲ爲シタル時又ハ賭博或ハ萬一ノ僥倖ノ爲メニ莫大ノ金銀ヲ費セシ時又ハ商業ノ帳簿ヲ設ケサル歟或ハ其帳簿ノ不分明不規則ナル時ハ其家資分散ヲ爲セシ者ニ尋常ノ倒産ノ罪アリト爲シ其刑ニ處セラル可シ

詐僞ノ畧奪

詐僞畧奪ノ罪ハ二箇ノ原因ヨリ生ス而シテ其一原因ハ僞名又ハ僞リノ身分ヲ唱ヘ又ハ僞リノ起作僞ノ威權アルヲ示シ又ハ無實ノ成功ヲ信用セシムル等ノ諸事ニ在リテ又一ノ原因ハ

金銀又ハ貨財ヲ己レニ渡サシメ又ハ之ヲ渡サシメント試ミ爲シテ他人ノ財産ニ害ヲ加フル所爲ニ在リトス

詐僞畧奪ノ罪ハ一年以上五年以下ノ禁錮ニ處セラルレ且五十「フランク」以上三千「フランク」以下ノ罰金ヲ申渡サル可シ

海陸軍ニ諸般ノ物品ヲ供スル者ノ罪

海陸軍ノ需用品ヲ供スル者ニ付テハ特別ノ罪犯アリ故ニ若シ己レカ錯誤ニ由リ其擔任シタ

ル用辨ノ欠キシ者ハ重罪ノリテ場内驅役ノ刑ニ處セラル可シ
又物品納メ方ノ遲延及ヒ納メシ物品ノ性質量目ノ錯誤ハ輕罪ニシテ其犯人禁錮ノ刑ニ處ヒラル可シ

第二章 治罪法

第一款 總論

民事ノ訴ト刑事ノ訴ノ區別並ニ刑事ノ訴

總テ罪犯ハ二箇ノ訴即チ刑事ノ訴ト民事ノ訴

トヲ生ス可シ而シテ刑事ノ訴ハ刑ヲ當ツル事
ヲ求ムルノ訴ニシテ民事ノ訴ハ重罪輕罪註誤
ノ爲メニ蒙リシ損害ノ償ヲ要スルノ訴ナリト
ス

刑事ノ訴ハ當管ノ官吏多クハ檢事官ノ國人ニ
代テ爲ス所ニシテ損害ヲ蒙リシ者ノ訴卽チ民
事ノ訴トハ相管セサル者トス然レ凡人ノ名譽
ヲ害スル罪及ヒ專賣ノ權ヲ得シ發明物ヲ偽造
スル罪ノ如キハ管係本人ノ訴アルニ非サレハ
檢事局ニ於テ其罪ヲ訴フ可カラサルモノトス

又刑事ノ訴ハ必ス之ヲ司法裁判所卽チ重罪裁判所、輕罪裁判所、註誤裁判所ニ爲ス可ク且此訴ヲ爲スノ權ハ犯人ノ死去ニ因テ終ル可シ

民事ノ訴

民事ノ訴ハ重罪又ハ輕罪ノ爲メ損害ヲ蒙リタル者ヨリ之ヲ爲ス可キ者ニシテ犯人ニ償還ノ申渡シヲ爲スノ外別ニ其効ナシトス
民事ノ訴ヲ爲スノ權ハ犯人ノ死去シタリト雖
モ終ルヲナク其相續人又ハ其代人ニ對シテ其
訴ヲ爲スヲ得可シ

民事ノ訴ハ雙方互ニ和解シテ之ヲ止メ又ハ損害ヲ蒙リシ者ノ已レノ權利ヲ拋棄スルニ由リテ之ヲ止メ得可キヒノトス

重罪輕罪註誤ノ爲メノ民事ノ訴ハ二様ニ之ヲ爲ス一ヲ得可シ故ニ損害ヲ受ケタル者ハ損害ヲ償フ可キ裁判ヲ爲シ又ハ物品返還及ヒ其他ノ賠償ノ裁判ヲ爲シ且ツ刑ヲ當ツ可キ刑法裁判所ニ民事原告人トナリテ願出ルヲ得可ク然ル時ハ重罪裁判所輕罪裁判所註誤裁判所ニ於テ刑事ノ訴ト民事ノ訴トヲ共ニ裁判スルヲ

得可

若シ入損害ノ受ケタル者ノ刑法裁判所ニ於ケル民事原告人トナラサル時ハ民法裁判所ニ訴出ルニ付テノ通常ノ法式ト規則ニ從ヒ民法裁判所ニ訴出ルヲ得可シ

訴訟期限ノ事

罪ヲ犯シ又ハ其處決ヲ申渡シタルヨリ特定ノ期限ヲ經過シタル時ハ既ニ刑罰ヲ要セサルニ至リシト云フヲ得可シ是レ實ニ犯行ノ記念既ニ消除シ懲戒ノ要モ亦滅却スルヲ以テ此時ニ

至リテハ既ニ世ノ爲メ犯人ニ刑ヲ受ケシメ又
ハ罰ヲ申渡ス事ヲ要セサレハナリ而シテ輕罪
重罪註誤ニ付キ其免除ノ期限ヲ定メタルハ全
ク此趣意ニ基シ所ナリ

故ニ犯人既ニ訴訟ヲ受ケ其處決ヲ申渡サレシ
時ニ於テ若シ其處刑ヲ免ル、ヲ得タル時ハ處
刑ノ免除期限ニ至リシヲ申立ツルヲ得可シ
期滿放免ノ權ヲ得ル期限ハ重罪ノ刑ヲ申渡サ
レシ犯人ニ付テハ二十年トシ輕罪ノ刑ヲ申渡
サレシ犯人ニ付テハ五年トシ註誤ノ刑ヲ申渡

サレシ犯人ニ付テハ二年トス但シ此期滿免除
ノ權ハ處刑ノミニ適用シ損害償還ノ申渡ニハ
適用ス可カラサル者トス是レ其申渡ハ通常民
法上ノ期滿免除ノ權ニ循ス可キラ以テナリ
重罪輕罪註誤ヨリ生スル刑事ノ訴及ヒ民事ノ
訴ハ重罪ニ付テハ十年、輕罪ニ付テハ三年、註誤
ニ付テハ一年ノ間之ヲ爲サ、ル時ハ其期滿免
除ノ權ヲ得可キモノトス

刑事ニ付テノ訴訟手續卽治罪手
續ノ段落

治罪法ノ義意ヲ説述スルニ治罪法トハ其大意
ヲ撮メハ刑事ニ於ケル訴訟手續ノ諸規則ヲ合
シタル者ノ稱呼タリトス而シテ此類ノ訴訟手
續ハ通常互ニ大ニ相異ナレルニ段落ニ分レ訴
訟ヲ受ケシ所行ニ重罪ノ質アル時ト其所行ニ
輕罪ノ質アル場合ノ多分トニ於テハ何レモ其
裁判ヲ受クル前ニ先ツ犯行ノ証據トナル可キ
諸件ヲ集ムル爲メ下吟味ヲ爲ス可シ但シ之ヲ
以テ刑事ニ管スル訴訟手續ノ第一段トス
又下吟味ノ終リタル時右ノ如ク取集メタル証

據ニテ犯行ノ十分ナル証跡アレハ犯人ヲ裁判
ス可キ裁判所ニ其訴ヲ移ス可シ但シ刑法ヲ以
テ罰ス可キ所行即チ犯罪ノ裁判ヲ爲ス可キ裁判所
ハ罪ノ種類ニ從ツテ同一ナラス例ヘハ註誤ハ
註誤裁判所輕罪ハ輕罪裁判所重罪ハ重罪裁判
所ト各管轄ヲ異ニス

次ノ第二款ニ於テ下吟味ニ付テノ概畧ヲ述
シ後三審院重罪裁判所輕罪裁判所註誤ニ適用
裁判所ヲ云フ以下皆同シ

ス可キ諸規則ヲ論シ最後ノ一款ハ三審院ノ裁
判申渡ニ付テノ控訴ノ方法ヲ論ス可シ

第二款 下吟味ノ事

下吟味ノ本性

下吟味ハ之ヲ公ケニ爲サ、ルヲ以テ其本性ト
ス故ニ被告人ノ諛管裁判所ニ到ル時ハ公ケニ
論辯ヲ爲シ得可シト雖下吟味中ニ於テハ下
吟味掛リ裁判役ニ答辨ノ爲メ自カラ覺書ヲ出
シ又ハ代言人ヲシテ之ヲ出サシムルノミニ在
リトス

但シ下吟味ハ重罪ノ性質アル犯行ノミニ緊要
ニシテ輕罪ニ付テハ裁判役ノ隨意タル可キモ

ノトシ註誤ニ付テハ全ク之ヲ爲サス是レ蓋シ
註誤ハ其事簡易ナルニ因リ敢テ法式手數ヲ要
セサルヲ以テナリ

司法警察及ヒ司法警察官吏ノ事
警察ノ制度ト云ヘル者ハ世ノ平安、人民自由ノ
權利、財産所有ノ權利、人々ノ安全ヲ得セシムル
爲ノ特ニ設ケタル方法ノ總稱トス而シテ之ニ
二類アリ卽チ行政警察司法警察是ナリ行政警
察ハ行政官吏ノ行フ所ニシテ豫防ノ性質アリ
故ニ行政警察ハ專ラ犯罪ヲ豫防スルヲ勉ム又

司法警察ハ重罪、輕罪、註誤ヲ搜索シ其証據ヲ取
集メ其犯人ヲ裁判所ニ引渡スヲ任トス而シテ
司法警察ハ田野山林ノ監守人、警察長、邑長及ヒ
同助、郡裁判所附檢事、治安裁判役、警兵士官及ヒ
下吟味掛リ裁判役ノ行フ所ナリ

又諸州ノ長及ヒ已里警察總長モ亦司法警察官
吏ト同シク警察事務ヲ掌ル可シ依テ今左ニ司
法警察官吏中重要ナル者ノ特別ノ權限ヲ記サ
ントス

邑長、警察長、田野山林ノ監守人

警察長、其在ラサル邑ニ於テハ邑長、同助ハ警察
違犯ノ罪ヲ搜索シ、談犯ニ管スル報告願訴等ヲ
受取リ、談犯ノ種類及ヒ情由、時刻、場所、談犯ヲ爲
シタルノ疑アル者ノ犯罪証跡等ヲ記シタル調
書ヲ作ル可シ

又山林監守人ハ其管轄内ニテ山林ニ管スル輕
罪又ハ註誤ヲ搜索シ、田野監守人ハ談邑内ニ於
テ邑ノ警察規則違背ノ罪ヲ搜索ス可ク、又山林
監守人及ヒ田野監守人ハ調書ヲ作り、禁錮又ハ
更ニ重キ刑ニ當ル可キ現行犯罪人ヲ治安裁判

所又ハ邑長ノ面前ニ拘引スルヲ得可シ

調書及ヒ其信偽

司法警察官吏ノ職ニ在ラスト雖モ調書ヲ作り
テ特定ノ註誤ヲ証明スルヲ得可キ權アル官吏
ハ亦許多アリ即チ建築工業及ヒ鑛山ノ土工長、
其屬僚、直税海關稅掛リ役員、驛遞司官吏、度量具
ノ檢官、鑛道監視等ハ各々其法律ヲ以テ委任セ
ラレシ權限内ニ於テ罪犯調書ヲ作ルヲ得可シ
其外警兵下士官及ヒ其兵士モ亦特定ノ輕罪註
誤例ヘハ山獵ニ管スル罪及ヒ車馬通行ノ警察

規則ニ違背スル罪等ヲ証明スルヲ得可シ
上ニ掲ケタル諸ノ警察官吏ノ作リシ調書ノ効
ハ此ニ令其類ヲ區別セサルヲ得ス例ヘハ一般
ノ規則ニ於テハ其調書ハ之ト相反シタル証據
即チ被告人ヲ輕罪裁判所又ハ誣誤裁判所ニ拘
引シ之ニ輕罪又ハ誣誤ノ証ヲ記セシ罪犯ノ証
書ヲ示シタル時其被告人右調書ニ記スル証ノ
偽タルヲ証スル爲メ自カラ其証人ヲ呼出サシ
メテ其調書ノ偽証タルヲ述フルヲ云フアルニ
至ル迄ハ之ヲ真正ノ者ト爲ス可シ

以上論スル所ハ之ヲ通則トス然レモ官吏ニ因
リテハ法律上ニテ偽造ノ訴アル迄ハ信據ス可
キ調書ヲ作ルノ權アル者アリ而モ其調書ノ偽
造タルヲ訴フル者ハ証書偽造ノ訴訟ト云ヘル
手數多クシテ煩雜ナル訴訟ヲ爲シテ其調書ノ
証ヲ毀タサルヲ得ス蓋シ斯ク偽造訴訟アルニ
至ル迄ハ真正ト爲ス可キ調書ノ一例ヲ掲クル
ニ直税、海關税掛リ委負、山林監守人等ノ記シタ
ル調書ハ皆此類ナリトス

郡裁判所附檢事、其補助タル司法

警察官吏

各郡毎ニ輕罪及ヒ重罪ノ搜索ヲ爲ス可キ職任
アル^ゴロ^ロモ^リール^ルアンペリア^ル〔譯シテ郡裁判
所附檢事トス〕
ト云ヘル官吏アリ郡裁判所附檢事ハ官吏又ハ
平民ヨリ差出シタル告訴狀ヲ受取リ輕重罪アリ
シ時ハ下吟味掛リ裁判役ニ下吟味ヲ爲スノ
求メ又現行犯罪ノ時ニ於テハ下吟味掛リ裁判
役ノ來ルヲ要セス檢事自カラ其場所ニ至リテ
罪犯調書ヲ作り証人ヲ聞^スルヲ得可シ又現
行犯罪ニアラスト雖^モ家屋内ニ於テ重罪輕罪

ヲ犯ス者アリテ其戸主ヨリ之ヲ証スルヲ
申立ル時ハ亦同様ナリトス

郡裁判所附檢事ノ補助ハ治安裁判役、警兵士官、
邑長、警察長等トス。偕此諸役員ハ檢事ト同シク
告訴狀ヲ受取り且ツ現行犯罪ノ場合又ハ戸主
ノ願立アル時ニ於テハ其下吟味ヲ爲スヲ得
可シ

下吟味掛リ裁判役

郡裁判所ニハ何レモ下吟味掛リ裁判役アリテ
其人負ハ事務ノ繁閑ニ因リ一人又ハ數人アリ

トス

下吟味掛リ裁判役ノ職務ハ本官ノ裁判役一名
若クハ其助官一名ニテ之ヲ行フ可シ而シテ其
受任ハ勅命ヲ以テシ其期限ハ三年間ト定ムト
雖凡又三年以上其職ニ在ルヲ得可シ

下吟味掛リ裁判役ノ權証人聞糺

ノ事

輕重罪ノ証據ヲ集メ証明書又ハ其他ノ要用ナ
ル書類ヲ作ル事等皆下吟味掛リ裁判役ノ任ナ
ス

二卷十二
証人ノ
証人ノ
証人ノ

又下吟味掛リ裁判役ハ犯人ヲ糾聞シ、探索ヲ爲シ、實ヲ得ルノ助ケトナル可キ書類物件等ヲ差押ユルヲ得可ク又時トシテハ鑑定人ヲシテ事實ヲ証明セシメ或ハ証人ヲ聞糾スヲ得可シ

証人ハ檢事ノ命ニテ使吏之ヲ下吟味掛リ裁判役ノ面前ニ呼出ス可シ仍テ出席ヲ命セラレタル証人ハ必ス出席ス可ク若シ然ラサレハ百ヲシク以下ノ罰金ヲ言渡サル可シ証人若シ抗傳シタル時ハ之ヲ捕ヘテ下吟味掛

リ裁判役ノ面前ニ拘引スルヲ得可シ但シ然ル
時ハ下吟味掛リ裁判役ヨリ拘引ノ命令書ヲ出
シ捕吏ヲシテ之ノ執行ハシム可シ

呼出狀、禁錮狀、收監狀ノ事

被告人ヲシテ訴訟又ハ處決ヲ免カル、トヲ得
サテシムル爲メ其身體ヲ拘留セサルヲ得サル
トアリ茲ヲ以テ下吟味掛リ裁判役ハ豫防ノ爲
メ犯人ヲ拘留スルトヲ得可シ蓋シ先ツ初メハ
被告人ニ出席ノ呼出狀ヲ致シ其時ニ於テハ下
吟味掛リ裁判役速ニ被告人ノ糾問ニ取掛ル可

シ而シテ其糾問ノ後ニ於ケル歟又ハ被告人ノ
呼出狀ニ循ハサル時ハ下吟味掛リ裁判役ヨリ
禁錮狀又ハ收監狀ヲ發スルヲ得可シ

捕吏ハ其禁錮狀又ハ收監狀ニ因リ被告人ヲ何
レノ地ニ限ラス其在ル所ニ於テ捕縛シ之ヲ其
禁錮狀又ハ收監狀ニ指示シタル拘留場ニ送ル
可シ

假リニ拘留ヲ免スル事千八百六
十五年七月十四日ノ法律

豫防ノ爲メノ拘留卽チ裁判ノ前ニ被告人ヲ禁

銅スル事ハ至重ノ事件ニシテ間々被告人ノ爲
メニハ大ナル妨害タルヲアリ故ニ法律上ニテ
其苛酷ヲ緩ムルヲニ注意シ場合ニ因リテハ豫
防ノ爲メノ禁銅ヲ免ル可シ又時アリテハ被告
人ヲシテ保証金ヲ出サシメテ其自由ヲ得セシ
ムルヲアリ

治罪法從第百十三條至第百二十六條ノ各條ヲ
千八百六十五年七月十四日ノ法律ヲ以テ改正
シタルハ全ク其自由ヲ得セシムル趣旨ニアリ
トス

若シ又訴訟ヲ受ケシ事柄輕罪ナル時ハ糾問ヨ
リ五日後ニ當然預防ノ禁錮ヲ免サル可シ但シ
其被告人本郡内ニ住所ヲ有セサル歟又ハ曾テ
重罪ノ爲ノ刑ニ處セラレ或ハ禁錮一年以上ノ
刑ニ處セラレシアル時又ハ其訴ヘラレシ罪
犯ノ刑禁錮二年以上ニ當ル可キ時ハ此限ニア
ラス

又何レノ場合ニ限ラス縱令重罪ノ訴ノ時ト雖
モ下吟味掛リ裁判役ハ假リニ禁錮ヲ免スルコ
ト得可シ但シ然ル時ハ其被告人訴訟ニ管スル

一切ノ事柄ニ付キ及ヒ裁判執行ニ付キ何時タ
リトモ出席ス可キノ誓ヲ爲ス可シ

下吟味掛裁判役斯ク被告人ニ假リノ自由ヲ與
ヘシ時ハ其者ヲシテ保証ヲ出サシム可シ而シ
テ其保証ニハ或ハ金高ヲ用フルヲ得可ク又ハ
資産アル者ヲシテ其保証人ト爲シ其保証人ヲ
シテ何時ニ限ラス本人ヲ出席セシム可ク若シ
本人出席セサル時ハ政府會計局ニ特定ノ金高
ヲ納ム可キノ誓約ヲ爲サシム可シ

右保証人ハ訴訟ニ管スル諸事又裁判執行ノ爲

ノ本人ヲ出席セシム可キ旨ヲ保証シ又裁判入
費及ヒ罰金ノ拂方ヲ保証ス可シ

下吟味終ル法方

下吟味掛リ裁判役其考証ト爲ル可キ諸綱目ヲ
取集メタル時ハ即チ下吟味終リタリトス因テ
下吟味掛リ裁判役ヨリ訴訟手續ノ第一ノ段落
〔即チ下吟味〕終リタル旨ヲ申渡ス可シ

但シ下吟味掛リ裁判役被告人ニ其罪犯ノ証カ
ク又ハ被告人ノ所行重罪ニモ輕罪ニモアラス
ル事ヲ量知シタル時ハ無罪ハ申渡ノ爲ス可シ

若シ又罪犯ノ証アリテ輕罪タリト量知スル時
ハ下吟味掛リ裁判役其被告人ヲ輕罪裁判所ニ
送致ス可ク重罪ノ性質アリト量知スル時ハ下
吟味掛リ裁判役其被告人ヲ上等裁判所ノ重罪
取調局ニ送致シ其局ニ於テ被告人ヲ重罪裁判
所ニ送ル可キヤ否ヲ判決ス可シ

第三款

違警罪裁判所

即チ註誤
裁判所

懲治罪

裁判所

即チ輕罪
裁判所

違警罪裁判所及ヒ其制度權限

各縣ニ於テハ治安裁判役即チ違警罪裁判役ノ

職ヲ行ヒ警察長即チ違警罪裁判所檢官ノ職務ヲ行フ可シ

凡テ違警罪裁判所ハ警察違背ノ罪即チ十六「
」ラシク以下ノ罰金及ヒ六日以下ノ禁錮ヲ以テ
罰ス可キ罪科ヲ審判ス可シ

法律ノ許シニ從ヒ違警罪裁判所ノ裁決ヲ上控
ス可キ時ハ懲治罪裁判所ニ其上控ヲ爲ス可シ

違警罪裁判所ニ於ケル訴訟手續

違警罪裁判所ニ犯人ヲ呼出スハ檢官又ハ民事
原告人ノ申立テニ由ル可シ而シテ其出席ヲ爲

スニ付テノ猶豫ハ少ク凡二十四時間タル可シ
斯ク違警罪裁判所ニ呼出ノ命ヲ受ケタル者ハ
必ス其定期内ニ本人自カラ出席スル歟又ハ委
任狀ヲ與ヘタル代人ヲ出席セシム可シ若シ出
席セサレハ抗傳ノ儘裁判言渡シヲ受ク可シ
違警罪裁判所ニ於テ爲ス所ノ犯罪訴訟手續ハ
之ヲ公ケニス可シ
又罪犯調書ヲ作リタル時ハ書記官之ヲ讀上ク
可ク又証人ヲ聞糾ス可シ

然ル後民事原告人其意見ヲ申立テ檢官其考按

ヲ述ヘ、被告人其答辯ヲ爲セシ後裁判役其審判
ヲ爲ス可シ

懲治罪裁判所及ヒ其編制權限

郡裁判所ハ懲治罪裁判所トナリテ輕罪卽チ六
日以上ノ禁錮及ヒ十六「フ」ラシク以上ノ罰金ヲ
以テ罰スル罪又ハ法律上ニテ別段委任シタル
特定ノ違警罪ヲ審判シ且ツ違警罪裁判所ノ裁
決ニ付テノ上控ヲ裁判ス可シ
懲治罪裁判所附檢官ノ職務ハ郡裁判所附檢事
及ヒ其補助之ヲ行フ可シ

又數局ヨリ成レル郡裁判所ニ於テハ其中ノ一局ニテ懲治罪ニ管スル事務ヲ專任ス可シ
懲治罪裁判所ニ訴フル法方及ヒ
現行罪犯ノ吟味ニ付テノ千八百
六十三年六月一日ノ法律

懲治罪裁判所ハ若シ其訴訟ノ預メ下吟味ヲ受ケシ事柄タル時ハ下吟味掛リ裁判役ノ申立ニ由リ犯罪訴訟ノ吟味ニ取掛リ若クハ檢官ノ申立或ハ直チニ民事原告人ノ願ニテ被告人ヲ呼出セシ上其訴訟ノ吟味ニ取掛ル可シ

右呼出ヨリ被告人ノ裁判所ニ出席スル日ニ至
ル迄ノ間ニハ少クモ三日ノ猶豫アル可シ
但シ千八百六十三年六月一日ノ法律ハ現行犯
罪ノ場合ニ於テハ右訴訟手續ヲ簡短ニシ而シ
テ被告人ヲ豫防ノ爲メ拘留スル期日ヲ減シタ
リ

懲治ノ刑ヲ以テ罰ス可キ現行犯罪ノ爲メ捕縛
セラレシ者ハ直チニ檢事ノ面前ニ拘引シ檢事
其被告人ヲ糾問シタル後之ヲ懲治罪裁判所ニ
送ル可シ

被告人ハ當日又ハ其翌日裁判所ニ拘引セラル
可シ但シ其被告人ハ其答辯ノ設備ヲ爲ス爲メ
少クモ三日ノ猶豫ヲ求メ得可シ

被告人若シ無罪ノ申渡ヲ得タル時ハ直チニ拘
留ヲ免セラル可シ

斯クノ如キ場合ニ於テ証拠ヲ述ル爲メ呼出サ
レタル証人ハ別段ノ呼出狀ヲ受ケスト雖モ尋
常ノ申達ニ由リ直チニ出席ス可シ

懲治罪裁判所ニ於ケル訴訟手續
懲治罪裁判所ニハ被告人自カラ出席ス可シト

雖^タ但^タ其罪ノ禁錮ノ刑ニ及ハサル時ノミニ於
テハ代書師ヲ以テ名代人ト爲スコトヲ得可シ
被告人若シ出席ヒサル時ハ批傳ノ儘裁判ヲ受
ク可シ

其下吟味ハ公ケニ之ヲ爲ス可シ

民事原告人、檢官被告人ノ呼出シタル証人ハ先
ツ誓ヲ爲シタル後其説ヲ述フ可ク其証人ノ述
ヘタル証據ハ書記官之ヲ書取ル可シ

民事原告人ハ其告訴ヲ爲シ、檢事ハ其説ヲ述ヘ
テ求刑ノ申立ヲ爲ス可シ

被告人又ハ其代言人ハ答辯ノ憑據ヲ申述ノ可
シ

右訴訟ニ付キ懲治罪裁判所ニテ爲セシ裁判申
渡書ニハ其主意ヲ記ス可シ

右裁判申渡書ハ犯人ノ無罪ヲ定メ又ハ其處刑
ヲ申渡ス可シ

懲治罪裁判所ノ申渡ハ之ヲ上控スルヲ得可シ
其上控ハ上等裁判所中ノ懲治罪裁判上控局ニ
之ヲ爲ス可シ

第四款 重罪裁判所

重罪取調局ノ事及ヒ重罪裁判所

ニ送致スル事

重罪裁判所

シクル、ダ
シールス

ハ重罪即チ施體加辱ノ刑

ヲ用テ罰ス可キ罪科ヲ審判スル爲メ特ニ設ケ
タル裁判所トリス

重罪ハ罪ハ重劇ナル者タルカ故ニ其裁判所ノ
等モ他ノ裁判所ノ上ニ在リ隨テ裁判ヲ爲ス法
式モ亦更ニ嚴格ナルモノトス

重罪裁判所ニ訴訟ヲ送ル前ニ先ツ下吟味掛リ
裁判役之ヲ吟味シ其下吟味ノ終リシ後下吟味

掛リ裁判役其訴訟ヲ重罪取調局ニ送ル可シ
重罪取調局ハ上等裁判所ノ一局ニシテ此局ハ
下吟味掛リ裁判役ノ取調ヘシ所ヲ更ニ調ヘテ
其罪犯ノ証明ヲカナリト思フ時ハ被告人ヲ重
罪裁判所ニ送ル可シ

重罪裁判所ハ重罪取調局ノ言渡アルニ非サレ
ハ其訴訟ヲ受理ス可カラズ

重罪裁判所々在ノ地及ヒ重罪裁

判所ノ會合

各州ニ重罪裁判所一箇所ヲ設ク可ク其所在ノ

地ハ上等裁判所アル州ニ於テハ上等裁判所設
置ノ地トシ其餘ノ州ニ於テハ本州ノ司法區ノ
首地トス

但シ州ニ因リテハ司法區首地ト行政區首地ト

異ナレル州アリ故ニ「マルヌ州ノ如キハ」シヤロ

ン、シルマルヌヲ本州ノ首地（即チ行政區ノ首地）トスト雖

凡司法區首地（即チ重罪裁判所アル地）ハ「ラシ」ニ在リトス又

「アルダンヌ」州ノ如キハ「マジエル」ヲ行政區首地

トスト雖凡司法區首地ハ「シヤールビーユ」トス

重罪裁判所ハ常設ノ裁判所ニアラス時々局ヲ

開ヒテ會合スル者トス但シ少クモ三箇月毎ニ
必ス一度會合ス可ク若シ又事務繁多ナル時ハ
三箇月間ニ數次會合ス可シ

已里府ニ於テハ日數十五日ヲ隔テ常ニ引續キ
會合アリ

重罪裁判所ヲ開ク可キ日ハ上等裁判所ノ長之
ヲ定メテ豫メ其期日ヲ布告ス可シ

重罪裁判所ノ編制及ヒ裁判官

重罪裁判所ハ裁判官ト陪審

陪審ハ諸重罪訴訟
ノ判斷ノ爲メナシム

選ル爲メ陪審人ヨリ成ル

トヨリ成ル然シテ

陪審ハ被告人ノ罪ノ有無ヲ判決シ而シテ陪審被
告人ニ罪アリト判斷セシ時ハ裁判官法律上ニ
定メタル刑ヲ其犯人ニ當ツルナリ
重罪裁判所ハ各會毎ニ選任シタル上等裁判所
ノ裁判官一名之レカ長トナル可シ
重罪裁判所長ハ他ニ二名ノ裁判官アリテ之ヲ
輔佐ス而シテ其輔佐裁判官ハ上等裁判所ノ設
ケアル州ニ於テハ其裁判所ノ裁判官中ヨリ之
ヲ選任ス可ク上等裁判所ノ在ラサル州ニ於テ
ハ重罪裁判所ヲ設クル地ノ懲治罪裁判所ノ裁

判官中ヨリ之ヲ選任ス可シ
重罪裁判所檢官ノ職務ハ上等裁判所ノ檢事長
及ヒ代言師長之ノ行ノ可ク上等裁判所ノ設ケ
ルヲサル府ノ重罪裁判所ニ於テハ郡裁判所附
檢事之ヲ行フ可シ

陪審陪審人總體ノ姓名簿及ヒ會
合ノ姓名簿ヲ作ル事

重罪裁判所ノ爲メ第二ノ基本ト稱ス可キ陪審
ハ被告人ノ罪ノ有無ニ付キ誠實ナル良心ニ從
ヒ其意見ヲ述ヘシムル爲メ選任シタル人民ヨ

リ成レル者タリ

陪審人姓名簿ハ毎年各州毎ニ之ヲ作ル可シ但
シ其人負ハ州ノ人口ニ從ヒ二十人以下三百人
以上ニ至ル迄ノ差アリトス

陪審人姓名簿ニ登記セラレシニハ年齒三十歳
以上ニシテ民、政ノ二權ヲ有シ且法律上ニ陪審
人タルノ禁ナク又陪審人ノ任ト兼テ行フ可カ
ラサル職勞ニ在ラサルヲ要トス

重罪裁判所會合ヲ開ク十日前ニ上等裁判所又
ハ司法區首地ノ郡裁判所ノ公ケノ裁判席ニ於

テ開テ拈リテ本年ノ陪審姓名簿中ヨリ二十六
名ヲ選舉シ又之ト同様開ニテ選ミタル追補陪
審四名ヲ加フ可シ

右開ニテ選ミタル陪審人三十六名ヲ以テ重罪
裁判所會合ノ陪審姓名簿ヲ作り會合ノ記録中
在ル諸事ヲ判決セシムル爲メ之ヲ呼出ス可
シ

陪審人中若シ正當ノ原由ナクシテ其職務ヲ行
フコヲ肯セサル者アル時ハ二百「フランク」ヨリ
少ナカラス千五百「フランク」ヨリ多カラサル罰

金ヲ言渡サル可シ

陪審人ノ表ヲ作ル事

會合席姓名簿ヲ作リシ後ハ陪審人ノ表即チ各
訴訟ノ判決ノ爲ス可キ陪審人ノ表ヲ作ル可シ
各訴訟ニ付テハ陪審人ノ表ヲ作ルニハ重罪裁
判所ノ長會議ノ室ニ於テ總テ會合席姓名簿ニ
登記セラレタル陪審人總體ヲ闕引ニ爲ス可シ
檢官ト代言人ノ補助ヲ受ケシ被告人ハ其闕引
ノ席ニ立合ヒ被告人及ヒ檢官ハ何レモ互ニ同
數ノ陪審人ニ付キ故障ヲ述フルヲ得可ク其

故障ヲ申述フルニ付キ特ニ其主意ノ申立ツル
ニ及ハス而メ陪審人十二名ノ殘ルニ至テ其故
障申述ノ權ノ執行ヲ止ム可シ蓋シ故障ヲ申立
テラレサル陪審人十二人ノ姓名ヲ探聞シ得タ
ル時ハ訴訟ノ判斷ヲ爲ス可キ陪審ヲ設ケタリ
ト爲ス可シ
右ノ仕方ニテ陪審ヲ設ケタル時ハ訴訟ノ吟味
及ヒ裁判ニ取掛ル可シ

重罪裁判所ニ於ケル訴訟手續、
問、對決及ヒ裁判長ノ作ル要畧書

重罪裁判所ニ於テハ被告人必ス自カラ出席ス
可ク若シ逃亡シタル時ハ陪審ノ立會ヲ要セス
重罪裁判所ニ於テ其抗傳ノ儘裁判ヲ爲ス可シ
但シ其被告人ノ後ニ自カラ出席シタル時又ハ
捕縛セラレタル時ハ其抗傳ノ儘ノ裁判ヲ取消
ス可シ

被告人ハ其自カラ選ミ又ハ裁判所長ノ職務ヲ
以テ指定メタル代言人ト共ニ出席ス可シ
裁判所長ハ先ツ被告人ノ姓名、職業、住所、生國ヲ
問ヒ陪審ヲシテ誓ヲ爲サシム可シ

然ル時書記官ハ告訴狀卽チ被告人ニ對スル責
ノ畧記ヲ讀上ケ其後裁判所長被告人ヲ糾問シ
次ニ証人ヲ聞糾ス可シ而シテ証人ハ左ノ誓詞
ヲ爲ス可シ

私意ヲ狹マス忌諱ナク語リ實ヲ告ケテ實
事ノ外決シテ語ルマシキヲ誓フ

重罪裁判所ノ長ハ對決中總テ實ヲ証明スルニ
必要ノ處置ヲ行フノ全權ヲ有ス可シ
証人說ヲ述ヘタル時ハ民事原告ノ代言人及ヒ
檢官、告訴ノ憑據トナル可キ諸件ヲ論辯ス可シ

被告ノ代理人ハ右ノ答辯ヲ爲ス可シ而メ被
告ノ代言人ハ必ス最後ニ其說ヲ述フ可シ
右ノ後裁判所長ハ對決ノ終リシ旨ヲ申渡シ被
告人ノ罪ノ有無ニ管スル重大ノ証拠ヲ要略書
ニ記シテ陪審ヲシテ其行フ可キ所ノ職務ニ注
意セシム

陪審ニ向ヒ爲ス所ノ問、罪ヲ減殺
ス可キ情由

裁判所長ハ陪審ヲシテ會議ノ室ニ退カシムル
前ニ陪審ノ答フ可キ問題ヲ陪審ニ讀聞カス可

シ

裁判所長ヨリ右ノ問ヲ爲スニハ最初先ツ罪ノ
原因ヲ成セル事柄ノ問ヲ爲シ次ニ其原因ニ附
加スル所ノ罪ヲ重劇ナラシム可キ情由ト罪ヲ
宥恕ス可キ情由トニ付テノ別段ノ問ノ爲ム可
ク又各告訴ノ箇條毎ニ各々特別ノ問ノ爲ム可
シ
裁判所長ハ罪ヲ輕殺ス可キ情由ノ有無ニ付テ
ノ問ヲ爲サス只陪審人ニ問題ヲ讀聞セタル後
被告人ノ爲メニ罪ヲ減殺ス可キ情由アルヲ

陪審ニ告ク可シ

陪審會議、衆說ニ由テノ決議

陪審ハ特設ノ會議室ニ於テ評議シ次ニ秘密ノ
投票ヲ以テ其說ヲ決ス可シ

陪審人ノ評議ハ陪審長

陪審長ハ第一番ノ陪審人タル可シ

之ヲ指揮ス可シ

被告人ヲ有罪ト爲ス陪審ノ決議ハ衆說ヲ以テ

爲ス可シ故ニ陪審ニテ罪アリト決議スルニハ

少クモ陪審七名ニテ主タル問ニ相違ナキ旨ノ

答フルヲ必要トス

右ノ答ヲ爲スニハ問ニ應シテ陪審長ヨリ左ノ語ヲ述フ可シ

衆説然リトス

若シ又右問ノ犯罪宥恕ノ事ニ管スル時ハ可トスル者否トスル者ノ其數互ニ同シキニ於テハ宥恕ニ決ス可ク故ニ陪審六名ニテ認許スル時ハ宥恕ニ決ス可シ蓋シ宥恕ノ問ニ答フルニハ衆説ノ二字ヲ除キ只然リト答フ可シ又宥恕ス可カラスト答フルニハ七名以上ノ説ヲ要シ然ル時ハ左ノ語ヲ以テ答フ可シ

衆説否ラス

罪ヲ減殺ス可キ情由ハ陪審ノ半ハ以上可トス
ルニ非レハ之ヲ決ス可カラス

右情由ニ付テノ陪審ノ答ニハ左ノ語ヲ述フ可
シ

衆説ニ由リ犯人ノ爲メ罪ヲ減殺ス可キ情

由アリトス

又陪審、罪ヲ減殺ス可キ情由ヲ許認セサル時ハ
陪審ノ決議書ニ其旨ヲ記ス可カラス

陪審ノ斷決、無罪ノ申渡、刑ヲ赦ル

人事

陪審ノ斷決ヲウエルジツクト云フ即チ決議ノ
意ナリ而シテ此議ノ決シタル時ハ陪審人再ヒ
裁判席ニ戻リ陪審長其斷決書ヲ讀ミ次ニ被告
人ヲ呼出シテ陪審長其被告人ニ右斷決書ヲ讀
聞カス可シ

若シ陪審ノ答ニ被告人ニ罪ナシト爲ス時ハ裁
判所長ヨリ犯人ノ無罪ナル旨ヲ申渡シテ之ヲ
釋放ス可シ

若シ又陪審被告人ニ罪アルヲ認メタル時ハ

重罪裁判所ニ於テ其犯人ニ法律上ニ定メタル
刑ヲ當ツ可シ

又被告人ニ罪アルヲ認メタルト雖モ其處刑
ノ期滿トナリ又ハ其被告人ノ法律上ニ處刑ヲ
免スル場合ニ在ル時ハ其刑ヲ當ツ可カサル
ニ因リ裁判所ヨリ其罪ヲ赦ユルス旨ノ申渡ヲ
爲ス可シ

無罪ノ言渡ハ被告人ニ全ク其罪ナキ時裁判所
長之ヲ爲ス可シト雖モ罪ヲ赦ユルス言渡ハ被
告人ニ罪アルト雖モ之ニ當ツ可キ刑ノアラサ

ル時裁判所ヨリ之ヲ爲ス可シ
若シ罪ノ申渡アル時ハ裁判所長被告人ニ其申
渡ヨリ二日内ニ覆審院ニ其取消ヲ訴ヘ得可キ
旨ヲ告ク可シ

第五款 上控ノ仕方

違警罪裁判所ノ裁判及ヒ其故障

申立并ニ上控

違警罪裁判所ノ抗傳ニ由テ爲シタル裁判ハ之

ニ對シテ故障ヲ申立ルヲ得可シ

右裁判ニ對スル故障ノ申立ハ裁判書ノ末ニ記

シタル申立ニ因リ又ハ裁判書送達ノ日ヨリ三日内ニ使吏ノ届クル書面ニ因リ之ヲ爲スコトヲ得可シ

違警罪ニ管スル裁判ハ若シ禁錮ノ申渡アルカ又ハ五フランク以上ノ罰金償還ノ申渡アル時ハ何時ニ因ラス之ニ對シテ上控スルヲ得可シ
違警罪ニ付テノ上控ハ懲治罪裁判所ニ之ヲ爲ス可ク之ヲ爲ス可キ猶豫ノ日限ハ十日タル可シ又右上控ヲ爲スニ於テハ一時之レカ爲メ裁判ノ執行ヲ停止ス可シ

懲治罪裁判所ノ裁判及ヒ其故障

申立

懲治罪裁判所ノ批傳ニ由テ爲シタル裁判ハ之
ニ付キ故障ノ申立ヲ爲スヲ得可シ

但シ右裁判ニ付テノ故障申立ハ被告人又ハ其
住所ニ批傳ノ裁判言渡書送達ノ日ヨリ五日內

ニ之ヲ爲ス可シ

又裁判書ノ送達ヲ被告人ニ爲サ、ル時又ハ裁
判執行書ニ因リ被告人其裁判ノ次第ヲ知ラサ
ルノ証アル時ハ刑ノ期滿ニ至ル迄故障申立ヲ

爲スヲ得可シ

右故障申立ヲ爲スニハ使吏ノ記シタル書面ヲ
民事原告及ヒ檢官ニ送達ス可シ

右故障申立ヲ爲シタル時ハ當然次キノ裁判席
ニ呼出ヲ受ケタル者ト爲ス可シ

若シ被告人次キノ裁判席ニ出席セサル時ハ故
障申立ノ効ナカル可シ故ニ被告人シ其裁判席
ニ於テ受ケタル裁判ハ此時ヨリ以來再ヒ故障
申立ヲ爲スヲ得ス

上控、上控ヲ爲ス可キ期限、上控ノ

吟味

懲治罪裁判所ハ違警罪裁判所ノ裁判ニ對スル
上控ニ付キ爲セシ裁決ヲ除ク外總テ之ニ對シ
テ上控スルヲ得可シ

但シ其上控書ハ懲治罪裁判所々在ノ地ヲ管轄
スル上等裁判所ニ之ヲ差出ス可シ

上控スルノ權ハ罪ノ申渡ヲ受ケシ被告人、民事
原告人及ヒ檢官ニ有リトス

又上控ヲ爲ス可キ期日ハ原被相對シテ受ケタ
ル裁判ナレハ其裁判ノ日ヨリ十日タル可ク一

方抗傳シテ受ケタル裁判ナレハ裁判言渡書送
達ノ日ヨリ十日タル可シ
上控ヲ爲スニハ控訴人又ハ代言師又ハ特ニ任
シタル名代人ノ調印セシ扁書ヲ懲治罪裁判所
ノ書記局ニ差出ス可シ

上控ヲ爲スニ於テハ一時裁判ノ執行ヲ停止ス
可シ

上等裁判所ニ於ケル控訴吟味手續ハ懲治罪裁
判所ニ於ケル吟味手續ト同一タル可シ
此ニ今上等裁判所ニ於ケル控訴吟味手續中ノ

二條ヲ掲クルニ其第一ハ裁判役中ノ一名ヨリ
訴訟ニ付テノ啓告ヲ爲シテ對決ヲ始ムルニ在
テ又其第二ハ上控ニ付テハ裁判所ニ於テ再ヒ
証人ヲ聞亂サ、ルモ妨ナク懲治罪裁判所書記
官ノ作リタル裁判席覺書ニ據テ裁判ヲ爲シ得
可キニ在リトス

覆審院ニ取消ヲ訴フル事

上控スルコトヲ得可カラサル違警罪裁判所ノ裁
判、違警罪裁判所ノ裁判ニ對スル上控ニ付キ爲
セシ懲治罪裁判所ノ裁判、懲治罪裁判所ノ裁決

西
法
省

ニ對スル上控ニ付キ爲セシ上等裁判所ノ裁判
ハ覆審院ニ其取消ヲ訴フルヲ得可シ
罰ヲ申渡セシ重罪裁判所ノ裁判ハ罰ノ申渡ヲ
受ケタル者ヨリ其取消ヲ覆審院ニ訴フルヲ
得可シ

檢官ハ被告人ノ罪ヲ赦ス旨ノ裁判ニ對シ覆審
院ニ其取消ヲ訴フルヲ得可シ然レモ無罪ノ

申渡陪審ノ決議ニ由ル者ハ其取消ヲ訴フルヲ

ヲ得可カラス是レ陪審ノ無罪ナルヲ決シタル
ノ効ハ全ク被告人ノ爲メ其益ヲ得セシム可キ

カ故ナリ

覆審院ニ裁判取消ヲ訴フルヲ得可キ期日ハ裁判申渡ノ日ヨリ三日タル可シ

違警罪及ヒ懲治罪ニ付キ人民ヨリ覆審院ニ裁判取消ヲ訴フル時ハ假リニ百五十「フランク」ノ罰金ヲ納メ其裁判ノ取消トナル時ハ覆審院ヨリ其罰金ヲ還ス可シ

覆審院ニ裁判取消ヲ訴フル時ハ其裁判執行ヲ停止ス可ク其訴ハ同院ノ刑法局ニ於テ裁判ス可シ

覆審院ニテ下等裁判所ノ裁判ヲ取消ス時ハ其
裁判ヲ爲セシ裁判所ト同等ノ裁判所ニ命シテ
更ニ訴訟ノ本案ヲ審判セシム可シ

重罪及ヒ輕罪ニ管スル訴訟ノ再
吟味

刑法裁判所ニ拘引セラレシ被告人ノ權利ヲ保
護スル爲メノ保証ヲ設ケタリト雖モ間々無罪
ノ者ニ誤テ罰ノ申渡ヲ爲ス可キノ恐アリ依テ
其誤ヲ防ク爲メ重罪訴訟ノ再吟味ヲ願ヒ得可
キ法ヲ設ケタリ

但シ此件ハ千八百六十七年六月二十九日ノ法律ニ因リ治罪法第四百四十三條以下ヲ改メテ以テ之ヲ規定シタリ
再吟味ハ左ノ場合ニ於テハ重罪及ヒ輕罪ニ付キ之ヲ求ムルヲ得可シ

第一 人ヲ殺害シタル罪ニ付テノ罰ノ申渡アリシ後其殺害セラレタリト爲セシ者ノ存命ナル証アル時

第二 甲ノ人ニ罰ヲ申渡セシ後同罪ニ付キ亦他人ニ罰ヲ申渡シ第一ノ裁決ト第

二ノ裁決ト互ニ抵觸矛盾シタル時

第三 被告人ノ有罪ナル証ヲ申述ヘシ証人

偽証ヲ述ヘタルニ付キ罰ヲ申渡サレ
シ時

再吟味ハ司法宰相ヨリ命シ或ハ罰ノ申渡ヲ受
ケタル本人ヨリ求ムルヲ得可ク若シ罰ヲ受ケ
シ本人ノ死去シタル時ハ其配偶者、其子、其親族、
遺囑ノ贈遺ヲ受クル者並ニ別段ノ任ヲ受ケタ
ル者ヨリ之ヲ求ムルヲ得可シ

再吟味ノ願書ハ覆審院附檢事長ノ手ノ經テ之

ヲ覆審院ニ差出ス可シ但シ檢事長ハ司法宰相
ノ命令ニ因リ又ハ管係人ノ申立ニ因リ其事ヲ
取扱フ可シ

佛國政典第十二卷終 大尾

29
5

昭和26.年
第12115 號
11.月27日

50

27

